# 黙阿弥全集

第二巻

## 默阿彌筆　看板の下繪

默阿彌は看板、番附の下繪を描くに巧みであつた。是れはその一つである。明治二十三年の五月に新富座で團、菊、左の『勸進帳』が上場された。その時の看板下繪である。書入れの文字は、餘白に認めてあるのは、「三人立いつもの通りに御たのみ申候」で、團十郎(辨慶)の袖のが「縞」、左團次(富樫)のが「千羽鶴」、菊五郎(義經)のが「笹りんどう」である。此下繪が鳥居家へ廻されて鳥居風の繪看板が出來するのである。

清兵衛娘お梅
（四世尾上菊五郎）

正直清兵衛
（市川小團次）

（龜戸豊國筆）

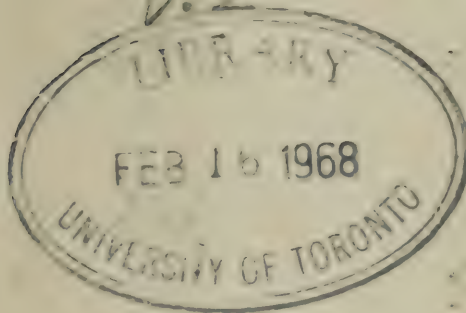
清兵衛娘お梅
（四世尾上菊五郎）

正直清兵衛
（市川小團次）

（龜戸豐國筆）

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

# 默阿彌全集 第二卷

東京 春陽堂刊行

# 默阿彌全集　第二卷目次

# 挿繪目次

第二番目は御好みに世界も吉田の御家狂言
戀に浮世を忍ぶの惣太が身も牛島の梅若殺し
花まだ早き櫻餅屋へ廓をいでし契情花子が
押掛女房のかたうどは慾に目のなき按摩丑市
張と意氣地に十右衞門が磨く男に軍介お梶
忠と操に血汐の餞別親子のえんも淺茅ヶ原に
粟津山田が古跡をたづぬる鏡ヶ池のゆらい

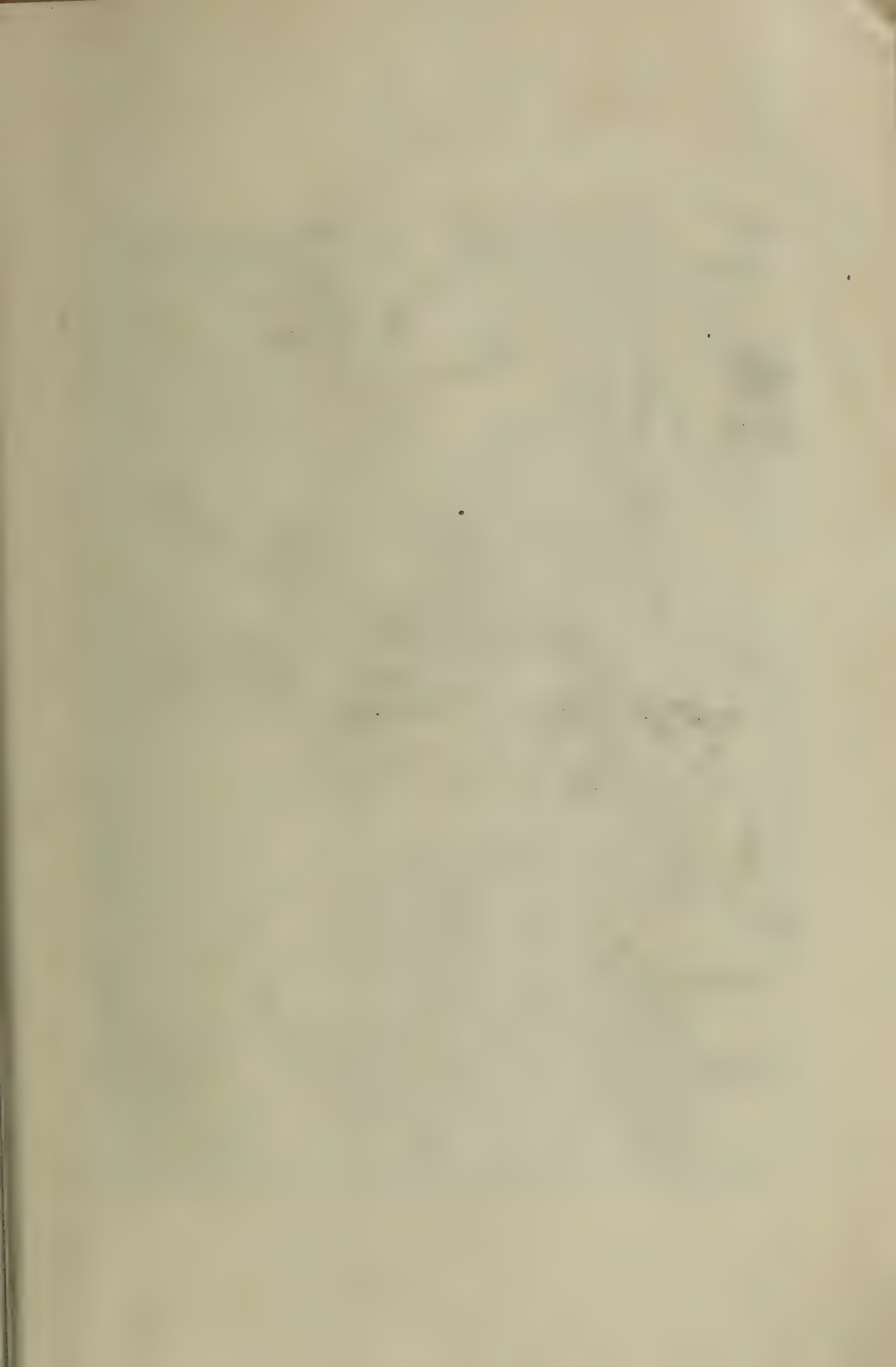
# 都鳥廓白浪

みやこどりながれのしらなみ

「忍ぶの惣太」は安政元年三月、河原崎座に於て上場せられた、作者三十九歳のことである。此の作は本來、二世勝俵藏が四世中村歌右衛門の爲めに稿下したものであつたが、先代小團次が復演するに際して、その柄に適應するやうに再三改訂し、面目を全く一新したものであつた。小團次が惣太に扮して成功したこと、又梅若に扮したのが後の澤村田之助の由次郎時代であつて、子役として見事な出來ばえであつたこと、友右衛門の胥篥の丑市、しうかの松若丸等、打つてつけの適役で高評を得たことが傳へられてゐる。此の作の改訂に際して、作者と小團次との間に交された情誼は、實に以後十餘年にわたる兩者の結託時代を導いたものだと傳へられてゐる。（詳細のことは拙著「河竹默阿彌」傳を參照せられたい）。扉の語りは明治六年二月守田座上演の時のである。

書下しの時の主なる役割は、市川小團次（忍ぶの惣太實は山田六郎政次、霧太郎手下木の葉の峯藏）、坂東しうか（花菱屋の花子實は天狗小僧霧太郎）、嵐璃寛（男達葛飾十右衛門）、大谷友右衛門（按摩丑市實は盜人胥篥の丑右衛門）、河原崎權十郎（梅若の奴淀平）、市川團之助（吉田の班女御前、惣太女房おかぢ）、中村翫右衛門（吉田の若黨軍介）、淺尾奥山（松井源吾）、澤村由次郎（梅若丸）等。

挿繪にしたのは、龜戸豐國筆の錦繪である。

大正十三年八月　　編者識す

# 都鳥廓白浪（忍ぶの惣太――三幕）

## 序幕

向島梅若殺の場

〔役名――忍ぶの惣太實は吉田の家臣山田六郎、吉田の下部淀平、同軍助、按摩宵寐の丑市、松井源吾、男達葛飾十右衞門、傾城花子實は天狗小僧霧太郎。御臺班女の前、吉田の若君梅若丸其他。〕

（三圍稲荷前の場）――本舞臺三間の間眞中に石の鳥居の笠木を見せ、其前に草土手、後黑幕上の方に竹木折るべからずの高札を建て、總て隅田堤三圍稲荷前の體、玆に役人牛纏股引大小の、捕手四人を連れ、下手に百姓一人牛島といふ提灯を持ち、是れに百姓附添ひ控へ居る。禪の勤めにて幕明く。

百姓　へい〳〵、御用とござりまするゆゑ、當村の者共を、

皆々　呼び集めましてござります。

役人　其方どもに用事と申すは、此度吉田の少將惟貞謀叛の聞えありし所、何者にか闇討に逢ひ、都方より預りの都鳥の印を紛失させしにより、則ち家は沒收なし、其餘類の松若を初め班女梅若の親子とも、此東路へ下りし樣子、右の者共見當り次第搦め取れとの嚴しき御上意、心を附けて詮議いたせ。

忍ぶの惣太

皆々　畏つてござります。

百姓　今にも身寄りと見ましたなら、

皆々　搦め取るか討ち取るか、

役人　それは其折の手筈次第、何は兎もあれ此樣子を、隣村へ申し聞けん。

百姓　左樣なれば、

皆々　お役人さま。

役人　家來參れ。

ト禪の勤めになり、役人先に捕手附いて上の方へはひろ。引違へて吉原花菱屋の若い者一、二の兩人股引尻端折りにて、花菱屋といふ弓張提灯を持ち出來り、

一　何でも駈落者は、向島に違ひない。

二　三圍から木母寺まで捜したら、突當てないことはなからう。（ト百姓の〇兩人を見て、）

〇　やあ、お前方は、吉原の花菱屋の若い衆ではないか。

一　おゝ、こりや掃除に來る百姓衆か。

二　何でこなた衆は、此處にゐなさるのだ。

○お尋ねもの、お觸があつて、今お役人樣に詮議を言附かつたところだ。
△さうしてお前方は、何處へ行かつしやるのだ。
一わたしらも尋ねるものがあつて、向島から四つ木の方へ行くのさ。
○はゝあ、それぢやあお前方も、松若を搜さつしやるのか。
一何さ、内のお職の花子さんが、駈落をした故、
二八方へ手分けをして、搜しに出たのだ。
○そりやあ情人でもあつたのかね。
一花子さんは男嫌ひ故、別に情人といふもないが、此牛島の惣太といふ人に、葛飾の十右衞門といふ人が、足を近く來るばかりさ。
○それぢやァ植木屋の惣太殿が、あつくなつて行く女郎だな。
△ありやあめつぽふに女がいゝぢやあないか。
一いゝの惡いのと、まるで秀佳さ。それゆゑ駈落をされては、見世の看板がなくなつたやうなものだ。
二こなた衆も見當がついたら、捉へて下さい。

○どうでお役人から言ひつかつて、松若や梅若の詮議をすれば、
皆々　刷毛ついでに捜しませう。
一二　そんなら、頼みますぜ。
皆々　合點でござります。
一二　どれ、木母寺の方を捜さうか。

ト禪の勤めになり、若い衆二人は花道へはひり、百姓皆々は上手へはひる。時の鐘、合方かすめて川波の音になり、花道より班女の前上﨟の裝拖へ帶にて杖を突き、梅若丸是に從ひ、跡より軍助旅裝の下部にて提灯を持ち、淀平旅裝の下部にて出來り、花道にて。

軍助　あいや、御臺樣にも若君樣にも、夜道と申し長途のお疲れ、暫くあれにて、
淀平　御休息遊ばしませ。
班女　おゝ、わらはは兎もあれ梅若が、嘸草臥れたであらう程に、あれへ行て休まうわいの。
淀平　さゝ、お越しなされませ。(ト本舞臺へ來り、)
班女　これ軍助、こゝは何といふ所ぢやぞいの。
軍助　へい、爰は名にし負ふ東の名所、隅田川原でござりまする。

班女　すりや業平卿の詠じたまひし都鳥の名どころとな、夜目にはそれと見え分ねど、あゝ都といふ名も懐しいわいの。
梅若　これ軍助、其都鳥はどこに居るぞ。
軍助　此川原に居りますれど、夜の事ゆゑ知れませぬ、いや知れぬと申せば我が娘のお梶、山田の六郎殿の女房になり、此隅田川の邊に居るとのこと、またお梶めの兄も小さい時に家出いたし、これも江戸と聞いたばかり、先づ差當るお梶が住家を尋ね求めて。
淀平　何にいたせ隅田川のほとりとあれば、軍助殿には大儀ながら、此所らを一遍尋ねてござれ。
軍助　如何にも尋ねて來よう程に、淀平殿には御二方に、お附き申して牛の御前に、待合して居てくりやれ。
淀平　おゝ、跡は下郎がお供申せば、必ず氣遣ひさつしやるな。
軍助　左樣なれば御臺樣、一走り行て參りまする。
班女　夜道なれば、早う戻つてたもひなう。
軍助　畏りました、どりや尋ねて參りませうか。（ト禪の勤めにて軍助花道へはひる。）
淀平　今軍助が賴みに思ふ、娘の在所を尋ねに行つたが、早う知れゝばよいが。

班女　それも何れに居る事やら、在所知れざる隅田川。
淀平　水の流れと人の身は、定めなき世に今日はまた。
班女　きのふに替る旅の空。
淀平　降らぬ其間に少しも早く。
班女　そんなら淀平。
淀平　さ、お越しなされませ。（ト行き掛ける、此時前の役人先きに捕手出て、三人を取巻き。）
役人　お尋ねもの丶班女梅若。
捕手　動くな。（ト是れにて淀平両人を圍ひ。）
淀平　扨はお二方様のお供なすを、疾くより知つて。
役人　召捕る爲に手筈を合せ、網を張つたる此道筋、きり〳〵二人を、
皆々　渡してしまへ。
捕手
淀平　やあ、都の空より遙々と東の果てまで淀平が、お供なしたる御二方、やはかうぬらに渡さうか。
役人　やあ洒落臭い下司奴め。それ、討つて取れ。
皆々　はあゝ。（ト取巻く。）

淀平　むゝ、手向ひなせば生けては置かぬ、片ッ端から覺悟なせ。

皆々　何を小癪な。

ト禪の勤めになり、皆々班女の前梅若丸に掛るを、淀平一腰を拔き皆々を相手に立廻り、トゞ下手へ追込む。班女の前跡を見送り、

班女　これ淀平、長追ひせずと、早く戻つてたもひなう。

梅若　淀平なう〳〵。（ト下手にてありや〳〵と人聲する。）

班女　これ梅若、またもや追手が爰へ來たらば、わしが支へる其うちに、そなたは早う此場を脱れ、何れへなりとも落ちてたも。（ト懷より袱紗包みの二百兩を出し、）これ、此金子二百兩は、路次の用意に所持なせしが、そなたに暫し預ける程に、大事に持つて居やいなう。（ト梅若丸に渡す。）

梅若　そんなら是れを系圖と一つに、わしがしつかり持つて居ませう。

班女　必ず人に見られぬやう。

梅若　心得ました。

ト此内梅若丸懷より袱紗包みの系圖を出し、右の二百兩と一緒に包み懷へ入れる、またありや〳〵の聲、班女の前思入あつて、

班女　あれ〳〵、またもや追手の來る樣子、そなたは早う落ちてたも。

梅若　それぢやというて母上ばかり、

班女　跡氣遣はずと、早う〳〵。

ト禪の勤めばた〳〵になり、これにて梅若丸上手へはひる、下手より以前の捕手出て、班女の前を取卷き、

捕手皆々　班女、動くな。

班女　やあ、女でこそあれ覺えあれば、近う寄つたら許さぬぞ。

皆々　何を小癪な。

ト禪の勤めになり、班女四人を相手に立廻る、此內花道より松井源吾出來り、此中へはひる。捕手班女と心得打つて掛るを、源吾追ひ散らす、捕手は下手へ逃げてはひる。班女の前は源吾を捕手と心得、切つて掛るを身を躱し、其手を捉へ顏を見て、

源吾　やあ、班女御前か。

班女　さういふ聲は、

源吾　松井源吾だ。

班女　えゝ。（トびつくりする。）

源吾　焦れ〲た我が戀人、はて、よい所で逢うたなあ。（ト合方になり、）いつぞや吉田の沒落よりそなたの行方を尋ねし所、この東路へ下りしと聞いて其儘跡を追ひ、こゝで逢つたは盡きぬ緣、これ程までに親切な此おれさまの心に隨へ、何と憎うござるまい。

ト班女の前の袖を捉へるを振拂ひ、

班女　えゝ穢らはしい人非人、何でおのれに此身をば。

源吾　むゝ、任せぬならば、生けては置かれぬ。

班女　すりや、どうあつても。

源吾　おゝ我が心に隨はねば、刀に掛けても。

班女　さういふおのれを。（と振拂ひ切つて掛かる。）

源吾　何、ちよこざいな。

ト源吾班女の前を引附ける、ばた〲になり、下手より淀平出來り、此中へはひり、源吾を引退け顏を見て、

淀平　や、人でなしの松井源吾か。

源吾　淀平奴か、惡いところへ。

班女　よう戻つてたもつたの。

淀平　下郎が參れば千人力、必ずお案じなされまするな。

源吾　何を小癪な。

ト三味線入り禪の勤めになり、三人立廻りよろしく、よき見得にて道具廻る。

(梅若殺しの場)――本舞臺上の方に垣を結ひし高札、大樹の松、下の方片附けし出茶屋、葭簀床几など積重ねあり、向ふ小高き土手、今戸を見たる夜の遠見、日覆より松の釣枝、總て長命寺堤の體、時の鐘、かすめて川波の音にて道具留る。と床の淨瑠璃になり、

〽名にし負ふ隅田川原も夕暮れて、往來も稀に星影の、見ゆる朧の雨あがり、梢の雫落人の、幼きものを野伏りが、追ひかけ來り取卷きて、

ト禪の勤めばたばたになり、上手より以前の梅若丸懷を押へ逃げて出來るを、一、二の非人追かけ出て、梅若丸を捉へ、

一　動きやあがるな小びつちよめ、われが懷に持つて居る二包みの金を出さねえうちは、逃がしやあ

しねえわ。

梅若　いゝや、こりや金ではないわいの。

一　何で金でねえことがあるものか。

二　さつきわが身が躓いて、落した時に見て置いた。

一　四の五の言はずと出してしまへ。

梅若　さう知られたる上からは、如何にも金ぢやがこればかりは、どうぞ許してくりやいの。

一　いゝや許すことはならねえ、少しばかりか二百兩、目に掛つちやあ許されねえ。

二　痛い目せぬうち、

兩人　出してしまへ。

梅若　いや〳〵、假令憂き目に逢はうとも、此金ばかりは遣られぬ〳〵。

一　いけ強情な小びつちよめ、邪魔のねえうちばらしてしまへ。

二　合點だ〳〵。

ト禪の勤めになり、皆々梅若丸を捉へ懐の金を出さうとする、此内花道より垂を下せし四つ手駕籠、上に傘を附け、○△の駕籠舁これを擔ぎ出來り、此中へはひろ、非人縫包みにて駕籠舁に打つてかゝる。

○△　えゝ、この乞食めら、何をしやあがる。（ト よき所へ駕籠を下す、梅若丸駕籠舁に縋り附き、）
梅若　どうぞ助けて下されいなう。
○　やあ、こりや可愛さうに、小さなものを、
兩人　どうしやあがるのだ。
一　おゝ、その餓鬼がおら達の、
二　貰ひ溜めの錢を、盜みやあがつたから、
兩人　叩きしめるのだ。
○　こいつら、いゝ加減なことをぬかしやあがれ、うぬらが錢を盜むものがあるものか。
△　こりや大方此子をば、引剝がうといふのだらう。
一　剝がうが剝ぐめえが、うぬらの知つたことぢやあねえ。
兩人　退いてゐやがれ。
○　いゝや退いては居られねえ、大人のことなら兎も角も、
△　子供の難儀を見のがしちやあ、背中へ彫つた彫物へすまねえ。
一　えゝ面倒だ、駕籠舁ぐるみ疊んでしまへ。

二　合點だ。

ト禪の勤めになり、駕籠舁兩人は息杖、非人は皆々縫包みにて叩き合ふ、梅若丸駕籠の蔭へ隱れる。

トヾ非人皆々下手へ逃げるを駕籠舁追かけてはひる。

〽追うて行く、跡見送りて幼兒は、小蔭立ち出で吐息をつき、

ト駕籠の蔭より梅若丸出で、跡を見送り、

梅若　あゝ嬉しや〳〵、大事の金を野伏りに取らるゝ所を脱れしは、神佛のお助けなるか。

〽金の包みを押戴き、悦ぶあまり胸先へ、差込む痞。

ト此內梅若丸懷より袱紗包みの金を出し嬉しき思入、よき程に時の鐘を打込み、駕籠の垂をあげる、內に忍ぶの惣太派手なる男達のこしらへ、內翳の思入にて窺ひ居る、梅若丸金を懷に入れて立上り、行かうとして腹の痛む思入にて、どうとなる。

あいたゝゝゝ、今の惡戲を助かりて、嬉しやと思ふたら、俄にお腹が、あいたゝゝゝ。

〽苦痛の聲に聞耳立て、駕籠の內にて窺ふ惣太、忍ぶといへど忍ばれぬ內翳病の眼無鳥、

惣太　そこな子、どうぞしやつたか。

〽聲にびつくり、

梅若　えゝ、さういふそちは。

惣太　あいや、何も氣遣ひな者ぢやない、最前から此駕籠で樣子を聞いて居た者ぢやが、何を隱さうわしは內騶で、兩眼ともに見えぬゆゑ、何がどうやら分らねど、苦痛の體は若しひよつと、どこぞ怪我でもしはせぬか。

梅若　いえ〳〵、何所も怪我はせぬけれど、蟲がかぶつて。

惣太　あゝ、腹が痛むか、それは嘸困るであらう。どれ〳〵、おれが押して遣らう。

〽言ひつゝ、下駄を探り取り、履く間おそしと立ち出でゝ、

ト惣太駕籠に附けたる下駄をはき立ち出で、

どゞ、どこぢや〳〵。

梅若　あい、爰に居りますわいの。

〽言ふ聲しるべに立寄りて、（ト是れにて合方、蛙の聲になり、）

惣太　どれ、背中を押して遣りませう。

梅若　これは有難うござります。（ト惣太梅若丸を介抱しながら、）

惣太　この手ざはりは、賤しからざる樣子ぢやが、いつたいそなたはどこの者ぢや。

梅若　あい、旅の者でござりまする。

惣太　むう、旅の者とあるからは、定めて連があつたであらうが、其の連はどうしやつた。

梅若　あい、最前まで母様と、供が一人あつたれど、道で追手に。

惣太　や。

梅若　いやさ、道ではぐれてしまつたわいの。

惣太　それは／＼可愛さうに、嘸まあ母御や供の人が尋ね捜して居るであらう。さうしてそなたの故郷はいづくで、どこを當てに行きやるのぢや。

梅若　さあ、我がふるさとは言ひにくけれど、其行先きは隅田川の、邊に知邊の者があつて。

惣太　隅田川のほとりといつても、廣いことぢやが、所はどこぢや。

梅若　たゞ隅田川の邊とばかり、何といふ所ぢややら。

惣太　はて、それは空な尋ねものぢやなあ。（ト思入。また梅若丸腹の痛むこなしにて、）

梅若　あいたゝゝゝ。

惣太　おゝ、また痛むか、どれ、ちよつと胸を押してやりませう。

〽胸寛げて差入るゝ、手先きにさはる金包み、

これ、旅の子、此包みは何ぢや。

梅若　あい、こりや金でござりまする。

惣太　なに、金だえ。

梅若　あい。(ト合方になり、)

惣太　え丶、あのこれが。(ト思入あつて、)あ丶、ある所にはあるものぢやな。(ト合方、)まだまあ年端も行かぬものが、大枚の二包み、持たすといふがあるものか、危ないことぢやなあ。(ト此内介抱しながら、)いや、どうぢや、少しは快くなつたか。

梅若　あい、ちうよろしうござりますわいの。

惣太　お丶、それはよい/\、痛みが去つたら夜の更けぬうち、知邊を尋ねて行つたがよい。したが、江戸といふ所は、今のやうな惡者が澤山居れば、其金を必ず人に知れぬやう、大事に持つて行つたがよい。

梅若　あい/\、有難うござりまする。

惣太　あ丶、おれが此の眼が見ゆるなら、送つて遣りたいものなれど、何を言うにも内翳の病、思つたばかりで仕方がない、又もやさはりのない内に、少しも早く行きやいの。

梅若　あい〳〵。

〽あいとは言へど立兼ぬる浮寐の鳥の憂き事を、身に知る惣太がかこちごと。

卜木魚入り、床の合方。

惣太　うき世の中とは言ひながら、今宵につゞまる金の切羽、足手ばかりに才覺なせど、未だに何の當もなく。

梅若　行方定めぬ憂き旅に、母様はじめ供には別れ、尋ぬる知邊も何れやら。

惣太　千辛萬苦に心を碎き。

梅若　斯く彷徨ふも父上の、御最期ゆゑに便りもなく。

惣太　道具屋小兵衛が所持なす品、せめて是れを買ひ求め、不忠のお詫びの種にもと、思へどそれも心に任せず。

梅若　これに附けても兄上が、おいでなされたことならば、此身の便りにならうもの。

惣太　お別れ申した其時は、まだ御幼少の若君樣。

梅若　家出なされてお行方知れず。

惣太　今は謀叛の片割れにて。

梅若　人相書にて厳しい詮議。

惣太　御身に凶事のないやうにと、思ふに附けて吉原で、ふつと逢つたる花子が面差し、松若様に生寫し、若しもの時はお身替りと、通ふに連れて此の眼病。

梅若　此身世にある其時は、

惣太　雨の降る日も雪の夜も、

梅若　乳母やめのとに傅かれ、襖の風さへ厭ひしに、

惣太　忍んで通へば仇名さへ、忍ぶの惣太とうたはれて、

梅若　宿りに迷ふ身の果敢なさ、

惣太　忍びがたきは金の切羽、

梅若　神や佛のお助けあらば、

惣太　なくて叶はぬ大事の寳、

梅若　頼みに思ふ家來の在所、

惣太　どうぞこちらへ求めるやう、

梅若　今宵に迫る、

惣太　身の難儀、はてどうしたら、

兩人　よからうなあ。

〽とつおひつ。

惣太　むゝ。

〽遠くは行かじと立留り、（ト惣太思入、梅若丸悄々と行きかける途端に、）

旅の子、待ちやれ。（トきつと言ふ）

梅若　え、（トびつくりする、床の合方、蛙の聲になり、）待てとは何ぞ。

惣太　おゝ、そなたにちつと頼みがある、まあ／＼爰へ來てくりやれ。

梅若　あい／＼。（ト梅若丸下手へ來る。）

惣太　これ、旅の子、どこに居やるぞ。

梅若　あい、爰に居りまする。（ト是れを知るべに惣太側へ來て、梅若丸を探り、）

惣太　おゝ、よう來てくれた／＼。これ、こなたに少し頼みがあるが、何と聞いてはくれまいか。

梅若　何の頼みか知らねども、我が身に叶うたことなれば、

惣太　聞いてくりやるか、忝ない。

梅若　して、お前の頼みはえ。

惣太　さあ其頼みは外でもない、そなたが持つて居やる其金を、貸してくりやれ。

梅若　えゝ。（トびつくりする。）

惣太　さゝ、其びつくりは尤もだが、これには切ない譯のある事、何を隱さう此わしが、大恩受けたお主の爲に、なくて叶はぬ其金が、今宵に迫る切羽ゆゑ、所々方々と駈け歩き、才覺なせど手に入らず、如何はせんと思ふ矢先き、そなたが金を持つて居るのを、知つたるゆゑに此頼み、無理な事ぢやが二三日、その金わしに貸してくりやれ。

〽餘儀なき頼みに稻船の、いなと言はれずうろ〳〵と、波に漂ふ風情にて、

梅若　最前わしが苦痛の折、よう介抱して下された親切なお人の事、此金貸して進ぜたいけれど、母樣より預かつたれば、お話し申した其上で、お前に貸して上げようわいの。

惣太　その志は忝けないが、今宵中に金が出來ねば、生きても死んでも居られぬ仕儀ゆゑ、斯ういふ譯でわしが借りたと、母御に逢うて言はうから、何れいづくの人にして其名は何といはるゝか、それを聞いて置いたなら、二三日の内に金調へ、母御に言譯せう程に、その名をいうて聞かしやいの。

梅若　さあそれが言はるゝ程ならば、斯かる憂き目はせぬけれど、言ふに言はれぬ身の上ゆゑ、どうぞ許して下されいの。

惣太　さゝ、さうではあらうが他言はせぬ、心置かずと其名を明かし、僅か二日か三日の所、わしに其金貸して下され、慈悲ぢや情つや、これ旅の子、手を合して拜むわいの。

〽兩手を合せば、其手を拂ひ、

梅若　えゝ、お前よりわしが拜む、是ればかりは許して下され。

〽許してたべと手を合せ、歎けば惣太は不便やと、思へどつゞまる金の切羽。

惣太　貸されぬといふは無理ならねど、石を抱いて淵の譬へ、大枚二百兩といふ金を、持つたが因果、さはるが煩惱、どうも其儘見脱されず、割ッつ口説いつ頼みしもよたけもない子供のことゆゑ、非道な事がしたくなさ、それも聞き入れない上は、不便ながらも御主の爲、切取りなすも武士の習ひ。

梅若　えゝ。

惣太　これ、こなたの爲めには鬼ぢやわいの。

〽金の切羽に無理無體、手を差入れて引き出せば、これなう許して下されと、聲をばかりに

泣き叫べば、子はお主とも白波の、月影ぬすむ猿轡、掛けるはずみに手拭の、喉へ廻るも見えぬ目に、それと知らねばぐつとしめ。

ト此内惣太思ひ切つて梅若丸の懐より金包みを引出すを、梅若丸縋り附き呼び立てる、惣太袂より轡に忍ぶの手拭を出し、猿轡を掛けようとして逃げるはずみに喉へ行きしを知らずぐつと締める、是れにて梅若丸もがき苦しむ、惣太猿轡を掛けし心にて、

いづれの誰が子か知らねど、賤しからざる物の言ごし、歎く涙は目に見えねど、心に察して此様な、手荒いことはしともなけれど、御主故には替へられぬ、どうぞわしに貸して下され、やゝや。〽言へど兎かうの答へもなく、蕾の花の其まゝに、夜半の嵐に散りにける。

ト此内思入あつて、手拭を取り手を放す、梅若丸落入り、ばつたりと倒るゝ、惣太これを知らず。

これ旅の子、得心か、得心ならば貸してくりや、これ〳〵。

ト捨ぜりふにて梅若丸の體をさぐり見てびつくりし、

やあ、これ旅の子、是れはしたり、旅の子いなう。えゝ、事が切れたか情ない、聲立てさせじと猿轡掛けたが外れてそなたの喉元、それも盲目のかき捜し、道に背きし事ながら、そなたの陰にて手に入る寶、松若樣の御行方尋ねお渡し申せば是れだけの、金を調へ身寄りの人に返した上に

て此身をば、突くなりと切るなりと、存分にならう程に、殺すも因果殺さるゝも、因果と思うて、
これ旅の子、
〽許して下され許してと、身を掻き拶り悔めども、今は返らぬ魂よばひ、
せめて人目に掛らぬうち、此亡骸を水葬禮。さうぢや〳〵。
〽目くらさぐりに堤より、亡骸流す隅田川、水の哀れや青柳の、しるしに噂ぞ殘りける。
南無阿彌陀佛々々。
ト此内惣太梅若丸の死骸を後の土手より流せし心にて回向をする、淨瑠璃の切れ禪の勤めになり、花道より宵寐の丑市毬栗坊主、汚なき座頭のこしらへにて杖を突き、安下駄をはき、破れし大黑傘なかつき出來り、惣太に行當り、むつとしたろこなしにて、
丑市 やい、べらぼうめ、目を明いて歩きやあがれ、盲目だわい。
惣太 おきやあがれ、こつちも盲目だわ。
丑市 なに盲目だ、こいつあ人を馬鹿にしやあがるな。
ト杖にて無情になぐる、惣太飛び退くはづみに、件の金包みを落し、
惣太 南無三、大事の金を。

丑市　なに、金とは。

ト捨鐘、兩人探り／＼金を尋ねる、此內下手より葛飾十右衛門派手なる男達のこしらへ、一本差し尻端折り大七の番傘をさし下駄をはき出て來る、是れと一緒に上手より花子、胴拔き扱帶女郎裝、手拭を吹流しに冠り、赤合羽を着、跣足にて出來り、兩人この中へはひり、惣太花子を探りびつくりする、丑市十右衛門に探り寄るを拂ひ退ける、これにてちよつと立廻り四人別れてきつと見得、時の鐘、稽古笛の入りし誂への合方になり、探り合の立廻りよろしくあつて、十右衛門足にさはる件の包みを取上げる、惣太丑市探り寄り、包みに手を掛ける、中へ花子邪魔にはひり引合ふはづみに包み解けて、ばら／＼と三品落ちて丑市は一卷を取上げ、十右衛門惣太の手へは百兩づゝはひる、花子は此間に花道へ脫れ行く。

惣太　こりやこれ二品。（ト失ひし思入。）

十右 丑市　思ひがけなく。

花子　え。

ト十右衛門丑市は言はうとして口を押へる。花子は振返り舞臺をきつと見込む。是れと一時に三人二品を懷中する。木の頭、銘々傘をさし、眞中に惣太、上手に十右衛門、下手に丑市、双方親ふこなし、

花子　花道へ走りはひろ、是れをキザミ、よろしく時の鐘の送りにて、

ひやうし　幕

## 二幕目　向島惣太内の場

〔役名——忍ぶの惣太實は吉田の家臣山田六郎、按摩宵寐の丑市、吉田の若黨軍助、長岡屋手代喜兵衞、道具屋小兵衞、判人闇筧の庄兵衞、手下荒浪岩藏、同まや杉のお六、同松風の音藏、同岸浪の富藏、植木屋茂吉、葛飾十右衞門。傾城花子實は天狗小僧霧太郎、惣太女房お梶等〕

(惣太内の場)——本舞臺三間常足の二重、向ふ鼠壁押入、眞中暖簾口、上手一間障子屋體、下手建仁寺垣、これに棚を釣り植木鉢を竝べ、竹簀戸の門口、梅の立木はれ釣瓶の井戸、櫻餅の幟を立て、二重に櫻餅の蒸籠、烏帽子籠などを竝べ、爰にお梶世話女房の裝竹の皮包みをして居る、茂吉やつし、三尺帶半纒植木屋にて手傳ひ居る、門口に○△□の仕出し立掛り、總て寺島邊惣太住居の體、通り神樂にて幕明く。

○　おい、爰へ櫻餅の百の籠を一つ下さい。

茂吉　はい／＼畏まりました。

△　おれが方の皮包みは、出來たかの。
お梶　はい〳〵、只今上げますわいな。
□　上さん、こつちへも一籠くんな。
お梶　はい〳〵畏りました。（ト竹の皮包み烏帽子籠を銘々へ渡して、）左樣なら出來ました、大きにお待遠さまでござります。
△　よし〳〵、錢はみんな濟んだよ。
○　是れから向ふへ渡つて、吉原をひやかして行かう。
□　わしは觀音さまへ參つて行きます。
三人　さあ〳〵一緒に行きませう。
お梶　是れはどなたも、ようおいでなされました。（ト右の鳴物にて○△□の三人下手へはひる。）
茂吉　やれ〳〵今日は商ひが大層にあつたから、櫻餅で尻餅がぬけたやうだ、お梶さん、お前もちつと休みなさいまし。
お梶　あい〳〵、さうせうわいな。（ト鞠唄の合方になり、お梶煙草盆を出して、）茂吉さん、よう手傳うて下さんした、さあ一服呑ましやんせ。

茂吉　いや、また爰の親方惣太どのは、日頃から律義な植木生業、どういふ事か此頃は、服裝も立派に着飾つて吉原へはひり込み、女郎狂ひをするとの噂、何ぼお内儀の役だといつて朝から晩まで稼ぎ續け、女といふものは損なものだね。

お梶　これはしたり、そりや世間の人の噂、どうしてまあこちの人は、今朝疾うから植木商ひ、お出入りの旦那方の庭作り、毎日々々休みなし。それ程稼ぐ惣太どの、榮耀らしい事があるものかいなあ。

茂吉　成程それもさうかえ、あの律義な惣太どのに、吉原の女郎が打込む筈もなし、ほんの噂に、いやさ、噂といへば此頃嚴しいお觸の噂、天狗小僧霧太郎といふ盜賊實は吉田の松若丸、搦め捕つて差出せば、褒美の金を下さるとの事。

お梶　そんなら噂に違ひなく此程の嚴しいお觸、其霧太郎の面體に花子とやらが似たゆゑに、若しやと思うて惣太どの、忍び〳〵の通ひ妻、それが嵩じて眼病の、

茂吉　え。

お梶　さあ勘定やら何やかや、とかう言ふうちもう日暮れ、どりや行燈の支度でもしませうかいな。

茂吉　わしも臺所を手傳つて上げませう。

ト鳥追唄通り神樂になり、花道より道具屋小兵衛小風呂敷を脊負ひ、軍助前幕の中間にて出來り、

軍助　もし〳〵、それへおいでなさるお方、ちと物がお尋ね申したうございます。

小兵　わたしに用とは、何でございます。

軍助　はい、わしはちと人を尋ねますものでございます。此邊に都方から參りましたものがございますならば、どうぞ教へて下さりませ。

小兵　それは空な尋ね物だが、たしか向ふの櫻餅を賣る家が、都の者だと聞いたが、わたしも向ふの家へ行くものだ、一緒に來て聞いて見なせえ。

軍助　それは大きに有難うございます。

小兵　さあ〳〵一緒に來なせえ。（ト右の鳴物にて兩人舞臺へ來て、）おい〳〵、惣太どのは家に居さつしやるか。（ト家へはひる、お梶見て、）

お梶　お前さんは道具屋の小兵衛さん、ようおいでなされました、こちの人はお約束の金の工面に、今朝疾うから。

小兵　又今日も留守か、よし〳〵、仕方がねえ。今日は是でも非でも、爰の家に居催促だ。

お梶　そりやもう今日は、是非々々のお約束、せめての事に半金なりとも。

小兵　どつこい、そりや眞平だ、何でも惣太どのゝ歸るまで、爰の家に待つて居て、いや、待つといや
あ門口に。（ト門口を見て、）おい／＼旅のお人、こつちへはひつて聞いて見なせえ。

軍助　はい／＼、左樣なら御免なされませ。（ト右の合方にて軍助内へはひる。）

お梶　や、お前は父さんぢやござんせぬか。（ト軍助お梶を見て、）

軍助　おゝ、さういふそちは、娘のお梶か。

お梶　父さんでござんすか、思ひがけないといはうか、よう尋ねて下さんした、まあ／＼こつちへござ
んせえなあ。（ト手を取つて連れて來る。）

軍助　いやも、まことに久し振り、何から話さうやら、定めて樣子も聞いたであらうが、吉田のお家の、

お梶　あゝもし、其事も聞きませうが、何をいふにも他人の聞く前、

軍助　成程、して聟どのも息災か、逢はねばならぬ事があつて、方々尋ねたわい。

お梶　ほんにさうでござんせう、夫婦一緒に此東へ來て、今ではこちの人の名も、惣太どのといふわい
な。

軍助　さうかいやい、して聟どのは在宿か。

お梶　いえ／＼惣太どのは、今朝江戸へ行かしやんしたが、戻つたならば早速に、お前に逢はせませう

わいな。

軍助　そんなら戻つた其上で、どうぞ早く逢ひたいものぢやが。

小兵　そんならこなたは、お梶どんの父さんかえ。然し折角ござつても、主人が留守ぢやお話しもなるまい。

お梶　こちの人の戻るまで、小兵衞さんも御一緒に、納戸のうちで。

軍助　歸りを待つて何かの談合。

小兵　そんなら一緒に親父どの。

軍助　小兵衞さまとやら、御案内をお賴み申します。

小兵　さあ來さつしやい。（ト唄になり、軍助小兵衞奥へはひる。）

茂吉　もしお梶さん、折角お父さんが來なすつたに、たしか米がもうなかつた、そして何ぞ肴でも買はずばなるめえ。

お梶　さあ、それゆゑわたしも最前から、もし、ちよつと待つて下さんせ。

ト押入より搔卷、蒲團、褞袍を出して、

お前御苦勞ながら此品を、いつもの質屋へ持つて行て下さんせ。

茂吉　それを遣つちやお晩に困るだらう、お前の其簪でも遣んなせえ。

お梶　こりやわたしの母さんの筐の簪ゆゑ、手放しにくい。待ちなさんせ、やう〳〵退けて置いたわたしの下着がござんす。（ト戸棚より風呂敷包みを出し、）是れでなるたけ出來るだけ、足らぬ所は見世の賣溜めもちつとはござんす。（ト風呂敷包みを渡す。）

茂吉　呑込みました、あゝこんなに苦勞する上さんを捨て、惣太どのは女郎狂ひを。

お梶　是れはしたり、其やうな事言はずと、早う持つて行て下さんせ。

茂吉　よし〳〵、そんなら是れで米から肴、酒もちよつぴり、どれ行つて來ようか。

ト通り神樂になり、茂吉着物を抱へ下手へはひろ。

お梶　ほんとに、もういつもながら茂吉どんの親切、（ト門口を見て、）あれ、もう日が暮れるさうな、どれ行燈なと附けませうか。

ト お梶夜具を片附け奧へはひろ。時の鐘、ばた〳〵にて、花子胴拔、扱帶女郎の裝、手拭を冠り走り出で、舞臺へ來り內へはひり、門口をぴつしやりしめてほつと息をつく。此時お梶行燈と火打箱を持ち、奧より出で、此音にびつくりして、

えゝも、びつくりしたわいな、人の家へ案內もせず、お前は誰ぢやえ。（ト花子思入あつて、）

花子　あい、わたしでありんすよ。
お梶　なに、わたしぢやとは何ぢややら、日の暮れたに氣味の惡い。
花子　いえ〳〵、大事ないものでござんすが、樣子あつてちよと外へは。
お梶　樣子があつて外へ出られぬとは、こりやお前は盜人ぢやな。
花子　あゝめつさうな、そんな者ではありんせぬわいなあ。
お梶　何ぢややら胡散臭い、若しこちの人、ちよつと來て下さんせいなあ。（ト呼び立てる、奥にて、）
惣太　おい〳〵、せわしない、今そこへ行くわい。（ト合方になり、障子屋體より惣太前幕の裝、脇差にて探り探り出で、）何だけたゝましい、つい晝寐からずる〳〵と、あつたら夢を覺したわ、あゝ又道具屋めだな。
お梶　いゝえいな、其道具屋も來て居るに、久し振りでわたしの父さんが尋ねて見えて、何やかやの所へ、若し盜人がかッこんだわいなあ。
惣太　なに、盜人がかッこんだ、そりやどこに居る、どれ。（ト探りながら立ち掛る。）
花子　あゝもし、わちきやあ、爰の家へかッ込みはかッ込んだけれど、盜人ぢやアありいせん、早く燈火を附けて、よく見てくんなましよ。

惣太　なに、まだ火を點さぬ、道理でおれが目まで眞ッ闇だ。こりやお梶、早く燈火を附けぬかえ。
お梶　あい〳〵、今附ける所ぢやわいなあ。
惣太　燈火を附けてから、引き摺り出してやるぞ。
花子　假令出しても、めつたに爰は、（ト男の思入になり、びつくりして、）いえ、めつたに出るこつちやア
ありいせんよ。
ト女の思入にて、門口をそつと明けて窺ひ、又そつと締める、此内お梶火を打ち行燈を附けて、
お梶　さあ〳〵、こちの人、燈火が附いたわいな。
惣太　明るくなつたら盗人を。（と行燈の火にて花子惣太を見て、）
花子　や、お前は惣太さん。
惣太　さういふこなたは。（トお梶、花子を見て、）
お梶　ても美しいおいらんは。
花子　花菱屋のわたしは花子。
お梶　そんならお前が。
花子　ぬしに逢ひたくやう〳〵と。

惣太　廓を脱けて、おれが家とも、
花子　知らいで思はず來たわいなあ。もし惣太さん、逢ひたかつた〳〵わいな。
　　ト惣太へ取附く。浮いた合方。惣太お梶へ思入あつて、
惣太　あゝこれ、女房の手前、めつたな事を。（ト是れにてお梶思入あつて）
お梶　あゝ、いえ〳〵、お上さんは留守でござんす。
惣太　それでもわが身が。
お梶　はて、お上さんは四五日お里へお泊りがけ、殘つたわたしは、あい、下女でござんす。何のお上さんがこんな裝でござんせう。それぢやによつてわたしは下女、なあ、下女でござんせうがな。
　　ト呑み込ませる、惣太思入あつて、
惣太　成程そちは下女だ、下女なれば是れ花子、何なりと心置きなく。
花子　さうかいな、今の話しの樣子では、ぬしがお上さんぢやありんすまい。若し女中さん、お茶を一つくんなまし。
お梶　はい〳〵。（ト お梶茶を汲んで出す、花子鏡袋より金を出し、紙へ包み、）
花子　女中さん、煙草でも買ひなましよ。（ト出す、お梶むつとしたる思入あつて、）

お梶　いゝえ、わたしやそんなもの取るやうな、むさい心は。
惣太　これはしたり、そちは下女ぢやないか、下女なりややつぱり其金を。（これにてお梶金を取つて、）
お梶　はい〳〵、有難うござります。（下思入）
惣太　ときに花子、わが身は何で廓を脱けて來たのぢや。
花子　さあ、常々ぬしへ話した通り、男を立てる葛飾の十右衞門面が身請けの相談、男嫌ひのわたしゆゑ親方さんも直に得心、それがうるさく廓を脱け、お前の顏を見た上で、死ぬる覺悟でやう〳〵こゝまで。
お梶　忍んで見えたおいらんの、其面ざしは繪姿の、あの松若に。
惣太　あいや、待つ甲斐あつておれが家へ、駈け込んで來た此花子、素手で歸さば男の面、おつちが身請けするならば、こつちも意地づくどこまでも。
お梶　めつさうな、たゞさへ貧苦の其上に、多くの金を。
惣太　それもこつちに耳よりな話しもあればこれ花子、心置きなくおれが家に。
花子　嬉しうござんす、其親切なお前の心、わたしが望む都鳥も、たしか取り得て、
惣太　持つては居れど、これとても價の金は大枚百兩。

花子　わたしが身請けもやつぱり百兩。
惣太　なに、金は湧きもの、おれに任せて、落附いて居やれさ。（ト花子の手を取り引寄せる。）
お梶　ほんに呆れて、物さへも。（ト思入。）
惣太　はて、言はぬは言ふにいやまさる。
花子　勤めの外の念が屆いて、
惣太　今夜はゆつくり、
花子　積る話しを、
お梶　あんまり人を踏み附けた、
惣太　文で口說かず、
花子　初會の時から、
お梶　眞實お前は、
花子　間夫ざますよ。（トいひながらお梶を退け眞中へはひる、惣太知らず。）
惣太　さあ、一緒に奧へ。（ト下の方を探る。）
花子　あれ、こつちざますよ。（ト惣太の背中を叩く。）

ト惣太刀を持ち、入替つて花子の手を取る、お梶もしと寄る、花子突きのけ鼻紙にて顔を隠す。三人思入、唄になり、惣太探り〳〵花子の手を引き、上の屋體へはひる、此時奥より軍助つか〳〵と出て、それと門口へ行きに掛るをお梶留めて、

お梶　お前は父さん、きつ相替へて、こりや何所へ。

軍助　どこへとは白痴面め、最前から奥の一間で、聟めが心底皆聞いた、あゝいふ不所存な心と知らず、班女様や梅若様を、この東路へお供せしは聟めを力、それに引替へ、女に心奪はれる不忠者、向後聟舅の縁切つたぞ、それぢやによつて。（トまた行かうとするを留めて、）

お梶　まあ〳〵待つて下さんせ、お前の詞は尤もでござんすが、是れには深い様子もあらう、まだ其上に此程より、隠せどたしかに内翳の病。

軍助　すりや、あの聟めは内翳となく

お梶　さあ、見える振りはして居れど、見えぬ様子でござんすわいな。

軍助　その眼病も立どころに、平癒いたす良薬あれど。

お梶　してまあ、それは何れいづくに。

軍助　おゝ外でもない、吉田の御家に數代傳はる稀代な良薬、（ト懐中より袱紗包みの薬を出し、）班女様よ

り預りし袱紗包みの此中は、志度の浦にて取り得たる年を重ねし鮑の眞珠、これに三十路を越えざる女の、乳の下の血汐を混じ服する時は、立ちどころに眼病平癒疑ひなき、世にも稀なる不思議な良藥。

お梶　さういふ不思議なお藥なら、どうぞ夫へ少しなりとも。

軍助　おゝ、何がさて聟舅、眞人間なら遣りもせうが、心の腐つたやつなれば、何しに遣らうぞ、叶はぬことだ。

お梶　そんなら夫へ其のお藥は、

軍助　いつかな遣らぬ、遣られぬぞ。

お梶　あゝたつてと言はれぬ此場の仕儀。

軍助　いざ、此上はお二方の、お供をなして陸奥筋へ。

ト　お梶を引き退け門口へ出る、此時件の藥包みを落して置くこと、お梶留めて、

お梶　まあ〳〵尤もでござんすが、そこをま一度了簡して、お二方をどうぞ此家へ、お供して下さんせいなあ。

軍助　やあ穢らはしい、こゝ放せ。

お梶　いえ〳〵、どうぞ了簡して。
軍助　えゝ面倒な、放せといふに。（トお梶を振切り門口をしやんと締める、お梶ハア、と泣き落す、）未練者めが。（ト唄、時の鐘になり、軍助足早に花道へはひろ、お梶思入あつて、）
お梶　もし父さん、堪忍して下さんせいなあ。（ト合方替つて、）日頃律義な惣太どのゝ、打つて替りし女郎狂ひ、悋氣は女子の嗜みと愼んでは居るものゝ、現在女房の目の前で、あんまり呆れた二人の仕方、其上尋ぬる都鳥の印、價の金も今日が日限り、どうぞ仕樣が、（ト件の藥包みを取上げ、）こりや最前父さんの、話しのあつた内騒の妙藥、こゝへ落して行かしやんした心の底は、こちの人に呑ませてやれとの謎なるが、三十路を越えざる女の乳の下、血汐に浸せとあるからは、品によつたら此身を捨てゝも。とはいへ、夫のあのしだら、それも樣子のあることか、但しはあれが本心か、何に附けても惣太どのゝ心の内が、どうぞ聞きたいものぢやなあ。
ト唄になり、お梶此時さして居たる簪を落し、これに心附かず、悄々として藥包みを持ち奥へはひろ、跡流行唄がすめた通り神樂になり、花道より閻魔の庄兵衛、羽織股引裝、長岡屋の手代喜兵衛、同じく萌黄の風呂敷を肩へ掛け、跡より垂をおろせし四つ手駕籠、駕籠舁かつぎ出て、花道にて、
庄兵　こウ長岡屋の喜兵衛どん、それぢやアあの花子に、仕掛の貸しがある上に、惣太にも貸しがある

のか。

喜兵　ある段ぢやあない、あの植木屋の惣太が吉原へ女郎買に行くのに、しみッたれな裝では行けねえからと、わたし共の見世で小袖を貸して、男達の積りで女郎買ひ、先のうちは損料も拂ひましたが、終ひには損料も寄越さず、小袖も着たきりだから、今夜は何でも家へ仕掛けて、引ッ剝いで行かにやあなりませぬのさ。

庄兵　はて、見掛けによらねえ太え男だ、あの花子も知つての通り、男達の爲飾十右衞門さんが身請けするといふ相談になつた所を、駈落して駈けこんだのは惣太の家と、突き留めさせて仕掛けるところだ。

喜兵　そんならわたしも一緒にいつて、どこぞ小蔭に隱れて居て、いゝ時分に踏ん込んで、花子の仕掛に惣太が小袖、引ッ剝がにやあなりませぬ。

庄兵　さういふ事ならおれと一緒に、さあ來さつし、（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、下の方へ駕籠をおろす、）こう駕籠の衆や、この客人はこゝへ置いて、又のちに迎ひに來て下せえ。

駕舁　はい〳〵畏りました。

喜兵　わたしやおそんなら爰らに隱れて、どれ、頑張つて居ようか。

ト右の合方にて、喜兵衞は下手、駕籠舁は花道へはひる。庄兵衞内へはひりながら、

庄兵　さあ〳〵出して貰はう、駈こんで來たあの花子、きり〳〵出して貰はう。

ト大聲にてわめく、右の合方にて屋體より惣太脇差にて探り出て、

惣太　え丶何だ、やかましい、花子を出せと言はつしやるは、そんならこなたは吉原から。

ト眞中へ出る。

庄兵　知れたことさ、大枚百兩といふ金を出して、大阪三界から抱へて來たも、器量がい丶からぶッ附から仲の町、見立がきいても男嫌ひ、お客を振るから何所でも鞍替へ、やう〳〵納めた花菱屋、氣隨氣儘で親方も持てあまして居た所、又候廓を駈落して駈込む家は惡足の惣太どん、さあきりきり花子を出して下せえ。（トきつといふ、惣太思入あつて、）

惣太　成程こなたのいふ通り、廓を脱けてわしが家へ駈込んで來たあの花子、樣子を聞けば身請けの相談、外の客へ渡しては、忍ぶと異名附けられた、間夫の惣太が面が立たぬ、高が女郎は賣もの買もの、身請けしたらば言分あるまい。

庄兵　身請け〳〵と口ではいふが、花子さんの身の代は大枚百兩、よもやこなたに其金は。

惣太　なに、金錢は浮世の湧きもの、今夜中に身請けせう。

庄兵　そんならいよ〳〵花子さんを。
惣太　百兩出して身請けしたら、よもや外から言分は。（ト此時下手の駕籠の內にて、）
十右　いや、其言分は葛飾十右衞門が、そこへ行つて言ひませうかえ。
　ト派手なる合方になり、駕籠の垂を上げる。內に十右衞門前幕の男達のこしらへにて乘つて居る、庄兵衞駕籠に附けたる下駄を直す、十右衞門脇差をもつて悠々と駕籠より出で、家へはひり上手へ通る、惣太思入あつて、
惣太　そんならこなたが噂ある、花子を身請けの、
十右　いかにも葛飾十右衞門、花子が間夫の惣太どの、名は聞き及べど逢ふは初めて。
惣太　斯う近附きになるからは、
十右　是れから互ひに、
兩人　心易く仕ませう。（ト思入。）
惣太　して、十右衞門どの、何の用でわしが家へ。
十右　わざ〳〵來たのは外ぢやあねえ、こなたが女房の約束した、花子を貰ひに來ましたのだ。
惣太　何の用かと思つたら、わしが女房と約束した花子を貰ひにござつたのか、外の事なら兎も角も此

事ばかりはお斷りだ。又こなさんもみつともねえ、外に女郎もねえやうに、男と名を賣る十右衛門どの、こなたの顏が汚れませうぜ。

十右　成程こなたのいふ通り、住家は場末の所の名、異名の葛飾十右衛門、足かけ四年醉ひざめに吞んだお江戸の水の恩、花子に迷つて口說けども、根が江戸ッ子のこなたにやあ叶はぬわしが嫌はれて、爰の家へ駈込まれちやあ、子分子方の手前といひ、十右衛門が面が立たねえ、百兩といふ身の代を出した其上手を下げて、こなたへ頼むは花子の身請け、三日なりとも女房に持つた其上では、又改めて媒人してこなたと夫婦にする程に、こゝの道理を聞き分けて、どうぞ花子をわしに下せえ。

惣太　いや、ならねえの、男と見込んで此家へかけ込んで來たあの花子、どうして餘所へ遣られるか。

十右　さゝ、こなたのいふは尤もだが、そこを只管わしが頼み、これ、此通り男が手をば。

惣太　幾ら下げても頼んでも、ならぬといふより返事はねえわ。

十右　すりや、これほどに頼んでも、

惣太　聞く耳は持たねえわ。

十右　そんならどうでも、

惣太　知らねえ〳〵、知らねえわ。（トきつと言ふ、十右衞門思入あつて、）

十右　そんなら勝手にしやあがれ、初春早々出面から憎まれ口をきくのが厭さ、下から出りやあ附け上り、幾ら強情ぬかさうとも、貰ひかゝつた男の魂、刄物にかけて貰つて見せるわ。

惣太　面白い、刄物に掛けてとぬかすからは、後へは引かねえ男の魂、金輪奈落どこまでも。

十右　ならぬとありやあ、此場に於て、

惣太　見事おぬしが、

十右　おんでもないこと。（ト兩人刀を持ち立ち掛かる、庄兵衞びつくりして、）

庄兵　あゝもし〳〵十右衞門さん、さつきからどうなる事かと聞いて居ましたが、高が女郎の身請けから言ひ募り、お互ひに刄物に手を掛けてどうなされます。怪我でもあつちやあわたしも掛り合ひ。まあ〳〵靜になさりませ。

十右　やい〳〵惣太、口は立派にぬかしても、人が留めるを幸ひに、尻腰のねえ卑怯者。

惣太　卑怯者とはうぬがことだ、惣太は男だ、何のあとへ引くものかえ。

十右　そんなら惣太、われから拔け。

惣太　いや、われから拔け。

兩人　何を小癪な。（ト兩人刀を拔かうとする、此時下手屋體の内にて、）

花子　あゝもし、お二人さんの納りは、此花子が附けやせうわいなあ。

ト替つた合方、屋體より花子煙管を持ち眞中へ出る、兩人思入あつて、

惣太　さういふ聲は、いやさ、そなたは花子、

十右　この場の納り附けるとは面白い、して其納りは。

花子　さあ是れまでいろ／＼親切に、言つて下さんした其上に、刀に掛けても身請けせうと言はしやんす、お前の心底見たゆゑに。

十右　この十右衛門が、女房になる氣か。

花子　いやでござんす。

十右　や。

花子　はて、いやであるまいか、身請け／＼とあたうるさい、二世の固めの惣太さん、ぬしより男は持たぬわいな。

惣太　そんならそれ程、この惣太に。

花子　あい、因果な事でござんすわいな。

十右　もう此上は。（ト十右衛門刀を持つて立ち掛り、惣太も立ち掛るを、）

花子　これ。

ト十右衛門を留める、惣太切らうとして氣を替へ、刀を下へ置き、三人思入誂への合方。

男嫌ひの我儘もぬしへ立てぬくわたしが心中、賤しい勤めはして居ても、心の清き川竹の客と間夫との二瀬川、それを知らぬは野暮と虚假、お前もちつと此後は、粋にならんせ十右衛門さん。もし惣太さん、何も恐れることはござんせぬわいな。

十右　間夫か何だか知らねえが、右から左り、今夜の内、見請けをすりやあおれが自由、女房にするからさう思へ。

花子　いえ〳〵、體は金に任せても、心ばかりは任せぬわいな。

庄兵　これ花子さん、さう強情を言ひなすつたら、爲になりますめえぜ。

花子　庄兵衛どん、入らざる世話をやかずとも、櫻餅でも喰べなんしな。

庄兵　え、、そのいけ口を。（ト立ち掛るを、）

花子　聞いた風な、好かねえ人だなう。（ト煙管にて庄兵衛の天窓を打つ、是れにて庄兵衛の天窓へ疵附く、）

庄兵　え、痛へ〳〵、天窓が割れた〳〵。（トわめく、奥より小兵衛出て、）

小兵　何だ〳〵、どうした〳〵。
庄兵　どうした所か、花子さんが、天窓を割つた〳〵。
小兵　お丶血が出る、どれ〳〵おれが結へてやらう。（ト手拭にて庄兵衛の天窓をしばり介抱して、）ときに惣太さん、これ程内に居ながら、よく留守を遣つたの。
惣太　お丶、こなたは道具屋の小兵衛どの、いつの間に。
小兵　さつきから來て待つて居るのさ、今日までの約束の都鳥の代金百兩、たつた今受取りませうか。
惣太　成程約束の百兩、今夜中に渡さうから、どうぞ暫く。
小兵　いや待たれねえ、代物はそつちへ取上げて、今日の明日のと一寸脱れ、もう〳〵待つ事は出來ねえ。
惣太　さあ、そこをどうぞ了簡して。
小兵　どうして〳〵、假令詫びても賴んでも、堪忍袋の緒が切れた、金が出來ざあ都鳥の印を返さつしやいな。
惣太　それだといつて、此品ばかりは。
小兵　え丶面倒な、たしかに懐に。（ト懐より都鳥の箱を引出し、）これ程爰にあるものを。（ト花子見て、）

花子　そんなら、それが都鳥。
小兵　百両になる都鳥。入間様へ差上げて現金にしにやあならねえ。
惣太　あゝこれ、其品外手へ渡しては、大事の望み．いやさ、望みかゝつた都鳥、どうぞ暫く勘辨して。
小兵　いやさ、勘辨も糸瓜もいらねえ。金さへありやあ賣つてやるわ。
惣太　それだといつて其金が、
小兵　なけりやあ、外へ賣つてやるのさ。
惣太　それではどうでも、
小兵　そんなら金が、
惣太　さあそれは、
小兵　外へ賣らうか、
惣太　さあそれは、
兩人　さあ〳〵〳〵。
小兵　えゝ面倒な、放さつしやい。（ト振切るを惣太留めて、思入あつて、）
惣太　是非に及ばぬ、都鳥の代金渡さう。（ト懐より前幕にて手に入りし百兩を出して、）さあ小兵衛どの、代

金百兩、改めて受取らつしやれ。（ト前へ出す。）

花子　え、そんなら大枚百兩を。

惣太　千辛萬苦の此百兩、都鳥が手に入れば、可愛いそなたを人の花、身請けをすれば望みの品人手へ渡す切なさに、是非なく百兩、さあ受取らつしやれ。

小兵　よもやと思つた百兩を、受取つたれば都鳥、直にお前に。（ト金を受取り箱を出す、惣太探り取つて、）

惣太　品は慥に受取つた、これ花子、そなたが望みの都鳥、渡して置くがおれが心中。

ト探つて花子へ渡す。

花子　嬉しうござんす惣太さん、わたしがしつかり預りました。

ト花子印を懐へ入れる。此以前より喜兵衛出て、門口に窺ひ居て、此時ずつと内へはひり、

喜兵　見附けた〳〵、借り着の裲で駈落の花子さん、見附けたぞ〳〵。

花子　や、お前は。

喜兵　長岡屋の喜兵衛でござります。

惣太　喜兵衛どん、面目次第もない。

喜兵　面目ないもよく出來た、これ花子さん、お前はまあ顔に似合ねえ太え女だぜ、男嫌ひの身上りに

袿から部屋着まで質に置いて仕樣がなさ、俺が所へ人をよこして、仕掛と帶を貸してくれろと賴むから、持つて行つて貸すと其儘駈落とは、あんまり酷いぢやあねえか、さあ〳〵、脫ぎなせえ脫ぎなせえ。

花子　あゝもし、そりや尤もでござんすが、どうぞちつとの間見脫して。

喜兵　どうして〳〵見のがされるものか、戲言いはずと脫ぎなせえ〳〵。

ト喜兵衞捨ゼリフにて花子の着附を脫がせる、花子長襦袢一つになり、十右衞門を見て面目なき思入。喜兵衞捨ゼリフにて着附扱帶を風呂敷に包み、

先づこれでこつちは片附いた。さあ是れからは惣太、貴樣も一つ穴の貉のやうに、まじ〳〵と其顏附き、貧乏世帶の植木屋が、女郞買の損料小袖、着たきり雀でしやあつくの、お宿はどこと搜し當てたのだ。さあきり〳〵と脫いで貰はう〳〵。

惣太　成程一々尤もだが、長うとはいふまい、どうぞ明日まで。

喜兵　どうして〳〵明日どころか、もう一時も待たれねえ、まだ其上に御内儀のお梶さんの受合ひの損料も殘つて居る、さあ〳〵脫ぎなせえ〳〵。（ト十右衞門これを聞き思入あつて、）

十右　これ〳〵長岡屋何といふ、そんなら惣太が女房の名は、お梶といふか。

喜兵　はい、内儀の名はお梶といひます。

十右　む、、惣太が生れは都方、女房の其名はお梶とあれば、もしや山田の。

惣太　え。

十右　はてなあ。(ト十右衛門此時以前お梶の落せし簪を拾ひ見て、さてはと思入。)

喜兵　なんぼ内儀がお梶でも、さう〱かぢられてなるものか、脱ぎなせえ〱。

惣太　そりや又あんまり。

喜兵　あんまりとはこつちの事、脱ぎなせえ〱。(ト捨ぜりふにて惣太の着附を脱がせ、帯も一つにして風呂敷へ包み、)やれ〱、大骨を折らせ居つた。(ト皆々惣太花子を見て、)

庄兵　こう惣太どん、男達だ〱と、立派にいふは口ばかり、花子さんの身の代金は大枚百兩。

小兵　吉原廻ひの日和下駄、着飾つた派手小袖は、みな長岡屋の損料もの。

吉兵　二人ながらふん剝れて、身に附いたものは襦袢一枚、見すぼらしいざまを見なせえ。

三人　呆れたものだ、は、、、、。

ト花子思入、二重にある以前の褞袍を取つて惣太に着せて、

花子　惣太さん、堪忍して下さんせ、わたしが望みの都鳥買うた禮にお前の顔、立てる仕様は、もし惣

太さん、お前に渡したわたしの起請。ちよつと出して下さんせ。

惣太　なに、起請を出せとは。

花子　はて、何であらうとどうぞわたしに、（ト惣太心得ぬ思入にて守袋より起請を出す、花子受取り、）しつかりわたしが預りました。

ト合方替つて、わが守袋からも起請を出し、惣太の起請と一緒に、十右衛門の前へおづ／＼出して、

もし十右衛門さん、最前からの愛想づかし、嘸憎からう、腹も立たう、お前へ對して此顔が向けられるのぢやないけれども、聞かんす通り惣太さん、わたしが望みの都鳥、身の代金百兩で買つて貰つたばつかりに、男の顔が立たぬ義理、顔押し拭ひ恥を捨て、お前へわたしが一つの頼み、惣太さんと二人が中に取り交した此起請、これをお前に預ければぬしと一緒に居るとても、神々さんを誓ひに立て、一つ寐せぬがわたしの言譯、どうぞ起請を預つて其金貸して下さんせ。

ト思入、十右衛門も思入あつて、

十右　花子出來した、よく言つた、女郎の意氣地も張りも捨て、大事の起請を此十右衛門に、預けようといふ頼みやうが面白い、いかにも此金貸してやらう。

花子　そんなら貸して下さんすか。

十右　心置きなく遣つたがいゝ。(ト以前の金を花子の前へ置き、)

花子　えゝ、嬉しうござんす、若し惣太さん、十右衛門さんの御親切、身の代金のこの百兩。

ト惣太に金を渡す。

十右　それで男が立つであらうが。

惣太　流石達衆の十右衛門どの、最前よりの遺恨もなく。

十右　なにさ、當つて砕ける男の意地。

惣太　忝ない。さあ庄兵衛、花子が身の代、耳を揃へて、それ百兩。(ト探り〳〵前へ出す。)

庄兵　いやも、こつちは何處からでも金さへ取りやあ、構ひなしだ。(ト紙入より年季證文を出して、)さあ年季證文を受取らつしやいまし。(ト惣太取つて逆さに廣げる。)もし、それぢやあ逆さまだ。

惣太　なにさ、こなたに讀ませようと思つて。(ト裏返しにする。)

庄兵　これさ、それぢやあ裏の方でござります。

惣太　えゝやかましい、どうでもよい事。(ト證文を疊み懷中して、)三人とも、取るもの取つたら、言分あるまい。さあ、きり〳〵と歸らつせえ。

小兵　はい〳〵、歸りますとも〳〵、さつきから歸りたくてならない所。さあお二人さん、連立つて歸

りませう。

喜兵　さあ足元のあかるい内、ぢやあねえ、眞ッ闇だらう、向うへ渡つて大七で、誂るのぢやあねえ、提灯を借りて行きやせう。

庄兵　いや散々口をすつぱくして、梅干ほどの瘤をこしらへ、天窓はいたこぶしらがこぶ、まことにこれがばゞあだなあ。

三人　左様ならば十右衛門さん、ごゆるりとお話しなされませ。さあ、行きませう。（ト三人花道へ行き）

庄兵　ときに此春の景氣では夜櫻も、あがつたりだと思ひましたが、大きに穩かになつてようござりますね。

小兵　左様さ、是れといふのもお武家様のお陰、なんでも當時は御武家が頼りでござります。

喜兵　それが世にいふ譬の通り、花は櫻木人は武士。

庄兵　ところで芝居は二丁目かね。

小兵　いや、自分の太夫元へ。

兩人　え。

小兵　水を引くやつさね。

兩人　何をいふのだ。
三人　さあ行きませう。（ト流行唄通り神樂になり、三人花道へはひる、惣太花子跡を見送り思入れ）
惣太　十右衞門どのゝお志。
花子　何とお禮を申さうやら、
兩人　えゝ、有難うござりまする。
十右　いやも、其禮には及ばぬ事、然し花子が其裝では、むゝ、（ト合方になり、十右衞門二重にある最前の褞袍を取つて花子へ着せ平ぐけをしめさせて、）これで當座の風凌ぎ。
惣太　段々との御親切、凌ぎ方なき御恩金を、返金いたすそれまでは、花子はやつぱりこなたの方へ。
十右　いや預かるまい、男を立てる十右衞門、女を抵當に金を貸したと、世間の人に言はれちやあ、此十右衞門の顏がすたる、身請けの金の百兩も昨夜思はず、いやさ、思はず最前出した金、二人へ貸して此場の納り、いはゞ今夜の媒人は、とりも直さずおれの役、夜更けぬ内に開くとしよう。
ト言ひながら十右衞門下手へ來る、兩人思入あつて、
花子　さうまた綺麗に言はしやんす程、
惣太　どうも二人の心のうちが、

十右　濟まずばいつでも返金を、催促はせぬ安氣の貸金、それもわしへの禮ならば、古い女房のあのお梶、見捨てぬやうに二人の衆。（ト十右衛門門口へ出る。）

花子　そんなら矢つ張り最前の、下女といふたがお上さん。

惣太　其女房が噂せし、もしやは兄の。

十右　いや、兄とたとへる魁の、

惣太　梅の花子の新女房、

花子　妻とはいへど妹分、

十右　はて、遠慮せずと、どうせ今夜は。

花子　え。

十右　あゝ、雨にならねばよいが。

ト十右衛門戸をしめる。唄になり、十右衛門思入あつて花道へはひる。兩人跡を見送り思入。

花子　ほんにまあ、どうなる事と思うたに、案じるより生むが易いと、わたしの身請けの其上に日頃望みの都鳥まで、手に入るといふは、嬉しい事ぢやないかいなあ。

惣太　いやも十右衛門が俠氣で、金を貸してくれたばかりで、そなたと夫婦にはなつたものゝ、義理を

思ふと氣の毒だ。

花子　いえ其義理ばかりぢやござんすまい、隱しなさんすがお前の樣子、たしかに内翳の。

惣太　いやも、其眼病も神佛の、力を借りて此ほどは。

花子　うはべを包む眼病も、

惣太　天の助けにやう／＼と、

花子　見えるかえ。（ト都鳥の印を出し惣太の目先きへ突附ける、惣太これを知らず、）

惣太　元の通りに、ずんと明か。

花子　ほんに病は、直つてゞござんしたなあ。（ト肩にて笑ひ、印を懷中する。）

惣太　時に今のもや／＼で、肩がきつく張つて來た。

花子　そんならわたしが、揉んで上げうかえ。

惣太　どうして、わが身に揉んで貰つたら、罰が當るであらう。

花子　何ぢやいなあ、今日からお前の女房ぢやござんせぬか。

惣太　そんなら大儀ながら、ちつとばかり揉んでたも。

花子　あい／＼、合點ぢやわいな。

ト惣太の後へ廻り、花子肩を揉みながら、ぐつと伸びをして肩をとらへ、きつとなつて顔を見る、惣太これを知らす。

惣太　あゝ、いゝ心持だなあ。

ト思入、花子につたり笑ふ、時の鐘凄き合方になり、花道より丈六、音藏、高藏廣袖盗人のこしらへ、絲立を引掛けて出て門口へ來り、礫を打つ、是れにて花子惣太の耳へ指を入れ奥を窺ふ、此内三人門口をそつと明ける、花子這入れと飯にて數へる、三人内へはひり惣太を見る、花子目は見えぬから大事ないといふ思入する。

丈六　お頭。

三人　松若樣。

花子　これ。（ト思入。）

丈六　いゝまぶな仕事があるゆゑに、爰まで來いと窃の知らせ、

音藏　かねてこなたが望んで居る、

高藏　都鳥の印とやら、

三人　まんまと首尾よく、

花子　手に入つたれば、今夜のうちにふける積り、わいらは是れから。（ト囁く。）

丈六　合點ぢや。

花子　路川の足しに、な。（ト頤にて敎へる。）

丈六　此家のうちの雜物を、心得ました。

ト三人二重にある搔卷、押入よりいろ〳〵の雜物、鏡立、釼、耳盥など出し門口の外へ運び、以前の駕籠を見付け三人囁き合ひ、件の品を駕籠へ入れるとてばつたり落す、惣太聞きつけ、

惣太　何だ、あすこでがた〳〵するのは。（ト立ち掛るを花子留めて、）

花子　あのがた〳〵するのは、あれ〳〵大きな鼠が、しい〳〵。

惣太　そいつは猫でも、飼はずばなるまい。

音藏　にやん〳〵。

高藏　わん〳〵。（ト惣太聞きつけ、）

惣太　や、猫めも犬めもはひつたさうだ、どれ追出して。（ト立たうとするを花子留めて、）

花子　いえ〳〵ようござんす、わたしが追つてやるわいの、畜生め〳〵。

ト耳を押へながら足拍子を踏み、三人に行けと思入する、三人駕籠を擔がうとする、向ふにて人音する、

丈六　え丶、折惡いあの人音。

花子　そこらへ忍んで。

丈六　又候後に。（ト兩人に囁き駕籠を片寄せ、）

三人　そんなら頭。

花子　え丶畜生め、行かぬかえ。

三人　にやんわん〳〵。（ト時の鐘にて三人下手へはひる。）

花子　やう〳〵の事で、逃げて行つたわいな。

惣太　いや、憎い畜生めだな。

ト時の鐘、誂への合方、花子煙草を吸ひつけ惣太に呑ませる、花道より宵寐の丑市、木綿やつし綿頭巾、好みの按摩の裝にて、安下駄を穿き杖を突き出る、跡より岩藏廣袖三尺の裝にて附き出で、花道にて、

丑市　これ岩藏、おぬしもおれも天狗小僧霧太郎が手下なれど、頭の詮議が嚴しいからおいら達も身の用心、天窓を剃つて出來合の座頭の坊、面へは痣を附けたれば、宵寐の丑とは見えやあしめえな。

岩藏　どうして〳〵、同じ仲間のおいらでさへ、滅多に知れねえおぬしが顏、氣の附く氣遣ひは大丈夫

だ。

丑市　かうして置いて霧太郎を、見付け次第に訴人すりやあ、罪を脱れて褒美の金、見當り次第何時でも、知らせの合圖の按摩の笛を、持たせてやつたら代官所へ、必ず拔かるな。

岩藏　そんなら頭の霧太郎の、在所が知れたら、其笛を。

丑市　持たせてやるのが訴人の合圖。

岩藏　おつと合點、丑右衛門。

丑市　早く行け。

ト右の鳴物にて岩藏引返してはひる。丑市笛を吹きながら舞臺へ來る、惣太聞き附け、

惣太　これ、按摩が來たぜ。

花子　呼んであげようかえ。（ト花子立つて門口を明け、）按摩さん〳〵、こつちでありますよ。

丑市　はい〳〵、お前さんかね。（ト丑市探り〳〵内へはひる。）

花子　危ないよ、さあ〳〵こつちへお上り。（ト手を取つてよき所へ連れて來る。）

丑市　はい〳〵、これは憚りでござります。

惣太　按摩さん、直ぐに揉んで貰ひませうかね。

丑市　はい〳〵、畏りました。（と惣太の後へ廻り、捨ぜりふにて肩を揉む、）

花子　ぬしが肩を揉みなんすうち、わたしもちつと寐ころんで。

　ト花子腹這ひになり、伸びをして何心なく丑市の顔を見て、思入あつて、頬杖になり丑市の顔をきつと見上げる。時の鐘凄き合方。

　はて、どうか見たやうだが。（ト男の思入、）

丑市　え。（トびつくりして、そつと目を明き花子を見る、花子思入あつて、）

花子　む、ほんにさうだつけ。（ト丑市ちやつと目を塞ぐ、惣太聞いて、）

惣太　そんならおぬしは、按摩どのを。（ト思入、花子心附き、起上り、女の思入になり、）

花子　あい、知つて居るのは、お、それ〳〵、折々廓へ見えたゆゑ、な、それで按摩さんは、近附きでございますよ。（と丑市これを聞き思入あつて、）

丑市　へえ、左様ならおいらんは、こちらの内へ。

花子　あい、今夜やう〳〵引越し女房さ。

丑市　そりやお目出度うございます、勤めの苦界を脱れなさりやお譯はねえね。然し新らしいお上さん、お前に見せるものがある。（ト懐より前幕にて手に入れし一巻を出して、）これ見なせえ。（ト出す、花子

見て、)

花子　こりやこれ吉田の。

惣太　や。

丑市　よしさ〳〵、身儘になりやあ猶のこと、ほしいは女の頭の物、お前はこれがほしからうね。

ト見せびらかして懐へ入れる。花子思入あつて惣太の耳へ指を入れ。

花子　日頃尋ぬる其品が、手に入つたらば、今宵の内、わたしを連れて。(ト此家を連れて退けと目で教へる。)

丑市　そんなら此家を。

花子　それも尋ぬる我が家の、さあ、家の掟も大門の、關を破つた駈落者。

惣太　千辛萬苦でやう〳〵と、それも主人の顔に似た。

花子　え。

惣太　いや、三世の誓ひのこの惣太、どうやら斯うやら女房に。

丑市　お前どこから貰ひなすつた。

惣太　や。

丑市　こりや盲目ぢやあ居られねえわえ。(ト丑市頭巾をぬぎ、目を明いてきつと思入。惣太も思入。)

惣太　そんなら按摩は僞りで。

丑市　おゝ、花子はおれが女房だが、誰に斷り此女。

惣太　斷らずとも金を出し、貰つた證據は年季證文、これが確な。（ト懐より以前の證文を出す。）

丑市　その證文がこつちの證據、賣主兄判しつかりと、すゑた宵寐の丑右衛門、賣つた女は女房お姫、何と動きやあとれめえが。

惣太　そんなら花子が、

花子　元から惡足。

惣太　さうとも知らず、

花子　おや、氣の毒だね。

ト惣太むゝと立ち掛らうとして氣を替へ、兩手を組みきつと思入、花子丑市へ煙草を吸附けて出す。

丑市　上方筋で此女、賣つた宵寐の丑右衛門、其判方へ斷らず女を引込みまた外へ、賣つてやる氣が恐ろしい、道によつたらおとなしく横にひぞればこつちでも、直には行かぬ丑車、こんな仕方は眞黒なこの元方を馬鹿にするのか。いやさ、虚假にするのか。惣太どん、だまつて居ちやあ分からねえ、こいつあ一番恐れながらと、出掛けにやあなるまいぜ。

惣太　心に一物ある上に、手詰めになつた男の意地、身請けなしたる此女、今となつては災ひの門からしけこむ花子が賣主、どうやら是れぢやあ美人局、短かく言へばゆすりも同然。

花子　何だゆすりだえ、お前おつなことを言ひなさるね、何もわッちが頼んで身請けをして貰やあしまいし、言はゞ己惚物好きで、喰ひ込んだはお前の虚假さ。

丑市　今聞く通り京三界から、丑右衞門が銜へて歩いた此女、いやでも應でもおれが方へ。

惣太　いゝや、たとへ以前は兎も角も、身の代金を出した上、花子が望みの都鳥渡して置いた大事の女、金輪奈落こなたの方へは。

花子　やられないなら行くまいが、もし惣太さん、わつちの身請けのあの金は、どこから出たえ。

惣太　や。

花子　お前が恥をかくのが氣の毒、十右衞門さんに譯を言つて、借りて濟ました身の代金、さうして見りやあ兩方五分々々、女房にくれた都鳥、それを今更返せとは何ぼ盲目のお前でも、あんまり向ふが見えねえよ。

惣太　すりや眼病も何事も。

花子　知つて振込む手管の魂膽、騙すは女郎の當り前さ。

惣太　その一言を聞く上は、假令眼は見えずとも。（ト一腰を持ち、立ち掛る。）

花子　切るならお切り、盲目に切られる間抜はないよ。

惣太　うぬ、其舌の根を。（ト立ち掛るを丑市さゝへて、）

丑市　えゝ、よくぢたばたひろぎやあがる。（ト惣太を引附けて、）これよく聞きやあがれ、そんな御託をつかずとも、それ程大事な都鳥なら、手切替りに下さいと、頼んだならばくれても遣らう、俄か盲目の杖の下、ころばぬ先きの用心しろ。（ト惣太を突き放す。）

惣太　えゝ口惜しい、心は矢たけにはやれども、盲目ゆゑに手出しもならぬか、えゝ残念な。

丑市　尻腰のねえどう盲目め、こうお姫、野郎が欲しがる都鳥、手切替りに返してしまやれ。

ト思入にて言ふ。

花子　あいさ、惜しいものだが返して遣らうよ。（ト都鳥の箱を出し、）さあ都鳥だよ、目が見えないから、よく改めて取んなせえよ。（ト惣太に渡す、惣太箱より出し探り見て、）

惣太　いかにも都鳥に相違ないが、假令この品戻すとも、花子はめつたに渡されぬ。

ト箱へ納めて傍へ置く。

丑市　渡されねえもよく出來た、身請けはしても親元へ、渡りも附けず此女を、引摺り込みやあ勾引しだ。

惣太　どうしたと。
丑市　但し花子がほしいなら、此丑右衛門が望むほど、金を出すならくれて遣らう。
惣太　それだといつて其金が。
丑市　なけりやあ女を連れて行くぞ。
惣太　さあそれは。
丑市　金をよこすか女を渡すか、金か女か女か金か、きり／＼返事をしやあがれ。
　　トきつと言ふ、惣太むゝと思案してゐる、此内花子惣太の傍にある都鳥の印を、箱よりそつと出し、
　　筒茶碗と入替へ印を懐へ入れて、
花子　惣太さん、いつまで愚痴をこぼさずとも、もういゝ加減に男らしく、あきらめておしまひな。
丑市　さあお姫、こんな間抜に構はずと、夜の更けねえうち支度をしやれ。
花子　あい、疾つから支度は出來て居るわな。
　　ト丑市花子の手を引き、門口へ出るを、惣太びつくりして支へ、
惣太　これ待て、そんならどうでも此花子は。
丑市　おれが女房だ、指でもさすな。（ト振り放す。）

惣太　それだといつて。（ト又取り附く。）

丑市　えゝ、しみしつこい、放しやがれ。（ト振切る、又取り附くを、丑市煙草盆にて惣太の額を打つ、これにて惣太の額へ疵附き、どうと倒れる。）どう盲目め。（ト花子以前の駕籠の垂を上げて、）

花子　こう見な、行きがけの駄賃だよ。（ト丑市見て、）

丑市　いつの間にやら、素早い仕事を。

花子　そんなら、そろ〳〵。（ト兩人駕籠をかつぎ、捨ぜりふにて花道へ行きながら、）

丑市　然し女房と定めた女、

花子　三百落した、

丑市　思ひがするなら遠慮なく、尋ねて來やれ原庭の、裏家住居の宵寐の丑市。（ト惣太額を押へ起上り、）

惣太　汚れた面の仕返しを。

丑市　何時なりとも。

花子　虚假な未練に。

惣太　きつと言分。（ト立ち掛り、門口の柱へ突き當り倒れる、兩人見て、）

丑市　ざまァ見やあがれ。

惣太　むゝ。（ト無念の思入。）

花子　可愛さうだねえ。

と唄、時の鐘にて花子丑市駕籠をかつぎ花道へはひる。惣太向うを見詰めて、

惣太　えゝ殘念な、よもやと思ひしあの花子、主人の顏に似たゆゑに、心盡しも水の泡、思へばく口惜しい。

ト早め模樣の合方、思入、ばたくにて以前の軍助花道より走り出て、逸散に內へはひり惣太をすかし見て、

軍助　や、こなたは山田の六郎どのか。

惣太　さういふこなたは。

軍助　こなたの舅の軍助でござる。

惣太　なに、舅どの、どうして爰へ。

軍助　樣子を話せば長いこと、奧方班女さま梅若さまのお供して、こなたを便りに來る道で、班女さまは追手に捕られ、梅若さまは情なや、人手に掛つて敢ない御最期。

惣太　やゝゝゝ、して何者が御主人を。

軍助　さあ、敵は誰と知れねども、むごたらしくも若君を締殺したる遺骸の、襟にまとひし此手拭、これが即ち敵の證據。（ト前幕の手拭を出す。）
惣太　なに、手拭が證據とな。（ト急いていふ。）
軍助　脱れぬ模樣の證據こそ、吉野櫻に忍の染出し、これが殺した敵の手掛り。
ト是れを聞き、惣太びつくりなし。
惣太　やゝ、そんなら昨夜思はずも。
軍助　や。
惣太　はて、とんだ事をしたなあ。（ト思入。）
軍助　むゝ、合點の行かぬ詞の端、昨夜といふは手掛りでも。
惣太　さあ、あるに甲斐なき眼病の、病の上とはいひながら、現在御主人、さあ、其御主人へ都鳥差上げたいが一杯に、取り得し金にてやう〳〵と、我が手に入りしお家の寶。
軍助　なに、都鳥が手に入りしとな。
惣太　如何にも是れに。（ト都鳥の箱を出す。）
軍助　おゝ、それはよくこそ手に入れた。どれ、拜見いたさうか。（ト箱の蓋を明ける、中より付茶碗出る）

や、こりや都鳥と思ひの外。

惣太　え、都鳥ではござりませぬか。

軍助　おゝ、似ても似附かぬ此の器。（ト惣太びつくりして探り見て、）

惣太　やゝゝゝ、こりや贋物、さては最前花子めが、目かいの見えぬを幸ひに、摺り替へ行きしか、やゝゝゝ、ほゝほい。（ト當惑の思入、軍助惣太を引附け、）

軍助　やい六郎、おのれはなあ／＼、色に魂奪はれて大切なる都鳥の御判まで、摺り替られしも眼病の業とはいへど主人の罰、又二つには科もない女房にいくせの苦勞をかける、報いとおのれは知らざるか。（ト惣太を突放し。）かゝりや繋がる此親まで、御供なしたる御主人を、やみ／＼人手に掛けさせし此の軍助が身の越度、せめて不忠の申譯、敵を討つた御詫と思ふ頼みのおのれが不所存ゆゑ、是非もなみだの夜半の露、蕾のまゝに散行きし、亡き若君の跡追掛け、死出三途の御供なさん、さうぢや。

ト此内軍助肌をぬぎ、一腰を抜き腹を切らうとする、此の様子を惣太窺ひ縋り留め、

惣太　アコレ待つた、早まらつしやるな。

軍助　どうで生きては居られぬ身體、命捨てるは身の言譯、留だていたすな。

惣太　いや／＼、こなたは殺させぬ。

軍助　えゝ放せといつたら放さぬか。

ト合方早めて軍助死なうとするを惣太留める立廻りの内、あやまつて軍助の肩先を切り下げる、これにてアッといふを惣太抱留め、

惣太　えゝ聞分のねえ。やゝ、こりや肩先に滴る血汐。（ト軍助苦しき思入にて。）

軍助　深手を負うたは身の幸ひ。

惣太　すりや、あやまつて、やゝゝゝ。

トびつくりなしてどうとなる。これにて軍助つか／＼と門口の井戸の側へ行く。惣太探り見て、

惣太　こりや舅どのには。

軍助　南無阿彌陀佛。（ト軍助井戸へ飛び込む、どんと水の音。惣太おどろき、）

惣太　やゝゝゝ、舅どのには。

ト探り／＼駈寄り、はね釣瓶の竿へ手を掛ける、是れにて釣瓶づる／＼と下りる、惣太びつくりして井戸側へきつと踏みかけ思入、本釣鐘誂への合方。

如何なる前世の報いにてか、武運拙なき我が身の上、若君といひ舅まで非業の最期も業病ゆゑ、

その天罰にて手に入りし都鳥まで摺り替へられ、かくまで重なる不忠の汚名、こりやもう生きては居られぬわえ。

ト惣太思入、探り〳〵内へはひり、足にさはる刀を取る、此内上手屋體より、お梶苦痛を隱す思入にて這ひ出て、惣太に縋り付き、

お梶　もしこちの人、まあ〳〵待つて下さんせ。

惣太　そちは女房か面目ない、放して、殺してくれ〳〵。

お梶　いえ〳〵放さぬ惣太どの、樣子は殘らず聞きました、今お前が腹切つたら若君を殺したる其言譯は立つにもせよ、松若さまの御行方尋ね、最前取られし都鳥の印を取り得て、御家の再興なさらずば、お前の武士が立つまいぞえ。

惣太　さゝ、其詞は尤もながら、此ほどよりの内腎の難病、とても開かぬ我が運命、それぢやによつて。

ト又死なうとするを、やう〳〵留めて苦痛を隱す思入。

お梶　さゝ、尤もでござんすが、まあとつくりと氣を鎭めて下さんせ。(ト無理に脇差を取つて、)其お前の眼病を卽座に直す良藥は、吉田のお家に傳はりしと最前父さんの委しい話し、其妙藥に今一種混じ合せし此藥、どうぞ呑んで下さんせいなあ。(ト銚子を出す。)

惣太　すりや是れが、眼病平癒の一藥とな、これも偏に舅の情。

お梶　さゝ、少しも早う。

ト早め模樣の合方になり、お梶肌を脱ぐ、乳の下白布にて卷き居る、お梶茶碗へ我が血をしぼり、以前の藥を是れへ入れて、

惣太　此藥にて本復なし、恨み重なるあの花子、丑右衛門とやらが住居を尋ね、都鳥の印を取返し、武士道立てゝ下さんせ。（トこれにて惣太藥を吞み、）

惣太　實に尤も、眼病平癒なすならば遺恨を仕返し都鳥、やはか取り得で置くべきか。

ト薄ドロ〳〵。きつと思入あつて、惣太むゝと放心する。お梶見て、

お梶　あゝ嬉しや、藥の效驗り此放心。（ト此時以前の茂吉奥より窺ひ出て、）

茂吉　始終の樣子は皆聞いた、梅若殺しの忍ぶの惣太、代官所へ引立て褒美にする、うしやあがれ。

ト惣太へ掛る、ドロ〳〵になり惣太むつくと起き、茂吉を立廻つて當てる。これにてお梶苦痛の體にてがつくりとなる、惣太見て、

惣太　やゝ、女房お梶が苦痛の樣子、心を慥に、これ女房。（ト抱起す、お梶目を開き惣太の顏を見て、）

お梶　こちの人、わたしの苦痛が見えますか。

惣太　おゝ見えるとも〳〵。（ト惣太びつくり心附き、）やゝゝゝゝ、いつの間にやら兩眼明らか、空なる星まで手に取る如く。やゝゝゝ、こりやどうぢや。

お梶　それぞ祕法の一藥に、今一いろは女の乳の下の、血汐を混じて呑む時は、忽ち眼病平癒なすと、聞きたるゆゑに自害して、藥に合せしわたしの血汐。

ト肌を脱ぐ、巻きたる白布に血附きゐる。惣太見て、

惣太　やゝ、そんならすゝめて呑ませしは、藥に合せしそちが血汐、その貞節にて内翳の病、忽ち平癒なしたるか、忝ない。

ト此以前より十右衛門下手より出で、門口に窺ひ居て、此時門口を明けて、

十右　委細の様子は皆聞いた、天晴貞女の妹お梶。（ト言ひながら内へはひる。）

惣太　や、こなたは葛飾十右衛門どの。

お梶　そんならお前が、日頃尋ねし、

十右　幼ない時に別れたる、そちが兄の十太郎だ。

お梶　兄さんでござんしたか、逢ひたかつた〳〵わいな。（ト縋つて思入。）

十右　おゝ尤も、都方より此東へ移り來りし夫婦連れ、若しや妹夫婦かと心に掛れど養子の身の上、最

前來りし其時に惣太の女房お梶といふは、幼ない時に別れたる妹と知れど他人向き、歸る途中の胸騷ぎ、心得がたく裏道より忍んで聞きたる委細の樣子、不便な最期であつたなあ。

お梶　そんならお前は日頃尋ねし、兄さんでござんしたか、えゝ、お懷かしうござんすわいな。

惣太　さては最前のあの金も、妹に繋がる六郎に、貢ぎの爲であつたるか。

十右　友達仲間で吉原通ひ、ふつと見染めたあの花子、さまざま口說けど得心せず、身請をすれば我が自由と、金の工面の戾り道、通り掛つた隅田堤、何か樣子は闇の夜に爭ふ中へ行き當り、思はず手に入る百兩で花子が身請けと來て見れば、間夫の惣太が女房はお梶と聞いた其時に、側に落ちたる簪は心覺えの母の紋、さては忍ぶの惣太といふは、山田の次男六郎どの、連れ添ふ女房は妹と知つたるゆゑに快く、無心の金を貸したるも、繫がる緣のこなたゆゑ。

惣太　そんなら昨夜の暗まぎれ、取つたる金は二百兩、引合ふはづみに失ふ百兩。

十右　其片割れの金とも知らず、拾つて來たも不思議の緣。

惣太　それも寶の都鳥、又二つには御主人の顏によく似たあの花子、身請がしたいばつかりに、主人と知らぬ出來心、殺して取つた其金で、花子が身請け都鳥、折角手には入りながら以前の亭主が來た人局、摺替へられたも主人の罰。

お梶　其の言譯に情なや、父さんまでが非業の最期、お前の惡名雪がん爲、眼病平癒なしたる上は。

惣太　最前聞いたる原庭の、二人が家へ忍び行き。

十右　寶を取り得てさつきの仕返し。

惣太　とはいへ、女房が今際の別れ。

十右　未練殘さず、

惣太　是れより直に。

　ト一腰を差し門口へ出で、身ごしらへする、此時お梶苦痛の思入にて、

お梶　こちの人。（ト思入、此時以前の茂吉心附き、）

茂吉　われをやつちやあ。

　ト惣太へかゝる、惣太立廻つて引附ける。此時お梶落入る。十右衛門介抱する。惣太見て、

惣太　これが此世の。（ト手が弛むゆゑ、茂吉振り解いて掛る。）

十右　跡構はずと、ちつとも早く。（ト惣太立廻つて茂吉を見事に投げ退ける。）

惣太　おゝ、合點だ。

　ト曲撥になり、惣太逸散に花道へはひる。十右衛門死骸へ手を合せ、愁ひの思入にてよろしく、

ト通り神樂にてつなぎ、直に引返す。

幕

# 三幕目　原庭按摩宿の場

〔役名――忍ぶの惣太實は吉田の家臣山田の六郎、按摩宵衆の丑市、手下木の葉の峰藏、女按摩お市、傾城花子實は天狗小僧霧太郎其他。〕

（按摩宿の場）――本舞臺三間常足の二重、向ふ交張り襖の押入、眞中暖簾口、鼠壁、下の横手竹格子の窓、上手一間反故張りの障子屋體。下手板塀、登り木の松、卒塔婆垣、いつもの所門口、導引揉療治宵衆の丑市といふ掛札、二重よき所に炬燵を置き、舞臺に以前の丑市燗德利酒肴を並べ、△の長屋女房、○合長屋の者にて酒宴をして居る、お市島田鬘瞽女にて三味線を彈き、□合長屋の者にて踊つて居る、總て原庭按摩宿の體、通り神樂、おけさの唄にて幕明く。

丑市　こう〳〵い、加減に踊らツし、騷々しくて酒が天窓へのぼつてならねえ。

△　これさ、丑市さんがやかましいと言ひなさるから、もう踊りは止めにして酒をお上りよ。

□　それでもわしやあ、踊りたくツてならねえ。

○　わしも此間三月しばりで、をどりを取られたが、をどりには懲り〳〵した。

丑市　これお市や、いかに瞽女ぢやといつて、三味線ばかり彈かずとも、早く鯉をこしらへねえ。

お市　それでも皆さんが、酌をしろの三味線を彈けのと言ひなさるから、わたしもつい浮れこんだのさ。

丑市　早く鯉をこしらへろ、肴は何もないわ。

お市　あい〱、そんならこしらへませうよ。（トお市下手へ來り、爼板の上にある鯉をこしらへる。）

□　何だえ、鯉をこしらへて喰せるのか、止しなさればいゝのに。

お市　何さ、此鯉は買つたのぢやあないわね、昨夜の雨に割下水で取れたといつて、そこに居なさる甚助さんが持つて來てくんなすつたのさ。

○　今朝四つ手を掛けたらば、二本引ツかゝつたから、丑市さんに一本進上したのよ。

丑市　今鯉が出來るから、みんなゆつくり呑まつしやい。

△　有難うございます、それはさうと、新米のお上さんは何をしておいでだ。若し新まいのお上さん、お上さん。（トやはりおけさの合方、奥より花子以前の褞袍裝にて手拭を冠り、煙管を持ち出て、）

花子　どなたもお構ひ申しません、今髪を結んで手が汚れて居りますから、わたしに構はず、たんと上つて下さいまし。

□　もう〱さつきから、お辭儀なしにやらかしました、わたしやあお辭儀と土用干は斷ちものでご

ざいます。
花子　まことに氣さくなお方だね。
○　左樣なら仰せに隨つて、もう一つちやうだい鏡立てとやりませう。
お市　大層新らしい洒落だの。（ト此内皆々よろしく酒宴あつて、四つの鐘鳴る）
□　さあ〳〵もう四つだ、もうい〻加減に歸らうぢやあねえか。
○　さうだ〳〵、もうお暇としようぢやないか。
△　これさお前方、祝言の場所でお暇だの、歸るのといふものがあるものかね。
□　さうだ〳〵、そんなら目出度く開きませうよ。
丑市　まあお前方、い〻ぢやあねえか。
花子　今お肴が出來ますわな。
△　いえ〳〵、もう大層御馳走になりました。
○　そんなら一緒に、連れ立つて行きませう。
□　あ〻、もうちつと踊らせてくれ〻ばい〻にな。
○　これさ、無駄を言はずと。

三人　お開き〱。（ト三人門口へ出て、）是れは大きに、おやかましうござりました。

丑市　靜かに行かつしやいまし。（ト通り神樂になり、三人わや〱言ひながら下手へはひる。）あゝ騷々しい奴等だ、やう〱歸りやあがつた。（ト丑市目を明いて、）是れから目を明いて、ゆつくり呑み直さう。これお市、まだ鯉は出來ねえか。

お市　それでもお前、出刄庖刀が錆び切つて居るから、そんなに急にやあ出來ないよ。

丑市　埒のあかない奴だ、早くしろ。

お市　肴がなくても、お前はそんな美くしい女中を連れて來て嬉しからうが、わつちやあ腹が立つて腹が立つてならないよ。

丑市　こいつが〱、言はせて置けば、さま〲な御託を吐きやがる、もう了簡が。

ト立ちかゝるを花子留めて、

花子　これさ〱、そんなに邪慳にいひなさんな、今まで女房代りにした報いだわな。こう其鯉は、わつちがこしらへようよ。

丑市　何さ、うつちやつて置くがいゝ、ほえる奴ぢやあねえわ。（ト花子お市の側へ來て庖刀を見て、）

花子　おや〱、庖刀が錆びきつて居る。これで魚がこしらへられるものかな。

お市　庖刀さへ切れりやあ、わつちにも出來るけれど、これだから手間が取れらあね、どうでわつちがする事はお氣にやあ入るまい、え丶じれつてえ。（ト擂鉢を取つて投る、丑市むつとして、）

丑市　この阿魔め、今まで置いてやるさへあるに、外聞の悪いふざけたことをぬかしやがる、きり／＼出てうしやあがれ。

お市　あい、出て行きやすから、出してやるやうに仕なさいよ。

丑市　こいつが／＼、まだ吐かしやあがるか、了簡ならねえぞ。

お市　了簡ならざあ、どうでもしな／＼。

花子　これさ靜におしな、お前も大概にしなさいな。

丑市　うつちやつて置け、こいつは仕樣がある。

お市　さあ／＼、どうともしなせえ／＼。

ト立ち掛る、丑市捨ぜりふにてお市を連れ、花道まで行き思入あつて、

丑市　これお市、騷がずとおれが不斷言ひ附けて置いた通り、岩が所へ此笛を持つて行つて、な。

ト袂より按摩の笛を出してお市へ渡して囁く。

お市　そんなら、内のが。（ト大きく言ふ。）

丑市　えゝ、早く行きやあがれ、

ト態と叱り附ける、お市もわざと呟きながら花道へはひる、花子この様子をちよいと聞き、思入あつて砥石を出し出刃庖刀を磨ぐ、丑市捨ぜりふにて、内へはひりながら、

忌々しい阿魔だ、やう〳〵追出してやつた。

花子　お前の物喰ひがいゝから、後腹が病めるのだ。

丑市　違えねえ。(ト思入あつて、)こう、おぬしは何をする。

花子　庖刀が切れねえから、今磨いで居るのさ。

丑市　よせばいゝ、手を切るめえよ。(ト元の所へ来て、)あの阿魔にかゝつて、酒が冷たくなつた。(ト徳利を火鉢の土瓶に入れて、)こうお姫、鯉は明日のことにして、爰へ来て一つ呑まねえか。

花子　あい、今直に行くよ。

ト此内丑市捨ゼリフにて酒を呑むこと、花子庖刀を磨ぎしまひ、傍へ置き、丑市の側へ来る。

丑市　これお姫、ぢやあねえ、頭。

花子　あゝこれ、それを滅多に。

丑市　そりや承知さ、鄰り近所も原庭の、遠慮入らずの一軒家、心置きなく今夜はゆつくり、お前も一

つ呑まつしやりませ。（ト茶碗を出す。）

花子　わしは元より下戸なれば、そんなら半分。（ト茶碗を取る。）

丑市　さあ、酌をして進ぜませう。（ト酌をする。）

花子　あゝこれ、そんなに呑めぬといふに。（ト花子酒を呑む、丑市花子の顔を見て、）

丑市　頭、こなたが女姿で居なさる所は、どうも男と思はれねえ。

花子　今でも矢つ張り女に見えるか。

丑市　見えるの見えねえのと、まるで女だ。あゝこなたが實の女なら、わしやあ女房に持ちてえものだ。

花子　おれも女であるならば、お前の下歯になりてえのよ。

丑市　え、頭そりやほんまの事かね。

花子　なんで嘘をいふものかな。

丑市　それぢやあせめて酒を呑むうち、わしやあ女房と思つて居ます。

花子　お前がさういふ了簡なら、どれ女房氣取りで酌をしてやらう。

丑市　そいつは何より有難え。（ト花子女の思入にて酌をしながら、丑市に酒を勸める、丑市酒に醉ひたるこなしにて、）あゝ、いゝ心持に醉つたわえ。（ト丑市他愛なきこなし。）

花子　これ〳〵丑市、お前に聞きてえ事があるのだ、此頃始終懐に、巻物のやうなものを持つて居るが、ありやあ金にでもなる代物か。

丑市　むゝ、あの巻物は仔細あつて、金にも替へられねえ大事の品さ。

花子　そんな大事な品物なら、女房と思ふこのおれに、話してくれてもいゝぢやねえか。

丑市　いくら可愛いこなたでも、是ればかりは話されねえ。然し頭、魚心ありやあ水心さね。

花子　そりやあおれも承知して居るが、さうして今も懐に、やつぱり持つて居るのか。

丑市　寐た間も肌身放さねえ、大事の品は爰にあるのよ。

ト丑市懐より系圖の一巻を出して見せる、花子思入あつて、

花子　そんならそれが大事の品か、むゝ、（ト花子男の思入にて系圖へ目を附け、ちよつと氣を替へ、）明日醉ひが覺めた上、ゆつくり話して聞かしておくれ。さあ、もう一つお酌をしよう。

ト花子無理に酒を勸める、丑市引受け〳〵呑んで、

丑市　あゝ、もう呑めねえ、堪忍してくれ〳〵。（ト丑市他愛なきこなしにて横に寐る、花子思入あつて、）

花子　これさ、お前もう寐るのか。これさ〳〵。（ト搖り起せど寐入りし思入、花子思入あつて、）むゝ、よく寐たさうだ。（ト時の鐘、花子丑市の寐入りし様子を見て、）好める酒の熟醉に、横にころりと俎板の鯉

の相伴一料理、どれ、作り身に掛らうか。

トきつと思入、此時花子褞袍、手拭取れて、黒の一つ着、若衆髷好みのこしらへになり、本釣鐘、誂への合方、門口へ掛金をかけ、以前の出刃を取り、行燈の火にてとつくりと見て、そろ／＼丑市の側へ來り寐息を窺ひ、出刃にて丑市の胸元を突く、丑市ハッと苦しみ、花子の手に縋り、起上り、兩人立廻つてきつと見得、これと一時に、下手の卒塔婆垣を破り、惣太以前の裝にて窺ひ出る。丑市苦しみながら、

丑市　おのれ霧太郎め、童と思ひ不覺を取つたか、口惜しい。

花子　じたばたしても最う叶はぬ、訴人の上で褒美の金と、瞽女を遣つたも皆合點、系圖の一卷都鳥詮議の爲に變名なし、盗人夜盗の頭分天狗小僧霧太郎、今より元の吉田の嫡子松若丸が惡事の仕納め、それとも知らずうか／＼と手盛りを喰つた僞盲目、眼は闇の宵寐の丑市、系圖の一卷手渡しなし、きり／＼爰でくたばつてしまへ。

トきつと言ふ、下手の惣太是れを聞きびつくり思入あつて、松の立木へ登り窺ひながら、塀の陰へはひる、丑市無念の思入。

丑市　やあ猪口才な其一言、褒美の金に舊惡を脱れんものと思ひの外、うぬが手段にやみ／＼と、假令

花子　深手を負うたりとも、系圖の一卷、やはかおのれに渡さうか。
何を小癪な。

ト是れより誂への鳴物になり、丑市有合ふ物を取り、花子へ打附け、二枚折りの屛風、蒲團などを枷に兩人立廻りよろしくあつて、トヾ花子丑市を切り下げ蒲團をかぶせ止めを刺し、出刄を拭ひ、花子懷より一卷を出し懷中する、此時上手屋體の障子を明け、以前の手下の一、二出て、

兩人　お頭、霧太郎どの。

花子　これ。（ト思入れ時の鐘、手下の一誂への一腰を花子へ渡す。）

手一　かねてこなたの手段の通り、

手二　系圖の一卷手に入りましたか。

花子　都鳥といひ系圖まで、首尾よく我が手に入る上は。これ。（ト兩人へ囁く。）

兩人　そんなら此家を、

花子　ひそかに〳〵。

ト兩人門口を明け出ようとする、此時下手横窓の格子を毀し、惣太二重へ出來り、兩人を支へ、ちよつと立廻つて兩人を投げ退け、門口をしやんとしめる。花子是れを見て、兩人きつと見得、誂への合方。

花子　や、そちは正しく。
惣太　浮名の立つた忍ぶの惣太、よも見忘れはせまいがの。
花子　ほんに矢つ張り惣太どの。
手一　案内もせず、
手二　何しに爰へ、
惣太　返して下せえ。
花子　何と。
惣太　男か女かしらばけの、いゝ花子が手切れの都鳥、きり〳〵こつちへ返して下せえ。
花子　最前あれ程しつかりと、手渡しした都鳥。
惣太　いゝや、渡した品は眞赤な贋物、まことの品が貰ひたい。（ト花子惣太の顔を見て、）
花子　やゝ、そんならそちが眼病は。
惣太　男が情、女房が、其貞節にて忽ち平癒。
花子　治りがたなき眼病の、平癒せしとは優曇華の、
手一　花の廓で出逢ひし惣太、かねて頭が望みの品、われが持つたる都鳥、取得ん爲の色仕掛。

手二　世にも稀なる三足の蟇の油を酒に入れ、呑ませしゆゑの明盲目、

惣太　すりや眼病もおのれが業、恨み重なる騙りの花子、俗姓明かして都鳥我に渡して尋常に、忍ぶの惣太が恨みの刃、首さしのべて覺悟なせ。（トきつといふ。）

花子　傍痛き汝が一言、脆き命を春風の燈火へ飛び込む夜の蝶、不便ながらも刀の錆だぞ。

惣太　何を小癪な。

花子　兩人ぬかるな。

兩人　野郎め觀念。

ト誂への鳴物になり、兩人切つて掛ろ、惣太拔き合せ立廻りよろしくあつて、兩人を切り下げろ、花子一腰を拔き切つて行き、兩人立廻りよろしくあつて、トゞ花子惣太を一刀切る。

惣太　やれ待ちたまへ、松若樣。

花子　我が實名を知つたるそちは、

惣太　吉田の御家來山田の六郎。

花子　その六郎が何ゆゑに、我に刃向ふ所存は如何に、

惣太　あなたのお手に掛らん爲。

花子　なんと。

惣太　御不審は御尤も、命を捨つる六郎が末期の際にこの身の言譯、一通りお聞き下され。

ト刀を腹へ突き立てる。

花子　や、何ゆゑあつて此生害、心をたしかに、これ六郎。

ト介抱する、惣太苦しき思入、竹笛入りの合方になり。

惣太　今更申すも面目なく、吉田の御家に御譜代の御恩は束の間忘れねど、若氣のあやまり色に耽り、腰元梶野との不義顯はれ、縛り首にもなるべきを班女御前のお情にて、命助かり御追放、夫婦諸共東へ下り、知邊求めて朝夕に細き煙りの隅田堤、風の便りに承はれば主人の御最期館の沒落、松若様にはお行衛知れず、御家の系圖二つには都鳥の印も紛失、南無三寶一大事、何卒二品尋ね出し松若様の御行方尋ね、お手渡しなさんものと詮議の爲の廓通ひ、明の初春仲の町初道中の傾城花子、松若様の畫姿に寸分違はぬ生寫し、是れ幸ひと客となり窺ひ見れば男嫌ひ、合點行かずと思ふうち尋ね求めし都鳥、價の金の調達に心を碎く闇紛れ、手にさはりたる金財布、主人と知らぬ出來心、叫ぶ聲音を止めんと人目を忍ぶの手拭に、力任せの手が廻り、梅若様には御落命、それとも知らず持ち歸り都鳥の價に代へ、やう／＼手には入つたれど、又候その場で摺替へしあ

なたの實否を糺さんと忍び來りし裏傳ひ、樣子を聞けば松若樣、お手に掛らん覺悟の某、主人の罰の竹鋸一引きひいて松若樣、梅若樣へこの首を、お手向けなされて下さりませ。

ト思入にていふ。花子思入あつて、

花子 ほゝお、聞けば聞くほど不便の其方、忠臣かへつて仇となる夢の浮世のこの對面、吉田の嫡子と生れながら繼母の義理に家出なし、天狗の所爲と僞りて霧太郎と變名なし、富みたる家へ盜賊夜盜、またある時は浮れ女と姿を替しも紛失の、寶の二品詮議の爲、千辛萬苦の甲斐あつて、系圖の一巻都鳥、手に入つたるもそちが忠義。

惣太 はゝツ、有難き其お詞、如何なればこそかほどまで、吉田の御家の主從は、

花子 世に淺ましき盜賊夜盜、

惣太 例少なき主殺し、

花子 多くの者の人口も、

惣太 思ひ廻せば廻すほど、

花子 是非もなき世の、

兩人 成り行きぢやなあ。（ト兩人手を取りかはし思入）

惣太　さあ、片時も早く我が首討ち、梅若樣への御追福。

花子　とはいへ、可惜忠義の武夫。

惣太　其お詞が未來の土產。

花子　苦痛させるも不便の至り、いでや介錯。（ト花子刀を拔き後へ廻る）

惣太　南無阿彌陀佛。

花子　えい、（ト惣太の首を打つ、是れをキツカケにて揚幕にて早太鼓を打つ、花子思入、舞臺にても早太鼓、所々にて拍子木を打つ、）俄の物音、もしや此身の。

ト花子刀を納め、惣太の死骸を屏風にて隱す、ドン／＼にて花道より以前の手下丈六走り出來り、直に內へはひり、

丈六　もし／＼頭、どこのどいつが訴人をしたか、此原庭の四方八方、たしかにこなたを捕手の人數、もう／＼とても叶はぬ／＼、屋根傳ひに迯げさつしやい／＼。

花子　えゝ、やかましい靜にしろ。

丈六　いやさ、落附かつしやるも事による、早く迯げさつしやい／＼。

花子　えゝ、狼狽るな、奥に飯櫃があるだらう、膳ごしらへに茶　沸して置き、手前は早くふけろ／＼。

丈六　えゝ頭、お前飯どころぢやあるまいぜ。

花子　えゝ、きり／＼と行けといふに。

丈六　あゝい。

ト始終ドン／＼丈六奥へ行かうとする、花子「これ」と呼び留め、下手にある手桶、盥を持つて來いといふ思入、丈六顫へ／＼持つて來る、花子静に手に附きたる糊紅を洗ひ、もうよい行けといふ思入、丈六二品を片附け、顫へ／＼奥へはひる。花道より四人黒四天捕手のこしらへ、木の葉の峰藏筒ッぽう達附、盗賊のこしらへ、是れへ繩を掛け三人黒四天捕手にて附添ひ出來り、

捕一　こりや、盗賊霧太郎の忍び居る宅は何れだ。

峰藏　へい、向うの小家でござります。

捕二　只今申し附けた通り、窃に案内いたせ。

峰藏　畏りました。（ト右の鳴物にて皆々舞臺へ來り、囁き合ひ、峰藏の繩を解き案内しろと思入する、峰藏心得門口へ來り、）おい／＼、ちよつと明けてくんなせえ／＼。（ト門口を叩く。）

花子　誰だ／＼。

峰藏　おれだ／＼、木の葉だ／＼。（ト顫へて言ふ。）

花子　むゝ、峰藏か。

ト花子門口をガラリと明ける、峰藏よろ〳〵と内へはひる。捕手六人、ヤと十手を構へる、花子じろりと見て門口をぴつしやりしめる、峰藏ぶる〳〵顫へて早く逃げろ〳〵と思入する。

いゝや〳〵狼狽るな、奥に膳立てがしてある筈だ、茶も沸いて居るから早く持つて來い。

峰藏　頭、お前この中で飯を喰ふのか。

花子　早く持つて來いといふに。

峰藏　肚胸のいゝ人だなう。

トドン〳〵よろしく、此内捕手六人囁き合ひ一人門口へ殘り、五人は登り松を傳ひ裏手へ忍びはひる。此内峰藏奥へはひる、花子身ごしらへする。此時上手屋體下手の横窓、暖簾口、門口所々より捕手五人出來り。

五人　捕つた。

ト一時に顔を出す、花子じろりと見る、是れにて五人ともちよつと隱れる、花子二重へ上り思入あつて一腰を前の欄間へ隱し、帯をしめ直さうとする、捕手一人暖簾口より出で、十手にて後より花子の胸をしめる、これにて花子炬燵櫓へ腰を掛け、帯をしめながらきつと見得、これより門附ごうむねの

三味線へどん〳〵を冠せ、かすめて迷兒の鉦太鼓の入りし鳴物になり、皆々捕つたと出る、炬燵櫓を退けて一人出で花子六人を相手に立廻り、よき程に奥より峰藏、飯櫃膳椀土瓶を持ち出で、椀へ飯を盛り花子の前へ膳を直す、花子飯を喰ひながら捕物の立廻りよろしく、皆々を花子投げのけると、峰藏これを一人々々門口へ引出すことよろしくあつて、

花子　茶をくれろ。

峰藏　茶か、合點だ。（ト峰藏土瓶を取つて來る、此内捕手一人心附き、）

捕手　捕つた。

トかゝるを花子これを捻ぢ伏せながら、片手に椀を出すを木の頭、峰藏顫へながら茶をつぐ、門口の捕手皆々心附き、十手を構へる。花子肩にて笑ふ。是れをキザミ、右の鳴物を早めてよろしく、

ひやうし　幕

忍ぶの惣太（終り）

# 夢寐言雨夜怪談

蒙御贔屓様御影春狂言九十日余興行御禮

再御好に御家世話綴合せし發端は不動院の伯父殺し跡を隠して白菊が女姿に右衛門佐現たわいも内心は野浦が惡事を見出す放埒是荒川が計略にてさとくも悟る一學に替つて主税がけなげな腹切天晴なるかな修理之助兄に劣らぬ土佐畫の譽師匠の御蔭太々講其の寄金を失て何と正直清兵衛が難儀重なる故主の武太夫盗の汚名に身を沈むお梅の心条之助放れぬ中のお蓮孫三は誰しも色と夕立に影さへ見えぬ星合堤久七お瀧が非道の刄に一念殘る幽靈の告に敵も顯れて名乘れば兄よ妹のおしげが縁に幸八が忠孝二見が助太刀に本望遂し花菖蒲世界も三組絢交て打寄り祝皐月の榮

敵討噂古市

『正直清兵衛』は安政四年五月、作者四十二歳の時市村座に書卸された。一番目狂言としての御家騒動となひまぜになつてゐる原作通りに輯錄した。小團次と默阿彌との結託時代に於ける代表作の一つである。「村井長庵」に於て毒惡なる長庵と、篤實なる久八とに扮して演じ分けたるが如く、この作に於て小團次は、正直清兵衛と毒婦お瀧に扮して共に成功したと傳へられてゐる。全篇中に於て星合堤の非人小屋、清兵衛殺しの一幕は眼目でもあり出色の出來と言つてよく、小團次が清兵衛とお瀧との二役を早變りで勤めたのが評判であつた。後年再演された時にも、いつも此の幕は興味の中心になり得たといふ。權十郎後の九世團十郎の扮した土佐修理之助が衝立へ荒波の繪を書くのは、彼れが既に畫筆に親しんでゐたからである。扉の斷りにある九十餘日を打續けたのは次に收めた「鼠小僧」のことである。

書卸し當時の役割は、市川小團次(荒川隼人、正直清兵衛、久七女房お瀧、清兵衛の亡靈)、坂東龜藏(野浦一學、井筒武太夫、番太幸八)、尾上菊五郎(白菊丸、清兵衛娘お梅、幸八女房おしげ)、坂東彦三郎(佐々木右衛門佐、井筒粂之助)、河原崎權十郎(土佐修理之助、松賀屋孫三郎)、淺尾與六(不動院の了海、庄屋作左衛門、久七)、市村羽左衛門(一學悴主税之助)、中村歌女之丞(奥方操御前、喜兵衛娘お蓮)、坂東又太郎(三木藏之進)、松本國五郎(立場の喜兵衛、非人胴六)、中村鴻藏(判人源八、與九太夫)、坂東村右衛門(奈須野支伯、輪淨[illegible]兵衛)、坂東鶴三郎(下部藤助)等。=口繪挿繪ともに龜戸豐國筆の錦繪である。

大正十三年八月　　編者識す

踊形容
外題畫盡
第二番目二幕目

# 敵討噂古市（正直清兵衛――八幕）

## 序幕

禿宿立場茶屋の場
紙屋宿脇本陣の場
高野山不動院の場

〔役名――井筒粂之助、不動院の了海、松賀屋孫三郎、輪達郷兵衛、三木蔵之進、立場の喜兵衛、井筒の下部藤助、松賀屋の抱勘吉、不動院の同宿海全、三木の下部左五平。不動院の兒白菊後に佐々木の妾かつらぎ、喜兵衛娘お蓮等。〕

（禿宿の場）――本舞臺後方淺葱幕、松並木、上の方立場茶屋、軒先に高野山護摩講中月參の掛札、竹の先へ納め手拭ひ、茶釜を据ゑ、床几二三脚その他よろしく飾り、下の方に紀州高野山道禿宿と記したる傍示杭。爰に輪達郷兵衛古網笠浪人の打扮、立場の喜兵衛惡漢の打扮にてなり、下の方に雲助四人立つてなり、驛鈴入り馬士唄にて幕明く。

雲一　もしお侍樣、わつちらを見かけて、頼みがあるとおつしやりますは、

四人　何のことでござります。

喜兵　これさ、手前達もあんまりがさつぢやあねえか、譬にもいふ通り内證のこんだがのと、馬士話しぢやあお頼みの筋がおつしやりにくい。まあ靜にお聞き申すがいゝ。してお前樣のお頼みは。

鄕兵　いかさま、この中でも年配なる其方、しかと頼まれてくれるぢやまで。

喜兵　そりやもう田から行くも畦から行くも身すぎ世すぎ、丸印になることなら、命を限に頼まれませう。

鄕兵　早速の承知忝ない。骨は盜まぬ褒美の印、これが手附ぢや、取つておきやれ。

ト紙にひねつて金をやる、喜兵衞取つて思入、皆々これを見て悅び、

皆々　有難うござります。

喜兵　なるほど、お武家樣といふものは、お堅いものだ。さうしてお頼みとおつしやりまするは。

鄕兵　その頼みと申すは別儀でない、此度近江の國佐々木の家中井筒条之助と申す、年齡のころ二十四五なる靑二才、高野山へ奉納いたす短刀を所持なす故、これへ參る途次、それと見たなら其方どもが申合せて喧嘩をしかけ、どさくさ紛れの折を窺ひ、彼れが所持なす短刀を何の苦もなく奪ひとらば、先づ条之助は役目の越度、輕うてお暇重うて切腹、この計略の圖を外さず、首尾成る上は恩賞は望みに任す、何と仕果せてはくれまいか。

雲一　そんな事なら、大の得手物、
雲二　元手いらずの摑み取り、
雲三　わしがはうぢやお熊鷹眼、
雲四　ふくろだゝきにぶッくぢき、
喜兵　首尾よくやつてあなたの望みを、わしらがきつと、
皆々　かなへませう。
鄕兵　それは滿足、然らば外に申し談ずる一儀もあれば、
四人　そこらで一杯ひつかけて、
喜兵　もう飮みたがるか、蟒ぢやァあるめえし。
鄕兵　いや〳〵、丸飮みとはこれも吉左右、其方も同道しやれ。
喜兵　どうして〳〵、渾名は狼の喜兵衞でも、喰ふことは大不得手、わしやあこゝで頑張つてをりませう。
鄕兵　なにさま、狼が見込んだら脫れはない。
四人　そんなら旦那、

鄕兵　さ、さ來やれ。

ト鄕兵衞と雲助四人は上の方へはひる。喜兵衞は床几へ腰をかけ、紙包の金を出して、

喜兵　久しぶりでの御對面。（トにつこり思入、とこの時本鐵砲の音するにちよつとびつくりして、）眼の寄る所へ玉とやらで、鐵砲の稽古だな、びつくりした。然し今の侍もどうで一生無駄九郞、仕舞の果にや お雲助仲間、賴もしい了簡だ。（ト言ひながら煙草盆を引寄せて、）娘は何處へ行きやあがつたか店を明放しにしていつまで番をさせるのだ、のらくら何をしてゐやあがるか。とはいふものゝ、おれが餓鬼にやあ珍らしく生眞面目な生得、年頃まで茶見世へ出しておくので、世話をせうの何のとい ふ旦つくがあつても、慾得ぢやあ乘らねえ娘、どうで始終は一思ひに父が喰物、たんまりと金に しにやあ算段が惡い、あゝ子はさんだんの喰ひ拵ぎとは、うまく言つたことだなあ。

ト替つた唄になり、下手より娘お蓮手桶を提げて出來る、これが喜兵衞見て、

喜兵　これお蓮、見世を明けて何處へ行つたのだ。客人がござつても、茶釜の下にやあ螢火もねえ。

お蓮　それでも今時分は、いつもお客の途斷れ故、水を汲みに行つたのぢやわいなあ。

喜兵　その水を汲んでくれと誰が賴んだ、そんなに荒骨を折らうより、おれが言ふ事を聞いて不動院の和尙樣の梵妻になつて見ろ、絹布ぐるみでお盛物は喰ひ次第、ちつと坊主臭いのを我慢さへすり

お蓮　やあ、榮燿榮華ができるぢやあねえか。
いえ〳〵、わたしやどのやうな、貧苦な活し仕ようともだいじござんせぬ、そのやうなことはきつい嫌ひ、此後言つて下さんすな、お前に苦勞かけねばよいぢやないかいなあ。
喜兵　なに、苦勞をかけねえことがあるものか、年頃になればどうか早くと、身の片附を心配するのは親の心、いくつになつても女は三界に家なし、男に隨はにやあならねえ身の上、こゝへ來て肩でも揉め、孝行な娘だと言つて、御褒美でも貰ふまいものでもない、その錢をおれが小遣錢にして、たんまり遊ばにやあ親甲斐がねえ。二つ三つたゝいてくれ。
お蓮　あい〳〵、手隙の内たゝいて上げるわいなあ。
トお蓮喜兵衛の肩をたゝく、驛鈴入り馬士唄になり、花道より松賀屋孫三郎半合羽旅姿、勘吉手甲脚絆草鞋三尺帶にて荷を擔ぎ、孫三郎勘吉の脇差を一つにして差し、大小と見える心にて出來り、
孫三　これ勘吉、そなたの脇差を一緒にさして見ろといふから、一緒にさしたが腰が重くてならぬ、早く何處ぞへ休ましてくれ。
勘吉　向うに見ゆる茶店で休みませう。
孫三　何のことはない、かうした所は膝栗毛の彌次郎兵衛のやうだ。

勘吉　それぢやあわしが喜多八かね、こゝらで一句出さうなものだ。もし〳〵、向うの棒杭に禿宿と書いてありますぜ。
孫三　ほんに、禿宿とは珍らしいの。
勘吉　一句やりませう。
孫三　何と〳〵。
勘吉　道中に禿宿とはこれも緣、向うの茶屋で客を松賀屋、とはどうで有馬の吸ひふくべ。
孫三　あはゝゝゝ、それだけはあやまりてえ。
勘吉　こゝが旅の憂晴らし。
孫三　面白い〳〵。
ト兩人舞臺へ來り、勘吉荷物を床几の上へ載せ、孫三郎床几へかける、お蓮は喜兵衛の肩を揉むを止め、お蓮は茶を汲んで出す、喜兵衛はこれが今の頼みの侍ではないかといふ思入にて、
喜兵　もしお武家樣、あなた方はどちらでござります。
勘吉（武家の眞似をして、）なに、御主人か、御主人は侍だ。
喜兵　お國はどちらの御藩中でござります。

勘吉　さあ、國は近江の國。
喜兵　むう、お國が近江で。
勘吉　佐々木の御家中だ。
喜兵　扨こそ。
兩人　えゝ。
喜兵　いやなに、佐々木の御家中でございましたか。それでは高野山へおいでなされますのでござりますかね。
孫三　なるほど、高野山へ參詣なすもの、よく存じてござるな。
喜兵　存じなくつて、どうするものでござります。さつきからおいでなさるのを、お待ち申してをりました。はゝゝゝ、待つと言へば仲間の奴等が待つてゐよう。どれ行つて來ようか。これ娘、よくお世話を申せ。もし旦那樣、御ゆつくりなされませ。
と兩人へ思入あつて喜兵衞は上手へはひる、この内お蓮茶を汲み更へ持つて來る。
孫三　今こゝにゐた人は、お前の親御かえ。
お蓮　はい、左樣でござります。

孫三　さうとは知らず年寄を騙して、いゝ加減に悪戯をするがいゝ。

勘吉　なに、向うからお武家樣と言ふから、つい洒落にやりましたが、然し、どこの御家中と言はれて行き詰り、間に合せにお出入の、佐々木の家中とやらかしました。出たらめもこの位に行きやあ、憂晴らしになりませう。もし、（ト孫三郎の袖を引き、）美しいものぢやあござりませぬか、こんな所へおくはをしいものだ。

孫三　さうよ、隨分上の代物さ。

勘吉　おい姉さん、お茶を一ぱいくんな。

お蓮　はい／＼。（ト茶を汲んで孫三郎へ出すを、）

勘吉　おい／＼、旦那ぢやあねえ、おれだわな。

お蓮　おゆるしなさいませ。

ト又汲んで孫三郎に見惚れて茶を持つて來る、勘吉手を出さうとしてお蓮の素振を見て手をもぢ／＼する。この内茶碗を盆の上にて轉す、お蓮あわてゝ思入、孫三郎は何をするといふこなし、こゝへ上手より雲助四人出來りて、

雲一　もし、高野山まで二挺まゐりませう。

勘吉　いや、駕籠は入らねえよ。

四人　さうおつしやらずと、乘つておいでなせえ。

勘吉　この通り、足はぴん／＼してゐるから、まあ止しにしよう。

雲一　なに、酒手でようござりますから、乘つて下さりませ。

雲二　あなた方はお歴々、お供をして行かにやあ、水も呑めねえものでござります。

雲三　こう棒組、どうでもいゝから、お乘せ申すがいゝ。

雲四　それともお厭なら、途中からおひろひなさいまし。

雲一　駕籠はこつちのもの、足は二本ありやあ貰はうとは申しません。

雲二　もし、お宰領の荷物も、駕籠へ附けて行かうぢやねえか。

勘吉　(侍の眞似して、)やい／＼、最前からよいと申すに、何と心得てをる、おれが御主人を何だと思ふ、近江の國佐々木の御家中れつきとしたお侍だぞ。道中筋に粗相があつたら、わいらが身にもかゝはることだ。乘りたくば問屋より、帳面で行くのぢや。

雲一　おい／＼、親分なんだ、問屋から乘ると言ひなさるならそれもいゝとして、わしらの駕籠にやあ乘れねえと言ふのかえ、それぢやあこつちも意地づくだ、何でもかでも乘つて貰へ、乘つて貰へ。

四人　駕籠に乘らにやあ通せねえのだ。
勘吉　此奴等はいけツ太え奴等だ、旦那は兎もあれおれが了簡ならねえぞ。さあ、問屋場へ行つて宿內の法を聞かにやあおかねえぞ。
雲一　やかましいわえ、それ、佐々木の侍だ。
三人　構ふことはねえ、乘せろ〳〵。
ト立ちかゝる、上手よりも外の雲介大勢出てわや〳〵いふ孫三郎氣味の惡き思入、お蓮孫三郞を庇ふ。
皆々　姉えの知つたことぢやあねえ、退きなせえ〳〵。
雲一　此の野郞から先へたゝきしめろ。
勘吉　何だと。
ト荷物の天秤棒を振上げる。孫三郞お蓮は勘吉を留める。と花道より井筒粂之助半纏打割羽織、大小旅裝、下部藤助中間旅裝にて刀箱の包みを脊負ひ出で來り、この中へはひり、駕舁を投げのけ、孫三郞と顏を見合せ。
粂之　やあ、そちは松賀屋孫三郞ではないか。
孫三　これは思ひがけない、佐々木の御家中井筒粂之助樣。

ト皆々これを聞きて、

皆々　そんなら、そつちが粂之助か。

藤助　何と。

皆々　それ、たゝんでしまへ。

ト皆々打つてかゝる、藤助短刀を床几の上へおき雲助大勢を相手に下手へ入る。上手へ勘吉四人の雲助を追つて入る。孫三郎この中へ入り打たれてどうとなる、粂之助印籠の薬を出して口へ入れ、お蓮水を汲んで來り、兩人して介抱する。この内に鄕兵衛そつと出て刀箱を盗みて入る。孫三郎心附き、

孫三　これは〳〵恐れ多い此の御介抱、何とお禮申しませうか。

粂之　して、孫三郎には、何故この所へ。

孫三　わたくし母死去なし、その遺骨を高野山へ納めにまゐりましてござります。

粂之　それは奇特なことなれど、かてゝ加へて今の難儀、然し誠心の其方故見受くるところ聊の怪我、過まちもなければ先は重疊、某儀も主用あつて當所高野山へ發足なせしは、殿樣より御意を蒙むり御家に傳はる深綠の短刀、この劍は元來劍相惡しき業物故、高野山へ奉納いたす折柄途中にてその方に出逢ひ、唯今の危難を救ひしも、まつたく御佛の功力彌陀の利劍もかくやらん。手は

ぬことぢやわえ。

トこの内お蓮粂之助を見て思入あつて、

お蓮　憚りながらあなた様は、お山の觀音院において遊ばしました、粂之助様ではござりませぬか。

粂之　なるほど、某は觀音院方に籠りありしが、さういふそもじは何人か。

お蓮　はい、わたくしはお裁縫やお洗濯をいたしました、おさよが娘でござりまする。

粂之　なるほど、覺えあるおさよが娘。して母は達者でゐらるゝか。

お蓮　去年なくなりましてござりまする。

粂之　それは力落しで嘸困るであらう、順道なれど本意ないことぢや。

孫三　何はともあれ今の口論、この勘吉も心がゝり。

粂之　藤助も追ひかけまゐりしが、逃げるものなら許しおけばよいものを、何をいたしてをることやら。

トばた／＼になり、上下より藤助、勘吉兩人歸り來り、

勘吉　えゝひつこしのねえ雲助めが、弱みを見せて引込む間抜があるものか。

藤助　殘念なことは、一人でも取押へて參らうなら、御主人の眼の前で存分にしようもの。これは旦那樣御免なされませ。大切なるお供をいたしながら、心附かぬことでござりました。（ト床几の刀箱

粂之　たゞたづれながら、）旦那樣、これへ刀箱をおきましたが、御存じござりませぬか。なに、刀箱とは、（トびつくりしてあたりを見て、）こりや娘、これへおきし風呂敷包みの刀箱を心附かぬか。

お蓮　いえ、左樣な品は存じませぬ。

粂之　扨は今の騷動に、何者か奪ひ取りしか、ほい。

ト當惑のこなし、孫三郎、勘吉、お蓮あたりを見廻す、藤助床几の上下へいろ〳〵心遣ひのこなし。花道より三木藏之進打割半纏大小にて旅中間一人を供にして出來り、

藏之　後の宿にて手間どり、やう〳〵これへ追附きしが、半時あまりの遲れと見ゆる。（ト粂之助、藤助が面體を見て、）こりや粂之助には如何いたされしぞ、どうか心濟まぬ面色といひ、藤助まで何かと仔細のありさうに見ゆるが。

粂之　いや、ちと心配なる儀がござれどもこゝは途中、伯父者人にも始終の樣子申上ぐるでござりませう。

藏之　何は扨おき、あらましの儀を承はらうか。

粂之　某こゝへ來かゝるところ、それにをる兩人馬士體の者と口論いたし、それを見捨てゝ行過ぐれば此の身は安泰、退引ならぬはお出入の町人松賀屋孫三郎故、立入りて樣子を聞けば相手は大勢

その騷動に御劒を奪ひし曲者、後にて心附いたれど詮方なく、手がゝりとてもござらねば、猶又工風のあらんかと思案の折柄、こなた樣のおいでなれば、とくと申し談するでござりませう。

藏之　すりや深緣の短刀を、失ひしとや。

粂之　御意の通り、拙者が過失、恨むことはござらぬ仕儀、武運も末となりました。

と藤助、勘吉の兩人上下へつか〳〵と行く。

こりや〳〵藤助、いま一人は勘吉とやら、いづれへ行くぞ。

藤助　たしかに今の雲助ども、

勘吉　疑ひかゝる上からは、

藤助　引捉へて詮議の緒、

粂之　いや、追ひかけたとて惡事を企む曲者が、うか〳〵人目にかゝらうや。

兩人　それだと申して。

粂之　はて、事あらだてゝはお家の瑕瑾、竊に〳〵。

トこれにて兩人は戻る、藏之進思入あつて、

藏之　奉納致す御劒の紛失なしたる上からは、行くにも行かれず歸國もならず、某とても役儀の越度、

粂之　所存ござれば伯父者人、當宿の本陣まで御いであらば、御内々にてこなたさまへ。

藏之　むう、あの某へ。(ト思案のこなし。)

孫三　粂之助様の越度にあらず、元の起りはわたくし故、その申譯にはわたくしを。

粂之　いや〳〵、斯くなる上は定りごと、誰も求めて致す者はない、孫三郎ゆる〳〵と登山しやれ。

孫三　とはいへ、どうもこの儘では。

粂之　いや、町人の存ぜぬことぢや。さ、さ伯父者人、御同道下されい。

藏之　善惡ともに本陣まで。

藤助　藏之進様。

粂之　まづ、ござりませ。

ト唄になり、三人上手へはひる。後に孫三郎、勘吉殘りて、

孫三　通り惡魔か知らねども、相手替つて粂之助様、劍の紛失いたしたを、何で餘所眼に見てゐられう。

勘吉　本陣とあるからは、泊り合せて何かの御様子。

孫三　その上共々お力に、

勘吉　それにしても若旦那、お髮の亂れを、ついちよつと姉さんの。

お蓮　これでよければ、この櫛で撫附けて上げませう。

孫三　それでは氣の毒、わしが一人で。

お蓮　お厭であらうと、撫附けさして下さりませ。（ト櫛を取つて孫三郎の鬢を撫附ける、）油氣のないほつれ髮、このおくれ毛の屆くまで、わたしの心がせめてまあ。

勘吉　これさ姉さん、髮をとかして心まで解けて見なせえ、それこそたいへんだ。もし若旦那姉さんの親切でお髮もきれいになりました、少しも早くおいでなさりませ。

孫三　今行くわいの。

勘吉　さあ、おいでなさりませ。（ト手を持つて引立てる。）

孫三　はて、忙しない。

勘吉　もし、日足もたしか七つ頃。

孫三　はや、鐘の音をつげの櫛。

お蓮　美男かづらの旦那樣。

孫三　そんならきつと松金か。

お蓮　言葉のつや出し樂しみに。

勘吉　丁度こゝらで切元結。

孫三　勘吉行かうか。

勘吉　さあ、ござりませ。

ト唄になり、兩人は上手へはひる。お蓮後を見送りて、

お蓮　ほんに先刻はどうなることゝ案じたに、お怪我もないお二人さん、殊に旦那は誰やらによう似た目元物言ひまで、東育ちの御氣性は一目三升に縁あるお方、同じ女子に生るゝならせめて水仕の奉公でも、あなたのお家へ行きたいものぢやなあ。（トこの時足元に旅日記の落ちてあるを見つけ拾ひ取つて、）旅日記としるしあるは、もしや今のお方でないか。（ト裏返して見て、）伊勢松坂松賀屋孫三郎、おゝ孫三郎樣とは今のお方、お家は何處と思ひしに、たしかに伊勢の松坂とこの旅日記で知れたのは、戀しう思ふ念が屆き、思はず知れしは、もしや結ぶの、何は兎もあれこれがなうては嘸やお困りなさるであらう、後追つかけて、（ト行きかけ思入あつて、）もしもお目にかゝらずば、これを今のお方と思ひ、肌身放さず、（ト日記帳を抱きしめ、）えゝも、このやうな事言うてる內、もうよほど行かしやんしたらう。どれ、後追かけてお渡し申さう。

ト唄になりお蓮足早に上の方へはひる。と下手より鄕兵衞、喜兵衞、雲助皆々出來り、

喜兵　お侍樣、

皆々　うまく行きました。

鄕兵　おゝ大儀々々、そち達が働きで、首尾よく身共が手に入つた。

喜兵　それといふのもわしが差金、なんとうまいものでござりませう。

鄕兵　いや、あまりうまいとも申されぬ、そちが差金ぢやと申せど、ありや全く過失の功名、皆の者が粂之助と心得しは出入の町人、松賀屋孫三郞と申す者、

喜兵　それぢやあ、あの侍と見えましたは粂之助ではござりませぬか。それに又どうして短刀がお手に入りましたな。

鄕兵　そこが今言ふ過失の功名、そち達が孫三郞を打擲なす內來合したが粂之助、孫三郞を助けんと皆を相手に騷動なす中、身共が手に入れたのだ。

喜兵　假令間違ひにしろ、短刀がお手にさへはひつたらいゝぢやあござりませぬか。

鄕兵　それだといつて賴んだる相手を間違へし上からは、褒美の金は半減だ。それ、取つておきやれ。

ト五兩出してやる。

喜兵　もし、たつた五兩かえ。

鄕兵　不承なら止しにしやれ、達てやらうとは申さぬわい。
喜兵　呉れざあ止さう、貰ふめえ、その短刀を盜んだのも、わいらが喧嘩をしかけた故、
雲一　褒美をくれざあその代り、
雲二　その短刀を渡さつせえ。
雲三　これからさつきの侍に、
雲四　何もかも打ちまけて、
雲一　元へ返して褒美を貰はう。
喜兵　さあ、きり〳〵とその短刀、
雲一　こつちの仲間へ、
皆々　渡さつせえ。（ト皆々鄕兵衞を取卷く。）
鄕兵　あ、これ〳〵何も褒美をやらぬとは申さぬわ。何を隱さう某も元は佐々木の家來だが、惡事があつて追放され、今では長の浪々に活計に困るその所へ、古朋輩より窃の賴み、知つた仲故十兩で元直限りのこの仕事、先刻手附に三兩やり、今又五兩やる時はたつた二兩の儲だわ、それで了簡ならぬことなら、もう一兩はずまうから、どうぞこれで堪忍してくりやれ。（ト一兩出す。）

喜兵　さういふ譯を言ひなさりやあ、不承しめえものでもねえが、とてものことにもう一兩、數よく十兩貰ひませう。
鄕兵　それだといつてこれをやつては、身共ほんの無駄奉公。
喜兵　それとも厭なら短刀を、四の五の言はずと、
皆々　渡さつせえ。
鄕兵　えゝ足許を見られたか、いまいましい。それ、これで殘らず。（ト金をやる。）
喜兵　おゝたしかに受取つた。これ、みんな旦那へお禮を申せ。
皆々　有難うございます。
鄕兵　えゝ、たうとう十兩取られたか。あゝ惡いことは出來ぬものだ。
　ト唄になり、鄕兵衞舌を出して足早に上手へはひる。
皆々　これ親方、早く割をくんなせえな。
喜兵　おゝ今遣る今遣る、先づ八人に一兩づゝ、おれは胴取りだから二兩取るぞ。（ト皆々に算へてやる。）
皆々　つひに小判を見たことがねえが。
喜兵　なに、見たことがねえ。（ト思入あつて、）はて、この金はちつとをかしいわえ。

皆々　もし、贋ぢやあねえかえ。
喜兵　おゝ、こりや十日夷の贋小判だ。
皆々　そんなら今の侍に、
喜兵　一ぺい喰つたか。
皆々　いめえましい。（ト皆々小判を打ちつける。）
喜兵　それ、遠くは行くめえ、追かけろ。
皆々　合點だ。
　　ト皆々上手へ逸散にはひる。喜兵衛後の金を集めて、
喜兵　贋金とおどかしかけて、おれ一人であつたまるのだ、あゝ有難い。
　　ト金をいたゞく後へ皆々出て、雲助の一金をひつたくる、喜兵衛びつくりして、
　　やあ、これは。
雲一　仲間の者が、
皆々　あつたまるのだ。
喜兵　あゝ悪いことはしねえものだ。

卜喜兵衞べつたり下にゐる、皆々立ちかゝり、この見得時の鐘にて道具まはる。

（紙屋宿脇本陣の場）——本舞臺正面一面の襖、上手折廻しの障子屋體、下の方一間の地袋附違ひ棚、雪洞附の燭臺、煙草盆、總て本陣座敷の體。こゝに中央に三木藏之進、下の方に粂之助藤助住ひてこの道具留る。

藏之　して粂之助には、如何いたす存じ寄りぢや。

粂之　拙者の所存も別になし、大切なる短刀を途中にて奪ひ取られしは、この上もなき拙者が越度、それ故伯父者人へお願ひは、此の場に於て切腹なして相果つる存意でござれば、右の趣き上へ申し上げ、父武太夫の身の上偏にお願ひ申す。藤助には我なき後、老後の親へ介抱賴む。

藤助　そりやどのやうにも御介抱申し上げませうが、あまりそれは一途な御了簡、伯父御樣の思召ちござりませう、とくと御思案なされませ。

粂之　いや、どう思案しなほしても、死ぬよりほかに申譯があらうか。伯父者人、御苦勞ながら御介錯下されい。（卜肌を脫ぎ、切腹しようとする、これを藏之進留めて、）

藏之　いや、そりやならぬ、こりや粂之助、其の方の申すこと至極尤も、武士は斯くこそあり度きもの

ぢやが、この短刀の紛失なせしは御家を狙ふ佞人どもの仕業、我當所へ立越えしを隙あらばと附狙ひ奪ひ取りしものならん。この申譯に切腹いたさば、企みの罠にかゝるも同然、死する命を存らへて、假令腰拔未練者と後指をさゝるゝとも、紛失せし短刀を、草を分けて詮議なし差上げるが上への忠義、御家の寶といひながら劒相惡しき深緣、高野山へ納むる一口、お情厚き荒川隼人殿へ願ひなば、詮議の日延御免は必定、急く所でない、まあ〳〵待ちやれ。

粂之　こなた樣の御教訓用ひぬではなけれども、死すべき時に死なずんば死にまさる耻ありと申せば、我宿業とあきらめ、未來でお詫仕らん。（ト又刀へ手をかけるを藏之進留めて、）

藏之　これはいかな、我申す事を用ひずして、この所にて切腹なさば、元の起りは松賀屋孫三郎、斯と聞きなば町人でも、さうかとばかり見てもをるまい、一人ならず二人まであたら盛りの若者を、無慘の最期させられようか。

トこの時下手より孫三郎、勘吉出て、

孫三　藏之進樣の仰せの通り、粂之助樣が御切腹なされましては、武太夫樣への申譯に私共も死ぬるやう、覺悟いたしてをります。

藏之　おゝさこそあらん、さすればそち一人では事濟まぬ、町人の孫三郎が命を捨てなば某とて、安閑

と見てはゐられぬ。假令其の場におらずとも、添役を蒙むるからは命はなきもの、藤助とて見てはをられまい。

藤助　義によつて相果つるは武士の慣ひ、追腹は覺悟の前。

勘吉　さうなる時は町家の者でも後へは退かぬ、腹が切れにやあ石垣へ頭を打ちつけ海川へ飛込んでも

三木　さゝ、それぢやによつて粂之助、一旦心取りなほし、双方まつたき思案の致しやれ、急いて狂氣の汚名を受けなば、不孝の罪はのがれぬぞ。

粂之　若氣の一途に迫りしも、伯父者人の情の教へ、忠孝二つと日月の光りは暫時覆ふとも、やがてぞ晴るゝこの身の潔白。

藏之　その存念を聞く上は、身共も安堵いたしたわえ。

孫三　あなたばかりか私ども、生きる心地は毛頭なし。

藤助　枯木に水をくれたより、しやんと納まるこの場の仕儀。

勘吉　やう〳〵重荷をおろしたやうだ。

粂之　この上は孫三郎、心にかけて詮議を賴む。

孫三　等閑ならぬ一大事、手筋もとめて御兩所へ、申上ぐるでござりませう。

藏之　二人の者は遠慮に及ばぬ、勝手次第に休息いたしやれ。

孫三　左様ならば、これでお別れ、

兩人　申しませう。（ト下の方へはひる。）

藤助　何につけても苦の世界、納める劒は世の中に、ほんの寶の持ちぐされ、それを好んでむさぼるのみか、旦那の命も風の燈火、あぶないとこでござりました。

粂之　いま〳〵思へば死を以て、言譯なすも犬死同然。

藏之　さればこそ、命は萬寶の隨一、命に替ゆる寶はなし。

粂之　命を以て寶の詮議。

藏之　尋ね求むる深緣。

粂之　劒相惡しき短刀も。

藏之　その身の錆と引受けて。

藤助　下郎もとも〳〵。

粂之　こりや、（ト押へて、）もし。

ト藏之進へ囁く思入、時の鐘にてこの道具廻る。

（不動院の場）──本舞臺一面の岩組、前の方に梢を見せ、上手に白布をおろせし古びたる藁葺の不動堂、松の立木、岩に熊笹の生ひ茂りし體、山おろしカッコ笛にて道具留る。と、花道より不動院の海全同宿の打扮にて、松明を灯して先に立ち、不動院の了海鼠の衣にて更けたる打扮にて、手に獨鈷を持ち、以前の郷兵衛附添ひ出で來り、

海全　深夜と申し、山氣朦朧と覆ひ重なれば、お客人お氣をつけてござりませ。

郷兵　はあ、心得申した、夜中の案内御大儀千萬、まつた了海和尚には別して御苦勞にあづかり、輪違郷兵衛おろそかには存じ申さぬ。

了海　その御挨拶痛み入る、然し人家を離れし山上ならでは、密法修行はならざること、先づあれなる不動堂まで御同道いたし申さん。

郷兵　いかさま、他聞をはゞかる一大事、こゝでは洩るゝ氣遣ひなし。

海全　さあ、御案内いたしませう。（ト三人本舞臺へ來る。）

了海　夜陰といひ、嶮しき山坂、まづゆつくりと休息めされい。

郷兵　いや、拙者は達者な身體故、さのみ苦勞にも存ぜぬが、貴僧には御病氣にて久しく引籠りなられし由、わけて御苦勞千萬に存ずる。

了海　いかにも貴殿の仰せの如く、病後のせゐかよほど大儀。いやそれはともあれ鄕兵衞殿には、他聞の憂へござらねば、何なりと仰せられい。

鄕兵　豫て野浦一學殿、佐々木の家國横領なさんと、一味を語らふ窃の企、すでに貴僧に先達調伏の祈念を頼み、大殿定朝を片附けたれば、猶もこの上丹誠を凝らし、若殿左衞門佐を調伏なし下さるやう、一學殿より窃の頼み、最早若殿さへ片附くれば心のまゝに大望成就。祕法の祈念をお頼み申す。

了海　委細承知仕る、改め申すに及ばねど、愚僧も元は佐々木の家來、お納戸金を虛妄せし越度によつて永の暇、身のたゝずみに困りし故、剃髮なして佛法修行、多年の功に調伏の祕法を學びしこの了海、事成る上は還俗なし、再び佐々木の家にかへり、念珠を捨てゝ武士の列、國家の政務を預からん。

海全　愚僧もとも〲立身出世、肉食妻帶心のまゝ。

鄕兵　その儀は勿論、それと申すも貴僧の行法にて、左衞門佐の命を斷つやう、祕法の祈念をお頼み申す。

了海　この了海が行力にて、不動尊を祈りなば、感應あるは知れたこと。

鄕兵　何卒貴僧の行力にて、

了海　現世の利益見せ申さん。（ト立上る。この時緞張の内にて白菊丸の聲にて、）

白菊　その願ひ、かなふまい。

三人　やあ。（トびつくりして、）かなはぬとは、何奴なるぞ。

白菊　誰でもない、不動明王の化身なるぞ。

　　　ト緞張を引切ろ、内に白菊丸、稚髷、さしぬき一本差、後に肌脱ぎになる打扮にてゐる。

了海　そちや白菊丸ではないか。

海全　あまりのことにぎよつとしたわえ。

鄕兵　他聞をはゞかる一大事、必ずともに他言致すな、しかと申聞かしたぞ。

了海　この事成就なす時は了海始めそちまでも、とも〳〵立身出世なるわ。

白菊　いや、立身は邪事、不義の富貴は望みませぬ。

海全　なんと。

白菊　伯父者人。（トつか〳〵と出て來り、了海の傍へ來て、）え、こなた樣はなあ。いかなる天魔の所爲なる
か、人を助くる出家の身にて利慾に心奪はれて、人を呪ひ調伏なし、假令立身出世なすとも、そ
の身の末が榮えませうか。殊にこなたは佐々木の家臣余綿彈正とて、高祿を頂戴なせし御恩を忘

れ、お納戸金を虚妄なし、その科故に我父も共に御家を御追放、それを氣病に間もなく病死、又こなたは剃髪なし先非を悔いて高野へ上り、出家堅固に在すと聞き、我身も五歳の時登山なして小姓役、二君に仕へずあつぱれな御所存なりと思ひのほか、惡人野浦に荷擔なし恩を仇にて調伏修行、取りもなほさず主殺しの惡名受け、此世はおろか未來まで、無間地獄の苦しみを、恐ろしいと思ひなば、惡事を留つて下さりませ。

了海　若輩者の身を以て、異見がましいその繰言、こりやよく聞けよ、この世で惡事をなしたとて、未來で苦艱を受けるとは、愚人を騙す佛の方便、あるかないか知れもせぬ極樂の樂しみより、この世で榮耀をしてこそ果報、その方なぞは井の中の蛙、口故その身を亡す奴、無益なことぢや控へてをれ。

白菊　えゝ情ない伯父者人、かほど御異見申しても、思ひとゞまる御所存はござらぬか。

了海　聞く耳ないわえ。

白菊　すりや、いかやうに申しても。

了海　くどいわえ。

白菊　是非に及ばぬ、この通り佐々木へ注進、調伏惡事を訴へませうか。それ。

了海　こりや待て。
白菊　お留めなさるは、思ひとまりめさるゝか。
了海　さ、それは。
白菊　惡事の段々言上せうか。
了海　さあ、
白菊　さあ、
兩人　さあ〱〱。
白菊　御返答が承はりたい。（トこれにて了海思入あつて、）
了海　親身の異見五臟に染み、後とも言はず、唯今これにて改心なさん
白菊　すりや、思ひとまつて下さるか。
了海　あゝ、すつりぱりと思ひ切る。輪達氏にも調伏は、思ひ切つてしまはつしやれ。
鄕兵　でも、某は野浦どのへ對しても。
了海　はて、變心なせば行力も忽ちくぢけて行ひ難し、障礙を拂ふは劍の威德、さ、それぢやによつて、思ひきつてしまはつしやれ。（ト鄕兵衛に白菊丸を切れといふ思入し）

郷兵　なるほど、思ひ切るでござる。

ト考へ込んで、拔打に後から白菊丸に切り附ける。白菊丸身を躱して刀を打落し、直にその刀を了海にさし附ける。了海たぢ〳〵となつてきつとなる。海全それをと支へるを、ぽんと當てる。

海全　や、、柔弱非力の白菊が、日頃に變るこの體は。

白菊　豫て一つの功を立て、父の汚名を雪ぎし上再び家名を起さんと、鞍馬山にて御曹子が劍術修行の例に倣ひ、夜な〳〵これなる不動堂にて、樹木を相手に覺えし劍術、やはかおめ〳〵手に合はうや。さあ、伯父者人には心を入れ替へ、調伏修行の惡念を思ひとまつて下さりませ。

了海　いや、いツかな思ひとまらぬ、僅な金子虚妄せしを越度となして追放せし、情を知らぬ佐々木定朝、恨みこそあれ恩はない、言はゞ敵の佐々木一家、根を絶つて葉を枯らし、調伏なして腹をいるのだ。

白菊　すりや、どうあつても、思ひとゞまり下さらぬか。

了海　おゝ、翻る心はないわえ。

白菊　是非に及ばぬ。

ト郷兵衛を突退け了海を一刀切る。郷兵衛これを見てびつくりなし、短刀を持つて逸散に逃げて入る。

了海　伯父を手にかけ忠義だて、こしやくな奴の。
と獨鈷を振上げ、よろぼひながら立ちかゝる。
白菊　假令伯父でも、お主の爲めには替へられぬ。
了海　何を。
ト又切りかゝるを立廻り、トヾ了海の脇腹へ突立てる、これにてハツと苦しみ、白菊丸刀を引拔くと了海ばつたりと倒るゝ。白菊丸見て、
白菊　敵同志か伯父甥と、生れて來るも前世の因緣、許して下され伯父者人。
ト伏拜む。この時本釣鐘を打込み、海全後よりうぬと組附くを振解いて切倒し、海全見事に斬る。白菊丸短刀の糊紅を鼻紙にて拭ふ。この見得本釣鐘山おろしにてこの道具廻る。と、山棲き他の場となり、本舞臺一面の藪疊、後方黑幕、松の立木、微めたる禪の勤めにて道具留ると、こゝに以前の喜兵衞振袖と帶を抱へ立つてなり、お蓮その足を支へてゐる。
お蓮　こりや父さんには、わたしの餘所行、大事の〳〵着物と帶を、又持つて行かしやんすのか。
喜兵　先刻さる侍から二兩貰つたその金も、十兩取らうと思つたばかり、二兩の金を取られてしまひ、その意趣返しに盆の上で、毒賽を打込んで直に金を取つて來るから、ちつとの内貸してくれ。

お蓮　いえ〳〵、お前に貸して返して下さんしたことはない、折角拵へたその二品、どうぞ堪忍して下さんせ。

喜兵　えゝ、やかましい、往生して貸せといふに。

ト兩人引合ふ立廻り、よきほどに月がくれ、時の鐘凄き合方になり、正面の藪をおし分け、白菊丸窺ひ出て、喜兵衛が着物をひつたくりお蓮を突く、お蓮たぢ〳〵と下の方へ倒るゝ、白菊丸着物を持ち行きかゝる、喜兵衛それをと寄るを振拂ふ。これにてお蓮喜兵衛と心得白菊丸に縋る、白菊丸お蓮の頭をさぐり、うなづいて櫛と簪を引きとり、思入あつて、

白菊　幸ひ、これにて姿を變へ。

トこの時喜兵衛窺ひ寄り、

喜兵　うぬ、雜物を返しやあがれ。

ト又組附くを白菊丸振解いて投げ、つか〳〵と花道へ行く。喜兵衛起上り立ちかゝるをお蓮ちつと留める。白菊丸は花道にて振返り、につたりと笑ふを木の頭、兩人は向うを見送る、白菊丸は肩で笑ふ。この模樣よろしく、山おろしカケリにて、

幕

ト白菊丸思入あつて櫛をさし、着物を抱へきつと見得。鳴物にて花道へはひる。

# 二幕目

久保田村庄屋の場
觀音前居酒屋の場
雲津繩手松原の場

【役名‖百姓正直淸兵衞、庄屋作左衞門、居酒屋久七、立場の喜兵衞、松賀屋孫三郎、杉本屋彥十郎、判人源八、居酒屋の丁稚善太。喜兵衞娘お蓮、瞽女、百姓、駕舁其他。】

（庄屋内の場）‖本舞臺三間の間常足の二重、藁屋根、本緣附、正面更紗の暖簾口、上手床の間下手茶壁、用心棒・捕繩などかけあり、上の方に障子屋體、軒口に太太講の木札、下の方冠木門、建仁寺垣、總て窪田村庄屋内の體。こゝに百姓四人象股引糯袢裝にて筵を敷き煙草を喫みゐる、傍に鋤鍬あり、この模樣麥搗唄にて、幕明く。

百一　ときに皆の衆悅ばつしやれ、今日は八つ茶の小中飯に蕎麥を打つて振舞ふと、旦那樣が言はつしやつたぞよ。

百二　それは何より有難い、蕎麥と聞いては目のないわしら、御馳走になるで言ふぢやないが、この

庄屋様のやうな慈悲深いお人はない。

百三　それ故出錢課役なども、外村よりは掛りがゝらず、お下の百姓は大仕合せ、誰でも褒めぬものはない。

百四　いや、褒めると言へばこゝのお家へ、庭子のやうに出入する、こちの村の正直清兵衛、あのやうな正直者はないが、何故あれで貧乏するであらうな。

百一　金のないその替りには、假令百兩二百兩金を積んでも、買ふことならぬ美しいお梅女郎、あれがほんの子寶といふのだ。

百二　いや、又あの隣りの手習師匠、井筒武太夫様の息子殿、粂之助様もよい男ぢやな。

百三　ほんに、よい息子によい娘、隣同志は猫に鰹節。

百四　どうも、油斷のならぬことぢや。

百一　こりや若い奴等は、

四人　氣が揉めようわえ。

ト花道より百姓權十羽織着流しにて、太々講の帳を提げ、勘右衛門同じく百姓にて出來りて、

兩人　おゝ若い衆、精が出ますの。

百一　おゝ、これは權十殿に勘右衞門どのか。
兩人　庄屋樣はお內かな。
百二　あい、奥においでなされまする。
四人　何ぞ御用でござりますか。
權十　太々講の寄り金をお渡し申さうと思うて、持つて來ました。
勘右　ちよつとお呼び申して下され。
百二　あい〳〵。（ト奥へ向ひ、）旦那樣、組頭衆がござらつしやりました。
ト奥にて庄屋作左衞門の聲にて、
作左　今それへ行つて逢ひませう。（ト庄屋の打扮にて出來り、）おゝ、權十どの勘右衞門どの、ようござられた。
權十　太々講の寄り金を、
兩人　持參いたしました。
作左　それは大きに御苦勞でござつた、さあ〳〵これへござらつしやれ。
兩人　お許されて下さりませ。（ト二重へ上る。百姓衆は立上りて、）
百一　ときに皆の衆、小中飯を當にもう一精出さうではないか。

三人　それがよい〳〵。
百二　そんなら組頭衆。
四人　ゆつくりとさつしやりませ。
權十　晩に遊びに來るがよいぞや。
四人　有難うございります。（ト鋤鍬を擔ぎ下手へはひる。）
作左　前々からの例にまかせ、今日御師へ遣はさうと思ふが、して、こなた衆の方は、殘らず揃ひましたかな。
權十　はい。わたくし共の居廻りだけ、十兩お請取り下さりませ。
ト帳面を開き、此の上へ小判を十兩載せて出す。
作左　これは〳〵お世話でござつた。（ト金を請取り、懷より金の入りし財布と手紙を出して、）これで丁度五十兩揃つたれば、今から誰ぞに持たしてやらう。
勘右　組頭の仲間内で、誰ぞ參りたうござりますが、天氣都合の惡いので、植附が一時になつて、まことに忙しうござります。
權十　自由がましうござりますが、誰ぞに持たしておやり下さりませ。

作左　さあ、使はいくらもあるけれど、まさか五十兩といふ金故、めつたな者に持たしてもやられず、
勘右　誰ぞ大丈夫な使はござりませぬか。
作左　(思入あつて、)おゝある〳〵、こちの家へ來る、正直清兵衞に持たしてやらう。
權十　あの男なら大丈夫でござります、ちよつと呼びにやりませう。
作左　いや〳〵呼びにやるには及ばぬ、今日も此方へ働きに來てゐる、大方野良へ出てゞあらう。
　ト作左衞門立ちて、軒口にかけてある竹法螺を取つて吹くと、花道より清兵衞襦袢褌股引に端折り蓑にて結へ、鍬を擔ぎ出來り、
清兵　庄屋樣で何か御用があると見えて、竹法螺を吹かつしやつたが、お使ひにでも行くのか知らぬ。
　(ト言ひながら本舞臺へ來り下手へつくばひ、)へえ、何ぞ御用でござりますか。
作左　おゝ清兵衞か、そちに頼む用がある、こゝへ來やれ〳〵。
清兵　いえ〳〵、わしやあこれが勝手でござります。
權十　はて、そなたはそれが勝手であらうが、庄屋樣の御用がある。
勘右　こゝへ來いと言はゞ、來さつしやいな。
清兵　それだといつて、足が汚れてをりますものを。

勘右　洗つて上らつしやいな。

清兵　え丶面倒な、拭いておきませう。（ト草鞋を取つて足を拭き、おづ〳〵と椽の上へ上り、）して、わしへの御用とは、何でござりますな。

作左　いや、その用といふは外でもない、當窪田村で年々打つ太々講の五十兩、山田の御師爪永與九太夫の所まで持つて行くのぢやが、知つての通り植附で誰も彼も忙しい故、そちに使ひを賴むのぢや。大儀ながら行つてくりやれ。

清兵　へい〳〵、そりやもう行くのは造作もござりませぬが、大まいのその金を、わたくしが持つてまゐつても、よろしうござりませうかな。

作左　お丶よいとも〳〵、そちなれば案じはない。

清兵　さうおつしやりますけれど、わしは田地田畑もなく、吹けば飛ぶやうなものでござりますに、五十兩といふ金を。

作左　そりやもうそちが言はいでも、組頭衆も皆承知、假令貧しい暮しでも、正直といふ魂が見込ぢや。

權十　外の人が持つて行くより、こなたが行けば大きに安堵。

勘右　誰も案じるものはない、遠慮なく行つて下され。

清兵　へい／＼かしこまりました。行つてよいことなら、どこまでもまゐります。

作左　そんなら清兵衞、此の金に此の手紙を添へて、與九太夫殿に渡し、受取を取つてさへ來ればよいのぢや。（ト財布の上へ金包みと手紙を載せて出す、清兵衞取つて、）

清兵　へい／＼、こりや小判でござりますな。（ト財布の上に載せたまゝいたゞき、）取るにも足らぬ小前の者に、五十兩といふ金をお渡しなされて下さるも、わしが心の正直故、有難うござります。

權十　それもこなたが正直故。

勘右　ずゐぶん大事に持たつしやれ。

ト清兵衞は嬉しき思入にて、財布の中へ金と手紙を入れ、首へかけ懷へ入れる。

作左　いや、それに附けて清兵衞、そなたに言はねばならぬは酒のこと、いはゞ大事の使ひ故御師の所へ行て來るまで、途中で酒はならぬぞよ。

清兵　へい／＼、畏まりました。左樣ならわしは、酒を飲んではわるうござりますか。

權十　なにも酒を飲んだとて、喧嘩するといふではなし、機嫌上戸ではあるけれど、醉ふと口數が多くてならぬ。

勘右　酒さへ飲まねば、なに一つ疵のない男なれど、明けても暮れても飲みたがるが、これは清兵衞ど

の丶一つの疵ぢや。

作左　十目の見る所で誰が心も違ひませぬ。これ清兵衛、ついでながら言ひますが、ちと酒を愼むがよい、改め言ふには及ばねど、元そちは近江の國志賀の里の百姓にて、親の代には相應に暮してゐた身なれども、引續いての不仕合せに生れ故鄕を立退いで、緣でがな此の村へ知邊を賴つて來た折は僅なれども田地を買ひ今の樣ではなかつたが、扨人の落目といふものは、神佛のお力にもゆかぬものか知らぬけれど、間の惡さといふものは、やれ洪水ぢやの旱魃ちやのと、兎角不作の續いた上、賴みに思ふ女房が長煩ひでたうとう死に、後は娘と唯二人、酒でも飯まずば苦勞をば忘るゝこともなからうが、明けても飮み暮れても飮み、つひに田地も飮んでしまひ、今では此方の作男、ほんのその日を送るのみ、一年々々取る年故もうよいかげんに酒を止め、微塵積つて山と言へば、少しづゝでも金を溜めて田地をば買ひ戻し、娘に相應な聟でも取つて、樂をする算段せい、今の分で死んだなら、娘が路頭に迷ふぞよ。惡いことは言はぬ故、酒をちつと愼んだがよい。

トよろしく思入にていふ清兵衛ぢつと聞いてゐる、

清兵　旦那樣のおつしやります通り、娘のことを考へますと、うつかり酒も飮めませぬ。こりや御異見に附いて、さつぱりと止めませう。

作左　然し、好きな酒故にさつぱり止めることもなるまい、まあ一合飲むとこなら五勺、五勺の所なら二三杯を減らして飲むがよい。
清兵　はあゝ、それでは少しぐらゐは、よろしうござりませうか。
作左　よいといふではなけれども、これも一つは身體の藥、寐酒に一杯やるがよい。
清兵　それは有難うござります。
作左　然し、今日の使ひ中は、決して酒を飲むまいぞ。もし間違ひのあつた時に、清兵衞めがふしだら故と、人にでも言はれると、わしが村方へ顏向けが出來ぬ。
權十　庄屋樣がこのやうに、事をわけておつしやるから、決して酒は飲まぬがよい。
勘右　その代りに歸つて來たら、わしらが禮に一杯飲まさう。
清兵　いえもう、大事のお使ひでござりますれば、飲むことぢやござりませぬ。
作左　それ聞いてまづは安堵、早急ながらこれから直に、支度して行つてくりやれ。
權十　こなたは足が達者故。
勘右　日いつぱいには行かれようの。
清兵　行かれるどこぢやござりませぬ、七つ過ぎにはまゐれます。

ト此の中作左衛門紙入より金を出して紙に包み、清兵衛の前へ出し、

作左　これは少しばかりぢやが、路用にしやれ。

清兵　有難うござりまする。（トいたゞき開き見て、）もし、こりや二朱でござりますな、このやうには入りませぬ。今夜御師の許へ泊りますれば旅籠錢を出すに及ばず、今日と明日の晝食ばかり、どうでわしのことなれば一膳飯が身分相應、飯が二はいに汁に煮染、ちよと一合やつたところが、百か百五十。

權十　あこれ清兵衛どの、その酒はならぬといふに。

清兵　（心附いて、）こりやほんの話でござります、決して飮みはいたしませぬ。

勘右　わづか一日か二日のことぢや、辛抱して行つて來るがよい。

清兵　はい〳〵。いや何か申すことがござりましたが、おゝ、今の酒で忘れましたが、路用に二朱は入りませぬ、三百ばかり下さりませ。

作左　はて、一日でも旅は旅、どのやうなことがあらうも知れぬ、用意に持つて行つたがよい。

清兵　左樣なら、お預かり申しておきませう。（ト煙草入へ入れる。）

作左　もう四つ半でもあらうから、支度して急いでくりやれ。

清兵　いえも、支度といつたとて、つい袷を着るばかり、何の造作もござりませぬ。
權十　然し、一日でも旅のことぢや。
勘右　口を濡らして立つがよい。
清兵　左樣でござりますな、乞食も身祝ひとやら、ちよつといつぱい。
作左　や。（ト清兵衞びつくりして、口を押へる。）
清兵　いえさ、ちよつといつぱい、茶など飲んで立ちませう。（ト下へおりて草鞋を穿く。）
權十　いや、わしらも丁度歸り路。
勘右　そこらまで送りませう。（ト立ちかゝる。）
清兵　それは憚りでござりまする。
作左　これは二人の衆御苦勞であつた。これ清兵衞、氣を附けて行きやれ。
　ト弓張に窪田村と印あるを出してやる。
清兵　へい／＼、かしこまりました。
作左　必ず酒はならぬぞよ。
清兵　いえも、匂ひもかぎはいたしませぬ。

権十
勘右　そんなら清兵衛。

清兵　さあ、行きませう。

ト麥搗唄になり、清兵衛先に權十、勘右衛門附添ひ花道へはひる。作左衛門見送りて、

作左　あゝ、およそ此の窪田村も三千人ほどの人數だが、あの清兵衛ほどの正直な者は又と一人外にはない、何故あれで貧乏するか、神佛の惠みでもどうか樂になりさうなものぢやが、これが所謂前世の因果、せめて娘の代になつたら、田地の一二反も持たせたいものぢや。

ト此の時軒口の太々講の札ぱつたり落つるを、作左衛門取上げ見て、

や、こりや太々講の木札だが、どうして釘がぬけたことだか、思ひがけなく落ちたのは、もしや何ぞの知せではないか、（ト札を見て心にかゝる思入あつて氣を替へ）いや／＼何のこともあるまい、村の者の丹誠で積溜めた五十兩、殊に使ひはお伊勢樣のお心にかなふ正直清兵衛、案じるは入らぬ廻り氣、無事に行つて來るに違ひない。（ト又思入あつて）とは言へ、どうやら。（ト札を見て氣にかゝる思入、又氣を替へて）あ、思ふまい／＼。どりや祝ひに一杯、いや、清兵衛を止めておいて、おれが飮んでは濟まぬ義理、どれ、煮花の熱燗を、ぐつといつぱい引ッかけようか。

トよろしく思入、これにてこの道具廻る。

（居酒屋の場）――本舞臺上手三間の間常足の二重、正面押入戸棚、下手一間落間、三尺の暖簾口、この外酒樽の書割、出し臺に砂鉢、煮しめ物、軒口に魚を釣し、この前に酒肴と記せし立障子、總て立場酒屋の體。こゝに瞽女おそよ、おいち床几に腰をかけ、小皿物にて酒を飲んでゐる、下手に百姓畦六、田五七田樂にて酒を飲んでゐる。丁稚善太給仕をしてゐる。この模樣馬子唄にて幕明く。

そよ　これ小僧どん、煮染のほかに何ぞあるなら、ちつとばかりくれさつせえ。

善太　田螺の木の芽和か、數の子でございます。

そよ　わしやア田螺は斷物だ。

いち　何でおぬしは斷物だ。

そよ　菅谷の不動樣へ、どうぞこの眼の明くやうにと願掛で斷つたのだ。

畦六　これ田五七、白子から山田までの間に、こゝの家のやうな酒の好い家はないな。

田五　それだからわし等なぞも、觀音樣へ來る度に、こゝの家でいつぱいやるのさ。

畦六　さあ、替りめだ、重ねさつしやい。（ト兩人捨ゼリフにて酒を呑みゐる。）

いち　田螺でも數の子でも氣がないが、もう外には何もないかね。

善太　この外に安い物なら、潤目があります。

そよ　なに、うるめがあるかえ。
善太　あい、大きいのも小さいのもあります。
そよ　それは重寶なことだ、なんぼくらゐするものぢやえ。
善太　お前方だから、八文づゝにして上げよう。
いち　なに、うるめが八文であるえ、いかに天の岩戸の近所ぢやとて、八文でうるめを買つて、上見て下見りやあ、めつぽうかいに安いもんだ。
そよ　これといふのも菅谷の不動樣の御利益だ、どうぞそのうるめの、性のいゝのを二つづゝ下され。
善太　はい〳〵、二つづゝ上げますかね。（ト下手へ來る。）
畦六　これ田五七、二十四文ばかりはずまねえか、隣りにいゝ藝者衆がゐるから、大工殺しでもやつて貰はうぢやあねえか。
田五　おゝよからう〳〵、かうして酒を飲むからは二十四文や三十二文餘計に錢を遣つたとて、田地田畑にかゝるまい。
畦六　かうパツパと錢を遣ふから、酒呑みは身上がたまらねえ。
田五　違ひねえ。

畦六　おい〳〵そこにゐる藝者衆、何ぞ肴にやつて下せえ。
そよ　はい〳〵、お隣りのお客樣でござりますか。
いち　これは有難うござりまする。（ト言ひながら三味線を出す。）
畦六　それ二十四文に、纒頭を八文やりまするぞ。（トおそよへ手渡しにやる。）
そよ　これは有難うござります。これで眼玉のお錢ができた。
田五　さあ〳〵、早くやつてくりやれ。
いち　ちよつといつぱい、御馳走になつてからやりませう。（ト探り〳〵來る。）
畦六　おゝ、おぬし達は、おらが方の酒を飮むのか。
そよ　はい、お座敷に出りやあ、旦那樣のはうのお酒を喰べます。
いち　こりやあわしらの方の利得さね。
田五　酒を飮ませるくらゐなら、八文の纒頭をやらなけりやよかつた。
　　　トこの内畦六そつと立つて、おいち、おそよ等の床几にある銚子を振つて見て酒があるとの思入。
畦六　あゝこれ、しみツたれなことを言ふな、藝者を揚げるからは、酒を飮ませるは當然だ。
田五　おらあ割前は出さねえぞ。

畦六　いゝといふことよ。さあ〳〵、澤山飮まつしやい〳〵。

そよ　とても御馳走になるならば、大きいものでやりませう。（ト あたりを探り、茶碗を取つて出す。）

畦六　それがいゝ〳〵。（ト注いでやる、おそよ飮んで、）

そよ　これはいゝ酒だ、どうでも旦那方のは別だ、わしらが飮んだのとは大層な違ひだ。

いち　どれ〳〵、わしに飮まして下さい。（ト茶碗を取りて飮み、）なるほど、これは大層な違ひだ、眼が見えねえと、飮ませるものまで違ふよ。

畦六　どうだ、お前方のよりよからうが。

兩人　いゝどころぢやござりませぬ。

ト田五七これを見て、おそよ、おいち等の肴を持つて來て、

田五　さあ〳〵肴を喰ひなせえ。

兩人　これは〳〵有難うござります。（ト煮染物をつまんで喰ひ、）

いち　この煮染も私等がのより、なうおそよ、

そよ　うまいどころぢやない、みんな喰べてもよろしうござりまするか。

畦六　いゝどころぢやない、みんな喰ひなせえ。

いち　いや、氣前のいゝ、

兩人　お客樣だよ。（ト兩人して酒も肴も片附けてしまひ、）やれ〳〵、いゝ心持になつた。

畦六
田五　そこで早くやらつしやい。

いち
そよ　はい〳〵。

　　トこれより瞽女節を何なりと唄ふ、畦六、田五七は浮れて踊る。おそよ、おいちはよろしくあつて仕
　　舞ひ、

　　これは、有難うござりました。

畦六　もう仕舞ひか、高いものだ。

そよ　いえ、高い所ぢやない、御馳走になりましたから、大まけにまけました。

いち　さあ、これからこつちのお酒を飲まう。

　　ト兩人して燗銚子を探りびつくりなし、肴の小皿を取つて見て肴なき故、

そよ　やあ、こりや二合取つた酒がない。

いち　煮しめ物もなくなつた。

そよ　もし、お客樣。

兩人　御存じではござりませぬか。
畦八　おゝ知つてゐるとも〳〵。
そよ　わしらが買つた酒肴を。
いち　手籠に喰つたは、誰が仕業で、
兩人　ござります。
畦六　誰でもない、こなた衆二人だ。
兩人　えゝ。（トびつくりして、）
そよ　それぢやあ御馳走になつたのは、わしらが自腹で買つた酒か。
いち　それと知らぬも眼がない故、いつぱい喰つたかいま〳〵しい。
畦六　何も腹を立つことはない、おぬしが酒をおぬしが飲んだのだ。
田五　損も得もないことだ。（トおそよ、おいちの兩人腹を立つて、）
そよ　このやうに馬鹿にされるも、
いち　二人の眼玉が見えぬ故。
そよ　思へば〳〵。

兩人　あゝ、口をしい。(ト兩人手を取交し思入あつて、)
そよ　おゝ思ひ出した、うるめを早く持つて來て下せえ。
善太　あい／＼、かしこまりました。(ト潤目鰯を皿へ入れ、持つて出て、)はい、お誂への潤目でございます。
　　ト おそよ、おいちの前へおく。
兩人　どれ／＼、どんな眼だか。(ト兩人探り見てびつくりして、)やあ、こりや肴ぢやないか。
善太　はい、それが潤目といふ魚さ。
そよ　それぢやあうるめといふは
いち　眼玉ぢやあないか。
善太　潤目鰯といふ干物さ。
そよ　えゝ、干物が入目になるものか。
いち　こんなものは入らぬわい。(ト皿をひつくり返す、善太むつとして、)
善太　そりやあ入らうが入るまいが、くれろといふから燒いて來たのだ、錢さへ貰やあ此方はいゝのだ。
そよ　うるめえといふ魚なら、
いち　買はねえから、錢はやらねえ。

善太　いや〳〵、錢を取らにやあならねえ。

そよ いち　何で錢を拂ふものだ。

ト兩人杖を持つて立ちかゝるを畦六、田五七留めて、

畦六　これ〳〵、姐え達、まあ〳〵しづかにさつしやい。

田五　潤目を賣る目と聞き違えたのは、

兩人　おぬしの方が誤りだ。

そよ いち　何の誤りなことがあるものか。

善太　いけ强情な、瞽女のばうめ。

そよ いち　なに、瞽女のばうだ。

畦六 田五　これさ、靜にさつせえといふに。

ト三人立ちかゝるを兩人にて留める。馬士唄になり、花道より杉本屋彦十郎脚絆草鞋、一本差にて羽織を肩へかけ、判人の源八後より出來り、直に舞臺へ來て、

源八　こう〳〵、危ねえ〳〵、お盲人を相手にして、怪我でもさしちやあならねえ。まあ〳〵、待たつしやい。

そよ　いち　瞽女のばうでもお客樣だぞ。
善太　お客ならお客のやうに、潤目の錢を拂ふがいゝ。
彥十　これさ、どういふ譯か知らねえが、まあ〳〵おれに任せて下せえ。
三人　いえ〳〵、うつちやつておいておくんなせえ。
源八　うつちやつておくんねえなら留めやあしねえ、待てといつたら待たねえのか。(ト左右へ引分ける。)
彥十　もし、いつたいこりやあ、どういふわけでござります。
畦六　いえ、譯といふはかうでござります、あの姐え達が肴を聞く時、潤目があると小僧が言つたを、賣る目と聞違へて、干物なら錢はやらねえといふものだから、取らねえぢやあならねえと、それから起つたこの喧嘩さ。
源八　さうしてその干物の錢といふは、いくらばかりでござります。
田五　三十二文さ。
源八　あの、たつた三十二文かえ、なんのことだ。
彥十　その三十二文はわしが拂ふから、小僧も姐え達も了簡するがいゝ。
そよ　そんならお前樣が、お拂ひなされて下さりまするか。

いち　勘定が濟んだら、干物はわしがお貰ひ申さう。
善太　え丶慾張つた奴だ。
彥十　源八、干物をやつた上で、いつぺいづゝ飮ましてくれ。
源八　かしこまりました。（ト財布より百錢を出して、）それ、干物の錢が三十二文、これで姐え達もいつぺい飮みねえ、小僧も團子でも食ふがいゝ。（ト百錢を一枚づゝ出す。）
そよ
いち　これは旦那樣、
三人　有難うござります。
畦六　こりやあ、おらも喧嘩をすりやあよかつた。
田五　違えねえ。
彥十　こう源八、久七さんを呼んで下せえ。
源八　かしこまりました。（ト奧へ向ひ、）久七さん〳〵、ちよつと顏を貸しておくんなさい。
久七　（奧にて、）はい〳〵、唯今まゐります。（ト久七世話裝、紺の前垂をかけて出來り、）これは杉本屋の旦那ようおいでなされました。
彥十　おゝ、久七さんか、いつもながら御繁昌だね。

久七　有難うございます。
源八　ときに、六十近い老爺さんが、旦那を捜して來やしなかつたえ。
久七　いえ、まだお見えなされませぬ。
源八　それぢやあ旦那、一口お上んなさいまし。
彦十　おゝ、さうせう。
源八　久七さん、何ぞ旨ひものを拵へておくんなせえ。
久七　旨ひものとおつしやつたとて、どうでわたくしどもの家のものは、旦那のお口には合ひませぬ。
彦十　どうして〳〵、見かけは居酒屋だが、庖丁が利いてゐるから、たいがいの料理茶屋ははだしだ。
久七　また旦那のお世辭ばかり。
源八　こう姐え達、こゝへ來ねえ、いつぺい振舞はうぜ。
そよ いち　そりやあ有難うございます。
ト此の内久七廣蓋へ刺身を列べ、銚子と猪口を載せ持つて出て、
久七　まあ、有り合せで一つお上りなされませ。
ト驛鈴入りの伊勢音頭になり、上の方より清兵衛脚絆草鞋尻端折り、笠を背負ひ、咖へ煙管にて草鞋

ト拵へながら出來り、花道の方へ行くト畦六、田五七見て、
畦六　おい〳〵、そこへ行くのは、清兵衞どのぢやあねえか。
清兵　(振返りて、)おゝ、誰かと思つたら、新田の畦六どのに、藪際の田五七どのか。
畦六　おゝ、丁度こなたに用があつて、逢ひたく思つてゐたところだ。
田五　まあ、こゝへ來てかけさつしやい。
清兵　何の用か知らねえが、急な事で行かにやあならねえが、歸りぢやあ惡いかな。
畦六　手間は取らさねえから、
兩人　まあ、こゝへ來さつしやい。
清兵　それぢやあ、ちよつと休んで行きませうか。(ト本舞臺へ來て、)許さつしやれ。(ト床几へかける。)
久七　清兵衞さん、この間はどうなすつたか、さつぱりおいでなさらぬな。
清兵　この頃は植附で、どつこへも出ることがならねえ。
久七　(草鞋を見て、)もし、草鞋が切れてゐるぢやァありませんか。
清兵　古いのを穿いて來たら直に切れてしまつた。休むのがをしいから、道々こしらへながら歩くのさ。
久七　そのやうに急がずと、日が長いからゆつくりとなされませ。

清兵　いえ〳〵急な用だから、ゆつくりとしてはゐられぬ。（ト言ひながら草鞋の紐をなほし、）ときに、わしに用とは何だな。
畦六　用といふのは外でもねえ、先刻から二人でやつてゐるが、遣つたり取つたりが忙しいから、相手をして貰ひたいのだ。
清兵　なに、用といふのはその用か、人を呼び釣つて何の用かと思つた。
　　トやはり草鞋の紐を通し、四邊を見て、酒の匂ひが鼻へはひりし思入。
田五　いつもこゝの家の酒はいゝから、わざ〳〵遠くから飲みに來るが、今日の酒はその中にもいゝ酒だ。
久七　そりやあその筈でござります、地酒と違つて、富士見でござります。
田五　道理こそいゝ呑口ぢやと思つた。さあ、清兵衛どの、いつぺいやらつしやい。
　　ト清兵衛に茶碗を差す。
清兵　そりやあ忝いが、今日はちつと飲まれない。
畦六　これさ、いつも飲みながら、何故今日は飲めねえのだ。
田五　持越してゐるのなら、熱燗でぐつとやるがよい。
清兵　なに、そんなことぢやあねえが、大事な使ひに行くのだから、行つて歸るまで飲むことができねえ。

畦六　どんな使ひか知らねえが、子供ではあるまいし、なにも酒を飲んだとて行かれねえこともあるまい。

田五　たんと飲まずと、いつぱい飲まつしやい。（ト清兵衛の前へ茶碗をおき、酒を注ぎて、）さあ、置注にしておくぞ。

清兵　いや〳〵、庄屋樣の言附だから、今日ばかりは飲まれねえ。

畦六　いつぱい飲まれずば、半分飲まつしやい。

清兵　いや〳〵、どうあつても飲まれねえといふに。（ト脇を向き草鞋を穿く。）

田五　このまあ、うまい酒を飲まぬといふがあるものか。仕方がねえ、おれが飲まう。

ト田五七茶碗を取つてぐつと飲む、清兵衛振返り、これを見て飲みたき思入よろしく、田五七ぐつと飲んで、

おゝ、甘露々々。（ト頭をたゝき、）こなたが飲まずば、もう一つ重ねようか。

畦六　飲めばいゝのになあ。

ト畦六酌をする。田五七うまさうに飲む。清兵衛だん〳〵飲みたくなる思入

彥十　さあ源八、大きいものでやらつしやい。

源八　いえ〳〵、さうは行きませぬ。

彥十　何の、いけねえことがあるものか。
そよ　もし、多ければ助けて上げませうか。
いち　このお酒なら、いくらでも飲めますよ。
源八　（茶碗を取つて、）お辭儀をしい〳〵飲むものは、酒でござりまする。（トぐつと飲んで、）あゝ、いゝ心持だ。
　　トこの内淸兵衞は源八の飲むのを見てゐて、同じやうに眞似をする。久七銚子を持つて來て、
久七　もし淸兵衞さん、一つぐらゐはいゝぢやァありませんか。實に今日の酒は、お前に飲ませたい酒ぢや。
淸兵　さあ、飲みたいことは山々だが、庄屋樣の言附故、今日ばかりは飲めぬ〳〵。
田五　なんの、こゝに庄屋樣が見てゞもござりはせまいし、飲んだか飲まぬか知れるものか。
畦六　思ひきつて、やらつしやいな。
　　ト兩人茶碗と銚子を突きつける。淸兵衞手を出しさうにして頭を振り、
淸兵　いや〳〵、こゝが辛抱どころだ。
　　ト草鞋を穿く、彥十郞、源八思入あつて、

彦十　もし、持合せましたが一つ上げませうか。

畦六　お近附の爲め、いたゞきませう。（ト彦十郎猪口をさし、源八酌をする。）おつと〳〵、ございます、ございます。

田五　もし、お前さん方も、よつぽどいけまするな。

彦十　なに、たんとも飲めませぬが、ほんの樂しみ酒でございます。

源八　いや、また世の中に、酒ほど樂しみなものはございませぬが、これをまた飲まぬといふは、一生の損でございますぜ。

彦十　左樣でございます。

畦六　こゝに掛けてをりまするは、同じ村の淸兵衞といふものでございまするが、飲める口でありながら、飲めといふに飲めぬと言ひます。

源八　そりやあ御了簡違ひなことだ。もし淸兵衞さんとやら、一つどうでございます。

淸兵　御親切は有難うございまするが。

彦十　さうでもあらうがお近附に、ちよつと一つ上げませう。

淸兵　御親切は有難うございまするが、どうも庄屋樣の言附だから飲まれませぬ。

畦六　これ清兵衛どの、わしらは同じ村のことだ故、祝儀不祝儀ともに席順で同席をする仲だから、いやならいやでえゝけれど、他人様があのやうに、御親切におつしやつて下さるを、飲めねえといふことがあるものか。

田五　一つ飲めずば半分でも飲むが、こりやあ義理といふものだ。

彦十　袖振り合ふも他生の縁。

源八　是非一つお上んなせえ。

清兵　それだといつて庄屋様へ、どうも飲んでは濟みませぬ。

田五　なに、一ぱいや二はい飲んだとて、庄屋様に知れるものか。

畦六　少しでもやらッせえ。

清兵　それぢやあ、一ぱい飲んでも、ようござりませうか。

畦六　よくなくッてどうするもんだ。

清兵　だまつてゐて下せえよ。（ト茶碗を取る。）

兩人　なに、言ふものかな。（ト言ひながら酌をする。）

清兵　あこれ、こぼれます、もつたいない。一粒萬倍々々、（ト額へ附け、）どれ、御馳走になりませうか。

畦六　（ト嬉しき思入にて、ぐつと飲む。）
田五　どうだ、いゝ酒ぢやあねえか。
清兵　ほんに、こりやあえゝ酒だ。（ト茶碗を持つたまゝ、まだ飲みたき思入。）
畦六　もう一つやらつしやい。
清兵　よからうかな。
田五　一寸切られるも、二寸切られるも同じことだ。
清兵　それぢやあやッつけませうか。（ト兩人酌をしてやる。清兵衛飲んで、）あゝ、はらわたへ染みわたるやうだ。
彦十　もし、一獻ぢやあ數が惡い、もういつぱいおやんなさい。
源八　駈附三ばいといふことがある。
畦六　もう、これぎり勸めねえから、
田五　清く一ぱい飲まつしやい。（ト清兵衛少しく酒のまはりし思入にて、）
清兵　それぢやあ、もう飲みませぬよ。（ト又一ばい飲んで、）やれ〳〵いゝ飲口の酒だ。實はわしも飯より好き故、さつきから辛抱してゐたが、腹の中の蟲めがぐッ〳〵と言ひをつた、これでいゝ心持

になつたから、一精出して行かねばならぬ。（ト久七前へ出て、）

久七　清兵衛さん、だいぶお急ぎだが、どこへ行きなさるのだ。

清兵　（少しく酒に醉ひし思入にて、）久七どん、聞いて下せえ、世の中に正直ほど有難いものはない、おらはこの衆も知つてゐるが、自慢ぢやないが田地田畑もなく、年中庄屋樣の所へ行つて庭子のやうに働いてゐる、ほんの水呑百姓、娘が一人あるばかりで家は借家、屋財家財ひつくるめて賣つたところが、僅か二兩か三兩の身上だが、これを見て下され。（ト懷より五十兩入りし財布を出して、）庄屋樣から賴まれて、大々講の五十兩　御師の所まで持つて行くのだ。何と、二兩か三兩の僅かな暮しをするものに、五十兩といふ金を、正直なお蔭には、庄屋樣から渡して下さる、何と有難いことぢやあないか。

久七　あこれ〱清兵衛さん、そんな話はさつしやりますな。こゝにおいでなさるお方は、古市の杉本の旦那に判人の源八さん、田舍挊ぎの瞽女衆にお前の村の百姓衆、氣遣ひな人は一人もないからよいやうなものなれど、護摩の灰にでも聞かれて御覽じろ、直にその金を取られます。必ずそんな話をさつしやりますな。

彥十　いや、わしなども生業づくで、年中金を持つて歩くが、實に道中は油斷がならねえ。

源八　えて商人の風などをして、ひつかける奴がいくらもある。
そよ　ほんにさつきも、わしらがしがない錢で買つた酒を、
いち　横取りをして飲んだ人があつた。（トこの内清兵衛思入あつて、）
清兵　そりやあお前方、眼がないからだ、おのが持つてるものを、取られるといふがあるものか。
久七　はて、そこだね。
清兵　どこでござるな。
久七　さあ、どう懐へ入れておいても、取らうと思ふその時は、藥か酒の中へ痺れ藥を入れて飲ませ、動かれなくなつたところを、それ、ひよいと取りますわ、うぬ泥坊と言ひたくつても、舌が痺れて物は言へず、見てゐる前で取られます。それだから油斷はなりませぬ。
ト清兵衛これを聞き、氣味惡くなりし思入にて、
清兵　なるほどさう聞いて見ると、めつたに油斷はならぬ。これだから庄屋樣が、酒を飲むなと言はつしやつたのだ。今の酒はいゝかの。
畦六　馬鹿なことを言はつせえ、おら達が振舞ふ酒に、
田五　何があるものだ。

清兵　いや、この酒には何もあるめえが、何だかをかしな心持になつて、腹がちく〳〵痛いやうだ。これ久七どの、手水場を貸して下せえ。
久七　あい〳〵、奥にありますから、行かつしやりませ。
清兵　草鞋でも入られますかの。
久七　庭の隅だから、だいじござりませぬ。
清兵　それではちよつと借りますぞ。どれ、閑所場へ行つて來ようか。
　　ト下手の庭口へはひる。皆々見送りて、
彥十　もし、あのお人は正直さうな方でござりますな。
畦六　あれは正直清兵衞といつて、わしらが村で評判の男さ。
田五　およそ伊勢廣しといへども、太神宮樣のお氣に入るは、あの男ばかりだらう。
畦六　あの又娘の美しいことは、これも伊勢中にない器量さ。
久七　ほんに、いゝ娘御があるさうだね。
彥十　いゝ娘と聞いては、耳よりだな。
源八　もし、家は窪田村でござりますね。

畦六　あい、ついわしが裏手を東へ曲つて、石橋から西へ向つて眞直に行くと、大きな漆の木がありま
す、その木から北の方へ一反二反三反目の畦から、藪際を通つて南角から三軒目だ、なんの造作
もねえ道よ、

源八　いや、むづかしい道でござります。

田五　又近道を行くなら、庚申堂から左りへはひつて、淨源寺樣の庭通しに、新家のくねから眞直に、

源八　あゝもし〳〵、もうよろしうござります。なか〳〵お聞き申しても覺えられませぬ。

畦六　覺えられずば、もう一遍、

兩人　敎へませうか。

源八　いえ、それには及びませぬ。

ト庭口より淸兵衛手拭にて手を拭きながら出て來り、

淸兵　やれ〳〵手水場へはひつたら、いゝ心持になつた。もし、どなたも道を急ぎますから、わしはも
うお暇いたします。

畦六　ときに淸兵衛どん、わしらもいつしよに、

兩人　行きませう。

清兵　わしやあ急がにやならぬ故、お前方は後からゆつくりござれ。
畦六　えゝ附合の悪い男ぢや。まあ、待たせんといふに。
清兵　いや〳〵こなさん達と附合うては、途中で暮れる。これから山田へ逸散走りぢや、許して下んせ。
兩人　いつこくな清兵衞さんだ。
清兵　いつこく三里は朝飯茶漬ぢや。
ト伊勢音頭にて、花道へ急ぎはひる。
畦六　これ田五七、酒は飲んでも、晝食をよそで喰ふのも面倒ぢや。
田五　それ〳〵、腹も丁度お杉お玉、持合した割籠の飯。
久七　奥の離れで、辨當をあがつてござれ。
兩人　内儀の給仕に、茶の花香、
そよ　わしらアこれから一稼ぎ、
彥十　姐え達はもう行くかえ。
いち　古市の旦那樣。
源八　そんなら客人、姐え達もしつかり。

そよ
いち　御馳走様になりました。

トおそよ、おいちは上の方へはひる、畦六、田五七は暖簾口へはひり、三人殘る。

彦十　なるほど、あの人は正直者だ。

源八　いかに正直者だといつて、五十兩といふ金を、あんな人に持たせてやるは險難なことだ。

久七　そこは正直の頭に神宿るで、間違ひもございませぬのさ。

彦十　そりやさうと喜兵衛どのは、もう見えさうなものぢやあねえか。

源八　こゝで待合せる積りだから是非來るに違ひございませぬ。

久七　まあ、ゆるりとなさりませ。

ト久七は奥へはひる。と花道より立場の喜兵衛旅裝にて、娘お蓮と連立ち出來る。

お蓮　もし父さん、杉本の旦那のおいでなさる所は、どこでございますえ。

喜兵　觀音寺前の酒屋だといつたが、たしか向うの家だらう、何にしろ聞いて見よう。

お蓮　それがようございますわいなあ。（ト兩人本舞臺へ來る、源八見て、）

源八　おい喜兵衛さん〳〵、さつきから待つてゐた。

喜兵　おゝ杉本屋の旦那、源八さん、お待遠でございましたらう。

彦十　だいぶ手間どれたの。

喜兵　今朝は宿の女が寐忘れて、おそくなつたその所へ、娘が髪を結つたので、大きにおそくなりました。

彦十　さうして、お前の娘といふのは、この娘かえ。

喜兵　左樣でござります、これ娘、あなたが杉本の旦那だ。

お蓮　（前へ出て、）これは〱旦那樣でござりますか、不思議な御緣でお世話樣になりまするが、不束な者でござりますれば、お目かけられて下さりませいな。

彦十　はい〱。源八どうだ、愛想のいゝ娘だの。

源八　そりやあ何と言つても、水茶屋を出したものだから、素人のやうぢやござりませぬ。

彦十　聞けば此の古市へ、奉公がしたいといふ望みださうだが、何も因緣はあるめえの。

喜兵　決してその氣遣ひはござりませぬ。何をかくしませう、この春から四五十兩負けこくつて、手も足も出ねえ所から、三年ばかり稼いでくれと、こいつに言つたら稼ぎやせうから、その替りどうぞ古市へやつてくれろと達ての頼み、わしが勝手に賣るのだから、せめて所の望みぐらゐは、聞いてやらにやならねえから、そこでわざ〱紀州から、この伊勢まで連れて來たのだ。

源八　なんで又姐えは、そんなに古市へ來てえのだえ。
お蓮　さあ、ちつと逢ひたい人が。
源八　え。
お蓮　いえ、相の山や二見ヶ浦、お伊勢樣へまゐりたさに、それでこつちへまゐりましたわいな。
彥十　はあゝ、それぢやあ太神宮樣へまゐりたいのか。
お蓮　さうでござんすわいな。
源八　ときに、とつさん、これでいゝかえ。（ト喜兵衞の袂へ手を入れて思入。）
喜兵　あい、ようござります。まあ三年としておきませう。
源八　どうでお前のことだから、又負けたら出て來ねえ。
喜兵　どうして〳〵、たつた一人の可愛い娘だ、身請をしに來るとも、年季を增しにやあ來ねえ。
源八　覺束ねえものだ。
彥十　それぢや父さん、かうせう、源八が所が近所だから、あれが所へ行つて證文をしよう。
喜兵　どうぞさうして下さりませ
彥十　ときに父さん、お前酒はどうだえ。

喜兵　大好でござります。
彥十　それぢやあ一つやんねえな。
喜兵　御馳走になりませう。
彥十　おい、熱いのを持つて來てくんな。
善太　あい〱。
　　ト喜兵衞、彥十郞捨ぜりフにて酒を呑む。お蓮源八を引張つて下手へ來て、
お蓮　もし、お前さんに、ちつとお聞き申したいことがござんす。
源八　何だえ。
お蓮　松坂から古市へは、どのくらゐでござんすえ。
源八　なに、わづか三里ばかりだ。
お蓮　それぢやあ、松坂のお方が、遊びにござんすかえ。
源八　來るどころかえ、古市の一檀家だ。
お蓮　その松坂に松賀屋といふお家か。
源八　あるとも〱、しかも呉服店で、相應な家だ。

お蓮　そこのお家に、御亭主がござんすかえ。
源八　あゝ亭主がなくつてさ、六十ばかりの爺さんだ。
お蓮　お上さんもござんせうな。
源八　その御亭主の女房だから、五十四五の婆さんだ。
お蓮　さうして、娘御がござんすかえ。
源八　娘ッ子があつたが、去年死んだ。
お蓮　さういふお家なら、奉公人衆もたんとござんせうな。
源八　あるとも〱、番頭から小僧まで男の奉公人が七八人、女の奉公人が三人ばかりさ。
お蓮　猫などはござんせぬかえ。
源八　猫も二三匹あつた。
お蓮　犬はどうでござんすえ。
源八　こう〱、もういゝ加減にしねえのか。
お蓮　まだそこのお家に、なにがござんせうな。
源八　待ちねえよ、亭主に上さん、娘に奉公人、猫に犬。おゝまだある〱、とんだ輕業だが、孫三郎

といふ息子がある。（トこれを聞いてお蓮嬉しき思入し）
お蓮　その息子さんに、あの、お上さんがござんすかえ。
源八　なあに、まだ獨身だ。
お蓮　さうでござんすかいな。（ト孫三郎に逢ひたき思入し）
源八　何でそんなに松賀屋の家を聞くのだ。
お蓮　昨夜泊つた旅籠屋で、松賀屋の噂がござんした故。
源八　そりやあ大方息子のことだらう、この伊勢街道でのいゝ男だ。
　　トこの内彦十郎と喜兵衛はよろしく酒を飲みゐて、
喜兵　もう〳〵いけませぬ、今の大きいので大そう醉ひました。
彦十　それぢやあこれから、源八が所で證文をしてしまつて、目出度くもう一ぱいやりませう。
喜兵　有難うござります。
彦十　さあ、源八行かうぜ。
源八　まゐりませう〳〵。
お蓮　もし、その松賀屋の前は通られますかいな。

源八　途方もねえ、そりやあ大違ひな道だ。

お蓮　さうでござんすかいな。

彦十　おい御亭主々々、勘定はいくらだい。

久七　はい〳〵。（ト言ひながら出て來て、）はい、御勘定は四百六十四文でござりまする。

彦十　源八、これを上げてくれ。

ト彦十郎一分銀を出して源八に渡す。源八久七に渡し、

源八　はい、御勘定。

久七　これは有難うござります、唯今お剩錢を。

彦十　なに、その剩錢は小僧どんにやつてくんなせえ。

善太　これは旦那、有難うござります。

源八　宿下りの小遣ひが出來たな。

彦十　さあ、そろ〳〵と出かけようか。

お蓮　（思入あつて、序幕の帳を出して、）どうぞ一目孫三郎さんに。

源八　なに、孫三郎。

お蓮　え、（ト向うへ思入あつて、）さあ、馬士の衆が向うから。
喜兵　あれが三寶荒神だ。
お蓮　さうでござんすかいな。（トこの時お蓮ばつたり帳を落すを、彦十郎拾つて、）
彦十　やゝ、この帳面は。
お蓮　え、（トひつたくり懐へ入れる。）
源八　玉帳か、いゝ手廻しだの。
彦十　さあ、行きませう。（ト先に立ち源八、喜兵衛お蓮上手へはひる。）
善太　もし親方、その剰錢を早くおくんなせえ。
久七　えゝ忙しねえ、やらねえとは言はねえわ。
ト早めたる伊勢音頭ばたばたになり、花道より清兵衛逸散に走り出て來り。
清兵　やいやい久七どの、いやさ久七、こなたはいけ太い人だな。（ト胸をたゝき、息のきれる思入。）
久七　これ清兵衛さん、險相變へて、こりやまあどうさつしやつたのだ。氣を落付けさつしやい。
清兵　何だ氣を落付けろ、どう落付いてゐられるものだ。
久七　藪から棒に腹を立つて、まあ譯を言はつしやりませ。

清兵　え丶盗人たけ〲しいと、譯は言はずとも、覺えがあらう。（ト急き込んで言ふ）

久七　何だか知らぬがさう急かずと、靜かに譯を言はつしやりませ。これ小僧水を一つ上げるがいゝ。

善太　あい〱。（ト茶碗へ水を汲んで、）汲立を一ぱいお上んなさい。

ト清兵衞の前へ出す、清兵衞取つて心附いたる思入にて、

清兵　え丶、痺れ藥を吞まさうと思つて、その手をうつかり喰ふものか。（ト茶碗を取つて抛る。）

久七　これさ清兵衞さん、こりやまあどうしたといふのだ。

清兵　どうもかうも入るものか、太々の金の五十兩、出して下せえ。

久七　なに、わしに出せとは。

清兵　盗んだから出せといふのだ。

久七　いや、この人は〱、途方もないことをいふ人だ。

善太　なんでおらの所の親方が盗人だ。

清兵　お丶、金を盗んだから盗人だ、さあ、金を出せ〱。

ト清兵衞やかましく言ふ、此内奥より以前の畦六、田五七出來り、此體を見て、

畦六　これ〱清兵衞どの〱、どうしたのだ〱。

田五　まあ、靜かにさつしやい〳〵。
清兵　おゝ村の衆か、聞いて下せえ。太々の金の五十兩を、あの久七が盜んだわいの。
畦六
田五　やあ、なに、久七が盜んだと。（トおどろく、久七むつとして）
久七　これ清兵衞どの、外のことゝは譯が違ふ、いつわしが金を盜んだ、それを言はつしやい〳〵。
清兵　言はねえでどうするものだ、さつき手水場へ行つた時お伊勢樣へをさめる金故、不淨場で穢すまいと、手水場の脇に積んであつた麥の中へ、財布のまゝ突込んでおいてはひつたが、出てから見ればそのまゝ故、首へかけて出かけたが、護摩の灰に取られまいと、道々金を探つて見たら、小判と恰好の違ふのに、びつくりして出して見れば、これこのやうな丸石だ。（ト財布から石を出して見せ、）庄屋樣の家を出てから、こゝへ休んだばつかりだ、麥の中へ入れておく內、こなたが盜んだに違ひない。さあ、その金を返さつしやい〳〵。
久七　これ清兵衞どの、そりやあこなた何を言ふのだ、わしが盜んだか盜まぬか、よく物を積つて見さつしやい。さつきわしか何と言うた、お前が金の話をした時、こゝだからいゝけれど、他所でそんな話をさつしやるな、護摩の灰に取られると、わしがこなたに異見をしましたぜ。しかも二人の衆も聞いてゐられたが、その金を取るくらゐなら、取られぬやうに用心しろと、何でわしが言ふ

ものか。よく考へて見さつしやいな。

清兵　いや〳〵何も考へて見るには及ばぬ、庄屋樣から出て外へ休まねば、こなたが取つたに違ひない。違ひない。

久七　これ、いくら盗んだと言はつしやつても、盗まぬといふ證據がある。こなたが手水場へ行つた内わしやお奥へは行きはせぬ、この店にばかりゐた、お前は手水場へ行つた故知るまいが、二人の衆が御存じだ、大方どこぞで話をして、護摩の灰に取られてしまひ、言譯なさにこゝへ來て、言ひがゝりをさつしやるのだ。正直々々と人は言ふが、見かけによらぬ太い人だ。

ト久七腹を立つて言ふ、清兵衞急き込みし思入にて、

清兵　何ぢや、わしが太い、これ、盗んだ方が太いか、盗まれた方が太いか、出る所へ出て言はさにやならぬ。さあ、代官所へうせをらう。（ト久七の胸倉を取る。）

久七　えゝ何をしやあがる。（ト拂ひのけて、清兵衞を引きすゑ、）これ、弱い生業をしてゐるから、さつきから蟲を怺へ下から出りやあいゝかと思つて、喰へそばへたことを言ふな。人樣の物三文掠めたことのない久七、京にゐりやあ諸司代屋敷、又大阪ぢやあ御城代、江戸へ行つても十軒の火消屋敷にごろついて、つらはだにまで身體がかたまり、年中法被一枚で前町の商人をいぢめあるいたこ

とはあつたが、人の物は錢三文盗んだことのねえおれだ。まして、今ぢやあ堅氣になり、指で一三昧のこの久七、盗人といふ惡名を、附けられちやあ了簡ならねえ。おれと一しよに歩びやあがれ。

ト清兵衞を引きずツて行かうとする。畦六田五七これを見て、

畦六　これ〳〵久七どの、まあ待たつしやい。腹の立つのは尤もだ、こなたが金子を盗まぬことは、わしら二人が證人だ。

田五　なるほど、さつき清兵衞が、手水場へ行つたその內は、久七どのは見世にゐた、誰一人あの時に奥へ行つたものはない。

畦六　して見ると、こりや清兵衞、こなたがどこでか取られたのだらう。

田五　但しは庄屋樣へ、忘れてでも來はせぬか、よう思ひ出して見るがいゝ。

清兵　何の庄屋樣へ忘れて來るものか、こゝでとられたに違ひない、又他所で取られたものを、こゝで取られたなぞといふ、そんな清兵衞ぢやござりませぬ。

畦六　そりやあ正直清兵衞といふ、こなたのことだから、まさか嘘もつくまいが、

田五　また久七どのが盗まぬことは、わしらがきつと見てゐたのだ。

清兵　えゝこなた衆も頼もしくねえ、何で久七が肩を持つて、わしをこんなにへこますのだ。假令小前の百姓でも、同じ村にゐるからは、肩をもつてくれたがよい。
畦六　なんぼ肩が持ちたくても、こなたの方が無理だものを。
清兵　何が無理だな、盗んだから盗んだといふのだ。
田五　そんなら何ぞ證據があるか。
清兵　さあ、何も證據はないけれど、こゝで盗まれたに違ひない。
畦六　それだから無理だといふのだ、盗まぬといふ久七どのには、わしらといふ證人があるに、
田五　こなたの方には盗まれたといふ、何も證據がないではないか。
清兵　さあ、それは。
畦六　それ、見さつせえ。證據がなければ水掛論、代官所へ持出しても、こなたに疑ひが掛るわいの。
清兵　それだといつてこゝの家で、盗まれたに違ひないものを、そんなことを言はれては、おりや悔しくてならぬわい。（ト悔しさうに涙を拭ふ。）
田五　これ〳〵清兵衛、分からぬことを言ふな、窪田村の者はこんなものかと、思はれるのが恥かしい。
畦六　村中の恥になることだ、よう考へて見さつせえな。

ト兩人煙管をたゝき立つて言ふ。清兵衞むつとせし思入にて、

清兵　はい、お前方に恥をかゝせて、大きにわしが惡かつた。何ぼ小前の百姓だとて、さう一口に籠めさつしやるな。お前がたの恥になつてわるけりやあ、これから一遍村へ歸つて、庄屋樣を連れて來て、わしが潔白を見せにやあならぬ。（ト上の方へ行きかゝるを兩人留めて、）

畦六　これ清兵衞、まあ待て、わしら二人もかゝり合ひだ。

田五　どうでこなたの言ふのは分からぬ、わしらが行つて話してやらう。

清兵　えゝ、こなた衆を賴むものかえ。（ト兩人を振切り、）久七、覺えてゐろよ。

ト清兵衞は逸散に上手へ走りはひる。

畦六　えゝこれ清兵衞、待てといふに。

田五　はて扨、强情な男だな。（ト久七思入あつて、）

久七　これは〱お二人さん、大きに有難うござりました。外の事とは違ひまして、どうもこればかりは捨ておかれませぬ。あそこの家では物が無くなる、油斷のならぬ酒屋だなどゝ、これが評判になりますると、生業にかゝりまする故、これからわしは代官所へ出て、御吟味を願ひますから、御迷惑ながらお二人とも、證人になつて下さりませ。（ト行きかゝるを兩人留めて、）

畦六　その腹立は尤もだが、盗まぬことはわしらが承知。このことを庄屋どのに話し、こなたの明りを立てるから、言分もあらうけれど、どうぞ二人に、
兩人　任して下され。
久七　そりやもう、身の明りさへ立ちますれば、別に申すこともござりませぬ。
兩人　そんなら、わしらに、任して下され。
久七　よろしうござります、お得意のお前様方へ、お任せ申しませう。
畦六　それは早速に忝ない。
田五　いづれ又後方に來るから、必ず代官所へ出ることは、
兩人　見合して下されや。
久七　承知しました。
兩人　いや、とんだ厄介をかけました。（ト上手へはひる。）
善太　親方、分からない奴でござりますね。
久七　あんなべらぼうな奴はない、折角人が親切に護摩の灰に取られるなと、氣を附けてやつたのを、どこでか金を盗まれて、おれに罪を着せようとは、正直どころか太い奴だ。（ト煙草を呑み、腹立ま

ぎれに雁首を口へ入れ、）あツつゝゝゝ。
善太　これ親方、そりやあ雁首だ。
久七　えゝ、知つてゐるわえ。（ト善太の頭を煙管でくらはす。）
善太　あいたゝゝゝゝ。
久七　えゝ、こんな腹の立つことはない。
　　　ト煙管で灰吹をたゝく、此の模樣やはり伊勢音頭にて道具廻る
　　　（雲津繩手松原の場）‖本舞臺三間の間正面一面の松並木、後ろ黒幕、總て伊勢街道相の宿の體。
　　　時の鐘にて道具留る。と花道より駕籠舁二人にて四つ手駕籠を擔ぎ、この内に以前の喜兵衞酒に醉ひ
　　　たるこなしにて、兩足を出して乘つてゐる、駕籠舁花道にて杖をして、
舁一　こう棒組、親方は豪氣に醉つてゐなさるな。
舁二　なんぼ生醉だつて、これぢやあ擔ぎにくゝッていけねえ。
舁一　どうか、足を中へ入れてもらやアな。
舁二　もし親方え、どうぞ足を中へ入れておくんなさいまし。

喜兵　なぜ、足を出してゐちやあ悪いかえ。
舁二　どうもこれぢやあ、擔ぎにくゝッてなりませぬ。
喜兵　ぜんてえおらあ馬が好だから、馬に乗らうと思つたのだが、無えから駕籠に乗つたのだ。かう兩方へ足を出して、これで馬に乗つた積りだ、ぐづ〳〵せずとやつてくれろえ。
舁一　棒組、仕方がねえ、やッつけよう。
舁二　强情な人だなあ。（ト舞臺へ來り、駕籠をおろして、）
舁一　もし親方、これぢやあわつちらに擔げねえから、足を引ッこましておくんなさるとも、乗りなほすともしておくんなせえ。
喜兵　べらぼうめ、たゞでも乗りやあしめえし、錢を出して乗るからは、足を出さうが手を出さうが、おれの勝手だ。
舁二　もし、返り駕籠を取らにやあならねえ、常談せずと乗つておくんなせえ。
喜兵　乗つてゐるからいゝぢやあねえか。
舁一　足を出して乗つてゐられちやあ、わつちらにや擔げやせぬ。
喜兵　擔げざあ止せ、おれも厭だ。

兩人　そんなら下りておくんなせえ。

喜兵　下りねえでどうするものだ、こんな駕籠に乗られるものか。（トひよろ〳〵して出かゝる。）

舁一　もし、こゝまで來りやお半分道、勘定を貰ひませう。

喜兵　なに、かゝゝ、かんぢやうをくれ、かゝゝ、かんぢやう（灌頂）なら四月八日だ、甘茶でも嘗めやあがれ。

舁一　なに、甘茶を嘗めろ。（ト立ちかゝるを、）

舁二　これ、うつちやつておけ、生醉だ。

喜兵　なんだ〳〵、生醉だア、なんだうぬが方から下りろといふから、下りてやるのは達引だ。錢をくれろもすさまじい、駕籠の切賣を買つたことはねえ、惡くぐづ〳〵しやあがると、問屋場へ引きずつて行くぞ、人を見損やあがつたか、べらぼうめ。（トひよろ〳〵しながら上手へはひる。）

舁一　うぬ、待ちあやがれ、禿頭め。（ト息杖を持つて立ちかゝるを、）

舁二　これさ、年寄りを相手に見つともねえ。

舁一　それだといつてあの親仁め、あんまり強情なことをぬかしやあがるから、駕籠賃だけたゝきしめてやらうと思つて。

舁二　止せえ、あんな親仁を疵でも附けてはかゝり合ひだ。それよりやお歸りでも捜して、酒手でも取

つて行かう。

昇一　いめえましい目に逢つたな。

ト兩人よろしくある。と上手より松賀屋孫三郎羽織着流しにて出來り、

孫三　今日が暮れたと思つたが、もう五つになるさうだ、なるほど夏の夜は短いことぢや。

ト行きかけるを、兩人して呼び留め、

昇一　もし旦那、松坂まで歸り駕籠でござります。

昇二　お安く乘つて下さりませぬか。（トこれにて孫三郎思入あつて、）

孫三　此の先の松原が、物騷だといふことだから、いつそ駕籠に乘つて行かうか。

兩人　どうぞお供をさして下さりませ。

孫三　さうして、松坂まではいくらぢやの。

昇一　はい、酒手ぐるみに四百下さりませ。

孫三　そんなら、それでよいのか。

昇二　よろしうござります、さあお乘りなさいまし。

孫三　どうぞ急いで下され。

兩人　かしこまりました。（ト孫三郎駕籠へ乘る。駕籠舁の二雪駄を蒲團の下へ入れる。）

舁二　もし旦那え、わつちらあ生醉を乘せて來て、まだ夜食を食ひませぬ。

舁一　ちよつと蕎麥を一ぜんかつこんで來ますから、ちつとの内待つてゐて下さりませ。

孫三　そんなら早く行つて來て下され。

兩人　かしこまりました。直ぐまゐりまする。（ト杖を駕籠へ立てかけ、上手へはひる。）

孫三　どうか雨が降りさうであつたが、よい鹽梅にさつぱり晴れた。

ト此の内月を引出す。孫三郎空を見ようとして、駕籠の屋根に結び附けてある財布を見て、

駕籠の屋根に財布が結び附けてあるが、どうやら中は金の樣子、然もかさは四五十兩、こりや駕籠の者の所持ではあるまい。わしが前に此の駕籠へ生醉が乘つたとのこと、もしや其の人が忘れしか、所でも知れてあるならば、どうぞ屆けてやりたいものだ。（ト財布の紐を解き中より金包と豆御祓を出し、）財布の内には金包と、豆御祓があるばかり、外に書附とてもなし、まだしも證據は山形に片假名でキの字の印、いづくの人か知らねども、これを忘れて行くといふは、あ、酒は飲むまいものぢやなあ。（トよろしく思入あつて、）これに附けても思ひ出すは、日外高野の麓にてわし故御難儀なされたる、粂之助樣の長の御流浪、その義理故にわしが親父がお貢ぎ申せども、お物堅

き武太夫様御不自由をなされながら、よけいな金子は受けたまはず、あゝどうぞしてわしが手から金子を上げたう思うてゐれど、まだ親がゝりに自由にならず、明暮心にかゝる折柄、思ひがけないこの金子、道ならぬことゝなれど、武太夫様親子をこれでお樂にさし申したい。おのが勝手な了簡ながら、豆御祓の添へてありしは、お伊勢様からお授け同然、此の持主に出逢ふまで暫くわしがこれを借り、武太夫様へお貢ぎ申し、主が知れなば早速に、返しさへしたことなら、さのみ此の身の罪にもなるまい、こりや駕籠屋の來ぬ内に、(ト蒲團の下より雪駄を出して履き、)少しも早う此の場を立退き、明けなば早々お貢ぎ申さん。おゝ、さうぢや。

トばたばたにて孫三郎つかつかと花道へ行く。と此の時上手より駕籠舁の一二出て、

舁一 もし旦那、お待遠でござりました。や、こりや旦那は駕籠には。

舁二 どこへおいでなすつたらう。

と孫三郎抜足をして花道を行くを、兩人見て、

兩人 もし、旦那ぢやござりませぬか。

孫三 え。(トびつくりして足早に走りはひる。)

兩人 どこへ行かつしやつたらう。

ト あたりを尋ねる。時の鐘にて此の道具廻る。

（久七内奥の場）══本舞臺一面の平舞臺、正面暖簾口、上手押入佛壇、上の方一間折廻し障子屋體、下の方一間の臺所入口の腰障子、例の所門口、總て久七内奥の體。こゝに上手へ蒲團を布き、此の上に久七煙草を喫みゐる。下手に善太蒲團と括り枕を持つて立ちかゝりゐる、よき所に角行燈を灯しあり、この見得伊勢音頭の合方、時の鐘にて道具留る。

善太　親方、四つを打つたから、もう寐てもいゝかえ。

久七　おゝ、早く寐て早く起きろ。

善太　あい〳〵、どれ寐ようか。（ト蒲團を柏餅にして寐ようとする。）

久七　これ、小便に行つて來たか。

善太　あい、今行つて來ました。

久七　又たれるなよ。

善太　親方そんなこと言つておくんなさんな。もうわつちも小色の一つもします、いつまで子供ぢやあるまいし、寐小便をするものかね。

久七　なに、しねえことがあるものか、一昨日の晩にもたれたくせに。

善太　それ知られたか、ちえ、残念なゝ。

久七　えゝ、早く寐ねえのか。

ト善太はこれにて蒲團をすつぽりと被り寐る。と奥より久七女房お瀧、結び髮、浴衣、卷帯世話女房の打扮にて、八寸の膳へ小皿物、猪口、燗徳利を載せて持ち出來り、

お瀧　もし、寐酒に一口どうだえ。(ト久七の前へおく。)

久七　おらあ今夜は止さうよ。

お瀧　何故え。

久七　清兵衞の一件で、なんだかおらあ心持が惡い。

お瀧　なんの、そんなことを苦にすることがあるものかね、取らねえといふ明りが立つて、向うが惡いと思へばこそ、村の衆が頭を揃へて、あやまりに來たぢやないか。

久七　そりやァあやまりに來たから、濟ましてやりやァやつたけれど、こんな生業をしてゐなけりやあ、言ひてえことも思ひいれ言つて、あやまり證文でも取つてやるのだ。弱い生業に胸を擦つて、我慢をするのが忌えましい。

お瀧　ほんに、こんな居酒屋も、いゝ加減にしてえの。
久七　いゝ加減にしてえとつて、喰はずにもゐられず、止めることも出來ねえ。
お瀧　外に生業もあらうのに、朝から晩まで立續けにお前は店で肴拵へ、わつちやお奥で洗ひ物、觀音寺の四つを聞いて、やれ嬉しやと寐るまでも、なまぐさいのはどつとしねえの。
久七　どつとしねえと言つて、居酒屋の亭主のなまぐせえのは當然だ、手前當でもあつて乘りかへるのか。
お瀧　馬鹿なことを言ひねえな、なんぼわつちがその以前宿場を稼いだとつて、そんな浮氣な者ぢやあねえよ。一旦お前と緣あつてかう夫婦になつたからは、假令どんなことがあつても、別れ引をするなぞといふことは、金輪奈落しねえ氣だが、然し、お前の氣は知れねえの。
久七　何の知れねえことがあるものだ、おれだといつて元ッから、こんなひつてん酒屋でもねえ、ちつとは元手もあつたけれど皆な手前につぎ込んでしまひ、半年殘つた年季をば、親分を賴んで卷いて貰ひ、やつとの思ひで持つた女房、下手な犬ころぢやあねえが、どこがどこまで銜へて歩く積りだ。
お瀧　さう言はれると嬉しいの。まあ一つお飲みな。（ト猪口を取つてさす。）

久七　たんと注ぐなよ。（ト兩人よろしく酒を飲みながら、）

お瀧　ほんにお前もわつち故、貧乏をしなさるのだから、どうぞして上げてえと、明暮わつちやあ思つてゐるよ。

久七　嘘にも手前がさう言つてくれると、おれも稼ぐに張合がある。

お瀧　元手さへあつたなら、お前何ぞしなさる氣かえ。

久七　さうよなあ、元手せえあつたなら、やつぱり仕慣れた生業だから、升酒がして見てえ。

お瀧　いくらばかりあると出來るえ。

久七　そりやあ十兩あつても、二十兩あつても出來るが、五六十兩あるといゝな。

お瀧　その元手を上げようか。

久七　これお瀧や、いゝ加減に常談言へ。

お瀧　常談ぢやあないよ。

久七　なに、常談ぢやあねえ。

お瀧　あい。

ト時の鐘訛の合方になり、お瀧つか〳〵と行き、善太の寐息を窺ひ元の所へ來て、

久七さん、これをお見。

ト懐から五十兩包みを出し、久七の前へおく、久七取上げ見て、

久七　や、こりや小判で、

お瀧　五十兩さ。

久七　え、この金はどうしたのだ。

お瀧　どうするものか、正直清兵衛のを盜んだのさ。

久七　えゝ。（トびつくりして金を落し）どゝ、どうして取つたのだ。

お瀧　えゝ何だえ、急ッこんで、靜かにしねえな、かういふわけだ。さつき奥で髮を結つてゐたら、あの清兵衛といふぼくいが、首にかけた財布をとつて、苅込んであつた麥の中へ四邊を窺ひそつと入れ、手水場へはひつたのを、障子の穴からふつと見て、はて合點の行かねえことゝ、こつそり行つて出して見りやあ、びつくりしめえか五十兩、これがあつたら一元手とふつと浮んだ惡心に、雨だれ落の石を拾ひ、すり替えておいたのを、ほろ醉ひ機嫌に氣も附かず、出て行つたのが此方の仕合せ、何とこれを元手にして、一番切りかへて見ようぢやあねえかえ。

久七　それぢやあ手前が取つたのか、道理で正直清兵衛が、こゝで取られたと言つた筈だ。おらあ又こ

んな譯とは、夢更知らねえことだから、腹が立つてこてえられなんだ、何故おれに言つてくれねえのだ。

お瀧 言はねえのがわつちが山さ、お前は少しも知らねえから、蕁菜のやうな筋を出して、無暗に腹を立つたので、はたから見ても氣が附かねえ、それだから村の衆も清兵衞が越度にして、あやまつて來たぢやあねえか。あの時お前がこの譯を知つてゐて見な、あゝは行かねえ、心に引けがあつた日には、押手を強くはいかねえわな。

久七 なるほど、おれよりは手前のはうが、惡いことにやあ拔目がねえ。

お瀧 それもお前が可愛いからさ。

久七 そんなら、これを元手にして、

お瀧 どこか、もうちつと場所のいゝ所へ店を出して、今の暮しを昔語り、奉公人の四五人も遣ふやうにならうぢやあねえかえ。

久七 いや／＼そりやあ止しにしろ、人の物をたゞ取つて、それで生業を始めたつて、それぢやあうだつがあがらねえ、こりやあ止しにしろ／＼。

お瀧 止しにしろと言つたつて、この金の仕方がねえ、どうで盜んだ上からは、遣つても遣はなくつて

も、知れた日にやあ命はねえよ。

久七　そりやあ手前は盗んだから、知れたら命がなからうが、おれが首にかゝはることは。

お瀧　いゝや、ねえとは言はさねえの。もと此の金を盗んだのもお前の爲めにしたことだ。おりやあ盗まねえから知らねえの、おれが命にやあ拘はらねえのと、そんな薄情なことを言ひなさりやあ、亭主だつて破れかぶれ、わつちやあ一緒に抱いてはひるよ、その時拔けようと言つたつて、金輪際拔けさせやあしねえ。遣つても首がなし、遣はなくつても首がなけりやあ、これを元手に一日でも、樂をするのがいゝぢやあねえかえ。

久七　遣つても遣はなくつても、首がねえことならば遣はねえのも損か。

お瀧　知れたことさ、運にかなつて一生涯。

久七　知れずにしまへば二人が仕合せ。

お瀧　惡いことは言はねえから、わつちが船に乘りなせえ。

久七　それぢやあこれで店をしまひ、直に升酒屋をおッ始めようか。

お瀧　さうお前はあわてるから、わつちやあ險難でならねえよ。今これを遣つて見ねえ、直に二人に足が附くわな。これから半年か一年こつそりとどめておいて、それからそろ〳〵遣つて見な、誰も

氣の附く氣遣えはねえよ。
久七　なるほど、手前は利口なものだ。
お瀧　なんのわつちが利口なものか、お前が間拔だわね。
久七　ひどく言ふなえ。
お瀧　言つては惡いかえ。
久七　いや、わるくねえの。
お瀧　ほんに、惡くねえといへば、いつ見ても惡くねえのは。(ト金を取つて見る。)
久七　金だなあ。(ト兩人思入。此の時善太、蒲團の中より襦袢にて跳起き、)
善太　どろばう〳〵。
兩人　え。(トびつくりして飛退き、)
久七　おゝ善太か、びつくりした。
善太　もし、喰逃げはどつちへ行きやした。(トお瀧の傍へ顏を出す。)
お瀧　えゝ、寐ぼけたのか。
ト善太を突く、ばつたりと横に倒れ、そのまゝ寐る。これを木の頭。

馬鹿にも困るの。

ト時の鐘、伊勢音頭の合方を早めて、兩人よろしく。

ひやうし　幕

## 二幕目返し　江州多賀明神の場

【役名】―野浦一學、醫師奈須野玄伯、堅田雁八、瀬田關藏、四文屋筋八、田舍娘お菊實は稚兒白菊丸、野浦主税之助。】

〔多賀明神境内の場〕―本舞臺三間上の方一間石垣附の玉垣、下の方より正面へ鉤心に折廻して、同じく玉垣、後ろ境内本社の遠見、左右石燈籠、境内の樹木折り取るべからずの制札、上下に松の立木、總て江州多賀明神境内の體。こゝに中間四人毛氈を敷き、竹の皮包みの肴を取散し、一升徳利をおき筒茶碗にて酒を飲みゐる、この見得大拍子にて幕明く。

中一　ときに杢助、今日は何で御家老の野浦樣には、此の多賀明神へ御參詣なさるのだな。

中二　手前御祝儀を貰つて知らねえか、今日は若旦那主税樣の、御元服のお祝ひで御參詣なさるのだ。

中三　あの野浦一學樣は、元は輕いお方ださうだが、殿樣のお氣に入りで大そうな御出世だな。

中四　そりやあその筈のことよ、何でも出來ねえといふ事がねえものだから、たうとう今ぢやあ一家老の荒川様と御同席だ。
中一　それに引替へ氣の毒なのは、物頭の井筒武太夫様、御子息の粂之助様が短刀とやらを失つて、それが越度で長のお暇。
中二　今ぢやあ手習師匠をして、伊勢の國の窪田村とやらに、ござらつしやるさうだ。
中三　かう〳〵そんな話は日待にして、ちつと茶碗を廻さねえか。
中四　忙しねえ、靜にしろえ、どうでお歸りは夕方だ。
中一　まあゆつくりと、話しながら飲まうぢやあねえか。
中二　この野郎のやうに、飲みたがる奴はねえ。
中三　それだといつて出しツこで買つた酒だ、いつぺいでも餘計に飲まにやあ損だ。
中四　えゝ、しみツたれなことを言ふなえ。
ト皆々酒を飲みにかゝる。と上手より醫師奈須野玄伯出來りて、
玄伯　やい〳〵、此奴等は途方もない奴だ、お供先で榮耀がましい、酒を飲んだり肴を喰つたり、不屆き至極な奴等だわえ。

四人　へいく、眞平御免下さりませ。
玄伯　いやく御免では相濟まぬ、御家老樣の御外聞にかゝはる。引立てまゐる、うせをらう。
四人　どうぞ、お見のがしなされて下さりませ。
玄伯　いやく、見のがすこと罷りならぬ。
四人　こいつはたまらぬ、逃げろく。（ト酒肴をおいて、四人は下手へ逃げてはひる。）
玄伯　うぬ、逃げるとて逃がさうか。（トきつと言つて、）と言うたものゝぢや。どれ、いつぱいしてやらうか。（ト酒を飲み、下手へ向つて、）やいく見ぐるしい、酒肴持つて行かぬかく。（ト大きな聲をして、）いや、これはいゝ酒だ、あいつらも口が奢つてゐるわえ。（ト又酒を飲んで、）やいく、酒肴を片附けをらぬか。唯今愚老が片附けてやらう。何だ、鯡に慈姑、鯣の煮附、まんざらでないわえ。（ト鯡を一口食つて、）やいく、この鯡は四文屋か、四文屋にしてはうまいわえ。
ト言ひながら、又慈姑を口へ入れる。此の時後へ堅田の雁八、瀬田關藏大小にて出來り。
雁八　玄伯老、
兩人　何をしてござるのだ。
ト玄伯びつくりして慈姑が咽喉へつまりし思入にて、むゝと口へ指をさしてもがく、兩人見て、

雁八　これさ玄伯老、如何めされたのだ。
關藏　狐にでもつまゝれはせぬか。
兩人　しつかりとさつしやれ。
ト兩方より背中を打つ、これにて口より慈姑飛出せし思入。
玄伯　いや、すんでのことに、慈姑と心中いたさうといたした。
兩人　何をたはけたことを。
玄伯　いやたはけたことではない。御兩所、一獻如何でござる。
雁八　これは〳〵玄伯老には、お手をひろげられたことでござるな。
關藏　此の春の風引きで、御內證がなほつたと見えますわえ。
玄伯　いや〳〵、愚老が奢りではござらぬ、唯今これで中間どもが、さいつ押へつ飲んでをつたを、目の出るほど叱りましたら、びつくりいたして逃げ出しました、所でこれを錢いらずに飲むといふが、愚老の療治でござる。
雁八　いや、耆婆扁鵲も及ばぬ配劑、近頃感心いたしてござる。
關藏　たゞと聞いては我々も忝い、いつぱいづゝ頂戴いたしたい。

玄伯　さ、御遠慮なくお上りなさい。
兩人　それは千萬忝ない。
　と三人捨ゼリフにて酒を飲みゐる。と下手より、筋八四文屋の亭主にて出來り、
筋八　へい〳〵、御免下さりませ、どうぞ御勘定を、お貰ひ申したうござりまする。
玄伯　やい〳〵、おのれ無禮千萬、勘定をよこせとは何の勘定。
雁八　われ〳〵ども、其方に、
關藏　何も借りた覺えはない。
筋八　なに、ないことがござりますものか、そこであがつておいでなさる、酒が一升に煮染物、兩方で五百五十お貰ひ申したうござります。
玄伯　いや〳〵それは間違ひだ、この酒肴は中間どもが買つたのだ。
筋八　いえ〳〵お中間衆に承りましたら、玄伯樣といふお醫者樣から、勘定を貰へとおつしやいました。
玄伯　えゝいま〳〵しい、いつぱい喰つたか。
筋八　さあ、御勘定を下さりませ。

玄伯　これ御兩所、知らぬ顏をさつしやりますな。
雁八　いや、われ〳〵どもは存ぜぬこと。
關藏　たゞだといふから飮んだのだ。
玄伯　えゝ仕方がない、愚老が拂つて遣はさうが、面目ないが嚢中錢なし、こゝに一朱藥禮がある、これでどうか負けてくりやれ。（ト懷より一朱の包みを出す。）
筋八　よろしうござります、一朱でも取らねえにはましだ、大きに有難うござります。（ト下手へはひる。）
玄伯　いや、計る〳〵と思ひのほか、とんだ目に逢ふものだ。
兩人　玄伯老、御馳走でござつた。
玄伯　えゝ、いま〳〵しい。（ト三人花道の方を見て、）
雁八　や、向うへござるは、野浦の御子息。
關藏　今日御元服の主税樣。
玄伯　こりやお出迎へを、
三人　致さずはなるまい。（ト揚幕にて、）
主税　家來ども、その者を引立てい。

ト中間丸平、角介二人の聲にて、「かしこまつてござりまする。」と答へて、花道より野浦の子息主税若殿の打扮にて、白木の札守を臺に載せ、持ち出來る、後より白菊丸草たばれの島田、お蓮の着てなりし振袖の女裝にて、藁づとを背負ひ伊勢參りの打扮、これを中間二人にて引立て出來り花道にて、

主税　忝なくも今日ッた、殿樣よりお許し受け、いまだ幼稚の某も元服なしてお側勤め、これも偏に日頃より信仰なせし神の加護、それ故産神多賀明神へ參詣いたすを、各方にも、御同道下されて有難う存じ奉りまする。

玄伯　斯くお悦びにお供いたすも、一學樣のお執成にて、立身出世なせし我々故、

雁八　して、召連れられし、

關藏　その女は。

丸平　唯今多賀の本社にて、

角介　無禮ひろいだ下司女、

主税　成敗なさんとこの所へ、召連れましてござりまする。

白菊　思ひがけない不調法、お許しなされて下さりませ。

丸平　こまごと言はずと、

兩人　覺悟いたせ。（トぐつと引附けろ。）

玄伯　何は兎もあれ、主稅樣には、

三人　先づ〳〵これへ。

主稅　御免下され。

兩人　女め、立たう。

ト主稅先に丸平、角介、白菊丸を引立てゝ本舞臺へ來り、主稅眞中に上手に玄伯下手に白菊丸、雁八と關藏は後ろへ控へる。

主稅　最早親人には、御參詣ありしよな。

玄伯　先刻より別當所にて、あなたのおいでをお待兼ね。

雁八　して、それなる女めは。

關藏　いかなる無禮を、

兩人　いたしましたな。

主稅　唯今某本社にて拜禮なしてをつたるところ、これなる女が賽錢を我面體へ打ちつけて、僅なれども額の疵、今日元服の幸先に、血汐をあやせし身の不吉、過とは申しながら元服なせば武士の

數、そのまゝに打捨て難く、これへ召連れましてござる。

玄伯　それはにッくき下司女、お拳固め此の場にて、お手討になされませ。

主税　不便ながら武士の一分、彼女が命を取らねばならぬ。

白菊　えゝ、（トびつくりなし、）そのお腹立は御尤もでござりまするが、後の方より投げたる賽錢、思ひがけない手の外れにて、あなた樣へ打附けましたは、申譯もなき不調法、幾重にもお詫いたしますほどに、どうぞお慈悲に命ばかりは、お助けなされて下さりませ。

玄伯　やあ、ならぬ／＼、彼方をば誰だと思ふ、當時佐々木の御家にて飛鳥も落つる御家老職、

雁八　野浦一學樣の御嫡子、今日御元服の主税樣。

關藏　失禮ひろいだ上からは、所詮命は助けられぬ。

白菊　すりや、どのやうにお詫申しましても、

玄伯　かなはぬことだ。

二人　それへなほれ。（ト丸平、角介左右より押へ附ける。白菊丸思入あつて、）

白菊　かなはぬならば。（ト中間二人を左右へ投げ退け、男の思入。）

玄伯　やゝ、女に似合はぬ立振舞。

白菊　はッ。（ト心附き女の思入にて、ちつと下にゐる。）
皆々　手向ひひろぐか。
白菊　どういたしまして。（トやさしく女のこなし、主税肩衣をはね、刀を持ちて立ちかゝり、）
主税　御兩所、これへお引き下され。
雁八 闕藏　心得ました。女め立たう。
ト白菊丸の手を取り引立てようとする。白菊丸その手をぐつとしめるに兩人びつくりして、
あいたゝゝゝ。
白菊　御免なされて下さりませ。（ト女のこなし。）
雁八 闕藏　きり〳〵立たう。（ト白菊丸を眞中へ引きすゑる、主税思入あつて、）
主税　こりや女、命を取るも不便ながら、刀の手前是非に及ばぬ、覺悟いたしてそれへなほれ。
白菊　今御成敗受けまして、思はぬ命を落しまするも、約束事とあきらめますれば、御存分になされて下さりませ。
主税　女子に稀なよい覺悟、どりや手討にいたしてくれう。
ト主税刀を拔き立ちかゝる、白菊丸合掌する、この時上手にて、

一學　忰、待つた。
主税　あの聲は。
皆々　一學樣。
　　　ト上手より野浦一學燕手衣裳、上下大小の打扮にて出來り、
玄伯　これは〳〵一學樣、
三人　先づ〳〵これへ。
一學　いづれも、許しめされ。（ト上手よき所へ床几にかける。）
主税　して父上には何故に、この成敗をおとゞめありしぞ。
一學　始終の樣子は物蔭にて、逐一に承はつた、我思ふ仔細もあれば、まづ〳〵待ちやれ。
主税　ぢやと申して、
一學　はてさて、待てと申すに。
主税　はツ。（ト刀を納め、肩衣を入れる。）
一學　こりや、下部どもは暫くこの場を。
二人　畏まつてござりまする。（ト兩人下手へはひる。）

一學　こりや女、近う。
白菊　はツ。
一學　さ、苦しうない、近う。
白菊　はあゝ。（卜前へ出る。）
一學　こりや女、見れば旅がけの樣子ぢやが、その方は何處の者ぢや。
白菊　はツ、わたくし事は紀の國高野山の麓にて、微に暮す百姓の娘にてござりますが、兩親ともにみまかりて、頼りなき身に故鄕を離れ、東に少しの知邊あれば、それを頼つてまゐります、旅の者にござります。
一學　すりやその方は兩親なく、僅かの知邊を頼りとなし東へ下ると申するか、はてさて不便な身の上なるが、唯今あれにて承はれば粗相とは申しながら、かすり疵でも武士の面體、疵を負はせし上からは討果さねばならぬ仕儀、そこを一命助けてくれるが、その替りにはそちに又、頼みがあるが聞いてくれぬか。
白菊　命をお助け下さらば、どのやうなことなりとも。
一學　聞いてくれるか。

白菊　聞かいで何といたしませう。
一學　早速の承知、忝ない。
白菊　して、わたくしへお頼みとは。
一學　頼みといふは外でもない、身が養女に貰ひたい。
白菊　えゝ、素性賤しきわたくしを。
一學　仔細あつて懇望いたす。
白菊　命替りのお頼み故、いかなること、思ひのほか、足らはぬ身をば御養女とは、此の身の願ひ。（トちよつと男になり。）さあ、願うてもない身の仕合せ、有難う存じますわいな。（ト女のこなし。）
一學　得心して先づは大慶。
玄伯　こりや御家老様には何故に、身元知れざるあの女を。
三人　御養女にはなされまするぞ。
一學　最前より見るところ、一器量ある立振舞、殊には相貌勝れし生れ、我片腕ともなるべきもの、測らずこれにて出逢ひしは、多賀明神より我への賜物。
主税　して、父上には養女にめされ、如何遊ばす御所存でござりまする。

一學　殿右衛門佐樣、このほどより御氣質あらくゐらせられるも、御奥に側女のあらざる故。養女となしてその女、殿へ側女に上げる所存。

玄伯　然し、素性の知れざる女を。

雁八　お部屋となさば、

關藏　人の嘲り。

一學　はて、我壯年の隱し子と、披露いたさば誰あつて、批點の打手もござるまい。

白菊　すりや、わたくしを殿さまへ。

一學　側女に上げるが嬉しいか。

白菊　あゝ、思ひがけない、この身の出世。

玄伯　なるほど、女は氏なうて玉の輿とは。

三人　この事だ。

一學　それもこの身に望みあつて。

白菊　え。

玄伯　扨は、豫ての。

一學　こりや。（ト押へる。この時本釣鐘。）壁に耳あり。（ト此の時以前の角介窺ひ出て、）
角介　樣子は聞いた。（ト行かうとするを一學捉へて、）
一學　蟻の穴より。
三人　堤の崩れ。
　ト角介振解くを一學拔打に切る、角介見事に轉る、この時連判狀を落すを、主税取上げ見て、
主税　こりやこれ、連判。
　ト一學左りの手にて引取る。白菊丸連判と聞いて寄らうとするを、一學刀を突出す。白菊丸振袖にて刀を押へ片足踏出し、心附いて足を引いて一學と顏見合せるを木の頭。一學につたりと思入、白菊丸恥かしき思入にて糊を拭ひ、主税扨こそといふこなしよろしく、大拍子にて、
　ひやうし　幕

# 三幕目

## 窪田村隣合の場

〔役名――井筒武太夫、同粂之助、正直清兵衞、松賀屋孫三郎、三木藏之進、立場の喜兵衞、判人源

八、清兵衞娘お梅等。」

（井筒武太夫浪宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重屋體。正面更紗の暖簾口、上の方一間障子屋體例の所門口、手蹟指南の掛札、下の方は藪疊、總て窪田村武太夫浪宅の體。こゝに手習子四人机に對ひ手習をしてゐる、下手に井筒の下部藤助薪を割つてゐる、この見得隣り柿の唄にて幕明く。

子一　いろはにほへと、

子二　ちりぬるをわか、

子三　都路は五十路あまりに三つの宿、

子四　源平藤橘孫曾孫やしやご、

藤助　これ〳〵お前方は口ばかりきいてゐずと、手習ひを精出さぬか。

子四　もう手習ひはしてしまつたから、お讀をさらふのだ。

藤助　讀をよむならほんまに讀みなせえ、孫曾孫やしやごといふがあるものか。

子四　えゝ人のことを言はねえで、お前ほんたうのことを讀みねえ。

藤助　讀まねえでどうするものだ。

子四　へゝえ、此の間お師匠様が醫者様の所書を、假名で書いておやんなすつたら、醫者様を呼んで來

ねえで、いゝいしやを呼んで來たぢやあねえか。

藤助　ありやあいしやと假名で書いてあつたを、石屋と讀違へたのだ。

子四　それ見たことか、笑つてやれ。

四人　わあい〳〵。（ト子供等囃す。）

藤助　えゝいめえましい餓鬼どもだ。いゝ年をしたものを、へこましやあがる。

ト花道より三木藏之進序幕の裝にて出來り、本舞臺へ來て、

藏之　賴まう〳〵。

藤助　はツ、どちらからおいでなされました。（ト言ひながら門口を明け、）これは藏之進樣、ようこそおいでなされました。さゝ、お通りなされませ。

藏之　藤助、許しやれ。（ト内へはひり、）扨、久々逢はぬが、武太夫どのには御健勝でござるかな。

藤助　へい、お達者にござりまする。

藏之　これは重疊、身共がまゐつたと申してくりやれ。

藤助　かしこまりました。（ト奥にて武太夫の聲にて、）

武太　いや、知せに及ばぬ、唯今それへまゐるであらう。（ト着流し一本差し、更けたる打扮にて煙草盆を提

出で來り、）これは／＼藏之進どの、ようこそおいでゞござる。
藏之　其の後は打絶えましたが、お替りもなく大慶にござります。
武太　その許御家内にも御無事でござるかな。
藏之　皆息災にござりまする。
子供　いろはにほへと、ちりぬるをわか。
武太　こりや／＼、手本の讀なら奥へ行つてしやれ。
子供　はい／＼。（ト皆々奥へはひろ）
武太　こりや藤助、奥へ行つて茶の支度をしやれ。
藤助　かしこまつてござりまする。
藏之　いや、必ず構うて下さるな。
藤助　いえ、ほんのお茶ばかりでござります。どれ、仕かけませうか。（と奥へはひろ。）
藏之　扨、紛失の短刀は、いまだ手がゝりも知れませぬかな。
武太　されば、手分をなして詮議いたせど、今に手がゝりも知れざるは、盜人の仕業でなく、身共を罪に陷さんと、佞人どもの仕業と見ゆる。

藏之　いやも、次第に蔓る佞人讒者、上邊は殿へ忠義を盡し、底意は御家を横領なさんと、謀叛を企つ野浦一學、既に此程も何處よりか素性知れざる女を招き、娘となしてお部屋に差上げ、彼れに種々の惡事を勸め、忠義な者には科を構へ目通りを遠ざけさせ、日夜に募る不行跡、されども御家老荒川殿が政事をとつてござるので、野浦が自由になすことならず、まことにもつて荒川殿は破れたる扇の要でござる。

武太　いかさま、荒川殿がござらずば、某親子もどのやうなお咎め受けうも知れぬ身の上、短刀詮議の御猶豫はまつたく荒川殿のお執成、よしなにお禮を申して下され。

藏之　委細承知いたしてござる。

武太　一刻も早く短刀を詮議しいたし、歸參を願ひ及ばずながら、荒川殿と申し合せて、野浦を始め惡人どもを追放なし、心を安く持ちたうござる。

藏之　それのみ願ひをりまするて。

ト兩人よろしく煙草を喫みゐる。花道より井筒粂之助、着流し、大小、浪人裝にて出て來る、後より松賀屋孫三郎羽織着流しにて出來り、花道にて、

孫三　憚りながら、それへおいでなされまするは、井筒粂之助樣ではござりませぬか。

粂之　おゝ、誰かと思へば松賀屋孫三郎、いづれへ行くのぢや。

孫三　はいお宅へ上りますところでござりまする。

粂之　それは幸ひ、連立つてまゐらう。

孫三　お供いたすでござりませう。（ト本舞臺へ來り、門口を明け、）

粂之　親人、唯今戻りましてござりまする。（ト内へはひる、孫三郎門口にゐる。）

藏之　おゝ粂之助どの、戻られしか。

粂之　これは思ひがけない、藏之進さま。

藏之　あまり御無音故、お尋ね申しにまゐつた。

粂之　それは有難うござりまする。

武太　（表の方へ思入あつて、）悴、表に誰やらをるではないか。

孫三　へい、孫三郎めにござりまする。

武太　おゝ松賀屋の悴か、苦しうないとも、これへ〳〵。

孫三　まつぴら御免遊ばしませ。（ト内へはひり、藏之進を見て、）これはどなた樣かと存じましたら、三木樣でござりましたか。

藏之　孫三郎、久しう逢はぬの。

孫三　いつもながら御機嫌よろしう、お目出度うござりまする。

藏之　いや、忝なうござる。いつぞは逢うて禮を申さうと存じをつたが、毎度當家へ親切に、心附をなすとのこと、某に於ても忝なう存ずる。

孫三　いえもう、どのやうにもお世話申上げねばなりませぬが、兎角心に任せぬやうにござりまする

武太　なか〱若い者に似合はず、奇特なことでござるて。

粂之　して孫三郎には、何ぞ用でもあつたか。

孫三　いえ、別して用事はござりませぬが、（ト藏之進へ思入あつて）今日わたくしが上りましたは、近頃失禮にござります故、お腹立かは存じませぬが、斯く御浪々遊ばして御不自由勝においでなされますも、元はといへばわたくし故、せめて御浪々のその内は御不自由のないやうに、いたしたいと存じまして、失禮をも顧ませず持參いたせしこの金子、どうぞお納めなされて下さりませ。

ト懷より前幕の財布を出し、五十兩包みを扇へ載せて武太夫の前へ出す。

武太　その親切は忝ないが、いまだ蓄へも乏しからねば、さのみ不自由もいたさぬ故、志しは受くるほどに、そちへ返し申すぞ。

孫三　ではござりませうが、折角持參いたしましたれば、どうかお納め下さりませ。

武太　ちやと申して、大まいの金子。なう悴。

粂之　左樣でござりまする、いつを限りと知れぬ浪々、長い月日のその内に差支へしことあらば、其の節無心を申さうほどに、まづこれは持つて歸りやれ。（ト金包みを孫三郎の前へおく。）

孫三　いえ、どのやうにおつしやりましても、これは持つて歸りませぬ。

粂之　いや、そちがさう申せば此方も、是非ともこれは返さねばならぬ。

孫三　すりや、どうあつても此の金子は、お受けなされて下さりませぬか。

粂之　いかにも。

孫三　はて、困つたものでござりますな。（ト當惑の思入、藏之進これを見て、）

藏之　斯く浪々めされしも、孫三郎が危難をば粂之助が救ひし折、高野へをさめる短刀を奪はれしが身の越度、その言譯に貢ぎの金、武士も及ばぬあつぱれ實意、藏之進感心いたす。いやなに武太夫殿、折角の親切、この金はこのまゝにお納めなされたがよろしうござらう。

武太　いかさま、そちが親切を、無にいたすも本意ならず。

孫三　左樣なれば、この金子は、

武太　申し受けるぞよ。
孫三　有難う存じます。
粂之　空には思はぬそなたの親切、短刀詮議仕出して、歸參いたせしその上ではきつと恩を報ずるぞよ。
孫三　あゝ勿體ないことおつしやりませ、僅五十やそこらの金子で、そのやうにおつしやりましては申し上げやうがござりませぬ。
藏之　親類とは申しながら、何を申すも身共は遠路、譬にもいふ近くの他人、此の後ともに賴みまするぞ。
孫三　及ばずながらわたくしが、身にかなひましたことならば、お世話いたしますでござりまする。
藏之　いや、それ承はつて何より安堵、最早身共はお暇申さう。
武太　それはあまり性急な、
粂之　今宵はお泊りなされても、よろしいではござりませぬか。
藏之　いや〳〵内々の旅行なれば、御無事の體を見る上は、片時も早く歸らねば相成らぬ。
武太　左樣ござつては達てとも申されぬ、それに就けても短刀を、詮議し出す心得なれど、萬一日延の切れたる時は、荒川殿へ追ひ願ひ、よしなに執成しお賴み申す。
藏之　その儀は承知いたしてござる。

粂之　左様なれば伯父者人。

藏之　又候その内。（ト孫三郎は立つて藏之進の履物をなほす。）これは憚り。

武太　然らば藏之進どの。

藏之　お暇申す。（ト辭儀をなし、）孫三郎ゆるりとしやれ。

ト堅く言ふ。孫三郎はツと辭儀をなす。唄になり藏之進思入あつて花道へはひる。

武太　いやなに孫三郎、折角の親切故、申受けは受けるけれど、今さしあたり入ることもなければ、差支へもあるまいが、萬一入用の事もあらば、遠慮なく受取りに來やれ。

孫三　有難うござりまする。

武太　悴、用簞笥へしまつておきやれ。（ト金を粂之助に渡す。）

粂之　かしこまりました。（ト上手の戸棚の内の用簞笥へしまふ。）

武太　いや、身共は奥で子供等に、手本の讀を教へねばならぬ、若い者は若い者同志、用事もなくば粂之助と、ゆるりと話しをして行たがよい。

孫三　へい、お邪魔いたしますでござりまする。

武太　どれ、教へて遣はさうか。

ト唄になり、武太夫は奥へはひる。と下手より清兵衛娘お梅、在所娘の打扮にて出來り、

お梅　はい、御免なされませいな。（ト内へはひる。）

粂之　あゝ、お梅か。

お梅　若旦那樣、父さんはこちらへ上りませぬかいな。

粂之　今日はまだ一度も來られぬわいの。

お梅　左樣でござりますか、昨日庄屋樣のお使ひに行て戻つてから、そは／＼と今朝も疾から何處へやら、もしこちらへでも上りましたかと、ちよつと見にまゐりましたわいな。

粂之　大方何處ぞで、飮んでゞもゐるのであらう。

お梅　よい加減に、戻つて下さんすりやよいに。

ト孫三郎お梅へ思入あつて、

孫三　もし若旦那、在所に稀なこの娘御、御近所でござりますか。

粂之　いや、この娘御は、つい隣りの正直清兵衛どのといふ百姓の娘御、それは／＼親子とも隣同志とて、親切によう世話をしてくれるわいの。

孫三　それはお仕合せなことでござりまする。このやうな美しい、お話し相手がおいでになりましたら、

もうわたくしは、お暇を仕りませう。
粂之 まあ、よいではないか。
孫三 いえ、をりましたらお邪魔になりませう。
お梅 何の、邪魔になりませうぞいなあ。
孫三 いえまたゆるりと、いえなに、上りまするでござりまする。(ト言ひながら門口へ出る。)
粂之 然らば、孫三郎どの、
孫三 又、その内伺ひまする。
ト唄になり孫三郎花道へはひる。お梅後を見送りゐて門口をしめ、粂之助の傍へ來て、
お梅 もし、若旦那様。
粂之 あゝ、これ。
ト奥に武太夫がゐるといふ思入。なまめいた合方になり、お梅あたりへ思入あつて、
お梅 此間は間が悪って、お側へ寄ることもなりませぬわいなあ。
粂之 はて、それも互ひの身の爲め、短刀詮議のその内に、かういふ噂が屋敷へ知れては、歸參の邪魔になるほどに、必ず人目にかゝらぬやう、氣を附けてくりやれ。

お梅　そのお言葉が思ひの種、わたしや悲しうござんすわいな。

ト お梅泣く。こゝへ奥より幕明きの藤助出來り、この體を見て、

藤助　これは怪しからぬ。（ト間の悪き思入にて奥へはいる。兩人はこれに心附かず。）

お梅　あの、旦那樣はおいでなされはしませぬかいなあ。

粂之　子供に讀を敎へてをれば、そなたとこゝにゐたとても誰も氣遣ふものはない。

お梅　して、あなたがお屋敷へ、御歸參なされたその上は、お宅をお持ち遊ばされて、もうお世繼ぎでございりませうな。

粂之　さあ、それも父が了簡次第、此の身の儘にはならぬことぢや。

ト こゝへ又奥より藤助盆へ茶碗と土瓶を持ち出來り、この體を見て、

藤助　これは怪しからぬ。

ト 又そつと茶をおいて奥へはひる。お梅思入あつて、

お梅　まゝにならぬとおつしやれど、若し親御さまからお許しなら、

粂之　許すとは、そりや何を。

お梅　さあ、それは。（ト言ひにくきこなし、粂之助思入あつて、）

粂之　かうして一つにゐたいのか。

　　トお梅の手を取つて引寄せようとする。この時暖簾口より、手習子供四人出來りて、

子一　やあ、お梅さんと、ヨウヨ。

子四　若旦那と、ヨウヨ。

四人　ほうやらほう〳〵。

　　ト手をたゝいて囃す。兩人びつくりして飛退く、その拍子に藤助のおいて行つた茶碗をひつくり返す。

粂之　えゝ、やかましい。（ト手習子を制するを、道具替りのしらせ。）靜にせぬか。

　　トお梅は手拭を出して茶のこぼれしを拭ふ。手習子供は囃しながら暖簾口へ逃込む。この模樣にて道具廻る。

（清兵衛宅の場）＝本舞臺一面の平舞臺、正面暖簾口、上手一間押入戸棚、上三尺佛壇、下手鼠壁、例の所藁屋根の門口、下手藪疊、總て隣同志清兵衛内の體。こゝに以前の藤助煙草を喫みゐる。

藤助　いや、あのお梅ばうも、いかに年がいかねえとツて、我家を明けツぱなして晝も一緒にゐたいのか。また若旦那も若旦那だ、短刀の詮議にお留守で、とんだ詮議を始めさつしやつたから、家に

ゐても氣が揉める故、こゝへ來て留守番をしてゐるが、こんなつまらねえことはねえ。お梅ばうが歸つて來たら、一合買はせにやあならねえわえ。

ト藤助煙草を喫みゐる。花道より清兵衞先に杉本屋彦十郎脚絆一本差し、肩へ羽織をかけ、源八半合羽脚絆一本差し、判人の裝にて附添ひ出來り。

彦十　もし清兵衞さん、お前の家はもう直かえ。

清兵　はい、向うがわしの家でござりまする。

源八　それぢやあ家へ行つて相談しませう。

清兵　どうぞさうなされて下さりませ。（ト門口を明けてはひり、）娘、今歸つた。

藤助　おゝ清兵衞どんか、お梅ばうはこちの家へ來てゐる故、留守をしてゐました。

清兵　えゝ旦那の御用があらうのに、氣の毒なことであつた。

藤助　それでも何ぞ盗まれるといけぬ故。

清兵　なに、どえらいものを盗まれたから、此の家の一つや二つ盗まれたとて何でもねえ。

藤助　又一ぱいやつて來たと見えて、いゝいゝ、おほふうなことを言ふな。（ト門口へ行く。）

清兵　どうぞ御用が濟んだら、娘に歸れとさう言つて下せえ。

藤助　おい〳〵。（ト下手へはひろ。清兵衛兩人に向ひて、）
清兵　さあ、こちらへおはひりなされませ。
彦十　御免なせえ。（ト兩人内へはひり、穢ないといふ思入にて源八手拭にて疊の塵を拂ひて、）
源八　旦那、こゝらへお坐んなせえ。
彦十　いや、これはきれいなお住居だ。
清兵　お褒めなさるほどでもござりませぬ。
源八　まじめに受けてゐるヤツさ。
清兵　（穢い煙草盆を出し、）まあ一服お吸ひなされませ。
彦十　いやもう、構はつしやんな〳〵。
清兵　いえ、おかまひ申しはいたしませぬ。
源八　かまはれてたまるものか。
　　ト此の内清兵衛縁の缺けた盆へちぐはぐな茶碗を二つ載せ、
清兵　ちと、ぬるうござりますが、いつぱい上らつしやりませ。
　　ト出す、兩人取つて穢いといふ思入にて飮む眞似をする。

よろしくば、もう一ぱい上げませうか。

彦十　いやも、いつぱいで澤山だ。

源八　ときに清兵衞さん、わしも旦那も觀音前で昨日近附になつたところ、今朝お前が家へ來て、據ろない譯で娘を賣りてえから、世話をしてくれと言ひなさる故、丁度旦那が泊つておいでなすつたからお連れ申して來たが、さつき表で娘御に出逢ひ、旦那にもお見せ申しておいたから、金高せえ定つたら、直に證文をして連れて行く積りだが、それでいゝかね。

清兵　はい、何分勝手を存じませぬこと故、よろしくお頼み申しまする。

彦九　至極おとなしさうな娘だから、まづ五年の年季で百兩に買ひませう。

清兵　え、五年でいつぽん、（トびつくりして、）あの、たつた四百にかえ。

源八　馬鹿なことを言ひねえ、いつぽんとは百兩のことだ。

清兵　いつ名が變りましたか、まだお布令はまはりませぬが。

彦十　こりやわしが惡かつた。百兩のことをいつぽんといふは、商人の符牒のやうなものだ。

清兵　へえゝ、さうでござりますか、こりやあ一つの得をえました。

源八　ときに、百兩でよからうね。

清兵　いえ、悪うござります。

彦十　それぢやあ、もうちつとほしいのかね

清兵　いえ〳〵、五十兩でよろしうござります。

源八　これ清兵衞どん、大は小を兼ねるといふぜ。後から年季を増すよりも、旦那があゝ言ひなさるから、百兩にしておきなせえな。

清兵　それだといつて、五十兩あればよろしいのでござりますものを。

源八　さうでもあらうがの、三年させるも五年させるも苦界の勤めは同じことだ。餘計あつて不用なものぢやあねえ。五十兩入用なら、殘りの金で田地でも買ひ、樂をするがいゝぢやあねえか。

清兵　えゝ、娘を賣つた金で樂をしようなぞといふ、そんな心は微塵もない。據ないことがあればこそ、辛い勤めもさせるものゝ、我身に樂がしたいとて、地獄のやうな女郎屋へ、可愛い娘がやられるものか。

彦十　これは御挨拶だ

源八　これ清兵衞どん、なんぼこなたが正直だつて、地獄のやうな女郎屋とは、あんまり正直過ぎやすぜ。

清兵　これは粗相を申しました、まつぴら御免下さりませ。

彦十　こう源公、百兩と思つたが、當人の望みなら五十兩にしておかうぢやねえか。
源八　それぢやあ、わしが骨折代がねえ。
清兵　いや、その骨折代には蕎麥粉でも挽いて進ぜませう。
源八　蕎麥粉を貰つて何になるものだ、五分の禮はお定り、五十兩なら二兩二分だ。
清兵　それをお前に上げますのか。（トびつくりする。）
源八　それが判人の利得だわな。
清兵　それぢやあどうでも取らつしやるのか。
源八　知れたことさ。
清兵　これだから地獄だといふのだ。もし、そちらの旦那、五十兩と言ひましたが、二兩二分買ひ上げて下さりませ。
彦十　なるほどお前は正直な人だ。案じなさんな、その禮はおれの方でやらうから、極りよく證文の方は五十兩にしておかう。
清兵　それは有難うござりまする。いやお前樣は、地獄の中の佛樣だ。
源八　へん、正直者でも胡麻はするの。

彦十　それぢやあ清兵衛どん、證文は認めて來ましたから、金高を書入れて直に金を渡しませう。

清兵　あ、もし、まあ待つて下さりませ。まだ娘に話しませぬ故、とつくりと話しまして、得心させたその上で、證文をいたしませう。

彦十　何だ、まだ當人に話さねえのか。

源八　早く話しておけばよいのに。

清兵　それだといつて今朝ッから駈歩いて、話す間がござりませぬものを。

彦十　何にしろ、こゝにゐては邪魔だらう。

清兵　むさくとも、奥でお待ち下さりませ。

彦十　いや、これよりむさくつては、坐つてをられぬ。

源八　お茶でも入れませう、私共へおいでなさい。

彦十　おゝ、さうしよう。（ト兩人門口へ出て、）それぢやあ清兵衛どん、出なほして來ますよ。

清兵　どうぞさうなされて下さりませ。

源八　いや、すばらしく蚤に取付かれた。

彦十　何のことはねえ、掃溜にゐるやうだものを。

ト、兩人は下手へはひる。清兵衞門口へ出て、

清兵　コノ、娘は何をしてゐるか。お梅よ、お梅よ、用が濟んだらちよつと歸つてくれ。

お梅　（下手にて、）あい／＼、今行きますわいな。（ト出來り、）父さん、何處へ行かしやんしたぞいな。

清兵　どこといふことはなく、驅歩いて來た。

お梅　お前が歸つて來たら、悅ばさうと思つてゐた。さつき本陣の旦那樣から、昨夜よいお泊りがあつて、その殘り物ぢやが酒の肴にせいとて、このやうなお肴を下さんしたわいな。

ト下手より八寸の膳の上へ、鯛を入れし皿を載せ、持ち出て見せる。

清兵　おゝ、これは見事なものぢや。

お梅　大方これで飲ましやんせうと、酒も買うておきました。直にお燗をつけようかいな。

清兵　あ、いや／＼、なか／＼おりや酒どころではない。まあおぬしに用がある、こゝへ來や。

お梅　あの、わたしに用とはえ。

清兵　おい、用も用、どえらい用がある、まあこゝへ來や。

お梅　あい／＼、（ト清兵衞の側へ來り、）とゝさん、その用はえ。

清兵　まあ一通り聞いてくりやれ。（ト思入あつて、）言うたらそちが案じようと、今まではかくしてゐた

が、何を隱さう庄屋樣から、昨日太々の寄金を五十兩預かつて、御師の所へ持つて行く途中で、村の者に逢ひ、決して飮むなと庄屋樣に、意見を言はれた酒を飮み、醉つたまぎれに口がすべり、太々の金を持つて行くと言うたがおれの運の盡き、その酒を飮んだ酒屋にてその金をすり替へられ、やかましくは言うたけれど、盜んだといふ證據がないので、却てこちらが逆ねぢくひ、村の衆が中へはひり詫言して濟ましたが、日頃おれが正直故誰も疑ふ者もなく、庄屋樣がおつしやるには、十と二十は貸してやらうから、後をどうか都合せいと力を添へて下すつた故、血緣近附に一兩づゝ無心言うてこしらへようと、今朝ッから出かけたが、先方へ行くと口ごもり、無心言ふことができず、せうことなしに歸つて來たが、それに附けて賴みがあるが、何と聞いてはくれまいか。(下お梅これを聞いてびつくりして、)

お梅　そりやまあ、ひよんな災難に逢はしやんしたなあ。道理こそ昨夜から顏の色も常ならず、そはそはとさしやんす故、何ぞ苦勞なことでもござんすかと、お前に聞けど言はしやんせず、わたしや案じてゐたわいなあ。さうして改まつて、わたしへ賴みとは何でござんすえ。

淸兵　さあ、そちへ賴みといふはッ。(下思入あつて、佛壇の障子を明け、位牌へ向ひ思入あつて、)これ嚊、大方草葉の陰からして、おれが難儀見てゐようが、どうぞ堪忍してくりやれ。あゝ忘れもせぬ十年

後、痰勞といふ病ひにて二年越しのこなたの煩ひ、かんがくさへもろく〱に、届かぬ藥に日にましに、痩せ衰へて今日か明日死ぬかと、覺悟極めたる枕頭へおれを呼び、所詮わたしは助かりませぬがお前の死に水取らぬのと、僅七歳の娘をば殘して行くが黄泉の障り、わたしがゐてさへ其の日に追はれ、手織一枚着せぬ故、節句々々や觸正月着飾る中に身すぼらしう、世間の子より穢ない裝に肩身狹ゥ遊んでゐるを、見るのが悲しうござつたが、父これからは猶更に不自由勝ちにあらうから、辛い他人の奉公は、どうぞさせて下さるな、小さい時から蟲持故氣兼苦勞をしたことなら、わたしがやうな病ひが出て、逆事があらうも知れぬ。こればツかりが遺言と、枕も上らぬ病人が起返つて手を合せ、拜む拍子にがつくりと前へこけたがお暇乞ひ、聞くも不便に抱起し決して奉公させぬから案じるなと言うたれば、斷末魔のその中で、につこり笑ふが此の世の別れ、手足も冷たく引きとる息、その遺言を忘れぬ故今日まで家においたれど、おくにおかれぬ我難儀、どうぞ堪忍してくれ、堪忍してくれ。

ト清兵衞よろしく思入にて言ふ。お梅もこの内涙を拭ひ、愁ひの思入にて、

お梅　もし父さん、さうしてわたしへ頼みとは。

清兵　おゝ、今嚊に言譯したれば、言うて聞かすぞよ。

お梅　早う言はしやんせいなあ。

清兵　さあ、そちへ頼みはな。身を賣つてくれいやい。

お梅　えゝ。（トびつくりなす、清兵衞術なき思入。）

清兵　おゝ、そのびつくりは尤もだ〳〵、何科もないそちが身に勤め奉公してくれといふ、こんな邪慳な親があらうか。嚊が死んだその後は男の手にて育つた故、女らしい裝もさせず、ほんの手足を延したばかり、親甲斐もないこのおれが、如何に我身の難儀とて、親顔をして金の代りに勤め奉公してくれと、言ふおれが苦しさを、思ひやつてくれいやい。

トよろしく思入、お梅は身を賣つては粂之助へ濟まぬといふ思入にて泣きゐる。

おゝ親一人子一人のおれに別れて行くのぢや故、悲しいのは尤もだが、そちばかり勤めはさせぬ、親の爲めに身を賣るは世間にいくらもあることだ、身を捨てゝこそ浮む瀬とよい衆に請出され、玉の輿に乘るまいとも限らぬが勤めの身、厭でもあらうが親の頼み、どうぞ勤めをしてくりやれ。これ、手を下げて頼む〳〵。

お梅　（思入あつて、）折角のお頼みながら、これぱかりは。

清兵　や。

お梅　堪忍して下さんせいな。

清兵　おゝ堪忍してくれいとは、勤めするのが不承知なか。

お梅　あいなあ。（トはつと泣伏す。清兵衛これを聞き、がつかりせし思入。）

清兵　むう。（ト溜息をつく、この中門口へ粂之助來て窺ひ、その樣子を聞いて、我家へはひる。清兵衛是非なき思入にて、）あゝ、譬にもいふ地獄の勤め、いやといふのも尤もぢやが、（ト佛檀へ思入あつて、）たゞの奉公でさへ出してくれなと、死んだ嬶が今際の頼み、いやといふのは冥土から大方嬶が留めたであらう。こりや止しにしよう／＼。（ト佛檀へ向ひ、）これ、もう勤めにはやらぬほどに、案じるな案じるな。とはいふものゝ、金が出來ねば村方の衆にどうも濟まぬ。その言譯には、いつそ此の身を。

お梅　え。

清兵　娘、さらばだ。

ト清兵衛有合ふ鎌にて死なうとする、お梅びつくりして縋り留め、

お梅　あゝこれ父さん、早まつて下さんすな。

清兵　えゝ留めるな、放してくれ／＼。

お梅　いえ〳〵、放さぬ〳〵。
清兵　えゝ放せ〳〵。
お梅　あれ、父さんが死なしやんす、誰ぞ來て下さんせいな。
ト此の時隣りより粂之助、つか〳〵と出て來て内へはひり、清兵衞を留めて、
粂之　これ清兵衞どの、待たつしやれ。
清兵　お隣りの若旦那か、どうぞ放して下さりませ。
粂之　いや〳〵放さぬ、まあ〳〵待たつしやれ。
清兵　いえ〳〵、死なねばどうも言譯がなりませぬ。
粂之　はて、死ぬに及ばぬ、待てというたら待たつしやれ。（ト鎌を取り上げる。）
清兵　それぢやというて、五十兩といふ金ができねば、生きてゐられませぬ。
粂之　その金、わしが貸して進ぜませう。
清兵　え。（ト粂之助五十兩包みを出して、）
粂之　さ、遠慮なく遣はつしやれ。
清兵　え、すりやこのお金を、お貸しなされて下さりますか。

粂之　その金子は松賀屋孫三郎といふものが、浪々を貢いでくれた五十兩、今手に無うても困らねば、此の金子にて太々の五十兩を償うて、そなたの身晴をしたがよい。

清兵　え丶有難うござりまする。

お梅　そんなら、それで父さん、お前も死なしやんすには及びますまい。

清兵　お、そちも勤めをするには及ばぬ。

お梅　これといふのも、若旦那樣のお蔭。

兩人　え丶有難うござります。

ト伊勢は津で持つの唄になり、下の方より以前の彦十郎、源八出來りて、

彦十　清兵衞どの、もうようござるかな。

清兵　お、これは杉本屋の旦那樣か、今お斷りにまゐらうと、思うたとこでござりまする。

彦十　なに、斷りに來るとは。

清兵　はい、今五十兩の金ができました故、お斷り申します。

トこれを聞き、兩人內へ入りて、

源八　こう〳〵そりやあお前何を言ふのだ、娘を賣りてえから賴むといふ故、わざ〳〵杉本の旦那を連

れて來たのだ、今更そんなことを言はれちやあ、おれが旦那へ濟まねえ。是非とも娘を買はにやあならねえ。

清兵　それだといつて、金に困るから賣らうと言つたが、その金が出來たから賣らないといふのだ。

源八　いや一旦約束をしたからア、賣らねえといつても買はにやあならねえ。

清兵　えゝこの人は無理ばかり、金はそつちのもの、代物はこつちのものだ。

源八　そりやあ言はねえでも知れたことだが、駕籠を一挺すやしても、百文のあぶれは出さにやならねえ。

彦十　これ〳〵源八、靜にしやれ。

源八　いえ〳〵旦那、うつちやつときなせえ。

彦十　えゝ靜にしろといふに。これ清兵衛どの、もと〳〵こつちから買ひてえといつて來たのぢやあねえ、賣りてえといふからわざ〳〵來たのだ。斷るなら、斷るやうに斷りの言ひやうもあつたものだ。

清兵　何といつていゝか知らねえが、金ができたから賣らねえといふのだ。

お梅　あゝもし父さん、なんぼ正直がよいとて、お前のやうに言うては濟まぬわいな。

清兵　かういうて濟まずば、駕籠屋の格で百のあぶれをやりませう、さうしたら言分はありますまい。

源八　なに、百のあぶれを出す、い、加減に人を馬鹿にしろえ。江戸は元より京大阪四國九州蝦夷松前、口はドツてえことをいふやうだが、女郎屋といふ女郎屋で誰知らねえものはねえ、判人の源八だ、うぬらにをかしな文句を言はれ、こけにされちやあ旦那へ濟まねえ。さあ、おれと一緒に來やあがれ。

ト源八立ちかゝり清兵衛を引立てようとする。これまで粂之助見てゐたが、この時源八を留め、

粂之　あこれ／＼、腹の立つのは御尤もでござるが、まあ／＼待つて下さい。

源八　いえ／＼、うつちやつておいておくんなせえ。

粂之　いや、わしはこの隣りに手蹟指南いたすものぢやが、まあ／＼待つて下され、清兵衛どのは正直者、つゆ輕薄を言はぬ故氣にさはつたでもあらうけれど、心に惡氣はない男、わしに免じて不承でも、どうぞ了簡して下され。

源八　いえもう、了簡ならねえといふ所だが、お前樣の御挨拶なら、ねえもし旦那。

彥十　お隣りのお方が御挨拶なら、まあ了簡するがよい。

粂之　そんなら了簡して下さるか、それは忝い。これ清兵衛どの、ぜんたいこなたが正直過ぎて、人

樣に腹を立たせる。こゝへ來て、お詫をしたがよいわいの。

清兵　はい〳〵、大きに言ひ過しをしました。了簡して下さりませ。

源八　なに、さう言ひなさりやあ、こゞ、こぶを出す氣はござりませぬ。

お梅　どうなることゝ存じましたに、若旦那樣の御挨拶で、事なく濟みまして有難うござります。

粂之　(お梅に向ひて、)それはさうと、二人の衆に、何はなくとも御酒一つ上げたいものぢやが。

お梅　あゝもし、丁度よいことがござります、本陣から貰うたこゝにお肴がござんすに、父さんに上げようと買つておいた酒もあれば、これを上げてはどうでござりませう。

粂之　おゝ、それは幸ひ、早うこゝへ出したがよい。

お梅　あい〳〵。(下以前の魚を持出て、燗徳利へ酒をうつし土瓶へ入れる。)

彥十　あゝもし、お構ひ下さりますな、わしどもはもうお暇いたしまする。

源八　御馳走にならぬはうが、勝手でござりまする。

粂之　さうでもあらうが、まあ一つ仲直りといふではなけれど、これ清兵衞どの、こなたもこゝへ。

清兵　いえ〳〵、酒は懲り〳〵しました。

粂之　はて、こなたが飮んで二人の衆へ。

清兵　そんなら、ちよつと待つて下さりませ、昨日も飲んで失敗りましたから、この金を庄屋樣へ渡してから飲みませう。

お梅　ほんにそのお金を、少しも早う庄屋樣へ持つて行て、さうして目出度う飲みなさんせ。

清兵　お丶さうぢや、若旦那、ちよつと行つてまゐります。

粂之　そんなら、早う歸つて下され。

清兵　直に行つてまゐります。

彥十源八　清兵衞どの、待つてゐますよ。

清兵　どうぞさうして下され。（ト門口へ出ろ。）

お梅　もし、氣を附けて行かしやんせ。

清兵　おつと合點ぢや。

お梅　さあ、お燗が出來ましたわいな。

ト清兵衞は足早に花道へはひる。舞臺は酒宴の模樣よろしく、この道具ゆつくりと廻る。

（元の浪宅）＝＝本舞臺元の武太夫浪宅の道具へ戾る。とこゝに前幕の立場の喜兵衞以前の孫三郞な

引附け、駕籠舁二人立ちかゝりゐるを藤助留めてゐる。

藤助　やい〳〵此奴らア、人の家へどろずねで踏込んで何をするのだ。

喜兵　何をするとは知れたことだ、盗みをひろいだこの野郎が、こゝの家へ逃げ込んだから、かゝり合ひをつけに來たのだ。

舁一　さあ野郎め、昨夜乘せた駕籠の中に釣してあつた、財布の金を盗んだとぬかしてしまへ。

舁二　疑ひ受けたこちとらが身晴れ、たゝきしめても言はせにやおかねえ。

孫三　どうぞ許して下さりませ。

喜兵　どうで素手ぢやあぬかすめえ。それ、たゝきしめろ〳〵。

二人　合點だ〳〵。

ト喜兵衛と三人は孫三郎を踏んだり蹴たりする、藤助捨ゼリフにて留める。下手より以前の粂之助つかつかと出て内へはひり、三人を投げのけ、孫三郎を圍ふ。

三人　あいたゝゝゝ。

孫三　若旦那樣、面目次第もござりませぬ。

喜兵　これお侍、なんでおいらを、

三人　投げたのだ。
粂之　茅屋なれど武士の住居、立騷ぐ無禮者、投げのけたが何とした。
喜兵　無禮か慮外か知らねえが、盜みをひろいだこの野郎が、こゝの家へ逃げこんだから、それで後から追ひかけて來たのだ。
昇一　まんざら、かゝり合のねえこともあるめえ。
昇二　投げられちやあ了簡ならねえ。
粂之　（これを聞き思入あつて）むう、して此の者が盜みをせしとは、何を盜んだのぢや。
喜兵　昨夜わしが酒に醉つて、此奴等の駕籠に乘つた時、財布の中へ五十兩入れ駕籠の上へ釣しておいて、がらり忘れて歸つた後の駕籠へ乘つたはこの二才、駕籠屋二人に聞いた所が、夢更知らねえといふから、此奴が取つたに違えねえ。
昇一　年が年中裸でゐるが、此の街道で顏を賣るこちとら、
昇二　うしろぐれえことをしたことがねえ。さあ、こちとらが身晴れだ。
兩人　きり〳〵と出しやあがれ。（ト又立ちかゝるを藤助留めて、）
藤助　これさ、又しても立騷いで、靜に言つても分かることだ。

トこの内粂之助扨はといふ思入あつて、

粂之　こりや孫三郎、かれが申す五十兩、そちや盗み取りしか。

孫三　さあ、それは。

粂之　但しは覺えないことか。

孫三　さあ。

粂之　覺えがなくば言譯いたせ。

孫三　さあ。（ト切なき思入。）

喜兵　なに、言譯が出來るものか、盗んだ證據はこれこゝに。

ト孫三郎が懷より、山形にキの字の印附の財布を引出す。

孫三　あ、それは。（ト縋るを蹴倒し、）

喜兵　それ、山形にキの字の印の附いたおれが財布、何と動きアとれまいが。

孫三　はツ。（ト俯向く、粂之助思入あつて、）

粂之　扨はそちが盗みしか。（トびつくりする、孫三郎面目なき思入にて、）

孫三　もし若旦那樣、申譯なきことながら、あなた樣方にどうぞして御不自由をおさせ申さぬやう、お

貢ぎ申上げたいと、心に絶えねど小商人、とやせんかくと思ふ矢先、昨夜夜更けて乘つたる駕籠に、忘れてありし五十兩、道ならぬと思ひしが、財布の中に守御祓、もしや大神宮樣のお授けかと、おのが勝手に心を定め、掠めましたが最前のお貢ぎ申せし五十兩、惡いことの報いは忽ち、ひよんなことをいたしましてござります。

粂之　すりや、最前の、あの金が、ほゝほい。（ト當惑の思入。）

喜兵　さあ、その盜んだ百兩、

三人　きりきりと出しやあがれ。（ト此の時奧にて武太夫の聲して、）

武太　その金唯今戻してくれう。

喜兵　なんと。

武太　（奧より出來りて、）始終の樣子は奧にて聞いた、かゝる事とも存ぜぬ故そちが失ふその金子は、これなる松賀屋孫三郎より此方へ貰ひしが、斯くと聞いては打捨ておかれぬ、その金子は其方へ唯今身共が戻さうほどに、惡氣でいたせしことでもなければ、身共に免じてその者の科はそのまゝ許してくりやれ。

喜兵　そりやあその金さへ返ることなら、わしも旅掛の者だから、言ひてえことも言ひませぬ。

昇一　金せえ出りやあこちとらの、明りもそれで、

兩人　立つといふもの。

武太　すりや了簡いたしてくれるとか、それは千萬忝ない。こりや悴、最前の五十兩こゝへ持つて來
やれ。

粂之　はッ、その金は。

ト はッと當惑する、この時門口へ清兵衞來て、内の様子を窺ひゐる。

武太　如何いたしたのぢや。

粂之　さあ、それは。

武之　えゝ、何をぐづ／＼。こりや藤助、用簞笥の手箱をこれへ。

藤助　かしこまりました。（ト立ちかゝるを粂之助留めて、）

粂之　あこれ藤助、待つてくりやれ。

藤助　えゝ、お放しなされませ。

ト粂之助を振拂ひて藤助戸棚より手箱を出し、武太夫の前へおく。粂之助はッと思入、武太夫蓋を明
けびつくりして、

武太　やあ、手箱の内に金子がないわ、やゝゝゝ。（ト驚く、喜兵衛扨はといふ思入にて、）

喜兵　おほかた、こんなことであらうと思つた。さあ〳〵〳〵といふ時に、盗まれたといふが落だらうが、そんな言譯は喰はねえぞ。いけッ太い盗人めら。

藤助　何を、旦那を盗人と。

喜兵　おゝ、金がなけりやあ同類だ、盗人だといつたが誤りか。

藤助　言はせておけば。（ト立ちかゝるを武太夫留めて、）

武太　藤助待ちやれ。

藤助　でも。

武太　はて、待ちやれと申すに。（ト藤助を留め、）こりや悴、最前の金子如何いたした。

粂之　さあ、その金子はわたくしが、使ひましてござります。

武太　むゝ、すりや、何入用に使ひしぞ。

粂之　さあ、それは。

武太　仔細言はぬか。

粂之　さあ。

武太　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。(ト武太夫詰寄り、)

武太　え丶、おのれはなあ。

ト粂之助の襟上を取つて引附ける、藤助留めるを拂ひ退ける、孫三郎傍に術なき思入、門口の清兵衛は最前の金を借りればよかつたといふこなし、武太夫きつと思入あつて、

こりややい、何の入用に使ひしか、今その金子がない時は孫三郎同然、知らぬこと丶はいひながら、一旦金を貰ひし上は同類なりと言はれても、言譯ならぬこの場の仕儀、浪人暮しの活計に迫り、假令渇して死するとも、盜賊なして露命をば繋ぐやうな武太夫ならず、六十年來賢者とも、人に言はれた某が惡名受くるもおのれ故、武士の一分討果し、身の潔白を立てたけれど、大切なる彼品の詮議の役目を蒙むる其方、自儘にしては上へのおそれ、命助くるその代り、以後の見せしめ、かう〳〵〳〵。(ト粂之助を扇子にて打つ。)

孫三　(留めて、)あもし、そのお腹立は御尤もでござりますが、元の起りはわたくし故、どうぞ共々わたくしも、お打ちなされて下さりませ。(ト粂之助を庇ひ身を寄せる。)

武太　假令其方が元にもせよ、今金子さへある時は、故なくこの場のをさまるに、悴が金子遣ひし故、

悪名受けたる口をしさ。

孫三　それぢやと申して。

武太　えゝ、留めだていたすな。

ト孫三郎を拂ひのけ、扇を振上げきつとなる。此の内清兵衛いろ／＼思入あつて、此の時つか／＼と内へはひり、

清兵　もし旦那樣、まあ／＼お待ち下さりませ、申譯をいたさねばなりませぬ。（ト武太夫を留める。）

武太　そちや清兵衛、申譯とは。

清兵　若旦那がお遣ひなされた、五十兩のそのお金は、わたくしがお借り申しました。

武太　何と言やる。

喜兵　また、あひずりが殖ゑたわえ。

武太　して、其方が借りたとは。

清兵　かいつまんで申しますが、昨日太々の金を五十兩庄屋樣から預かつて、御師の所へ行く途中その金を盗みとられ、言譯なさに娘をば賣つて金をと思ひのほか、娘が厭だと申します故、せんかた盡きて死なうとせしを、若旦那がお留め下され、その金貸してやらうから死ぬを留まれとおつし

やつて、貸して下すつたがその五十兩、へい、わたくしがお借り申しましてござりまする。

武太　む、すりやその方へ貸したとか、さあらば何故にさう言はぬ、

粂之　さ、それもあらはに言はれぬは、此の身に隱す、いやさ、隱して使ひし我越度、お許しなされて下さりませ。

喜兵　さあ、金の行き場が分かつたら、盜み物だ、返してくれ。

清兵　さあ、その金はわたくしから、お返し申しますでござりまする。

喜兵　どこからでも構はねえ、金せへ受取りやあこつちはいゝのだ。さあ、今受取らう。

清兵　今というては、

喜兵　できねえのか。

清兵　さあ、

喜兵　出來ざアすつこんで。

兩人　ゐやあがれ。

ト清兵衞を下手へ突倒し、孫三郎の胸倉を取り、

喜兵　さあ、金ができねえ上からは、うぬを代官所へそびいて行つて、片ツぱしから同類に、抱込まにに

やお腹がいねえ。
昇一　昇二　さあ、二才め、きり〳〵歩みやがれ。（ト孫三郎を引立てるを、清兵衛留めて、）
清兵　あもし、さうされてはわしが濟まぬ、どうぞ待つて下され。
喜兵　濟まうが濟むめえが、かまふものか。
清兵　そこをどうぞ。
昇一　昇二　しみしつこい、退きやがれ。（ト清兵衛を突き退ける、又留めるを見て、）
武太　えゝ眼前知れし難儀をば、見のがしにする此の場の仕儀、ちえゝ口をしい。
ト無念の思入ればた〳〵になり、下手よりお梅出來いて、
お梅　あもし皆さん、まあ〳〵待つて下さんせ。
喜兵　えゝ又一人來やがつた。
清兵　や、そちや娘。
お梅　父さん、この金お返しなさんせいな。（ト懐より五十兩包みを出し、清兵衛に渡す。）
清兵　や、こりやどうして。
お梅　もし、これ見て下さんせいな。（ト懐より年季證文を出し見せる。）

清兵　や、そんなら、そちは。

お梅　あ、もし。（ト思入あつて、）早く歸つて下さんせいなあ。

ト思入あつて、お梅は下手へはひる。清兵衞嬉しき思入にて、

清兵　もし旦那樣、金が出來ましてござります。できましてござります。さあ若旦那、あなたからお借り申した五十兩は、お返し申しますぞ。（ト粂之助の前へおく。）

武太　こりや、その金子はそのまゝに、悴は孫三郎に返し、孫三郎はあの者へ返してやれ。

粂之 孫三　かしこまりました。（ト粂之助は取つて孫三郎へ返す。孫三郎はそのまゝよき所へおき、）

孫三　さあ、五十兩返しましたぞ。

喜兵　思ひがけねえ五十兩、すんでのことにちやあふうにするところだ。

昇一　さあ父さん、金を取つたら早く行きませう。

昇二　えて、こんな時にやあ酷い目に逢ふものだ。

喜兵　べらぼうめ、そりやいつもの敵役だ、今日はこつちが立役だものを、どうし得るものだ。

ト言ひながら喜兵衞震へ／＼門口へ出る。

武太　町人待ちやれ。

三人　へゝえ、かうだらうと思つた。（ト門口へぺたりとなる。）

武太　浪人なせど武士の住居、どろずね踏込む慮外者、そのまゝには返さぬぞ。

三人　えゝ。（トびつくりする。）

武太　とさあ申すところなれど、このまゝに許しくれるぞ。

三人　へゝえ、有難うございまする。

藤助　さあ、きり〳〵と、うせをらう。

ト門口を締める。喜兵衛腰の拔けし思入。

舁一 舁二　父さん、どうした。

喜兵　びつくりしたので、腰が拔けた。

兩人　そいつあ大變だ。

喜兵　これ〳〵いゝことがある、そこに棒ッ切があるから、それをおれが袖から袖へ通して、駕籠のやうにして擔いでくれ。

兩人　なるほど、こりやいゝ思ひ附だ。

ト下手にある棒を取つて、喜兵衛の袖から袖へ通す。

喜兵　酒手はしつかりだ、急いでくれ。

兩人　合點だ。

ト兩人擔ぎ上げると、喜兵衞の着物すつぽり脱げて裸で殘る、兩人は是を知らず、逸散に駈けてはひる。

喜兵　あゝこれ、それは拔けがらだ、待つてくれ〳〵。

ト裸にて腰を押へ、ひよろ〳〵と花道へはひる。

孫三　扨、旦那樣、若旦那樣。申譯もなき今日の仕儀。

武太　あこれ〳〵、何も惡氣でせしといふではなし、かく事濟めば何もそれまで。

孫三　それぢやと申して。

武太　その言譯には及ばぬわい。

孫三　えゝ、有難うござりまする。

武太　こりや藤助、その方は孫三郎を、宅まで送り屆けてくりやれ。

藤助　畏りました。

清兵　いや、わたくしも家に用事がござりますれば、ちよつと行つてまゐりませう。

武太　おゝ、ちとこなたに用事もあるが、また／＼後のことにいたさう。
孫三　左樣なれば、旦那樣。
武太　氣を附けて行きやれ。
孫三　有難うござります。
清兵　どれ、お暇いたしませう
　　ト唄になり、孫三郎藤助は花道へ、清兵衞は下の方へはひる。この內始終粂之助は思案の思入あつて、皆々の後を見送り。
粂之　親父樣、御免下され。（ト脇差へ手をかけ、死なうとするを武太夫留めて、）
武太　こりや、うろたへ者めが、大切なる短刀詮議の役目を蒙りながら、疎略にいたすのみなるか、親に先立ち切腹なさば、お主へ不忠親への不孝、いかに年若とはいひながら、前後の考へもなく、犬死いたす所存なるか。
粂之　さあ、それは。（ト武太夫脇差を取上げ、）
武太　あのこゝな、うつけものめが。（トきつと言ふ。）
粂之　はッ。

ト辭儀をなす。この見得、唄時の鐘にて、道具廻る。

（元の清兵衛内の場）――本舞臺元の世話場へ戻る。とこゝに上手に彦十郎、源八、下手に清兵衛、お梅住ひ、側に角行灯を灯しあり、時の鐘にて道具留る。

彦十　扨清兵衛どの、お前の留守にかう〳〵いふ譯で、父さんが難儀故身を賣りたいとわしへの賴み、一旦お前と約束したこと故、五十兩渡したがよからうね。

清兵　よろしいどころぢやござりませぬ、お蔭で助かりました。

源八　これでわしが、顏も立つたといふものだ。

彦十　さあ、お定まりの證文、印形を押しなせえ。

清兵　かしこまりました。（ト佛檀より印形を出し、）よろしうお賴み申しまする。

源八　あい〳〵。

ト清兵衛より印を受取りよろしく押し、彦十郎へ渡す。清兵衛お梅に向ひて、

清兵　これ娘、よう身を賣つてくれたな。

お梅　さつきお前の賴んだ時、勤め奉公に行つたならば、あゝいふ事にもなるまいものを、厭と言つた

ばつかりに、お隣りの旦那樣や若旦那樣、さあ、皆さんに御難儀かけ、私やどうも濟まぬわいな、

清兵　何の濟まぬことがあらう、そなたのお蔭で濟んだわいの。濟まぬといへば案じられるが、どういふ譯ぢや。

お梅　さあ、その譯は、どうもこゝでは。（ト彦十郎、源八へ憚る思入。）

彦十　何か遠慮のことならば、丁度幸ひ駕籠を一挺雇つて來るから、後でゆつくり話すがいゝ。

源八　お定まりの水放れ。それぢやあ旦那、行きませうか。

彦十　おゝさうしよう。清兵衞どの、行つて來ますよ。

清兵　それではどうか、さうなされて下さりませ。

源八　又止さうなぞと、言ひなさんなよ。

清兵　いえもう、今度は大丈夫でござります。

彦十　どれ、駕籠を雇つて來ようか。（ト源八と共に下の方へはひる。）

清兵　これ娘、して、言ふに言はれぬその譯とは。

お梅　父さん必ず叱つて下さんすな。

清兵　何か樣子は知らないが、親孝行なそなたのこと、何の叱らうぞいの。

お梅　ほんまに叱らしやんせぬか。
清兵　いや、叱りやせぬ〳〵。
お梅　あの、わたしやな。
清兵　おゝ、わたしやな。
お梅　お隣りの若旦那と。
清兵　え。
お梅　言交してゐますわいな。（ト恥しき思入。清兵衛びつくりして、）
清兵　すりやお隣りの粂之助樣と念頃したとか、あゝ子供だと思うてゐたに、もう其のやうな事したのか。おゝようした〳〵、浪人してござつても、以前は立派なお侍、夫に持てば手柄者、おゝ出來した、出來した。
お梅　さあ、それぢやによつて粂之助樣へ、身を穢しては濟まぬ故、勤めは厭ぢやと言うたけれど、夫と思ふ粂之助樣の、其御難儀の元はといへば、お前が借りた五十兩、假令操を破るとも、親と夫のその爲めにわたしや勤めをする心、お前の言ふ事聞かなんだは、どうぞ堪忍して下さんせいな。
清兵　おゝ尤もぢや〳〵、さういふ事と知らぬ故身を賣つてくれと言うたが、此の譯とうから知つたな

ら、おれが死んでもそちが望みを、どうかかなへてやらうもの。あ、今更言うても返らぬこと、

お梅　嘸や粂之助樣に別れともなからう、いとしい事をしたわいの。(ト愁ひの思入)

お梅　あ、もし父さん、もう〳〵何にも言うて下さんすな。假令辛い奉公でも、親と夫の爲めぢやと思へば、悲しいことはござんせぬわいな。

清兵　何の悲しうないことがあるものか、それ〳〵、悲しうないと言ふその聲が、泣聲ぢやわいの。

お梅　いえ〳〵わたしや泣きはしませぬ、あの、此の涙は圍爐裏の燃えさしがけむいので、それで涙が出たのぢやわいの。(ト涙を拭ふ。)

清兵　あゝ、その燃えさしより他人の中、定めて辛いこともあらうが、必ずそれを苦にやんで長煩ひをせぬやうに、灸を忘れずすゑたがよいぞや。

お梅　お前もわたしが家にゐねば、誰も看病のしてがないほどに、風邪を引いたら我慢をせず、早う藥を飲ましやんせえ。

清兵　いや〳〵、そちが年季が明けて歸るまでは、煩ふこつちやない、案じるな〳〵。

お梅　そんならわたしや杉本の、旦那さんがおいでなさんしたら、直にもう行きますぞえ。

清兵　あゝこれ、別れに一目若旦那に、逢はしてやりたいものぢや。

お梅　いえ〳〵、お目にかゝれば別れともない、わたしやこのまゝ行きませうわいな。

清兵　いかさま、それもさうかいの。

トこの時上手の竹簀戸を明け、武太夫出来りて、

武太　清兵衛どの、許しやれ。

清兵　これはお隣りの、

兩人　旦那様。（ト武太夫よき所へ住ひて、）

武太　承ればお梅どのには、奉公に出らるゝとのこと、門出を祝して餞別のいたさう。

清兵　すりや、あの娘に。

武太　いかにも。

お梅　して、わたくしへ餞別とは。

武太　粂之助と盃いたしやれ。

兩人　えゝ。（トおどろく。）

武太　倅、これへ。

粂之　はツ。

〽ト上手より粂之助三方に造酒徳利・土器を載せ持ち出來る・

清兵　すりや、旦那樣には、何もかも。

武太　承知いたして、祝言さする。

兩人　ちえゝ、有難うござりまする。（ト兩人嬉しき思入）

清兵　娘、願ひがかなうて、嬉しいか〳〵。

お梅　これが嬉しうなうて、何としませう。

清兵　おゝさうであらう、おれも嬉しい。

武太　さゝ、善は急げ、少しも早く。

清兵　どれ、おれが酌をしてやりませう。

ト清兵衛お梅に土器を持たせ、清兵衛酌をなす。お梅恥しさうに飮む、清兵衛取つて粂之助へ持つて行き、又酌をする。

武太　千秋萬歲の千箱の玉を奉る。（ト謠をうたふ、兩人盃事よろしくあつて、）

清兵　お目出度うござりまする。

武太　おゝ、目出度い〳〵。

ト時の鐘になり、下手より彦十郎、源八駕籠舁に四つ手駕籠を擔がせ出來り、

彦十　清兵衞どの、もう話はよいかの。

清兵　はい、よろしうござりまする。

源八　よけりやあ直に行きませう。

お梅　はい、まゐりませうわいな。（ト粂之助へ思入あつて、しな〳〵と立上る。）

粂之　そんなら行きやるか。

お梅　はい。（トしめ泣きに泣く。）

武太　せめて今夜は此の家にて、

お梅　それも心に任せぬは、

清兵　金故沈む苦界の勤め、

粂之　思へば不便な。

お梅　あゝもし、必ず御無事で。

粂之　そなたも達者で。

お梅　さらばでござんす。（ト思ひきつて、つか〳〵と門口へ出る。）

源八　さあ、駕籠に乗んなせえ。
お梅　あい。（ト駕籠に乘る。）
清兵　左樣なれば旦那樣。
彥十　必ず案じさつしやるな。（ト門口をしめる。）
武太　あこれ、別れにま一度。
清兵　はツ。（ト門口を明ける。粂之助、お梅顏見合せ）
粂之　お梅。
お梅　粂之助樣。（ト兩人愁ひの思入。本釣鐘）
武太　袖もかわかぬ五月雨に、
清兵　空さへ曇り、
ト粂之助お梅は名殘りを惜しむ。清兵衞思ひきつて門口をしめる。これを木の頭。
あゝ、泣出しさうだ。
ト手拭で淚を拭ふ。武太夫は上を向き淚を拭ふ。お梅はハアヽと泣き伏す。粂之助はぢつと俯向く。
この模樣よろしく、本釣鐘三重模樣の合方にて、

# 四幕目

## 佐々木館の場

〔役名――野浦一學、荒川隼人、佐々木右衛門佐、土佐修理之助、三木藏之進、茶道珍才、唐崎松兵衛、堅田雁八、瀬田關藏、醫師奈須野玄伯。愛妾お菊の方實は白菊丸、奥方操御前、野浦主税之助。〕

（佐々木家御殿の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面瓦燈口、上下杉戸の出入り、揚幕に杉戸、舞臺花道とも蒲縁を敷詰め、總て佐々木家御殿の模樣。こゝに醫師玄伯、眞中に立つてをり、唐崎松兵衛、堅田雁八、瀬田關藏、粟津清六、何れも諸士にてゐる。管絃にて幕明く。

松兵　奈須野、

四人　玄伯老。

玄伯　こりや。（トあたりへ思入あつて、）いづれもお悦びなさい、出世の雲がたなびいて來ましたぞ。豫て野浦一學殿、當佐々木家を横領なさんと、いづれも方を始めとして家中も過半は一味合體、邪魔になる井筒親子は先達しくじらせ、一家老の荒川隼人もお目通りを遠ざけさせ、最早三木藏之進と夫の土佐家の畫を學ぶ、修理之助さへ片附くれば、後は十把一からげ、兎角胡麻の世界故、お

松兵　覺えのよい一學殿へ從ふは知れたこと、大望成就は近くでござるぞ。
雁八　それは何より大慶至極、これといふのも先達多賀明神より連れられし、御養女のお菊どの、今では殿のお部屋となり、お側で何かをすゝむる故。
關藏　さすがは家老のお目利ほどあつて、萬事に通ずる利發な生れ、殊に勝れし御器量故殿樣も現をぬかし、明けても暮れてもお部屋のみ。
清六　たゞ玉に瑕なるは、心願あつて當年中、男に肌を觸れぬとやら。
玄伯　今に奥方へ悋氣をすゝめ、殿樣に腹を立たせて御離緣さすれば、後はお部屋の心のまゝ。
松兵　隼人を始め忠義の奴輩讒言なしてしくじらせば、お奥はお部屋、お表は一學殿一人の采配。
雁八　淫酒をすゝめ殿樣をお御隱居さすれば此方のもの、一學殿の御内室は先殿樣の寵妾
關藏　而もおたねを宿してまるられ、出生ありし主稅殿は、先殿樣の御落胤。
清六　お血筋故に御家督は、言はずと知れた主稅樣。
玄伯　さうなる時は我々は、一足飛の立身出世。
松兵　愚老はさしづめ一家老。
雁八　或は用人留守居役。

雁八　以前に替る取りまへに。
關藏　好きな酒は飲み放題。
清六　咽喉がぐび〳〵するやうだ。
玄伯　いや、もはや殿様菖蒲見より御歸館に程もあるまい、何れもには奥へござつて御酒宴の御用意なされい。
四人　心得てござる。
玄伯　愚老はこれにてお待ち申さん。
松兵　左樣ござらば、
四人　玄伯老。
玄伯　後刻、
皆々　御意得ませう。（ト管絃になり、四人は奥へはひろ。玄伯殘り花道へ思入あつて、）
玄伯　お菊の方御同道にて、戲れながらの御遊山故、御歸館がおそいと見ゆる。はてさて、奥方はお氣の揉めたことだ。
ト琴唄になり、奥より腰元の一、褥を持ち出で眞中へ敷き、奥方操御前年若き奥方の打扮にて出來る、

後より腰元三人出來り、玄伯を見て、

腰一　そこにおいでなされまするは、玄伯どのでござりまするか。

腰二　奥樣のお入りで、

四人　ござりますわいな。（ト玄伯びつくりして、）

玄伯　これは〳〵、思ひがけない所へ奥樣のお入り、失禮の段御高免下さりませう。（ト辭儀をする。）

操　これ玄伯、御前樣には御城外の菖蒲を御覽にいらせられしが、未だ御歸館遊ばされぬかいの。

玄伯　いや、まだ御歸館には、よほどお間がござりませう。

操　その菖蒲のある所は、よほど遠うあるかいの。

玄伯　いえ〳〵、お館より十町ほど、さのみな道でもござりませぬ。

腰一　御前樣には、朝露を含みし菖蒲が一入とて、

腰二　今朝早うからお供揃へ、

腰三　わづか十町あまりの所、

腰四　今にお歸り遊ばさぬとは、

腰一　お遲いことで、

四人　ござりますなあ。（ト玄伯思入あつて、）

玄伯　そりやお遅い譯がござりまする。

操　なに、お歸りの遅いに譯があるとは、どういふ譯ぢや。

玄伯　外でもござりませぬ、御意に入りのお菊の方が、御同道故でござりまする。

操　そりや又、どういふ譯で。

玄伯　さあ、その譯は。

四人　早う、お話しなされませいなあ。

玄伯　御意に任せ申上げますが、御前樣とお菊の方、そのお仲の好さといふものは、片時お側をお放しなされず、互ひに手に手を握りなどいたして、愚老なども見兼ねることがござりまする。それ故路次に暇が入り、めつたに御歸館ではござりませぬ。

ト玄伯は焚きつけるやうにいふ、操御前は顔を背け、聞かぬ思入、

腰一　これはしたり玄伯どの、奥樣の御前にて、

腰二　めつたな事を、

四人　おつしやりますな。

玄伯　いや、申上げてもだいじござらぬ。斯樣なことも御存じなくおいで遊ばすがお痛はしい、言はゞ家來の身を以てあなた樣を蔑に、御前樣を自由にいたすも、畢竟言はゞお氣の好い故、ちと、御悋氣を遊ばして、やかましくおつしやりませ。

操　あゝこれ玄伯何を言やるのぢや、御前も都御在番中は足利家へのお勤めにて、御苦勞を遊ばせば、御在國のその内は御心任せに御身の御保養、お菊が御前のお氣に入り、お側にゐるので、妾も安堵。何の悋氣をせうぞいな。

玄伯　いや、御悋氣をなさらぬは女子の情がないやうなもの、上つ方でも下々でも男女の道に替りはござらぬ。悋氣されるも男の樂しみ、却て御前がお悦び、是非とも御悋氣遊ばしませ。

操　あゝ、聞きともない事を、まだ言やるかいの。

　トこの内上手杉戸を明け、三木藏之進大小にて出てゐて、

藏之　やあ、控へめされい元伯老、奥樣へ對し過言でござるぞ。

玄伯　これは三木藏之進殿、お言葉返し申上げるも、あなたのお爲めを存ずる故。

藏之　まことお爲めを存ずるなら、御悋氣の起らぬやうお執成し申すべきに、却て御悋氣をおすゝめ申すとは、心得違ひな儀でござる。以後をきつと愼みめされ。

玄伯　へい〳〵これは何でござる。定めて奥様も、お心の内では。

藏之　やあ、まだ〳〵申すか、控へさつしやれ。

玄伯　へゝい。（ト管絃になり、玄伯眞面目に奥へついとはひる。藏之進思入あつて、）

藏之　さすがは六角家の姫君ほどあつて、操の道をお守り遊ばし、心よからぬ玄伯が、御悋氣をお勸めまゐらすを、お取上げ遊ばさぬは、憚りながら藏之進、感心仕ッてござりまする。

操　悋氣嫉妬は女子のたしなみ、既に七去の數にも入れば、幾人側女があらうとも、それは御前のお樂しみ、御悋氣申す心はなけれど、案じらるゝはこのほどより、御前の御氣質あら〳〵しく、忠義の者は多くはお咎め、荒川隼人も遠慮とやら、とかく家中のおだやかならぬが、何より心にかかるわいの。

藏之　それと申すも少身より、登庸なせし野浦一學、それに從ふ佞人ども、玄伯如きが讒言なす故。

操　かゝる事をばお傍にて、執成し致すがお側の役。

藏之　それをとも〴〵讒言なし、淫酒をすゝむるお菊の方。

操　悋氣はせねどお家の爲。

藏之　え。

操　少しは恨みに思ふわいの。（ト涙を拭ふ。藏之進もよろしく思入。この時花道揚幕の内にて、）

呼び　殿樣のお歸り。（ト呼ばゝる。）

操　なに、御前樣のお歸りとや。

藏之　いづれも、これにてお出迎へ。

四人　畏りました。

呼び　お歸り。

ト誂へ出の鳴物になり、花道より佐々木右衛門佐、殿の打扮、お菊の方實に白菊丸振袖姿の裝、茶道珍才紫の袱紗にて刀を持ち、野浦主税之助上下大小にて花菖蒲の入りし花筒を持ち、土佐修理之助上下大小にて附添ひ、近習唐紙の巻きたると繪具箱とを持ち出來り、皆々花道へ留る。

操　これは〳〵御前樣には、唯今御歸館遊ばされましたか。これまでお出迎へ、

皆々　いたしましてござりまする。

右衛　むゝ、誰かと思へば奥か、むゝ、出迎ひいたさずともの事を。（ト不興の思入。）

お菊　あゝもし、そのやうな事を、御意遊ばして。（ト右衛門佐の袖を控へ思入あつて、）これは〳〵、奥樣には、ようこそお出迎へ。

主税　殿様にも今日は、殊のほか御機嫌よく、花菖蒲の御上覧。

修理　かの地の景を拙者めに寫せよとの御意下り、拙き筆に寫しとり、それ故御歸館思はず延引。

珍才　難儀せしはこの珍才、修理之助殿の手傳ひで、繪具だらけになりました。

藏之　それは一段のお慰み。然し長途のお勞れ、御前様にはまづ〳〵。

皆々　これへ。

右衛　むゝ、予が館ぢや。勝手に行くわえ。（トきつと言ひ、お菊に向ひ優しく）さ、お菊、來やれ。

お菊　まづ、いらせられませう。

ト皆々本舞臺へ來り、近習二重へ褥を敷き、右衛門佐眞中に住ひ、平舞臺上手に操御前、藏之進、主税之助、下手へお菊、修理之助、珍才腰元等住ふ。

修理　これ珍才殿、その繪の具箱をお次へ持つていて下され。

珍才　畏まりました。（ト繪具箱を持ち、近習附いて奧へはいる。）

右衛　こりや〳〵お菊、これへ來やれ〳〵。

お菊　はい、御前の御意ではござりますれど、奧様のいらせられまするに、あまりそれでは高上り。

右衛　奧がゐても苦しうない、予が側に居れと言ふに、誰が何と言ふものぞ。

お菊　ではござりませうが、それではあまり。

右衞　斟酌あらば、手を取らうか。

お菊　さあ、それは。

操　御前樣の御意なれば、遠慮に及ばぬ、お側へ行きやいの。

お菊　それぢやと申して。

修理　御意でござれば御免を蒙むり、お側へ早うおいでなされ。

お菊　左樣なれば、御免遊ばしませ。

　　トお菊思入あつて右衞門佐の下手へ住ふ。右衞門佐お菊の手を取る、主税之助これを見て氣の毒なる思入にて、

主税　あいや御前樣へ伺ひまする、御土産の此の花を、お床へ活けては如何でござりませう。

右衞　むゝ、修理之助は繪をよく描き、そちは花がよいとの事ぢや、床の間へ活けておきやれ。

主税　畏まりました。左樣なれば奧樣、いづれも樣御免下され。

　　ト唄になり、主税之助思入あつて花筒を持ち上手へはひる。右衞門佐お菊の手を取り、

右衞　これお菊、今日は堅苦しい館と違ひ、菖蒲の盛りに野邊の景色、面白いことであつたな。

お菊　いつにない、よい慰みを、いたしましてござりますわいな。
操　それは嘸お面白うござりましたらう。
右衞　そりやそちと違つて、お菊を連れて行たもの故。面白いは知れたことぢや。
藏之　してお館よりはよほどの道、お駕籠にていらせられましたか。
修理　いえ〳〵鬱陶しいと御意なつて、お駕籠ではござらぬ。
藏之　それではお馬でござりましたかな。
修理　いえ〳〵、お馬でもござりませぬ。
操　お歩行でござりましたか。
右衞　おゝ、馬や駕籠では、お菊と別に歩かねばならぬによつて、これこのやうに、手に手を取つて歩いたのぢや。（卜厭がろお菊の手を取り見せる。）
操　それはお樂しみなことでござりましたわいな。
右衞　そりや言はいでも知れたことぢや、可愛いお菊に手を引かれ、戲れながら歩くのぢやもの、此上もない樂しみぢやわい。
操　お羨しう存じまする。

右衛　羨しいと言うたとて、その方などが及ばぬことぢや。
操　はあゝ。（ト忍び泣きに泣く。）
藏之　あいや、御前樣、御座輿とは申しながら、あまりなるお詞。
右衛　だまれ藏之進、そちなどは此のやうな美しいものに、手などを引かれたことはあるまい、仔せぬことは口出しいたすな。
藏之　ぢやと申して。
右衛　まだ〳〵申すか。（トきつと言ふ。）
修理　あいや藏之進殿、何事も御前でござるぞ、お控へなされい。
藏之　はゝ。（ト是非なく控へる。お菊思入あつて、）
お菊　御前樣へ改めて、お願ひがござりまする。
右衛　なに、予に改めて願ひとは。
お菊　わたくし故に奥樣へ、最前からのすげなき仰せ、表に御悋氣遊ばさねど、さぞお心ではわたくしをお恨みに思召しませう。それ故お暇賜はりて、お名殘りをしうはござりますれど、野沛が方へまゐりたうござりますわいな。

右衛　いや〳〵、そちは片時も、予が側を放すことはならぬ〳〵。（ト手を取りゐる。）
お菊　それではどうも奥様へ。
右衛　濟まずば、奥を離縁なさう。
操　え。（トびつくり思入。）
修理　すりや御前には、
皆々　奥様を。
右衛　お菊が邪魔になる故に、離縁いたすが何とした。
操　さほどまで、あなた樣には。
右衛　お菊に迷うた。
操　ちえゝ。（ト口をしく泣伏す。）
右衛　離縁いたす。出てうせう。（トきつと言ふ。この時花道揚幕の内にて、荒川隼人の聲にて、）
隼人　おいや、その御離縁、罷りならぬ。
藏之　やあ、あの聲は、
修理　荒川氏。

右衛　やあ、近習の者あるか、これへまゐれ。

五人　はあゝ。（ト下手より玄伯先に、唐崎松兵衛、堅田雁八、瀬田關藏、粟津清六等四人の諸士出來り、）御用に

ござりますか。

右衛　押して出仕の荒川隼人、目通りかなはぬ、追ひ返せ。

皆々　はツ。

玄伯　御前の御意ぢや、いづれも早う。

四人　心得ました。（トつか〳〵と花道へ走りはひる。）

右衛　うぬ、につくい奴の。

トきつと花道の方を見る。早舞ばた〳〵になり、花道より粟津清六出で、見事に轉ろ。續いて荒川隼人衣裳上下大小の打扮、これを上下より三人の諸士取巻き出來り、ちよつと立廻り、

隼人　こりや何れもには、何とおしやる。

松兵　御前の御意ぢや、

四人　出仕はかなはぬ。（ト又かゝるを、）

隼人　やあ、お身達如きが存ぜぬことぢや。

ト立廻りながら舞臺へ來り、左右へ投退けきつと見得。

右衞　やあ、予が目通りを遠ざけおきしに、押して出仕は奇怪至極。

玄伯　誰が許して、

四人　出仕なせしぞ。

隼人　誰も許しはいたさねど、御家の大事見捨て難く、御諫言を申さん爲め、押して出仕の荒川隼人。

右衞　やあ、又しても諫言だて、聞く耳持たぬ。

隼人　假令お聞入れなきまでも、諫言なすは臣下の役、お下にござれ我君樣。

右衞　何と。

隼人　え丶、こなた樣はなう。（ト笙の入りし合方になり、隼人舞臺眞中へ住ひ、思入あつて、）事新しく申さずとも、和漢の文に暗からぬ御身に、御承知もござりませうが、昔を今に一國の亂の基は、色に溺れ情の道を失ふ故、操正しき奥方を御離縁とは我儘至極、あなたは隣國六角家の御息女、忝くも東山義政公の御媒介にて婚姻結びし御仲ならずや、それを濫りに御離縁あらば、六角家は申すに及ばず、御同席の大小名、不仁の至りと誹謗致さん。さある時には足利家より重きお咎めあるは必定、數代傳はる佐々木のお家の、瑕瑾となるにお心附かずや。さほどのことを辨へな

き殿にてはなかりしが、色を以て御心をとらかす、妲妃に劣らぬものあれば、(ト お菊に眼を附ける、お菊ちつと俯向く。)佞辯を以て媚びへつらふ、費仲官に等しき族が、(ト 敵役に眼を附ける。皆々顏を背ける。)日夜お側に附添ふ故。何卒お心翻へされ、お家を大事と思召さば、佞人讒者を遠ざけられ、國政正しくなしたまへ。これ御先祖への孝行なり、必ず愚臣の諫言を、天、人を以て言はしむると、御聞濟み下さるやう、偏に願ひ奉る。(ト 思入にて言ふ。右衞門佐締に障りし思入にて、)

右衞　やあ、性懲りもなく諫言だて、右衞門佐いツかな聞かぬぞ。

隼人　御聞入れなくば何ケ度にても、御諫言を申さにやなりませぬ。

右衞　やあ、主に向つて言葉を返す、無禮至極の荒川隼人。こりや修理之助、彼れが面を打ちするゐい。

ト右衞門佐扇を修理之助の前へ投ふ。

修理　はツ、御諚ではござりますが、此の儀ばかりは。

右衞　やあ、主の言葉を用ひぬか。

修理　まつたく以て。

玄伯　あいや御前、修理之助殿が打ち得ずば、

四人　我々どもが。(ト 立ちかゝるを、)

右衛　いや〳〵、修理之助に打たせねば、予が言ひし言葉が立たぬ。

修理　すりや、どうあつても拙者めに。

右衛　とく〳〵と打ちするゐい。

修理　はツ。(ト是非なく立上り、隼人に向ひ。)隼人殿、御意でござるぞ〳〵。(トそつと打つ。)

隼人　假令いかほど打たるゝとも、御諫言だにお用ひあらば、いツかな厭ひは仕らぬ。

右衛　おゝ、よい覺悟ぢや。もつと打て、もつと打て。

修理　はツ、御意でござる〳〵。(ト思入あつて、隼人を續け打ちに打つ。)

右衛　やあ手ぬるい〳〵、予が代つて打つてくれう。(ト立上るをお菊留めて、)

お菊　あいや御前お待ち遊ばせ、修理之助殿が御意を蒙むり、手酷う打ちし上からは、お手づからお打ち遊ばすには及びますまい。お許しあるがよろしからうと存じます。

右衛　そちが申す事なれど、あまりといへばにツくき隼人。

お菊　ではござりませうが、もしも御身にっ(ト御身が大事だといふ思入で)

右衛　なに、彼等如きが心配無用。(ト肩を取つてつか〳〵と隼人の側へ行き、)主に逆らふ不屆き奴、以後の見せしめ、かう〳〵〳〵。(ト隼人を打ち、)何と骨身にこたへたか。

ト顏を打つ、これにて隼人の額へ疵附く。

操　やゝ、こりや隼人の面體へ。

右衞　疵が附いたか。はて心地よい、むゝはゝゝゝ。

ト右衞門佐元へ返ろ、隼人紙を出してそつと拭ふ。玄伯前へ出て、

玄伯　御折檻濟んだる上は、御前にかなはぬ隼人どの。

四人　きり〳〵お立ちやれ。

隼人　いゝや、此の場は立ち申さぬ。

右衞　なに、立たぬとは。

隼人　お聞濟み下さらねば。

右衞　立たぬと申すか。

隼人　はッ、三度諫めて身退くは、唐土人の忠義なれど、日本魂は斯の通り。

ト肌を脱ぐ、下に白裝の水上下を着込みゐろ、皆々びつくり思入。

玄伯　やゝ、隼人どのゝ。

四人　この體は。

修理　すりや、お聞入れなきその時は。
隼人　切腹いたす所存でござる。
藏人　ほゝお、さすがは荒川隼人殿、忠義の魂おどろき入つたり。
右衛　すりや、諫言を用ひぬ時は、切腹いたす所存とか。
隼人　はツ。
右衛　おゝよい覺悟だ、百萬だら申すとも、いつかな諫言聞かぬほどに、この場に於て切腹いたせ。
隼人　仰せにや及ぶべき。
右衛　そちが切腹いたしなば、予に諫言のしてがなくて、此上もない目出度いことぢや。祝ひの酒宴を催さん。
松兵　それは幸ひ先刻より、
雁八　山海の珍味を選み、
關藏　御酒宴の支度をば、
淸兵　いたしおきまして、
四人　ござりまする。

右衛　おゝ、それはでかした〳〵。こりや玄伯始め修理之助、近習の者腰元等は、予が酒宴の相手をしやれ。
皆々　はツ。
右衛　又藏之進には奥を預ける。予が目通りへ出ぬやうに、側を放れず警固いたせ。
藏之　かしこまつてござります。
操　あゝそれほどまでにわたくしを、お嫌ひ遊ばす元はといへば。（ト お菊へ思入。）
藏之　何事も、お胸にをさめて、
操　はあゝ。（ト泣く、右衛門佐立上りて、）
右衛　さあ、お菊來やれ。
お菊　とはいへ、このまゝ。
右衛　えゝ、來やれと申すに。
お菊　はゝい。
修理　左樣ござらば、お二方樣
隼人　最早今生のお暇乞ひ。

操　そんなら、これが。（ト寄らうとするを、）

藏之　もし、（トへだてる。）

右衞　はて、よいざまぢやなあ。

ト唄になり、右衞門佐お菊の手を取り、腰元操御前へ思入あつて奥へはひる。操御前と藏之進は、隼人へ思入あつて奥へはひる。敵役はよい氣味とのこなしにて奥へはひる。隼人殘り思入あつて、む、と溜息をつく、これよりしんみりとした合方になり、

隼人　あゝ、盛衰榮枯は世の習ひ、佐々木の御家も傾く時節、御爲を存ずる諫言も却て殿のお耳に逆らひ、額に殘るこの疵は忠義の功、彼世にて父主計によい土産、實に武士の身の上は死する時に死なずんば死にまさる恥あり、いでや此の場で切腹なし、冥土にござる殿樣へ、申譯の仕らん。

ト腹を切らうといふ支度をし、よろしく思入あつて氣を替へ、

あゝ、さるにても無慈悲の殿、如何に扶助なす臣下とて、御家を思ふ諫言をお聞入れなきのみならず、恥辱を取らする打ち折檻、あまりといはゞ情なし、かゝる殿に義を立てゝ一命捨つるはほんの犬死、命惜しむと笑はゞ笑へ、こりや切腹は思ひ留まらう。

ト此の時上手の杉戸を明け、野浦一學窺ひゐる、隼人肌を入れ思入あつて、

豫て相役野浦が企み、お菊の方を妾に差上げ、日夜殿に淫酒を進め、佐々木の家國窺ふ故、紛失なせしと言ひこしらへ、窃に所持なす雄鳥の印、かゝる苦心も水の泡、主が主なら家來も家來、額を打たれし返報に、忠義の心翻へし、これまで呉越の思ひをなしたる野浦が惡事に荷擔なし、今の恨みを晴らしくれん。（トきつと思入。此の時一學出て、）

一學　荒川氏、嘸御無念にござらう。

隼人　や、こりや野浦氏には、いつの間に。

一學　先刻より次の間に。

隼人　扨は始終の樣子をば、

一學　逐一に承はつた。

隼人　御存じとあるからは、改めては申さぬが、拙者が願ひは、おかなへ下されうや。

一學　なに、某へ願ひとは。

隼人　御荷擔がいたしたい。

一學　これ。（トあたりへ思入。兩人立つて右左の杉戸を明けて見て座へ戻り、）なに、荷擔がいたしたいとは。

隼人　お隱しあるな一學殿、豫て貴殿の大望は疾より承知のこの隼人、それ故にこそ數度の諫言、最早

一學 今より變心なし、貴殿へ一味いたす所存。

一學 これは〳〵荒川氏、思ひもよらぬ儀を承はる、小身より立身なし數代功ある其許と、肩を列ぶるほどにまで登庸せられしは殿の蔭、何不足あつて家國を押領なぞと思ひもよらず、察するところ某が俄の出世をそねむ族が、左樣の噂いたせしものか、一學身に取り覺えござらぬ。

隼人 (思入あつて、)すりや、其許には、某に御疑念あつて。

一學 貴殿を疑ふ心はなけれど、元より存ぜぬこと故に。

隼人 左ほどまでに堅固になさらねば、大望成就はいたすまじ。一旦一味いたさんと思ひたつたる拙者が一念、死して冥土黄泉より、蔭ながらお味方申す、證據は豫て祕めおきし雄鳥の印をお渡し申し、此の場に於て切腹いたす。

ト懷中より錦の袱紗に包みし印を出し、一學に渡す。

一學 すりや、これが雄鳥の印とな。

隼人 それにて一對揃ひませうがな。

一學 何と。

隼人 雌雄の印揃はねば、佐々木の家は相續ならず、貴殿が奪ふ雌鳥の印と一對揃ふが成就の印し、や

がて本望遂げられよ。草葉の蔭から見物なさん。憚りながら御介錯。

ト腹を切らうとするを、一學留めて、

一學　ほゝお、かほどまでに思ふ貴殿を、疑ひしは我が誤り、今は何をか包むべき、我大望を明し申さん。死を留まりて一方の、采配取つて下されい。

隼人　すりや、御疑念晴れて某を、一味にお加へ下さるとか。

一學　いかにも。

隼人　して〳〵、貴殿のお企ては。

一學　此の家國を横領なさん豫ての企みに幸いなるは、某の妻は先殿の側女、我方へ嫁せし後月足らずにて出生せし、忰主税を先殿のお胤なりと言ひふらせしも、遠く慮る我が計略、淫酒に身持惰弱と言ひたて、當殿を隱居させ、まさしく血筋と僞りて忰を後目に立ん望みに、情を以て人をなづけ、家中過半は我が一味、今より合體なす上は、龍に翼を得たる心地、約を變ぜぬ連判状、いざ、血判いたされよ。

ト懐より連判状を出し隼人に渡す。隼人開き見る。一學硯箱を出す。

隼人　いかにも、血判いたすでござらう。

ト隼人姓名をとつくと見て、我名を記し、血判をする。一學受取つて、

一學　ほゝお、かく合體の上からは、我が祕めおきし雌鳥の印と、雄鳥の印と取替へて、互ひに所持なすが變ぜぬ印し。（ト懷より雌鳥の印を出し隼人に渡し、雄鳥の印を懷中する。）

隼人　たしかに落手仕る。（ト懷へ入れる。）

一學　猶も談ずる密計あれば、今宵私宅へ御入來下され。

隼人　仰せにや及ぶべき、竊に參上仕らん。

一學　他聞の憚り、萬事は今宵。

隼人　左樣ござらば野浦氏。

一學　荒川氏。

隼人　後刻、

兩人　御意得ませう。

ト兩人辭儀をなす。唄になり、隼人思入あつて花道へはひる。一學後を見送りにつたりと思入、此の時上手よりお菊、下手より玄伯、諸士四人出來りて、

お菊　父上樣。

玄伯
四人　一學殿。
一學　これ〳〵。（下あたりへ思入。管絃になり。）
お菊　日頃邪魔なる隼人殿が、きびしき殿の折檻に心替りて一味ありしは、あなたの望みのかなふしるし、嘸お嬉しうござりませう。
一學　むゝ、井筒親子は先達短刀故に浪人させ、最早後は藏之進、若年ながら油斷ならぬは小才覺ある修理之助、かれをば先へ遠ざけん。
玄伯　かれを罪に落す工夫は、愚老疾よりいたしおきたり、かれは土佐の門弟にて荒波をばよく描きて、世に荒波の光義と申す故に、お衝立を張替へおき、荒波を描かせて、君は船臣は水、斯く荒波を描くのは臣の水君の船を覆へす所存なりと、讒言なしては如何でござるな。
一學　奈須野氏が近頃の出來、一學感心仕ッた。
玄伯　いや、あまりお褒め下さるな、愚老ばかりの智慧でもござらぬ。
松兵　われ〳〵ども、一二分づゝ、
四人　分を持つてをります。
お菊　して又わたしの邪魔になる、奥方を遠ざけんには。

玄伯　それもよろしき手段あり、豫て奥方は琴の妙手、此のほど修理之助が作なせし夜雨といへる唱歌をば、手を附けられしがこれ幸ひ、夜雨といふは夜濡れる。これ幸ひ、密通の隱語。

松兵　それ故、君を失はんと、

雁八　かれも荒浪を描きますなど、、

關藏　お菊の方より申上げなば、

清六　殿樣には、言ふなり次第。

玄伯　この儀は如何でござりまするな。

一學　むゝ、これも至極よい手段。お菊は御前へよしなに申せ。

お菊　心得ましてござりまする。

玄伯　その御承引を聞く上は、

四人　然らばこれより、

一學　御前へ早く、

お菊　どれ、申上げませうか。（ト唄になり、お菊先に玄伯、諸士四人附いて上手へはひる。）

一學　むゝ、先づこれもよし、本望成就近きにあり。

ト此の時下手より、主税之助つか〳〵と出て、

主税　親人様、その大望はかなひませぬぞ。

一學　や、なんと。

主税　もつたいない、三世のお主を。

一學　あ、これ。（ト言ふを、道具替りのしらせ。）

主税　え〻、あなた様はなあ。

ト一學に詰め寄る、この見得、唄にて道具廻る。

（奥殿の場）――本舞臺四間通し中足の二重、正面銀襖、下手杉戸、二重に褥を敷き右衛門佐ゐて、お菊は側に、後に腰元居列び、前に結構なる道具の酒肴取散しあり、平舞臺上手に操御前琴を控へ、その傍に藏之進、下手に修理之助、その後に白張の衝立あり、後ろには醫師玄伯、諸士四人なり、染道珍才墨を磨りゐる、傍に以前の繪具箱あり、此の模樣唄にて道具留る。

右衛　こりや奥、その方悋氣いたさぬ故、予が目通りを許しくれと、藏之進を以ての頼み、許し遣はすその代り、酒宴の肴に一曲いたせ。

操　仰せではござりまするが、未熟な業にござりますれば。
右衞　彈かぬと申すか。
藏之　あいや、御辭退あらばお願ひの。
操　障りとあらば何なりと、拙き調べをお聞きに入れん。
右衞　又修理之助、その方はその衝立へ繪を描きやれ。
修理　はゝ、御諚ではござりますが、なかなかお衝立など、思ひも寄らぬ儀でござりまする。
玄伯　いや、その御辭退よろしからず。
松兵　なには格別、殿の御意。
雁八　貴殿か繪をば描くことは、
闕藏　誰知らぬものもござらぬ。
淸六　辭退をせずに、お描きなさい。
修理　左樣なれば御意に從ひ。これ珍才どの、繪具をこれへ。
珍才　心得ました。（ト繪の具皿、刷毛など出す。）
右衞　して、奥が調べの一曲は、何の唱歌がよからうな。

お菊　それぞこのほど奥様が、お手をお附け遊ばしました、夜雨がよろしうございませう。
右衛　然らば、夜雨を所望いたさう。
操　　かしこまりましてございまする。
玄伯　して修理之助殿は、何をこの場で描かれるな。
修理　お衝立に似合しく、荒浪を描きまする。
玄伯　なに、荒浪を描かれる。
四人　それは重疊。（トお菊と顔見合せ思入。）
右衛　さあ、兩人ともに支度がよくば、とく〳〵始めい。
修理
操　　かしこまりました。

トこれより誂への琴唄になり、操御前は琴を弾き、この唄を借りて修理之助は衝立へ繪を描きにかゝる、玄伯扇を投げ袖を引きなどして邪魔をする、トヾ邪魔をする手先を膝に敷き、唄いつぱいに衝立に荒浪を描きしまふ。

皆々　やん〳〵。（ト褒める、玄伯思入あつて、）
玄伯　御前、お衝立の繪は御意に入りましたか。

右衛　むゝ、至極よう出來た。

玄伯　夜雨の唄は如何でござりますな。

お菊　まことに面白うござりましたわいな。（ト思入、玄伯思入あつて、）

玄伯　この衝立の荒浪の繪は、愚老が意にはかなひませぬ。

右衛　とは又何故に。

玄伯　君は船臣は水、水おだやかに船を浮ぶるはこれ臣たるものゝ道、斯く荒浪にては船保たず、これ修理之助が心の内にて、君の船を覆へす調伏に相違ござりませぬ。

修理　これは思ひも寄らぬお疑ひ、何しに左樣の儀がござらうぞ。

松兵　いや〳〵それに相違ない。

雁八　常に好んで荒浪の、

關藏　繪を描くのは豫てより、

清六　心の内に君を調伏、

玄伯　お家を窺ふ下心。なあ申しお菊の方。（トお菊へ、早く追放するやうに言へといふ思入。）

お菊　なるほどこれは玄伯殿の申さるゝ通り、大恩家むる御前樣を、調伏なすは輕からず、

皆々　左樣々々。

お菊　きつと御成敗なされずば、御家の掟が立ちますまい。

皆々　左樣々々。

お菊　先づ御前のお目通りを、遠ざけられたがよろしうござりませう。

皆々　左樣々々。

お菊　と申したらよからうが、僞り故にさうはならぬ。

皆々　左樣々々。

右衞　なに、僞りとは。

お菊　御前樣お聞き遊ばせ、修理之助殿が常々から荒浪の繪を描きますを存じての企み事、調伏の繪と言ひたてゝ、お目通りを遠ざけくれよと、あの衆達がわたくしへの頼み。

玄伯　（びつくりして、）あゝこれ〳〵、お菊の方、そりや何を、

皆々　おつしやるのだ。

お菊　お前方の頼みをば言うてくれいといはしやんす故、御前樣へ申上げるのぢやわいの。

皆々　あゝ、そりや違ふ。

お菊　まだ〳〵こればかりではござりませぬ。修理之助殿が作られし夜雨といへる唱歌こそ、夜濡る、といふ心にて、奥様と修理之助殿と密通なりとわたくしに、言うてくれよと頼みましてござりますわいな。

操　この身に覚えもない事を、濡衣を着せようとは、思へば憎い者共ぢやな。

皆々　これは堪らぬ〳〵。

右衛　して、これは誰々が頼みしぞ。

お菊　先づ第一が玄伯老、附きましては四人の者。

松兵　あもし〳〵お部屋樣、そりや玄伯殿でござります、我々どもは、

四人　存ぜぬ事。

お菊　何の知らぬことがあらう、お前方も謀叛の仲間、知らぬとは言はさぬぞえ。

四人　あゝ、仕方がない。

右衛　僞りを申す、にツくい奴等、お菊如何いたさうな。

お菊　お側にあつてはお爲にならず、御追放遊ばしませ。

五人　やあ。（トびつくりなす。）

右衛　これ藏之進、彼等を直に追放いたせ。
藏之　畏つてござりまする。さあ、御前の御意ぢや、帶劍をお渡しなされい。
玄伯　こりやまあ、夢では、
五人　ないか知らぬ。
珍才　さあ〳〵、早くお渡しなされい。（ト五人の大小を取つて片附ける。）
右衛　思へば彼等は人面獸心、畜生に等しき者共。こりや修理之助、彼等が面を獸のやうに一々ゐどつて追放いたせ。
修理　これは一段の思召し、委細畏りましてござりまする。
右衛　こりや〳〵、奥もこれで見物いたせ。
操　有難うござりまする。（ト操御前も二重へ住ふ、修理之助給具を列べて、）
修理　さあ何れも、これへござられよ。
玄伯　いえ〳〵、それには及びませぬ。
松兵　ゐどらずとも、我々は、
雁八　獸のやうな、

四人　顔色でござる。

藏之　御前の御意ぢや、覺悟おしやれ。

右衛　こりや珍才、そちは顔を押へてやりやれ。

珍才　それは、得たりかしこしでござります。

右衛　先づ第一番は唐崎松兵衛。

松兵　へゝい。（ト前へ出る、珍才頭を押へる。）

修理　獸は何にいたしませうや。

右衛　おゝ、犬にいたせ。

修理　かしこまりました。（ト松兵衛の顔を斑に塗り、髭を附ける、珍才顔を正面に向ける。）

右衛　至極よう似合うた。それにて啼いて見せい。

松兵　（是非なく四つ這ひになり。）わん／＼。（ト泣く、珍才扇子にて打つ。）あゝこれ、何をするのだ。

珍才　犬も歩けば棒にあたるといふ譬がある。

右衛　二番は堅田雁八。

雁八　へゝい。

右衞　これは何にいたさうな。奧、ちと思ひ附きやれ。
操　左樣でござりまする。狐などは如何でござりませう。
右衞　おゝ狐、よからう、狐にいたせ〳〵。
修理　かしこまりました。(ト雁八の顏を白く塗り、額へ寶珠の玉を描く。)
右衞　おゝ狐はよく跳ぶといふ故、跳んで啼いて見せえ。
雁八　(見事に轉つて飛上り、)こん〳〵。(ト啼く。)
お菊　奧樣、面白いことでござりますな。
操　よい慰みをしますわいの。
右衞　第三番は瀨田の關藏。
關藏　はッ。
右衞　これは何にいたさうな。
藏之　御前で申上ぐるは、甚だ恐れ多い儀でござりまするが、日外彼れが裸踊りをいたせし折、一見いたしおきましたが、至つて睾丸が大きうござりますれば、狸は如何でござりませう。
右衞　むゝ、狸とは一段ぢや、狸にせい〳〵。

修理　畏りました。（ト關藏の顏を眞中より鼻へかけて黑く塗り、髭を附ける。）

右衛　さあ〳〵、狸の啼聲が聞きたい、早く啼け〳〵。

關藏　はツ、狸は何と啼きますか。

珍才　御前の御意ぢや、何とでもお啼きなされ。

關藏　はツ、ぽん〳〵、ぽん〳〵。

珍才　狸はぽん〳〵と啼きますかな。

關藏　これは腹鼓の音でござる。

右衛　第四番は粟津清六。

清六　はツ。

右衛　お菊、彼は何がよからうな。

お菊　顏のしやくんだところは、猫がよろしうござりませう。

右衛　おゝ、猫にせい〳〵。

修理　かしこまりました。（ト清六の顏を猫のやうに塗る。清六立上りて、）

清六　主命とはいひながら、猫にされたる此の恨み、思ひ知れ。（ト珍才に喰ひ附く。）

珍才　あゝこれ、何をするのだ。
清六　喰ひ殺す積りだ。
珍才　何を、根岸ではあるまいし。
右衞　打留は奈須野玄伯。
玄伯　はッ。
右衞　彼れは一番大きいから、馬にせい〳〵。
修理　畏りました
右衞　赤馬がよいぞ。
修理　はッ。（ト玄伯の顏を赤く塗り、頰へ⊕を描く。）
右衞　さあ〳〵、嘶いて見せい〳〵。
玄伯　ひん〳〵。（ト立上り嘶く。）
右衞　彼れは此の中の棟梁故、裸にして追放いたせ。
珍才　畏りました。（ト玄伯を裸にする。玄伯萌黄唐草の腰卷をしてゐる。）
右衞　至極よい恰幅ぢや。これ、右の手を上げて見せい。

立伯　はッ。（ト右の手を上げる。）

右衞　皆見い、芝山の仁王のやうぢやな。

女達
皆々　ほんに、左樣でござりますわいな。

珍才　盜賊除のお札は、これより出ます。

立伯　何をおのれまでが。（ト珍才の頭をくらはす。）

右衞　いで此の上は五人とも、館の名殘りぢや、啼きながら立て。

五人　はッ。

藏之　いづれも、お立ちやれ。（トこれにて五人立上り。）

立伯　これといふのもお菊の方。

五人　思へば〳〵。

お菊　よい氣味でござりますな。

五人　いま〳〵しい。

修理　えゝ、きり〳〵と立ちませい。（ト五人是非なく花道へ行く。）

立伯　なんと何れも、唯引込むも殘念だ、愚老が裝からの思ひ附、角力甚九で引込みませう。

四人　それはよろしうございませう。

玄伯　いづれも、囃子をお賴み申す。

四人　心得ました。（ト玄伯角力甚九を唄ひ、）

玄伯　「醫者に一味して諸士さん〲、ゑどられたぢやないかいな。」

四人　その通りだんよ。

玄伯　「ぶち犬狐に古狸、赤馬に三毛猫、」

四人　その聲だんよ。

玄伯　ひん〲、わん〲、こん〲、

四人　ぽん〲、にやア〲、ひん〲。

ト五人にて囃し、それを近習追ひ立て〲花道へはひる。右衛門佐思入あつて、

右衛　こりや珍才始め腰元どもは、奥へ酒宴の設けをいたせ。

珍才
腰元　畏りました。

ト奥へはひる。跡右衛門佐、お菊、操御前、修理之助、藏之進殘る。

右衛　佞人どもを遠ざけたれば、久しぶりにて皆を相手に、打寛いで酒宴のなさん。奥も今宵は一つ過

しやれ。
操　はツ、御前様のお心解け、有難いその仰せ。
藏之　申上ぐるも恐れあれど、打つて替りし此の場の御様子。
修理　殊に合點の行かざるは、お菊の方が情の計らひ。
操　これには定めて、
三人　深き仔細が。
右衞　（思入あつて。）淫酒に耽り、身持惰弱も、國家を思ふ我が計らひ。
三人　すりや御本心は。
右衞　今ぞ密計整ふ上は、明し聞かせん、承はれ。我父上の取立にて小身より立身なし、政事を預かる野浦一學、その大恩を打忘れ國家を望む謀叛の企て、既に家の重寶たる雌鳥の印を奪ひし故、事荒立つて詮議なさば破却なさんも測られず、如何はせんと苦勞なし、わざと彼が手段に乘りお菊に迷ふ體に見せ、淫酒に長じ身持惰弱にせしも、雌鳥の印を取り得ん爲め、謀計は密なるをよしとすればこの密計を知つたるは、隼人お菊唯二人、奥を始めそち達にも今日の今まで包みしが、隼人が手段に雌鳥の印再び我が手に入りし故、明し聞かする我本心。あゝ計略とはいひながら、

忠義の者に無理難題、嘸や無慈悲な者なりと恨みし者もありつらん。これとても國家の爲め、許してくれよ、皆の者。

トよろしく思入。操御前、修理之助、藏之進扨こそといふ思入あつて、

操　すりや御前樣の御放埒は、紛失なせし雌鳥の印を、取り得ん爲めの御計略とか。

修理　はツ、かゝる深きお心とも存ぜぬ故に愚臣等が、幾度となく御諫言。

藏之　及ばぬ智慧に和漢の引事、申上げたる面目なさ。

兩人　失禮御免下さりませう。

右衞　それとても皆忠義故、なに申譯に及ばうぞ。（トお菊思入あつて、）

お菊　御前のお身持惰弱にせしは、皆わたくしがなす業と、嘸やこれまでわたくしを、お恨みなされたでござりませうが、これにて此の身のお恨みを、お晴らしなされて下さりませ。

修理　さるにても心得ぬは、野浦が養女のお菊の方。

藏之　まさしく奸婦と思ひのほか、

操　男子にまさるあつぱれ忠義。

右衞　ほゝお、いかにも男子に勝る筈、お菊が素性は。

お菊　あもし、いまだ棟梁野浦をば、罪に落さぬ其の内は、上邊を包む我身の上。
右衞　それも今宵を過さぬ手筈。
修理　すりや、野浦をば、
兩人　今宵の内に。
右衞　あこれ、事成るまでは。(トあたりへ思入あつて、)ひそかに〳〵。
ト唄になり、皆々よろしく此の道具廻る。

(奥庭の場)――本舞臺三間の間高二重、本緣附、上の方に塗骨障子屋體、正面銀襖、下の方折廻し網代塀、上下柴垣、躑躅の花、松の立木、半月を出し、總て佐々木家奥庭の模樣よろしく、時の鐘にて道具留る。と、上手より以前の玄伯紺看板、頬冠りにて出來る、下手より中間丸平角介の二人袴股立にて出來り、

兩人　玄伯様。
玄伯　これ。(トあたりへ思入あつて、)あのお菊めが變心に追放されし口惜しさ、惡事露顯の上からは皆お祟り、敵といふは彼女め故、殺して恨みを晴らさんと、忍び込んだるこの奥庭、そち達も身の

上なれば、お菊と見たなら討つて取れ。

兩人　心得ました。

玄伯　忍べ。

兩人　はツ。（ト時の鐘にて玄伯に附いて上手へはひる。これより床の淨瑠璃になる。）

〽忍び行く庭は新樹の葉隱に月影暗き奥御殿、晴れぬ思ひに一學が、一間を立出で吐息をつき、（ト奥より野浦一學出來り、あたりへ思入あつて、）

一學　奈須野を始め一味の者、お菊が企みの裏をかき、追放させしと聞きつるが、察するところ慾に迷ひ、右衛門佐に一大事を打明けたに相違ない。荒川隼人が味方となり大望成就と思ひのほか、頼みになせしお菊が變心、こりや生けてはおかれぬわい。

〽無念面に現はるゝ父の惡事を諫めんと、一間を出づる悴主税、他聞を憚り聲潜め、

ト奥より主税之助出來り、一學の前へ住ひ、思入あつて、

主税　親人様。

一學　おゝ悴、何しにまゐつた。

主税　今更言うて詮なけれど、このほどよりの御諫言お聞きなされて下さらば、かゝることにはなりま

すまい。お菊の方が何もかも殿様へ申上げ、露顯なしたる上からは、先非を悔いてこの場にて、
御切腹なされませ。

〽元服なせば武士の數、この場で追腹いたしまする。
さあらば上のお慈悲にて、弟主馬はお助け下され、萬に一つは家名をば、お立てなされて下され
ませう。

一學　やあ、入らざる汝の諫言だて、切腹なすはほんの犬死に。

主税　すりやどうあつても親人には、御切腹はなされませぬか。

一學　何しに切腹いたさうぞ。

主税　さある時には、あさましき死をなされねばなりませぬぞ。

一學　事露顯なす上からは、死刑に逢ふは豫ての覺悟。

主税　その御恥辱を見ようより、

〽冥士の魁仕つらんと、諸肌押脱ぎ差添を、抜くより早く左りの脇腹、ぐつと突込む健氣
な生害、一學見るより無念を重ね、

一學　こりや我への當附に、自殺なせしか不孝者めが、

〽はつたと睨む一學を、恨めしさうに這ひ寄つて、主税は苦しき息をつき、

主税　不孝者とはお情ない、不忠不義の汚名をば後へ殘すが悲しさに、その惡念を斷たん爲め。

〽現在血筋のわたくしが命を捨てなば心も折れ、先非を悔いて善心に返りたまはん事もやと、死するは親への子の孝行。

〽それを不孝とおつしやるは、いかなる天魔の所爲なるか、情なや口をしやと悲嘆の涙に暮れければ、さすが親子の恩愛に鐵石心の一學も、思はず浮む眼に涙、

一學　あゝ、親の心子知らずと、元この謀叛を企てしもそちが行末思ふ故、善にもせよ惡にもせよ、親に附くがこれ順道、同じ命を捨てるなら何とて親子死を共にせぬぞ、あのこゝなうつけ者めが。

〽口には言へど不便さに迷ふ闇路の時鳥、啼く音血を吐く思ひなり、手負は猶も苦しげに、

主税　そのお言葉は無理ならねど、お主さまには替へられぬ、先立つ不孝は親人様、

〽許してたべと合す手も、鶍に外れる苦しみを見るに忍びず一學が、心弱くてかなはじと、口に唱名振上ぐる刀の下に果敢なくも、首は前にぞ落ちにける、一學浮む涙を拂ひ、

トこの内主税苦痛の思入よろしく、一學刀を拔き介錯なし、思入あつて、

一學　頼みに思ふお菊が變心、かてゝ加へてそちが切腹、斯く運命の傾く上は隼人が荷擔も心得ず、い

でこの上は右衛門佐、忠義の奴輩討つて捨て、共に冥土へ赴くほどに死出三途にて待合せよ。
〽あへなき首級に打向ひ、名残りを惜しむその折から、
ト一學首を取上げ見て愁ひの思入、この時奥にてお菊の方の聲にて、
お菊　あいや、腰元衆、唯今御寢所へ上りますと、申し上げて下さんせいな。
〽襖せもる、お菊が聲、聞くに一學打ちうなづき、（ト一學思入あつて、）
一學　あの聲はたしかにお菊、時に幸ひ彼女めを血祭り、小影へ忍んで、むゝさうだ。
〽槍引しごいて傍なる、柴垣押分け忍び入る。（ト時の鐘、一學上手へはひる。）
〽やゝあつて一間より寢所へ通ふお菊の方、物思ひげに立出で、、はかなき人の身の上を月によそへてかこち言、（トお菊奥より出來り、月に思入あつて。）
お菊　あゝ、同じ月でも望月はよもすがら冴えわたり、又三日月は僅の間影さへ薄く山の端へ、落つるは人の身も同じ、百歳生きるも三歳兒で死ぬも、皆定まりし身の定業、照ると曇るはこれ善惡、あゝ浮世に變りはないものぢやなあ。
〽見上ぐる月に村雲の後へ忍ぶ二人の曲者。（ト此の時以前の中間二人窺ひ寄つて、）
角介　お菊の方、

兩人　觀念。

〽觀念せよと斬附くる、身を躱して緣先より、ひらりと飛びし早速の働き、

ト兩人切つてかゝるをちよつと立廻り、お菊は二重より飛下り、同じく兩人も飛下り立廻つて、

お菊　こりや何故に、この狼藉。

丸平　何故とは知れたこと。

角介　味方の企みを、

兩人　訴人せし故。

お菊　扨は野浦に一味の者よな。

兩人　むゝ、知れたことだ。

〽又もや二人が切りかくるを、小肱取つて右左り、もんどり打たせて投退くる、隙を窺ひ野浦一學柴垣押分け現はれ出で、ぐつと突込む恨みの槍先、こなたもすかさず懷劍を拔くより早く槍の柄を、はつしと切れば一學が、南無三寶と柄に手を、かくる目先へ突出す白刄、烈しき手練に打ちおどろき、

ト此内上手柴垣の間より一學股立肩衣をはれ、槍を持ちつか〳〵と出てお菊を突く、お菊どうとな

り、直に懷劍にて槍の柄を切り、短刀を一學へ突附け足を踏出し男の思入。

一學 やゝ、合點行かざるお菊が振舞、扨は女と思ひしおのれは。

〽言ふに手負はにつこと打笑み、

お菊 佞人どもの惡事をば、見出さん爲めに當家へ入込み、女とやつせし我こそは、紀州高野山にて人となりし不動院の稚兒白菊丸。

丸平
角介 何と。

〽組附く二人を振解き、一度に當てる眞のおて、なまめく姿に引替へて勇氣を現はす白菊丸。
ト中間二人を一時に當て、肌を脫ぎながら轉す、これにて後茶筌の若衆鬘になる。

一學 すりや調伏を賴みおきたる、不動院を殺害せし稚兒は汝であつたよな。して又何故當家へ入込み、我が大望の妨げなせしぞ。

白菊 それぞ卽ち故主へ忠義、元我父は當家の家臣、不動院は伯父故に先年殿の御勘氣受け、此の身は父の菩提の爲め高野山にて稚兒奉公、伯父の惡心是非に及ばず殺害なし、下山なしたる白菊丸、おのれに近寄り養女となり、上邊は一味の體に見せ惡事の一々聞出し、竊に殿へ申上げ、父の汚名を雪がん爲め、何と肝がつぶれしか。

〽聞くに一學齒がみをなし、

一學　さは知らずして賴みに思ひ、我が大望を明せし悔しさ、最早露顯の上からは、片ッぱしから鏖、その血祭りは白菊丸、

〽觀念せよと一學が切込む刀に身を開き、受けつ流しつてう〳〵、火花を散らして戰うたり、（ト兩人立廻り、中間かゝるを切倒し、立廻る内白菊丸段々に苦痛の思入、とゞ一學に切られどうとなる。）〽次第に弱る深手の苦しみ、だじろぐところを一學が銳き刄に切下げられ、尻邊にどうと倒るゝ白菊、一學莞爾と打笑みて、

餌かふ犬の譬に等しく、我大望の裏をかき訴人なしたるにッくき白菊、おのれの命取つたるは、此の世の思ひ出心地よや。

〽手負は苦しき息をつき、

白菊　惡人なれど現在の伯父を殺せしこれ天罰、死するは元より覺悟の白菊、今ぞ冥土へ赴きて、亡き父上へ物語らん。

一學　えゝこゝま言いはずと、くたばつてしまへ。

白菊　何をこしやくなゝ

〽よろぼひながら立上る、折から窺ふ玄伯が、(ト上手より玄伯つか〳〵と出で、)

玄伯　覺悟、(ト白菊丸へかゝる。)

〽むんずと組むを振解き、手負ながら玄伯が脇腹ぐつと突込めば、あつと苦しむ急所の深手、

ト文句の通りあつて、白菊丸につたり思入。

白菊　これぞ冥土のよい道連。

〽言ふを此の世の名殘りにて、散際清き稚兒百合の、花の行方ぞあはれなる。

ト白菊丸苦痛の思入にて短刀を拔くと、玄伯ばつたり倒るゝ、この上へ白菊丸どうとなり喉笛をかきてどうとなり落入る。これにてどん〳〵を打込む、一學きつとなつて、

一學　あの物音は一學を、取卷く合圖か、はて、小ざかしい。

トきつと見得、ドン〳〵ばた〳〵になり、下手より捕手六人槍を持ち出來り、

捕一　叛逆露顯の上からは、最早免れぬ野浦一學、さあ、尋常に、

皆々　覺悟なせ。

一學　何をこしやくな、片ッぱしから撫で斬りだぞ。

捕一　それ、討取りめされ。

皆々　心得ました。

ト、槍にて突いてかゝり、大まくしの立廻りあつて、一學捕手を左右へ切倒しきつと見得。と、上手にて右衛門佐、荒川隼人の聲して、

右衛　やあ〳〵、叛逆人の棟梁たる野浦一學へ、

隼人　冥土の土産に見するものあり。

一學　やゝ何と。

ト上手より右衛門佐、修理之助出で、續いて藏之進三方へ雌鳥の印を載せ持ち出來り、同時に下手より荒川隼人出來る、一學見て、

やゝ、右衛門佐が體といひ、一味と思ひし隼人めも、廻し者にてあつたるか。

右衛　いかにも、淫酒に長じ身持惰弱も、まツかくなさん豫ての計略。

隼人　最前殿の打擲をわざと無念の體に見せ、汝が企みに一味なせしは、雌鳥の印を恙なく取り得ん爲めの言合せ。

一學　扨は渡せし雄鳥の印は、

修理　荒川氏の計略にて。

藏之　豫てこしらへおきたる贋物。
右衞　まこと佐々木の重寶たる、雌雄の印はこれにあり。
隼人　冥土の土産によつく見よ。
一學　すりや雄鳥の印は、贋物にてあつたるか。
修理　最早脫れぬ。
皆々　覺悟なせ。(トこれにて一學無念の思入あつて、)
一學　ちえゝ口をしや殘念や、計る〳〵と思ひのほか、却つて汝等に計られしか。もう此上は死物狂ひ、
　右衞門佐が首とつて、後々百歳の末までも、主殺しの名を殘さん。
修理　やあ、こしやくなる其の一言、者共彼れを搦め取れ。
六人　心得ました。(ト左右より立ちかゝるを、)
隼人　やれ待たれよ方々、某思ふ仔細あり。やあ〳〵、その小悴これへ。
侍　はあゝ。(ト下手より侍二人にて、袴裝の野浦の次男主馬之助を伴ひ出るを一學見て、)
一學　やゝ、そちや乙の悴主馬之助。
主馬　父上樣。

隼人　いかに一學、先殿様のお眼鏡にて家老の列に加はるその方、今縄かけて死刑になさば、先殿様の御眼識違ひ、さるによつて先非を悔い、この場に於て切腹なさば悴主税が忠義に愛で、殿に願つてこれなる一子に、野浦の家名を立てさせん。さあ、先非を悔いて切腹なせ。
一學　さあ、それは。
隼人　承引なくば一子を害し、汝を踏附け縄かけうか。
一學　さあ、それは。
隼人　切腹なすか。
一學　さあ、
隼人　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
隼人　家名を殘すか一子を殺すか、二つに一つの返答おしやれ。
ト隼人主馬之助を突附ける。一學思入あつて、
一學　む、斯くまで不忠の某に切腹赦免あるのみか、家名を殘し下さる仁心、今ぞ惡念發起せり。
トどうとなつて腹へ突立てる。

主馬　やあ、こりや父上樣には、

隼人　あ、これ。（ト主馬之助の寄らうするをへだてゝ）さすがは野浦、

修理
藏之　けなげな最期、

一學　たゞこの上は悴が行末。

右衞　白菊もろとも取立て遣はす。

一學　ちえゝ有難い。いざ、介錯頼む荒川隼人。

隼人　言ふにや及ぶ。

右衞　謀叛の棟梁滅ぶる上、

藏之　再び揃ふ雌雄の御判。

修理　佐々木の御家は、

隼人　萬代不易。

皆々　目出度い〳〵。

一學　これが此の世の、

ト一學刀を引廻す、隼人は刀を振上げる。兩人よろしく木の頭、一學苦痛の思入、カケリにて、

ひやうし　　幕

幕引附けると、「えい」と掛聲して、ばつたりと首を落す音する。跡打込み。

# 五幕目

## 櫛田川酒店の場
## 武太夫閑居の場

〔役名〕――井筒武太夫、同粂之助、正直清兵衛、三木藏之進、酒屋の亭主久七、輪違郷兵衛、井筒の下部藤助、伊勢路の番太幸八。久七女房お瀧、杉本の小じよくお橋、仲居およさ、おりう等。〕

（酒店の場）――本舞臺三間上手へ寄せて常足の二重、正面押入、鼠壁、眞中暖簾口、諸國の狀差、下手落間、酒樽の書割、庇に山形に久の字の紺の暖簾をかけ、よき所に今日店開き接待酒と書きたる札をかけ、丁稚善太前髮をすつぺがせし形、友吉、高藏、小七等若い者の裝にて、酒樽の鏡を抜き柄杓を附け、茶碗にて〇△の雲助、□◎の伊勢參り、旅人の一、二等に酒を飲ませゐる、伊勢音頭にて幕明く。

△　親方、今日は店開きでお目出度うござります。

〇　まことにお天氣もよくつて、お仕合せでござります。

善太　あい、今日は店開きの祝ひに、親方が酒を振舞はつしやるのだ、何と氣前な旦那だらうの。

友吉　お前方も亦參詣の衆も、遠慮なしに飲まつしやるがい、。

□　はい〳〵有難うござります、そんならお辭儀なしにやらかしませう。

高藏　さあ〳〵、いくらでも澤山飲まつせえ。（ト四人して皆々の茶碗へ注いでやる。）

◎　いや、まことにいゝ酒だ、錢が入らないだけ格別うまい〳〵。

旅一　方々の店開きもあるが、こゝの家のやうに氣前のいゝ人はない。

△　こゝの親方は津の觀音寺前で居酒をしてゐたが、今度この櫛田川へ升酒を出したのさ。

旅二　そんならしつかり金が出來て、こゝへ店を出さつしやつたのだね。

○　こんなに氣前がいゝから、段々身代がよくなるばかりだ。

小七　この手合は唯酒を飲むと思つて、べらぼうに胡麻をするぜ。

□　なに、胡麻ぢやあねえ、實にうまいから地金に褒めるのだ。

善太　さあ〳〵、腹一ぱい飲まつせえ、おれが酒ではなし、親方の酒だ、構ふことはねえ〳〵。

◎　いや、主人思ひの番頭さんに、もう一ぺい貰ひませう。（ト皆々捨ぜりふにて酒を飲む。）

旅一　いやもう、お蔭でいゝ心持になつた、さあ此の意氣で、太神宮樣へまゐらう〳〵。

旅二　まことにこれがお蔭まゐりだ。

皆々　違えねえ、はゝゝゝ。

友吉　さあ〳〵、もつと飮まつせえ〳〵。
皆々　いや、まことに御馳走々々。
○　ヤアトコセ、よんやな。
ト皆々醉つたる思入にて音頭を唄ひながら、わや〳〵言つて上下へはひる。花道より非人一里塚の胴六、狼石の幸次、道端の治藏思ひ〳〵の非人の裝にて、捨ゼリフを言ひながら出來り接待の札を見て、
胴六　こう幸次見や、接待酒といふ札が出てゐるぜ。
幸次　こいつあ妙だ、二三日酒を飮まねえから、匂ひを嗅いだら腹の蟲がぐう〳〵いふ。
治藏　こちとらア貰ふが當りめえだ、やらかせ〳〵。（ト三人手籠に飮まうとする。）
善太　これ〳〵途方もねえ、どうしたものだ、手前達のやうな物貰ひに振舞ふのはこつちの方だ。
友吉　うすぎたねえ乞食の分際で、何故手籠にするのだ、飮みたくばいくらも振舞つてやるわえ。
幸次　なに、うすぎたねえ、べらぼうめ、こちとらア腹からの乞食ぢやねえわ。
胴六　元は何の某といふ貧乏人だ、明日が日足を洗やあ、うぬらと同じ人間だぞ。
治藏　きいた風な。きたねえもきれいもいるものか、構ふことはねえ、やらかせ〳〵。
ト三人手ごみに酒を飮む。

友吉　こいつが〳〵、おいら達の留めるのも聞かず手籠にすると、其の分にしてはおかねえぞ。

高藏　さうだ〳〵、手籠にしやあがると、たゝきしめるぞ。

幸次　なに、たゝきしめる、面しれえ、さあしめろ〳〵。

兩人　さあ〳〵、たゝきしめろ〳〵。

善太　しめなくツてどうするものか。

番頭三人　しめろ〳〵。

非人三人　どうともしろ〳〵。

ト善太を始め番頭は縫ぐるみを持ち立ちかゝる、三人の非人は身體をこすりつけ、打たれようといふ思入。奥より久七羽織着流しにて出來り此の中へはひり、

久七　これ〳〵手前達は、非人を相手に、どうしたものだ、これ止さねえか〳〵。

善太　親方うつちやつておきなさいまし、くせになります。

四人　お留めなさいますな〳〵。

久七　これ、おれが止せといつたらよさねえか、たはけづらめ。（トこれにて四人控へる、）

非人三人　さあ〳〵、どうともしろ〳〵。

久七　これ手前達も亦店の者が何と言つたのか知らねえが、酒が飲みたくば施行の酒だ、いくらでも飲ませるから、しづかにして飲むがいゝぢやあねえか。
胴六　いゝや、施行の酒なら、飲みたかねえ、いやだ〳〵。
幸次　これ、宿無しこそしてゐるが、三度々々炊きたての飯で、鰹の刺身や鯵の鹽燒、素人よりやアよつぽど奢つてゐるわえ。
治藏　お餘りの魚のあらを突ついて、したみ酒を飲むとは譯が違ふぞ。飲ませるといつても、接待酒はいやだ。
久七　(少しむつとして、)それほど贅澤な宿無しに酒は施すめえ、そんなら又この店へ來ねえがいゝ。さあ、通つて貰はう〳〵。
三人　いゝやいやだ、動くことはできねえ。
久七　何で動かれねえのだ。
胴六　今店で打たれて足腰が立たねえ。さあ、立たれるやうに譯をつけろ
治藏　さもねえ内は、動かれねえ〳〵。
三人　さあ、譯をつけろ〳〵。(ト三人眞中へふんぞりかへる。)

善太　こいつらあ言ひがけをしやがると、打ちのめすぞ。

久七　これ、手前達もおれが口を利いてゐるに、うつちやつておけ〳〵。

友吉　いえ親方、退いてゐなせえ〳〵。

四人　打ちのめせ〳〵。

三人　どうともしろ〳〵。

ト四人縫ひぐるみにて打たうとする。久七捨ゼリフにて留める。やはり伊勢音頭にて、番太幸八十手と捕繩を腰にさし出來り、この體を見て、

幸八　もし旦那、これは何事でござります。（ト久七幸八を見て、）

久七　おゝ番太の幸八どのか、よい所へ來てくれた。今こなたの所へ人をやらうと思つた所だ。（若い者に向つて、）これ、手前達は靜にしろといふに。（トこれにて四人靜まる。）

幸八　わたくしへお人とは、何事でござりまする。

久七　其譯はそこにゐる三人の乞食が、見さつしやる通り今日は店開き故、往來の者へ施行に酒を振舞ふ所へ來て、手籠に飲まうとするのを、店の者が留めたのが言ひがかりで、間違ひになつたをわしが留めて、酒を飲ませようといへば厭だと言ふ、そんなら通れといへば、打たれて身體が痛く

て動かれぬと、強請がましい事を言つてこの始末だ。どうぞこなた引取つて、連れて行て下され。
幸八　畏りました、憎い奴等でござります、わたくしに任せておきなさいまし。
三人　あゝ、身體が痛くツて、いごかれねえ〳〵。
幸八　やい〳〵、こいつらア何處の牛の骨か馬の骨か知らねえが、この幸八が持場所へ來て、強請がましい事をぬかしやあがつて、太え奴だ。さあ片端から起きろ〳〵。
三人　どうして身體が痛くつて、動かれやせぬ。
幸八　なに、動かれぬ、太い奴だ、動かれざあ動かれるやうにしてやるぞ。

ト腰の繩と十手とを出す、三人びつくりして、

三人　もし頭、わつちらをどうしなさる。
幸八　どうするものか、動かれねえといふから三人ともふんじばつて、此の棒を背負はせるのだ。
胴六　あゝもし頭、なにもわしどもが、
三人　動かれねえと言やあしませんわな。
幸八　そんなら動かれるか。
三人　あい、大丈夫さ。

幸八　動かれるならば、さあ立て〳〵。（ト十手にてくらはせる。）

三人　あゝ痛い〳〵。御免なせえ〳〵。（ト三人起上り居住ひをなほす。）

幸八　此等奴ア太え奴等だ、おれが場所へうしやあがつて、いやらしいことをぬかしやがれば、その儘にしておくのぢやあねえが、今日のとこは許してやる。さあ、きり〳〵と行け〳〵。

ト三人は不承々々に下の方へ来て、

幸次　えゝこれ、接待酒を幸ひに、ちつとばかり仕事にしてえと思つたに、なア治藏。

治藏　さうよ、丁半の元手や酒でも飲まうと、折角うまくやりかけたに。

胴六　とんだ奴がうしやあがつて、しかけた仕事はちや〳〵むちやくちやにしやがつた。

三人　思へば〳〵。

幸八　どうしたと。

治藏　とてもお前には、

三人　あゝ、かなひませぬ。躄や片輪が助かりませぬ〳〵。（などゝ言ひながら花道へはひる。）

四人　（見送りて）太えやつもあるものだ。

善太　幸八さん、大きに有難うございます。

久七　いゝところへ幸八どんが來てくれて、何事なく濟んで御苦勞々々。

幸八　いえ、その御禮には及びませぬ、番太の持場所の旦那方はお出入り場も同じこと、骨を折るのは當り前でござります。

久七　今日は目出度く店開きだ、何はなくとも臺所へ行つて、いつぱい飮んで下さい。

幸八　有難うござります、お辭儀なしに御馳走になりませう。

久七　こう手前達は、此の人を裏へ連れて行つて、お瀧にさういつて、たんと飮ませてくれろ。

善太　はい／＼畏りました。さあ幸八さん、奥へおいでなせえ。

幸八　左樣なら旦那、御馳走になりませう。

久七　ゆるりと飮まつしやい。

ト唄になり、善太案内して幸八裏口へはひる。久七は帳場へ坐り、若い者そこらを片附けてゐる。と花道より輪達鄕兵衛浪人の裝にて、短刀の風呂敷を持ち出て來て、

鄕兵　こりや久七、在宿か。（ト言ひながら二重へ上る、久七見て、）

久七　これは鄕兵衛樣、よくおいでなされました。（ト高藏茶煙草盆を出す。）

鄕兵　久七、今日は店開きで目出度いの、また普請が殊の外立派に出來た。

久七　有難うござります、方々の御贔屓に與りまして、旦那方のお蔭でやう〳〵出來ました。

郷兵　いや、目出度い〳〵、その目出度ついでに、久七ちと其方に頼みがある。

久七　へい、お頼みとは、いかやうの事でござります。

郷兵　頼みといふは外でもない、以前身共が親の輪達彌五右衛門に仕へてをつた久七、其緣によりこれまで度々、五兩三兩無心を申入れたが、知つての通り永々の浪人、世話に言ふ燒石に水、直になくなつてしまふ、ところで又少々無心にまゐつたが、いかに以前の主從の誼とはいひながら、度度のことで氣の毒故、今日は質物を持つて來た。（ト風呂敷に包みし袋入りの短刀を出して、）この短刀は佐々木家の重寶深緣と名附け、卽ち千壽院村正の作、これを其方へ質物に預けるあひだ、どうぞ金子十兩貸してくりやれ。

久七　おつしやる通り、以前は故主の若旦那、これまで五兩三兩と度々の御無心、お貸し申して上げましたが、御存じの通り普請から代物の仕込に、あちこちと借財をいたしました仕儀、お氣の毒ながら、今日のところはお斷り申します。

郷兵　さうでもあらうが、もうこの上無心も申すまいから、どうぞ都合して貸して貰ひたい。

久七　まことにお氣の毒でござりますが、唯今申します通りの仕儀なれば、

鄕兵　すりや、どうあつても貸されぬと申すか。

久七　どうぞ御免なされて下さりませ。

鄕兵　そんなら、どのやうに賴んでも、聞入れてはくれぬか。（ト言つても久七默つてゐる。）あゝ、これほど賴んでも、ほい、（ト當惑の思入。）何といたさう、是非に及ばぬ、金がなければ首のないにも劣る、命があつても何の益なし。今日その方が店開きの店先を借りて、輪違鄕兵衞この所にて切腹致す。

久七　なに、御切腹なされまする、それはまた思ひきつたことでござります、いよ〳〵腹をお切りなされますか。

鄕兵　おゝ、切るとも〳〵、身共も武士だ、申出したことは反故にはならぬ、この場に於て切腹いたす、必ず留めるな。

久七　いえ〳〵、決してお留め申しはいたしませぬ

鄕兵　然らば唯今、切腹いたして相果てるぞ。（ト肌を脫ぎ刀を拔き思入。）さあ、今が最期だ、南無阿彌陀佛。（ト刀を逆手に持ち思入あつて。）こりや〳〵久七、その方はいよ〳〵止めぬか。

久七　何しにお止め申しませう、潔よく御切腹なされませ。

鄕兵　是非に及ばぬ。いよ〳〵切腹。（ト又腹を切らうとして。）これ久七、その方止めぬと、本當に腹を切

ろぞ、腹を切れば命がないぞ、さすれば其の方檢屍を受けねばならぬぞ、物入りぢやが、よいか、よいか、よければ直樣切腹いたす。（ト腹を切らうとして切り兼ねるをかしみあつて、）いや〱、止さう〱、今日は切腹はならぬ。

久七　そりや又何故でござります。

鄕兵　たしか今日は血忌であつた。（ト刀を拭いてをさめる。）

久七　は、、、、大方そんなことであらうと思ひました、腹を切ると言つたら止めるだらうと、そんな脅しを言はしやりましても、びつくりはいたしませぬ。

鄕兵　これ久七、今のは身共が出損ひだ、どうぞ了簡して貸してくりやれ。

久七　よろしうござります、それほどおつしやること、問屋へやる金が丁度十兩ござります、今日は御用達ませう、以來は決して相成りませぬ。

鄕兵　そんなら貸してくれるか、忝ない〱。

久七　暫くお待ちなされませ。（ト奧へ入り、直に十兩包を持出て、）左樣なれば十兩、お受取りなされませ。

鄕兵　あゝ家來は持つべきもの。何にも言はぬ、これぢや〱。（ト手を合せる。）

久七　お約束の千壽院の刀を、お預り申しませう。

鄕兵　いかにも渡すであらう。（ト短刀を出し）千壽院村正、捨賣りにしても百兩になる刀。
久七　左樣な高金の品を、よく今まで持つておいでなされましたな。
鄕兵　實は此の刀は盜み物なれば、今にも詮議が嚴しくなれば、とても世間へ出されぬ刀、外へ預けることがならぬ故、其方へ預けるのぢや。
久七　大方そんなことでござりませう、然し引合は喰ひはしませぬかな。
鄕兵　いや氣遣ひせまい、めつたにそのやうなことはないて。
久七　さういふことなら、たしかにお預り申しました。
鄕兵　（金を懷中して、）久七、今日は何かと世話であつたな。
久七　左樣なれば鄕兵衞樣。
鄕兵　その內逢はう。（ト唄になり花道へはひる。久七は刀を袋へ入れながら、）
久七　百兩になるといふこの刀、どうで鄕兵衞殿は金は出來まい。流れになつたら百兩に、どこぞへこつそり賣りたいものだ。
ト刀を風呂敷へ包む。木魚入りのやうな合方になり、花道より淸兵衞、更けたる打扮切繼の非人にて病氣上りの體、竹杖に縋り出來り花道にて、

清兵　昨日今日のやうなれど、算へて見れば三年後、この伊勢の津の居酒屋で太々講の寄金五十兩盗み取られ、村の衆へ言譯なく娘を古市へ賣り、その金は償ふたれど故郷にゐるも外聞わるく、東海道へ出て駕籠を舁いたり荷持をして、娘の年季を拔かうと思ひ、蟻が塔を積むやうに拵ぎ溜めた僅四五兩も、此の暮からの大煩ひで藥の代や雜用に一文殘らず遣うてしまひ、金がなければ誰一人世話のしてもなく、杖に縋つて歩かれるやうになると直に追出され、せう事なしに一文二文手の内貰ふ乞食の世渡り、惡い耳が聞かせともなく、別れてから娘の所へ便りもせず、今日までは辛抱したが、娘に逢つてちつと借りねばならぬ。あゝ是非もないことだなあ。

ト言ひながら舞臺へ來て、接待の札を見て、

はあ、施行の酒がある、病氣此の方一文の貯もなく、飲みたい酒を飲まずにゐたが、施行なれば久しぶり、一ぱい馳走になつて行かう。（ト門口へ來て腰を屈め、）はい、どうぞ一ぱい振舞うて下さりませ。

高藏　おい〳〵、さあ飲まつしやれ。（ト茶碗へついでやる。）

清兵　はい、有難うござります。（ト酒を飲む、）あゝいゝ心持だ、久しぶりで五臟へしみわたるやうだ、もう一ぱい下さりませ。

高藏　さあ〳〵、いくらでも飲むがいゝ。（ト又注いでやる、淸兵衞飮んで嬉しき思入にて帳場へ向ひ、）

淸兵　へい旦那樣、お蔭でこの頃にない憂を忘れました、有難うござります。（ト辭儀をして、思はず久七の顏を見てびつくりし、）や、そちや久七だな。

久七　（淸兵衞を見て、）さういふは、淸兵衞か、南無三。（トびつくりする。淸兵衞つか〳〵と二重へ上り、）

淸兵　見れば立派な今の暮し、扨はいよ〳〵太々の、五十兩のあの金は、われが盜んだに極つたな。

久七　これ〳〵淸兵衞、人聞の惡い、金を盜んだなどゝ覺えもない、めつたな事を言ふまいぞ。

淸兵　覺えのないことがあるものか、三年後津にゐた時、此方の店で盜られた金、久七が盜んだに違ひないわえ。

久七　又しても覺えのない盜人呼ばゝり、それには何ぞ證據でも。

淸兵　證據はなけれど、此方の店で盜まれた、五十兩の金。

久七　いや、證據がなければ、淸兵衞わりやあ言ひかけするな。

善太　（奥より善太出て、）やい〳〵、何處の奴か知れもしないどう乞食め。

高藏　あらうことかあるまいことか、家の親方に言かけをひろぐ、

友吉　うすぎたねえどう乞食め、汝がおほかた盜人だらう。

久七　今日のやうに乞食の强請の來る日はねえ、見せしめの爲めにたゝきなぐれ〳〵。
三人　それがいゝ〳〵。
　　ト三人清兵衞を下へ引下して縫ぐるみにて打つ。幸八出てこの體を見て、
幸八　まあ〳〵お待ちなされませ、お待ちなされませ。
三人　止めさつしやるな〳〵。
幸八　まあお待ちなさい、見りやあ年を取つた宿無、何を惡いことをしましたか、まあ〳〵靜にさつし
　やりませ。
高藏　いや〳〵この乞食親仁めが、家の旦那が金を盗んだなどゝ、途方もねえことをぬかしやあがるか
　ら、それで打ちのめしたのさ。
幸八　そんならこの親仁が言ひかけをしましたか。
清兵　いや〳〵、そりやかういふわけで。（ト言ひかけるを幸八留めて、）
幸八　まあ〳〵どういふ譯だか、後でゆつくり聞かうから、わしに任しておかつしやい。（ト久七に向ひ、）
　もし旦那、今日は目出度い店開きに、見ればどうか病氣あげくのこの年寄を、お店の衆が打たし
　やりまして、もしものことでもありやあ、お店の不吉になります。わたくしにお預けなすつて下

さりませ。
久七　どういふ譯か知らぬが、おれが金を盜んだなど丶、跡方もないことを言かけした乞食親仁、このまゝには濟まし難いが、こなたがさういふ事なら了簡しようから、連れて行つて下さい。
幸八　畏りました、さあ爺さん、定めて樣子もあらうが、まあおれが家へ來なせえ。
清兵　いえ〳〵有難うござりますが、こゝの家は動くことはなりませぬ。こんな身の上になりましたも、みんな彼奴が仕業、わしやあ悔しくつて〳〵なりませぬ。
久七　何だと、その裝になつたが、おれが仕業とは。（ト立ちかゝらうとするを幸八留めて、）
幸八　はて旦那、まあ御了簡なされませ、お前もおれが口を利いてるから、まあ何事もおれに任せなせえ
清兵　いえ〳〵任されませぬ。其の盜まれた金の譯は、（ト言ひかけるを。）
幸八　はて、その譯は後で聞くから、こゝぢやあ何も言はずに、まあわしが家へ來なせえといふに。
清兵　それほどに言つて下さること、お前さんに任せませう。（トやつと納得する。）
幸八　さうさつしやるがいゝ。さあ、おれと一緒に來なせえ。（ト手を取つて引立てる。）
清兵　あいたゝゝゝゝ、今若い者に打たれたので、身體が痛くて歩かれませぬ。

幸八　可愛さうに、これお前方も弱いものいぢめな、さつきの奴等には手出しもしないで、こんな年寄を歩くこともできねえやうに打つといふがあるものか、宿無でも人一人殺すと、こなた衆は下手人だぜ。

三人　やあ。

幸八　さういふこともあるまいが、重ねてこんな手荒いことはしなさらねえがいゝ。さあ、お前も切なからうが、おれが肩へつかまつて、そろ〳〵行きなせえ。（ト手を取つて肩へかけさせる。）

清兵　こりやあ大きにお世話樣でござります。

幸八　左樣なら旦那、お暇いたします。

久七　大きに御苦勞だつたの。

ト幸八清兵衞を連れ、下手へ來ながら、

幸八　さあどうだの、そろ〳〵歩けるかの。

清兵　身體中が痛くつてなりませぬ。

幸八　可愛さうに、こんなに手酷く。

清兵　これもやつぱり。（ト久七へ立ちかゝらうとする。）

幸八　はてまあ、來なせえといふに。

ト唄になり、幸八清兵衞を肩へかけ、下の方へはひる。久七後を見送りて、

久七　いまいましい乞食めだ、二度あることは三度といふから、また乞食の來ない內に、賣切の札を出して、手前達も目出度く一ぱい飮むがいゝ。

高藏　それは有難うございます。

四人　さあさあ、片附けようようよう。（トよろしく樽を片附ける。此の內久七向うを見て思入れ）

久七　いまいましい、行方が知れぬ故大方死んでゞもしまつたらうと思ひのほか、あゝ心にかゝる。

高藏　親方、何が氣にかゝりますえ。

久七　いやさ、心おきなく飮むがいゝ。

三人　有難うございます。

久七　どれ、おれも一ぱい氣を附けようか

ト久七以前の短刀を持ち立上る、この見得伊勢音頭にて道具廻る。

（武太夫閑居の場）――本舞臺三間平舞臺、正面石摺の襖、上手折廻し障子屋體、例の所門口、手蹟指

南井筒武太夫と記せし表札、下手健仁寺垣、こゝに下部藤助片襷にて爼板にて鯛をこしらへてゐる。

藤助　扨どうも合點の行かぬことだ、深緣の短刀紛失の科にて、御親子共に御浪人なされて、あの清兵衛が世話で、當國窪田で手蹟の御指南なされてござつたところ、清兵衛が他國してより、出入の御師與九太夫が世話にて、此の山田へ引移り、粂之助樣の緣により、お梅どのゝ貢を受けて微のお暮し、つひに小魚一つ買つたこともないに、最前弟御の藏之進樣がおいでなされて、何か窃にお話があると、俄に鯛を買つて來い、酒を買つて來いとおつしやるは、こりやたしかに、短刀の在所が知れて、御歸參がかなふのか。何にしろ、目出度いことがなくてはなるまい。

ト魚をこしらへてゐる、と賑やかなる唄になり、花道より粂之助浪人の裝にて、文を讀みながら出來り、後より仲居およさ、おりう附き出來る。

よさ　もし粂さん、お梅さんが是非今宵、お目にかゝりたいというてぢやゆゑ。

りう　その文を御覽じて、御家の首尾がよいならば、わたしらと連立つて、

兩人　さあ〳〵おいでなさんせいなあ。

粂之　あゝこれはしたり、そなた衆もどうしたものぢや、彼處はもうわしが家、親父樣に聞えてはなら

ぬ、靜にしたがよいわいの。

よさ　そんなら、向うがお前さんの家かいな。

粂之　わしがそつと歸つて家の樣子を見た上、首尾さへよければ連立つて行くほどに、そなた衆はちつとの間待つてゐてたもや。

りう　そりや待つてゐますほどに、一緒においでなさんせいなあ。

粂之　これ、必ず大きな聲をせまいぞや。

兩人　あい〳〵、合點ぢやわいなあ。(ト舞臺へ來り、粂之助内へはひりながら、)

粂之　藤助、今戾つたぞや。

藤助　若旦那、お歸りでござりますか。

粂之　見れば魚をこしらへてゐやるが、客來でもあるのかや。

藤助　最前藏之進樣がおいでなされまして、旦那樣がお酒やお魚を買つて來いと、仰せつけられました。

粂之　そんなら親父樣が酒肴を。はて、合點の行かぬことぢやの。

よさ　(内へはひりて、)もし粂さん、お家の御用が濟んだなら、

りう　さあ〳〵、一緒にござんせいなあ。

粂之　これ〳〵、奥には伯父者人も來てござれば、そなた衆が目にかゝつてはならぬ、首尾を繕ひ是非今宵は行くほどに、さあ〳〵早う歸つてたも。（ト奥へ心遣ひの思入）

よさ　いえ〳〵、一緒にお連れ申さねばなりませぬ。

りう　ちやつとおいでなさんせいなあ。（ト兩人手を取らうとするを、藤助留めて、）

藤助　これはしたり、こなた衆も聞分のない、若旦那があのやうにおつしやるに、さあ〳〵早く歸らつしやれ、歸らつしやれ。

ト この内奥より武太夫更けたる浪人の裝にて刀を持ち出で、

武太　悴戻つたか、最前より待兼ねをつた。

粂之　（びつくりして）はい、唯今歸りました。

ト 藤助立つてゐて仲居達をかくす、粂之助は仲居に早く歸れといふ思入、仲居うろ〳〵として門口へ出ようとする。

武太　あゝこれ〳〵苦しうない、そち達は杉本屋の女子どもぢやな。いつぞはそち達に禮を言はうと思うてゐた、いつもながら悴が行つて、いかい世話になるであらう、浪々の身の上なれば禮さへも心に任せぬ、これは些少ながら二人へ纒頭とやらぢや、受けてくりやれ。

ト懐中より紙包みの金を出す、仲居氣の毒なる思入、藤助取次いで、

藤助　旦那様の折角の下されもの、お貰ひ申さつしやるがよい。

よさ　はい〳〵有難うござります。もし粂さん、

りう　旦那様へお禮を、おつしやつて下さりませ。

藤助　さあ、お禮を言はしつたら、早く歸らつしやれ。

よさ　はい〳〵お暇いたしませう。もし粂さん。

りう　必ず、お待ち申しますぞえ。（ト小聲で言ふ。粂之助早く歸れとの思入、仲居門口へ行く。）

よさ　粂之助さんの親御さんは、むづかしいお人ぢやと、

りう　思ひのほか粋なお人で、いつ〳〵そお氣の毒ぢやなあ。

藤助　（門口を明けて、）こなた衆はまだ歸らぬか。

兩人　あい、今歸るところぢやわいな。（ト花道へはひる。）

武太　藤助見やれ。色町の女子共は、賑やかなものではないか。

藤助　いえもう遠慮のない、氣樂なものでござります。

粂之　いつにない親人の御機嫌、どうも合點がまゐりませぬ。

武太　おゝ合點が行かぬ筈、常に替りし今日の仕儀、こりや今生の別れぢやわい。

粂之　え、今生の別れとおつしやる、その仔細は。

ト この内奥より、三木藏之進少し更けたる打扮にて出來り、

藏之　その仔細、身共が申し聞かすであらう。（ト眞中へ住ふ、粂之助見て、）

粂之　や、あなたは伯父者人、してその仔細とおつしやるは。

藏之　その仔細は別儀にあらず、三ヶ年以前紀州高野山へ奉納なす、佐々木の重寶深緑の短刀紛失させたる其方が越度、詮議の日延も早や三ヶ年、情なきは一家中の取沙汰、あれ見よ武太夫は我子に迷ひ、いつまでべん〳〵と、無駄詮議に月日を送るうつけの武士、何故腹切つて申譯はいたさぬと、後指さして笑ひ譏るが、御家老荒川隼人殿の耳に入り、身共を招き御内意には、この儘にて打過ぎなば、井筒の家名は絶え果てなん、一刻も早く切腹いたして言譯いたさば、上へ願うて養子にて、井筒の名跡相續させせんと、有難き内意、取る物も取りあへず罷り越しは越したれども、現在兄や我甥に切腹勸むる、切なき使ひの身共が心中、粂之助推量致してくりやれ。

ト 思入あつて言ふ。粂之助、藤助これを聞き思入あつて、

粂之　伯父者人には御内意のお使ひ御苦勞千萬、紛失の短刀手に入らぬその時は、切腹は豫ての覺悟な

れども、親人にまで御命捨てさす不孝の罪、お許しなされて下さりませ。

藤助　紛失の短刀御詮議なされ、再び御歸參なされんと三ヶ年の御艱難、其の甲斐もなく御親子もろとも御切腹と極るは、是非もない次第でござりまする。

武太　其方が申す如く、最早歸參の望みもかなはず、詮議の日延も明後日限り、三年この方知れざる短刀、僅二日か三日にて行方の知れる謂れなし、さすれば三日のその内はこの世の名殘り、これまで願酒なしたれども今宵は破り、藏之進と名殘りの盃汲み交さん。こりや忰、その方も假にも夫婦の契約なしたる清兵衛の娘のお梅、今宵は身共が許すほどに、暇乞をしてまゐれ。

粂之　有難きそのお言葉、それに就き彼が親清兵衛は、あの砌より行方知れず、三年この方娘の方へも音信不通、生死のほども知れざる清兵衛。

武太　不便なるお梅が身の上、心殘りのないやうに、（ト懷中より胴卷を取出し、）こりや此の金はまさかの用意に、貯へおきたる二十兩、そちにこれを遣はす間、花々しう遊んで來やれ。（ト粂之助に渡す。）

粂之　重々厚き親人の御志し、有難うはござりますれど、この儀ばかりは。

藏之　こりや粂之助、それでは折角兄者人の志しを、無足に致すと申すもの、遠慮いたさず遣うてまゐれ、遣うてまゐれ。

藤助　お情厚き親旦那樣、お言葉背くは却つて不孝。

粂之　冥加にあまる御賜物、有難う頂戴仕りまする。（ト金をいたゞき懐中する。）

武太　此上は親子伯父甥別れの盃、藤助、用意はよいか。

藤助　先刻仰せ附けられました故、用意いたしおきましてござりまする。

トこの内下の方より、禿お橘出て門口を明けて内へはひり、

お橘　もうし粂さん、お梅さんが待つてぢや故、ちやつと早うござんせいな。

武太　それ〳〵、幸ひ迎ひが來たではないか。

粂之　ぢやと申しまして、このまゝに。

藏之　身共へ遠慮は無用にいたしやれ〳〵。

藤助　おすゝめなれば若旦那。

粂之　それぢやというて、

武太　はて、身共が許す。行けと申すに。

粂之　左樣なれば御免を蒙むり、（ト立たうとする。）

武太　これ見苦しい、着替へて行きやれ。（ト小袖の包みを出す。）

粂之　何から何まで、
お橘　粂さん。早う、（ト手を取る。）
粂之　はて、忙しない、（ト門口へ出る。）
藏之　斟酌せずと、
藤助　御機嫌よろしう。

ト皆々よろしく、派手なる唄にて道具廻る。

（酒屋奥の場）――本舞臺三間常足の二重、上手押入、眞中暖簾口、上の方一間中窓の前面、總て以前の酒屋奥の體。二重に丸行燈を灯し、久七以前の裝、女房お瀧長火鉢へ鐵瓶をかけて德利を入れ、八寸の膳へ肴の鉢を載せ、兩人酒を飲んでゐる。時の鐘端唄の合方にて道具留る。

お瀧　言傳賴むつばめの便り、（ト一口唄ひながら燗德利を出して、）さあ久七さん、燗がよくなつたよ。

ト猪口を久七へ差す。

久七　おらあもう酒は止さう。
お瀧　なぜ、もう酒は厭かえ。

久七　何だか氣に屈託があると、好な酒もうまくねえのよ。

お瀧　さう言やあお前、この二三日は顔色が惡くつて、酒も飯もまづいといふがどうしたのだらう、ふとしたことからまんが直つて、此處へ店を出してからも、日に増し生業は忙しくなる、十や二十の金にも困らねえやうになつて、何をそんなにふさぐのだえ。

久七　そのまんが直つた元の金といふのは、いつぞや手前が盗んでくれた、清兵衞が持つてゐた五十兩からしだした身代、今斯うなつて考へて見ると、何だかあの金のことが氣になつて、夜もろくろく寐ることが出來ねえ。

お瀧　何だな、お前も氣の弱いことを言ふ人だの、然しそれほどあの金が氣になるなれば、かうしなせえ。元あの金は太々の金だから、五十兩持つて太々を打つて來なせえ。さうすりやあ太神宮樣へ金を返してしまつたと思つたら、氣になることはあるめえぢやあねえか。

久七　なるほどさうだ、どうでもおれより手前の方が、よつぽど智慧がある、そんなら明日にも五十兩持つて、太々を打つて來よう。さうしよう〳〵。

お瀧　さうした日にやあ、何も氣になることはありさうもねえものだぜ。

久七　それで五十兩の金のことはいゝが、まだ氣になるはあの清兵衞、三年越し行方の知れねえ奴が、

ふつと五六日後店開きの日に乞食になつて來せをつて、こゝの家で金を騙られたと言つた故、言掛をする乞食だと男どもがちつとばかり淸兵衞を打つたところへ、番太の幸八が居合せて引取つて連れて行つて、此頃聞きやあ星合堤へ小屋をこしらへて、淸兵衞を入れておいて、三度の飯まで運んで喰はせるといふ噂、どうもこいつも氣になつて。

お瀧　なるほど深く考へて見るときざだの、幸八が世話をして淸兵衞の身體が達者になつた曉は、始終の始末を話したらば、事知り振りな番太の幸八、おいら夫婦を怪しいと考を附けるだらう。殊に今度の山田奉行大川十右衞門といふは、すてきな人だといふ噂だから、こいつあ久七さん、思案ものだよ。

久七　何にしろ、もうちつと早く知れりやあ、此處へ店を出さねえ内、鎌倉へでもこつそり行つてしまふもの、金をかけて普請をして今更逃げることもできず、お瀧どうか仕樣はあるめえか。

お瀧　（此の内手酌で酒を飲みゐて、）仕樣はあるのさ。

久七　どうしたらよからう。

お瀧　殺してしまひなせえ。

久七　そりや誰を。

お瀧　誰を殺すものか、淸兵衛をさ。
久七　え。（ト大きな聲で言ふ。）
お瀧　これさ、靜にしなよ。（トあたりへ思入、久七はびつくりして顫へ出す。）えゝ、お前も意氣地のねえ、そんなにびつくりすることがあるものかな。
久七　それでも、人を殺すといふから。
お瀧　假令殺しても殺さなくつても、此の事が暴れる日にやあ、おいら二人が首はねえよ。
久七　え、此の首がか。（ト首を押へる。）
お瀧　それだから彼奴を殺してせえしまやあ、外に誰も知つたものはねえから、枕を高く寐られるぢやあねえか。
久七　それぢやあ、おれが殺すのか。
お瀧　いや、お前ばかりぢやあ心元ねえ、おいらも手傳ふよ。
久七　あゝ、それでちつと落附いた。
お瀧　淸兵衛をばつさりやつて、無駄なやうだが太々を打つて來たらば、何にも氣になることはあるめえの。

久七　さうして清兵衛を、いつ殺すのだ。
お瀧　思ひ立つちやあ延ばされねえ、雨氣附いたを幸ひに、これから今夜やツつけよう。
久七　そんならおれも支度をしよう。
お瀧　待ちねえよ、脇差を一本算段しにやあならねえ。
久七　おゝ丁度いゝことがある、この間郷兵衛から質に取つた短刀がある。
　　ト押入より以前の短刀を出して見せる。
お瀧　おや、がうてきに立派な脇差だの。
久七　こりやあ佐々木の重寶深緣といつて、百兩になる代物だ。
お瀧　どれ見せな。（ト短刀を取り、久七行燈を側へ寄せる、お瀧拔いて見る。）
久七　こりやすてきに切れさうだ。
お瀧　そんならこれで。
久七　寐込をぐつさり。
お瀧　あゝ、これ。（トこの時ごんと四つの鐘鳴る。お瀧短刀を袖へ當てるを木の頭。）
　　四つさうだよ。

ト短刀を拭ふ、久七あたりを窺ふ。この見得時の鐘、早めたる合方にて、よろしく、

ひやうし　幕

# 六幕目

## 星合堤非人小屋の場

【役名――正直清兵衛、番太幸八、酒屋久七、非人胴六、幸次、治藏、白子屋勘兵衛、雲津屋德助。久七女房お瀧、幸八女房おしげ。】

（非人小屋の場）――本舞臺三間の間中足の二重の土手、眞中に蒲鉾小屋、左右は藪疊、上の方松の立木、この側に菅笠を冠りし石地藏、下の方土手の際に榎の大樹、この枝より上手へ掛稻、小屋の下の火鉢に古びたる土瓶をかけ、奉納の名印ある墓手桶、舞臺前、柵のある流れ、總て雲津川星合堤の體。禪の勤めにて幕明く。と下の方より町人一、二の兩人羽織着流しにて、町人の一は竹の皮包みを懷へ入れ、町人の二は酒の入りし土瓶を羽織の下へ提げて出來り、

町一　何と彌五兵衛さん、今日の葬式は立派なことでござりましたね。

町二　左樣さ、此方づれと違つて、家持の葬式だけあつて、行屆いたことさ。

町一　第一强飯の煮染なぞが、芝居茶屋の辨當のやうだ。

町二　そこで懐の二包みは、おかみさんのお土産かね。
町一　何ぼ伊勢乞食だといつて、葬式の强飯を土産には持つて歸られぬ。
町二　さうして、そりやあ何處へやんなさるのだ。
町一　この頃番太の幸八が世話アする、この堤の蒲鉾小屋にゐる、病人の乞食にやるのさ。
町二　はて、似たこともあるものだ、わしもあれにやらうと思つて、酒を一土瓶提げて來た。
　　ト羽織の間から出して見せる。
町一　元は窪田在の百姓で、不仕合せが續いて宿無になつたさうだが、何か前の意趣があつて、此間店開きをした雲津の酒屋で、喧嘩をして酷く打たれたを、幸八が引取つて世話をしてやるさうだが、あの男は奇特なことさね。
町二　聞けばその酒屋の方が、筋が惡いといふことだ、何にしろ可愛さうなことだ。
　　ト兩人小屋の側へ寄りて、
町一　おい淸兵衞、寐てゐるか。煮染のいゝ强飯があつたから、二包み持つて來たぞ。
町二　酒が好きだといふことだから、一土瓶提げて來た、寐酒に一ぱいやるがいゝ。
　　ト兩人筵の側より小屋の中へ入れ、

あこれ〳〵、起きるにや及ばねえ、寐てゐるがい〻〳〵。

町一　また何ぞあつたら、持つて來てやらう。（ト兩人空を見て、）

町二　どうか今夜は降りさうだ。

町一　降らないうちに行きませう。

ト兩人上手へはひる。これより床の淨瑠璃になる。

〽行く空の雨氣催す雲津川、影さへ薄き星合の堤傳ひに野臥りが、世間構はぬ高調子、

ト花道より非人の裝の胴六、幸次、治藏面桶頭陀袋思ひ〳〵の物を持ち出來り、

胴六　こう幸次や、今日のやうな間の惡いことはねえな、今朝ッからの貰ひ溜は、野天丁半で取られてしまひ、

幸次　喰ひてえにも飮みてえにも、ちやんころは一文もなし、伊勢まゐりに來た犬の錢を取らうとすりやあ打ちのめされ、まぶな話やあ一つもねえ。

治藏　何にしろ腹が空つてこてえられねえ、飯をいつぺい喰ひてえものだ。

胴六　こういゝことがあらあ、向うの小屋にゐる新米は、此間雲津の酒屋で打たれた、淸兵衞といふ宿無だが、彼奴の所に飯があるだらう。

幸次　違えねえ、あの新米は、此方らア酷い目に逢はした番太の幸八が世話をして、三度々々飯を造るといふことだ。

治藏　犬の糞で鈔を取るやうだが、此間幸八に打ちのめされた意趣返し、思入食つてやらうぢやあねえか。

胴六　その上足腰が利かねえものだから、貰ひもしつかりあるさうだ。

幸次　それぢやあ飯を食つたその上で、貰ひ溜を引さらつて、いつぺいやらうぢやねえか。

治藏　そいつア妙だ、やツつけろ〳〵。

〽うなづき合うて非人ども、小屋の内をさし覗き、

胴六　おい、新米寐てるるか。

三人　起きろ〳〵。

〽呼ばはる聲に小屋の内、（ト蒲鉾小屋の内で清兵衛の聲して、）

清兵　はい、どなた樣でござりまする。

〽言ひつゝ、菰垂押上げて、病苦に弱る清兵衛が、痛む膝節やう〳〵に立ち出れば聲々に、

ト小屋より清兵衛非人の装にて出來る。

幸次　誰でもねえ、

三人　おいら達だ。

清兵　これは誰人様かと存じましたら、お仲間の衆でござりますか、ようおいでなされました。

胴六　どうだ、打たれたところはちつとはいゝか。

清兵　はい、大きによろしうござりまする。

胴六　そりやお仕合せなことだ。

幸次　此のごろは貰ひはどうだな。

清兵　はい、有難いことに、今日も二百四五十貰ひましてござります。

幸次　そいつア豪氣だ、おいら達ア三人連で、まだ百の錢も貰はねえ。

治藏　外聞の惡いこつたが、晝飯にもまだ有附かねえ、何ぞ新米喰ふものはねえか。

清兵　はい、今貰ひました强飯がござりまする。

〽皮包みを差出せば、（ト清兵衛皮包みを出す。）

幸次　强飯はどつとしねえが、然し喰はねえにやあましだ。（ト明けて見て、）やあ、こいつあうまさうな煮染だ。

治藏　幕の内のやうだな。（ト言ひながら治藏一摑み喰べる。）

胴六　えゝ、いゝまんがちな靜にしねえか。（ト治藏むやみに食ひ胸に支へし思入にて。）
治藏　あゝ胸に支へた、これ何ぞ呑むものをくれ〳〵。
幸次　えゝ、この野郎はつぶ虱を見たやうな、うつとうしい奴だ。（ト言ひながら酒のはいりし土瓶を取り、茶碗へ注いで、）さあ、かッくらへ。（ト出すを、治藏飲んでびつくりし、）
治藏　やあ、こいつアいゝ茶だ、もういつぺいくれ。
幸次　待て〳〵、こいつァ茶のやうぢやねえぜ。
清兵　はい、それも今貰ひました酒でございます。
胴六　なに、酒だ。
幸次　違えねえ、酒の印が附いてゐる。
胴六　酒と聞いちやあこてえられねえ、いつぺい飲ましてくれ〳〵。
幸次　待て〳〵、おれが飲んでからだ。
　　ト是より三人捨ゼリフにて強飯を喰ひ、酒を飲んでしまひ、
三人　あゝ、いゝ心持になつた。
清兵　それはよろしうございました。

幸次　もう五合ばかり後を引きてえものだな。

胴六　さうよ、飲まにやあ飲まねえで我慢もできるが、ちつとでもやつちやあ堪えられねえ。

治藏　幸次や、どうか掛合を附けやな。

幸次　いゝといふことよ、おれが呑込んでるらあ。こう新米、今日の貰ひ溜を貸して下ッしな。

清兵　え。

幸次　何もびつくりすることはねえ、もう五合ばかりやりてえのだが、ちやんころなしだから貸して下ッし。

清兵　さあ、みんなお貸し申したうはござりますが、ちつと入用がござりますから、どうか百ばかりで了簡して下さりませ。

幸次　べらぼうめ、百ばかり何になるものか、客ッたれなことを言はねえで、皆々貸せといつたら貸せ。

清兵　それだといつて、折角わしが貰うたものを。

幸次　貰つたものだから貸せといふのだ、貸せにやあ借りでもいゝわえ。

〽傍若無人に横顔をはつたと打たれ清兵衛は、口惜しけれど手出しもならず、

ト幸次清兵衛の横顔を喰はす、清兵衛ひよろ〳〵として横顔を抱へ、

清兵　あゝこれ、貸すまいとは言ひませぬのに。

幸次　何故そんなら、早く貸さうとぬかしやあがらねえ。

〽また立ちかゝるを胴六押留め、

胴六　えゝ、この野郎は靜にしねえか、病みほうけの者をくらはしやあがつて、手酷いことをするなえ。（ト清兵衛に向ひ、）はゝゝゝ、こう腹も立たうが、堪忍してくんねえ。この野郎のやうな物言ひの惡い、氣の早い奴はねえ、なに、お前だつて仲間のことだからおとなしく言やあ、貸さぬことはねえの。

清兵　はい、そりやお前の言はつしやる通り、かうしてこゝにをりますれば、御厄介になり勝故、なに二百や三百の錢、お貸し申さぬことはござりませぬ。

胴六　さういふ譯の分かつてゐるお前を、酷いことをしやがつて、目先の見えねえ奴だ。それぢやお氣の毒だが、おれに貸して下せえな。

清兵　はい、左樣なら、お前にお貸し申しませう。

〽首にかけたる財布より取出す錢の後打見やり、

ト清兵衛財布より錢を二百五十ほど取出し、胴六に渡す、胴六、後を見て思入。

胴六　それぢやあおれに貸してくれるか、有難い〳〵。こうまだ後にあるぢやあねえか。

清兵　(財布をかくして、)いえ〳〵、もうござりませぬ〳〵。

胴六　なに、ねえことがあるものか。

清兵　いえ、ござりませぬといふに。

胴六　なに、喰ひがくしをしやがるなえ。

〽立蹴にはつたと蹴倒せば、痛さこらへて起上り、(ト胴六財布を引つたくり、蹴倒す。)

清兵　あゝ痛み所のあるものを、酷いことをさつしやるな。

胴六　しなくつてどうするものだ、喰隠しをしやあがるから、蹴倒したのだ。

幸次　助鐵砲に張りくじいてやらうか。

治藏　これ〳〵、胴六も幸次もいゝ年をしやあがつて、いゝ加減にしねえのか。こう爺さん堪忍してくんねえよ、お前のやうな病ひ揚句の者を、打つたり蹴たりして、彼奴等がほんの弱い者いぢめといふのだ。

〽猫撫で聲で清兵衛が、帯解きほどくに心附き、(ト治藏清兵衛の帯を解きかゝるに心附き、)

清兵　あゝこれ、こなさん、帯を解いてどうさつしやるのだ。

治藏　どうするものだ、此のぼうたも借りるのだ。

〽情あられの藍小紋、脱がせにかゝるその手に縋り、

ト治藏清兵衛の着物を脱がせようとするを、清兵衛縋り留めて、

清兵　あもし、これぱかりは許して下され、達者な身なら厭はねど病ひ上りの身體故、風邪でも引いてぶりかへせば、それがもう此の世の別れ、かういふ苦勞するよりも死んだ方がましなれど、親一人子一人の娘にひと目逢ふまでは、生きてゐたいわたしが願ひ、それぢやによつて此の布子はどうぞ堪忍して下さりませ。その替りにはお前樣に、虎の子のやうにしておきました、金が二朱ござります　それを上げます替りには、布子は許して下さりませ。

〽涙ながらに打ち詫ぶれば、

治藏　さう聞いて見りや、可哀さうだ、こいつらと違つておらあ涙ツぽろいから、その二朱を早く出せ、布子は堪忍してやらう。

清兵　それは有難うござります。

〽襦袢の襟の間より、小間金一つ取りいだし、

さあ、受取らつしやりませ。（ト二朱を出す。）

治藏　燒錢ぢやあねえかな。

ト治藏二朱金を取り、紙に包み三尺帶へ結ひ附け、幸次へ顎で引剝げといふ思入する。

幸次　やい〳〵治藏、手前はそれでいゝか。むゝ、手前がよけりやあこのぼうたは、おれが借りて着にやあならねえ。

清兵　そんなら二朱を取らつしても、やつぱり布子を剝がつしやるのか。

幸次　知れたことだわえ、二朱取つたはあの野郎、おれの知つたこつちやあねえわえ。

清兵　金を取つた其の上に、まだも布子を剝がうとは、慈悲も情も知らざるか、そりやあんまりぢや、あんまりぢや、あんまりぢや。

ト むしやぶり附くを、はつたと蹴倒し、

幸次　やい〳〵何があんまりだ、慈悲や情を辨へて宿無が出來るものか。

胴六　これ、こちとらをたゞのお孤だと思やあがるか、お餘りの骨をしやぶつて、濁酒をかつくらふ、いゝいゝおんころりんとは種が違ふぞ。

幸次　初鰹が來りやあ素人衆と肩をならべて刺身も食ひ、一本生の酒でなけりやあ、飲まねえといふ贅澤は、一文二文ぢやあ出來ねえわえ。

治藏　表生業は孤冠り、内職は巾着切だが、どんな大きな仕事をしても、宵越しの錢は持たねえ、金箱附の宿無だ。

胴六　三日すりや忘れられねえといふは、こちとらのことだ。

幸次　さあ飲代にするのだ、きり／＼脱いでしまへ。

清兵　それぢやといつて、こればかりは。

治藏　えゝ、往生際の惡い奴だなあ。

〽病に弱る清兵衛を蹴たり踏んだり野伏りが、無理に引剝ぐ布子の裾、おくみなりに留むるを、えゝ面倒なと胴六が蹴返す足に脾腹を打たれ、ゝゝうんとばかりに倒るゝを、見るより三人びつくりなし、

トこの内三人清兵衛をさいなみ、トヾ布子を剝ぎ取り治藏清兵衛を蹴る、清兵衛ばつたり倒れゝを三人見て、

幸次
治藏　やあ、こいつアごねたぜ。

胴六　なに、くたばつた、はて殺す氣はなかつたに。

幸次　水でも飲まして呼んで見ようか。

胴六　なに、うつちやつておけ、遲かれ早かれ死ぬ身體だ。

治藏　一日も早いが得か。

胴六　違えねえ。（ト向うを見て、）やあ、向うへ來るはたしかに幸八。

幸次　見附けられちやあ面倒だ。

治藏　山越しに逃げようぜ。

胴六　それがいゝ／＼。

〽うなづき合ひて野伏りは、慾のくらやみ星合の、影さへ見えぬ土手傳ひ、後をも見ずに逃げ失せけり。

ト胴六先に幸次清兵衛の布子を抱へ、治藏附添ひ上手へはひる。禪の勤めを打上げ時鳥笛になる。

〽折しもこゝへ幸八が妻のおしげともろ共に、情深田を横ぎりて、運ぶ食事の小風呂敷、堤の口にさしかゝり、

トこの内花道より番太幸八弓張提灯と傘をかつぎ、女房のおしげ世話女房の打扮にて、着物の包みと小重箱の包を提げて出來り、花道にて、

幸八　今の間に星が見えなくなつたが、こいつあ今夜は降らにやあいゝが。

しげ　時鳥が低く啼くから、おほかた後には降りませうわいな。
幸八　どうも歸りまで降らしたくねえものだ。今日は家が取込んだので、清兵衞どんに飯を持つて來るのが、いつもよりおそくなつた。
しげ　嘸待ち兼ねてゞござんせう。
幸八　ちつとも早く、持つて行つてやらう。
〽打連れ來かゝる夜の道、足元暗く清兵衞にはたと躓きびつくりなし、飛び退くひやうしに打消す提灯。
ト兩人平舞臺へ來り、幸八清兵衞に躓き、飛びのいて提灯を消し、
これはまつぴら御免なされませ、提灯を持つてゐて突當つては濟みませぬが、つい足下が暗うござりまして。
しげ　もし、お怪我でもなされはしませぬかいな。
〽言へども何の應答なければ、(ト幸八合點の行かぬ思入にて、)
幸八　おしげ、生醉ぢやないか知らぬ。
〽探る手先に清兵衞が、氣絶なしたる樣子に驚き、(ト清兵衞を引起し樣子を窺ひ、)

や、こりや目をまはしてゐる様子。

しげ　もし、往來の人でござんすかえ。

幸八　いや〳〵、どうか、清兵衛のやうだ。

しげ　えゝ。(トおどろく。)

幸八　これ、火を打つてくれ〳〵。(ト煙草入を取つて渡す。)

しげ　もし、附木がござんすかえ。

幸八　おゝ段口の中に、懐中附木が入れてある。

しげ　さうでござんすかえ。

〽火打取出しこつちこち灯りを點けるその内も、撫でつさすりつ介抱なし、

トおしげよろしく火を打つ、幸八清兵衛を介抱しながら、

幸八　これ、早く附けぬか。

しげ　あい〳〵。(ト蠟燭へ灯をうつし。)

〽さし出す灯りに顔打ち見やり、

おゝ、清兵衛どのでござんすぞえ。

幸八　見れば襦袢一つで着物もなく、こりやたいゝ事ではないわえ、おしげ水を持つて來い。

しげ　あい〳〵。

〽柄杓のまゝに手桶の水、汲んで出せば顏に吹きかけ、

トおしげ手桶の水を柄杓のまゝ出す、幸八飲んで清兵衛の顏へ吹きかけ、

幸八　清兵衛どの、やアい。

しげ　清兵衛どのいなう。

幸八　氣をたしかに持たッせえ。

〽言ふ聲耳に通じてや、息吹き返し縋りつき、（ト清兵衛心附きて、）

清兵　あゝこれ、この着物ばかりは、堪忍して下され〳〵。

幸八　これ〳〵清兵衛どん、おれだ、幸八だ〳〵。

しげ　氣をたしかに持たしやんせいな。

〽いたはる夫婦が顏打ち見やり、嬉しさあまる眼に淚、（ト清兵衛嬉しき思入にて、）

清兵　おゝ幸八樣か、お內儀樣か、あゝ遲うござりました〳〵、もう一足早う來て下さりましたら、こんな目には逢ひますまいもの。

幸八　して、こりや誰がこのやうな、むごいことをしをつたのだ。

清兵　さあ、胴六に幸次治藏とやらいふ人が來て、飯を喰はせいと言ひます故、幸ひ貰うた葬式の強飯と酒がござりましたを、そこへ出してやりましたら、飲んだり食つたりしてしまひ、もう五合ばかり飲みたいから、貰ひ溜めを貸せといふによつて、百出してやりましたら、百ばかりの錢が入るものかいと、此の頭の割れるほど握り拳で喰はしました故、仕方なく皆貸してやりました、まだその上に着物をば脫いで貸せといひますから、病人のことぢやによつて、こればかりは堪忍して下されと、詫言を言ひまして、此間村の衆に貰うた二朱をやりましたら、其の金も取つてしまひ、たうとう着物も無理無體、脫ぐまいといふを引剝ぎをつて、蹴たり踏んだりして行きましたが、足腰が自由なら手籠にはなりませぬものを、悔しうて／＼なりませぬわえ。

〽悔し淚にせき入るを、見るに不便とおしげが介抱、幸八は齒がみをなし、

ト清兵衞咳き入るをおしげ脊中を摩りやる、幸八悔しき思入にて、

幸八　えゝ病みほうけてゐるものを、達者な身體で蹴たり踏んだり、そのやうなことをしをるとは、憎い奴等だ、どうしてくれう。

〽尻引ツからげ、立上るを、

しげ　あゝこれこちの人、待たしやんせ、お前が追ひかけて行かしやんしたとて、そこらにまご〳〵してゐませうかいな。

幸八　それだといつてあんまりな、情を知らねえ奴だから、

しげ　はて待たしやんせといつたら、待たしやんせいなあ。（ト幸八を留めて、）ほんに蟲が知らしたか、布子を洗濯して上げうと、着替に持つて來た古袷、これを早う着なさんせいな。

〽包みとく〳〵取出す、襤褸袷も心の錦、清兵衛取つて押しいたゞき、

清兵　これは〳〵有難うはござりますが、もう段々暑うなります故、これでよろしうござりまする。

幸八　いや、馬鹿なことを言ひなせえ、達者な身體ぢやあるまいし、どうして薄着でゐられるものか。

しげ　これはお前に着せようと、はぎつぎながら洗濯して、きれいにして持つて來たのぢや。さあ風邪を引いてはならぬ、早う着なさんせいな。（トおしげ清兵衛の後より着せる。）

清兵　左様なら、お貰ひ申しまする、然しお氣の毒でござりますな。

幸八　何の遠慮に及ぶものか、人の世話は人がしにやあならぬものだ。

しげ　これも何ぞの緣でがなござんせうわいなあ。（トこの内清兵衛袷を着て、）

清兵　いやも、とんだことからお二人樣のいかいお世話になります。この御恩が送られますればようご

ざりますが、いつそ死んだら御厄介になりますまいに。

幸八　あこれ、その死ぬといふことを言ひなさんな。假令菰を着てゐても、生きてゐりやこそ樂しみもあり、死んだ日にはそれまでだ、そんな氣の弱いことを言はねえで、早くひだつて古市の娘に逢ひに行くがいゝ。

清兵　はい、別れてから丁度三年、娘もどうしてをりますことやら、一目逢ふまで死にたうござりませぬ。

幸八　又死ぬと言ひなさるか、おらあ御幣擔ぎだから、死ぬといふことが大嫌ひだ、そんなつまらねえことを言はねえで、命は食にありだ、早く飯でも食ひなせえ。

清兵　有難うござりまする。

しげ　今日はわたしの志しの佛があつて、お茶の御膳を炊いた故、それで大きにおそうなつた。精進物で旨うはないが、たんと上つて下さんせ。（下重箱を出し清兵衛の前へ出す。）

清兵　それは何より有難うござります、今日はわしも志しの佛がござります、世が世なら茶飯でも炊いて供へにやなりませぬところ、これで炊いた積りでござります、はゝゝゝ。

幸八　いや又今の奴等が來まいものでもない、わしがゐる内ゆつくりと、氣を落附けて喰ひなせえ。

清兵　はい〳〵、有難うござります。

幸八　おしげ、茶を焚附けてくりやれ。

しげ　あい〳〵。

清兵　あもし、わたくしが焚きつけまする。

しげ　そのやうなことはうつちやつておいて、早うお飯を上りなさんせいな。

清兵　左樣ならお願ひ申して、御馳走になりませうか。

〳〵面桶取出し重箱の、蓋押し明くる其の手を捉へ、

幸八　清兵衛どの、待たつしやい。

〳〵切火を打つて淸むれは、淸兵衛は不審顏。

ト幸八重箱に火を打ちかける、この内おしげは提灯の灯をうつし、火を焚附け土瓶をかける、清兵衛合點の行かぬ思入にて、

清兵　もし幸八樣、何でこの重箱へ、切火をば打たつしやりますぞ。

幸八　いつも家で打つて來るが、今日はつい忘れた故、今打つたのぢや。

清兵　そりや何故でござりますな。（ト蛙の聲になり、幸八思入あつて、

幸八　さあ、何故と聞かれては面目もないわしが身體、こなたは乞食をしてゐても、腹からの乞食でなければ、今にも足を洗ふ時は元の天下のお百姓、それに引替へ、わしはまた假令萬兩金を積んでも、足を洗つて素人に生涯なられぬ非人の身の上、そのわしが家でこしらへた物故、清めてそなたに進ぜるのだ。

清兵　いや、そりや入らぬことでござります、これが素人といふではなし、わしも今は乞食の境涯、殊には先頃打たれた時、のたれ死をするところを助けられたお前樣、穢れどころかわしが爲めには太神宮樣も同じこと、向後そんな義理立は、決して止しにして下さりませ。

幸八　そりやさうでもあらうけれど、今迄かうして來た故に、どうもわしが心が濟まぬ。

清兵　いえ〳〵それでは私がまた、却て術なうござります。

しげ　あもし、その爭ひはよい加減にして、早うお飯を上んなさんせいな。

幸八　おゝさうだ、いつもよりおそくなつたから、嘸腹が空つたらう、どれ給仕をしてやらうか

清兵　えゝ、めつさうなことをおつしやりませ。（ト蓋を退けて見て、）こりや御丁寧なお料理でござりますな、竹の子はまだ初物で、これではまた七十五日生きられませう。

幸八　又そんなことを言はつしやるか。

清兵　どれ、御馳走になりませうか。
〽取る箸さへも値遇の緣、見る目哀れを缺土瓶、厚き夫婦が志し、
ト清兵衞飯を食ふ、おしげ土瓶を取つて、
しげ　さあ、お茶が沸いた、かけなさんせ。
幸八　おゝ飯が冷めたから、茶漬の方がよからう。（ト清兵衞に茶をかけてやる、淸兵衞一口飲んでむせる思入。）あ、惜しまねえから靜に喰はつしやい。
清兵　どうも茶をかけると、むせてなりませぬ。（ト喰ひしまひ、茶碗をいたゞく。）
しげ　もう喰べなさんせぬか。
清兵　まだ食氣が附きませぬ。
幸八　何でも我慢して、喰勝たにやあいけねえぜ。
清兵　有難うござります。あゝ御膳を喰べたら暖かになつた、いや、こりや御膳の故ぢやない、着物を着たせゐぢや、お內儀樣有難うござります。
しげ　何の穢ないはいなァこ、そのやうに禮を言はれては、此方が氣の毒ぢやわいな。
清兵　いえ〳〵、結構でござります。

〽言ひつゝ袖の田舍染、縁の絲の織合せ、不思議さうに打守り、
はて、珍らしい切が、こゝにはいでござりますな。

しげ　どれ、どの切でござんすえ。

清兵　この田舍染の花盡し、こりや江州の日吉祭りに、志賀の里で出來た揃衣、どうしてこれがござりましたな。

しげ　そりやわたしが、小さい時に着た着物でござんすが、段々と切れた故よい所だけ切拔いて、繼にしたのでござんすわいな。

清兵　へゝえ、そんならお前樣は、近江の生れでござりますか。

しげ　あい、わたしや志賀の里でござんすわいな。

清兵　はて、これはおなつかしい、わしも志賀の里の生れでござります。

幸八　はあ、そんなら清兵衞どのも、志賀の里の生れか。

清兵　はい、親達は佐々木樣の御領分の百姓でござります。

幸八　はて、こなたが女房と一つ國とは、今まで知らなんだ。

しげ　わたしもその佐々木樣の御領分の、元は娘でござんしたわいな。

清兵　憚りながらお前樣の親御樣の名は、何と言はつしやりました。
しげ　わたしが父さんの名はお前と同じ清兵衞といひましたわいな。
清兵　え、
　　〽心覺えに扨はと思ひ、
　それではもしや五歳の年、日吉祭のその時に、迷兒にはならつしやりませぬか。
しげ　どうしてそれを。
清兵　知らいでならうか。この清兵衞は、清之助というた兄ぢやわいの。
しげ　え……。
幸八　そんならこなたは、おしげの兄か。
清兵　證據は互ひの臍の緒書、これ讀んで下さりませ。（ト守袋より臍の緒書を出し、幸八に見せる。）
幸八　「近江の國志賀の百姓、清兵衞忰清之助」
しげ　わたしも同じ臍の緒書、（ト同じく守袋より臍の緒書を出し、）「近江の國志賀の百姓、清兵衞娘おしげ」
清兵　扨は別れて二十年、
幸八　行方の知れぬと話に聞いた、

しげ　兄さんでござんしたか。
清兵　名乘るも面目ない姿。
しげ　よう無事でゐて下さんしたなあ。
〽なつかしさよとばかりにて、縋り附いたる嬉し泣き、清兵衛涙押し拭ひ、
清兵　さうしてそちはどうしてまあ、幸八どのゝ女房になりしぞ。
しげ　話せば長いことながら、今言はしやんした五歳の年、勾引されて程遠き九州筋へやられるを、泣いてばかりゐた故に、殺してしまふといふたのを幸八どのゝ親父樣が、金を出して助けて下され、それは〳〵可愛がつて下さんした故家も忘れ、つい二年經ち三年經ち、十七の年幸八どのと、わたしや夫婦になりましたわいな。
清兵　おゝさうであつたか、よく無事でゐてくれた、さうして今日の志す佛といふは何人ぢやな。
しげ　七年後に亡ならしやんした、父さんの祥月命日。
清兵　どうしてそれを知つてゐるぞ。
しげ　いつぞや良人と三井寺へおまゐりした歸りがけ、お寺で樣子をとつくりと聞いたも不思議、今日こゝで、

清兵　その七年の祥月に廻り逢うたは、親の導き、
幸八　それも思はぬ切繼の、袖の模樣が緣の端、
しげ　年月經つて切れ〴〵に、
清兵　別れ〳〵となつたるも、
幸八　つゞりし絲の切れずして、
しげ　名乘る甲斐なき兄弟の、
清兵　兄は行丈揃はぬ非人、
幸八　身幅も狹きわれ〳〵は、
しげ　そでない業の小屋者に、
清兵　心に錦は着てゐれど、
幸八　襤褸をまとふ身の悲しさ。
しげ　人交りのならぬといふは、
清兵　思へば因果な、
三人　身の上ぢやなあ。

〽つながる縁の絲筋に結ぶ甲斐なき身をかこち、夫婦兄弟手を取交し、暫時涙に暮れけるが、
何思ひけん幸八は膝立てなほしおしげに向ひ、

ト三人よろしく手を取交し愁ひの思入、幸八思案の思入あつて、

幸八　これおしげ、藪から棒にこんなことを、言つたら定めてびつくりせうが、これまでの縁とあきらめて、おれと縁を切つてくりやれ。

〽言ふに二人はびつくりなし、

しげ　え丶、そりやまあ何故。

清兵　どういふ譯で。

幸八　さあ、譯といふは外でもない。何を隱さうわしが親父が、此の世へ生れた思ひ出に、素人を女房にさせたいとて、五歳の年から行く〳〵はおれに娶す了簡で、金で買ひしおぬしが身の上、月日も早く年頃に夫婦となつて暮せしが、今となつては互ひの惡緣、清兵衞どのは非人でも足さへ洗へば元の百姓、又おぬしとても同じこと、胞衣から小屋の生れでなけりやあ、おれと夫婦の縁さへ切れば、清く素人になられる身體、今にもあれ清兵衞どのが足を洗つたその時には、附合ふことのできぬ身の上、たつた一人の妹をおれ故生涯捨てさすかと氣が附いて見りや添はれぬ義理、

知らぬ前は兎も角も、名乘つて見れば二人の兄弟、澤山もねえことなれば互ひに力になり合うて、
一生暮すが兄への孝行、この義理故にこれまでの縁と思うて別れてくりやれ。

〽思ひがけなき幸八が、言葉にはつとおしげがびつくり、

しげ　これこちの人、そりや眞實で言はしやんすか、昨日や今日の仲ではない、夫婦になつてもう十年、
ついおいそれとこれがまあ、どう別れられるものぞいな。

幸八　はて、死んだと思つて諦みやれ。

しげ　そりや胴慾でござんすわいな、はあゝ。

〽はつとばかりに泣きふせば、清兵衞膝をすり寄せて、

清兵　いやなに幸八どの、そりや何を言はつしやるのだ。足らはぬ妹に愛想が盡き、縁を切るなら知ら
ぬこと、わしへの義理にすることなら、そりやなりませぬ／＼。何故というて見さつしやれ、勾
引されて殺される危い命を助けられた、大事の／＼命の親、非人であらうが乞食であらうが、な
んの厭ひがありませう、譬へて言はゞ妹は其の時殺され、こなたの家へ生れ替つて出たも同然、
さすれば誰に義理もない、それを義理だてさつしやるなら、わしも妹と縁を切りあかの他人にな
りますが、他人になつてもこなさんは、わしへ義理を立てさつしやるか。

〽正直一途に清兵衞が理の當然も幸八は、立てぬく義理に聞き入れず、

幸八　今こなたの言はるゝ言葉、どうやら理窟のやうなれど、それではどうも今日の、天道樣へわしが濟まぬ。

清兵　いや〳〵飽きも飽かれもせぬ仲を、わし故緣を切らしては、こなたが天道樣へ濟まぬなら、おりや又お伊勢樣へ濟まぬわいの。

幸八　それだといつて、どうもそれでは、

清兵　濟まずば妹の緣を切り、あかの他人になりませうか。

幸八　さあ、それは、

清兵　女房に持つて下さるか。

幸八　さあ、それは、

清兵　緣を切りませうか。

幸八　さあ、

清兵　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

清兵　どうぞ妹と末長く、夫婦になつて下さりませ。
　〽田舍かたぎに清兵衞が、妹を思ふ眞實を、聞くに幸八言葉をやはらげ、
幸八　さうこなさんが得心して、妹を捨てる心なら、何の緣を切らうぞい。
清兵　そんならやつぱり妹を、女房にして下さるかえ、忝ない。
　〽悅ぶ兄よりおしげが嬉しさ、
しげ　おゝ兄さん、よう言うて下さんした。假令この身は末始終人交りはならずとも、一旦夫婦になつたからは、よしや義理にて別るゝとも、わたしや生きてはゐぬ覺悟、一度ならず二度までも、命助かるわたしが仕合せ、兄さん、嬉しうござんすわいな。
清兵　おゝ嬉しからう〳〵、これが嬉しうなうて何とせう、此後ともに幸八どの必ず見捨てゝ下さりますな。
幸八　何の見捨てゝよいものか、見捨てぬ證據は清兵衞どの、今日からあなたを家へ引取り、どうぞ二人で世話がしたい、今から家へ來て下されし。
清兵　その志しは忝ないが、わしはやつぱりこの土手に、このまゝどうぞおいて下されし、結句こゝが氣散じでよい。

幸八　さうでもあらうが先刻のやうな、悪い奴等がうせをつて、どんな事をしようもしれぬ。

しげ　離れてゐては案じられる、ぬしもあのやうに言はしやんす故、今から一緒にござんせいな。

清兵　いや、強情な事をいふやうだが、どうぞこゝへおいて下され、といふその譯は、知つての通りのわしの氣質、こなた衆にやれ〳〵と言はれるのが氣じゆつない、こゝにかうしてゐる時は、寐たい時には寐、起きたい時には起き、身の養生になる故に、やつぱりこゝにおいて下され。

幸八　おしげ、どうしような。

しげ　さあ、あのやうに言はしやんす故、こゝへおいて上げた方が、却て氣樂でようござんせう。

幸八　そんならこなたの心任せ、いやになつたらいつ何時でも、わしが家へござらつしやい。

清兵　忝なうござりまする。（ト時の鐘。）

しげ　ありやもう四つでござんすぞえ。

幸八　それぢやあお暇をしようか。

清兵　どうやら今宵は降りさう故、降らぬ内に歸つて下され。

しげ　（提灯の中を見て、）こりや蠟燭が短うなつた。

幸八　權次が小屋で一丁借りよう。あゝ藪際のせゐか、ひどい蚊だ。

しげ　嘸うつとしうござんせうな。
清兵　なに、横になると死んだものさ。
幸八　あゝ又そんなことを、鶴龜々々。
しげ　そんなら兄さん。
清兵　二人の衆。
幸八　また明日逢ひませう。
〽消ゆる間近き提灯に、心細道畦道を、夫婦は行過ぎ立留り、
ト幸八提灯と傘とを持ち、おしげは重箱の包みを提げ、花道へ行きかけ思入あつて、
他人と違つて同胞と、知つてはこゝに一人おくが、何だか心にかゝるやうだ。
しげ　わたしもどうやら氣にかゝり、さつきにから胸さわぎ。
幸七　あ、何だか別れともないやうだ。（ト時の鐘、風の音、提灯の灯りはつたりと消える。）時も時、折も折、
灯の消えしは。
しげ　もしや、何ぞの。（ト振返り見る。清兵衛土手の際まで出て、）
清兵　まだ、行かしやらぬのか。

幸八 今行くところだ。

〽心は後へ引かるれど、灯は消えて足下の闇きに先を辿り行く。

ト幸八おしげ後を振返り、思入あつて花道へはひる。

〽二人が影も見え分かぬ、空は雨氣に音を低う、鳴く時鳥水の音、かすかに残る火の影を、賴りに清兵衛といきをつき、

ト清兵衛二人を見送り、がつかりとせし思入、床の合方水の音時鳥笛になり、

清兵 あ思ひ出せば三年あと、久七めに盗まれた太々講の五十兩、その金故に一人の娘を、辛い苦界の勤めをさせ、おれが難儀は濟んだれど、可愛さうなは娘が身の上、どうぞして金こしらへ、取戻してやりたいと、東海道の知邊を賴み、夜の目も寐ずに挊いでも出來ぬものは兎角金、正直の頭に神宿るといふが、貧乏神でも宿つたか、二年かゝつてやう〳〵四五兩、それも長の煩ひに他人宿故使つてしまひ、仕方なく〳〵來る道で久七めが店開き、つい、むやくしさに盗人と、いうたをゆすりの衒りのと、

〽大勢寄つて打ち打擲、

すんでのことに、殺されてしまふところ、情ある幸八どのに助けられ、こゝにかうしてゐる内も、

病氣の上に打たれた故、身節は痛んで胸は支へる、親身の者のないが悲しく、娘の年季の明くまでは氣を張つて死ぬまいと、我慢をしてゐたも、眞實の妹に逢ひ、其の上亭主といふは親切な幸八どの、やれ嬉しや、今死んでも無縁にはなるまいと、

〽心のゆるみがつかりと、

しよろぬけがしたやうぢや。もう近い内にお迎ひが來るであらう。覺悟せずばなるまい、南無阿彌陀佛。

〽なむあみだぶ、（トこの時時鳥笛）

あゝ、頼りにならぬ親ながら、おれが死んだと聞いたなら、嘸や娘が歎きをらう、これ、必ずおれが死んだとて、力を落すことはないぞ、粂之助様といふ夫もあり、又伯父伯母は歴然とした、あゝ身分が惡いで殘念だが、隨分力になる人ぢや、氣を丈夫に持つたがよい、くよ〳〵思うて煩らうてくれるな、草葉の蔭の迷ひになるぞ、よ。

〽覺悟するほど猶更に、後の後まで案じられ、涙の雨の小止なく　子故に迷ふ五月闇、

ト此の時時鳥笛、雨の音。

あゝ曇つたせゐか時鳥が、降るやうに啼きをるわ。あゝ降るといへば降つて來たが、どうかお媼

を持たしたいものだ。

〽あたり見廻し心附き、（ト地藏の笠を見て、）

おゝ幸ひ〳〵、もしお地藏樣、お隣りづからぢや、ちつとの內笠を貸して下さりませ。

〽竹笠取つて焚火の上、かくれば降來る雨の足、

ト立上り地藏の笠を取つて松の枝へかける、雨の音強くなる。

あゝ、これでよい〳〵。（ト雨に思入れ向うを見て、）

だいぶ強く降つて來たが、二人は家へ戻つたか、途次なら嘸困るであらう。

やあ、こりや人の事より我家が大變ぢや、此間の日和つゞきではしやいだせゐか、だいぶ漏る。

ト小屋の上へ本雨降る。清兵衛小屋の中へはひり、

どれ、繕つておかうか。

〽落散る以前の竹の皮、拾ひ集めて屋根の上、（ト以前の竹の皮を拾ひ、小屋の穴を繕ひ、）

これでどうか凌げさうぢや、どれ、雨の音を聞きながら、よい夢でも見ませうか。

〽此の世の緣も短夜に、榮華も夢も粟飯の哀れ甲斐なき孤だれへ、しを〳〵として入りにけり。（ト清兵衛思入あつて小屋の內へはひる。時の鐘、蛙の音。本雨きびしく降る。）

〽更け行く鐘の皓々と、雨は次第に降りしきり、蛙の聲のかしましく物音聞えぬ星合堤、幽に殘る火影をば目當の火串に久七が、竹笠深く面を隱し、土手の崩れに立ちどまり、

ト ばた／＼になり、花道より久七尻端折り一本差しにて竹笠を冠り出來りて、

久七　え丶今の一降りでぐつすりになつた。(ト着物の袖を絞りながら、花道の揚幕の方へ思入。)この、お瀧はどうしたか、庚申堂の三股から左りの方へ行きやあしねえか。

〽延び上り見る畦傳ひ、風も烈しき横しぶき、お瀧は傘を取られじと、辷る足元雲切の光りを便りに歩み寄り、

ト 此内花道より久七女房お瀧、褄を端折り傘をすぼめてさし出來る、久七すかし見て、

お瀧か。

お瀧　お丶久七さんか。(ト傘を取り顔を出し。)まことに辷つて歩きにくいの。

久七　さうよ、へ丶な混りだからつる／＼する。

お瀧　さうして、清兵衛がゐる小屋といふのは。

久七　向ふにちら／＼と灯の見える、あの側の蒲鉾小屋だ。

お瀧　もう大方寐た時分だらう。

久七　何にしろ、窺つて見よう。

〽腰に一腰さし足なし、忍び寄つたる小屋の下、息を殺してとつくと窺ひ、

ト兩人土手を上り、掛稲の後を廻り、久七は小屋の側へ來て窺ふ。この時お瀧吹替になり傘をさし掛稲より半分見ゆること、久七此方へ來て、(吹替になるは清兵衛とお瀧の二役を初演の際小團次一人にて演じたるによる――校訂者記。)

丁度幸ひ、よく寐てゐる、ひと思ひにやつてしまはう。手前はそこで、人が來るか頑張つてゐてくれろ。

〽言ふにお瀧はうなづいて、人や來ると窺ひゐる、久七は一腰拔き、灯影を頼りに忍び寄り、筵の隙より一突とぐつと突込む邪慳の刄。内にはアツと清兵衛が、たまぎる聲ともろともに、朱になつてまろびいで、

ト吹替のお瀧は四邊を窺つてゐる、久七は脇差を拔き、窺ひながら小屋の横よりぐつと突く、内にて清兵衛あつといふ、この聲に久七刀を引拔くと、内より清兵衛糊紅になつて出て、

清兵　人殺し。

久七　靜にしやあがれ。

清兵　や、さういふ聲は。

久七　お馴染の久七さまだ。（トこの時燃えさしぱつと燃えあがり、兩人顔を見合せる。）汝を生しておく時は、枕を高く寐られぬ故、それでわざ〳〵殺しに來たのだ。

清兵　（口をしき思入にて、）扨はあの五十兩は、いよ〳〵おのれが盜んだな。

久七　いかにも、あの折五十兩すり替へたのはおれが女房、その金故に拍子がよく、四文一合湯豆腐もやたらに賣つて升酒屋、一生樂に暮せるほど、今ぢやあ金が子を生んで、子孫に殘す心になり、寐覺の惡いおのれを殺し、五十兩の利息と思ひ百の塔婆に三文花、心にもねえ回向をして、奇特なことゝ人をだまし、後で樂々榮耀をするを、草葉の陰から見物しやれ。

清兵　ちえゝ、言はうやうない極惡人め。

久七　なに、おれよりやあ嚊の方が、よつぽど惡事は上手だわ。

清兵　何をおのれが。

　　トこの時お瀧の吹替附聲にて、

お瀧　無駄ッ口を利かねえで、早く殺してしまひねえな。

久七　合點だ。

ト久七又切りつける、清兵衛有合ふ物を打附け、久七に茶碗を投げつける。これにて久七たち〳〵となり、土手より辷り落ち起上る途端に、清兵衛掛稲を押分け顔を出す、久七びつくりして切つてかゝる、これにて清兵衛吹替になり、たぢ〳〵と後へ下がる。これに追はれてお瀧の吹替藪の中へはひり、清兵衛の吹替も藪の中へはひる。久七追ひかけようとして、花道から人が來るかと窺ふ。

〽次第に更くる夏の夜の短かき命清兵衛を、情容赦も久七が、腕いつぱいのめつたぎり、土手の葎も血まぶれに、辷る足元踏みしめて逃げつかくれつ藪垣を、押分け〳〵清兵衛が、襟がみとつて咽喉元を、ぐつと貫くお瀧が强惡、

トこの内上手の藪疊より清兵衛の吹替逃げて出るを、藪の内より手を出して引附け、藪を押分けお瀧半身を出し、清兵衛の咽喉を出刃庖刀にて貫く、と清兵衛はよろしく苦しみて落入り、お瀧庖刀を拔くとばつたり倒れる。

久七　お瀧。

お瀧　これ。

久七　うまくいつたな。

お瀧　これで今夜から、寐心がいゝ。

久七　死骸はどうせう。

お瀧　川へ打ちこんでしまひねえな。

久七　合點だ。

〽たぶさ摑んで引きずりながら、川の深みへ打ち込めば、ぱつと立つたる水煙り、後白浪と流れ行く。

ト久七清兵衛の死骸を引きずり〳〵川の中へ打込む、ト水の花ぱつと立つ。久七は川にて手を洗ひ兩人も糊を拭ひ、よろしくあつて久七川へ思入あつて、

何だか不氣味だな。

お瀧　何が不氣味だよ。

久七　出やあしねえか。

お瀧　馬鹿なことを言ひねえな、幽靈に出る奴アもつと氣が利いてゐらあな。

久七　何にしろ、早く行かうぢやあねえか。

お瀧　待ちねえ、後へ種を殘すといかねえ。（トあたりを見廻す、久七糊に辷つて尻餅をつく、）えゝ、どうしたのだ。

久七　血にすべつたのだ。

お瀧　意氣地のねえ、しつかりしねえな。（トこの時手桶の箍はじけてきびしき音するに久七驚きて、）

久七　やあ、あの音は。（トおどろく。お瀧手桶を見て、）

お瀧　手桶の箍がはじけたのだ。

久七　おらあ出たかと思つた。

ト氣味のわろき思入、手桶の水燃えさしにかゝりし心にて、白き煙りぱつと立つ。この内より人魂ふはくと出る、久七びつくりして、

お瀧　えゝ、氣の弱い。（ト引廻して、）さあ、行きなせえ。

あれ、人魂が。

久七　おゝい。

ト身拵へして行かうとする。時の鐘、花道より以前の幸八提灯を持ち出來るに、兩人身を躱し後へ下る。幸八血に辷り、提灯にて見て、

幸八　や、こりやおびたゞしいこの血汐。

ト思入、お瀧つかくと行き、提灯を打落す。幸八びつくりしてお瀧を捉へるを振拂ふ。幸八行かう

とするを久七引戻す、これよりダンマリ模様の立廻り、よきほどに久七後へ下り竹笠を拾ひ冠る。お瀧幸八立廻り、よき所へ久七割つてはひる。幸八久七の笠を捉へる、久七逃げる機に笠取れて幸八どうと下にゐる。久七は逸散に花道へ行つて轉ぶ。お瀧につたりと笑つて、つか〳〵と花道へ行く。幸八起上りて、

うぬ、待ちやあがれ。

お瀧　えい。

ト出刄庖刀を打附ける幸八身を躱す、庖刀上手の石地藏へあたり石火ぱつと立つ。これを木の頭。幸八あぶないことゝいふ思入、時の鐘にて、

ひやうし　幕

トお瀧につたりと思入、この時久七起上る。頭の笠の輪殘つてゐる。

久七　お瀧か。

お瀧　何のざまだな。

ト久七を突きやり、手拭を冠る。これをきつかけに鳴物になり、兩人花道へはひる、跡シヤギリ。

## 七幕目　古市杉本屋の場

（浄瑠璃）一座の中も、吉田屋の、其の人形時鳥酒杉本（富本連中 竹本連中）に准へて、後の世かけて別れの盃

〔役名――井筒条之助、松賀屋孫三郎、清兵衛の亡霊、立場の喜兵衛、爪永與九太夫、酒屋久七、酒屋の若い者善太、御師の手代深助、杉本屋彦十郎、輪達郷兵衛。杉本のお梅、おれん、おまき、おせん、お橘、仲居等。〕

（杉本屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面長暖簾、上の方障子屋體、例の所門口、杉本屋といふ掛行燈、下手半窓の板羽目、朝顔附の燭臺を所々に照し、郷兵衛立ちかゝり、喜兵衛留めてゐる。仲居およさ、おりう、おなか、おえい、おます、おうた脇を向いてゐる。太鼓入りの賑やかな唄にて幕明く。

喜兵　もうし〳〵郷兵衛様、そんなに腹を立てると、腹形が悪くなります、まあ御機嫌をおなほしなさりませ。

郷兵　いや〳〵、喜兵衛留めるな〳〵　こりや仲居ども、何で客の身共を軽卒に取扱ふのだ。これ、お蓮を呼ばぬか、酒肴を何故出しをらぬ。

正直清兵衛

よさ　今晩はお氣の毒ながら、お客が込み合つてゐます。
りう　お蓮さんも、外のお客へ出てをれば、
えい　お前さんは早う、
皆々　お歸りなさんせいなあ。（ト脇を向いてゐる。）
鄕兵　あれ〳〵、あのやうなことを言ひをる、身共も武士だぞ、歸れといつたとて、なに歸るものか。
喜兵　もし〳〵茶屋小屋の女どもは貰ふが生業、お前さんは祝儀をおやりなされたことがないから、それで女どもが、大事にしないのでござりませう。
鄕兵　そんなら、祝儀をやれば大事にするか。
喜兵　祝儀さへおやんなされば、きつと大事にいたします。
鄕兵　然らば淸水の舞臺から落ちたと思つて、祝儀をやらう。（ト懐の紙入より包金を出し、小判一兩を出して、）こりや喜兵衞、大枚金一兩祝儀だぞ。さあ、あいらにやつてくれ。
喜兵　（受取りて、）これはきついはづみやうでござります、これ仲居衆や、鄕兵衞樣が御祝儀を下すつた。お禮を言ひなせえ。
よさ　もし皆さん、鄕兵衞さんから御祝儀ぢやぞえ。

りう　これはまあ、郷兵衛様がおめづらしい。
皆々　大きに有難うござります。
なか　もし、早くお肴を出して下さんせえ。（ト奥へ向ひ言ふ。）
ます　そしてお銚子を早く持つて來なさんせ。
うた　郷兵衛さん、ようおいでなされました。（ト口々に世辭を言ふ。）
喜兵　なるほど伊勢者は正直だといふが、あまり正直な手合だなあ。
よさ　喜兵衛さん、そりやどうでも、太神宮様のお側だけぢやわいな。
喜兵　違えねえ。これ、おれがさばいた祝儀だから、分口をよこすだらうの。
りう　そりや何ぞ、うまいものをおごるわいな。

トこの内奥より若い者酒肴を持つて出る。

えい　さあ／＼お肴がまゐりました。
皆々　お一つお上りなさりませ。

ト皆々臺の物を眞中へ出し、捨ゼリフにてわや／＼と酒宴あつて、

郷兵　ときに、酒ばかり飲ませて、何故お蓮を呼ばぬのだ。

喜兵　お前方も氣の附かない、早くお蓮を呼びなせえな。
皆々　はい〳〵、お蓮さん〳〵。（ト呼ぶと、奥にて、）
お蓮　忙しない、今そこへ行くわいな。（トお蓮女郎の裝にて奥より出る。）
よさ　もしお蓮さん、鄕兵衞さんの側へおいでなさんせいな。
お蓮　いえ〳〵、わたしやお前方の側がよいわいな。（トよき所へ坐る。）
鄕兵　こりや〳〵お蓮、最前から待ち兼ねた。こゝへ來て、一つ飮みやれ〳〵。
お蓮　いえ／＼、わたしや酒は嫌ひぢやわいな。
喜兵　これお蓮、折角鄕兵衞樣があのやうにおつしやるに、お側へ行つてお相手をしろ／＼。
お蓮　父さん、お前までが同じやうに、捨てゝおいて下さんせいな。
鄕兵　いや〳〵捨てゝはおかれぬ、此間から度々來て口說けども、つひに一度うんと言つたことがないぞよ、今夜は是非とも客にならねばならぬぞよ。
お蓮　いえ〳〵、何と言はしやんしても、お前の自由にはならぬわいな。
鄕兵　でも、今夜は身共が揚げづめ、殊に仲居どもへ祝儀までやつたこと、是非とも取り持つてくれよ、なあ仲居ども。

よさ　そりや御尤もでござりまするが、女郎さん方のまゝになるならぬは、お客の心。
えい　一旦振つたお客でも、義理に義理が重なれば、
りう　無理な工面で達引くやうに、なるのがやつぱり勤めの習ひ、
なか　木折に行かぬが色の道。
ます　さう氣短うおつしやらずと、
うた　氣長に通つて眞實見せ、
よさ　從はせるが、
皆々　粹さんぢやわいな。
鄉兵　いや〱身共至つて氣が短い、是非とも今夜は客にならねば相ならぬ。
お蓮　假令何と言はしやんしても、わたしやお前は嫌ひぢやわいな。
喜兵　これ〱お蓮、さつきから聞いてゐれば、言ひたいがいの無理我儘、末始終はお前樣の女房に上げますと鄉兵衞樣へ約束して、金をお借り申したからは、いやでもおうでも御心に從はせにやあならねえぞ。
お蓮　そりやお前が無理といふもの、わたしに得心もさせず、約束するといふがあるものかいな。

喜兵　おゝ、無理合點だ、親の高下で、是非女房にさせにやあならねえ。

お蓮　いえ〳〵、何と言はしやんせうとも、わたしや言交したお方がある故、お前のまゝにはならぬわいな。

喜兵　なに、言交した男とは、おほかた松賀屋の孫三郎であらう。彼奴はいつぞやおれが金を盗んだ大泥坊、何で彼奴の女房にさせるものか。

お蓮　いえ〳〵、勤め放れて言交してゐるいとしいお方、死んでも添ひとげねばならぬわいな。

喜兵　さう強情ぬかせば、鄉兵衞樣へのめんばれいゝに、たゝッ挫いて、根性をなほさにやあならないぞ。

お蓮　そりや親のかうげ、どうなとしたがよいわいな。

喜兵　うぬ、さうぬかしやあ。

ト喜兵衞煙草盆を持つて立ちかゝろ、仲居皆々留める、始終踊り地、奥より彦十郎亭主の裝にて出て、喜兵衞を留めて、

彦十　これ〳〵喜兵衞どん、何をさつしやるのだ。まあ〳〵待たつせえな。（ト煙草盆を取ろ。）

仲居　（皆々見て、）あなたは旦那さん、よいところへ。

喜兵　（彦十郎を見て、）もし親方、何でお留めなされます。

彦十　何故といつて家の店でみつともない、女郎子供を捉へて、あまり手荒いことをするから、それで留めたがどうぞしたかの。

喜兵　いゝえ此女がお客へ對して、あまり強情を言ひますから折檻します。もし、お留めなさいますな。

彦十　これ喜兵衞どん、このお蓮はこなたの娘であらうとも、身の代を出して抱へたからは、年季の内はおれが抱への奉公人、こんたの手籠にして濟むかえ。

喜兵　さ、そりや。

彦十　年が明けたらこなたの娘、燒くとも煮るとも勝手だが、まあそれまでは指でも附けて貰ひますまいよ。

喜兵　えゝ、いめえましい。（ト後へ下ろ。彦十郎鄕兵衞に向ひて、）

彦十　これは鄕兵衞樣、御挨拶もいたしませぬ、ようおいでなされました。

鄕兵　亭主彦十郎か、よいところへ、唯今お手前が申した、お蓮が年季を拔いてやらう。

彦十　へい、年季を拔くとおつしやりますは、

鄕兵　身共がお蓮の身請いたさう。

お蓮　えゝ。

彦十　そりや身請なされば、あなたの御自由と申すもの。

鄕兵　して、身請の高は何ほどぢや。

彦十　正札附で、百兩でござります。

鄕兵　唯今こゝに持合せはないが、證據の爲め手附を渡さう。

彦十　なに、お手附、それは有難うござります。

お蓮　あゝもし、それでは。

彦十　はてまあ、おれに任せて落附いてゐやれ。

ト呑込ませる。鄕兵衛懷中より包金を出し紙をひろげ、

鄕兵　こりや彦十郎、金子は小判ぢやぞ、それ一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚、（ト竝べて後なき故、間のわるき思入れ）

彦十　もし、お手附はそれぎりでござりますか。

鄕兵　さあ、手附は小判で一枚、二枚。（トもとのやうに算へ、）八枚、九枚、（ト悲しさうに言ふ。）

喜兵　はゝゝゝゝ、とんだ皿屋敷だ。

彦十　大阪の俄を見るやうだ、もし鄕兵衛樣、身請は大まい百兩でござります。二十とか三十とかまと

まつた金子でなければ、お手附になりませぬ。

郷兵　かういふことなら、最前仲居どもに祝儀をやらずに、せめて十兩につばめておけばよかつた。九枚では手附にはなるまいか。

彦十　左樣でござります。

郷兵　えゝ恨めしい。（ト幽靈のやうに言ふ。）

皆々　あれ、氣味の惡い。（ト皆々逃げる。）

彦十　こんな肥つた幽靈が何處にあるものか。

喜兵　こりや大方井戸の中で、お菊が土左衞門になつたのだらう、はゝゝゝゝ。

トこの內郷兵衞手ばやく金をしまひ、

郷兵　えゝ恨めしい。（ト大きく言ふ。）

皆々　あれえ。（トお蓮、仲居等皆々逃げてはひる。）

郷兵　えゝ恨めしい〱。（ト後を追ひかけてはひる。）

彦十　いやも、騷々しいお方だ。

喜兵　まことにたわいのない郷兵衞樣だ。

彦十　喜兵衛どん、機嫌をなほして奥へ來て、酒でも飮まつせえ。
喜兵　そんなら御馳走になりませうか。
彦十　さあ、一緒に來さつしやい。
ト彦十郎、喜兵衛奥へはひる。と花道より孫三郎羽織着流しにて出來り、
孫三　最前お蓮が川があると言つてよこしたが、どうぞ早う逢ひたいものぢや。
ト舞臺へ來る、奥よりおまき女郎の裝にて出來り、孫三郎を見て、
まき　ほんにお前は孫三さん、お蓮さんがきつい待兼ね、さあ〳〵はひらしやんせいな。
孫三　おまきさん。いつもながらきれいなことぢやなあ。（ト内へはひり、よき所へ坐る。）
まき　孫さんのお世辭ばかり、そんなことはお蓮さんに言つて悅はせなさんせ。お蓮さんは今宵は折わるう、鄕兵衛づらに出しなれば、後にわたしがこつそりと。
孫三　何さ、お蓮に逢はずとも、お前方にかうして話しをするのが樂しみさ。
まき　そりや嘘でござんす、お前に逢ひたさに紀州からはる〴〵と、この伊勢路まで來て、勤めしてるやしやんすお蓮さん、お前一人賴りの身の上、そのやうなこと言はしやんせず、たんといとしぼがつてあげなさんせいな。

孫三　お前方は何にも知らぬ故、そのやうに言ひなさるが、あのお蓮がやうな厭な女があらうか、わしが口から惚いやうぢやが、顔は十人並なれど、物を食ふところを見ると、どんな者でも愛想が盡きる。

まき　ほゝゝゝ、孫さんの戯謔ばかり。

孫三　いや戯謔ぢやない、此間座敷が引けて、屏風の外にあつた臺の物の、刺身を一皿うま煮を一重、煮魚の骨を嚙ぢる其の音のおそろしさ、ばりばり、とんと犬が物を食ふやうぢや、まだしも床へはひつて、わんわんと言はぬが不思議といふもの。

(トこの内後へお蓮出てそつと聞いてゐて、この時顔見合せ、孫三郎びつくりして逃げようとする。)

まき　いえいえ、逃がさぬぞえ。(ト孫三郎を捉へる。)

孫三　あゝ、夢になれなれ。(ト羽織を冠る、お蓮孫三郎の胸づくしを取りて、)

お蓮　おまきさんよう留めて下さんした、もし孫さん、あんまりでござんす、わたしが聞くとも知らず、あらうことか犬に譬へて悪口雜言、わたしや悔しい、腹が立つ、腹が立つわいな。(ト振廻す)

孫三　これこれ腹の立つは、尤もぢやが、つい話しに乘が來て嘘言うたのぢや。堪忍しやしや。

お蓮　いえいえわたしや、犬ぢやによつて、さあ打たしやんせせ、たゝいて下さんせいな。

ト お蓮孫三郎に身體をすりつけて泣く。

孫三　これ〱そりや何を言やる。假令何と言はうとも、二世までと言交した二人が仲、そのやうに腹立てずとよいではないか。

お蓮　いえ〱、わたしや腹が立つ、構うて下さんすな。（ト彼方を向いて泣く。）

孫三　これはしたり、今のはわしが惡かつた。あやまるほどに堪忍しや〱。

まき　もしお蓮さん、尤もでござんすが、孫さんがあのやうにあやまつてなれば、お前の腹の立つは道理ぢやが、もう堪忍して上げて下さんせいな。

お蓮　わたしや悔しうてならぬけれど、お前がそのやうに言うて下さんす故、堪忍して上げうけれど、其の代りわたしや、おまきさんの言ふ通りにならしやんすなら、了簡してあげるわいな。

孫三　そりやどんなことでも、自由になるほどに、堪忍してたも。

お蓮　そんならわしが惡かつたと、手をついてあやまらしやんせ。

孫三　段々あやまり入りましてござります。（ト手を突いてあやまる。）

まき　お蓮さん、これで堪忍して上げなさんせ。

ト此の時花道揚幕の内にて、御師與九太夫と手代深助の聲にて、

兩人　さあ〳〵、お早くおいでなされませ。

まき　あの聲はたしか約束の太々のお客、鄕兵衞づらに見られぬ内、いつもの小座敷で。

孫三　そんならお蓮。

お蓮　おまきさん。

まき　わたしが首尾して上げるわいな。

ト太鼓入りの唄になり三人奥へはひる。花道より下男小さき箱提灯を持ち、酒屋久七先に立ち、御師の裝の與九ナフ、同手代の深助、下男善太附きて出來り、

與九　もし旦那樣、古市はいつも繁昌なことでござりまするな。

久七　いかさま、京大阪は別のこと、此のくらゐ賑しい所はござるまいて。

深助　今日は首尾よく太々も濟みました御祝ひに、今晩は杉本屋の人形を御見物の御趣向。

善太　早くその人形芝居を見て、うまい物をたんと喰ひたいものだ。

與九　少しも早くおいでなされませ。（ト皆々舞臺へ來り門口より、

深助　賴みます。お約束のお客樣でござります。

仲居皆々　あい〳〵。（ト奥より仲居等出來り、

よさ　これはようおいでなされました。

皆々　さあ〳〵、お通りなされませ。

ト皆々内へはひり、久七上手に皆々よろしく坐る。下男は下の方へはひる。彦十郎奥より出て、

彦十　これは與九太夫様、今晩は有難うございます。

與九　彦十郎どの、あなたが太々のお客様ぢや、御挨拶申さつしやれ。

彦十　へい〳〵、則ち杉本屋彦十郎でございます。（ト久七の顔を見て、）どなたかと存じましたら久七様でございますか、今晩はようおいでなされました。

久七　彦十郎どの久々で逢ひました、手前も當時は櫛田へ、僅かな酒店を開きました、今夜は何かと御厄介になります。

深助　もし、旦那の御祝儀を御亭主へ渡しませうか。

與九　いかさま、さういたすがよからう。

ト深助風呂敷に包みし、盆に載せたる祝儀包みを出し、

深助　もし親方、これは旦那様から、御家内惣體へ御祝儀でございます。（ト彦十郎へ渡す。）

彦十　これは、わたくし始め家内その外一同へ御祝儀、有難うございます。それ女ども、お禮申せ〳〵。

皆々　はい〳〵、有難うござります。（ト奥より郷兵衛出來りて、）
郷兵　おゝ太々の客は誰かと思うたらば、久七そちか、だいぶはずむな〳〵。
ト久七郷兵衛を見て、差してゐた脇差をそつと隱して、
久七　これは郷兵衛樣、とんだ所でお目にかゝりました、わたくしも久しく當地にゐますが、まだ古市は初めて故、太々のついでに見物にまゐりました。
郷兵　それは丁度よい所へまゐり合せた、今晩はその方の勘定へ、つッ込みといたさうかえ。
善太　郷兵衛さん、お前も女郎買ひかえ。止しなさればいゝ、誰がお前に女がほれるものか、むだな事だ。
郷兵　この野郎め、よく四文と出をる。默つて引込んでゐろ。
善太　いゝえ引込まない、今夜はわつちもお客だよ、そんなにこめなさんな。
久七　これ〳〵どうしたものだ、失禮千萬な、だまつてゐないか。
與九　（郷兵衛を見て、）もし彥十郎どん、どこのお客か知らぬが、あのお方はわしが方の勘定へは入れませぬぞ。
久七　これ〳〵與九太夫殿、このお方は我等が脫れぬお方、今宵は御一座に大事にして下されの
與九　あなたさへ御承知ならばよろしうござります。これはあなた樣、左樣とは存じませず、失禮の段

御免下されませう。

郷兵　いや、斯樣なことで、兎角間違ひなどができるもの、以來氣を附けさつしやれ。

與九　まことに恐れ入りました。

善太　郷兵衞さん、豪氣に威張りを附けるね。

深助　ときに親方、早く旦那樣へ人形を、お目にかけたいものでござります。

彥十　はい、もう支度もよろしうござりますれば、お座敷へ御案内いたしませう。

與九　さあ旦那、座敷へいらつしやりませ。

久七　左樣なれば郷兵衞樣。

郷兵　然らば久七。

皆々　さあ、おいでなされませ。

ト彥十郞案內して皆々奧へはひる。と直に奧にて知せの拍子木を打ち、シャギリになりこの道具廻る。

(杉本屋別間の場)――本舞臺三間平舞臺、菊壽の大形の襖、上下折廻し、腰高菊壽の模樣障子出入り、所々に燭臺を照してある。と奧より仲居皆々出て、よき所へ菊壽模樣の障子手摺を人形手摺に立て、

えい　もしお梅さん、お蓮さん、お客様のお待兼ね、
皆々　お支度がよくば、早くおいでなさんせいな。

ト踊り地にて、お梅、お蓮、おせん、おまきの四人女郎の裝何れも菊壽の模樣の對の衣裳にて出て、

お梅　皆さん、わたしらはもう支度はできたぞえ。
お蓮　早う口上を、言つて下さんせいな。
よさ　あい〳〵、「東西々々、いよ〳〵このところ夕霧伊左衞門吉川屋の段初まり、その爲口上、左樣に御覽なされませう。」（トこれにて出語り臺の霞を落し、竹本連中の淨瑠璃になる。

〽過ぎし夜すがのかね言を思ひ出して伊左衞門、腹立まぎれ調子さへ、胸は二上り三下り、

トお梅伊左衞門の人形を持ち、おまき左りにて前へ出る、この内仲居皆々奥へはひる。

〽可愛い男に逢坂の、關より辛い世の習ひ、
詞〽あの唄で思ひだす太夫とおれが連彈に、彈いた時の面白さ、彈くその主は替らねど、替つたは彼女が心底、あゝした心であらうとは、
〽思はぬ人にせきとめられて、今は野澤の一つ水、（トよろしくあつて）
〽むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしく、

ト後よりお蓮夕霧の人形を持ち、おせん左りにて前へ出る。

〽とびたつ心奥の間の、首尾が朽ちせぬ緣と緣、胸と心の相の山、間の襖の工台よく、明暮戀しい妻の顏、見るに嬉しく走り寄り、我身をともに裲襠に、引きまとひ寄せ、抱きしめつゝ泣きけるが、

〔同〕〽もうし伊左衛門さん、眼を覺して下さんせ、わしや煩らうて、とうに死ぬる筈なれど、今日まで命存らへたは神佛の控へ綱、これなつかしうはないかいな、顏が見たうはないか〔色〕いのと、搖りおこし〳〵抱き起せば、とつて突退け、

〽そこな夕霧どのとやら、夕めしどのとやら、あのこゝな萬歲傾城、

〽この夕霧を萬歲とはえ、

〽萬歲傾城の因緣知らずば言うて聞せう、今のやうに奥の客に蹴らるゝを、萬歲傾城と言ふぞや。〽まことに目出度くさむらひける。〽而も足駄穿いて蹴るやら、

〽年たち歸るあしたにて、まことに目出度くさむらひける。

〽これ餅なと米なとやつて、早う去なしやいの、

〽と譯も淚の捨詞、煙草引寄せ吹く煙管、外らさぬ體にてゐたりける。

ト兩人よろしくある、踊り地ばた〳〵にて、喜兵衞の聲にて「うしやあがれ〳〵」と言ひ、奧より鄉兵衞、喜兵衞の兩人孫三郞を引立て出る。これにて竹本連中を消し、人形手摺を取る。

まき　もしお二人さん、孫さんを可愛さうに。

せん　こりや、どうしたわけでござんすえ。

鄉兵　どうしたどころか、最前小座敷でこの二才野郞とお蓮めが、ちゝくつてゐるを見つけ、捉へようと思ふ内、お蓮めはつい逃げをつた。この野郞がある故、身共に從はぬわえ。

喜兵　この野郞は、いつぞやおれが金を盜んだ泥坊野郞め、どうでも盜み根性がある故、今夜も亦お蓮めを盜みにうせたのだな。

孫三　どうしてわしがそのやうな事を。

鄉兵　なに、そのやうな事が、うぬのやうな奴はかうして〳〵。（ト孫三郞を扇にて打つ。）

せん　（留めて、）もし鄉兵衞さん、いかにわたしが憎いとて、孫さんまであんまりでござんす。

喜兵　何があんまりだ、汝は其方へ退いてゐろ、橫番切つた泥坊野郞。うぬ、かう〳〵。

ト孫三郞を喰はすをおせん留めて、

せん　もし喜兵衞さん、お前までが同じやうに、その樣にせずとよいぢやござんせぬか。

郷兵　いや〳〵、みんな留めるな、そんなことでは腹が癒ぬ、うぬどうしてくれう。

ト孫三郎を引附けようとする、これをお梅留めて、

お梅　もし郷兵衛さん、まあ待たしやんせいな。

郷兵　お梅、なぜ身共を留めるのだ。

お梅　お前さんもまあ心の狭い、間夫は勤めの身の樂しみ、もし、お蓮さんばかりが古市の女郎衆でもございんすまい、外にも女子がござんせう、よい加減にしたがよいわいな。

ト郷兵衛の手を取る故、郷兵衛ぞつとしてぐにや〳〵となり。

郷兵　おゝさうだ〳〵、お蓮ばかり女ではない、外にもある〳〵。

お梅　そんなら孫さんを、あのやうにせずと、よいぢやござんせぬか。

郷兵　よいとも〳〵、打たずともよい〳〵。

喜兵　なに、この野郎を打たずとよいとは。

郷兵　もし〳〵決して、打つには及ばぬ〳〵。

せん　もし喜兵衛さん、郷兵衛さんもあのやうに言うてなれば、なあ、もうし、

まき　もし、堪忍して上げなさんせいな。

喜兵　何のことだ、戀の敵の孫三郎、手傳つて打つてくれろと頼ましつたではないか。

鄕兵　はて野暮な奴だ、間夫は勤めの憂晴し、お蓮ばかりが女子ではない、なうお梅の君。

トお梅に寄添ふ、これにて喜兵衛むつとして、

喜兵　えゝ何のことだ、ぐづ〳〵と分からねえことばかり、年寄ア氣が短い、こんなことにかゝつてるられるものか、いけ馬鹿々々しい。（ト喜兵衛孫三郎を踏倒して奥へはひる。）

鄕兵　よく腹を立つ野暮な親仁だ。これ若いの、どこも痛みはせぬか。

お梅　お蓮さん、早う孫さんを奥へ連れまして、髮なと撫附けて上げなさんせ。

孫三　何にも言はぬ、お梅さん。

お蓮　もし、これぢやわいな。（ト手を合せろ。）

お梅　はて、物數言はずと、お前方も一緒に奥へ。

まき　あい〳〵。さあお二人さん。

孫三　盡きぬお禮は、

お蓮　後にゆるりと。

兩人　さあ、ござんせいな。（トお蓮孫三郎の手を取り、兩人附いて奥へはひろ、鄕兵衛見送りて、）

郷兵　幸ひあたりに人目はなし、これお蓮ばかり女とは思はぬ、外に誰ぞ。
　　　　ト お梅の手を取り、引寄せようとするを突放して、
お梅　あい、誰ぞ世話して上げうわいな。（ト立つを引留め。）
郷兵　いや、誰よりはどうぞおぬしに。
お梅　わたしでござんすかえ。
郷兵　おいなう。
お梅　お氣の毒ぢやが、わたしやお前と蛞蝓は、
郷兵　や。
お梅　蟲が好かぬわいな。（ト振り切るを留めて。）
郷兵　さう言や是非とも。
お梅　えゝ、おいて下さんせいな。
　　　　ト 鼻紙にて郷兵衛の顏をぴつしやり打つ。唄になりお梅ついと奧へはひる。郷兵衛後を見送り、呆れし思入にて、
郷兵　初手からあまりうま過ぎたから、大方こんなことだらうと思つた。

トこの時落ちてある觸書を取つて見て、

こりや大方彼女が文か。（ト觸書を開き、）「淨瑠璃名題――」（ト讀んで、）何のことだ。（ト下にゐて、）わけが分からぬ。

ト腕を組み思案の思入、早めたる踊り地にて道具廻る。

（杉本屋下座敷の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面銀地菊壽の模樣の襖、上手床の間違ひ棚、上の方一間丸窓庇附きの壁、前側伊豫簾下しあり、例の所枝折戸、下の方淨瑠璃臺、この前中窓板塀の張物、總て下座敷の體。ト鳴物打上げ、下手の張物を打返し、富本連中居て直に淨瑠璃になる。

〽憂き事を忍ぶに辛き戀衣、干さぬ袂の梅雨ぐもり、青葉に暗き皐月闇、思ひは晴れぬ夏の夜の、短き縁告げわたるをしき別れの水鷄鳥、

ト合方時鳥笛、よきほどに伊豫簾を上げる、粂之助着流しにて短檠を灯し、硯箱を控へ書置を認めゐる。よき所に以前の人形二つ臺にかけある。粂之助思入あつて、

粂之　文なき闇を告渡る死出の田長の時鳥、我身の上と同じこと、これ迄浪々の粂之助貢いでくれたお梅が親切、死なねばならぬ今宵の仕儀、明かさば死ぬるといふは必定、一緒に殺さば武士道立た

ず、たゞよそながら暇乞ひ、委細を記せしこの書置、死後の回向を頼むぞよ。

〽盡きぬ名殘りを書殘す墨さへ薄き契りぞと、筆の歩みもはかどらぬ、文字にも後や前の世を、かけたる仲も仇事と、思ひ亂るゝ藻汐草、

ト粂之助書置をかきをはり、封じて懷中する。

〽襖をそつと立出る花橘の由縁とて、藤紫の茶袱紗へ載せた茶碗の樂ならぬ、勸めの宵生かはゆらし、

トこの内粂之助枕を引寄せ寐轉ぶ、よきほどに下手の杉戸を明けお橘着裝にて、茶碗を袱紗へ載せ持ち出て、

お橘　もうし粂さん、嘸お待遠でござんせう、茶々一つ飲ましやんせと、お梅さんが言はしやんしたわいな。（ト茶碗を前へおく、粂之助起上りて、）

粂之　誰かと思へばそなたはお橘、よう茶を持つて來てたもつた。どれ眼覺しに飲まうかいの。

〽定る縁の薄茶かと、胸のたぎりを撫でおろし、

あゝこれで眼が覺めたやうぢや、然し何ぞ口取がありさうなものぢやの。

お橘　あい／＼、口取を持つて來やんせう。（ト立つを留めて、）

粂之　あこれ〳〵、その口取より誰ぞよい女郎衆を、汝わしに取持つてたも。

お橋　いえ〳〵そんなこと言はしやんすと、お梅さんに告げるぞえ。

粂之　そんなこと言はずと、取持つてたも。

〽あれ又そんな悪性は、こちや白川に漕ぐ船も、川崎音頭聞きおぼえ。（トお橋振になる。）

〽人の心の花あやめ、ぬれにぞぬれし五月雨に、しつぽりとした閨の内、よい〳〵〳〵よいやさ、それへ〳〵、それ、振もよや。（トよろしくある。）

やんや〳〵、いつのまにやら音頭が、きつう上つたわいの。

〽座敷の首尾も上草履、戀しき人にあふむ石、可愛々々の友呼子鳥、

ト微めて踊地になり、下手よりお梅銚子を持ち、孫三郎盃洗、お蓮少さき鉢を持ちいて、

お梅　もし粂さん、折悪う太々の客で嘸待遠でござんせう、やう〳〵首尾して來たわいな。

孫三　わたくしも最前からをりましたれど、お前さまと違ひ忍んで上つたこと故、こゝへ來るも遠慮勝ち。

お蓮　今がよい首尾故、お梅さんと連立つて來やんした。さあ粂さん、一つお上りなさんせいな。

ト酒肴を前へ出す。

粂之　これは孫三さん、お蓮さんよく來て下された。最前から待ち退屈故今歸らうと思うたところ、折角持つて來て下さつた酒、一つ飮んで歸りませう。

お梅　もし粂さん、なぜそのやうなこと言はしやんす、お客の落合ふは今宵ばかりぢやござんすまい。機嫌なほして待つてゐて下さんせいな。

粂之　いや、わしがやうな爲めにならぬ客がゐては、結構な太々の客を勤める邪魔になる故、もう歸るわいの。

お蓮　もうし粂さん、いつにないお前の腹立ち、お梅さんの心を知らずか何ぞのやうに、なお孫さん。

孫三　御機嫌なほしてあつさりと、おひとつ上りませ。どれ、お燗を見て上げませう。

〽清なる水に月影の、さす盃のさゝめ言、

ト孫三郎盃を取る、お蓮酌をし孫三郎飮んで、

憚りながら、（ト粂之助へ猪口をさす。）

粂之　いや〳〵、わしは小さいものでは面倒な、これで飮みませう。（ト以前の茶碗を出す。）

お梅　めつさうな、そのやうな大きいもので。

お蓮　もし、これがようござんせう。（ト盆の上にある小さき茶碗を取つて出す。）

粂之　折角大きいもので飲まうといふに、何のかのと、あた腹の立つ、

〽疳癪酒の八つあたり、ひぞる言葉の角ひしも、胸の立つ浪汐ぐもり、

ト粂之助茶碗を取りお梅酌をしようとする、粂之助脇を向く、お蓮酌をする、お梅孫三郎顔見合せ思入、粂之助二つ三つ重ねて飲む。

お梅　もし粂さん、何故そのやうに腹を立てなさんす、悪い事ならあやまらうほどに、もう機嫌なほして下さんせいな。（ト側へ寄るを突放して、）

粂之　えゝそんなに安くして貰ふまい、そなたの遣ふ人形のやうに、さう自由にはなるまい、ほんに人形で思ひだした。（ト後にある伊左衛門の人形を取りて、）此の藤屋の伊左衛門も夕霧に騙され、紙衣一枚で、七百貫目の借錢を負うたがよい手本、おゝ怖いこと〳〵。

お梅　もし、ひよんなことを言はしやんす、わたしやお前を騙したことは。

粂之　はて、ないことがあらうか、これまで情らしう言つておいて、最前わしが見るとも知らず、奥の太々の客に、袖褄ひかける浮氣女郎、随分たんとおひかせなされ〳〵。

〽彈く三味線の相の山、お杉お玉が口拍子、島さん紺さん中のりさん、鉢卷したのがお江戸さん、やゝかんせ、はふらんせ、ひねつて投るをちよつくらちよつと、撥で網じ、受けるが

宇治の橋。(ト粂之助よろしくあつて、)
あの奥の客に、定めて金を澤山紙にひねつて貰つたであらう。なう孫三どの、我等がやうな貧乏客は、せめて酒なと飲んでくりよ。
〽手酌に續けてむいき飲み、横にころりと肘枕。(ト手酌にて飲み、肘枕にて寐る。)
孫三　いつにない粂之助樣の癇癪、これには何ぞ深い樣子が。
お蓮　定めてそのやうな事でござんせう、側で聞くさへしんきぢやわいな。
ト孫三郎枕を取り、粂之助にさせる、お梅思入あつて、
お梅　つひにこれまで、腹立てなさんしたこともなけれども、殿御の心と秋の空、變り易いが世の習はせ、(ト夕霧の人形を取つて、)丁度夕霧が、わたしの身の上。
〽男心はそれほどに、氣強いものかさりとては、恨まれたりかこつのは色の習ひと言ひながら、それは浮氣の水淺黄、逢ひ初めたその日より、こんな縁が用紙の昔模樣の源氏繋、隱れて上る夕顏を人目關屋の廻し部屋、宵はもぬけの空蟬に、すまぬ口舌の言ひがかり、背中合せの常臭に仲なほりすりや明の鐘、憎うてならぬ鷄の聲、啼いて明石の裏階子、登りつめたる戀中に愛想づかしの捨言葉、心強やと取りついて涙は刺繍の玉かつら、こぼれかゝり

し風情なり。

ト お梅思入、お蓮この中へはひり、粂之助と三人よろしくある。孫三郎この中へはひりて、

〽仲をへだて丶これ申し、口舌喧嘩の最中へ、身請が濟んだと吉田屋の、亭主が先へ若い者、千兩箱をやつし丶と、所狹しと積上ぐれば、夷講の賣買と穿き間違へてちんがちと、出合頭にたちまちに、悋氣爭ひ仲なほり、目出度いことぢやござんせぬか、笑ひたまへと興じける。

ト 孫三郎振りあつてをさまる、お梅思入あつて、

お梅 孫三さんの親切な言葉、聞かしやんしたか、粂之助さん、言替したその日から添はれぬ仕儀になつた時は、一緒に死なうと、覺悟してゐるこのお梅。

粂之 いや、その死ぬるのがきつい嫌ひ、この結構な浮世を捨て、賴りも知れぬ十萬億土。上へ乘つたらばおつこちさうな、蓮華座の住居をしようより、生きられるだけ此の世にゐて、榮燿榮華をするのが、樂しみではないかいの。(ト醉うた思入。)

お蓮 いえ〳〵、添ふに添はれぬその時は、一緒に死ぬるが夫婦のまこと。

孫三 まあ〳〵、死ぬの生きるのと、そんなことは取りおいて、機嫌なほして仲なほり。

粂之 いや〳〵、わしはもう女子が急に厭になつた」

お梅　えゝ。
粂之　今も言ふ通り、ひよつと女郎に實があると、末始終つまらぬ時は心中をせねばならぬ、今の内に切れてしまふが互ひの仕合せ、切れる證據に最前書いたこの切れ文。（ト懐より以前の書置を出し。）さあ、この切れ文を受取つてたも。
お梅　もし粂さん、最前から戲謔かと思うてゐたに、眞實お前は切れる心でござんすかいな。
粂之　おゝ眞實とも、眞實とも、切れる心のこの退狀。
お梅　いえ〱わたしや何ぼうでも、切れることは厭でござんす、こんな物は入らぬわいな。
ト書置を投げ返す。
粂之　そなたが切れいでも、わしが方から切れるのぢや。（ト又書置を投げつける。）
孫三　あゝし〱お待ちなされませ、どうでもこれには深い樣子が、まあこの退狀は、わたしがしつかり預りませう。もしお前さまも大ぶんお醉ひなされた樣子、ちと橫におなりなさりませ。
粂之　いや、寐てはゐられぬ、わしはもう歸ります。（ト懐より胴卷を出し。）これ孫三どの、こゝに金が二十兩ほどある、半分はこれまでの此の家の勘定、殘りは家へおき土産。これ〱仲居衆、來てたも〱。（ト奥へ向ひ呼ぶ。と下手より仲居皆々出來る。）

よさ　もし、お呼びなされましたは、

皆々　何の御用でござんすえ。

粂之　これまではいかい世話になりました、今宵限り此の家へは來ぬほどに、この金はお前方始め内外の者へ置き土産ぢや。（ト半分を孫三郎へ、半分をおよさへ渡す。）

よさ　はい〳〵、何のことやら、さつぱり譯が分かりませぬ。

りう　このお金は、もしお梅さん、どういたしませう。

孫三　はて、御祝儀ぢやとおつしやるほどに、お禮を申すがよい。

皆々　はい〳〵、有難うござります。

孫三　また、このお金はわたくしがお預り申します。

粂之　これで心がさつぱりした、今宵が古市の見をさめ、どれ歸りませう〳〵。（ト立つ。）

お梅　（留めて。）もし、お前は本當に歸らしやんすかいな。

粂之　歸り風が立つたもの、歸らいでかいの。（トお梅はハアと泣く。）

お橘　もうし粂さん、お梅さんがあのやうに泣かしやんすほどに、どうぞこゝにゐやしやんせいな。

ト袖に取りついて留める。粂之助思入あつて、

粂之　おゝお橘、しをらしう、ようく留めてたもつた。（トホロリとして氣を替へ、）そなたは賢い故、よい女郎衆になるであらう、これ、必ずお梅が眞似をしやんなよ。（トお梅はこれを聞いて、）

お梅　そんならお前は、それほどわたしに愛想が。

粂之　おゝ、盡きたによつて歸るのぢや。

お梅　こりやもうどうも、

孫三　はて、何事もわしに任せて。（トよろしく留める。）

粂之　これ、わしが腰の物を取つてたも。（ト言つても仲居皆々もじもじする。）早う持つて來やいの。

トきつといふ。

〽何か言葉に文の絲、目引き細引き立ちかねる、言ひたきことも女氣の、言はれぬ胸にさしこむ癪、

ト仲居皆々思入、およさ奥へ行き大小を持つて出る。この内お梅色々思入、孫三郎お蓮は思入にて宥める、粂之助は大小を取つて差す。おりう履物をなほす、粂之助門口へ出る。

孫三　左樣なれば粂之助樣。

粂之　隨分まめで。

仲居　お近いうちに。
粂之　いや、これが此の世の。
お梅
お蓮　え。
粂之　もうこの世では、逢はぬぞよ。
　〽心と口の裏表、兒手柏の茂り枝や、隱す涙に見送る涙、これが別れと夕闇を思ひなやみて
　出て行く。
　ト粂之助は花道へ行く。お梅は癪を押へつか／＼と門口へ來る。孫三郎、お蓮介抱する。粂之助心の
　殘る思入あつて氣を替へ、ついと花道へはひる。これにて太夫座を張物にて消し、お梅はむゝと癪の
　さしこむ思入。
お蓮　おゝ尤もでござんす、道理ぢやわいな／＼。
孫三　何でも樣子のありさうなこと、何事もわしに任せて。（ト言つてもお梅は癪のさしこむ思入）これは
　したり強い癪。こりや酒がよい／＼。
お蓮　もし、誰ぞ熱い酒を持つて來て下さんせ。
ます　あい／＼。

トおまず奥へはひり。直に銚子を持つて來る、お蓮茶碗へ注ぎお梅に飲ませる、孫三郎、皆々介抱する、お梅思入あつて、

お梅　皆さん、もうようござんすわいな。

せん　(奥より出來りて、)もし、奥の太々のお客がお梅さんを待兼ねて、今こゝへ來るというてゐるぞえ。

お蓮　今お梅さんは癪が起つてなれば、もうちつとの内、よいやうに言つておいて下さんせ。

せん　あい〳〵、そんならお前方も一緒に來て下さんせ。

皆々　あい〳〵。

お蓮　そんならお前を、頼んだぞえ。

せん　わたしが呑込んでゐるわいな。

トおせん始め仲居皆々奥へはひる。

お蓮　もし、熱いのを、もう一つ飲ましやんせ。(ト又注いでお梅に飲ませる。)

お梅　あゝこれで、はつきりとなつたわいな。

孫三　もし、及ばずながらわたしが呑込んでゐます。氣を丈夫に、持つておいでなさい。

お梅　嬉しうござんす、孫さんお前を頼むぞえ。

お蓮　必ずきな〳〵思はぬがようござんす。

お梅　とはいへどうも、(ト花道の方へ思入)あいた〻〻〻。(ト又さしこむ思入。)

孫三　え〻何のことだ、氣の弱い、もし酒でお押しなさいまし。

ト孫三郎お蓮、お梅を介抱する。この見得踊り地にて道具廻る。

(杉本屋の場)――本舞臺一面平舞臺、銀地松並木の模樣の襖、上下折廻し同じ襖、燭臺を照し、道具留ると、奥にて與九太夫の聲にて、

與九　さあ〳〵、あれへおいでなされませ。

ト下手より久七酒に醉つたる體にて、深助の肩へか〻り、おせん、皆々附き出來りて。

仲居<br>皆々　さあ〳〵、これにおいでなされませ。(ト久七上手に皆々よろしく住ひ。)

久七　これ與九太夫殿、お梅がゐると言はれた座敷はこれでござるか。

與九　今までたしか、これにゐた筈でござりました。これおせんさん、お梅さんは何處へ行つたのだ。

せん　お梅さんは最前から癪が起つて、今奥で薬を飲んでゐなさんすほどに、ちつと待つておいでなさんせいな。

深助　いやも女郎衆の癪の起るも久しいもの、さつきから旦那のお待兼ね、早くこゝへ連れ申して來なせえ〳〵。

せん　あい〳〵、そんならわたしが行て、お梅さんを連れて來ませう、どれ、呼んで來ようわいなあ。

ト踊り地にておせん奥へはひる。

久七　これ仲居ども、お梅が來るうち酒を持つて來い、肴も持つて來い。

皆々　はい〳〵、唯今直に持つてまゐりますわいな。

久七　待たるゝ身より待つ身とは、はてよく言つたものだなあ。

トやはり踊り地にて、奥よりおせんお梅を連れて出て、

せん　もし、お梅さんをお連れ申したぞえ。（トお梅よき所へ坐るを、奥九太夫見て、）

奥九　これはお梅の君、どうしたもの、最前ちよつと座敷へ來た切りすゞめとは、ちと御勿體ぢやな〳〵。

深助　それでお前さんのお宿ではない、お部屋はどこだ〳〵と、お客樣が捜しておいでなされました。

お梅　わたしや最前から癪が起つた故、今酒を飲んで氣を晴らしてゐたわいな。

深助　分かりました、來たきりすゞめだから、そこで酒を飲んでおいでなすつたらう、ねえもし、旦那樣。

久七　おゝお梅が酒を飲むとは頼もしい、おれも一緒に飲まう、酒を持つて來い〳〵。

深助　もし、旦那、お酒もよろしうござりますが、よつぽど召上つたれば先づお床として、それから又お酒になされませ。

久七　いや、さすがは與九太夫先生、近頃通りもの〳〵。有樣は早く寐たいのだ、さあ〳〵お梅の君、お梅の君。（トお梅へしなだれる。）

お梅　あい、寐ることは寐るけれど、きつう酒に醉つたほどに、お前先へ寐て待つてゐて下さんせ。

久七　おゝ、どうなと君の仰せ次第、さあ〳〵床を取れ〳〵。

皆々　あい〳〵。

ト仲居皆々して、疊みかけてある夜具を出し、上手へ床を取る。この內深助お梅の側へ來て、

深助　もしお梅さんえ、この旦那は櫛田では頗る富家でござります、大事になされば、隨分爲になりますから、その氣でお賴み申します。

ト小聲にていふ、仲居は床を取りしまひて、

せん　さあ旦那樣、お床へおいでなされませ。

久七　ひと寐入りして又酒にするから、與九太夫先生も番頭も來さつしやい。

深助　はい、御酒なれば直にまゐります、さあお休みなされませ。

久七　おゝ寐よう〳〵、これお梅の君、待つてゐるぞよ。

トこれより獨吟になり、おせん久七に羽織を脱がせ床の上へ連れて來る、久七懐より以前の脇差を出し、そつと蒲團の下へ隱して寐る、仲居搔卷をかけ屏風を引廻す、與九太夫お梅に久七のことを頼む思入、皆々捨ゼリフにて奥へはひる。お梅殘り後を見送る、これにて唄一ぱいに切れる。お梅花道の方を見て、

お梅　はあゝ。（ト泣かうとして口へ袖を當て、思入、又獨吟になり、あたりへ思入あつて、）もし粂之助さん、最前の愛想盡しは、よもや眞實ぢやござんすまい、定めて樣子のあること、ちつと辛抱してゐたわいな。これまでの親切に打つて替つた今宵の仕儀、もしや短刀が手に入つて御歸參なさんす邪魔になり、切れる心にならしやんしたか。そりや胴慾ぢや、胴慾ぢやわいな。何事も孫三さんが惡いやうにはして下さんすまい。ほんに今日は我身のことに取紛れ、まだ父さんへお目にかゝらなんだ、ちよつとこの間にさうぢや〳〵。

ト獨吟になりお梅双六盤を持ち來りよき所へおき、懐より扉表具を出し、この上へ載せ、香盆香爐を持來り、香を手向け思入あつて、

もうし父さん、別れてより三年越し、つひに一度問ひ音信をして下さんせぬからは、定めて死な

しやんしたでござんせうと、別れたその日を命日と、毎日手向ける回向の香華、それとも此の世にながらへて煩らうてゞもござんすか、生死の頼りをもし父さん、どうぞ聞かせて下さんせいなあ。

ト又凄き獨吟になり、お梅回向しながら睡氣さしたる思入にて、双六盤へ靠れて睡る。よきほどに立廻せし屏風菰垂の小屋に替り、後の襖打返しにて薮疊に替り、燭臺は仕掛にて道祖神の立石に替り、一つ鉦ドロ／＼のやうなる合方にて、よきところへ清兵衛の亡靈、前幕の裝の薄色と見ゆる打扮にてスッポンより出る。お梅心附き思はず清兵衛を見附け、

や、お前は父さんぢやござんせぬか。

ト又獨吟にてすかし見る、清兵衛顔を上げる。お梅側へ寄らうとして、寄られぬ思入

おゝやつぱり父さんぢや、もし逢ひたかつたに、よう來て下さんした、何で三年この方便りをして下さんせぬぞいなあ。（ト急いて言ふ、清兵衛思入あつて、）

清兵　その恨みは尤もなれど、便りをしたうても、今はこの世にない身の上。

お梅　何と言はしやんす、この世にない身の上とはえ。

清兵　いかなる前世の業因やら、悲しや邪慳の刄にかゝり、非業に此の世を去つたわいの。

お梅　え丶そりや又何れ、何國にて。

清兵　當國星合村の堤にて、非業の刃にかゝつたわいの。

お梅　さうして、殺した敵は何者。

清兵　敵といふは、今宵そなたの所へ來てゐる客、敵を討つて未來の迷ひを、どうぞ晴らしてたもいなう。

お梅　そんなら敵は今宵の客、その名は何と言ひますぞえ。

清兵　さあ、その名は。

ト言兼れて思入、獨吟の切れへドロ〳〵を冠せ、お梅もしこ袖を捉へようとするを清兵衛拂ふ。これにてお梅ハア丶と泣き、元の通りに睡る、清兵衛はその前返し板にて消える。心といふ字の燒酎火を上へ引上げ、舞臺一面元の道具に戻り、ドロ〳〵を打上げる。これにてお梅眼をさまし、あたりを見廻し思入。

お梅　そんなら今のは夢であつたか、む丶、(トぞつとしたる思入。)思ひがけない父さんの非業の最期、そんなら敵は今宵の客、色に事寄せ、お丶それ。

トお梅帶をしめ、きつと思入あつて立上り、そろ〳〵と屏風を明ける。久七たわいなく寐てゐる、お梅これを見て、

物腰恰好、それほどな悪い人とも見えねども、これが敵か。

ト この時蒲團の下に隠しある久七の一腰を見付けて手に取上げ、

や、座敷に法度の一腰がこゝにあるのも父さんが、これで討てとの指圖なるか、え、忝ない。

ト手を合せてをがむ、薄ドロ〳〵のやうな風の音にて、久七魘される思入。

久七 あゝ清兵衛許してくれ、金を盗んだも、またわれを殺したも、皆女房が勸め、おりや何も知らぬ、許してくれ、許してくれ、むゝゝゝ。(ト苦しき思入、これをお梅聞いて、)

お梅 疑ふにはあらねども、まこと敵に違ひなくば、今一度知らせてたべ。(ト手を合せる。)

久七 (又苦しみて、)あゝ清兵衛許してくれ、金を盗んだも、またわれを殺したも、皆女房が勸め、おりや何も知らぬ、許してくれ〳〵。(ト苦しき思入、お梅聞いて、)

お梅 扨こそ〳〵、再び違はぬ夢中の告、疑ひもなき父さんの敵、不便ながらも覺悟さつしやれ。

ト お梅一腰を抜き久七の胴をぐつと突く、久七苦しみ糊紅になり、お梅を跳ね返し兩人きつと見得、胡弓入り音頭にて兩人立廻り、トゞお梅危ふくなる。ドロ〳〵寐鳥にて屏風より清兵衛亡靈の打扮にて出で、久七の眼をふさぎ種々さいなむ。久七苦しみ、我手に白刃を腹へ突立てる。お梅その柄を捉へ久七を抉る。清兵衛指をさし笑ふ。ドロ〳〵にて清兵衛は仕掛にて欄間の菊の形の中へ消える、こ

れと一時に久七ばつたり倒れる、お梅止めを刺す、とばた／＼にて下手より孫三郎、お蓮手燭を持ち出る。お梅死骸へ掻卷をかぶせ、白刃を拭ひ鞘へをさめ、ほつと思入。

孫三　何もおどろくことはございませぬ、様子は一間で聞きました。

お蓮　そんなら、お前は父さんの敵を、

お梅　夢中の告に易々と、親の敵をまツこの通り、

孫三　あつぱれ孝心お梅どの、最前粂之助様のこの退状、開いて見ればこの書置。（と出す。）

お梅　なに、書置とはえ。

お蓮　ちつとも早く。

お梅　孫さん、お前どうぞ讀んで下さんせ。

トお蓮短檠を引寄せる、孫三郎書置を開き、

孫三　なに／＼、「盡きぬ名殘りに書殘し申し候、これまでは不思議の縁にて夫婦の契約いたし、三年この方我等親子浪々の身の上を、朝夕の貢ぎの上紋日物日の入用まで皆そもじの親切、禮は筆紙に述べ難く候、豫々話し候通り、深綠の短刀の行方今もつて知れず、日延の日限も切れ候間、明日は親子諸共切腹いたし、相果て申候」、え、、、、、。（トびつくり思入、お蓮取つて、）

お蓮「我等死後にては、必ず〳〵命まつたう、何方にてもよき縁を組まれ、思ひ出し候日も候はゞ唯一遍の回向を、草葉の蔭より樂しみをり申候、申し殘し度きこと山々に候へ共、人目をはゞかり、匆々申殘し候。」

お梅　えゝ、そんなら粂之助樣には、御切腹のお覺悟故最前の愛想盡し、わたしとても親の敵は討つたれども、夢と寐言の證據故、とても生らへゐられぬ身の上、この世の思ひ出粂之助さんにたゞ一目。

孫三　窃にこの家を拔けいでゝ、とてものことに敵の片割、その女房を手にかけた其の上にて、

お蓮　死なでかなはぬ事ならば、粂之助さんと、共に死ぬるがお前の本望。

お梅　嬉しうござんす、とはいふものゝ年季ある此の身、親方さんへ言譯が。

ト此の時彦十郎出かゝりゐて、

彦十　いや、その氣遣ひには及ばぬ、孫三郎樣の親御孫右衞門樣よりお人がまゐり、お梅とお蓮が身請が濟み、卽ち二人が年季證文。（ト二通の證文を出す。）

孫三　すりや親父樣、孫右衞門樣のお情にて、

お蓮　身儘になつた二人が身の上。

お梅　本望遂げたその上で、粂之助さまと、あの世で女夫。

お蓮　わたし等二人は、
孫三　此の世で女夫。（トこの時喜兵衛聞いてゐて、）
喜兵　身請が濟めば、今から喜兵衛は樂隱居。（ト後へ郷兵衛出て、）
郷兵　これ喜兵衛、それぢやあ身共が約束は、
喜兵　おゝ、娘が出世に寐返りだ。
郷兵　（久七の死骸を見て、）や、こりや久七を。
　ト言ひかけるを孫三郎郷兵衛を引附け、口を押へる。お梅身ごしらへして一腰を持ち、下手へ行く。
孫三　こゝ構はずと、
彦十　ちつとも早く。
お梅　そんなら、このまゝ。
郷兵　うぬ、人殺し。
　ト立ちかゝるを喜兵衛、彦十郎引きすゑる。お梅花道へ行きかける、孫三郎久七の羽織を取つて、
孫三　人目を忍ぶは、
お蓮　男姿に。

ト羽織を投ろ、お梅羽織を着る。郷兵衛起きようとするを兩人押へる。これを木の頭

お梅　おゝさうぢや。

ト早めたる踊り地にてお梅花道へはひる。舞臺皆々ひつぱりにてよろしく、

ト幕引附けると、踊り地にてつなぎ、引返す。

幕

# 八幕目大詰

## 古市裏手敵討の場
## 二見ヶ浦本望の場

【役名――番太幸八、井筒粂之助、輪達郷兵衛、酒屋の若い者善太、唐崎松兵衛、堅田雁八、瀬田闢藏、粟津清六、久七女房お瀧、淸兵衛娘お梅等。】

（古市裏手の場）――本舞臺三間後黑幕、前通り一面の藪疊、松の立木、總て古市裏手小烏浦の體、禪の勤めにて幕明く。と上下より町人〇□　侍へ◎仕出しにて二人づゝ出で來り、

〇　もし〳〵お侍樣、あなたは古市の方からおいでなされましたか。

□　おれは今古市の戻りがけだ。

△　今夜古市に、騷動があつたさうぢやござりませぬか。
□　それは杉本屋の内のお梅といふ女郎が、櫛田の酒屋久七といふ客を斬つて駈落をしたのだ。
○　そいつア、とんだ騷動でござりました、いつたいどういふわけか御存じござりませぬか。
◎　詳しいことは知らないが、何だか杉本屋へ幽靈が出たといふ話だ。
△　はて、幽靈が出るなら柳屋といひさうなものだ、杉本屋ならば天狗が出さうなものだ。
◎　なるほど、尤もだ、そして油屋ならば何が出る。
△　油屋ならば天ぷらか、五右衞門の幽靈。
○　又備前屋ならば、何が出ようの。
△　はて、備前屋ならば、布袋が出る。
○　はゝゝゝ。（ト笑ふ。）
△　これ〳〵貴樣、何故そんなに笑ふか。
○　をかしくつてほいへえられねえ。
三人　何を言ふのだ。（トこの時雨車になる。）
△　あ、雨がぽろついて來た、何にしろ古市へ行つて見よう。

◎ その斬つた女郎を追ひかけるといつて、古市は大騷ぎだ。

○ これは大きに有難うござります。

□ こいつァ澤山降らにやあいゝが。

ト仕出しは左右へ別れてはひる。佃のやうなる端唄になり花道より千貫の松、二見の岩駕籠舁にて。四つ手駕籠をかつぎ、これに久七女房お瀧乘つてゐる。

お瀧 こう〳〵、おいらあ何だか胸騷ぎがするから、早く古市までやつてくんなよ。

兩人 あい、合點でござります。

ト舞臺へ出る。この内上手より善太走り出來りて、

善太 折角いゝ年增を買つて貰つて、たんまり寐てゐると、あの騷動、大變だ〳〵。

ト下手へ行きかけるを、お瀧駕籠より善太を見附けて、

お瀧 おい〳〵、そこへ行くのは善太ぢやあねえか。

善太 (立戻り見て、)おや、お前はお上さん、駕籠へ乘つて何處へおいでなさる。

お瀧 おらあ古市へ迎ひに行くのよ。

善太 いや、迎ひどころぢやあねえ、古市で親方が斬られましたよ。

お瀧　え、そんなら噂に違ひなく、そりや眞實のことか。

兩人　お上さん、とんだことだね。

トばた〳〵にて、上手より郷兵衛走り出來り、駕籠に突きあたり、

郷兵　人殺し〳〵。（ト大きく言ふ、善太見て、）

善太　誰だと思つたらば郷兵衛さんか、びつくりしたよ。

郷兵　おゝ、手前は善太か、どうした〳〵。（ト駕籠の中を見て、）や、駕籠の中のはお瀧ぢやねえか。

お瀧　郷兵衛さんか、古市で久七さんが斬られたといふが、眞實かえ。

郷兵　眞實どころか、杉本のお梅といふ女子が、親の敵だといつて久七を殺して逃げたのだ。

善太　それで今、お前のところへ知せに行くところ。

お瀧　え、そんならお梅とやらが、久七さんを親の敵だと殺して、逃げたとえ。

郷兵　その上これから、久七の女房を捜すといつたさうだ、身共もかゝり合ひになつてはならぬから、逃げて來たのだ。

お瀧　お前も頼もしくねえ、久七さんが殺されたら、知らねえ顔をすることはないぢやねえか、そんならそのお梅といふ女が、あの清兵衛の娘だの。

松　それで久七さんを親の敵だといつて、殺した上で、

岩　お前の行方を捜すと聞いちやあ、油斷は出來ませんぜ。

郷兵　合點の行かねえは、久七の脇差で殺したさうだが、手の利かねえ女子にしては、よくそんなに斬れたことだ。

善太　わたしも怖々覗いて見たが、差してをつたのは、此間お前が預けた村正の刀だわな。

郷兵　なに、久七を殺して、お梅が持つてゐるのが村正の刀だ。

お瀧　さうさ。

郷兵　こいつアかうしてはゐられねえ。（ト行かうとするを善太留めて、）

善太　これ郷兵衞さん何處へ行く、お上さんの加勢をしてくんなせえな。

郷兵　えゝ、それどこぢやないわえ。（ト振切り、逸散に花道へはひる。）

お瀧　呆れた不人情な人だ。これ善太、これからおらあお梅の行方を捜すから、手前は代官所へ駈込んで、この始末を訴へろ。

善太　あい、そんならわつちあ代官所へ行くから、お前父殺されねえやうにしなさいよ。

松　お上さんにやあ、おいら達がついてゐる。

岩　貴樣は早く代官所へ行きな。
善太　合點だ、大變な事ができたなあ。（ト逸散に花道へはひる。）
お瀧　こいつァとんだぐれはまになつて來た、此の上は久七さんの敵のお梅、行方を搜して村正の刀を
　こつちへ取返さにやあならねえから、加勢を賴むよ。
松　そりや世話になる親方のこと。
岩　お前の加勢をしますから、
兩人　氣を丈夫に持つておいでなせえ。
お瀧　そんならこれから裏道傳ひ、逃げるといつても女の足、遠くは行くまい、急いでゝんな。
兩人　合點でござります。
　ト唄になり兩人駕籠を向けなほし、下の方へ行きかける。この時下手の藪を押し分け、お梅手拭を冠り、つかつかと出て駕籠の先を留めて、
お梅　この駕籠ちつと待つて下さんせ。（トこれにて兩人見て、）
松　おい、誰だか知らねえが、用があつて急ぐ駕籠、
岩　邪魔をせずと通してくんなせえ。

お梅　さうでもあらうが此の駕籠は、待つて貰はにやならぬわいな。

お瀧　(これを聞き、)どこの人だか知らねえが、急ぎの駕籠を留めるのは、何ぞ用でもあるのかえ。

お梅　あい、お前にちつと、聞きたいことがござんすほどに、お慮外ながらちよつとこゝへ、下りて下さんせいな。(トこれを聞き、お瀧これがお梅かといふ思入。)

松　何だ、下ろせ、見りやあ胡散な裝素振。

兩人　もしや、これが、

お瀧　あこれ、ちよつとおろしてくんな。

トお瀧兩人へ眼で思入。兩人呑込み駕籠を下ろし、岩駕籠に附けたる下駄をなほす、お瀧これを穿いて出で、

さうして、聞きてえことゝは、そりや何を。

お梅　さあ、それは。

お瀧　小めんどうな、きりきり言ひねえな。

トお瀧お梅の顏を見ようと手拭へ手をかける。お梅その手を拂ひ、手拭、羽織を取り兩人氣味合の思入、月出て後の黑幕を切つて落すと、古市灯入りの遠見。お瀧空を見る、松、岩の兩人も見て、

松
岩　今雨がばらついたが、また月夜になつた。
お瀧　(お梅を見て、)見りやあきれいな姐さんだが、お前はどこの者だ。
お梅　わたしや古、いえ、つい、近所の者でござんす。
お瀧　お前聞きてえことがあるといふが、わつちァ急ぐから、用があるなら早く言ひなせえ。
お梅　あい、聞きたいことは外のことでもござんせぬ、櫛田の酒屋久七さんの家は、どつちの方でござんすえ。
お瀧　なんだ、久七さんの家が聞きたいとは、そりや又何の用で、
お梅　その久七さんのお上さんに、ちつと逢ひたいことがある故、
お瀧　(これを聞き、扨はと思入)だまりやがれ、どぢ女め、扨はわれがお梅だな。
お梅　わたしをお梅と知つたるからは、たしかにお前は久七どの、、
お瀧　なるほど女房さ。おらァこんたに逢ひたかつた。
お梅　そりや又何で、
お瀧　こんたがそこに持つてゐる、深緣とかいふ其の刀、おれが方へ返してくんな。
お梅　(これを聞きびつくりして、)え、そんならこの一腰が、粂之助さまが日頃尋ぬる、村正であつたか、

えゝゝゝ。

お瀧　それをこつちへ。(ト手をかけるを振拂ひて、)

お梅　さう聞くからは疑ひない、夢中の告に父さんの、敵と知れた久七どの、その荷擔人の女房のこなたに、こゝで逢うたは父さんの導き。さあ、尋常に覺悟しや。

お瀧　いゝや知らねえ、覺えはねえ、何の恨みで久七さんを、うぬが殺して村正まで、取るとは慾の深緣、その短刀をこつちへ渡し、連添ふ夫の敵のお梅、きり〳〵こゝでくたばつてしまへ。

お梅　やあ未練な言葉、親の敵と名乘つてしまや。

お瀧　いゝや、名乘る覺えはねえ。(トこの内後の藪より、番太の幸八六尺棒を持出で、)

幸八　いや、覺えないとは言はさねえ、その證人はこゝにゐる。(ト前へ出る、お瀧見て、)

お瀧　こんたは番太の幸八どん、證人とはそりや何を。

幸八　とぼけまいお瀧どの、此間星合の堤にて、こなたは夫久七と言合せ、病上りの清兵衞殿を後の難儀と二人して、殺したところへ行合せ、捉へる手足を振切つて、逃げるはずみに打ちかけた、この庖刀。(ト手拭に卷きて腰に差したる庖刀を出して、)入山形に久の字の、べつたり捺した燒印は、なんと覺えがあらうがな。

お瀧　さ、そりや。

お梅　幸八殿の言葉の通り、星合村の堤にて非業の最期と夢の告、久七どのが夢中にて、金を取つたも殺したも、皆女房が勧め故と、自身の白狀それ故に、易々討つた父さんの敵。

幸八　割符の合つた星合堤、目ぐしの拔けぬ庖刀は脫れぬ證據お瀧どの、この幸八が女房は淸兵衞どのの妹なれば、女房が爲めにも仇敵。

お梅　父さんの敵。

幸八　兄の仇。

お梅　さあ、尋常に、

兩人　覺悟しや。（トきつと言ふ。お瀧口惜しき思入にて、）

お瀧　えゝ、いめえましい、脫れるだけはと思つたに、死靈の業で久七どの寐言でしやべつた夫婦が惡事、いつぞや觀音寺前の酒店で、馬鹿正直な淸兵衞が持つてゐた太々の講金五十兩、ひん盜んだを氣取られたれば、生しておいちやあ寐覺の障り、久七どのに手傳はせ、ぐつすりやつた星合のつゝむとすれどあらはれる、皐月の空の月代も傾く運は古市の、後ろ繩手の小鳥浦、恨みは五分々々亭主の敵、不便ながらも返り討ち、どいつもこいつも覺悟しろ。

お梅　さういふ此方を、

お瀧　たゝんでしまひな。

兩人　合點だ。

ト早めたる合方にて松、岩の二人息杖にてお梅へうつてかゝる、お梅一腰を拔き立廻り、幸八支へる。お梅お瀧へ突いてかゝる、お瀧駕籠に附けたる番傘を取つて立廻り、よき見得にて太鼓入り賑やかなる唄になり、駕籠をかいゝせによろしく立廻る。幸八は六尺棒にて駕籠舁兩人を打ち倒す、とこれにて兩人は下の方へ逃げてはひる。この内お瀧はお梅の一腰を取り、お梅危ふくなる、幸八六尺棒にて割つて入り、お瀧と立廻り、とゞお瀧の短刀をお梅取つてお瀧の肩先を一刀切る。これにて又三人立廻りあつて、お梅短刀をお瀧の脇腹へ突き込む。お瀧苦しみ倒れる。

お梅　父さんの敵、思ひ知つたか。（ト乘つかゝり止めを刺す。）

幸八　あつぱれ孝心、お梅どの、お手柄々々。

お梅　これといふのもお前の助太刀、嬉しうござんす。（ト血を拭ひ鞘へをさめ、）この村正の短刀を、今宵の内に手渡しすれば、お命助かる粂之助さん。

幸八　さういふことなら、ちつとも早く、わしが送つて、

お梅　ちつとも早く。（トこの時後に非人のもつさう八窺ひゐて、）

八　人殺し。（トお梅にかゝる。幸八引廻して、ぽんと投げる。）

お梅　幸八どの。

幸八　さあ、行きませう。

ト三重時の鐘にて兩人上手へはひる。これにて遠見の前へ黒幕を振落し、前の數疊を打返して二段の附手摺と替り、上手へ茅の茂みを押出し、二見ヶ浦磯端の場となる。浪の音になり、以前の郷兵衛、後より唐崎松兵衛、堅田雁八、瀬田關藏、粟津清六等頬冠りにて出來りて、

郷兵　そんなら道々聞く通り、お手前達は佐々木の家を追放されてから、この伊勢路へ來てゐたのか。

松兵　いつぞや屋敷で玄伯老と、企んだ仕事のもくが割れ、ぽんでんごくの我々四人、

雁八　いつの間にかお菊めが裏返り、武士たる者の面體を畜生に譬へ、狐にされたこの雁八。

關藏　修理之助めが繪具筆で、この色男の作藏を狸にぬられた口をしさ。

清六　にやんたる憂き目にあはび貝、猫と見立のこの清六。

松兵　犬にされたるこの松兵衛、郷兵衛どのがこの伊勢に、ゐられると知つたなら、

雁八　不自由な目をしないで、無心に行けばよかつたもの。

關藏　見らる、通りつまらぬ我々。
清六　何ぞ金になることでもあらば、どうぞ半口。
四人　乘せて下さい。
鄕兵　それは幸ひなことがある、身共が盗んだ村正の刀、浪々の身に差支へ、久七といふものに十兩の質に措けたところ、廻り廻つて古市の女郎お梅といふ奴の手にはひつて持つてゐるが、今噂を聞けば番太の幸八といふ奴が附いてゐるとのことだ、これからお梅の行方を尋ねて、その刀を早く取戻さぬと、もし粂之助の手へはひれば身共が身の上、貴樣達加勢してくれぬか。
松兵　そりやお加勢して働くことは働くが、
雁八　その替りには我々が、
關藏　骨折代をずつしりと、
清六　くれる氣ならば加勢しよう。
鄕兵　早速の得心忝い、その村正の刀は百兩になる代物、賣しろなして金を山分け。
松兵　面白い、金にさへなることならば、
雁八　隨分ともに、

四人　働きませう。

郷兵　必ずともに頼んだぞよ。

四人　心得ました、

ト浪の音になり、上手の茅原を押分け、粂之助大小頬冠りにて出で、

粂之　様子は残らず小蔭で聞いた。扨は村正の短刀を、盗み取つたは輪達郷兵衛、おのれが仕業であつたよな。（ト前へ出る。郷兵衛見て、）

郷兵　さう言ふ汝は井筒粂之助、扨は様子を聞いたのだな。

粂之　刀の盗賊輪達郷兵衛、さあ、尋常に覺悟なせ。

郷兵　それ、粂之助からたゝんでしまへ。

五人　合點だ。

ト浪の音になり、四人抜いて切つてかゝる。粂之助抜合せて立廻り、よき見得にて、後の黒幕を切つて落すと、奥深に二見ケ浦の遠見となり、日の出少し出てゐる。三味線の入りたる大拍子になり、粂之助皆々と立廻りよろしくあつて、とゞ四人を切倒し、又郷兵衛切つてかゝるを粂之助同じく切下げる。日段々に高く上る。とばた／＼にて上手より お梅、幸八出て來り粂之助を見て、

お梅　や、お前は粂之助さん、御無事でおいでなさんしたか。

粂之　そなたはお梅、どうしてこゝへ。

お梅　お前の行方を所々方々、もし村正の短刀が手に入りました。（ト件の一腰を出す、粂之助取り改め見て、）

粂之　やゝ、疑ひもなき村正の短刀、えゝ忝ない。（ト幸八を見て、）見なれぬこなたは。

幸八　お梅どのゝ縁につながる幸八と申す者、その短刀がお手に入れば、

粂之　再び歸參の粂之助。

お梅　これより直樣、

幸八　目出度い〳〵。（ト黑四天の捕手四人ばら〳〵と出て、）

捕人　人殺し、動くな。（ト取卷く。）

幸八　先づ、今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

正直清兵衛（終り）

御出入大小名

# 金銀輝奪鎌倉山の星月夜

貞操を立る法然尼が比翼縫善悪を分る彌十郎が上下捌

其御得意より御註文に曾我模樣の蝶衛古き趣向を裏返し追掛染の新狂言簇を掛て春の夜の闇の黑地に新助がお元を連てどんぶりと氣も早染の心中を助けられたる浪人故後の難儀と辻番の親仁が憂目に藍海松茶さめし色氣の二つ髷後家のお高と與之助が仇な浮名も忽ちに洗へば落る昌平紋朧に殘る月の輪のお熊婆も之迄の虎竹衒に染返し元は下地の善心に名乘り出たる稻葉小僧義を立縞も橫縞に又繩拔の雪の捕物消えても消えぬ不義の科高木が突出す槍梅は淺黃にあらぬ戀中と悟つて落す若草伊之助浮ぶ浮世に幸藏も今は日蔭のお尋ね者時節を松花松山が乾かぬ袖の地獄千鬼の女房に鬼神とも友染入の曠小袖世界も三所五つ所綴り合せし紋切形色畫模樣も橘の榮

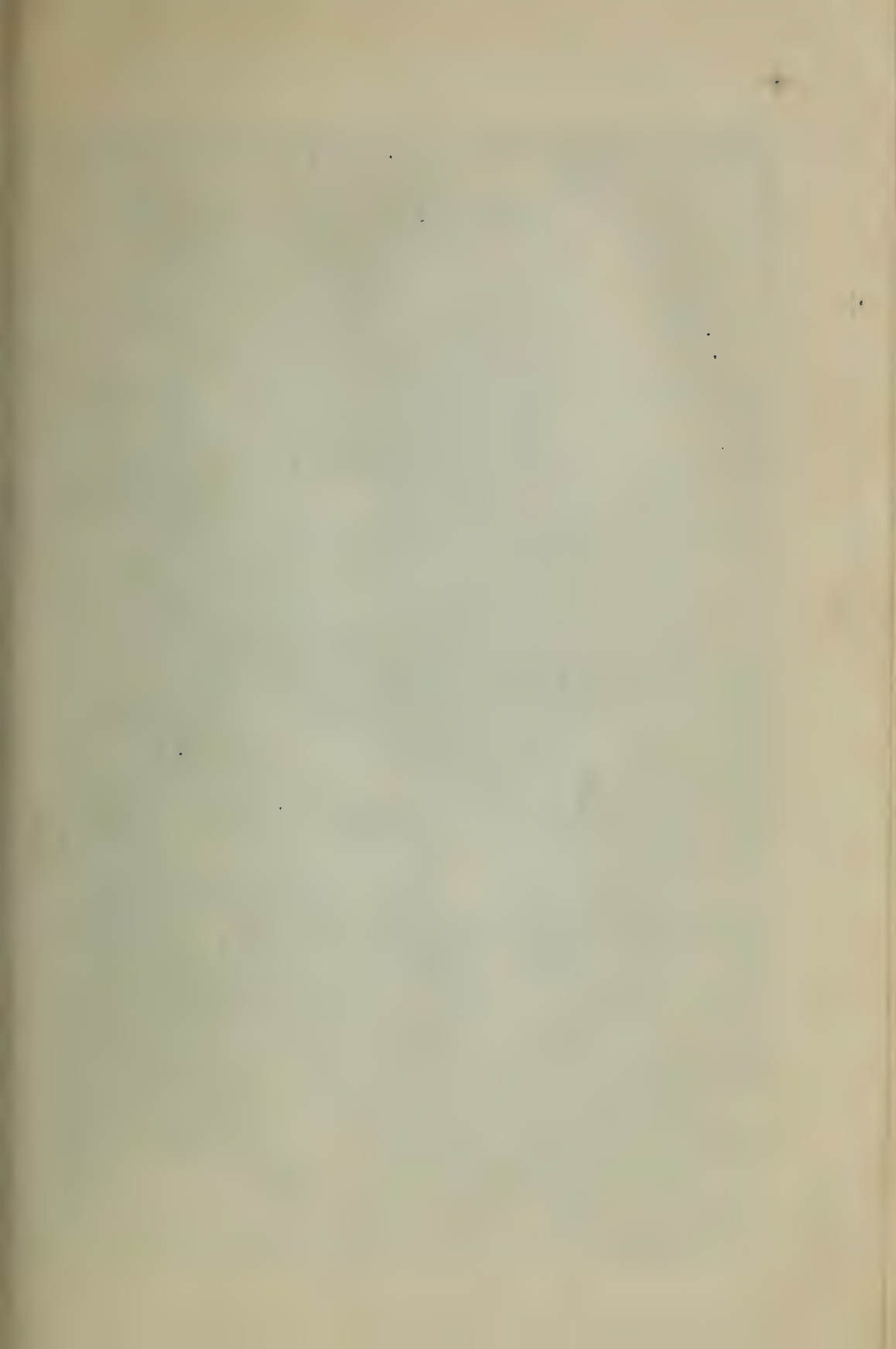
# 嵐小紋東君新形

「鼠小僧」は安政四年正月、作者四十二歳の時市村座に書卸されたもので、世話物中での代表作と言つてよい。盗賊鼠小僧を稻葉幸藏の中に暗々に諷してある所、又稻毛の辻番に於ける親子の對面、易者となつた幸藏の身邊に纒綿する情義の葛藤、悲劇等は、作者の手腕と小團次の藝との渾融によつて、その春の江戸中の人氣を集めたといふほどの大當りを取り、正月から三月へかけて九十日餘も打續けたと稱されてゐる。尚、龜藏のお熊婆が無類の出來であつたこと、後の五世菊五郎が十四歳の羽左衛門として蜆賣り三吉に扮し小團次を驚嘆せしめたことや、同じく後の九世團十郎の權十郎が松葉屋の亭主になつて、當込みのセリフを言つてゐる事などは、話題として殘されてゐる。想ふに「河竹の作を小團次の舞臺によりて見よ」と取沙汰し、「似顏豐國役者は小團次ハイヨ、當時作者はのう皆さん川竹、ひいきはたいそ〳〵」といふハイヨ節の替唄もこの頃にできたのではなかつたらうか。

書卸しの時の役割は市川小團次（盗賊稻葉幸藏實は與惣兵衛悴與吉）、坂東龜藏（早瀬彌十郎、幸藏養母お熊）、尾上菊五郎（後家お高、松葉屋の松山實は幸藏女房お松）、坂東彦三郎（刀屋新助）、河原崎權十郎（與惣兵衛悴與之助、松葉屋息子文三、船頭のつきり長吉）、市村羽左衛門（おもと弟いけどう三吉）、淺尾與六（辻番人與惣兵衛）、中村歌女之丞（藝者おもと）中村梅花（主膳娘おみつ）、坂東村右衛門（平岡權内、乳母お太、慾山撿校）市川米五郎（惡漢肚胸熊、幸藏子分長太）、中村鴻藏（お熊子分赤馬三次）、坂東又太郎（刀屋新兵衛、若黨笹平次）、市川小半次（醫者山井養仙）、嵐吉六（若荣屋の丁稚ぽんた、新造あしかの）等。

挿繪にしたのは、龜戸豐國筆の錦繪及び五代目菊五郎の鼠小僧竝に大正五年二月市村座所演の時の六代目菊五郎の鼠小僧及び現尾上松助のお熊婆の寫眞である。

大正十三年八月　　　編者誌す

安政四巳年正月大吉日

鼠小紋東君新形（鼠小僧――五幕）

# 序幕

鶴ヶ岡石坂前の場
雪の下若菜屋の場
笹目ヶ谷裏手の場

〔役名――幸藏養母お熊、刀屋新助、三浦兵部之助、與惣兵衞悴與之助、平岡權內、若菜屋番頭佐五八、石垣伴作、高木四郞〻郞、駒田久六、村井傳藏。若菜屋後家お高、藝者お元等。〕

（鶴ヶ岡八幡の場）――本舞臺三間の間、正面四尺ほどの石垣、この上に石の玉垣、平舞臺に石燈籠、上下は丸に三つ引の紋附きし幕を張り、所々に梅の立木、眞中に長床几二脚。總て鶴ヶ岡八幡境內の體。こゝに平岡權內、駒田久六、村井傳藏等立つてゐる。この見得大拍子にて幕明く。

久六　今日御前は田野にて、小鳥狩の御催し、卽ち我々兩人はお先供を仰せ附けられ、餌蒔その外萬端の手配り申附けてござる。

傳藏　春とはいへど餘寒にて、道路も凍る寒さであつたが、午より空も晴渡りいとも長閑な時候となり、

嘸御前にも御滿足。
平岡　かやう申せば自慢のやうぢやが、かく申す平岡權內は御近習役と申しながら、それ權內やれ權內と、何事も拙者めへ直々の仰せ故、片時お側を離れられぬが、お書食の手配りが如何と存じ、同役の高木氏へ賴みおき、これへ駈拔けてまゐつてござる。
久六　その儀はお案じなされまするな、先刻鶴ヶ岡の別當所へ申附けおきましてござりまする。
傳藏　未だ刻限に間もござれば、今を盛りの梅を見ながら、これにて休息いたしをります。
平岡　如何にも盛りのこの梅花、拙者もこれにて休息いたさう。さあ、御兩所も是へおかけなされい。
二人　然らば御免下され。（ト三人床几に腰をかける。）
久六　平岡氏に承りたいは、豫て貴殿が御執心の、
傳藏　雪の下の名代の藝者、お元はお手に入りましたかな。
平岡　先達より種々樣々手を盡して口說けども、兎や角と言ひぬけて、今に色よい返事をいたさぬ
久六　その御返事を致さぬのは、彼れには深い情人がござる。御存じかは知らねども、而もお出入りの拵屋、刀屋新兵衛が忰新助めが深い仲。
傳藏　それにまた承れば、お元が母は新助の乳母であつたと申すこと、貴殿がいくらこがれても、同

うへ札が落ちさうでござる。

平岡　疾より噂に聞いてゐる故、叶はぬ戀の遺趣ばらし、新助めに難儀をかけ、腹癒せいたす所存でござる。

久六　戀の敵の新助に、難儀をかける御所存は。

平岡　その手段は、かやうでござる。（ト兩人に囁く。兩人頷きて、）

久六　さすがは智者の平岡氏。

傳藏　あつぱれ感心。

兩人　いたしてござる。

ト鳥。通り神樂になり、花道よりお元藝者餘所行好みの打扮、嘉助箱廻しの裝にて出來り、

嘉助　もしお元さん、そんなにむやみに急がずと、靜においでなさいまし。

お元　さあ、靜に歩いてゐられぬのは、新助さんが鶴ケ岡へ、お出入屋敷の御用があつておいでなさるといふこと故、お目にかゝつて話したい大事の用がござんすから、それで私や急ぐのぢやわいな。

嘉助　こいつあ何か、ちん〳〵の筋があると見えますね。

お元　そんな浮いたことではない。（ト舞臺へ來る、平岡お元を見て、）

平岡　いや、思ひがけない、そちはお元。
お元　さうおつしやるは、平岡さん。
嘉助　見れば野掛の御裝束で、御遊山でござりますか。
平岡　今日は殿のお供にて、小鳥狩にまゐつたが、そち達は初寅故毘沙門へ參詣か。
嘉助　いえ、毘沙門樣ではござりませぬ、八幡樣へまゐりました。
久六　扨はお元の君は八幡樣が信心かな。
お元　八幡樣より私やちつと、尋ぬる人がござんして。
平岡　むゝ、おぬしが尋ぬる人といふは、刀屋の新助か。
お元　え。
平岡　手前が呼びにやつたれば、今にまゐるであらうから、こゝで一服喫んだがよい。
お元　有難うござんすが、家を急いで出た故に、煙草入を忘れて來ました。
平岡　煙草は身共が持つてゐる、ちつとまづいが薩摩國府、どれ一服つけてやらうか。（ト秩落しの煙草入と煙草を出し煙草をつぎ、擂火打にて火をうつし、）さあ、おぬしが喫んだその後を、手前が直に喫みたいのだ。（ト煙管を出す。）

お元　私や國府は嫌ひでござんす。（ト煙管を拂ひ除け、上手へはひろ。）
久六　いかに國府が嫌ひだとて、
傳藏　あまりといへば、失敬千萬。
嘉助　旦那方のお腹立は御尤もでござりますが、ちつとむしやくしやする事が、ござりましての今の失禮、御免なされて下さりませ。（ト三人にあやまり、そこ／＼に上手へはひろ。）
久六　これまで隨分貴殿から、祝儀も貰つてをりますに、
傳藏　あまりといへば愛想のない、にツくい奴でござりまする。
平岡　いくらぴんしやん刎ねようとも、金轡で座敷を引かせ、今に手活の花となし、新助めに泡を吹かせてやらうわい。
傳藏　（向うを見て、）いや、噂をすれば影とやら、
久六　あれ／＼、向うへ新助めが、
平岡　折よくこゝへ參りしは、身共が戀のかなふしるし。
久六　貴殿が手段のお手際を、
傳藏　これにて見物いたすでござる。

ト花道より刀屋新助、丁稚の三太に短刀を包みし風呂敷を背負はせて出來り、

新助　これは〳〵平岡樣には、嘸お待兼でござりましたらう。

平岡　いや〳〵、身共も今日は殿のお供で、唯今これへ御兩所と、一緒にまゐつたところでござる。して、豫々頼みおきし菊一文字の短刀を、今日持參いたしたか。

新助　へい、持參いたしてござりまする。三太、風呂敷包みをこれへ。

三太　かしこまりました。

ト風呂敷包みを出す。新助短刀を出し渡す。平岡短刀を拔きよく〳〵見て、

平岡　疑ひもなき菊一文字、燒刄金色勝れし業物、御兩所もよい折柄、お目を留めて御覽なされい。

久六　菊一文字と申す名は、豫々聞いてをりましたが、見るは今日初めてゞござる。

傳藏　世にも稀なる業物故、貴殿がお求めなされまするか。

平岡　これは身共の緣家の者が、豫々望みをつたる短刀、今日刀屋が持參いたさば暫時借りおき、見せてくれとくれ〴〵身共へ頼みおき、高金の品なればこれを刀屋へ預けくれと、金子を百兩預かつてまゐつた。（ト懷中より小紋の胴卷を出し、）金子は混りで氣の毒だが、よく改めて受取りやれ。

新助　お出入屋敷のことなれば、その金子には及びませぬ。

平岡　然し、先方より參りし金子、（ト胴卷より金包を出し、）卽ち小判で五十兩、一分銀で二十五兩、二朱金で二十五兩、都合〆て員數は百兩、是非ともこれを預かつてくりやれ。

新助　左樣なれば、お預かり申しませう。

平岡　後刻これへ緣者の者が、身共を尋ねまゐる約束、暫時社內で待つてゐてくりやれ。

新助　畏りましてござりまする。（ト金を懷へ入れる。）

平岡　先刻こゝへ藝者のお元が、そちを尋ねて參りをれば、何所ぞの茶屋でしつぽりと、

新助　え、

平岡　いや、しつかりと預かり申した。

新助　左樣なれば平岡樣。

平岡　何れ、後ほど。

新助　お目にかゝるでござりまする

ト新助、三太は上手へはひる。この時花道の揚幕にて、三浦兵部之介の聲にて、「憎き匹夫を引立てまゐれ」といふに答へて、「畏つてござります」と二人の者の聲する。

平岡　最早御前の御入りでござるぞ。

二人　はッ。

ト三人下にゐる。と花道より三浦兵部之介、殿の打扮にて出來り、後より二人の中間に引立てられて與惣兵衞倅與之助、木綿肩入の半纏にて出來り、續いて中間四人出來る。

平岡　これは〳〵御前には、思ひのほかお早きおいで。してこれへお引きなされし、これなる下賤の若衆めは、いかゞいたせし者でござりまする。

三浦　唯今これへまゐる道、折よくも六浦の田圃に雁が一羽をりし故、予が射留めんとなしたるを、それなる若衆が棒を持つて、追ひしばかりに射損じて恥辱を取つたり、憎き奴故引立てまゐり、予が存分にいたす所存。

平岡　それは憎いわッぱしめ、何故妨げいたしたか。

二人　そのまゝにはいたされぬ。

傳藏　打ちすゑて詮議いたせ。

中間　心得ました。（ト二人の中間與之助を打ちすゑる。）

高木　（揚幕の内にて、）何れも待つた。

平岡　なに、待てとは。

ト高木四郎次郎侍裝にて出來るを平岡見て、

貴殿は、高木四郎次郎殿。

久六　何故、お留めなされたのだ。

高木　見れば年端も行かぬ者、察するところ御場先をも辨へず、田にをりし雁を追ひしと存ぜられます。

こりや、そな者大方さうであらうな。

三浦　四郎次郎控へい。

高木　はツ。

三浦　その方は彼を庇ひ執成を申せども、予が面前も憚らず供先を横切つて、狙ひし雁を追ひちらし、

無禮をなせし憎い奴。

平岡　何故御前の妨げいたした。仔細があらば、

三人　とく〳〵申せ。（トきつといふ。與之助思入あつて、）

與之　唯今雁を殿樣がお狙ひなされましたのを、私が追ひましたればそのお腹立は御尤も、雁を不便に存じまして、追ひ散らしましたのは、田圃にをりしはまさしく親鳥、定めて子鳥がござりませう、親が命を失うたならその悲しみはいかばかり、と存じまするは私も六十に餘る親のある身、假令

鳥類畜類でも、親子の仲の恩愛は別に變りはござりますまい。頼みに思ふ我親が今矢にかゝり死にましたら、生きてゐる氣はござりませぬ。それを思うて雁を追ひしは私めが不調法、打つてお腹が癒るならば、どのやうにもお打ちなされて、お許しなされて下さりませ。

久六　おゝよい覺悟だ、鳥に替つて打てといふなら、ぶつて〳〵ぶちさいなみ、

傳藏　それでお詫を願うてやらう。先づ手始めに身共から、

（ト小鳥を結附けし竹を取つてさん〳〵に打ちすゑる。與之助ぢつと怺へてゐる。）

三浦　やあ、手ぬるい〳〵、打つた位では腹が癒ぬ。雁の替りに討捨てい。

平岡　はッ、畏つてござりまする。（ト刀を持つて立ちかゝるを、高木留めて、）

高木　いや、お待ちなされい權内殿、假令この者粗相をなすとも、いまだ前髪の若年者、お許しあつて然るべきを、鳥類に替へて人命をお斷ちなさらば、不仁の殿と世の嘲りを受けたまはん、さすれば御名に拘はる大事、拙者とても壯年ながら、父に替つて御諫言申上げ奉る。何卒お留まり下さりませう。

三浦　やあ、生若輩な身を以て利口ばつて諫言だて、汝も共に一刀の錆になすべき奴なれど、父四郎太夫が功に愛で今日はさし許す、ぢつと蟄して控へをらう。

高木　すりや拙者が御諫言を、お用ひ下さりませぬか。

三浦　やあ、そちが諫言用ひぬぞ。それ權内、討捨てい。

平岡　はツ。

與之　身分の違ふ下賤の者、無禮とあればお手討になりましても是非なけれど、後に殘つた六十の親の歎きはどのやうぞ、それを不便と思召し、お許しなされて下さりませ。

平岡　やあ、ぐづ〳〵とよまひ言、聞く耳持たぬ、覺悟なせ。

ト刀を持ち立ちかゝる、此時花道の揚幕にて、「その者の御成敗、暫くお待ち下さりませ」と女の聲して、花道より若菜屋の後家お高、下男三助と丁稚三太を連れて出來る。

三浦　見れば女の分際として、待てと留むるその方は。

お高　はツ、私ことは雪の下若菜屋七兵衞が後家、高と申しますものでござります。

平岡　おゝ若菜家の後家なるか。御前、あれなる女はお腰元の若草の母にござりまする。

三浦　むゝ、すりや若草が母なるとか、噂には聞及びしが逢ふは今日始めてなるぞ。苦しうない、これへ參れ。

お高　はツ、有難うはござりますが、御前間近く恐れ多うござりまする。

三浦　はて、苦しうない。

平岡　お進みなされい。

お高　左樣なれば御免遊ばしませ。（ト舞臺へ來る、三助、三太はずつと後へ控へる。與之助見て、）

與之　や、あなたは若菜屋の、後家御樣でござりますか。

お高　お前は折々私どもの店へおいでの若いお人、何を粗相しなさんしたか、見ず知らずといふでなければ、及ばずながら私から、お詫を申して上げませう。

與之　どうぞお願ひ申しまする。

お高　憚りながら權内樣、御前へ御直に申上ぐるも恐多うござりますから、あなた樣からお取次をお願ひ申しまする。いかなる粗相をいたしましたか、これにをる若衆どのは、世にも稀な親孝行、六十にあまる父親を貧しい中で不自由なく養育なすも男の手一つ、足腰擦る片手間に草履草鞋を作りまして、それをば賣つて今日の細い煙を立てますもの、今お手討になりますれば、六十にあまる父親が明日から路頭に迷ひます、それを不便と思召し、お助けなされて下さりませ。殊にはここは不淨を嫌ふ八幡樣の御境內、血汐の穢れを思召し、お助けなされて下さりますやう、平岡樣のお執成、偏にお願ひ申しまする。

平岡　御前お聞き遊ばしましたか、彼は憎き奴なれど、御執心の若草の母がお慈悲を願ひますれば、御仁情の御沙汰をば。（ト思入にていふ。三浦うなづきて、）

三浦　む、聞いた〱。外ならぬ若草の母が斯くまで頼む上は、罪を憎んで人を憎まず、後家に免じて許し遣はす。

お高　すりやお許しなされて下さりますとか、え、有難う存じまする。さあ、許してやるとおつしやれば、お前もこれから氣を附けて、御大身様へ粗相のないやう、よく心を附けなさんせ。

與之　あなたのお蔭で命が助かり、有難うござりまする。この事を家へ歸り親父に話しましたらば、嘸悦びますでござりませう。

お高　その親御がある故に、お許しなされて下されたのぢや。家へ歸つて無事な顔を、親御に早く見せたがよい。

與之　そのお言葉に從ひまして、お先へ御免を蒙ります。（トお高に辭儀をなし、皆々に向ひ、）既に命を失ふところ、御仁情にてお助け下され、有難う存じまする。

ト辭儀をなし、與之助は破れし半纏を押へ、すご〱と下手へはひる。

お高　數なりませぬ私がお願ひ申上げましたを、お聞濟み下さりまして、お禮は言葉に盡せませぬ。

三浦　そちが願ひを聞届けたは、かの魚心あれば水心、予も亦そちに頼みがあるが、定めて聞いてくれるであらうの。

お高　改まりましたそのお言葉、娘が御恩にあづかる殿樣、この身にかなひしことならば、

三浦　聞届けてくれるとか、まづ以て忝ない。三浦兵部斯くの如く、兩手を突いて禮を申す。

ト兩手を膝へ下す。

お高　これは〳〵勿體ない、お手をお上げ下さりませ。して、私へお頼みとは。

三浦　頼みといふは外でもない、そちが娘の若草を、予が妾にいたしたい。

お高　えゝ。（トびつくりする。）

三浦　よもや、否やはあるまいな。

お高　何事かと存じましたら、思ひがけない娘の御所望、直にも御返事いたしたけれど、娘に一應申しませねば。

三浦　むう、すりや娘が否と申しなば、そちは斷りを申す氣か。こりや、小身なれども三浦兵部兩手を突いて頼んだぞ。親が承知いたしなば子として否やを申さうか。後とも言はずたつた今、色よい返事をいたしてくりやれ。

お高　さあ、それは。（ト當惑の思入れ）

三浦　今の下郎があやまりも、親孝行をそちが感じて、詫言をいたせしならん、助け難き奴なれども頼みを聞いて許せしぞ。定めて娘若草も孝行は存じをらう、親が得心せしことを必ず否とは申すまじ。この場でそちが返答いたせ。

平岡　こりや、御前が直のお頼みは輕からぬことぢやぞよ。町人の身を以て殿のお伽をいたすのは、願うてもない娘が仕合せ、早速お受をいたすべきに、何が不足でお受をいたさぬ。

お高　さあ、それは。

三浦　厭ぢやと申すか。

お高　さあ。

三浦　得心せねば是非がない、達つてとは申さぬぞ。改め申すまではなけれど、そちが娘も奉公なせば、女ながらも予が家來、主に向つて粗相があらば、有無を言はせず手討になすぞ。

お高　えゝ。（トおどろく。）

三浦　その期に及んで後悔いたすな。

お高　それはあまりな、御前の仰せ。

久六　やあ、あまりとは無禮の一言。
傳藏　聞捨てならぬ、引立てい。
中間　はツ。（トお高を引立てにかゝるを、高木四郎次郎へだてゝ）
高木　こりや引立てるには及ばぬぞ。若草が母高とやら、殿へ對してお言葉返すは甚だ以て失敬至極、某は高木四郎太夫が忰四郎次郎と申す者、最前からのこの場の樣子、父にも篤と申さうほどに、唯今御前の仰せの如く、異議なくお受をいたすがよい。はて、惡いやうには、計らふまい。
お高　でも、お受いたせしその上では。
高木　一旦仰せ出されしを、もどく時には娘の身の上、いやさ、身の出世になることなれば、唯今お受をいたすがよい、御先君の御遺言にて御家を輔佐なす父四郎太夫、そち達が難儀になる非道なことは致すまじ、娘が身の上思ふなら、某が言葉に從ひ、この場でお受を申すがよい。（ト呑込ませる。）
お高　（思入あつて、）町家育ちの不束者、御意にかなはゞ仰せに任せ、差上げますでござりまする。
三浦　すりや得心いたせしか、此上もない予が滿足、明日よりして表向き若草を妾となし、情をかけて遣はすぞ。
高木　それ、お受申せ。

お高　有難う存じまする。(ト心ならずも禮を言ふ。三浦は嬉しき思入にて、)

三浦　神も縁を結びたまふか、思ひがけなく當社にて母に出逢つて事調ひ、日頃の思ひも春の夜に、あの若草と新枕、

平岡　その初夢の長き夜を、

久六　いゝとうの眠りのお睦言、

傳藏　波乘り船の乘初に、

高木　千代を壽ぐ鶴ヶ岡、

三浦　目出度く一獻過すであらう。

高木　左樣ござれば別當方へ。

三浦　皆も一緒に、

皆々　先づお越しあられませう。

ト三浦先に平岡、高木、久六、傳藏皆々附いて上手へはひろ。後にお高殘りて、

お高　夫に別れしその後は、お寺參りを役として今日もお寺へ行く途中、人の難儀を見るに忍びず、何も後生と思ふ故、兵部樣とも心附かずお詫をせしが仇となり、思ひがけなく殿樣が娘お若を妾に

したいと否應言はさぬ御難題、御意に背けばお手討になさるも知れぬ御短慮故、いかゞはせんと思ふところ、高木の御子息門郎次郎様が言葉のまゝに是非なくも、お受を申せしこの身の辛さ、お寺参りはお詫をして、これから直に家へ歸り、御歸館のないその中に、娘に様子を知らしてやらう。（ト思入あつて下手へ來り、）これ、急に歸らにやならぬ故、二人とも支度しや。

三太　これ三助どの、お袋様がお歸りだよ。（ト居睡りをしてゐる三助を起す。）

三助　はい〱、お歸りでござりますか。

お高　何をうろ〱、早う來やいの。

トお高心急きの思入にて、三太附いて花道へはひる。三助びつくりして床几にもたれ、四邊を見廻し、逸散に花道へはひる。と下手より與之助出來りて、

與之　思ひ出してもぞつとする、最前命を取らるゝところ、草履草鞋を賣りに行くお得意先の後家御様に、危い命を救はれたも、雁の命を助けた故、それに附けても歸りがけに、若菜屋のお店へ行つて、厚くお禮を申さにや濟まぬ。（ト床几にある三助の忘れて行つた包を見て、）こゝに風呂敷包があるが、誰が忘れて行つたのか。（ト風呂敷の端縫を見て、）この端縫に、雪の下若菜屋と記しあれば、後家御様のお風呂敷。（ト取上げ見て、）何でも中は金の様子、こりや若い衆が忘れたのか、何にせ

よ、少しも早う、持つて歸つてお渡し申すが御恩返し、さうだ〳〵。

ト風呂敷包を持つて逸散に走りはひる。と上手よりお元新助を引張つて出來り、

お元　もし若旦那、言はねばならぬことがござんす。

新助　なに、おれに言はねばならぬことゝは。

お元　お前さんのお出入り屋敷、三浦樣の平岡樣が、私を引かして女房にすると、家へも話しがあつた樣子、どうぞ彼方へ行かぬやう、よい工夫して下さんせいな。

新助　その事は聞いてはゐれど、何をいうても部屋住故、心に任せぬその上に、親父樣もおぬしのことを御存じ故に、よそながら此間から度々御異見、親類中に話したところが、金を貸してくれ手はなし、

お元　さあ、私とても同じこと、此間も母さんがお乳を上げた若旦那と、かういふことがある事が大旦那樣へ聞えては、私が濟まぬと言はしやんすれど、何の因果かお前さんを、思ひきることができませぬ。

新助　そりやおれとても同じこと、假令親父が異見をせうとも、二世も三世も言交し、かういふ仲になつたからは、おぬしは思ひ切れぬわいの。

お元　それは眞實でござんすかえ。
新助　なんの僞り言はうぞいの。
お元　えゝ、嬉しうござんす。
　　ト　お元傍へ寄ろ。下手より幸藏養母お熊小紋の着附、前帶、人柄のよき婆の打扮にて、うろ〳〵と出來り、
お熊　ほんに〳〵晝日中、油斷も隙もなることではない。（ト新助を見て、つか〳〵と來て胸倉をとり、）ええ見かけによらぬ大盜人、こゝにゐたら逃しはせぬぞ。（ト兩人びつくりして、）
新助　これ〳〵、こなたは何を言はつしやる、私を捉へて盜人とは、そりや人違ひでござりませう。
お熊　まだ〳〵しら〴〵しいことを言つて、大事の金を取られた盜人、見違へてよいものか。
新助　えゝ、この身に覺えもないことを。（ト振放す。）
お熊　あゝ誰ぞ來て下され、盜人だ〳〵。
　　ト　新助を捉へてわめく、と上手より石垣件作實は赤馬の三次、同心の打扮にて中間二人と共に出來りて、
石垣　こりや〳〵盜人と申すのは、何ぞそちは取られたのか。
お熊　はい、この若い者に金を取られました。

中間　なに、こいつに金を。

兩人　取られたと。（ト新助を取卷く。）

お熊　見ればあなたはお役人樣、よいところへおいで下されました。私が菩提所へ納めませうと年頃溜めた祠堂金、百兩持つてをりましたを、この男が手籠めにして盜みましてござりまする。

中間　すりや、この二才が、

兩人　盜んだとか。

石垣　見かけによらぬ太い奴、取られたといふ此の者は、見るから正直さうな老人、僞りなどは申すまい。まさしくおのれが手籠になし盜み取つたに相違ない。斯くいふ手前は鎌倉の市中を廻る定廻り、石垣伴作と申す者、折よく我目にかゝつたは脫れぬおのれが天の網。こりや老人、してそちが盜まれし、金子の高は何ほどなるか、取返して遣はすから有體に申せ。

お熊　それは有難うござります、私が盜られましたは、而も小判が五十兩、一分銀が二十五兩に二朱金が二十五兩、三つ合せて丁度百兩、七寶小紋の胴卷へ、入れたまゝに取られました。

ト　これを聞き、新助びつくりする。

石垣　さあ、われが取つたその金を、包みかくさずこれへ出せ。

新助　さあ、それは。
石垣　出さぬはいよ〳〵怪しき奴。それ兩人、彼れが懐中を改めろ。
中間　はッ。
中間　さあ盗んだ金を、
兩人　きり〳〵出せ。
ト新助を捉へ、懐中より以前の胴巻を引出し、お熊へ渡す。お熊胴巻より金包を出して、
お熊　御覧下され、この如く小判で五十兩、一分銀が二十五兩に二朱金が二十五兩、七寶小紋の胴巻にはひつてゐるが、たしかな證據。
石垣　今その方が申立と少しも違はぬ上からは、金子竝に胴巻とも返し遣はす、持返れ。
お熊　それは有難うござります。
新助　いえ〳〵それはお屋敷より、預りましたその金子、それをわしに盗まれたとは、正しく騙りに相違ない。
石垣　おのれは盗人たけ〴〵しいと、左樣な言ひかけいたしても、金子といひ胴巻といひ、老女が申すに相違ない、それを兎や角申すなら、縄かけて番屋へ引かうか。

新助　さあ、それは。

石垣　取られた老女は構ひない、金子を持つて早くまゐれ。

お熊　有難うござりまする。憎い奴ではあるけれど、若い身空で刀の錆、思へば不便なことだなあ。

　　　ト　お熊金を持つて下手へはひる。

新助　あれをやつては。（ト立ちかゝるを、中間兩人にて引きすゑ、繩をかけようとする。）

お元　あもしお役人樣、立派な身分の新助さんが、何で盗みをいたしませう。今のが騙りでござります。

石垣　扨はおのれは相ずりか、繩かけて引く奴なれど、情を以て見のがしおけばよいことゝ、心得て、取られしものを騙りなどゝは、何を證據に申すのだ、盗んだ金を返せし故助けくれるを有難いと、以來性根を改めをらう。（ト新助を突放す。）

新助　あまりと言へば。（ト立ちかゝるを、）

中間　逹つてと申さば、

兩人　繩かけようか。

新助　ちえゝ。（ト口惜しき思入。）

石垣　馬鹿な奴だ。（ト二人の中間を連れて上の方へはひる。新助思入あつて、）

新助　所持なす金を知つたのは、正しく戀の遺恨ある權內めが巧み事、みす〳〵騙りと知りながら、言ふことならぬ今の役人。

お元　あの役人も權內が、賴んだ人ではあるまいか。

新助　巧みの罠にかゝつたは、

お元　今更いうて返らねど、

新助　思へば〳〵口惜しい。

トロをしき思入、上手より以前の平岡權內、久六、傳藏と共に出來りて

平岡　新助、これにをつたか、最前から尋ねてをつた。そこにをるのはお元か、道理こそ見えぬ筈、際どいところでちよんのまか。

久六　見れば顏の色が惡いが、氣分でも惡いのか。

傳藏　大方これは平岡氏が、まゐられたので面目なく、びつくりしたのでござらうて。

新助　いえ、左樣なことではござりませぬが、思はぬ難に逢ひまして。

平岡　いかなる難に逢うたことか、先づさしあたる先刻の菊一文字の短刀を、先方へ見せしところ、殊のほか氣に入つて、さる目利者に見て貰ひしに、劒相が惡いとやらにて斷つてまゐりし故、氣の

毒だが返し申す。（ト短刀を出す。）
新助　すりや、お買上げにはなりませぬか。
平岡　劍相が惡いとあれば、まことに是非もないことだ。先刻預けし百兩を身共に返して貰ひたい。
新助　さあ、そのお預り申せし金子をば。
平岡　なに、その金子をば、
兩人　いかゞいたした。
新助　さあ、その金子は。
平岡　むゝ、金子がなくば百兩替り、この短刀を預りおくぞ。
新助　すりや、短刀を、
兩人　知れたことだわ。
新助　金は奪はれ短刀まで、人手に渡さにやならぬ仕儀。
お元　これといふのも私故、價も高い短刀を。
平岡　おゝ、これがほしくばいつ何時でも、百兩調達いたして來い。
久六　その時こそは、

傳藏　右から左へ貰うてやらう。

　　トこの時奥にて「御歸館」と呼ぶ。

久六　最早殿の御歸館なれば、

傳藏　お目障り故、とく〳〵立て。

新助　立てとおつしやりませいでも、こゝに長居は出來ませぬ。少しも早く百兩の金を調達いたします。

久六　一分か二分の金なら知らず、

傳藏　百兩といふ大金を、

平岡　調達せうとは覺束ない。

新助　金は世界の湧物故、都合したなら百兩の、

お元　できぬこともござんすまい。

平岡　然らば早く調達いたせ。

新助　これといふのも企みの罠に。

平岡　どうしたと。

新助　いえ、御ゆるりとなされませ。

ト唄になり新助、お元しな〳〵と花道へはひる。

久六　平岡氏、まんまと、

兩人　首尾よく。

平岡　これ。

ト押へる。上手より三浦先に。高木其他侍、中間附添ひ出來る。

最早御歸館に、

二人　ござりまするか。

三浦　おゝ、今日の小鳥狩、思はぬ獲物のありし上、若草といふ雛鳥を我手に入れて何よりなるぞ。

高木　然らば、これより御歸館あつて、

平岡　今日の獲物をお肴に、

久六　御酒宴あらば、

傳藏　嘸、御滿足に、

三人　ござりませう。

三浦　この上もない悅びなるぞ。

高木　佞人お側に附添ふ故、道にかけたる御行跡。

三浦　やあ、又してもさし出るか、身を顧みて控へをらう。

高木　いえ、控へますまい。

平岡　やあ、殿へ對して無禮千萬、いで某が。（ト平岡刀を抜きかけるを三浦へだて、）

三浦　こりや、權内何といたす。

平岡　無禮者の四郎次郎を、

三浦　はて、汝等が何と申さうとも。（ト平岡を留める。高木前へ進みて、）

高木　すりや、殿樣には、

三浦　空吹く風ぢや、はゝゝゝゝ。

ト扇を開き笑ふ。平岡、高木きつとなる。この見得よろしく、大拍子にて道具廻る。

（雪の下若菜屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面暖簾口、上手押入戸棚、下手の茶壁に質物出入帳五冊ほどあり、押入の前に帳場格子、内に大帳を入れし帳箱、上の方一間の障子屋體、下の方白壁の土藏、この前に鎌倉雪の下と記せし用水桶、いつもの所門口、これに若菜屋といふ紺暖簾をか

け、總て若菜屋質店の體。こゝに以前のお高上手に、下手に番頭佐五八、下女おせん居り、後に下男三助、丁稚三太控へてゐる。

佐五　まだお歸りではござりますまいと存じましたが、いつもよりだいぶお早うござりましたな。

お高　心急きなことがあつて、途中から歸りました。

佐五　見受けますれば、お顏の色がお惡い樣に思はれますが、御氣分でもお惡うござりますか。

お高　氣分にも障るほどの、いゝいゝ、ひよんなことが出來たわいの。

佐五　いゝいゝひよんなことゝは氣がゝりな、どんな事でござります。

お高　まあ、二人とも聞いてくりや。今日お寺參りの途すがら鶴ケ岡の境内で、こちの家へ草履草鞋を商ひに來る若衆殿が、三浦兵部樣へ無禮があつて既にお手討になるところ、思はずそこへ來かゝりて見るに忍びずお詫をせしに、お聞濟み下さりまして、お助けなされて下すつたが、遂にこの身の難儀となり、御奉公に上げておいた娘若草を妾にくれと、御主の威光で無理無態、否やを言はさぬ御難題。

佐五　それはまあ怪しからぬ、理不盡なことでござりますな。

せん　その時あなたは殿樣へ、何とお斷りなされました。

お高　さあ、種々お斷りを申したけれど、一向にお聞入れなく、假令腰元なればとて奉公いたせば予が家來、無禮があれば手討にいたすと脅しつけての往生づくめ、兎やせん角と思ふ折、御家老樣の御子息四郎次郎樣が御供にて、今日の仔細を父へ話し惡いやうには計らふまいから、無事を思はゞお受をせよと、謎をかけてのお勸めに、餘儀なくお受はなしたれど、心も心ならぬ故お暴館を後にして御歸館のない其前に、娘へこの事知らさうと引返して歸つて來ました、私が心の切なさを推量してくれやいの。

佐五　それぢやによつて私が、申さぬことではござりませぬ、お年頃な娘御故、早くお下げなされまして、聟をお取りなされませと、申しましたはこゝの事。

せん　それはあなたも先頃から、この三月は下げようとおつしやつてゞござりましたが、ふつて湧いたこの御難儀は、今日の惡魔でござんせう。

佐五　おゝ惡魔も惡魔も夜叉魔王、外道のやうな三浦の殿にお孃を自由にさせるとは、こんな悔しいことはない。（ト悔しき思入、この時下男三助ふと思ひ出せしやうに、）

三助　さあ、大變々々、こんな悔しいことはない、こりやかうしてはゐられぬわい。

佐五　えゝ、わいらがぢたばた騷いでも、及ばぬことだ、すつこんでをれ。

三助　いえ〳〵、すつこんでをられぬのは、お金の入つた風呂敷包みを、鶴ヶ岡へ忘れて來ました。

佐五　えゝ、すりや祠堂金の三十兩を。

三助　ちつとも早く、おゝさうだ。（ト逸散に花道へ走りはひる。）

お高　祠堂金を忘れしとは、かてゝ加へて今日の災難。

佐五　いや、忘れたといふ彼奴が怪しい、後追ひかけて引捉へ、詮議をしたなら金が知れよう。

せん　さういふことなら、少しも早う。

佐五　おゝ、合點だ。

ト佐五平も逸散に花道へ走りはひろ。と花道より以前の與之助出來りて、

與之　はい、御免なされて下さりませ。

せん　どちらからおいでなされました。

與之　不斷お店へ草履草鞋を、商ひに參りまする、與之助にござります。

トこの中、お高は俯向き、思案の思入。

せん　もし、與之助どのがまゐられました。

お高　大方、禮に來られたのであらう。

せん　さあ、こちらへおはひりなされませ。
與之　左樣なら、御免なされませ。（ト内へ入り、）先刻は危い命をあなた樣のお蔭にて、助かりましてござりまする。何とお禮を申しませうか、言葉に申し盡されませぬ。
お高　家まで禮においでゞなくとも、よいことでござんしたに、然し短慮な殿樣故、危いことでござりました。お前が難を脫れた替り、ふつて湧いた私が災難さ。
與之　その災難とおつしやりますは、鶴ケ岡へお忘れなされた、風呂敷包みぢやござりませぬか。
お高　それではもしや、風呂敷包みを。
與之　はい、私が拾ひましたが、その風呂敷の端縫に雪の下若菜屋と記してござりました故、お禮を兼ねてこの包みを、お屆け申しにまゐりました。（ト風呂敷包みを出す。）
せん　ほんに、これはお家の風呂敷。
お高　そんならお前が拾うてか、ようまあ屆けて下すつた、厚く御禮を申しまする。この風呂敷のその中には、死なれた夫の菩提の爲め、御寺へ納める祠堂金三十兩を財布へ入れ、これに包んでござりまする。
與之　お金の高は何ほどか、存じませぬが端縫の、印を證據に參りました。憚りながらこの中を、お改

めなすつて下さいまし。

お高　いや改めるには及ばぬ親切、而も金高は三十兩、その半金の十五兩失禮ながらお禮に上げたい。どうぞ受けて下さいまし。（ト金包みを取出し、封を切らうとするを留めて、）

與之　えゝめつさうなことおつしやりませ。最前失ふ命をばお助けなされて下さりました、御恩返しの十分一、拾つた金はそのまゝに、お納めなされて下さりませ。

お高　お前の堅い心では、辭退をするは尤もぢやが、それでは私の心が濟まぬ、どうぞ取つておいて下され。

與之　いえ／＼何とおつしやつても、お金はお貰ひ申しませぬ。

せん　親孝行は常々から、人の噂に聞きましたが、ても正直なことでござんす。

お高　それではどうでも此の金を、お前は受けて下されぬか。

與之　それはお貰ひ申しませぬが、その代りにおねだり申したいものがござりまする。

せん　お金に替へて貰ひたいとは。

與之　おねだり申すその品は、餘寒も強いこの寒さに、せめて親父に綿入を、一枚着せたうござりまする。どうかそれを私へ、お惠みなされて下さりませ。

お高　それは何より易いこと、何なりと進ぜませう。それに附けても鶴ケ岡で、打たれて破れしその半纏、人頼みをしようより女子どもに言ひ附けて、仕立なほして上げようから、こちへおいて行きなさんせ。

與之　それは有難うござりまする、こんなきたない半纏を。

せん　私がなほして上げようから、必ず遠慮をなさいますな。

ト　お高後の戸棚より木綿布子を出して、

お高　有合せの古布子、縞柄はよくなけれど、これをお前に上げるから、早く父御に着せなさんせ。寒さ凌ぎにならうわいの。（ト布子を出す、與之助いたゞきて、）

與之　勿體ないこのやうな、きれいな布子をお貰ひ申し、嘸親父が悦びませう。不斷御無沙汰になりました、家へもこれで參られます。え丶有難うござりまする。

お高　またこの後も何なりと、困ることがあつたなら、遠慮せずにござるがよい。さあ、その半纏も女子どもになほさせて上げようから、こ丶へおいて行きなさんせ。

與之　どういたして、左様なことを、あなたへお頼み申しては。

お高　それは入らぬ遠慮ぢやわいの。

せん　さあ、早く脱ぎなさんせ。（トお高とおせんとにて與之助の半纏を脱がせる。）
與之　それではお願ひ申しまする。
お高　最早日暮に近ければ、少しも早う父御へそれを。
與之　有難うござります。左樣なれば私は、もうお暇いたしまする。（ト布子を抱へ行きかけるを見て、）
お高　あ、これ〳〵、春とはいへど餘寒も強し、風でも引いては父御が難儀、この半纏のできるまで、着古したれどわしが羽織、胴着替りに下へ着て、これで寒さを凌ぎなさんせ。（ト有合ふ女羽織を出す。）
與之　いえ〳〵それには及びませぬ、これでよろしうござりまする。
お高　はて、こなたはようても風でも引かば、父御へ苦勞をかけねばならぬ。
せん　折角の思召し、お借り申して行きなさんせ。
與之　重ね〳〵のお心附け、お禮の申しやうがござりませぬ。
お高　禮はお互ひ、少しも早う。
與之　左樣なれば、後家御樣。
お高　與之助どの。
與之　どれ、お暇いたしませう。

ト布子と羽織を抱へ花道へはひる。おせんは與之助の半纏を疊みゐる、お高は件の金を帳箱に入れ、思入あつて、

お高　陰德あれば陽報ありと、人を助けた善根にて、思ひがけなく祠堂金が戾つて來たは信心なす、神や佛のお引合せ、それに附けても娘が事、案じられゝば少しも早く、文を認め樣子を知らし、今日より病氣の體になさば、脫れられぬこともあるまい。

せん　それはお案じなさいますな、神樣や佛樣の、必ずお助けがござりませう。

お高　さうは思へど短慮な殿さま、

せん　え。

お高　あゝ、子を持つて知る親心ぢやなあ。

ト よろしく思入、唄になり、この道具廻る。

(笹目ヶ谷裏手の場)――本舞臺正面一面に卒塔婆を結込みし玉椿の生垣、後黑幕、上の方に大きな千人塚の石塔、この脇に石地藏、松の立木。眞中に古き石塔の捨石あり。こゝに平岡權内石に腰をかけてゐる、この見得禪の勤めにて道具留る。

平岡　夜に入つたらばしん〳〵と、身に染みるほど寒くなつた、笹目ケ谷の千人塚、こゝで待合す約束だから、外へ行く譯にも行かず、早く來てくれゝばよいが、

と下手よりお熊、惡漢の打扮の赤馬の三次と共に出來る。

三次　こうおツかあ、すてきに今夜は寒いぢやあねえか。

お熊　今にいつぺい呑ませるから、もうちつとだ辛抱しねえ。（ト四邊を見廻し、）そこにゐるのは權内さんか。

平岡　さういふ聲はお熊婆ア。扨、今日の狂言は首尾よく行つて重疊々々、さすがは年の功ほどあつて、身共などは及ばぬ智慧だ。

お熊　いゝ加減に胡麻をすりなせえ、こんなことは餓鬼の折から白髮になるまで仕馴れた仕事、智慧もへちまも入りやあしねえ。

平岡　それ故おぬしへ頼んだのだが、して役人體に見せかけたのは。

お熊　こりやあ家の居候、赤馬の三次といふひゞの入つた若い者さ、口を利かしやあ達者だから、こんな役にやあうつてつけさ。こう三次、旦那にお近附になるがいゝ。

三次　こりやあお初にお目にかゝります。今日の仕事は筋立が、珍らしいので面白半分、役者氣取でや

りました。又こんな事がありましたら、お使ひなすつて下さりませ。

平岡　用があつたら、何分賴むぞ。ときにお熊、首尾よく先刻騙り取つた百兩、早く金を渡してくれ。

お熊　なに、百兩の金を渡してくれ、途方もねえことを言ひなさるね、あの百兩はおれが金だ、命がけの仕事をして、濡手で粟のお前さんに、唯取られてつまるものかえ。

平岡　これお熊、わりやあ約束變替して、今となつて居なほるのか。

お熊　どうしたとえ。

平岡　元よりたゞは使はねえ、いくらか禮をする氣だが、丸々金を引上げて、この權内に渡さぬとは、いけツ太え婆アだな。（ときつとなる。お熊せゝら笑つて、）

お熊　太え婆アは言はずとも、初手から知れたこのお熊、餓鬼の折から身性が惡く、引詰島田髷の時分から男をこせえて逃げ歩き、そいつの爲めに長屋へ賣られ、切禿のお熊といつて、三田の三角市兵衛町、鐘ケ下から堂前かけ人に知られた莫連者、枕胼胝が兀げかゝり終にやあ色氣も鮫ケ橋、野玉稼ぎも借金とお八重で首が廻り兼ね、錢も取れなくなつたから、押借騙り夜働き、素人もいつか黑くなり二度まで墨の入つた私、惡事が割れゝば喰ひ込む危ねえひゞの入つた身體、明日をも知れねえ身の上だから、こんな仕事もするもの、騙つた金をお前さんに取られるやうな耄碌は

しねえ。年は取つても氣が若え、その樂しみに使ふ金、おれを太えと思ふなら縄をかけて突出しなせえ。出るとこへ出てしやべつたら、扶持方棒に拘はるだらう。よく考へて見なさるがいゝ。

ト ぐう／＼しく言ふ、平岡呆れし思入にて、

平岡　えゝ忌々しい、その金も諸所方々で借り集め、やつとのことでまとめた百兩、それを餌に菊一文字のこの短刀を捲上げて、戀の遺恨の新助めに難儀をかけて腹癒せなし、又短刀を何處へか賣り、それでお元の年拔なし、手活にしようと思ひのほか、菊一文字を百兩でやつぱりおれが買つたも同然、こんなつまらぬことはない。これ、お熊。

お熊　何ぞ用かえ。

平岡　せめて半分返してくれぬか。（ト手を出すを拂ひのけ、）

お熊　未練なことを言ひなさんな。

平岡　いや、惡太い婆アだな。

ト 平岡上手へはひる。時の鐘、凄き合方になり、

三次　おつかあ、うまく行つた分口を。

お熊　おゝ今遣るよ。（ト上手にて人音するのに思入。）

三次　早くいつぺい呑みてえので、すてきに喉がぐびぐびすらあ。

お熊　ぐび附く喉なら、かうしてやるよ。

ト言ひながら三次の咽喉を締め、きつと見得。時の鐘忍び三重になり、上手より新助お元の手を取り出來る。お熊は三次の鼻へ手を當て窺ふ。お熊咽喉へ卷いた手拭を取るとひよろひよろとして三次ばつたり倒れる。これにて兩人びつくりなし、三人ちよつと探り合ひの立廻りあつて、新助、お元は花道へ行き、お熊手拭を振ふを木の頭、兩人は手を引合つて花道へはひり、お熊は胴卷の金を見てにつたり思入、この模樣よろしく、

ひやうし幕

# 二幕目

稻毛屋敷辻番の場
雪の下若菜屋の場

［役名――稻葉幸藏、刀屋新助、辻番人與惣兵衞、同悴與之助、刀屋新兵衞、番頭佐五八、家主佐次郎兵衞、山井養仙。若菜屋の後家お高、藝者お元、杉田娘おみつ、乳母おふと。］

(稻毛屋敷塀外辻番の場)――本舞臺上手へ寄せて二間常足の辻番、本庇三尺の式臺、二重の上下人

見のある戸、正面鼠壁六尺棒かけあり、この脇に灯を點けたる辻行燈、下手一面忍び返し附の黒塀、よきところに用水桶、塀の後見越の松。總て滑川稲毛塀外辻番の體。辻番の内に與惣兵衛辻番の親仁にて楊枝を削りゐる、紺看板の中間○△の二人竹の皮包一升徳利を提げ立つてゐる、通り神樂にて幕明く。

○　どうだ與惣兵衛殿、この頃は疝氣はいゝかの。

與惣　おゝ大部屋の衆か、どうも此間の雪からして、腰が引釣つてならぬわいの。

△　さうだらうよ、若い者でせえ、一ぺいやらにやア腰が伸せねえ。

與惣　お前方もなる口だが、兎角樂しみは酒ばかり、勿體ないと知りながら五勺づゝも呑まねば寐られず、夜業をするも呑みたい故、いやも、口には孝行なことさ。

○　いや、孝行といへばお前の息子、まだ年は行かねえが、臙脂の世話から何やかや、少しの間にも草履を作り、今時稀な與之助殿。

△　それ故御家中でも大評判、今に八代目のやうに御褒美が出るだらう。

與惣　いやも、我子を褒めるぢやござりませぬが、小い時から何一つほしがるものも買うてやらぬ、親甲斐もないこの私を、それは／＼孝行にしてくれまする。

○　それといふのも日頃から、こなたの育てがいゝからだ。

△　さうして息子殿は、廻りにでも行つたのか。

與惣　いえ、作り溜めた草履草鞋を、町へ賣りに行きましたが、もう今に歸りませう。

○　それぢやあ今夜はお父さんも、あつたかに一つぺいやれるの。

與惣　はい、大方歸りに買つて來てくれませう。

△　いや、嘸こつちも大部屋で、買つて來るのを待つてゐよう。

○　早く行つて暖たまらう。それぢやあ父さん、大事にしなせえ。

與惣　はい、有難うござります。(ト兩人行きかけ、)

△　どうでもこいつあ雪だわえ。(ト空を見ながら兩人上手へはひる。)

與惣　あゝ、雪とは厭な噂だなあ。

トやはり楊枝を削りゐる。花道よりおみつ屋敷娘の打扮にて出來る、後より身重と見える屋敷乳母い
おふと醫者の山井養仙を引きずり來る。

養仙　あこれ〳〵おふと、何ぼ夜でも往來中、人命を助ける醫者を捉へて見ともない、放してくりやれ。

ふと　えゝ、年中人を殺してゐながら、人命を助けるも氣が強い、病の見えぬは知れてあれど、私の腹が

このやうに、大きくなつたが見えぬかいな。

養仙　そりや見えぬではないけれど、何もそれが愚老一人で、大きくしたといふ譯でもなし。

みつ　何か様子は知らねども、養仙様がお困りなさる、そのやうに言はずとも、まあ靜に言うたがよいわいの。

ふと　いえ／＼靜に言うては分かりませぬ。これから宿へ連れて行て、白い黒いを分けねばならぬわいな。

養仙　これは情ない目に逢ふものだ。

ふと　さあ、この腹を大きくしたかせぬか、暗の恥を明るみへ出して、洗ひ方をせにやならぬわいな。

養仙　それを洗はれてたまるものか、養仙表札に拘はる仕儀、どうぞ助けてくれ／＼。

トこの聲を聞き、與惣兵衛出來りて、

與惣　お辻先も憚らず、やかましく言ふは何者ぢや。

みつ　これ與惣兵衛、私ぢやわいの。

與惣　や、これは誰かと存じましたら、お組頭松田主膳様のお孃様、こりや何事でござります。

みつ　乳母が何やら腹を立つて、養仙様と爭うて故、そなた留めてたもいの。

與惣　畏まりました。

　　ト この中山井逃げようとするを、おふと引留め爭ひゐる、與惣兵衛中へはひり留めて、

これ〳〵お乳母どの、どういふ譯か知らないが、お辻先でどつぱさつぱ、旦那樣のお恥になる

　まあ下にゐて、譯を言はつしやい。

ふと　いえ〳〵、譯を言つてもわからぬ藪醫者、引きずつて行かにやならぬわいな。

與惣　そりやもう養仙樣の分からぬのは、今始まつたことではない。

養仙　これは御挨拶。

與惣　ちつと耳は遠いゝけれど、大槪のことは分かる故、私に言つて聞かしやいの。

　　ト 與惣兵衛無理に兩人を引放し下におく、おふと思入あつて、

ふと　譯をとつくり話すから、お前聞いて下さんせ。

養仙　それを言はれてたまるものか、こりや逃げるのが專一だ。（ト逃げにかゝる。）

ふと　うぬ、逃げるとて逃がさうか。

養仙　逃げるが勝だ。

ふと　逃げるとて逃がさうか。

ト養仙逸散に花道へ逃げてはひる。おふと腹を抱へよち〳〵と追かけてはひる。

與惣　いや、どこの國にか大切な、お主様を打捨つて、困りきつたお乳母どのだ。

みつ　ほんに、早う返ればよいが。

與惣　もしお乳母どのが返らずば、悴が今に歸りますから、送らして上げませう。

みつ　與之助に送らしてたもるとか。（ト嬉しき思入）どうぞ乳母が返りませず、與之助が早う歸りますやう。（トちよつと神佛を拜む思入。）

與惣　もう今に歸りませう、むさくろしうはござりますが、こつちへお上りなされませ。

みつ　いえ〳〵、こゝで往來を見てゐるのが、樂しみぢやわいな。

與惣　然し川風でお寒うござりませう。どれ、お茶でもこしらへませうか。

ト辻番の内へはひる。おみつ與之助の歸りを待つ心で、柱にもたれ向うを見てゐる。よきほどに與之助風呂敷包みを脊負ひ、三合徳利と鰯を紙にて提げて出來り、思入あつて、

與之　今日は思はぬ災難で命をば取らるゝところ、後家御樣のお情で無事に歸るも天のお助け、然し、父樣にこの事をお話し申さばお案じなさらう。惡いことは言はぬが孝行、よいことばかりをお話し申し、どれお悅ばせ申さうか。

ト此中おみつ與之助を見て嬉しき思入にて、髮を撫附け、帶を結びなどする。與之助本舞臺へ來ると

おみつ恥しき思入にて、

みつ　與之助、今戻りやつたかいの。

與之　これは松田樣のお孃樣、思ひがけない今時分、何でこゝにおいでなされました。

みつ　そなたの歸りを、待つてゐたわいの。

與之　へい、私が歸りますのを。（ト合點の行かぬ思入。）

みつ　あいなあ。

與惣　（奥より出來りて、）おゝ悴、歸つたか、だいぶおそかつたな。

與之　今日はよいことがござりまして、それでおそうなりました。

與惣　よい事とは耳寄りな、あとでゆつくり聞きませう。

與之　もし父樣、お頭のお孃樣には何でこゝに。

與惣　さあ、こりやかういふ譯ぢや、お乳母どのがお連れ申して、お孃樣をこゝへおき、おのが勝手に何處へやら、それ故そなたが歸つたら、お送り申させようと、言つてゐたとこぢやわいの。

與之　それでお待ちなされてゞござりましたか。嘸お待遠でござりましたらう、直にお送り申しませう。

みつ　いゝえ、直でなうてもだいじないわいの。
與之　でも、お家でお案じなされませう。
みつ　今日は琴のお師匠様の、月並のおさらひ故、家でも案じはせぬわいの。
與惣　左樣ならもう少し、お乳母どのゝ返りをば、こゝでお待ちなされませ、先へお歸りなされましたら、お乳母どのが濟みますまい。
みつ　ほんに、あれが濟まぬ故、どうぞこゝに置いてたもいの。
與之　然し、お家と違つて、むさい所に。
みつ　それが私や好ぢやわいの。
與之　何でお好きでござりませう。
與惣　いや〱よい衆といふものは、却てこんなところがお好きなものぢや。
與之　いやお好きなものといへば、お前のお好きな鰯があつた故、鹽燒にして上げませうと、腰越から買うて參りました。（ト德利と鰯を見せる、與惣兵衞皿を出し、鰯を入れながら、）
與惣　何ぢや、これで一ぱい呑ます、いや有難いことぢやな、お孃樣などのお家と違うて私共の身分では、鰯の鹽燒で三合とは、此上もないよい御馳走。何とお孃樣、やさしい奴ぢやござりませぬか。

みつ　そのやさしい心故、私もとうから。

與惣　え。

みつ　褒めてゐたわいの。

與惣　むゝ、褒めてやつて下さりませ。これ與之助、嬉しいぞよ〳〵。

　　と嬉しき思入、おみつは始終與之助に見惚れてゐる。

與之　まだ、父樣に悦ばすことがござりますぞえ。

與惣　まだ悦ばすことがある、何ぢや知らぬが、早う聞きたい〳〵。

與之　いつも草履や草鞋をば買つて下さる、雪の下の若菜屋の後家御樣が、寒明が寒い故、これを親父に着せたがよいと、このやうな布子をばお貰ひ申してまゐりました。（ト風呂敷より出して見せる。）

與惣　ヨウ、こりや裏表とも新らしいのぢや。おれが着るには勿體ない、丁度幸ひこの布子は、そなたの晴着にしたがよい。

與之　いえ〳〵、それでは先方樣の思召しが無になります、それ、又私もこんな半纏を、お貰ひ申しました。（ト見せる、與惣兵衞は手に取り見て、）

與惣　こりや藍天鵞絨の紋附、えらいものをお貰ひ申したな。これといふのも日頃から親孝行なそなた

故、天道樣からのお惠みぢや。あゝ有難い〳〵。（ト二品をいたゞき、）祝ひ酒に鹽燒で、一ぱい御馳走にならうかい。

與之　それがよろしうござります。どれ、こしらへて上げませう。（ト立ちかゝる。）

與惣　あこれ、鰯ならおれがこしらへる、手をよごすには及ばぬわいの。

與之　でも、お冷たうござりますのに。

與惣　はて、こしらへる中が樂しみぢや。

與之　左樣なら、お心任せになされませ。

與惣　お孃樣へ、お話しなされませ。どれ、拵へて一ぱいやらうか。

ト酒と鰯を持ち奧へはひる、與之助間の惡き思入にて、

與之　私も明日の仕事の支度、藁でも打つておきませう。（ト下手にある打臺と砧を持つて出る、おみつ積んであ　藁を持つて來る。）あゝ、お孃樣お止しなされませ、お召物が塵になります。

みつ　塵になつてもだいじないから、私にも手傳はせてたもいの。

與之　勿體ないことおつしやりませ、お頭のお孃樣に、何で手傳ひが賴まれませう。

みつ　何故賴まれぬぞいなう。

奥之　さあ、お賴み申されぬといふ譯は、旦那樣は足輕組をお預りのお頭樣、私共はお組下、言はゞ御家來も同じこと、御主樣も同然のあなた樣へ、何で賴まれませう。

みつ　そりやもう組頭と組下とは、格も違ふであらうけれど、もし組頭の娘などが、組下の者の所へ緣があつてかたづいても、何も用はさせぬかいの。

奥之　いえ〳〵、我女房に持ちますれば、假令お主樣でも夫の高下で、何でも用はさせまする。

みつ　そんならどうぞ私をば、そなたのなんにして、用をさせてたもいの。

奥之　へい、そなたのなんにしてとは、何のことでござります。

みつ　それ、今言うた、なんのことぢやわいな。

奥之　いや、なんのことだかさつぱり分かりませぬ。

みつ　私やよう分かつてゐるわいな。

奥之　あなたには分かつてをりませうが、私には分かつてをりませぬ。

みつ　何の分からぬことがあるものか、組頭の娘の私を、組下のそなたの、（ト恥しき思入にて、）おかみさんにして、用をさしてたもいの。（ト袖にて顏を隱す。）

奥之　はゝゝゝゝ、五つか六つの子供ではあるまいし、大きな形をしておかみさんの御亭主のと、飯事

ができますものか。

みつ　飯事ぢやない、あの、はんまに。

與之　え、何とおつしやります。

みつ　ほんまにしてたもいの。（ト恥しき思入、與之助立ちかゝりて、）

與之　お孃樣、ずつとそつちへお寄りなされませ。（トおみつを上手へ押しやり、）小さい時から私は旦那樣に手習を、教へてお貰ひ申しました故、お前樣ともへだてなく、言はゞ寺子屋の友達同然、飯事もして遊びましたが、男女七歳よりしては席を同じっせずとやら、必ず側へお寄りなされまするな。

ト脇を向き、藁を打つてゐる、おみつ思入あつて、

みつ　今も言やる寺友達、さう嫌はひでもよいではないかいな。

與之　嫌やいたしませぬけれど、ほんまの何のとおつしやる故、私は嫌ひでござります。

みつ　やつぱり私を嫌やるのぢや。聞けば御用人の娘御、お花さんと情人ぢやといふこと、嫌やるのも、尤もぢやわいな。

與之　えゝめつさうもない、誰がそんなことを言ひました。

みつ　誰でもない、御家中でみんなが言うてゐるわいの。

與之　えゝ、そんな厭らしいことを、聞き度くもござりませぬ。(ト耳を塞ぐ。)
みつ　聞き度くなうても、聞かさにやならぬわいの。
ト厭がる與之助の手を取らうとするを、振拂ひて飛退き、
與之　男女七歳より席を同じうせず。
みつ　また、そんなことを言やるかいな。
與惣　(奥より出來りて、)あゝいゝ心持に醉つた、一合五勺一人でやつたら、寒さをさつぱり忘れてしまうた。
與之　それはよろしうござりました。
與惣　いや、このお乳母どのもお孃樣を忘れたか、嘸お家で御兩親が、お案じなされてゞあらう。これ、與之助、お送り申してくりやいの。
與之　畏まりました。
與惣　いや、そちは一日草臥れたであらう、おれがお送り申さうわいの。
與之　いえ〳〵お腰の痛いのに、私がお送り申します。
みつ　それ〳〵、與之助の方が。

與惣　あなたもよろしうござりますか。そんなら大儀ながら、行つて來てくりやれ。
與之　はい〳〵、さあお孃樣お送り申しませう。
みつ　そんなら、大儀ながら。與惣兵衛大事にしや。
與惣　有難うござります。（トおみつ花道へ行かうとして躓く、）あゝ危ない、與之助お手を引いて上げ申しや。
みつ　おゝ與惣兵衛の許しぢや、手を引いてたもいの。
與之　そのやうなことが。
與惣　はて、だいじない、お怪我をさしてはならぬわいの。
與之　さあ、參りませう。
　　ト迷惑さうにおみつの手を引く、おみつ嬉しさうにいそ〳〵として花道へはひる、與惣兵衛見送りて、
與惣　あゝ、同じ年でも男と女とよつぽど樣子の違つたもの、形は大きうても與之助は感じぬやうだが、お孃樣はよつぽどお心のある樣子、譬にもいふ小袋と小娘、油斷のならぬことぢやなあ。（ト四つの鐘鳴る。）南無三、もう四つぢや、今五つを打つたと思うたに、夜はよつぽど詰つたわい。どれ、一廻り廻つて來ようか。
　　ト弓張提灯をもち、六尺棒を突き、「火の用心、火の用心」と呼びながら下手へはひる。と上手より□

◎の駕舁、垂をおろせし四つ手駕籠を擔ぎ出來ると、以前の○△の中間二人その棒鼻を捉へ、がやがや言ひながら共に出て來る。

○　これ、この廣い往來中を、なんで棒鼻をぶツつけやあがつたのだ。

○△　了簡ならねえ〳〵。（トこれにて駕籠をよきところにおろし。）

□　もし〳〵親方、ほんの出合頭でござります。

◎　どうぞ了簡して下さりませ。

○　いやだ〳〵、どこの駕籠だか知らねえが、屋敷者に突かけて、たゞあやまるといふがあるものか。

△　中の客が相手だ、引きずり出せ〳〵。（ト駕籠へ立ちかゝるを留めて、）

□　これさ親方、お客の知つたことぢやあねえ。

◎　いつぺい買へなら買ひやすから、了簡して下さりませ。

△　いやだ〳〵、何でも中の客が相手だ。

○△　引きずり出せ〳〵。

□　これさ、野暮を言つてくれちやあいけねえわね。（ト兩人を留めてゐる、◎は駕籠の側へ來り、）

◎　もし旦那え、とんだぐづに出ツくはして、面倒でござりますから、ちよつと一ぺい飲まして來ま

す、ちよつとの間お待ちなすつて下さりませ。

○ さあ、中の客を出せ。出さねえけりやあ駕籠ぐるみ、上總部屋へ引きずつて行くぞ。

□ まあ、そんなことを言はねえで、一ぺいやるから一緒に來なせえ。

△ いやだ〳〵、振舞酒は呑みたかアねえ。

◎ まあ、いゝから來ねえといふに。

ト中間を引つぱつて下手へはひる。時の鐘、兩吟の唄淨瑠璃になり、花道より刀屋新助頰冠り腕組なして出來り、續いてお元手拭を吹流しに冠り、しな〳〵と出來り思入あつて、

新助 これお元、どう思案しなほしても、こりや死なねばならぬわい。

お元 どうか仕樣はござんせぬかいな。

新助 さあ、これが十か二十の金ならどうかしやうもあらうけれど、何をいふにも大枚百兩、今というて今その金を貸してくれる人もなし、かういふ譯で騙られたと言うた所がこれまでの、身持の惡さに親始めよもや眞とは思はれまい。今日ち出がけに父樣が、金受取つたら暮れぬ内に歸れとおつしやつたを、上の空に聞いて出たが、その罰故に今日の仕儀、御恩も送らず先立つは、不孝なれどもいつそのこと、死んだ方が御苦勞休め、それ故金の言譯に死なうと覺悟極めたわい。

お元　それといふのも、私から。藝者狂ひをなされずにお家にばかりござんしたら、かういふ譯で騙られたとおつしやつたならそれなりに、仕方もないと濟まうのに、その言譯も立たずして、死なねばならぬ仕儀になつたも、元はといへば私故、かうなるはしか母さんがお乳を上げた若旦那と、言交してけ義理が濟まぬ、思ひ切れとの異見も幾度、私が切れたことなればお身のお爲めになること故、思ひ切らうと思うても、切るに切られぬ互ひの悪緣、終にはかういふことになり、今更言うても返らぬこと、どうぞ堪忍して下さんせいな。

新助　そりやおれとても同じこと、どうせ女房に持たれぬそなた、いつそ切れたらその身の爲めと心は附けど思ひ切られず、よしないおれ故苦勞をかけたが、然しそれも今宵限り、思ひ切るの切られぬのといふのもほんの娑婆にゐる内、死んでしまへばもうそれまで、どうぞこれから爲めになるそなたも客に身を任し、これまで馴染んだ誼には、思ひ出す日があつたなら、口へ出して言はずとも、心で回向してくりやれ。草葉の蔭で待つてゐるぞよ。

ト新助愁ひの思入。お元も涙を拭ひて、

お元　爲になる客があるなら身を任せろと、親切に末を思うて下さんすお志しは嬉しいが、お前に別れて一日でも、どうまあ生きてゐられませう。私も一緒に死ぬ覺悟、どうぞ殺して下さんせいな。

新助　その義理立は悪い了簡、おれは百兩失ひし身の言譯に死ぬ身體、それに引かされとも〴〵、におぬしが死なばお袋や年端も行かぬ弟が、おれを恨むは知れたこと、どうして一緒に殺されう。

お元　一緒に死んで惡いことなら、私は後から死ぬほどに、冥土とやらで私の行くのを、待合はしてゐて下さんせいな。

新助　そんなら、どうでも、死ぬといふのか。

お元　お前の死ぬのを餘所に見て、どうまあ生きてゐられうぞいの。

新助　それほどまでに、思うてくれるか、これお元。

お元　新助さん。（ト兩人手を取交し、）

新助　あゝ、これがこの世の顏の見をさめ。

お元　とつくり見せて、下さんせいな。（ト兩人顏を見合せ、愁ひの思入。）

新助　そなたも死ぬと覺悟したなら、どうで明日から人の噂、心中者と言はゞ言へ、かうなるからは一緒に死なう。

お元　そんなら私もとも〴〵に、えゝ嬉しうござんすわいな。

新助　とは言へ、刄物も持合さず、（ト前なる川へ思入あつて、）幸ひ今が上潮時、月の出ぬ間に川の深みへ、

お元　人の目つまにかゝらぬ中、
新助　石を拾つて袂へ入れ、
お元　互ひに裾をくゝりあひ、
新助　彌陀の御國へ、
お元　少しも早う、
兩人　さうぢや／＼。

ト兩人邊りの石を拾ふ、此の時正面の駕籠より、稻葉幸藏（鼠小僧）着流し唐棧の半纏にて出で、兩人を窺ひゐる。兩人はこれを知らず、よろしくあつて、

新助　覺悟はよいか。
お元　あい。（ト兩人手を取り。）
兩人　南無阿彌陀佛。

ト飛びこまうとする、幸藏つか／＼と出て兩人を留め、

幸藏　二人とも、まあ待つた。
新助　どなたかは存じませぬが、死なねばならぬ二人が身の上、

お元　どうぞ見脱して、

兩人　下さりませいな。

幸藏　いゝや見脱すことはならぬ。樣子はあらまし後で聞いた、外のことなら留めはしねえが、金故命を捨てるなら、死ぬには及ばぬ、待ちなせえ。

兩人　それぢやといふて。

幸藏　はて、待てといつたら待ちなせえ。

ト兩人をぢつと引きすゑる。これにて兩人思入あつて、

新助　何れのお方か存じませぬが、御親切に有難うござります、お尋ねの上からは何をお隱し申しませう。百兩といふ金がなければ、どうも生きてゐられぬ身體。

お元　お慈悲にはこのまゝに、どうぞ見脱して、

兩人　下さりませ。（と幸藏あたりの捨石に腰をかけ、思入あつて、）

幸藏　かう見たところが二人とも、水の出花の若い同志、後や前の考へなく一途に迫つて言譯に、死なうといふは惡い了簡、聞けば互ひに親もあり又兄弟もある樣子、死んで言譯が立つにもせよ、後に殘つた親達が世間へ恥をかいた上、これまで育つた甲斐もなく、頼りに思ふ子に別れ、その悲

しみはどの位、先立つ不幸を憎むとも、非業な死をば不便に思ひ、朝夕箸の上下しに目の前にちらついて、寐ても寐られることぢやあねえ、その悲しみを思ひやり、必ず死なうと思はつしやるな。見ず知らずのお前達だが、金故命を捨てると聞いては、見逃すことのならねえのも、天より助ける二人の命、騙り取られたその金は、私がこなたに進ぜるから、死なうといふのは止めにしなせえ。

新助　すりや、見ず知らずの私どもへ。

お元　アノ、大枚のお金をば。

幸藏　さあ、陰徳あれば陽報ありと、人の命を助けたなら、此の身に悪くは報うまい、命代りの百兩は私が二人に進ぜよう。

兩人　えゝ、有難うござります。

幸藏　然し、こゝに金を持つてゐねえから、私が金を持つて來るまで、暫くこゝに待つてゐねえ。

兩人　畏まりましてござります。

幸藏　必ず外へ行きなさんなよ。

ト後の屋敷へ目を附け、思入あつて上手へはひる。兩人は嬉しき思入にて、

新助 金のできぬに一途に迫り、二人一緒にこの川へ、身を投げようと思つたも、

お元 思ひがけない今のお方に、危ふい命を助けられ、

新助 騙り取られしその金まで、下されんとは產神の、神の助けであつたるか。

お元 死にたう思うた死神が、

新助 放れて見れば二人とも、

お元 危ふい事で、

兩人 あつたなア。（ト嬉しき思入あつて、お元癪のさし込むこなし。）

お元 あいたゝゝゝ。

新助 これお元、どうぞしたのか。

お元 折惡い持病の癪が。（ト胸先を押へ苦しむ。）

新助 おゝ尤もだ〱、死なうと思ふ心がゆるみ、それで癪が起つたのだ、どれ〱おれが押してやらう。

ト新助介抱する。と與惣兵衞下手より出來りて、

與惣 火の用心々々。（ト兩人を見て、）これ〱、こなた衆は何をしてゐるのだ、往來の者なら通らつし

やい〳〵。
新助　へい、おつしやる通り、往來の者でござりますが、連の女が癪が起り、歩くことができませぬ。暫くこれに、お置きなされて下さりませ。
與惣（提灯で兩人を見て、）はあ、病人でござるか、それは嘸困らしやらう。式臺へ連れて來て、介抱さつしやい。
新助　それは有難うござります、お言葉に甘へまして、暫く拜借いたしまする。さあお元、あそこへ來やれ。
お元　あい〳〵。（トお元を連れ式臺の上へ來る。與惣兵衛も上へあがり、）
與惣　まだ雪があるかして、私なども病氣がおこり、膝が釣つて困ります。もし藥でものまつしやるなら、湯がぬるんでゐるから進ぜませう。
新助　有難うござりますが、牛膽藥を持合せませぬ。
與惣　それは困らつしやらう、ゆつくりと休んで行かつしやい。
　　ト屋臺へ上り戸を閉める、新助介抱しながら、
新助　どうだ、少しはいゝか。

お元　どうもまだ、をさまらぬわいな。

新助　もうちつとだ、辛抱しろ〳〵。

トお元の胸先を押へ介抱する。この見得、時の鐘にて道具廻る。

（稻毛屋敷玄關の場）――本舞臺三間の間式臺附の玄關、左右黑塗り間平棧のある杉戶、正面は塗骨障子、その後ろは大形の襖、上の方屛、下の方雨戶のしまれる屋臺、上下黑塀にて見切り、總て稻毛屋敷玄關先の體。玄關に鐵行燈をおき、こゝに稻毛の家臣杉田主膳更けたる打扮にて、稻毛の家臣源吾と掛盤の火鉢にあたり、茶道珍才控へてゐる。

源吾　主膳樣、よほど夜はつまりましてござりますな。

主膳　されば、日の長くなつたのは、さのみ眼にたゝぬが、夜は大きに短うなつた。

珍才　そのせゐかこの頃は、睡くつてなりませぬ。

源吾　夜が短くなつて、睡いとはどうでござる。

珍才　はて、夜が短くなれば、眠る間が短くなりまする。

源吾　そりや私宅にあらば兎も角も、斯くお夜詰をするには、夜の短くなる方が睡くござらぬ。

珍才　そりやお手前樣などは、起きてござるからさうでござらうが、この珍才などは宵ッから居睡つてをりますから、夜が短くなると寐が足らぬから、睡うござります。
主膳　株で珍才が不埋窟か、寐ると申すお夜詰が、どこにあるものだ、以來きつと愼んだがよい。
珍才　へい、どう愼んじも睡くなりまする。
主膳　それが心の油斷からぢや。殊にこの節物騷にて、稻葉幸藏といふ盜賊が、大小名へ忍び入り金銀を奪ふ由、寸の間も油斷がならぬ、必ず寐ることはならぬぞ。
珍才　畏まりました。
源吾　いや、安心ならぬことぢや。
珍才　もし私が睡りましたら、如何やうとも御存分になされませ。
源吾　面白い〳〵、居睡りをするが最後、頭をぴつしやりとやりますぞ。
珍才　よろしうござる、寐たことならお打ちなされませ。
主膳　いやさう定まつたら、よもや寐ることでもあるまい。最早九つに間もあるまい、部屋々々を見廻つてまゐらう。
源吾　畏まりましてござりまする。（ト源吾先に立ち手雪洞を灯す、主膳立上りて、）

主膳　こりや珍才、必ず寐ることはならぬぞ。

珍才　心得てござりまする。

主膳　源吾殿、さあ參らう。

ト時の鐘にて兩人下の方へはひる。珍才後を見てそのまゝ横になり、

珍才　頭ぐらゐ張られても、寐る内が極樂だ。どれ、鬼のゐない内に、とろ〳〵とやらうか。

ト玄關の障子を閉める。凄き合方になり、下手より幸藏紺の手拭にて頰冠りをし、半纏を裏返し黑八丈の半纏となし、紺の股引尻端折りにて出來り、障子をそつと明け、上手杉戸の錠前を見て思入。この跫音に珍才寐てゐながら、

そこへござつたのは源吾殿か、まことに睡くツてならぬから、約束の通り頭を張つて、ちつとの内寐かして下され。後生になる〳〵。

ト寐ぼけた聲で言ふ、幸藏思入あつて珍才の頭を打つ、

あゝ、これで寐心がいゝ、、ムニヤ〳〵。

ト珍才鼾をかき寐入りし思入。幸藏奥の間へ行き、思入あつて杉戸の棧を足掛りに上り、欄間の障子を明けて内へ忍び込む。こゝへ源吾出來り珍才を見て、

源吾　もう珍才め寐てしまつた、大方こんなことだらうと思つた。どれ、頭をくらはしてやらうか　それ、約束だぞ。(ト珍才の頭を打つ、珍才起上り、)
珍才　あいたゝゝゝ。これ源吾殿、何で頭を打たつしやるのだ。
源吾　約束だから打つたのだ。
珍才　さう幾度も打たれて合ふものか。
源吾　なに、幾度も打つものか。
珍才　たつた今打つたぢやあないか。
源吾　そりやあこなたが寐ぼけたのだ。
珍才　それぢやあ夢かしらぬ、はて、夢にしちやあ痛かつた。
源吾　何をたはけたことを。
珍才　どうぞ後生だから、主膳樣のおいでまで、とろ〳〵とやらして下さりませ。
源吾　えゝ、さうも睡いものか、一つ打つたから許してやらう。
珍才　それは忝ない。どれ御馳走にならうか。(ト橫になる。)
源吾　いや、呆れたものだ。

ト下手へはひる。と上手欄間より幸藏蒔繪の手箱を抱へ出來り、杉戸より飛下り四邊へ思入あつて、箱の中より百兩包みを出し懐へ入れ、箱をそこへおき、頷いて下手へ行かうとする。下手より主膳出て來るに、幸藏びつくりして、玄關の腰羽目を足代に梁へ上り隱れゐる。主膳四邊を見て、

主膳　この源吾は何れへ行きしか、扨々若い者といふものは、世話の燒けたことぢや。（ト上手欄間へ思入あつて、）はて心得ぬ、欄間の障子の明いてあるは、むう。このほど世上に噂ある稻葉といへる盜賊は、天井欄間なんどより忍び入るとの風說、もしや御殿へ。

ト四邊へ思入。珍才寐ぼけしこなしにて、

珍才　後生だから、もうちつと寐かして下され。（ト言ひながら足を延ばし、行燈をひつくり返す。）

主膳　えゝ、粗相千萬な。源吾殿、灯を早く〳〵。

ト暗がりの思入。幸藏梁より下りてうまいと思入あつて、窺ひながら下手へ行く。この時源吾雪洞を持ち、つか〳〵と出來る。是にてびつくりなし板羽目へべつたりと附く、源吾心附かず本舞臺へ來る。

源吾　主膳樣、何事でござりまする。

主膳　源吾殿、欄間を見られしよ。

源吾　どれ、（ト雪洞を上げ上手を見る。この間に幸藏頷いて下手へはひる。兩人はこれを知らず、）どうして障子が。

主膳　もしや御殿へ盗賊が。
源吾　え、（トおどろき手箱を見附けしや、）この手箱は。
主膳　こりやお納戸金を入れ置くお手箱、これがこゝにあるからは、まさしく御殿へ盗賊が、忍び入りしに疑ひなし。
源吾　さうだ。（ト行きかけるを、）
主膳　あいや、源吾殿何れへござる。
源吾　盗賊の後追ひかけ、
主膳　いや、かほどの働きなすものが、うか〳〵なしてこゝにをらうや。
源吾　それぢやといふて。
主膳　はて、待てと申さば、先づ〳〵待たれよ。
源吾　これといふのも珍才が、居眠りをなせし故。
　　ト源吾珍才の頭をくらはす、珍才びつくりして飛起き、眞面目になり、
珍才　源吾殿、地震でござるか。
源吾　えゝ、泥坊がはひつたわえ。

珍才　え、どろばう〳〵。

主膳　あこれ、御家の瑕瑾ぢや。窃にしやれ。

ト時の鐘にて、この道具廻る。

（元の辻番の場）——本舞臺元の辻番の道具へ戻る。と、やはり新助お元の胸を押へてゐる。と、正面の黒塀の蔭へ幸藏出で、見越の松へ上り忍び返しを引つたくり、用水桶を足代にひらりと飛下り、手拭を取り半纏をひつくり返して着、元の唐棧になり、四邊を窺ひ、辻番にゐる兩人を見て、

幸藏　そこにゐるのは、今の衆か。

新助　さうおつしやるは、先刻のお方。（トお元を介抱しながら下手へ來て、）お早うござりましたな。

幸藏　それ、約束の百兩。（ト懐より百兩包を出し、新助に渡す。）

新助　すりや、この金子を下さりますとか。

幸藏　お前方に上げるのさ。

新助　命の親の旦那樣。

お元　何とお禮を申さうやら、

兩人　え丶有難うございます。（ト金をいたゞき嬉しき思入。）

新助　してあなた樣には、お宅は何れで、名は何とおつしやりますか、承りたうございまする。私ことは。（ト言ひかけるを押へて、）

幸藏　あいやその名は聞くに及ばぬ。仔細あつて私が方の名も名乘らねば、言はず語らず、命助けしその金は天道よりの卽ち賜物、忝ないと思ふなら、この後親へ孝行に、必ず死なうなぞといふ、一途な心を出しなさんな。

新助　御親切なるその御異見。

お元　死んでも忘れはいたしませぬ。

幸藏　いや、死ぬといふのは言はねえことだ。命を大事に末長く、夫婦になつて暮しなせえ。

兩人　有難うございます。

幸藏　もう今夜も九つ前、定めて家で案じてゐよう、殊には金を持つてゐれば、夜更けぬ中に少しも早く。

兩人　左樣なれば、このまゝに。

幸藏　緣があつたら又重ねて。

兩人　お目にかゝるでござりませう。

ト唄になり、新助お元は花道へはひる。幸藏後を見送り思入あつて、

幸藏　見ず知らずの二人が命、助けてやつたあの金は、こゝの屋敷のお納戸金、人の物で人を助け、思はぬ功徳をしてやつたが、悦びあれば悲しみと、今夜御殿の夜詰の人が定めて難儀するだらう。然し忍び返しを打ちこはし、塀を乗越え出て來たから、外からはひつた泥坊と、夜詰の人に疑ひの、これでかゝる氣遣ひなし、

ト此内辻番より與惣兵衛出かゝり窺ひゐて、これを聞きびつくりなす。幸藏思入あつて、

この駕籠屋はどうしたか、うか／＼こゝに待つてもゐられぬ、あゝ仕方がない、歩いて行かうか。

ト時の鐘になり、幸藏思入あつて下手へ行かうとする、こゝへ與惣兵衛つか／＼と出て、

與惣　盗人どの、待たつしやい。

幸藏　や、なに、盗人とは。

與惣　こなたが今の間はず語り、後でとつくり聞きました。

幸藏　聞いたとあれば隱すに及ばぬ、いかにも、私は盗人だが、さういふこなたは。

與惣　辻を固むる足輕でござりまする。

幸藏　その足輕どのが、何で私を。

與惣　呼留めましたは盜人どの、こなたにちつと頼みがござる。

幸藏　なに、私に頼みとは。

與惣　外でもない、この親仁の命を取つて貰ひたい。

幸藏　何と言はつしやる。（ト捨石へ腰をかける、與惣兵衛思入あつて、）

與惣　人の命も助けるこなた、情の道も辨へし盜人どの故私が頼み。今辻番で聞いてゐれば、この屋敷へ忍び込みお納戸金を百兩盜み、塀を乘越し出たとのこと、辻を固むる役目故取押へねばならねけれど、こなたは血氣盛の盜人、足腰さへも人並に利かぬ親仁が捉へられうか、とあつてみすみす盜人の眼前あるを見脱しては、一合たりとも殿樣より、御扶持を頂戴いたしますれば、役目がどうも濟みまさぬ。それ故こなたの手にかゝり、命を捨つれば親仁めも、役目を思ひ盜人を取押へに出て殺されしかと、お上にて思召せば、それでこの身の役目も立つ。もう六十も越したれば、死んでもをしうない身體、どうぞ殺して盜人どの、私に忠義を立てさせて下され。

ト與惣兵衛思入にて言ふ。幸藏不便なといふ思入にて、

幸藏　同じ人でも侍の交はりなせば魂が、これほどまでに違ふものか。役目も輕い辻足輕、僅な扶持を

貰ふ身で、御恩を捨てず命をば、捨てる覺悟はあつぱれ感心、いかに非道な盜人でも、こなたがどうして殺されう。その心根を聞く上は、この場でこなたの繩にかゝり、手柄にさして進ぜたいが、願ひある身に今こゝで、どうも命が捨て難い、こなた、忠義を無にするは、本意ならねど此のまゝに、私を見脫し助けて下さい。

與惣　情深いこなた故、殺し難くもあらうけれど、刄向うたとて年寄を、所詮殺さぬ氣性を見込み、事を分けての私が賴み、慈悲ぢや情ぢや盜人どの、どうぞ殺して下されい。

幸藏　その賴みはこつちから、どうぞ此のまゝ逃して下され、その替りには近い内、盜んだ金はもともとへ、きつと返しに來るほどに、暫時の間忠義を捨て、助けて下され親仁どの。これ、手を合して拜む〳〵。

與惣　いえ〳〵、こなたより私の方から、手を合してをがみます〳〵。

幸藏　いや〳〵私から。

兩人　拜む〳〵、拜むわいの。（ト兩人手を合してをがむ。與惣兵衛は是非なき思入にて、）

與惣　あゝ、そんならどうでも殺しては下されぬか、その情深い心にて、何故盜みをさつしやりますぞ。

幸藏　さあ、悪いことゝは知りながら、生れ附いての盜み根性、我と我身に異見なし、盜み心は止めよ

うと心に錠をおろしても、止められぬのはこの手の鍵、金を見るとほしくなり、どんな締りのある所でも忍んではひるが譬にいふ、國に盗賊家に鼠、どうで終ひは天の罰地獄落しに獄卒の、手にかゝるのを知りながら、今日が日までも止められぬは、何と因果なことではないか、

與惣　その話を聞くにつけ、思ひ出すは我總領、庚申の夜の生れ故、心にかゝりある僧に人相を見て貰ひしところ、盗人になる相なりと詳しい教に不便ながら、七夜の祝ひが親子の別れ、臍緒書を守袋へ入れ、産神樣の鳥居先へ捨てゝ丁度三十年、死んだか生きたか便りも知れず、こなたを見れば似寄りの年配、私の倅もこのやうに大方盗みをするであらうと、年寄の思ひ過しに、他人のやうには思ひませぬわいの。

ト涙を拭ひながら言ふ、幸藏これを聞き、扨はといふ思入。

幸藏　むう、そんならこなたの總領は、庚申の夜の生れ故水子の中に捨てたとか、してその守袋の臍緒には、何と記してありましたな。

與惣　はい、「長寛二年八月四日庚申の夜の誕生、與惣兵衛倅與吉」と私が手で書記し、捨てる子でも末を思ひ、出世大黒の御影を添へ、守袋へ入れておきました。

幸藏　すりや臍緒書に、大黒天の御影が添へてあつたとか。（ト與惣兵衛を見て、扨は我親であつたかといふ

思入あつて、)三十年來尋ねてゐたが、そんならこなたが。

與惣　え。

幸藏　いやさ、こなたが尋ぬるその伜は、(ト名乘らうとしたが氣を替へ、)達者に暮してゐるほどに、必ず共に案じなさんな。

與惣　すりや、達者でをりますとか。どうしてそれをこなさんが。

幸藏　知つてゐるのは仲間故。

與惣　そんなら伜も、やはり盗みを。

幸藏　生れ附いた因果にて、私とともに〳〵盗人生業。

與惣　して〳〵、何處にをりますな。

幸藏　何れ何處と遠くもない、鼻の先のこの鎌倉、水子の内に別れた故、何處にどうしてゐられるか、達者な内に逢ひたいと、明暮言はねえことはねえ。

與惣　あゝ、親とはいへどたつた七日、親甲斐もなく邪見にも捨てた私を親と思ひ、朝夕尋ねてをりましたとか。

幸藏　そりやあ僅七日でも、親子の縁を結んだからは、逢ひたく思ふはこりや人情、私も親に別れた身

だが、善きに附け惡いに附け、思ひ出さぬことはねえ。

與惣　そのやうに親切に、こなたが言うて下さると、年配といひ形容、忰のやうに思はれてなつかしうござるわい。（ト幸藏に縋り思入、幸藏も術なきこなし。）

幸藏　さう思ふのも尤もだが、私でさへこなさんが親のやうに思はれて、をかしな心になるものを、年寄つた身では尤もだ。して、こなさんは、今では一人か。

與惣　七年後に女房は死に、百姓業も出來ぬ故、捨てた忰の弟を連れ、お國屋敷にお願ひ申し、今では親子二人にて、この辻番にかすかな暮し。

幸藏　それでは、捨てた息子の下に、弟が一人ありますか。（ト弟に逢ひたき思入。）何にしろこなさんも、實の忰に逢ひたからう、少しも早く様子を知らせ、息子どのを逢はせによこさう。（トこれをしほに逃げる心にて、）さうだ〳〵。（トつか〳〵と行くを引留め、）

與惣　いや盗人どの、待たつしやい。よしないことにうか〳〵と、こなたに頼んだ事を忘れた、行くなら私を殺して下され。

幸藏　さうでもあらうが不思議にも、三十年來尋ねた忰の、在所が知れたら逢つた上で、死んでもおそくはあるまい。

與惣　逢ひたう思うた悴なれど、逢ふことならぬ今宵の仕儀、悴が仲間のこなさんに逢うたは私が今際の悦び、年恰好も似寄りのこなた、悴に逢うたも同じこと、これで望みが果てたれば、どうぞ殺して行つて下され。

幸藏　知らぬ先でも殺されぬに、ましてや親と、さあ、仲間の者の親と知り、どうしてこれが殺されよう。これぱつかりは許して下せえ。

與惣　いゝや許さぬ、許されぬ、悴が行方が知れたる上は、生き延ばゝつては子に迷ひ、命をしむも同じこと、猶々死なねば役目が立たぬ、是非とも殺して下されい。

幸藏　えゝ聞分のない親仁どの、どうでもこなたは殺されぬ。

ト振拂ひ行かうとするを、與惣兵衛縋り留めて、

與惣　どうぞ殺して下されい。

ト尚も幸藏に武者振りついて留める、幸藏是非なく手荒く振拂ふ、そのはずみに與惣兵衛脾腹を打ち、うんと悶絶しどうと倒れるに、幸藏寄らうとして、

幸藏　許して下せえ、親父様。

と愁ひの思入、この時下手より以前の駕舁□◎出來りて、

□◎　旦那、お待遠でござりました。

幸藏　駕舁か、急いでくれ。(ト四つ手駕籠へ手早く乘る。)

□◎　畏りました。

ト駕籠を舁き上げ、花道へ行きかける。と花道より與之助足早に出來り、駕籠と花道にて行逢ひ、與之助は舞臺へ來り、駕籠はよき所にて杖をする。與之助與惣兵衛に躓きびつくりして、

與之　や、こりや親父樣か。

トこの時駕籠の垂を上げ、幸藏は舞臺を見て、手を合せるを木の頭。與之助は與惣兵衛を抱起して、

親父さまいなう。

ト呼ばゝる。船の騒ぎ唄にて駕籠は逸散に花道へはひる。與之助は與惣兵衛を呼かける。この見得よろしく、

ひやうし幕

と時の鐘にてつなぎ、直に引返す。

(若菜屋の場)――本舞臺三間の間常足の二重屋體、正面暖簾口、上手に戸棚、下手は質帳をかけし壁、上手には障子屋體、いつもの所門口。下の方は白壁の土藏、雪の下といふ札あり。用水桶、總て

若菜屋店先の道具、二重に角行燈を灯し夜の體。こゝに山井養仙薬箱をなほし調合してゐる、丁稚三太手燭を持ちて側に控へ、門口に養仙の供ひん助煙草を喫みゐる。

三太　もし養仙さん、此間いやうな嚏薬があるなら、おくんなせえな。

養仙　生憎今日は持ち合はさぬて。

三太　へい、そんなことを言つて、くれめえと思つて。

養仙　仁術を施す醫者が、僞りを言ふものか。

三太　仁術は入らねえから、嚏薬をおくんなせえな。

ひん　小僧どん、寐小便の薬はあるがやらうか。

三太　何をこのひん助め、手前にくれと言やあしねえわ。

ひん　寐小便と言はれて腹を立つたな。

三太　立てねえでどうするものだ。

養仙　これ〳〵、何もそんなに腹を立つことはない、嚏薬の代りに希代な薬をやらうか。

三太　はあゝ、そいつあよく利くだらう。

養仙　まだ何とも言ひはしないわ。

三太　道理でさつぱり分からなんだ。
養仙　愚老家傳の忘れ藥といふものがあるが、これは天竺靈鷲山般得の塚に生ぜし茗荷の細末、これを茶の中へ入れて吞ます時は、いかなる記憶のよいものでも、物忘れをすること奇々妙々、至つて高料なもの故、宿下りの小遣ひがあるなら、百孔ばかり賣つてやらうか。
三太　そいつあ有難い、丁度こゝに天保があるから、これだけ賣つておくんなせえ。
ト守袋より百錢を出し渡す、養仙藥籠より紙の袋へ入りし藥を出して紙に包み、
養仙　まづ、試みはこの位だ。（ト渡す、三太取つて、）
三太　こりやあ大そう高いものだ。
養仙　はて、天竺渡りの藥だ、安くは賣れない。
三太　なに、高いのはいゝが、藪醫者の藥だから利けばいゝが。（ト言ひながら奥へはひる。）
ひん　いや、子供は正直なものだ。
養仙　何を、おのれまでが。（ト睨む、奥より下女おせん出來りて、）
せん　養仙樣、お藥はできましたか。
養仙　丁度調合いたしたところだ、少々今日は加減をしました。

せん　煎じやうは變りませぬか。

養仙　やはり、常體でようござる。（ト奥より三太盆へ茶碗を二つ載せ持ち出來り、）

三太　養仙樣、お煮花がはひりました。（ト茶臺へ載せて出す。）

養仙　これは忝けない。（ト茶を飲む。）

三太　さあ、ひん助どんも飲みなせえ

ひん　寐小便のお禮かな。

三太　又そんなことを言ふか。（ト盆を振上げる。）

せん　これはしたり、どうしたものだ。

三太　どうすりや、馬の子ができる。

トついと奥へはひろ、とひん助ぼうつとせし思入にて煙草盆を提げ、花道へふら〳〵とはひろ。

せん　もし養仙さま、たいした御樣子でもござりませぬが、後家御樣の御病氣は、何御病氣でござりますな。

養仙　（ぼうつとせし思入にて、）はあゝ、後家御は御病氣でござるかな。

せん　何をおつしやります。御病氣故にお藥をお貰ひ申しますわいな。

養仙　左樣でござつたか、一向に存じ申さぬ。
せん　これはしたり、たつた今お貰ひ申しましたに。
養仙　左樣なことがあつたかしらぬが、愚老はたと失念いたした、宅へ歸つて愚妻に承はつてまゐらう。
ト養仙匙を持つたまゝ、跣足にてふら〳〵と花道へはひる、おせん呆れて、
せん　こりやまあ養仙樣には、どうなされたことぢややら、あの樣子ではこのお藥も、どんな調合がしてあるも知れぬ。こりやめつたには上げられぬわいな。
ト藥包みを持ち奥へはひる、引違へて三太出來りて、
三太　藪醫者の藥にしては、めつぽふな利きやうだ、藥箱を忘れて行つたこそ幸ひ。殘りの藥を盗んでやらう。（ト藥箱の抽出しより以前の藥包みと百錢を出し、）殘りの藥をせしめた上、天保錢までとは有難い。早く誰ぞに飲ましたいものだ。
ト花道より駒田久六、村井傳藏出來り門口にて、
兩人　頼まう〳〵。
三太　そりや來た〳〵。どちらからおいでなされました。
久六　我々は三浦の家來、此の家の娘若草どのゝ儀につき、

傳藏　後家御に面談がいたしたい、左樣申してくりやれ。

三太　畏まりました。（ト奥へはひろ、引違へて番頭佐五八出來りて、）

佐五　これは〳〵御兩所樣。ようこそおいで遊ばしました。小僧よ。お茶を上げぬか。

三太　はい〳〵。（ト奥より茶を汲み持來りて、）はい、お茶をお上りなされませ。（ト兩人へ出す。）

久六　あいや、構やるな〳〵。（ト飲みながら、）

傳藏　これは結構な茶でござる。

三太　よろしければ、もう一ぱい差上げませうか。

兩人　むゝ、もう一ぱいくりやれ、（ト三太茶碗を持ち奥へはひろ、兩人ぼうとせし思入。）

佐五　して御兩所樣のおいでは、何御用でござりますな。

久六　我々ども參りしは、（トしやに構へ、忘れし思入。）村井氏、何でござつたッけな。

傳藏　されば、はたと失念仕ッた。

佐五　それは怪しからぬことでござりまする。

三太　（茶を汲み持來りて、）へい、お茶をお上りなされませ。

ト兩人茶を飲み、考へてゐる思入。

傳藏　駒田氏、少しは思ひ出されましたかな。
久六　一向思ひ出されませぬ。
佐五　それでは、御用の趣は。
久六　何であつたか、忘れてしまうた。
傳藏　とくと考へてまゐるであらう。
佐五　それがよろしうございませう。（ト兩人ト駄と雪駄と跛に穿き、花道へ行き、）
久六　どこへ御用を落して來たか。
傳藏　占にでも見て貰はう。
ト兩人跛を引きながら花道へはひる。三太これを見て踊りながら奧へはひる。佐五八見送りて、
佐五　二人が二人、口上を忘れるとは合點が行かね、狐にでもつまゝれはせぬか。
ト帳を附け始める。ト花道より家主佐次郎兵衞出來りて、
佐次　いや御免なせえ、家主の佐次郎兵衞でござる。
佐五　これは大家樣、ようおいでなされました。
三太（奧より茶を汲み、持來りて、）はい、お茶をお上りなされませ。

佐次（茶を飲みながら）小僧、寐小便は止んだか。
三太　大家にお世話さ。
佐次　お茶でもおくれ。（ト茶碗を出す、三太取つて奥へはひる。）
佐五　ときに、大家樣、何ぞ御用でござりますか。
佐次　されば、何か用があつて來たが、番頭そなたは知らぬか。
佐五　なに、私が存じませう。
佐次　はて、困つたことだなあ。
佐五　まあ、とつくりと考へて御覽じませ。
佐次　あゝ、思ひ出されゝばよいが。
ト花道より誹坊主西念、伏鉦と撞木を持ちて先に立ち、同行の者一、二後より從ひ出來り
同一　扨、今夜は若菜屋の、去年死なれた旦那どのゝ、一周忌の百萬遍、
同二　定めし富家のことなれば、御馳走はたつぷりであらう。
西念　然し、精進物では呑めませぬな、たいがいな御馳走より、あの美しい若後家の、お酌を願ひたいものだ。

二人　大きに左樣さ、は丶丶丶丶。
三人　南無阿彌陀佛々々。（ト門口へ來て、）
西念　御免下され、百萬遍の講中でござります。（ト内へはひる。）
佐五　これは西念和尙に御同行衆、今晩は御苦勞にござりまする。
西念　此間のやうでござつたが、もう一周忌でござりますな。
同一　月日のたつは早いもので、まだ二月か三月と思ふ内、直流れになりまする。
同二　違ひござりませぬ。（ト奥より三太盆へ茶碗を載せて出來りて、）
三太　はい、お茶をお上りなされませ。
三人　いや、構はつしやるな〳〵。（ト三人茶を飲む。）
佐次　これ〳〵西念和尙、こなた私が用を知らぬか。
西念　いえ、何だか存じませぬ。
佐次　あゝ、門徒物知らずといふが、淨土もやつぱり物知らずだな。
西念　それはさうと同行衆、こちらへは何しにまゐつたのぢやな。
二人　されば、何でござりましたか。

佐五　いや、これは怪しからぬ、お前方は一周忌の、百萬遍にござつたのだ。
三人　さうでござつたかな。（ト不審な顔をする。）
佐次　だいぶ連ができて來たわえ。
三太　いや、藥の利目は奇々妙々。
　ト盆を持ち踊りながら奥へはひる。と花道より以前の久六、傳藏出來りて、
久六　村井氏何でござつたな。明日御殿に尾半扇玉新玉の俄狂言がある故、後家にも見物に參れと、かやう申すのでござつたな。
傳藏　左樣でござる。何の造作もないことを、はたと失念仕ッた。（ト言ひながら舞臺へ來て、）
兩人　頼まう〳〵。
佐五　これは御兩所樣、またいらつしやりましたか。
久六　途中にて使ひの趣、思ひ出して罷り歸つた。
佐五　それはよろしうござりました。
傳藏　急いでこなたへまゐつたせるか、咽喉がかわいてならぬ。（ト奥より三太茶を持つて出來り、）
三太　はい、お茶をお上りなされませ。

久六　只今所望いたさうと存じたところだ。（ト兩人茶を飲み、）村井氏、お使の趣、演舌めされ。
傳藏　畏ッてござる。えへん〳〵。駒田氏何と申すのでござつたな。
久六　身共は一向存じ申さぬ。
佐五　又お忘れでござりましたか。
久六　これは粗相。
傳藏　出なほしてまゐらう。（ト兩人眞面目に花道へはひる。）
佐五　いや、呆れた人達だ。
佐次　あのやうな、立派なお侍様でさへ、物忘れをさつしやるもの、家Hなどはあたりまへだ。
佐五　ときに西念さま、百萬遍をお始め下さりませぬか。
西念　さあ、初めは初めようが、念佛は何と申したか。
佐五　これは怪しからぬ、坊主が念佛を忘れるといふのがあるものか。
西念　ところをさつぱりと忘れてしまつた。同行衆、念佛を知つてござるか。
同一　されば、念佛はあまかつたか、辛かつたか。
同二　久しく食はぬから、忘れてしまつた。

三太　いや〳〵、念佛を忘れるとは面白い〳〵、もつとお茶を上げませうか。

皆々　もう一ぱい貰ひたい。

三太　いや〳〵、しめ〳〵。（下奥へはひる。）

西念　何と番頭どの、念佛を知つてござるなら、教へてくれぬか。

佐五　何の造作もない、南無阿彌陀佛さ。

西念　なるほど、さう言はれて見れば聞いたやうでござる。なあむ―何とかいふのであつたな。

佐五　阿彌陀佛さ。

西念　阿彌陀佛さ。

佐五　そのツさは入らない。

西念　はー、念佛にツさは入らぬかな。

佐次　ツさをいれずば、壁の持が惡からう。

佐五　何を言はつしやる。

同一　何と番頭どの、百萬遍の稽古がしたいが。

同二　教へては下されぬか。

佐五　えゝ、忙しいけれども、仕方がない、さあ〳〵音頭を取るから、私が言ふ通りにやんなせえ。

三人　合點ぢや〳〵。

佐次　おれも念佛の助にはひらう。

西念　これは御奇特なことでござる。

佐五　（鉦をたゝきながら、）なむあみだんぶつ、

皆々　なむあみだんぶつ。

佐五　なむあみだんぶつ。

皆々　なむあみだんぶつ。

佐五　いや、うまいもの〳〵。

西念　扨々、念佛といふものは、

三人　覺え難いものだ。

佐五　いや、呆れた人達だ。

ト百萬遍の念佛にてこの道具廻る。

（若菜屋裏手の場）――本舞臺上の方白壁の土藏の後ろ。下の方一面忍び返し附の黑塀。見越の松。總て若菜屋裏手の模樣。と時の鐘通り神樂になり、花道より與之助頬冠りにて出來りて、

與之　一昨日の晩お屋敷にて、お納戸金を百兩盜み、塀を越したる盜人を父樣が呼留めて、取押へねばならぬけれど、年寄りの身に及ばねば、殺して行けとおつしやつたを言譯なして逃げる折、脾腹を打たれて暫しの氣絕、折よく私が戻りかゝり、介抱なして樣子を聞けば、庚申の夜の生れにて、七夜に捨てし我兄に年恰好が似寄りとやら、もし兄にてはなかつたかと父樣が後でのお話し、それを屋敷の者が聞き、父樣は盜人の手引をなせし同類と、疑ひかゝつて嚴しい詮議、その夜御殿のお夜詰よりお組頭の主膳樣、役目を嫉む朋輩が何でも勝手を知つた者と主膳樣にあてつけて、お組下故猶更に御宥免なく父樣には、問注所へ引渡され、昨日から獄屋の住ひ、また主膳樣にも遠慮のお咎め。どうぞしてその百兩の金を調へお上へ納め、御恩にあづかる主膳樣、附いては親の苦しみを助けたいと一途に思ひ、夜の目も寐ずに步いても、天から降るか地から湧かねば所詮出來よう當はない、これが僅なことなればお慈悲深い若菜屋の、後家御樣へお願ひまをさば、お貸しなされて下されうが、大枚百兩といふ金をどう御無心が申されう。うか〳〵步いて來たが、こゝは若菜屋のお庭口。（ト塀の內へ思入あつて、）あゝあるところにはある金も、自由にならぬ身貧

な暮し、そでないことも親の爲め、いつそ今宵忍び込み、あゝいや／＼、止しにしませう／＼。いかに親の命が助けたいとて、御恩になつた後家御樣へ、御難儀かけては此の身の罰、大道樣にお許しなされぬ。あゝ悪い心は持ちますまい／＼。（ト身慄ひをして、東の假花道へかゝり思入あつて、）とはいへ金が出來ぬ時は、父樣には獄屋の責、辛い苦患を受けた上刀の錆とおなりなされう。假令この身は盗人の重き仕置に逢はうとも、お助け申すが親への孝行。こりや心を鬼に持つて、御恩を仇で返さにやならぬ。さうぢや／＼。

ト本舞臺へ戻り、塀の側へ來て内を覗く。此の時上手よりひん助煙草盆を提げしまゝ出來り、大きな聲にて、

ひん　こりや／＼。（トいふので、與之助びつくりして、）

與之　へゝい。（ト慄へながら下にゐる。）

ひん　私は山井養仙といふ醫者の供だが、主人を何處へか忘れて來た、もしこゝらで見當てなんだか。

與之　いえ、そのやうな方は存じません。

ひん　はて、どこへ忘れて來たか。（ト花道へはひる、與之助胸を撫おろして、）

與之　疵持つ足にびつくりしたが、これでは盗みも覺束ない。どうぞ首尾よう行けばよいが。

ト思案の思入、唄、時の鐘になり、與之助上手へはひる。これにてこの道具を左右へ引いて取り、後の黒幕を切つて落す。

（若菜屋奥の間の場）――本舞臺三間の間常足の二重屋體。正面更紗の暖簾口、上手に立派なる佛壇、上の方に障子屋體、下の方は建仁寺垣、梅の立木、石燈籠、手水鉢などよろしく、總て若菜屋奥の間の體。

こゝに若菜屋の後家お高、番頭佐五八の手先を押へゐる、佐五八手を捉へられ頭を掻きゐる。

お高　これ番頭どの、わしが懐へ手を入れて、こりや何としやるのぢや。

佐五　何とするとは後家御樣、あなたも粋のやうにもない、たいがい御推量なされませ。

お高　いや、推量しませぬ、夫のない身にこのやうな、亂らなことを言やらうが、淨譽貞林信士といふ私には夫のある身ぢやぞよ。

佐五　へゝい。（ト面目なき思入。）

お高　外の者でもあることか、見世の締りもするその方、このやうなことして濟まうと思ふか、あまりのことで物が言はれぬ。（ト手を放し、突放す。）

佐五　へゝい。（トうづくまる、お高立つて佛壇より位牌を出し、）

お高　これ、この位牌を見や、淨譽貞林信士、法譽妙貞信女と逆朱を入れしは私が法名、並べて彫りしは過行かれし夫と一つになる心、娘に聟を取るまでと浮世の義理に髮は剃らねど、心の中は尼法師、世間を飾る紋附の色氣放れし墨染同然、月雪花の樂しみより朝な夕なのお香の世話、佛いぢりを樂しみに、後家の操を立て通す私を捉へて亂らなこと、それも向後心を改め見世を大事にしてくりやれば、誰も聞人のないこそ幸ひ、この場の事はこの場ぎり違つてと言やれば是非もない、親類衆へも話した上、そなたに暇をやらねばならぬ。位牌の前で番頭どの、二つに一つの返事をしやれ。

ト思入にていふ、佐五八南無三といふ思入にて、傍にある茶碗の水を眼に附け泣く思入にて

佐五　あゝ、後家御樣、あやまり入りました、御免なされて下さりませ。

ト茶碗の水を眼へ附ける。奥よりおせん出でこれを窺ひ、頷いて、有合の硯箱を持ち奥へはひる。

言譯がましうござりますが、本心あなたへ亂らなことを申しましたのでござりませぬ。世間での評判に若菜屋の若後家は、あゝ見えても旦那どのが死なれてからは色狂ひと、世間の噂に、私は聞く度每にどのやうに、悔しいか知れませぬ。（ト茶碗の水を眼に附け、）あなたに限つてそのやうなことのないのは知つてをれど、それとももしやと私が、心にもない不義言ひかけ、色めいたこと

おつしやつたら、とつくり御異見申さうと、思ひのほかに私が御異見を承り、面目もない仕合せながら、操正しいお心を承つて安心なし、嬉し涙がこぼれます。

ト この折おせん墨を入れし茶碗と取換へおく、佐五八それを知らず眼へ墨を附け、しく／＼と泣く思入。

お高　そなたがさういふ心なら、私は元よりこの位牌の旦那樣が嘸御悦び、この後とても見世の締り、元より心にないことなれば、この場のことはこの場ぎり、沙汰なしにして下さりませ。よう氣を附けてたもいなう。

佐五　そりやおつしやるまでもござりませぬ。

お高　兎角うるさい人の口、目つまにかゝれば無き名が立つ、そなたは見世へ少しも早う。

佐五　左樣なれば後家御さま。（ト顏を出す、お高見て、）

お高　や、そなたの顏は。

佐五　え、（ト手で撫で、墨が附くのでびつくりし、）はて、めんえうな。

ト 唄になり、佐五八思入あつて奥へはひろ。お高位牌に向ひて、

お高　どうぞ早う跡目をこしらへ、あなたのお側へ參りたうござります。

ト位牌をいたゞき、佛壇へしまふ。合方になり、奥より刀屋新兵衛におせん附いて出來り。

新兵　後家御どの、この間は逢ひませぬ。

お高　これは刀屋の新兵衛樣、いつのまにおいでなされました。

新兵　今しがたこれへまゐり、番頭どのへ不埒の段々、次の間にて承りました。

お高　店の束ねをするものが、あのやうな亂らなこと、御推量下さりませ。

新兵　いやも女の身にて嘸かし心配、推量いたしをります。

せん　そしてまあしら〴〵しい、茶碗の水を眼へ附けて泣く眞似をしてゐなさる故、墨と入替へて、遣趣返しをしてやりましたわいな。

お高　して新兵衛樣には夜に入つて、何ぞ御用でござりますか。

新兵　後家御どの、ひよんな事ができましたて。

お高　ひよんな事とは氣がゝりな、どんな事でござりますぞいな。

新兵　外でもない悴が事、一昨日三浦のお屋敷から、菊一文字の刀の代金百兩お預り申せしところ、騙りに出逢うてそれを盗まれ、常から身持がよからぬ故、言譯なさに乳母の娘、今は藝者のお元を連れ身を投げようとせしところを、さる人に助けられ百兩の金まで貰ひしに、情なやその金は僞

毛の屋敷で盜人に、盜みとられし極印金、それ故悴に疑ひかゝり、可愛や乳母の娘まで繩目に逢うて問注所へ、今日引かれて行きました。

兩人　えゝ。(トびつくりする。)

新兵　たつた一人の悴故大事に思ひ不斷から、やかましう言過ぎて盜人にせし今の後悔、推量して下さりませ。(ト淚を拭ふ。)

お高　えゝ何故さういふことならば、私に一言いうてはくれぬぞ。百兩はおろか千兩でも、金で命が買はれうか、情ないことしてくれたなあ。(トハッと泣伏す、おせんも思入あつて、)

せん　此方樣でもお孃樣が、お厭だとおつしやるを、三浦樣で無理無體妾にくれいとおしつけわざ、後家御樣にもそれを氣病に、一昨日からお勝れなされず、そのお淚の乾かぬ中に、また御親類の新助樣が、思ひがけないお身のお難儀、憚りながらお二人樣の、お心の內が思ひやられ、おいとしう存じますわいな。

新兵　おゝよう悔みを言うてくれた、定めて話さば後家御樣にも、案じさつしやらうと思うたが、言はずにゐられぬ親類仲、餘計に苦勞をかけまする。

お高　同じ苦勞もこちの娘は、假令妾になつたとて命にかゝはることでもなし、新助どのは身の疑ひ、

言譯たゝぬその時は、どうしたらようござりませうぞいな。
新兵　元より知らぬことなれど、言譯立たねば是非がない、此の上は神佛のお力借りて忰が命、救うてお貰ひ申さにやならぬ。
お高　これを思へば世の中に、子のないお人が羨しい。
新兵　後家御どの。
お高　新兵衛さま。
新兵　あゝ子は、三界の、
兩人　縷ぢやなあ。
　ト兩人よろしく愁ひの思入。と、ばた〳〵になり、下手にて佐五八の聲にて「うぬ盜人め、うしやあがれ〳〵」といふ聲して、與之助の襟上を執りて佐五八引立て出來り、續いて佐次郎兵衞、西念、同行、三太、手代二人棒を持ちて、わや〳〵と出來る。
皆々　盜人がはひりました。
　後家御樣、盜人がはひりました。
佐五　お案じなされますな、取押へましてござりまする。

佐次　何にしろ、こりや問注所へ訴へずばなるまい。
佐五　大家樣、御苦勞ながらお賴み申します。
西念　ついでに寺へも、人を遣らつしやい。
同一　葬式は何時だな。
同二　問注所はどちらかだな。
佐次　今月は北條樣だ。
三太　それぢやあお寺は增上寺か。
新兵　あこれ〳〵、さうてんやわんやに言はずと、まあ〳〵靜にさつしやい〳〵。
佐五　いえ〳〵靜になりませぬ、裏の塀を乘越して、忍びこんだ大盜人。
佐次　何にしろどんな奴だか。
西念　手拭を取つて面を見てやるがよい。
佐五　何だか生ッ白けた奴だ。（ト手拭を取り與之助の顏を見て、）や、こりや辻番の悴の與之助か。
三太　やあ、親孝行だ、親孝行だ。
お高　なに、與之助とや。

せん　ほんに、お前は與之助さん。（ト與之助面目なき思入にて、）
與之　後家御樣、御免なさつて下さりませ。（ト與之助俯向く、お高は合點の行かぬ思入にて、）
お高　思ひがけない、どうしてそなたが。
佐五　どうもかうも入りませぬ、親孝行を賣物に、正直らしく見せかけて、盜みをするに違ひない。
佐次　まだまあ見れば若衆だが、今から盜みをし習つたら、よい盜人になるだらう。
お高　おいやく、その子は親に孝行にて、なかく盜みをするやうな、心立のものではない。そりや間違ひであらうわいの。
佐五　いえく、間違ひではござりませぬ、間違ひないといふ證據がござります。
新兵　なに、證據とは。
佐五　これが親父の與惣兵衞といふ奴、おのが屋敷へ盜人の、手引をなしたといふ噂、親が親故子もやはり、盜みをするに違ひはない。
西念　可愛さうだと思つたが、さう聞けば太い奴だ。
同一　以後の見せしめ、この若衆を、
同二　百萬遍でしめてくれう。

西念　それがい〻〳〵、どれ愚僧が音頭をとらうか。（ト鉢叩をなし、皆々棒を持ち、）

皆々　なむあみだんぶつ〳〵。（ト與之助をくらはす、與之助手を合せて、）

與之　もし番頭様、いづれも様、たつた一言いひたいことがござります、まあ〳〵待つて下さりませ。

ト皆々を拜む。これにて皆々も控へる、與之助涙を拭ひて、

いかにも私はこのお家へ、御恩を仇に百兩の金を盗みにはひりましたが、それも切ない譯あつて。何をお隱し申しませう、私の親與惣兵衛と申す者、身に覺えない盗人の疑ひ受けて一昨日から、問注所の獄屋の住ひ、譬にもいふこの世の地獄、六十越えし老の身で、嘸や切ないことであらうと、子の心にはあるにもあられず、就いては御恩にあづかりしお組頭の旦那様、これもそれ故、咎めの御遠慮、この御難儀を救はんには、金調へてお上へ納め、お慈悲願ひをいたさうと、思へどはかない身貧な暮し、假令此の身はどのやうな、憂き目に逢ふとも旦那様や、親の苦勞が助けたく、後家御様の御恩をも、顧みませず百兩の金を盗みに忍び入り、捉へられしは天の御罰、これにて親の命もなければ生きて詮ない我身體、打つなりと踏むなりと御存分になされし上、この身に繩かけ問注所へ、お引きなされて下さりませ。刀の錆に身の末は、犬の餌食になりましても、親子一つに死ぬるが樂しみ。もし番頭さま、何れもさま、御存分になされて下さりませ。

ト此の中お高、おせん涙を拭ふ、新兵衛も愁ひの思入にて、

新兵　聞けば聞くほど哀れな話し、身につまされて不便だわい。

佐五　へん、さういふ哀れッぽい事をいふは、此奴等の附目。

佐次　めつたに、それにはのられない。

西念　何にしろ逃げぬやう、ふんじばつておくがいゝ。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト皆々立ちかゝる。お高この時つか〳〵と行き、與之助を圍ひ皆々を留め、

お高　あゝもし皆樣、まあ〳〵待つて下さりませ。

佐次　こりや後家御には。

皆々　何故留めさつしやる。

お高　お留め申すは繩かける、この子が盜人でござりませぬ故。

皆々　や、なんと。

佐五　これは異なことをおつしやります。塀を乘越し忍び込んだを、盜人でないとおつしやるは。

お高　さあ、塀を乘越し、忍んで來たは。

佐五　何でござりますな。
お高　恥かしながらこの高が、密夫ぢやわいなあ。
皆々　やあ。（ト膽をつぶす。）
佐五　むゝ、すりやこの若衆と後家御樣は、密通なされて、
皆々　ござるとか。
お高　夫に別れて閨寂しく、疾うからこの子と言交し、夜な／＼塀を乗越して、私が部屋へ忍んで來たが、阿漕ヶ浦に引く網の度重なつて今宵の仕儀、あらはに言はゞ不義の科、わざと盜みにはひりしと、私、助ける志し、何にも言はぬ、嬉しいわいの。
ト思入にて言ふ。與之助びつくりして、
與之　えゝめつさうなことおつしやりませ、この身にさら／＼覺えのないこと、今も申す通り、親の命が助けたさに、金を盜みにはひつた、盜人でござりまする。
トお高これを打消すやうに冠せて、
お高　あこれ／＼與之助、私を庇うてそのやうに、言うてくれるは嬉しいが、もうかうなつたら包むに及ばぬ、そなたに罪は着せぬほどに、落附いてゐやいの。

與之　それぢやというて、覺えもないこと。

お高　さあ、そなたに科は少しもない、私が方から仕かけた戀路、年端も行かぬそなたを捉へ、道ならぬことするからは、あらはれたその時はと、豫て覺悟の私が身の上、もしお家主樣、この與之助に科はない、私がしだせし不義の科、どうぞこの身に繩かけて、此の子を許して下さりませ。

ト思入にていふ、これにて新兵衛急き込みて、

新兵　そりや本性か、後家御どの。（トお高の胸づくしを取って、）七右衛門殿の死なれてより、年若な身に思ひきつたる二つ髷、七日々々の佛事さへ殘る方なき追善供養、あつぱれ貞女の鑑ぞと、世間へ行ても四方山の話しの序にこなたの自慢、それがかういふ事あつてと、惡事は千里谷七郷ばつと浮名のたつ時は、今日の今まで自慢した、この新兵衛が白髮頭を、人中へ出されうか、見下げ果てたこなたはなあ。

トお高を突き放す。とこの内佐五八佛壇より以前の位牌を出し、お高を引附け、

佐五　これ後家御樣、最前何とおつしやつた、髮は剃らねど尼法師、墨染を着る心だと、この番頭を恥しめたまだその口の乾かぬ中、墨染を着る尼法師が、若衆と不義の色狂ひ、これで濟まうと思はつしやるか。いやさ、淨譽貞林信士といふ、夫に對して濟むまいが。いつそのことに、かう〳〵

かう。

ト位牌にてお高を打つ。

せん　こりやあんまりな番頭どの、なんでこなたは後家御さまを。

佐五　打つてもいゝ、たゝいてもだいじない。

せん　家来の身にてお主さまを。

佐五　いや、おれは打たぬ、この位牌に記しある、旦那様が打たつしやるのだ、なんと言分あるまいが。

せん　それぢやというて。（ト悔しき思入。）

お高　あこれおせん、控へてゐや、何事もこの身の科、人に恨みはないわいの。

トこれにておせん控へる、與之助思入あつて、

與之　いや申し後家御様、此の身の科をお庇ひ下され、盗みを不義と言ひなして、お助け下さるお志し、有難涙がこぼれますが、曇りかすみもないお身に、どうまあ科が着せられませう。もし旦那様、何れも様、盗人に違ひござりませねば、後家御様をお助け下され、この與之助に繩かけて、お引きなされて下さりませ。

お高　いえ〳〵、あの子の言ふのは皆僞り、不義に違ひござりませねば、あの子を助けて私を、御成敗

なされて下さりませ。

與之　いえ〳〵、やつぱり私めを。

お高　いえ〳〵私を。

與之　どうぞ繩かけて、

兩人　下さりませ。（ト兩人にて爭ふ、皆々思入）

佐次　扨々これは困つたことぢや、どちらがどうやら水掛論、こりや鎌倉の問注所へ、持出さずば分かるまい。

西念　あゝ葬式ならば私が掛り。

同一　お役所沙汰は大家樣。

同二　こりやお前樣のお掛りだ。

佐次　兎角近所に事なかれ、いつそ忘れてしまひたいものだ。

三太　忘れたくばお茶でも上れ。

新兵　（思入あつて）數代續きし若菜屋の、暖簾に拘ることながら、內沙汰にては事が濟むまい。

佐五　出る所へ出にや埒は明かぬ。

與之　さうなりましては私が。

お高　濡れぬ前こそ露をも厭へ、もうかうなつた上からは、濟むも濟まぬも、入らぬわいなう。

　ト與之助を引寄せようとする。

佐五　えゝ、舌たるい。（ト立ちかゝるを、新兵衞これとへだてる。）

お高　はて、可愛い。（ト與之助の手を取るを木の頭）ことぢやなあ。

　ト與之助迷惑なる思入、佐五八又立ちかゝるを新兵衞留める。皆々呆れし思入、此の仕組よろしく、

ひやうし　幕

## 三幕目

駿河二丁町大黒屋の場
鎌倉稻瀬川御藏下の場

〔役名――小鼠次郎吉後に稻葉幸藏、大黒屋の息子文四郎、船頭乘切り長吉、慾山撿挍、惡漢三次、肚胸熊、座頭かき市、鼠取りの藥賣り銀次、岩八。大黒屋の女房お大等。〕

（駿河二丁町仲之町の場）――本舞臺三間の間常足の二重屋體、正面に大槌屋といふ柿の暖簾、上手緣起棚、軒口に大槌屋といふ掛行燈。上の方江戸町と門を半分見せ、この内に用水桶、たそや行燈。

下の方路地口、總て駿河二丁町仲之町の體。こゝに槌屋の女房お大女郎の手紙を四五本持ち、下女お仙、若い者千次燭臺の掃除をしてゐる、若い者小助小さな蓋物を持ち、禿ゆかり仕着裝にて、立つてゐる。この見得通り神樂、流行唄にて幕明く。

小助　これ、あの子や、花魁にさう申してくんな、麴漬がちつと甘くなり過ぎましたが、お約束だから上げますと、忘れちやあいかねえよ。

ゆか　あい〳〵。

小助　道でつまんで喰ふめえよ。

ゆか　好かねえ小助どんだヨウ。（ト蓋物を持つて上手門の内へはひる。）

千次　なんの、言はないでもいゝことを、道でつまんで喰ふなどゝ、智慧のない子に智慧をつけるやうなものだ。

小助　ほんに、さうだな。

お仙　何故禿衆といふものは、あのやうに、意地のきたないものだらうね。

小助　あんまり口綺麗なことは言はれない、お前もよッぽど。

お仙　おや、いつ私がつまみ喰ひをしたえ。

小助　誰もしたと言ひもしねえのに。
お大　また喧嘩をするのか、ほんに二人寄ると犬と猿だよ。
お仙　おや、お上さん情ないことをおつしやいますね。
小助　こら犬と猿と言はれたつて、腹を立てなさんな、謂れ因緣のあることだ。何故と言ひねえ、それ茶屋の若い者や女中は、お客樣の先に立つだらう、山王樣でも明神樣でも、お祭りの先に立つのは犬と猿だ。
千次　お祭りの先に立つのは、猿と鷄だわな。
小助　はあ、犬ぢやなかつたか。
お大　お株でそゝツかしいことばかり。そゝツかしいと言へば初瀨小路の春景樣と、雪の下の梅丸樣へこの文をお屆け申してくんな、間違へてはいかないよ。
小助　なに、生業のことは間違ひはしませぬ、ぜんてえお祭りも犬だつたと思ふが。あゝそれ〳〵、犬と猿と雉子だつた。
お大　そりやあ桃太郎のお供だはな。
小助　また間違つたか、はゝゝゝ。

ト花道より慾山撿校撞木杖を突き、座頭かき市、小座頭でぼ市附添ひ出來りて、

慾山　これ〳〵かき市、二丁町の大門をはひると、兩側の茶屋で旨いにほひがするな。

かき　左樣でござりまする、玉子燒のにほひがぷん〳〵としまする。

慾山　むゝ、こりやなか〳〵勘がいゝ。玉子燒のにほひだ。

でぼ　これかき市さん、私や腹が減つてならぬ、早く何ぞ喰はして下さりませ。

かき　今に喰はせるから、辛抱しろ。

慾山　おゝ今朝から飯を喰はせぬから、ひもじからう。さあ〳〵、早く來い〳〵。（ト三人舞臺へ來る。）

お大　これは〳〵慾山樣。

三人　ようゐらつしやいました。

慾山　おゝ、皆變ることもなくて、目出度いな〳〵。

お大　あなた樣も御機嫌よう。

三人　お目出度うござります。

小助　さあ、こちらへお上りなされませいな。

千次　どれ、お手を取りませう。（ト三人の手を取り、上へ上げる。）

小助　かき市さん、よくおいでなさいましたね。

かき　今日はお師匠様のお供で來たから、よい新造を買はして下さい。

小助　畏まりました、よいのを見立て上げませう。

慾山　これかき市、初買ひのこと故、家内の者へ祝儀をやつてくりやれ。

かき　はい〳〵。(ト懐より風呂敷包を出し、中より二百包を出して、)はい、お師匠様からの御祝儀。

お大　これは、有難うございますわいな。

小助　おや〳〵、御祝儀はたつた二百かえ。

かき　はて、座頭の祝儀は、二百ときまつたものだ。

千次　これでも貰はねえよりはましだ。

お大　何にしろ御酒を一つ差上げませう。これ、お肴を早く〳〵。

慾山　あ、いや〳〵その御酒はお預けにしよう。どうで大黒屋へ行けば、呑まねばならぬ酒、今呑むのは無駄なことだ。ときにお上、このかき市に春のこと故、新造を買つてやる積りだが、二朱より安い新造はないかの。

お大　左樣でございます、宿場と違ひまして、御免の場所の二丁町、二朱より安い新造衆はございませ

ぬわいな。

慾山　少々引物でもよいが、三百か四百ぐらゐなのはあるまいか。

お大　御常談をおつしやりませ。

かき　もしお師匠樣、二百や三百は出しますから、とてものことに、よいのを買つて下さりませ。

慾山　おゝ入銀するなら、二朱のを買つてやらう。さあ、少しも早く松山がところへ連れて行つてくりやれ。

小助　はい〳〵畏まりました、してその小僧さんは、こちらへおきませうか。

慾山　いや〳〵、それは座敷へ一緒に連れて行てくりやれ。

小助　何ぞ、御用でもござります故。

慾山　おゝ、この小僧を連れて行くは、座敷へ出る臺の物の殘りを、これに喰はせる積りだ。

かき　不斷肴といふ物はつひに買つたことがない故、かういふ時に小僧なぞに、肴の味を覺えさすのだ。

でぼ　それで今朝からお師匠樣が、晩には旨いものを喰べさす故、お飯を喰べるなとおつしやるから、まだ朝のお飯を喰べませぬ故、腹が減つてなりませぬ。

小助　それは嘸おひもじからう。

慾山　その替り、晩には食傷をさせるわ。
でぽ　いえもう、旨いお肴でなくともよいから、早く何ぞ喰べたうござりまする。
お大　そんなら小僧さんには、こちらで御飯を上げうわいな。
慾山　いや〳〵、それでは臺の物の、殘りを置いて來るのが殘念。
かき　何にしろお師匠樣、早う行かうではござりませぬか。
慾山　おゝ早く行つて、松山の顔が見えぬから、にほひをば嗅ぎたいわい。
小助　そんなら直にお連れ申しませう。コウ千次どん、おらあちつと用があるから、お前お連れ申して
くんな。
千次　いや、有難いね。
慾山　さあ〳〵、誰でもいゝから。
かき　早く連れて行つて下せえ。
でぽ　あゝ、ひもじくつてならない。
千次　どれ、お連れ申さう。
お大　左樣なら、いらつしやりませ。

慾山　これは大きにお世話でござつた。
千次　さあ、おいでなさりませ。
ト慾山先きにかき市、でぽ市附いて上手門の內へはひる。
お大　慾山さんにも困るの。
小助　あんな、あたじけねえ人はねえ。
お大　然し、あれでなくてはお金ができぬわいな。
ト通り神樂流行唄になり、花道より次郎吉紺の腹掛細のぱつち白足袋突かけの草履、羽織尻端折りにて出來ろ、後より藝者おもん、幇間雀八、出來りて、
もん　もし、そこへおいでなさるのは、次郎さんぢやァありませんか。
次郎　おゝ、誰かと思つたら雀八におもんか。
雀八　もし、この間狐拳がござりましたさうだが、私や江戸へ行きました。惜しいことをいたしました。
次郎　今夜隙なら遊びに來ねえ、二分掛でやる積りだ。
雀八　是非參ります。
もん　狐拳と聞きましては、

次郎　それぢやあ一緒に來ねえ。（ト舞臺へ來り、）小助公、どうだ。
小助　これは次郎さん、よくいらつしやいました。
お大　おや次郎さん、どうなさいました、きついお見限りでございますね。
お仙　花魁が毎日、おたづねなさいますわいな。
次郎　此間から來ようと思つたが、この頃流行る風邪を引いて、十日ばかりくすぶつてゐたが、やうやう風邪もすつかり拔け、湯へはひるやうになつたから、狐拳でもして遊ばうと、こつちの方へ出かけて來たのよ。
お大　そりやあよくおいでなさいました。これお仙、松山さんに早くお知せ申して來や。
お仙　畏まりました。嘸花魁もお悦びでございませう。どれ、お知せ申してまゐりませう。
ト上手の門の內へはひる。次郎吉帋掛の隱しより、金を出し紙に包み、
次郎　こりやあ少しばかりだが、お年玉だ。お母あ、みんなにやつてくんな。
お大　これは有難うござります。（ト受取り、三人にやり、）こりやあ、次郎さんからお年玉。
もん　これは思ひがけないところで、
三人　有難うござりまする。（ト辭儀をする。）

雀八　コウ小助どん、下司ばつたことをいふやうだが、百疋のお辭儀は毎日だが、二百疋といふのは滅多にないよ。

小助　こりやあ雀八さんの言ふ通り、立派なお客ほど呉れねえものよ。今も慾山撿挍から二百の祝儀を貰つたのさ。

もん　それでもお辭儀をしにやあならないね。

雀八　その割をして見ると、十六遍お辭儀をしてもいゝのだ。

次郎　コウおらあ汗が出るぜ、いゝ加減に胡麻をすらねえか。

小助　なに、胡麻ぢやあござりませぬ。

兩人　地金でござります。

兩人　何にしろわざと御酒を、これ小助、奥へ行つてお肴の支度を。

小助　畏まりました。(ト奥へはひろ。)

次郎　久しく雀八の聲色を聞かねえの。

雀八　今夜は私の一本槍、高島屋(小團次)をやりませう。

もん　ほんに、雀八さんの高島屋は、出たやうでござりますよ。

次郎　高島屋は眞平だ、おらあどういふものだか嫌ひだよ。

雀八　その癖、次郎さんはよく似てゐなさいますぜ。

次郎　みんながそんなことを言つてならねえ。

　ト此内奥より小助口取、刺身の二つ物を廣蓋へ載せ、燗德利猪口を持ち出來り、

小助　さあ、お一つお上りなさりませ。

お大　鰹でござりますから、お屠蘇はお預かり申しまする。

次郎　その事〳〵、下戸と違つて飮む口ぢやあ、屠蘇なぞはちつともいけねえ。

お大　左樣なら、憚りながら。（ト猪口をさす。）

次郎　さあ、雀八。（ト飮んで雀八に猪口をさす。）

雀八　へい、有難うございます。

もん　どれ、お酌をしませうわいな。

　ト捨ぜりふにて酒宴になる。此内上下より鼠取の藥賣岩八、銀次箱を肩にかけ、幟を持ちて出來り。

兩人　いたづらものはゐないかな〳〵。（ト兩人行合ひ、）

銀次　おゝ、そこへ來たのは岩八か。

岩八　さういふは銀次か、どうだ今日は。
銀次　極くいやだ、まだ三文も取らねえ。
岩八　はて、似たこともあるものだ、おいらもまだ一服も賣らねえ。
銀次　この頃のやうに隙らやあ、何ぞ宗旨を變へにやならねえ。
岩八　さうよ、弘法樣の御夢想でも賣らうか。
銀次　何にしろ、晝飯の錢にありつきたいものだ。
岩八　コウ仲之町の兩側を見りやあ、門並呑んだり喰つたりして、二挺鼓で騷いでゐるに、いたづらものはゐないかと、足手ばかりに歩いても、晝飯の錢に困るとは、何と意氣地のねえことではねえか。
銀次　今度の世に生れるなら、錢のあるとこへ生れて來て、仲之町で一ぺい呑みてえな。
岩八　實にこんなことを思ふと、首でも縊つて死んでしまひたいが、こんたもおれも一人身でねえから、死ぬにも死なれねえわけよ。
銀次　こんな愚痴を言つてもうまらねえ、それよりか暮れねえ中に、米の錢でも取りてえものだ。
岩八　米の錢を持つて歸らねえと、又嚊と喧嘩をしにやあならねえ。

銀次　違えねえ、そんなら岩公。
岩八　早く歸らッし。
兩人　いたづらものはゐないか、いたづらものはゐないか。（ト上下へ別れ行きかける。）
次郎　おい〳〵、岩見銀山々々。
兩人　はい〳〵。（ト歸つて來て、）
岩八　お呼びなさいましたか。
銀次　コウ〳〵おれが先へ返事をしたのだ。
岩八　馬鹿なことを言へ、おれが先だ。（ト兩人爭ふ。）
次郎　あゝこれ、爭ふにやあ及ばねえ、二人ながら買つてやるよ。
兩人　それは有難うござります。
銀次　一服上げますか。
次郎　何さ、みんな買はう。
兩人　えゝ。（トびつくりする。）
雀八　もし次郎さん、そんなに藥を買つて何になさいます。

次郎　隙だといふから、惣仕舞をしてやるのだ。
兩人　それは有難うござりまする。
次郎　小助や、あの人達に一ぺい呑ましてやつてくんねえ。
小助　畏まりました。さあ、お客様から下さるのだから、大きいものでやんなせえ。（ト茶碗を出す。）
銀次　これは〳〵御酒まで下さるとは、有難うござりまする。今もこんだの世には、いゝ衆に生れて仲之町の酒が呑みたいと、申したところでござりました。
岩八　これ、早く廻さねえか、咽喉がぐび〳〵するわえ。
銀次　えゝ忙しないい。（トよろしく酒を飲む。）
次郎　さうして、藥はいくらばかりあるえ。
銀次　はい、みんな賣りましたら一貫ばかりでござりますが、元が山師の藥故、いくらでもようござりまする。
小助　お前の藥は、いくらあるえ。
岩八　なに、私も同じことでござります。
次郎　それぢやあ二人に、これをやつてくんねえ。（ト懷より一分銀を二つ出し、小助に渡す。）

小助　それ、一人前一分づゝだ。

銀次　これは有難うございます。然し、今朝ッから商ひをしませぬから、お釣錢がござりませぬ。

次郎　なに、釣錢にやあ及ばねえ。

岩八　え、あの、お釣錢まで下さいますとか。

銀次　岩公、こいつあ夢ぢやあねえか。

岩八　何にしろ、有難いことだ。（ト兩人箱から藥包を出し、）

兩人　左樣なら、藥をこれへおきます。（ト緣の上へ積上げる。）

次郎　コウ〳〵待つてくんな、おらあとんだことをした。お前方が隙だといふを氣の毒に思つて、ぽんやり買つたが、この藥はしやうがねえ。

銀次　大方そんなことだらうと思つた。

岩八　それぢやあ一方返しますのかね。

次郎　何さ、金はいらねえが、この藥に困るからよ。

雀八　さうさ、齒磨なら湯屋の年玉になるが、鼠取は仕樣がねえ。

小助　藝者衆のことを猫といふから、お年玉に鼠取はどうだね。

もん　若い衆のことを消炭といふから、お前貰つておゝきな。
小助　そりや何故ね。
もん　ねゝ、いゝ、すみとりだからさ。
雀八　とんだこじつけ茶番だ。
次郎　むゝ、いゝことがある、かうせう〳〵。それ、お前の藥をおれが買つて、この人に酒手にやらう、
　又この人の藥をおれが買つて、お前に酒手にやる。これで兩方商ひをしたやうなものだ。
小助　なるほど、これはよいお裁きだ。
銀次　お金をお貰ひ申しまして、又御酒を頂戴して、
岩八　その上藥をお貰ひ申しますとは、
兩人　こんな、有難いことはござりませぬ。
お仙　(上手より出來りて、)もし、花魁がきついお悅びで、直にお連れ申してくれと、くれ〳〵おつしやつ
　てゞございますから、直においでなされませ。
もん　それぢやあ、あちらへお座敷を替へませう。
次郎　大勢で狐拳としようか。

お大　それがよろしうございます。
雀八　私も直にお供いたしませう。
もん　雀さん、また負腹をお立てやないよ。
雀八　なに、お前ぢやあるめえし。
小助　然し、誰でも二分掛けぢやあ揉みますよ。
次郎　そんなら行かうか。
三人　さあ、いらつしやいまし。
お大　これ正八や、見世を氣を附けなよ。
銀次
岩八　これは旦那、有難うございまする。
次郎　たんと呑んで行きねえよ。
皆々　さあ、おいでなさりませ。

ト次郎吉にお大、お仙、おもん、雀八、小助附いて上手門の内へはひる。岩八、銀次見送りて、

銀次　コウ岩八、あやしい錢の遣ひぶりだな。
岩八　さうよ、何でも堅氣の錢ぢやあねえ。

銀次　おいらの考へぢやあ、鎌倉で噂の高い。（ト岩八に囁く、岩八頷いて、）
岩八　それぢやあ、あの、（ト言ひかけるを押へて、）
銀次　これ。（ト四邊へ思入あつて、）鼠取請合藥。
岩八　いたづらものはゐないかな。
銀次　ゐたか〳〵。

ト兩人上手へはひる。これにてこの道具廻る。

（大黒屋二階の場）――木舞臺一面の平舞臺、正面中切の襖、上下塗骨障子屋體、總て大黒屋二階の體。こゝに愁山撿校、かき市酒を呑みゐる、傍にでぼ市臺重の中より慈姑をつまんで食つてゐる。

愁山　かき市、茶屋の者は誰もゐぬか。
かき　いつの間にか、どこへか行つてしまつた。
愁山　客を置きばなしにして行くとは、ひどい奴等だ。
かき　これでぼ市、そこらへ行つて見て來い。
でぼ　見てと言つたとて、動くことができませぬ。

かき　何をそんなに食つたのだ。
でぼ　これをみんな喰べてしまひました。（と臺重を出す。かき市探り見て、）
かき　おや〳〵、この臺重をみんな食つてしまつたか。
慾山　え、あまり物を喰はせるのだに、あゝ惜しいことをした。
でぼ　どうも、嘔吐しさうだから、今に出るかもしれませぬ。
かき　えゝ、きたないことを言ふな。
小助　（出來りて、）旦那、大きにおそなはりました。
慾山　小助か、どうしたものだ、盲人ばかりおいて、酌のしてがないわ。
小助　それぢやあ、藝者衆でも呼びませうか。
慾山　いや〳〵、藝者は呼ぶに及ばぬ、隣りの騒ぎで澤山だ、それよりは早く、松山を呼んでくりやれ。
小助　生憎今夜は松山さんは、お馴染のお客が落合つて、名代でございますから、後にお連れ申します。
慾山　また今夜も名代か、はやる女郎はこれがいやだ。
かき　さうしておれが買ふ新造は、まだかな。
小助　今お連れ申してまゐりました。（ト立つて下手の障子を明け、）さあ、あしかのさん、こつちへおはひ

んなさい。
あし　あい。（ト胴拔新造の裝にて出來り、）おや、好かねえ、盲人だよ。（ト脇を向いて下手へ住ふ。）
小助　さあ、かき市さん、お前さんのお相方をお連れ申しましたぜ。
かき　おゝさうか、どれ〳〵、どこにゐる〳〵。
小助　あしかのさん、もつとこつちへお寄りなせえ。
あし　私アいやだよ。
小助　まあいゝから、お寄りなせえ。（ト無理にかき市の側へ突きやる。）
かき　どれ〳〵。（トあしかの袂捉へ、顏を撫でようとする。）
あし　あれ馬鹿らしい、何をさつしやるのだよ。
かき　美しいか美しくないか、撫でゝ見るのだ。
あし　いけ好かねえ、わちきやァ厭だよ。（トすつと立つて、下手へ行くを小助引留める。）
かき　何故、撫でさせぬのだ。
小助　はい〳〵、唯今撫でさせまする。（ト下手へ來り、）もしあしかのさん、後生だから、ちよつと撫で
　させてやつておくんなせえ。

あし　小助どん、お前もたいがいだよ、なんぼお客が座頭だつて、顔を撫でるものがあるものかね、わちきァほんとにいやざますよ。

小助　そりやあ尤もでござりますが、向うが客で撫でたいといふのだから仕方がない、こゝが苦界の勤でございます。

あし　ほんに苦界とは、よく言つたものだねえ、嬉しいと思ふ日は一日もありやあしないよ。

小助　さ、そこが苦界々々、どうぞ勘辨して撫でさせておくんなせえ。

かき　これ小助、まだかな／＼。

小助　へい／＼唯今直でござります。さあ、あしかのさん、顔をお出しなさい。

あし　えゝも、いけ好かねえなう。

トこれにてあしかのツンとしてかき市の前へ顔を出す、かき市撫でゝ見て、

かき　どうも私は勘が悪くて、よいか悪いかはつきり知れぬ。お師匠様、どうぞ撫でゝ見て下さりませ。

慾山　おゝよし／＼、おれが撫でゝ見てやりませう。（トあしかのゝ顔を撫廻し、）こりや止した方がよい。人間にあるべき鼻がないわ。

かき　え、そんなら私の相方は、あの鼻がありませんか。

あし（これを聞き、むつとして、）えゝも止してもおくれ、鼻のない人間があるものか、人様よりはちつと低いが、こゝにちやんとありますよ。（ト鼻つたゝき顔を出す、慾山又撫て、見て、）
慾山　なるほど、これが鼻か知らん、なか〳〵ちよつとは知れぬ鼻だ。
小助　あしかのさんは中低で、まことに意氣な顏でございます。
慾山　意氣か野暮か知れないが、今撫でた鼻の樣子では、先づ人間には遠いはうだ。
あし　言はしておけばよいかと思ひ、言ひたいがいの出放題、もうお客にはこつちで御免だ。（立上り、）小助どん、覺えておいでよう。（ト小助が突倒して奧へはひる。）
慾山　えゝ、わるいからわるいといふに、豪氣に腹を立てをつた。
かき　あれでもよかつたに、をしいことをした。
でぼ　（腹の痛む思入にて、）かき市さん、あんまり喰べたら腹が痛くなつた。
かき　さうだらう、さつきから食ひつゞけだつたから。
慾山　然し朝飯を喰はせずにおいたから、まだ痛くなる時分ではないが。
小助　何にしろ、鍼じもしてやつてはどうでござります。
でぼ　いえ〳〵、鍼なら御免なさりませ。

小助　そりや、何故だ。
でぼ　お師匠樣の鍼では、幾人死んだものがあるか知れませぬ。
慾山　何をこいつが。
かき　なるほど、子供は正直だ。
慾山　えゝ、おのれまでが。
小助　はて、まあよろしうござります、もうお引になさりませ。
慾山　然し、松山が來てくれねばならぬ譯だな。
小助　今に花魁がおいでなさいますから、まあおいでなさりませ。
でぼ　あゝ、痛くッて歩かれない。
かき　こいつはとんだ厄介者だ。

ト小助慾山の手を曳き上手へはひる。下手より大黑屋の息子文四郎に、若い者太助附添ひ出來りて、

太助　もし旦那、どうも紛失物があつてなりませぬ。
文四　困つたものだな、昨夜も何か失なつたか。
太助　へい、紙入が一つに、金が三兩見えませぬ。

文四　誰が仕業か知らねえが、こんな噂がぱつとすると、つひにやお内の衰微になる。お爪にも言附けておいたが、手前もよく氣を附けてくれ。

太助　そりやあもう此間から、如在なくかん〲附けてをりますが、大がい目串はつけました。

文四　むゝ、二階の者か。

太助　左樣でござりまする。

文四　はて、誰がそんなことをするな。

太助　もし誰でもござりません、あの松山さんが。

文四　あゝ、これ。

ト押へて囁く。この模樣、流行唄にて道具廻る。

（松山部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面床の間違ひ棚、下手夜具棚、この下黑塗簞笥、上下折廻し塗骨障子屋體。總て松山部屋の體、こゝに座布團の上に次郎吉胡座をかき火鉢にあたりゐる。此の前に酒肴を取散し、雀八とあしかの拳をしてゐる。傍におちん三味線を彈き、お大お仙、ゆかり居並びゐる。

もん　さあ〳〵、これから二丁目（市村座）の芝居でした、狐拳をなさいましな。
雀八　ほんに、あれがいゝ、ちよつと彈いてくんな。
もん　あい〳〵。

トおもん三味線を彈く、狐拳の唄になり、あしかの雀八よろしくあつて雀八勝つ。

雀八　あゝ有難い、勝つたものには。お纒頭の御褒美。
次郎　それ、雀八がまた勝つた。
雀八　もう一番勝たにやあならねえ。
あし　後生だから負けておくれよ。
次郎　いや、弱い音を出したな。
あし　それでも、わちきやァ悔しいもの。
もん　悔しいよりは御褒美を、たんと貰つてその内で。
せん　彼人を一晩呼ぶ積りだらうね。
あし　なあに、鰻飯を腹一ぱい喰べたいのさ。
せん　おや〳〵、色氣のないことを。

あし　どうで色氣の方は難しいから、喰氣のはうさ。さあ〳〵、何でも今度は勝たにやあならない。あ
　お息が切れる。これゆかりや、ぬるくして、お茶を一ぱい持つて來てくんな。

ゆか　あい――（ト奥へはひる。）

あし　さあ〳〵雀八さん、もう一遍おいで。（ト又狐拳をする。此時小助出來りて、）

小助　まあ〳〵、待つておくんなせえ〳〵、先刻から來たくツてうづ〳〵してゐるのを、慾山撿校に引
　つかゝツて、二分取らねえで二百損した。さあ〳〵、私を入れておくんなせえ。

あし　まあ〳〵、私が二分取るまで待つておくれ。

小助　どうして〳〵、駈付三番は當然だ。

もん　それぢやあ一人勝一人負として、三人勝負となさいましな。

小助　それがいゝ〳〵。

三人　よい〳〵〳〵。（ト三人よろしくあつて、小助勝ち、）

小助　やれ有難い、二分有附いた。

あし　えゝいめえましい、鰻飯を喰ひそこなつたか。

　　ト流行唄になり、奥より松山、胴抜紋附裏襟の裲襠にて出來り、

松山　次郎さん、よく來ましたね。
次郎　おゝ松山か、豪氣に勿體を附けたな。
松山　なあに、湯にはひつて來たのだわね。
もん　花魁も久しぶりの次郎さんだから、綺麗にしてお見せなさる積りさ。
あし　然し、これより綺麗にしようはありますまい。
松山　なんぼわちきが新參でも、そんなにおだてゝくんなますな。
お大　なんともう、お片附としてはどうでありませう。
あし　ほんに、花魁も話があらう。
小助　舊い奴だが、仲人は宵の内。
せん　お開きとしませうね。
松山　まあ、いゝぢやありませんか。
雀八　花魁、痩我慢をおつしやいますな。
小助　腹の中に箒を立てゝおきなすつて。
松山　當てられましたかね。

次郎　松山も口が惡くなつたの。
もん　次郎さんのお仕込だから。
次郎　なあに、おらあ無口だ。
あし　あんまりさうでもありますまい。
お大　そんなら次郎さん、又明朝、
もん　花魁お樂しみで、
皆々　ござんすね。
　　ト皆々どか／＼と下手障子屋體へはひる。松山後を見送り思入あつて、つか／＼と次郎吉の側へ行き
　　手を取り、
松山　次郎さん、逢ひたかつたわいな。
次郎　えゝびつくりした。
松山　それぢやあ、側へ寄つては惡いのざますか
次郎　なに、惡くはねえが氣が揉めらあ。
松山　氣が揉めるとはえ。

次郎　いつの間にか、こんなに手が出來たかと思ふと、誰にでもさうだらうと癪に障るよ。

松山　馬鹿らしい、誰にそんなことをするものかね。

次郎　するかしねえか、番をしちやあるめえし。

松山　そりやあわちきの方で云ふこつてありますよ。どんなところに情人があつて、熱くなつて行きなますか、知れることぢやァありませんよ。

次郎　そんな株はこつちにはねえ。

松山　あんまりないこともありんすまい。（ト次郎吉をつめる。）

次郎　あいたゝゝ。

松山　誰にあひたいえ。

次郎　おぬしによ。

松山　嬉しうありますよ。

次郎　（松山をぢつと見入つて、）あゝ、水の流れと人の末、かうも移り替るものか。

松山　なんざますえ。

次郎　今更言ふも愚痴ツぽいが、おぬしが家は雪の下で若菜屋といふ質兩替、立派な家のお孃さんが、

心がらとは言ひながら故郷を離れて苦界の勤め、かういふしがない身になつた、元はと言やあ去年の正月、去れもしねえ江ノ島の初の巳待に夷屋で、落合つたのが緣の端、最初はへだてた襖越し話の合つたが緣となり、後前見ずに引ッぱらひ上方筋へ出かけたところ、堅い親御に直に勘當、その罰故にこの駿河で、半年あまりのおれが煩ひ、宿屋の借や醫者の禮、見兼ねておぬしが苦界の勤め、たゞの身でゞもあることか、丁度あの時三月四月、それも世間に鬼はなく、この親方の親切に見世を引かして產み落させ、藁の上から里にやり、人の噂も七十五日日數が立つて出ると聞き、亭主を隱してあがるのも、せめてその晩一晩でも、おぬしに樂をさせよう爲めっついうかうかと去年の春から二年越し、三年まではおかねえから、もう半年か一年だ、どうぞ辛抱してくれよ。

松山　ほんに、わちきがかういふ身になりんしたを、人さんが嘲笑ふことでありませうが、これもみんな好々から、どうでかうなる上からは、そりやもう二年が三年でも、わちきや辛抱してゐるから、その替りにはお前もまた、浮氣をしてくんなますなよ。

次郎　なんの附にするものかな、してえと言つても外にやあ出來ねえが、おれと違つておぬしやあ又、僅一年經つか經たぬに、以前に替る廓言葉、そのあだッぽいしこなしぢやあ、誰でも熱くならに

やならねえ。長い月日のその内にやあ、心變りでもしようかと、取越し苦勞に鎌倉へ歸るもなんだか心がゝりだ。

松山　なんだなお前も愚痴ッぽい、わちきの心を知らないぢやァありんすまいし、實はお前より私の方が鎌倉へ歸すのが厭ざますから、歸らずにゐてくんなましよ。

次郎　それだといつて歸らにやあ、おぬしの年季のぬきやうがねえ。

松山　そりやもう年季は拔けずとも、お前故なら增してもいゝから、どうぞ此方にゐてくんなましよ。

次郎　さう氣休めを言はれると、又歸るのが厭にならあ。

松山　わちきにばかり氣を揉ませ、ぬしは何とも思ひなんせんから、實に悔しうざます。

次郎　なに、氣を揉まねえことがあるものか、氣が揉めるから歸るのだ。

松山　ほんたうざますか。

次郎　噓をつくのは大嫌ひだ。

松山　嬉しいねえ。（ト此時若い者太助出來りて、）

太助　もし、花魁、明けてもようござりますか。

松山　太助どん、何だえ。

太助　次郎さんに、お目にかゝりたいといふお人が、二人參りましたが、お連れ申してもようござりますか。
次郎　(思入あつて、)なに、おれに逢ひたいとは誰だ。
太助　何だか、風の惡い人達でござりまする。
松山　そんな人なら、居ないと言へばよかつたに。
太助　さう申しましたけれど、お聞きなさいませぬ。
次郎　はて、おれに逢ひたいとは、誰だ知らぬ。
ト此時下手にて、「誰でもねえ、わつちでござります」と早乘三次の聲して、三次と肚胸熊出來る。太助は奧へはひる。次郎吉二人をぢろりと見て、
次郎　つひぞ見たこともねえ、お前達は。
三次　わつちやあ、この近所のびいついくでござりますが、
熊　次郎さんといふ名を聞いて、近附になりに來やした。
次郎　そりやあよく來なすつた。あゝ呑過ぎた故か、頭痛がするやうだ。(ト少し横になる。)
松山　ちつとたゝいて上げようか。

ト松山次郎吉の頭をたゝいてゐる。兩人これを見て思入、熊わざと腹を立ちし思入にて、

熊　なんだ〳〵、こいつらあ途方もねえ、こちとらあ何だと思やあがる、たゞのびいつくだと思やがると當が違ふぞ、今でこそ宿場のごろつき、元は鎌倉谷七郷の役屋敷は言ふに及ばず、十人火消に遊んでゐても、据膳で飯を食ふ株だ。質屋の使ひや鹽噌の世話をするとは譯が違はァ、何で寐てゐて挨拶するのだ。途方もねえ奴等ぢやあねえか。（ト大きな聲をするを、三次留めて、）

三次　これさ〳〵大きな聲をするなえ、ぬしやあ鎌倉でいゝ男ださうだから、こちとらあ何だとも思やあしねえ。いゝ男ならいゝ男のやうに、話か分かるだらうから、まあ靜にしやな。（ト思入あつて、）もし次郎さん、ちよつとお顔を貸して下せえ。

次郎　なんだか知らねえが、其處で言ひねえ。

三次　えい、私等あこの府中の宿にごろついてゐる、もゝんじいでござりますが、お前さんをいゝ男と見かけて、お願ひがあつてめえりやした、どうぞ聞いておくんなせえな。

次郎　そりやあ何だか知らねえが、出來ることなら聞きやせう。

三次　そいつあ有難うござります、お禮から先へ言ひやすが、どうぞわつち等二人の頭へ、四五十兩貸してお貰ひ申したい。

次郎　松山、とんだ定九郎が出て來たな。
松山　さうざますね。
次郎　コウ、つひぞ今まで逢つたこともねえお前方、なんでおれに貸せといふのだ。
三次　借りてもいゝから、
兩人　借りに來たのだ。
次郎　なに、借りてもいゝとは。（ト起き直る。）
三次　きら几帳面の遊び人なら、こんなことを言ひにやあ來ねえが、
熊　勾引だから借りに來たのだ。
次郎　なに、おれを勾引だと。
三次　しらばツくれた顏をするなえ。
熊　その松山は、どこから連れて來て、
兩人　この二丁町へ賣つたのだ。
次郎　どこから連れて來るものだ、鎌倉から連れて來たのだ。
三次　そりやあ鎌倉から連れて來たらうが、親も得心しねえ娘を、うぬア引ぱらつて來やあがつて、賣

つたからにお勾引だ。

熊 かういふ仕事をするならば、めりゝを出しておいてしろ、脇土地から來やあがつて、こんな旨え仕事をされちやあ、見逃しにならねえ。

三次 あんまり人を江戸馬鹿にするな、手前達にこけにされる耄碌ぢやあねえ。さあ、長い短いは言はねえ、四五十兩貸して下ッし。

ト言つても次郎吉は煙草を喫みゐる。松山思入あつて、

松山 なんざます、お前方はそんな大きな聲をして、まあ靜にしなまし。太助どんもなんでこんな衆を上げたんだらう。

三次 何で上げるものか、女郎を買ひに來たのだ、二朱出しやあお客樣だ。

熊 襤褸ァ着てゐても、物貰ひやこ食ぢやあねえぞ、御大層なことをぬかしやあがるな。

三次 さあ次郎さん、お前もいゝ男ださうだから、器川に金を、

兩人 貸してくんねえ。

次郎 いやだ。

兩人 なに、いやだと。

次郎　うぬ等に貸す金はねえ。

兩人　どうしたと。

次郎　そりやあ遊び人の附合だから、見ず知らずの者だらうが、かういふ譯で困るから、貸してくれろと轉げ込まれりやあ、鍋茶釜から竈の金物までも引ぺがし、質においても貸してやるが、こりやあ無賴漢の附合だ。手前達も直素直に、貸せといふなら貸しもしようが、勾引だと肝書を、つけられたら二朱も貸せねえ。なるほど手前達のいふ通り、この女は雪の下の質屋の娘、おれと逃げたばつかりに、勘當受けたあの松山、親子の緣が切れてしまやあ、天から拾つたおれが女房、得心づくで賣つた身體、なんでこれが勾引だ、そりやあ旅他國へ乘り出して、ごろついてるからにやあ、かはを打つ氣でめりも出さうが、こんな脅しをかけられちやあ缺けた錢も出せねえから、勾引なら勾引を、砂利の上へ持つて出ろ、見かけはけちな小野郎だが、びくりともするのぢやあねえ。(ト茶碗を取つて、)松山、一ぺい注いでくれ。

松山　冷たくなりんした。(ト注ぐ。)

次郎　あ、ちつと多かつた。

松山　お待ち、助けて上げるから。

ト松山次郎吉の茶碗の酒を呑む。此中三次、熊出損つたといふ思入あつて、

三次　もし親方、眞平御免なせえ。お前さんにこんなことを言ふのも素面ぢやあ言ひ憎いから、蛤鍋で二合づゝお造酒を上げて來やしたから、つい申し過しをしやした。

熊　お氣に障つたらうが、親分、酒の上の言過だから、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

三次　實は私等も鎌倉の者でござりますが、筋の悪い早乗で、御牢内へ行くとこを、友達が助けてくれて、とんだ昔噺だが山を越して川を越して、二丁町の近所へ來て、ごろついてゐやすが、何を言つても狹いところ、大概諸方々塞げてしまひ、上方へでもつッ走らうと思ふ所へこの話し、こいつを玉に強面で、二兩と三兩路用を借り、出かける積りの出來心。

熊　ぜんてえわつちがこれよりやあ、打ッつかつて親分に、借りた方がよからうと言つたを、この野郎が、なに、それよりやあ脅しをかけて借りるはうが近道と、ぼんの高い親分に目先の見えねえ今夜の始末。もし花魁、どうぞお前さんから親分へ、よろしくお詫をして。

兩人　おくんなせえ。（ト窮屈さうに坐り詫びる。松山思入あつて、）

松山　もし次郎さん、あの衆があのやうにあやまるんすから、堪忍しておやんなんしな。

次郎　むゝ、（ト兩人に向ひ、）そりやあお前方がさう言ひなさりやあ、なにわつちだとつて初春早々、こ

ふを出してえことはねえ。然しこれが鎌倉なら器用に金も貸してえが、何をいふにも去年から、わつちも旅へ踏出して、ちつと懐が寂しいから、思ふやうにやあいかねえが、これを取つてくんなせえ。

ト腹掛の隠しより、金を出し四つ折の半紙で捻り放り出す、兩人取つて、

三次　そんなら、それを貸しておくんなさいますか。
兩人　こりやお有難うございます。（ト言ひながら明けて見てびつくりなし、）
三次　や、こりや十兩。
次郎　少なからうが不承して下ツし。
三次　とんだことを言つたものだ。五兩づゝぢやあ十分過ぎます。
熊　見ず知らずのこちとらに、まとまつた金を貸して下さるとは、親分びつくりしました。
三次　同じ遊び人のごろつきでも、親分とこちとらあ、雑兵と大將ほど違ふな。
熊　違えねえ、ほんに遊び人の大將だ。
次郎　近い内においらも又鎌倉へ歸るから、お前方も出て來たら、小遣錢位は上げようから、必ず尋ねて來てくんねえ。

三次　有難うござります。

熊　是非お禮ながら上ります。

三次　それぢやあ、喰べ立ぢやあねえ、貰ひだちにお暇いたします。

次郎　まあい、やな、一ぺい呑んで行きねえな。

三次　有難うはござりますが、花魁い邪魔になりやすから、

熊　お貰ひ申しましたこのお金で、軍鷄鍋へおし上つて、一ぺいづゝやつて行きます。

次郎　それぢやあ、お前方が心任せにしねえ。

三次　左樣なら、親分。

熊　花魁。

兩人　大きに有難うござりました。(ト兩人小腰をかゞめ下手へはひろ。)

次郎　忌えましい、しみツたれな奴だな。

松山　ほんに、好かない人達だねえ。

次郎　そりやあい、が彼奴等のお蔭で、鎌倉へ歸る路用の金を、いゝいゝ、ちやあふうにしてしまつた。

松山　それぢやあお前お困りだらう、どうにかしてあげようか。

次郎　手前算段ができるか。
松山　今夜來てゐる撿校を騙して、金を借りて來る積りさ。
次郎　止せよ、眼の見えねえものを可愛さうに。
松山　なあに、まことに邪慳な高利貸だから、ちつと位はようございますよ。
次郎　それぢやあ十兩ばかり借りてくれ。
　　ト此時下手よりあしかの出來りて
あし　もし花魁、お爪どんがやかましく言つてゐますから、撿校さんの所へ、ちよつとおいでなんし。
松山　あい、今行く所だが、これあしかのさん、次郎さんには二階中でみんなが思ひついてゐるから、番をしてゐてくんなよ。
あし　あい〳〵、私がきつと番をしてゐます。
松山　どれ、苦界の勤めをして來ようか。
　　ト流行唄になり、松山下手へはひる。次郎吉後を見送りて、
次郎　朱に交はれば赤くなると、僅半年か一年で、豪氣に女郎じみて來た。
あし　ほんに花魁は、昨日今日のやうぢやありませんよ。

次郎　手前が仕込むからだ。

あし　おや、いやだねえ。

次郎　なに、いやなことがあるものか、それに違えねえからよ。

あし　あれ、そんなことを言つていぢめなんすと、花魁に言ひ附けいすよ。

次郎　言ッ附けるなら、言ッ附けろ。

あし　あれ、次郎さんがいけませんよう。

ト次郎吉あしかのにからかふ。この見得にてよろしく道具廻る。

（廻し部屋の場）――本舞臺やはり平舞臺、上下やはり塗骨障子屋體、中央に丸行燈あり、總べて二階廻し部屋の體と、下手より松山出來り思入あつて障子を明ける、内に慾山夜着をすつぼり冠つてゐる心にて、枕元に紙入あること。

松山　もし慾山さん〱、寐なましたか。（ト思入あつて、）あゝ濟まぬことではあるけれど、夫と思ふ次郎さんが、路用の金に困ると聞き、道ならぬとは知りながら、今宵に迫るお金の入用、心を鬼に、さうぢや。（ト障子をそつと明けて内へ入り、紙入を持ち出來り、）勤はすれど次郎さんに、情をば立

つてつひに一度、お客に下紐解かぬ故、馴染んで通ふ人もなく紋日物日も皆自前、その苦しさに恐ろしい怖い心になつたのも、戀に迷ひし私が因果。もし慾山さん、どうぞ許して下さんせ。

ト松山ちよつと詫びるこなしあつて下手へ行きかける。この時障子を明け、文四郎出て、

文四　花魁、待ちな。

松山　え。(ト文四郎を見てびつくりし、)や、慾山さんと思ひしに、お前は内の若旦那。

ト面目なきこなしにて、逃げにかゝるを文四郎留めて、

文四　ちよつと話したいことがあるから、こゝへ來なせえ。

松山　いゝえ、私や。

文四　さうでもあらうが、まあこゝへ。

松山　さあ。

文四　はて、來なせえといふに。

松山　はい。(ト是非なく下にゐる。文四郎煙草を喫みながら、)

文四　口ばし青き身をもつて、小癪なことゝ思ふのも、百も合點二才の身で異見をするもおぬしの爲め、又二つには家の爲め、聞けば以前は鎌倉で、立派な家の娘ださうだが、思案の外の色戀で故郷を

離れ旅の空、歩きなれねえ山坂に杖とも思ふ男の煩ひ、苦勞するがのこの廓へ、そのたゝまりで苦界の勤め、心がらとは言ひながら世間知らずの懷子、不便なこと、思ふから、辛い勤めの樂しみに、亭主と知つて惡足を客にさしておくのも情、それも一つはこつちの見當、素人ながら押出は、一と言つて二丁目につゞく者のない器量、廓馴れたならおぬし故外の者まで賣れようと、盛り待つ間の花に風、惡い噂の枕搜し、男の爲めでもあらうけれど、この評判がぱつとすれば、言はずと知れた客も散り、おぬしに連れて外の者まで、賣れなくなるは知れたこと、金が入るなら十や二十は、いつ何時でもやらうから、惡い心を思ひきり、少しはこつちの氣も汲んで、厭でもあらうが、そこが苦界の、ちつと勤を精だして、爲になつてくれたなら、五年の年季は三年でも、損せえいかにやあ證文を、巻いて身儘にさせようから、金で買はれた身體とあきらめ、もつと精を出してくりやれ。おぬしなぞにこんなことを、まだ言ふ株は來ねえけれど、親父のせりふを聞きかぢり、死んだ兄貴が似ぬ聲色、聞き難からうがこれ花魁、どうぞ聞いてくんなせえ。

トよろしく思入にて言ふ。松山面目なきこなしにて、

松山　勤めの身にて大膽な、盜みをするもお叱りなく、御親切なるその御異見、身にしみ〴〵と勿體なく、いつそ消えてしまひたうざます。

文四　つまらねえことを言つたものだ、金で抱へた大事の花魁、消えられてたまるものか。
松山　そりやもうさうでもありませうが、どうもこのまゝ。
文四　はて、外に誰も聞いてはゐねえ、おぬしせえだまつてゐりやあ、何でおれが言ふものだ。
松山　そんならどうぞ、今夜のことは。
文四　言はず語らず、この場限りさ。
松山　左樣なれば、このお金を。（ト財布を出す。）
文四　いや、その金は遣つたのだ。
松山　それではどうも。
文四　氣の毒だと思ふなら、精出して勤めてくりやれ。（ト言ひながら立上る。）
松山　はい。（と思入。）
文四　いや、慾ばつたやつよなあ。
　　ト唄になり、文四郎思入あつて奧へはひる。松山金をいたゞく。此の時上手の屋體より、次郎吉出來りて、
次郎　かう見たところがまだ年は、若いが利口な息子だなあ。

松山　や、お前は次郎さん、いつの間に。
次郎　さつきから次の間で、息子の異見を聞いてゐた。
松山　えゝ、（トびつくりなし、）それ、聞かれたら。（トつか〳〵と行くを、次郎吉留めて、）
次郎　これ松山、どこへ行くのだ。
松山　お前にどうも、この顔が。
次郎　合はされぬとは、枕捜しか。
松山　さあ、それと知れては定めし愛想が。
次郎　何で愛想が盡きるものだ、枕捜しもいはゞおれ故。素人と違つてその心が、ありやあ猶更頼もしい。
松山　盗みせし身をお前には、頼もしいとはどういふ譯で。
次郎　譯といふのは外でもねえ、今日の今まで包んでゐたが、實はおらあ盗人だ。
松山　えゝ。（トびつくりする。）
次郎　かう聞いたらおれよりやあ、松山おぬしが愛想が盡きよう。
松山　そんなら次郎さん、あの、お前も。

次郎　さあ、餓鬼の折から手癖が悪く、人の物は我が物と盗みはするが今日が日まで、邪曲非道なことはせず、盗んだ後でその家が戸でもおろしやあその金へ、利息を附けて返す心、それ故町より大名の金を盗むが上分別、どんなひつてん屋敷でも、まさか百や二百の金で、家の潰れることはねえから、鎌倉山の大小名、和田北條を始めとして、佐々木、梶原、千葉、三浦、當時一臈別當の工藤なぞへは二三度はひり、千と二千の仕事をしたが、その替りにやあ貧乏と、その名も高い昔我なぞぢやあ、盗んだ金をおいて來た。惡事はするが義理堅え言はゞ野暮な盗人だが、知らぬ先は兎も角も、かういふ身性と聞いたなら、此の頃世間の流行詞、おぬしやあ厭になりやあしねえか。

松山　何で厭になるものかね、これもみんなその身の好々、お孃さんと言はれるのが、小さい時から私は嫌ひ、油で固めた高髷も、潰しの島田に結ひたい願ひ、御殿模樣の文字入りより二の字つなぎの褞袍が着たく、御新造さんや奥さんと呼ばれるよりも家のやつ、家の人にと言ひたさに、親をば捨て、勘當受け、お前の女房になつた私、どんなことがあらうとも、何で愛想が盡きようぞいな。

次郎　そんならおぬしやあ盗人と、知つてもやつぱり、愛想も盡かさず、

松山　お前と一つにゐたいのは、譬にも言ふ似た者夫婦。

次郎　夜盗を働く鬼の女房に、

松山　枕さがしの鬼神とやら。

次郎　さういふおぬしが肚胸なら、明日が日ばれて繩目に逢ひ、

松山　お上のお仕置受くればとて、

次郎　隙行く駒の二人連れ、

松山　二本の槍の二世かけて、

次郎　離れぬ仲の紙幟。

松山　果は野末に身を捨札。

次郎　思へば果敢ない、

兩人　身の上ぢやなあ。（トよろしく思入。時の鐘。）

松山　かうなるからは、もし次郎さん、今夜こゝをこつそりと、連れて逃げて下さんせ。

次郎　そりや又なんで。

松山　枕搜しを知られし上は、どうもこゝにはゐられぬ仕儀。

次郎　なるほど、そりやあ尤もだが、この親切な親方へ、損をかけるが氣の毒だ。

松山　それも後から身の代へ、仔細を書いてお詫をしたら、お許しなされて下さんせう。
次郎　むゝ、義理の惡いも僅な内。然しこれから夜の内に廓をぬけて急いだら、宇都谷峠か夜明前。
松山　その宇都谷といふところは、たしか去年文彌といふ、
次郎　むゝ、座頭がむごく殺されたところだ。
松山　そんならそこを、
次郎　明けねえ内に。
太助　（この時出て來て、）樣子は聞いた。（ト出るを、次郎吉突廻して投げ退ける。）
次郎　支度をしやれ。
松山　あい。

ト太助起上つて又かゝるを次郎吉引附け、灯を吹消す。時の鐘。松山は帶をしめなほす。この見得にて道具廻る。

（大黒屋塀外の場）――本舞臺一面忍び返し附の黒塀、見越の松。上の方に二階家、二十日の月出てゐる。と時の鐘にて、バツタリと音して二階の格子を打ちこはして次郎吉出で、屋根傳ひに見越の松

に扱帯を結び、ひらりと飛びおり、四邊を窺ふ。その後より松山出て、下を窺ふ。

次郎　松山か。

松山　次郎吉さん。

次郎　扱帯を結んでおいたから、それを便りに飛びおりろ。

松山　あい。（ト庭へ出ようとすると、後へ文四郎出て抱留め、）

文四　松山、どこへ行くのだ。

松山　え、若旦那か。

ト振拂ひ、飛びおりようとするを引戻し、内へ入れて引附け、

文四　こりや情を仇で、返す氣だな。

松山　堪忍して下さんせ。

次郎　（上を見て、）南無三、見咎められたか。（ト此の時下手より鼠取藥賣りの銀次、岩八出來りて、）

兩人　捕つた。（ト次郎吉にかゝるを立廻る。二階にては松山の振切らうとするを、文四郎支へて、）

文四　めつたにおぬしは、逃がしはしねえぞ。

ト立廻つて障子をぴつしりとしめる。これと同時に銀次、岩八の兩人は次郎吉を捻ぢ伏せ、早繩をか

けろ。トドロ〳〵になり、このまゝ三人迫下がる。上へ心といふ字の板を引いて取り、黒塀が打返して草土手の石垣となり、その下は波の模様となる。眞中に土手より匐ひ出し松の大樹あり、後ろは土藏の屋根を見せし遠見、舞臺前は河の心。總て鎌倉稲瀬川御藏下の體となる。波の音になり、土手より中に蒲團を冠りて寐てゐる客を乘せたる舟現はれ、船頭乘切りの長次艪を押して出來り、

長次　やい〳〵どうするのだ、どうするのだ、一本突ッ切らねえか。えゝどぢな奴だ。とりかぢイ、

ト舞臺の眞中へ來る。その時薄きドロ〳〵にて蝶二羽小舟の中へ消える。

おゝ、旦那は夢でも御覽じたか、大そうな魘されやうだ。もし〳〵旦那え〳〵。お眼をおさましなさい。夢でも御覽じましたか。

トこれにて蒲團をはねのけると、内より稲葉幸藏起上り、現はれて、

幸藏　そんなら、今のは夢であつたか。（トほつと思入。）

長次　もし旦那、大そうな魘されやうでござりましたぜ。

幸藏　さうだつたらうよ、びつしよりになつた。（ト思入。長次は裏向になり艪の早緒をなほしゐる。幸藏行火を出し、煙草をのみながら、）思ひがけねえ五年あと、駿河で別れた松山を、あり〳〵見たは門跡ナら、どこにどうしてゐることか忘れぬ胸に五臟の煩ひ、ほんに夢とはいひながら、正直過ぎた松

山が心にもねえ枕捜し、とんだことをば見るものだ。然しこれが正夢なら、油斷のならねえ鼠取り。(ト煙管で船の小縁を打つ、と雁首の落ちし思入)南無三、煙管の、(ト河へ思入)

長次　もし、雁首が落ちましたか。

幸藏　えゝ、初春早々。(トびつくりし、氣にかゝる思入。)

長次　とんだことをなさいましたね。

幸藏　これもこの身に重なる罪、どうで終ひは、

長次　え。

幸藏　輕くはいけねえ。

ト殘つた吸口を、河の中へ打込むを木の頭

長次　おもかぢイ――。

ト櫓を押す、幸藏心にかゝる思入にて、よろしく波の音にて、

ひやうし　幕

# 四幕目

## 滑川稲葉内の場

［役名——卜者平井左膳、實は稲葉幸藏、松田の若黨本庄曾平次、左膳弟子左内、醫者山井養仙、山女衒權次、松葉屋の若い者喜助、お元弟三吉。松葉屋の松山實は若菜屋の娘お松、お熊婆、松田の乳母おふと、主膳娘おみつ、松葉屋の禿みどり實は松山娘おみつ其他。］

（稲葉幸藏内の場）——本舞臺三間の間常足の二重屋臺、正面更紗の暖簾口、上手に地袋戸棚、この上に本箱、上の方に障子屋體、二重に唐机、その上に算木、筮、易書を積み、更紗の座布團を敷きあり。いつもの所門口、下の方一面に雪の積りし建仁寺垣、總て稲葉幸藏隱家の體。こゝに左膳の弟子左内行燈の傍に机に向ひ筮を持つてをり、傍に山井養仙、本舞臺に若い者喜助二人の中間と共に控へてゐる、この見得雪おろし鞠唄にて幕明く。

養仙　ときに、先生のお歸りには、まだ間がござらうかな。

左内　左樣でござります、何處へ參るとも申されずに出られましたから、歸りのほどは知れませぬ。

養仙　はて、それは困つたな、先生に見て貰はねばならぬ事がござるが。

左内　私でよくば、見てあげませうか。

養仙　いや／＼、お代脈では安心ならぬ。

左内　これは御挨拶。してお前方はどうだな。
喜助　先生に見て貰ひたいと申したいが、お歸りが遲いとあるなら、お前樣でもいゝ、見て下さりませ。
左内　でもとは、失禮千萬な。
喜助　これは粗相を申しました。
三人　眞平御免下さりませ。
左内　なにさ、あやまるには及ばぬが、して見てくれとは何でござるな。
喜助　へい、私どもは大磯の松葉屋の若い者でござりますが、松山といふ花魁が駈落をいたしましたが、どつちの方へまゐりましたか、方角を見てお貰ひ申したうござりまする。
左内　左樣でござるか。（ト筮を取り）けんけんこうりてい〳〵。（ト筮を算へ算木を置く）
養仙　いや、そこな若い衆、愚老も物を尋ぬるのだか、この大雪では難儀でござるな。
喜助　はあゝ、お醫者樣にもお尋ねものでござりまするか。
養仙　いかにも、昨日藥籠と家來を一人、何れへか忘れてまゐつて、今に在所が知れぬ故、先生に見て貰はうと、わざ〳〵これまでまゐつてござる。
喜助　それは嘸お困りなされませう。

左内　然し、春でようござるな。
養仙　何故でござる。
左内　鞠唄に唄ひますぜ、醫者は醫者だが藥箱持たぬ。
養仙　何を言はつしやる。
喜助　もし、そんな常談を言はずと、しつかりと見て下さりませ。
左内　なに、常談は常談、生業は生業。（ト言ひながら算木をならべ）怖いものだ、宅來隨と易に出た、卽ち宅は內なり來は來る、隨は隨德寺の隨なり、松山といふ花魁が隨德寺をしたらうが、宅來できつと家へ來るから案じなさんな。
喜助　それは有難うござります。さうして、どつちの方を尋ねませうな。
左内　先づ西南を捜さつしやい、それで知れずば、東北を捜したらよからう。
喜助　それぢやあ、東西南北を捜すのだね。
左内　その方角には、是非ゐるだらう。
喜助　有難うござります。見料はいかほどでござりますな。
左内　大道では二十四孔だが、宅判斷は百孔でござる。

喜助（財布より當百を出し、紙に包みて、）左樣なら、これへおきます。
左内 もし知れたら、禮に來さつしやい。
喜助 きつと上ります。（ト三人門口へ出て、）
若一 コウ喜助さん、お前も大概だぜ、東西南北にゐねえ奴があるものか。
若二 あんなつまらねえ判斷を聞いて、百出すとはうんのろだぜ。
喜助 そりやあ喜助だ、如在はねえ。通用しねえ燒錢があつたから、紙へ包んでおいて來たのだ。
二人 そいつあい丶氣味だつたな。
喜助 卜占を見た積りで、正物で蕎麥でも喰つて行かう。（ト財布より天保錢を出し、）南無三、燒錢と間違つた。
二人 それぢあ百錢取られたのか。
喜助 え丶、忌えましい。（と三人花道へはひろ。）
左内 何と先生御覽じたか、出たらめを申しても、百孔になるて。
養仙 貴殿の辯舌感心いたした、愚老なども病家にて耆婆扁鵲が配劑など丶申すが、内證は藥種屋で買ふ葛根湯でござる。

左内　何れも藥屋はそんなものでござる、はゝゝゝ。

養仙　ときに、先生のお歸りまで、お座敷を借りたいが、よろしうござらうかな。

左内　よろしうござるとも、奧へまゐつてお待ちなさい。

養仙　それは忝い、有樣は昨夜夜通しに步いたので、睡くてならぬて。

左内　御遠慮なく、お休みなさるがいゝ。

養仙　然らば御免下されい。

ト奧へはひる。と花道よりお熊婆下駄がけにて褄を端折り、主膳の娘おみつ黑の頭巾を冠り、安下駄を穿き相合傘にて出來り、後より山女衒の權次大黑傘をさし出來りて、

權次　おい〳〵、そこへ行くのは、月の輪のお母あぢやねえか。

お熊　むゝ、誰かと思つたら、山女衒の權次か、いつ鎌倉へ出て來た。

權次　二三日後に鴻の巢の、三河屋の、旦那と出て來たが、お母あ、いゝ玉はねえかの。

お熊　あるよ、極くいゝのがある。（ト顋でおみつへ思入。）

權次　ずつと踏めるね。

お熊　後に話をしようから、もうちつとして來てくれ。

權次　あい／＼出なほして來ます。ときに、兄貴は達者かえ。
お熊　相變らず堅藏で困るよ。
權次　ぜんてえ、盗人にやあ、いやさ、ぬしは堅い人だの。
お熊　え、口數利かずと、早く行きねえ。
權次　それぢやあお母あ、後に來るよ。（ト引返してはひる。）
お熊　これはお孃さん、お待遠でござりました。
みつ　いえ／＼、待遠なことはござりませぬ。さうしてお前さんのお家はえ。
お熊　つい向うでござります。さ、轉ばぬやうにおいでなさりませ。（ト本舞臺へ來り門口にて、）あい、今歸つたよ。（ト内へはひる。）
左内　これはお袋さん、嘸お困りなすつたらう。
お熊　さあお孃さん、こつちへおはひりなさりませ。
みつ　左樣なら御免なさいまし。（ト内へはひる。左内見て、）
左内　もしお袋さん、このお孃さんはえ。
お熊　今この先の四つ辻にうろ／＼してござつた故、樣子をお聞き申したら何か尋ねるお人があつて、

お家を忍んで出なされたさうだが、晝の内はい丶けれど夜に入ると宿無者めらが、どんなことをしようも知れぬ。そこでお連れ申して來たのだ。

左内　そりやよいことをなさいました。

お熊　さあお孃さん、まあゆつくりとなさいまし、お前さんの行きたい所へ、私が送つてあげるから、必ずお案じなさいますな。

みつ　どうぞお頼み申しますわいな。

お熊　さうしてお前さんのおいでなさる所は、どこでござります。

みつ　さあ、私の行くところは。（ト言ひ兼ねる思入。）

お熊　どこまでもお世話は申しますからは、隱さずとおつしやりませ。

左内　いつたい、お前さんはどちらでござります。

みつ　さあ、私や稲毛の御家中で、松田主膳の娘でござんすが、お屋敷のお辻番にゐる、與之助といふものに、逢ひたいのでござりますわいな。

お熊　（これを聞き、頷いて、）は丶あ、それで樣子が分かりました。それぢやあその與之助さんといふが、お前さんの情人でござりますね。

みつ　いえ〳〵、さうでは。
お熊　お隱しなさんな、私も卜者のお袋、見通しでござりますわな。
左内　然しお屋敷の辻番なら、鼻の先でござりませうに、何故こつちへおいでなさいました。
みつ　さあ、その與之助が昨日から、何處へ行つたやら行方が知れず、聞けば問注所とやらへ縛られて行たとのこと故、もしもこれぎり逢はれずばと、家を忍んで問注所へ行く積りで出は出たが、何處が何處やら道は知れず、どう仕ようかと思つたところ、お前樣にお目にかゝり、このやうな嬉しいことはござりませぬわいな。
お熊　必ずお案じなされますな、もう日暮れでござりますれば、明日早くお連れ申して、與之助さんとやらにお逢はせ申しませう。何にしろこゝの家は、人出入が多うござりますれば、御窮屈でもあの戸棚に、隱れておいでなさりませ。
みつ　いえもう、與之助にさへ逢はれることなら、どのやうなことでも厭ひはせぬわいな。
左内　こんな美しいお孃さんに、さう思はれる男は仕合せ者だな。
お熊　必ず誰が來ようとも、口を利いてはなりませぬぞ。
みつ　そりやよう、合點してをりますわいな。

ト此内花道より權次出來り、門口へ來り、

權次　はい、御免なせい。

左内　それ、表へ誰やら。

お熊　ちつとも早く、（ト戸棚を明けおみつを中へ入れ、戸を締める。權次門口を明けるを見て、）權次か。早かつたの。（ト言ひながら門口へ出て、小聲にて、）どうだ、さつきの玉は。

權次　年一ぱい、百兩がものはあるね。

お熊　旅へ賣るのはをしいものだが、この近所ぢやあ足がつくから、こんたの方へやらうかと思ふのよ。

權次　どうぞさうしておくんなせえ、あの位の玉が出來りやあ、おれも旦那の前へ鼻が高い。

お熊　ほかならねえ手前のことだ、働きにさしてやらう。

權次　そいつあ有難い、それぢやあお母あ御苦勞ながら、雪の下の小池へ行つて旦那に逢つてくんなせえな。

お熊　よし〳〵一緒に行つてやらう。（トこの内左内門口の方を窺ひ、あの娘を賣るのだなと思入。お熊門口を明ける。）これ左司公や、おらあちよつと小池まで行つて來るから、今の娘を氣を附けてくれよ。

左内　あい〳〵、合點だ。

お熊　左膳が歸つて來ても、だまつてゐろ。
左內　あい〳〵。
お熊　言ふときかねえぞ。いゝか、いゝかといふに。
權次　お母あ一度言やあいゝぢやあねえか、なるほど年を取るとくどくなるの。
お熊　いや、あの野郎おしやべりだから、油斷がならねえ。
權次　そんな憎まれ口を利きなさんな。（ト花道へ行きかけて、）
お熊　コウ〳〵そつちは遠い、近道を行かう。
權次　路が惡かあねえかえ。
お熊　年寄せえ歩かあな。（ト下手へはひる。）
左內　なるほど龜の甲よりや年の功、惡い事にかけては頭より上手だ。
ト雪おろし、我物と思へばの端唄になり、花道より左膳實は幸藏黑のきめ頭巾、被布、爪掛の下駄、蛇の目の傘をさし出來る。雪ちら〳〵と降る。
幸藏　月雪花のその中でも、雪にまさる詠めはない、野も山も白妙に限りなき銀世界、作らずしてのこの風景、あゝ雅人は賞美する筈ぢや。

卜雪に見惚れてゐる。と花道よりお元の弟三吉刺ッ子の筒ッぽ、紺の腹掛同じく膝の切れし股引を端折り、草鞋穿きにてむきみ笠を冠り、出來り花道にて、

三吉　もし〳〵旦那、ちつと物が聞きたうござります。

幸藏　（三吉を見て、）見れば年端も行かぬ小僧、この大雪にどこへ行くのだ。

三吉　あい、この近所に平澤左膳樣といふト者があるなら、敎へておくんなせえ。

幸藏　おゝ、その左膳といふはおれだが、なんぞ用か。

三吉　ちつと、見て貰ひたいことがあつて來ました。

幸藏　あゝさうか、嘸雪で冷たかつたらう。さあ〳〵おれと一緒に來やれ〳〵。（ト本舞臺へ來り、）今戻つたぞ。（ト内へはひる。）

左内　これは先生、お早うございました。

幸藏　さあ小僧、こつちへはひりやれ。

三吉　あい。（ト腰をかけ、草鞋をぬいでゐる。）

幸藏　これ、湯があらう、汲んでやりやれ。

左内　へい、これ小僧、今湯を汲んでやるから、足を洗やれ。

三吉 なあに、雪だから足は汚れねえ。（ト手拭にて拭き、内へはひる。）
左内 先生、この小僧は。
幸藏 何か見て貰ひたいとて參つたのだ。
三吉 あい。（ト火鉢の傍へ來り、左内に向ひ、）小父さん、寒いね。（ト言ひながらあたる。）
左内 さうでござりますか。さあ、こゝへ來てあたるがいゝ。（ト火鉢を出す。）
幸藏 して、小僧はどこだ。
三吉 あい、おいらァ由井ヶ濱だ。
幸藏 由井ヶ濱ぢやあ漁夫だな。
三吉 あい、父さんが漁夫だつたがね、去年の二月死んでから、母さんと二人で餌掘りに出るよ。
左内 むゝ、それぢやあお袋と二人か。
三吉 なに、まだお元といふ姉さんがあるがね、おいらが父さんは博奕好だつたから、負けきつた時姉さんを、藝者に賣つてしまつたから、家にやあゐねえよ。
幸藏 はあ、そちが姉は藝者か。して、見て貰ひたいとは何だ。
三吉 あい、どろばうが何處にゐるか、敎へておくんなせえ。

兩人　え。（ト顔見合せ思入）
幸藏　藪から棒に泥坊を教へてくれとは、どういふわけだ。
三吉　今言つたおいらの姉さんに情人があるがね、母さんが若え時に乳母に行つた所の息子で、刀屋の新助さんといふのだがね、こないだその新助さんが、百兩とかいふお金を取られて、家へ歸ると叱られると言つて、いけどうなおいらの姉さんと、水心も知らねえで川へはまつて死なうとしたのさ、そこへ泥坊が來て助けてくれて、取られた金まで呉れたところ、極印とやらいふものがあつて、その金を持つてゐるものが泥坊だと言つて、新助さんも姉さんも、昨日縛られて行つたのさ。

トこれを聞き、幸藏扨は此間やつた金は、極印金であつたかといふ思入

幸藏　あゝ、知らぬことゝて。はて、可愛さうなことだなあ。
左内　それぢやあ、嘸家で困るだらう。
三吉　あい、姉さんが牢へ行つたので、お金が澤山入るけれど、母さんとおいらと朝ッから飴を擱りに行つても、三百か四百にしきやあなりやあしねえ。それに母さんが此間から風を引いて寐てゐるものだから、家に錢アちつともなし、おいらが布子や母さんの袷布子ぐるみ質にやつて、やつと

のことでお金を拵えてやつたがね、煩つてゐる所え姉さんが牢へ行つたので、母さんは泣いては
つかり、ついおいらも悲しくなつて、喧嘩しても泣いたことはねえけれど、もし母さんが死んだ
なら、姉さんは牢へ行つてゐるし、どうしたらよからうと思ふと、泣くめえと思つても涙が出て
ならねえ。

ト此内泣聲で言ひ、手拭にて涙を拭く、幸藏は不便なといふ思入

そんなことを思ふせるか、不斷おいら寐坊だけれど怖え夢ばつかり見て、夜もほんとに寐られや
あしねえ。今朝もお米を買ふ錢がねえから、七つから沙蠶を掘りに行つてね、そりよヲ百五十に
問屋へ賣つて、それで母さんにお粥を喰はして、さうして此方へ來たのサ。

幸藏 あゝ、まだ年も行かぬのに、いかい苦勞をしやるの。

三吉 どうぞその金をくれた泥坊がどこにゐるか、見ておくんなせえ。

幸藏 おゝ、見てやらうとも〳〵。(ト筮を持ち、)けんげんこうりてい〳〵。(ト算へ算木を置く。)

左内 嘸七つから餌を掘りに行つたら、冷てえことだらう。

三吉 そりやあもう、氷を踏み割つて入るのだから、足もなにも覺えはねえのさ。

幸藏 こりや小僧よ。この易の表では、その泥坊が直に知れて、おぬしが姉も先方の息子も、おそくも

二三日の内には、許されて歸らうから、案じるなと、家へ歸つたらお袋によう言やれ。
三吉　あい〳〵、そんなら二三日の内に許されて歸りますとか、そりやあ嬉しいことだ、大きに有難うござります。（ト辭儀をなし、）もし、いくらでござります。
幸藏　なに、禮物には及ばぬわい。
三吉　それでも母さんが、いくらだか直を聞いて、置いて來いと言ひました。
左内　なにさ、先生がたゞ見てやるといふから、その錢で歸りに、蕎麥でも喰つて歸るがいゝ。
三吉　そんならいゝかえ、氣の毒だなあ。
幸藏　些細な見料、心配には及ばぬ。
三吉　それぢやあ今度、むき身でも持つて來て上げよう。
幸藏　見料を取らぬ替り、この金をおぬしにやるから、何ぞお袋が好きなものでも買つてやるがよい。
ト紙入より金を出し紙に包みて遣る。三吉取つて見て、
三吉　こりやあお金だね、お金なら貰ひますまい。
左内　せつかく先生がやらうとおつしやるに、何故貰はぬのだ。
三吉　また縛られるといけねえものを。

幸藏　え。（トぎつくり思入。）

左內　馬鹿なことを言へ、そんな氣遣ひがあるものか。

三吉　それぢやあお貰ひ申しませう、こいやあ有難うござります。（ト戴き、）嚊母さんが嬉しがりませう。

ト腹掛の隱しへ入れる。

幸藏　さあ〳〵。たんと降らねえ內に、早く歸るがいゝ。

三吉　あい〳〵。

左內　嘸寒からうな。

三吉　なに、寒いとツて駈けて行きやあ、暖かになります。（ト草鞋を穿き笠を冠る。）こりやあ旦那、大きに有難うござりました。

幸藏　早く歸れよ。

三吉　あい〳〵。（ト花道へ行きかけ、）むき身ヨウ、馬鹿（貝）のむき身ヨウ。

ト駈けて花道へはひる。幸藏思入あて、

幸藏　あゝよしない情が仇となり。

左內　あもし。（ト言つては惡いといふ思入。）

幸藏　誰ぞゐるか。
左内　奥に醫者が待つてをります。
幸藏　むゝ、さうか。
　　ト思入。花道より乳母おふと傘をさし、下駄がけにて出來り門口へ來て、
ふと　あい、御免なさいまし、平澤左膳樣とはこちらでござりますか。
左内　あい、こつちだが、何方からござつた。
ふと　ちつと、見てお貰ひ申したいことがあつてまゐりました。
左内　左樣でござるか、さあ、こちらへおはひりなさい。
ふと　やつとこな。（ト門口を跨いで内へはひる。）
左内　木魚講と思つたら、お前は身持だね。
ふと　はい、お腹に就いて、見てお貰ひ申したうござります。
左内　それぢやあ、取上婆さんの所へ行つたら、よからうに。
ふと　いえ〳〵、先生に見てお貰ひ申さねばなりませぬ。（ト幸藏の側へ行く。）
幸藏　して、當用でござるか。

ふと　どうか、二十四文で見て下されぬか。

幸藏　見料はいかほどでもよいが、當用かと申すのぢや。

ふと　へえ、當用と百錢とは違ひますか。

左内　何を言はつしやるのだ。

ふと　（巾着より二十四文出して、）先づ見料は二十四文、奥に先生がゐるなぞと言つても、もう餘計には出しませぬよ。

幸藏　はて、よいと申すに。

ふと　二十四文ときまつたら、先づ當時の事から、死ぬ時までの事を見て下さりませ。

左内　いや、慾ばつたことだ。

幸藏　して、お前の身の上でござるか。

ふと　左樣でござります、何をお隱し申しませう、私の產れは京都烏丸枇杷葉湯賣の娘で、稻毛の御家中に奉公をしてをります、お乳母でござります。ちつと澁ッ皮が剝けてゐると、かれこれいふのが男の道、それに私がお心好ゆゑ馴染になつた人が多く、山井養仙といふ醫者を始め、六七人もござりますが、何處へ片附けてようござりますか、それを見て下さいまし。

幸藏　承知しました。唯今見て進ぜませう。

ふと　それにお恥しうござりますが、御覽の通りの身體故、早く產み落したうござります。あいたゝゝゝゝ。(ト腹を押へる。)

左內　これ、どうしたのだ〳〵。

ふと　今日の雪で冷えましたせるか、お腹が痛んでなりませぬ、あいたゝゝゝ。

幸藏　それは嘸お困りだらう、何か藥を上げたいものだ。

左內　丁度奧にお醫者がござる、ちよつと見てお貰ひ申さう。もし〳〵奧のお醫者樣え、急病人がござります、ちよつと來て下さりませ。

ト奧にて「あい〳〵承知しました」と、養仙奧より出來りて、

養仙　これは先生御歸宅でござつたか、夕氣で一睡催し、とんと存じませなんだ、して御病人はどれでござりまする。

幸藏　卽ち、そこにをる婦人でござります。

養仙　婦人とは有難い。どれ、お脈を窺はうか。(トおふとの脈を見ようとし、顏を見合せ、)や、そちは。

ふと　お前は、養仙さん。

養仙（びつくりして、）こいつはたまらぬ。（と逃げようとするを捉へ、）

ふと　えゝ逢ひたかつた、逢ひたかつたわいな。

左内　扨は山井養仙といふ、一筆の情人は、

養仙　面目ないが愚老でござる。

左内　はて、物喰ひのよいお方だなあ。

養仙　さうして、おぬしやあどうしたのだ。

ふと　私や身の上を見て貰ひに來ましたが、今日の寒さでお腹が痛み、早く家へ歸りたいが、筋が引釣り歩けないから、お前どうぞおぶつておくれ。

養仙　途方もねえことを言つたものだ。どうしてそなたがおぶへるものだ。

ふと　えゝ情のないことをお言ひでないよ、帶屋の長右衛門などは、〽お池通りも影淒き柳の馬場を横に見て、（下淨瑠璃を語り、）と、お半をおぶつて桂川まで行つたわいな。丁度私も身持だから、お半の積りでおぶつておくれ。

養仙　何だ、お半の積りだ、俄ぢやァあるめえし。

左内　もしお醫者さん、お前もこゝらが恩返しだ、お乳母さんをおぶつてあげなせえな。

養仙　それだといつて、こんな土佛が。

ふと　誰がこんな土佛にしたのだ。

養仙　愚老ばかりしたといふ譯でもなし。

左内　何しろ、こゝで、蟲氣でもつかれては掛り合ひだ、早くおぶつて行つておくんなせえ。

養仙　あゝ仕方がない、猪食つた報いだ。（ト尻を端折り、門口へ後向きになる。）

ふと　そんなら、おぶつておくれか、おゝ嬉し。（ト養仙の背中へおふとおぶさる。）

養仙　とんだ親孝行だ。

左内　イヨウ〳〵、いゝ釣合の道行だ。

ふと　〽お池廻りも影凄き、（ト淨瑠璃を語る。）

養仙　えゝそれどころかえ、腰の骨が折れるやうだ。（トおふとを投り出し、逸散に花道へはひる。）

ふと　あいたゝゝゝ、さツても情ない養仙老、待つてくれ〳〵。（ト跛を引き〳〵追ひかけはひる。）

左内　とんだまぜツ返しだ。

幸藏　（机へもたれ思案の思入あつて、）さるにてもさつきの小僧は、可愛さうなことだなあ。

ト花道へ思入。と花道より松田の若黨本庄曾平次出來り、門口へ來て、

曾平　御免下され、先生は御在宿でござるかな。

左内　はい、在宅でござります。

曾平　然らば御免下されい。（と内へはひり、合羽を取り、よき所へ住ふ）

幸藏　これは〳〵雪中御難儀でござりましたらう、さ、さ火邊へお寄りなさい。

曾平　有難うござる。早速ながら先生、御判斷を願ひたうござる。

幸藏　畏まりました。してお願ひ事でござりますかな。

曾平　いや、斯樣な譯でござる、一通りお聞き下され。拙者事は稻毛の藩中、松田主膳が若黨木庄曾平次と申す者でござるが、當月六日の夜川岸通りの塀を乘越え、盜賊が忍び入り、お納戸金百兩奪ひ取つて行方知れず、その夜御殿の詰番は即ち拙者が主人にて、上より重き咎めの蟄居。こゝに一つの不便なは、その塀際の辻番人與惣兵衞といふ親仁が、その盜賊を手引なせしと、疑ひかゝつて繩目に及び、問注所にて今では牢舍、最早六十越したれば、殘る寒氣にひとやの責苦、所詮命はござるまい。その又悴に與之助といふがござるが、至つて親に孝心にて、紛失なせし金調へ、親が命を助けんと、雪の下なる若菜屋へ金を盜みにはひりしところ、捉へられてこれも繩目、なれどもその家の後家が情に不義なりと、その科を身に引受けて庇ふ樣子、これ皆元は我屋敷へ

忍び入つたる盜人故、何卒彼めを詮議し出し、主人を始め人々の難儀を救ふ心なれど、この盜賊が知れませうや、又は知れますまいか、御判斷願ひたうござる。就いては又主人の娘、今朝より行方知れず、聞けばかの與之助を戀ひ慕うてをるとやら、何れの方へ參りしやら、尋ねにまゐる方角をお指しなされて下さりませ。

ト此内幸藏一々術なき思入あつて、

幸藏　すりやその盜賊故、辻番の親子の者ども牢舍せしとか。あゝ、現在親を。

曾平　え。

幸藏　いやさ、お役目故に御主人も、いかい御苦勞なされまするな。

曾平　お察し下されい。

幸藏　どれ、判斷の仕りませう。けんけんこうりてい〳〵。（ トよろしくあつて、）この易の表では、遠からず盜賊も相知れ、御主人の御迷惑、且つはその辻番の親子の者の疑ひも、晴れまするに相違ござらぬ。

曾平　それは何より重疊、して、娘の方角は。

幸藏　お宅より乾にあたり、人に匿はれてござる樣子、それはやがて相知れませう。

倉平　當時名うての貴殿の判斷、よもや相違はござるまい。これにてまことに拙者も安心、主人も聞けば嘸かし悦び、これは些少ながらお禮の印しまで。（ト紙包を出し、禮を言ふ。）

幸藏　これは忝なうござりまする。

倉平　心急きにござりますれば、最早拙者はお暇仕る。（ト立たうとして、おみつの簪を拾ひ、）こりや裏梅の紋附、まさしく娘御おみつどのゝ簪。

幸藏　え。

倉平　どうしてこれが。

幸藏　多くの人の參る我宅、誰が取落して參りしやら。

倉平　それにしても、この紋は。

左内　はて、世間に似寄りもござりませう。

倉平　いかさま、尋ぬる一途に此の方のと、思ふは狹い心でござる、はゝゝゝゝ。然らば先生。

幸藏　お靜かにおいでなされい。

本庄　御免下され。（ト笠を冠る、左内提灯を點けて出す。）これは憚り。（ト花道へ行きかけ、）世には似寄りもあるものなれど、あまりといへばそのみそのまゝ、もしやこの家に、（ト振返り思入あつて、）いや、

心迷ふは愚痴の至り。どれ、乾の方をお尋ね申さう。（ト花道へはひる。）

幸藏　（簪を取上げ、）女きれなきこの家に、合點の行かぬこの簪。

左内　それは今の侍が、行方を尋ぬる娘の簪。

幸藏　や、すりや松田の息女が、どうしてこの家に。

左内　道に迷つてござつたのを、お袋樣がお連れなされ、戸棚の中に隱してござるが、山女衒の權次が世話で、鴻の巣へ賣る積り、その相談に雪の下へ、さつきおいでなさいました。

幸藏　すりや、あの母者人が。え〻、何不自由なくさせ申すに、又しても非道なこと、人の爲めとは言ひながら、我故難儀をかけたる人の、娘を賣つては重ぬる罪、その娘御を早くこれへ。

左内　合點だ。（ト戸棚の中より、おみつを連れて出來る。）

幸藏　いやなに御息女、定めて樣子は戸棚の内にて、お聞きなされたでござらうが、さつきあなたが伴ひしは、某が母ながら、心よからぬ性質故に、あなたを苦界へ沈むる企み。

みつ　え〻。

幸藏　此家にあつてはお身の御難儀、これなる若者を供に連れ、一先づお宅へお歸りあれ。

みつ　その志しは嬉しいが、逢ひたう思ふ與之助に。

幸藏　はて、緣あればいつにても、逢はれぬことはござりませぬ。
みつ　それぢやといふて。
幸藏　かういふ内も心急き、母が歸らば何かと面倒。
みつ　そんならこのまゝ。
左内　少しも早く。
幸藏　然し、途中の人目もあれば。
左内　それぞ幸ひ、この空葛籠。(ト上手の屋體より葛籠を持つて來る。)
幸藏　おゝ出かした〳〵。御窮屈でも暫くこれへ。(ト葛籠を明け、おみつを入れる。)
みつ　思はぬことにて、何かといかい。
幸藏　はて、お禮に及ばぬ。(ト蓋をして、)最前來りし曾平次殿、程は行くまい、後追つかけ。
左内　おゝ合點だ。(ト葛籠を負ひ、)そんなら頭。
幸藏　これ。(ト時の鐘、)
左内　どれ、一走り。
ト　ばた〳〵にて、左内逸散に花道へはひる。幸藏後を見送りゐる。これより床の淨瑠璃になる。

ト走り行く後見送りて幸藏が、血筋の縁と白雪の、我身に積る罪科を、算へたてたる悔み言、
ト幸藏思入あつて、どうと倒れ、

幸藏　盗みはすれど仁義を守り、富めるを貪り貧しきを救ふは天の道なりと、思ふも己が得手勝手、例へば人の難儀をば、金をもつて救うとも、救つた金が又人に難儀をかけて盗んだ金故、我身に報ふその罪科。（ト此内下手よりお熊出來り、門口にて内の樣子を窺ひゐる。）二三日以前稻瀬川にて、身を投げようとせしものを、留めて聞けば百兩の、金を人に騙られて言譯なさに死ぬとのこと、その折稻毛の屋敷より金を盗んで二人が命、助けやりしが仇となり、極印金に盗賊の疑ひ受けて牢舍せし、男は女房の縁家たる、雪の下の刀屋新助、女は藝者のお元とて、その新助が乳母の娘と最前小僧の哀れな話、聞いて間もなく又候や、曾平次殿の物語り、その夜の始末に同類の、疑ひ受けて牢舍せし、與惣兵衛といふ老人は、水子の折に別れたるこの幸藏が實の親、その父親を助けんと、盗みに入つて捕はれしは、顔は知らねど我弟、年端も行かぬ身をあはれみ、密夫と言うて盗賊の汚名を庇ふ若菜屋の、後家は女房が實の母、いかなればこそ此のやうに、由縁の人に難儀をば、かけるも元は百兩の金をこの身が盗みし故、因果は廻る小車の、引くに引かれぬ絶體絶命、うしのこの世も今日限り、いさぎよう名乘つて出で、血筋に絡む人々の、繩目を助けにやならぬ

わえ。

〽先非を悔いて幸藏が名乘り出でんと覺悟なす、門にはお熊が始終の樣子、とつくと聞いて打ちうなづき、裏道さして忍び行く、さすが稻葉も此の世の別れ、過ぎ來し方を思ひ出し、

ト文句の通りよろしくあつて、

これにつけても不便なは、我故親の勘當受けし若菜屋の娘お松、故鄕をはなれて旅歩き、而も駿河で我が大病、路用の金も何やかや、煎じつまりし藥の代、たゝまる宿の勘定に、可愛や駿河の二丁町へ浮き川竹の勤め奉公、その後聞けば鞍替に旅から旅へ行方知れず、いかなる憂目を見てゐるか、苦界を助けてやりたいと、思つた念の屆かぬも、今となつては却つて仕合せ、どうで一度は上の御苦勞、疊の上で死なれぬ身體と、我は覺悟をしてゐれど、女房の身ではいかばかり情ない夫と恨まば恨め、逢はぬばかりにこの歎き、かけぬが優であつたわい。

〽立派に言へど目に浮む、淚ぞ夫婦のまことなり。

斯くなる上は、片時も早く名乘り出で、人々の苦患を救ふがまだしも言譯、此の身の罪のあらましを、願書になして名乘り出でん。むゝ、さうぢや〳〵。

〽さうぢや〳〵と打ちうなづき、一間へこそは入りにける。

ト幸藏思入あつて奧へはひる。烈しく雪降り、この屋體半分上手へ引き、門口が舞臺の眞中になり、下手へ雪の積りし建仁寺垣を引出す。

〽又もしきりに降る雪の、中をうろ〳〵行く先も、どこがどこやら白妙に、憂目みどりを杖柱、夫のたより松山が、掟嚴しき大磯の籠を離れし目なし鳥。

ト花道より松山部屋着にて、雪の積りし絲立を着て手拭を冠り、鳥目の思入、禿みどり手拭を頬冠りにして、松山の手を引き出來る。

みど　もし花魁、お前は眼が惡い故、あぶなうござんすぞえ。

松山　いや〳〵私はそなたを賴りにする故、あぶないことはないけれど。したが折惡いこの雪で、嘸やそなたは冷たからう。

みど　いえ〳〵、私や冷たいことはござんせぬ。

松山　何のないことがあらう、私でさへ冷たうて足に覺えがないものを、いゝよたけもないそなたの身體、冷たうなうて何とせう。あゝ又つよう降つて來た。どこぞそこらの軒下へ、連れて行てくりやいの。

みど　あい〳〵。

〽雪踏み分けてたど〱と、宿る軒端も縁のはし、（ト門口へ來て、）

松山　もし花魁、こゝでちよつとお休みなさんせ。

おゝ、こゝは家の軒下故、雪もさつぱり積らぬ樣子、ゆつくり休んで行かうわいなう、

〽言ふ聲洩れて幸藏が、人や來ると門の口、さし覗いて窺ふも、知らぬこなたは寄りこぞり、

ト幸藏奥より出て來て窺ふ。松山はみどりの身體の雪を拂ひ、袖にて覆ひながら、

あ、折も折とて鳥目の病ひ、夜に入ると少しも見えず、今宵もそなたがないことなら、一足でも歩かれぬ。それ故雪の降るをも厭はず、夜夜中まで連歩く、邪慳な私に遣はるゝ、そなたは因果なことぢやなあ。

みどり　いえ〱、私やお前のことなら、死んでも大事ござんせぬ。

松山　えゝ、それほどまでにこの私を、思つてくれるか、嬉しいぞよ。

〽見えぬ目ながら引寄せて、みどりが顔を撫でさすり、

あゝ、爭はれぬ親子の縁。

みどり　え。

松山　これ、けふの今まで隱せしが、そなたは私が子ぢやわいなう。

みどり　え丶、そんならお前が、母さんでしたか。

松山　おゝ、勤する身に子があつては、邪魔になる故他人向き禿と言うて越路から、連れて來た故誰あつて、知るものなけれど親子の緣、今日の雪をも厭はずに、年にまさりしそなたの介抱、その心根が可愛うて、どうまあ名乘らずに、ゐられうぞいなう。

〽抱きしむれば縋り付き．

みどり　何故私には父さんや、母さんがないことぢやと、外の禿の親達が逢ひに來るその度に、羨しう思うたが、母さんができて嬉しうござんす。さうして、私の父さんは。

〽問はれて松山淚を拭ひ、

松山　その父さんは五年後、駿河の府中で別れたまゝ、便りも知れず逢はぬ故、眼の不自由な身を以て、雪の夜道も厭はずに、こんな苦勞をするわいなう。

〽わつとばかりに泣き沈む、聲は覺えの女房に、戶の隙間より幸藏がさし覗いてびつくり仰天、扨は禿は我子かと、恩愛妹背二筋の道に迷うてとつおいつ、五年この方尋ねし女房、名乘り聞けんかいや／＼／＼、名乘らば親子が歎きの歎き、言はぬに如かじと悸へる苦しさ、門には雪に冷え凍え、持病に胸へさし込む癪、

あいたゝゝゝゝ。

みど　もし、花魁、ではない母さん、どうぞなさんしたかえ。

松山　持病の癪が起つた故、こゝのお家へ御無心申し、お湯を一つ貰うてくりや。

みど　あい〳〵。

〽返事もうろ〳〵門に立ち、

もうし、こちのお家の人え、あんばいの悪いものがござります故、お湯を一つ下さりませ。

ト幸藏思入あつて手拭を冠り、言葉の調子を變へて田舍言葉にて、

幸藏　はあゝ、どうぞさつしやつたのかえ。

みど　あい、持病の癪がおきたのでござんす。

幸藏　そりやあハァ困るだんぺい、藥でもあるかえ。

松山　生憎藥は持合はさぬわいな。

幸藏　わしイ、好え藥があるから、進ぜますべい。

〽言ひつゝ手早く紙入より、藥取出し白湯持ち添へ、

それ、藥をやるから、呑まつしやい。

〽渡せば取つておしいたゞき、
松山　これは御親切に、有難うござりまする。
〽兩手を突いて禮を言ふみすぼらしげなその裝を、見るに不便のいやます雪、身體に積るを見兼ねる幸藏、傘とつてさしかざせば、
ト此中松山藥を飲み湯を飲みなどする、幸藏は雪頻りに降る故、有合ふ傘を開き松山にさしかざし
松山雪のかゝらぬ思入あつて、
みどいえ〳〵、藥を下されたこのお方が、傘をさしかけてござんすわいな。
これみどり、雪は止んだ樣子ぢやの。
松山　えゝ御親切に有難うござりますわいな、お情深い人さんは、このやうにして下さんすれど、今もこれへ參る道にて、さる軒下にをりましたら、情を知らぬお人故、見ればどうやら胡散な奴、置くことならぬ出て行けと、年端も行かぬこれまでも、杖棒もつて打ちたゝき、情ない目に逢ひますも、夫に逢ひたいばかり故、御親切なお方と見受け、お願ひ申すは此の邊に、平澤左膳樣といふ卜者はござんせぬか、御存じならばお家をば、お敎へなされて下さりませいな。
〽夫と知らず松山が、賴む哀れさ聞く切なさ、尋ぬる夫は我なりと言ひたい胸を撫下し、

幸藏　はあ、その平澤左膳チウ人は、四五日あとに上方のはうへ突走つたテ、急に歸ることぢやあんめえ。

松山　え、、すりや、四五日後にこゝを立ち、上方筋へ行かんしたとか、はあ、、、。

〽はツとばかりに泣伏せしが、やう〳〵と顏を上げ、

縁も由縁もないお方に、このやうなことを申しますも異なことではござりますが、御親切におつしやつて下さるにつけ、この身の不仕合せ、お聞きなされて下さりませ。元私は鎌倉にて、それ相應に暮せしものゝ娘にてござりますが、親の許さぬ不義をなし勘當受けてとも〴〵に、上方筋へまゐりし折賴みに思ふ男の病氣に、藥の代や宿錢のそのたゝまりに仕方なう、身持を隱し苦界へ沈み、辛い勤めのその中で産落せしはこのみどり、それより五年がその間、男へ操に肌觸れねば馴染んで通ふ客もなく、旅から旅へ住替へに、昨日は尾張今日は伊勢、流れ流れて大磯へ、出るとそのまゝ來る客に、かういふ男を知らぬかと問ひかけたればその人なら、滑川の邊りにて平澤左膳といふト者が、よく似てゐると詳しい話、男の苗字が平澤故たしかにそれと飛立つ思ひこの子を賴りに刎橋から、忍んで出たれど鳥目の悲しさ、見えぬ眼ながら追手を忍び、やう〳〵尋ね來て見れば又その人は旅の空、五年この方この子を連れ、泣かぬ日とてもないほどに、いくせ

の艱難苦勞なし、逢ひたう思うた願ひもかなはず、
〽神も佛もないことかと、思ふもやはりこつちの勝手、
親の許さぬ不義をなし、御恩も送らず苦勞をかけ、親ばかりかは金の爲め苦界に沈めば勤をば、
精出さねばならぬに勤めもせず廓を拔け、主人へ難儀に難儀をかけ、道に背いたことのみ故、天
道樣の御罰にてかゝる憂き目も此の身の罪、いつそ淵川へ身を投げて死にませうかと思ひますれ
ど、生ひさきのあるこの子が不便さ、死ぬにも死なれぬ苦しさを、憚りながら旦那樣、御推量な
されて下さりませいな。
〽かつぱと伏して泣き沈む、母が背中を撫でさする母子の心いぢらしく、名乘りたいのを喰ひ
しばり、怺へる苦しさ切なさは、ぐれんの氷張り裂く思ひ、八寒地獄の呵責の責も、いかで
これにやまさらんと、こぼるゝ淚吞込みて、
幸藏　あゝ、あかの他人の私等でさへ、こなたの哀れなその話聞いて淚がこぼれ申す、嘸や尋ぬる御亭
主が、これを聞かれたことならば、身も世もあられぬことであらう。
〽歎きを咳にまぎらせば、松山は顏をあげ、
松山　さあ、こちらではこのやうに思ひますれど五年が間、問ひおとづれのないのを見れば、もしや外

に増花の、あつて便りのないことかと、思ひまするも女子の常。

幸藏　あゝいや〱そりやこなたの廻り氣、五年この方艱難して男を思ふ親切が、屆かないでどうするもんだ。何しに仇に思ふべい。

〽我身を人のよそごとに、口には言へど眼に涙、禿は目早く打ちみやり、

みどり　もし母さん、お前がそんなに泣かしやんす故、このお方もさつきから泣いてばかりゐやしやんすわいな。

松山　おゝさうであつたかいの、よしないこの身の愚痴を申し堪忍して下さんせ。雪もどうやら小止みの樣子、そろ〱とまゐりませうわいの。

幸藏　そんならこなたは、もうゆかつしやるか。

松山　はい、どこといふ當もなけれど、まゐりませずばなりますまいわいな。

〽立兼ねるのをみどりは見兼ねて、

みどり　もうし、どうぞこゝへ今夜泊めて下さんせいな。

幸藏　あゝ泊めてやりてえものだけれど、おらあこゝの奉公人、家の主人は邪慳な人、なか〱泊めるこんでねえ。かうさつしやれ、これから二町ほど行つて、右へ曲ると百姓家があるから、そこを

賴んで泊めて貰はつしやれ。
〽言ひつゝ金を紙に包み、（ト幸藏懷より金を出し、紙に包み、）
駈落なさんしたとあるからは、定めて金もござるめえ、こりやあ少しばかりだけれど、おらが給金を溜めた金を進ぜるから、持つて行かつしやい。
〽手に渡せば探り見て、

松山　こりやまあよほどの金を、然し由縁もないお方に。

幸藏　はて、そりやあいらぬ遠慮、おらも田舍にやあこなたのやうな女房があれば、女房に遣つたと思やあ、何惜しいことがあんべい。

松山　そんならお貰ひ申しまする、えゝ有難うござんすわいな。（ト金を持つてゐる幸藏の手に縋り、）心の迷ひかさういふお聲が、尋ぬる男にどこやら似寄り。

幸藏　えゝ。

松山　あゝ尋ぬる男にこのやうに、廻り逢うたことならば、嬉しいことでござんせうわいな。
〽尋ぬる夫に逢ひながら、見えぬ鳥目のいぢらしさ。

幸藏　今にこのやうに逢はれようから、淵川へ身を投げるなどゝいふ、短氣なことは止さつしやい。命

さへあつたなら、逢はれることがあるだんべい。

松山　御親切に有難うござんすわいな。

幸藏　さあ〱、たんと積らねえ中に行かつしやい。

松山　はい、そろ〱と參りませう。

幸藏　これ、よう氣を附けたがよいぞや。（トみどりの背中をたゝく。）

みど　あい〱。（ト立上り、思入あつて行きかけ、）

松山　あゝ御親切なお言葉に、どうやら名殘りが惜しまれて。

幸藏　おらも、やりともないやうだ。

松山　さういふ聲が。（ト側へ來るを拂ひ退け。）

幸藏　あこれ、怪我せぬやうに行かつしやい。（ト門口をぴつしやり閉める。）

松山　はい、お別れ申しますわいなあ。

〽是非もなく〱松山が、降り積む雪を踏み分けて、二足三足行過しが、似寄りし聲に氣も引かれ、みどりに囁きさし足なし、傍の小蔭へ身を忍ぶ、

ト松山花道へ行きかけ、思入あつてみどりに囁き下手垣の小蔭へはひろ。

〽かくとは知らず幸藏が、門の戸明けて見送れど、二人が影の見えざれば、ほつと一息吐息をつき、

ト幸藏門口を明けて向うを見て見えぬ故、門の外へ出て見る。此内舞臺は元へ戻る。幸藏家へはひり、思入あつて、

幸藏　ちえゝ女房ども、許してくれ。別れほど經て五年越し、おれ故艱難苦勞をする女房や可愛い子供だもの、名乘りたいは山々なれど、明日は此の身の罪科に成敗受ける身體故、本意なく今宵歸せしは、そなたに歎きをかけまい爲め、情ない夫と思ふであらうが、知らずに歸るそなたより、知つて返すおれが切なさ。どうぞ許してくれいやい。

〽過ぎ行く方を伏拜み、悲嘆に暮るゝその所へ此の家の老母は立歸り、物をも言はず戸棚のうち、明けてびつくり仰天なし、

ト此時下手よりお熊出來り、内へ入り、戸棚を明けてびつくりし、

お熊　やゝ、こりや戸棚の内には、むう。

幸藏　母者人、何でござります。

〽言ふにお熊はうち頷き、

お熊　これ幸藏、おぬしやァこの戸棚の中にあつたものを、知らねえか。
幸藏　戸棚の中にあつたとは、稻毛の家中松田主膳どの、娘御でござりますか。
お熊　やあ。（トぎよつと思入あつて、）扨はおのれが娘をば。
幸藏　はい、送らして返しました。
〽聞くより老母は幸藏が、襟上取つてぐつと引附け、
お熊　こりややい、あの娘は鴻の巣へ賣り、百兩にする大事の代物、なんでわりやあお母さんの仕事の邪魔をしやあがる、えゝ腹の立つ、どうしてくれう。
〽傍に有合ふ天眼鏡、とるより早くめつた打、幸藏その手をきつと取り、
幸藏　これ、母者人。
お熊　なんだ。
幸藏　えゝ情ない、こなたはなあ。盗みはすれどこの幸藏、非義非道の働きせず、人に難儀をかけまいと、利合の細き町人の家へ入つたことはねえ。百や二百の端金盗まれたとて障りにならぬ、大小名のお納戸金、盗んだとてもその金を、おのが私慾に使やあしねえ、難儀な人を助ける金、それに引替へこなさんは、非義非道の働きのみ、金がほしくば何萬兩でも望み次第に上げまする。年

端も行かぬ娘を騙し、旅へ賣るとは非道な仕方、それ故助けて歸せし娘、どうぞこれから無慈悲なこと、思ひとまつて下さりませ。（ト言ふを遮つて、）

お熊　いやだ〳〵、どうで盗人をするからは、情があつてもなくつても上のお手にかゝる時ア、兇状は同じことだ、金がほしくば何萬兩でも夷講の賣買ぢやアあるめえし、御大層なことを吐かしやあがるな。年は取つてもお母さんは、頭の禿げた古猫だ、おれが眼からは鼠、何のちつぽけな形をして、大人ツくさい小僧めが、これ鼠よ、いやさ小僧よ、鼠よ、えゝ小僧めがしやらつくさい。（ト天眼鏡で又打ち、）汝等に金は貰はねえでも、しなびた腕で百兩や二百兩の金は直働かあ、貰ひ物ぢやあ肩身が狹い。さあ、金にする娘を返せ、えゝ返しやあがれといふに。

〽立蹴にはつたと蹴倒せば、親といふ字に手出しもならず、（ト幸藏きつと思入あつて、）

幸藏　そりや母者人無理といふもの、送つてやつた娘をば、どうしてこゝへ呼ばれませうぞ。

お熊　呼ばれぬものを、何故やつた。

幸藏　さあ、それは。

お熊　何で親の邪魔をするのだ。

幸藏　さあ、それは。

お熊　言譯なくば、娘を出せ。

幸藏　さあ、

お熊　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

〽たぶさを取つて引きずり倒し、

お熊　こりややい、わりや水子のその折に、襤褸に包んで捨てあつたを、おれが拾つてこの年まで育てたばかりか盜人の、道まで教へた恩ある親だぞ、その親の金になる邪魔をしやがる腹癒せは、かう〳〵〳〵。

〽疊へすりつけにじり附け、

斯うされても手出しは出來めえ、えゝ意氣地のねえ野郎だなあ。

〽親の高下に幸藏が、無理と知りつゝ身を詫ぶる弱身へ附込むお熊婆、打つたゝきつ言ひたいがい、折しも夜明の鷄の聲、

幸藏　最早夜明に程近し、片時も早く、それ。

〽名乘り出でんと幸藏が、有合ふ刀ぼつこんで、行かんとなすをお熊婆帶際しつかと引留め

て、

　ト幸藏立上り一腰をさし、血相して行かうとするを捉へて、

お熊　むゝ、血相變へて刀をさし、わりやおれを殺す氣だな。

幸藏　えゝ、めつさうなことおつしやりませ、ちつとのがれぬ用事があつて夜明までに行くところあれば、どうぞやつて下さりませ。

お熊　いや〳〵、そりやお嘘だ〳〵、おれを殺すに違ひねえ。さお殺せ〳〵。

幸藏　えゝ又してもその樣なこと、產の親より勝りし大恩、何とてこなたが殺されませう。

お熊　さほど恩あるおれなれば、何故娘を逃したのだ。

幸藏　さあ、それは。

お熊　何のうぬが恩を知らう、浮世に邪魔なおれが身體、殺す氣に違ひねえ、さお殺せ〳〵。（ト幸藏に身體をつきつけよろしくあつて、殺し樣を知らずば、敎へてやらうか。

　〽言ふより早く幸藏が、刀すらりと拔放すを、あはやとその手をじつと留め、

幸藏　あこれ、あぶない、放さつしやりませ。

お熊　いや〳〵、放さぬ〳〵。

〽争ふはずみ過つて、お熊か肩先切附くれば、あつと一聲おどろく幸藏、

幸藏　やゝ、こりや手が廻つてか、ほい。

お熊　うぬ、親を切つたな。

幸藏　許して下され、こりや怪我だ〳〵。

お熊　いや〳〵怪我ぢやあねえ、おれを殺すのだ、とても殺すなら、かうして殺せ。

〽刀持つ手を持添へて、七顚八倒虚空を摑み、敢なく息は絶えにけり、幸藏はッと打ちおどろき、

ト此内お熊刀を持ち添へ我喉へ突きたて、アッと苦しみ、よろしくあつてばつたり落入る。幸藏おどろきどうと倒れ、死骸に縋り、

幸藏　えゝ情ない母者人、水子の折より此年まで、育てし私をこなさんは、親殺しにしたいのか。

〽悔み歎いて幸藏が、動かす死骸の懐より、ばつたり落つる胴巻に、結び附けたる怪しの一通、手に取上げ、（トお熊の懐より、序幕の胴巻と書置の出てゐるを見て、）

此の胴巻はまさしく金、結び附けたる一通は、「書置のこと、」やゝゝゝ。

〽はツとおどろく表の方、さし足なして松山が内の様子を窺ひゐる、こなたは書置繰りひろ

げ、、

ト此中下手より以前の松山、みどり出來り門口に窺ひゐる。幸藏は書置を開きて、

なに〳〵、「一筆書殘しまゐらせ左候へば先程門口にてそなたの身の上承り候ところ、刀屋新助どのが金子百兩騙られし言譯に、藝者お元と身を投げ死なんと致し候をそなたが留め、稻毛の屋敷より百兩盜み、新助どのへ遣し候金子が、極印金にて盜人の疑ひかゝりし、新助どのお元どの兩人を始め、多くの人の難儀を見兼ね、名乘り出て一命捨て候健氣なる心に慚ち、六十年來仕込んだる惡心發起なし候は、右百兩の金を騙り候は我等に御座候、それ故これまでの言譯に、そなたの手にかゝり相果て申候、尚騙り取り候この百兩の金を持參なし、いさぎよく名乘りいで成敗受けらるべく候、そなたの來り候を死出三途にて相待ち申候、先は我身の言譯のみ、あら〳〵かしく。」(ト讀みておどろき、)扨は新助殿の金を騙りしは、母者人にてあつたるか、やゝゝゝええ惡心發起なされたら、死なずと仕樣もあらうのに、早まつたことして下さつたなあ。

〽死骸に取附きかきくどく、時しも撞出す六つの鐘、

南無三、明六つ。

松山　嬉しや、此の眼が。

幸藏　時刻のおくれ。

〽時刻のおくれと幸藏が、氣の急く門には松山が、鳥目に悦ぶ明烏、片時も早く

〽明くる戸口に見合はす顏。（と幸藏門口を明け、松山と顏を見合せる。）

松山　や、お前は次郎吉さん。

幸藏　そなたはお松。

みど　そんなら、さつきの小父さんが。

幸藏　われが實の父ぢやわい。

兩人　えゝ、逢ひたうござんしたわいな。

〽兩人ひしと縋り附き、

松山　最前逢うたその時に、言葉は田舍訛りなれど、あまりよく似た聲音故、取つて返して樣子を聞けば　やつぱり違はぬ尋ねる夫、何故名乘つては下さんせぬぞいなあ。

幸藏　さあ名乘らぬ仔細は生先ある、娘に憚る此の身の罪科、仔細は母のこの書置。

松山　その書置の文言は、門にて聞きしが、そんならそれ故。

幸藏　名乘つて出ねばならぬ幸藏。

松山　えゝ、先非を悔いて母樣がこの御最期に又候や、お前が名乘つて出やしやんして、後に殘つて何樂しみ、私もとも〴〵冥土の道連、

幸藏　その志しは忝いが、おぬしが死んでくれたとて、迷ひにこそなれ爲めにはならぬ。死ぬる命を存へて娘を育て亡き後の、弔ひをしてくれるのが、死ぬより勝る何より供養、必ず死んでくれるなよ

松山　すりや死ぬるにも死なれぬか、これを思へば世の中に、

幸藏　いかなるものか夫婦となり、又子となりし別れしも、

松山　算へて見れば五年越し、

幸藏　苦勞駿河の府中より、

松山　別れ〳〵になりし身の、

幸藏　廻り逢うたる悦びも、

松山　直に別れの悲しみと、

幸藏　なるは如何なる、

兩人　因果ぞや。

ト兩人愁ひの思入、この以前下手より松葉屋の若い者喜助出來り、門口に窺ひゐて、この時門口を明け、

喜助　松山見つけた。（トつか〱とはひろ。）

みど　あれ。（ト松山に縋ろ。）

松山　これ。（ト後ろへ圍ふ、幸藏喜助をうん〱と當てろ。）

幸藏　思へば果敢ない。（ト喜助をポンと轉し。）

兩人　緣ぢやなあ。

〽逢ふは別れの、

ト三重になり、顔見合せ愁ひの思入、本釣鐘にてよろしく、

幕

# 五幕目

鎌倉問注所の場

同裏手水門の場

〔役名＝稻葉幸藏、早瀨彌十郎、刀屋新助、辻番人與惣兵衛、同忰與之助、石垣伴作、中川東藏。

鼠小僧

若菜屋後家お高、藝者お元、お元弟三吉等」

（問注所の場）＝本舞臺三間の間高二重、本緣附の屋體、正面に白洲階子、軒口に三鱗の紋附の幕を張り、絞りあり、向うは大紗綾形の襖、上下後へ下げて柵矢來、總て鎌倉問注所の體。二重眞中に早瀨彌十郎住ひ、平舞臺上下に番卒丹平雲平控へゐる、此の見得時の太鼓にて幕明く。と、ばたくになり、花道より家主金八願書を懷へ入れ、蜆賣り三吉を連れて出來り、

金八　へい、お願ひの者にござります。

番卒　其方は何者だ。

金八　由井ケ濱の庄屋にござりまするが、これへ召連れましたは、一昨日牢舍いたしましたる藝者お元の弟にござりまする。姉に對面いたし度くとせがみます故、お願ひに出ましてござります、お取次ぎ下さりませ。（ト願書を出す、丹平取次いで早瀨彌十郎へ渡す。早瀨開き見て、）

早瀨　むゝ、藝者元が弟三吉とは、その方か。

三吉　あい、おいらでござります。

早瀨　母が病氣とのことぢやな。

三吉　あい、此間から寐てゐるとこへ姉さんが牢へ行つたものだから、直惡くなつて昨夜なぞは譫語ば

かり言つて困りました。今朝もどうだか見て來てくれと言ひますから、庄屋さんを頼んで逢ひに來ました。どうぞ逢はしておくんなせえ。

早瀨　おゝ尤もなことぢや、逢はしてやるぞ。

三吉　有難うござります。

早瀨　それ庄屋、案內してやりやれ。

金八　畏まりました。（ト三吉を連れ下手へはひる。）

早瀨　こりや、雪の下若菜屋一件の者ども、これへ呼び出せ。

兩人　はッ。（と丹平は上手、雲平は下手へ向ひ、）

丹平　雪の下若菜屋の後家たか。

雲平　辻番人與惣兵衞が忰與之助。

兩人　双方ともに、これへ出ませい。

ト上下にて「畏りました」と返事あつて、上手より與之助繩にかゝり、十手を持ちし足輕繩を取りて出來り、下手より後家お高に家主佐次郎兵衞五人組二人附添ひ出來り、控へる。

早瀨　双方とも揃ひしか。

兩人　はッ。
早瀬　雪の下質屋渡世七郎右衛門後家たか。
お高　はッ。
早瀬　稻毛家の辻番人與惣兵衞悴與之助。
與之　はッ。
早瀬　あいや與之助、その方これなる後家たかゞ宅へ盜みに入りしと申すが、それに相違ないな。
與之　はッ。
早瀬　ありていに申し上げい。
與之　昨日申上げます通り、私事身貧に暮しをります故、人の富貴が羨しく、金銀を盜まんと後家たかが宅へ、忍び入りましたに相違ござりませぬ。
早瀬　こりやたか、彼れはあの通り、その方が宅へ盜みに入りしと申す、そちはやはり密夫と申すか。
お高　はッ、御意にござりまする、四十路に近き身を持ちまして、恐入りましたことながら、あの者と竊に語らひ、內外の者の眼を忍び、夜な〳〵庭の塀越しに忍ばせましてござります、折あしく手代どもに見咎められ、密夫と云はゞ我爲ならずと、與之助が庇ひだてに盜みに入りしと申すは僞

り、密通に相違ござりませぬ。

早瀬　こりやその方は後家故に、主なき身と思ふであらうが、假令死去いたさうとも、七郎右衛門といふ亭主のある身、世に位牌間男と申す、まこと密通に相違なければ、その分には許さぬぞ。

佐次　これお高どの、僞りを申上げるとそなたばかりのことでない、宿老どもの越度となる。第一數代續いたる若菜屋の暖簾にかゝる儀、包み隱さず申上げるがよいぞ。

早瀬　さあ、ありていに申上げい。

お高　唯今も申上げます通り、密通に相違ござりませぬ。事現はれしその時は、お仕置受けるも豫ての覺悟、然しながら與之助ことは、まだ前髪のことなれば、何辨へもなき身の上、殊には元より私から仕かけし戀にござりますれば、何卒與之助をお助け下され、此の身を密夫の御成敗になし下されまするやう、お慈悲をお願ひ申し上げまする。

トお高思入にていふ、此内與之助さうではないといふ思入あつて、

與之　恐れながら申上げまする、唯今後家が申上げましたは、ありや皆僞りでござりまする。金がほしさに私が盗みに入りしに相違ござりませぬ。何卒私を盗人の御成敗になし下され、密夫でなければ科なき後家、お助けなされて下さりませ。

早瀬　こりや後家、與之助はあの通り盜みに入りしとのみ申し、そちは密通せしと申すが、何れが是にて何れが非なるか、先づ當座の理を押せば、假令密通にもいたせ、塀を乘越し忍び入れば、これ盜賊も同じこと、かれが方には一つの利あれど、そちも密通と申すには、何か證據のあつてのことか。

佐次　これお高どの、かう見えてもこの家主若い時分は色男、此の身に覺えのあることだが、先づ色戀は文が最初、青物づくしか魚づくし、定めて文があるだらう、證據にそれを出さつしやい。

お高　さあ、その文もありましたれど、人目を憚りその都度々々、燒捨てましてござりますわいな。

丹平　證據なければその方が、

雲平　申し分は相立たぬぞ。

お高　文は燒捨てましたれど、外に證據がござりまする。

早瀬　してその證據は。

お高　憚りながらお役人樣、これ御覽下さりませ。（ト片肌脫ぐと、下に與之助の半纏を着てゐる。）

早瀬　むう、それが密通の證據とは。

お高　こりや與之助が半纏にござります。而も羽織を直せし紋附、今與之助が着てをりまする布子と同

じ紋所、二世の縁の寶結び、いつぞや稻毛の辻番へ忍んで逢ひに參りし折、時雨るゝ夜半の肌寒く、名殘りもをしの水放れ、風引かぬやうこれ着てと、貸してくれたるこの半纏、朝夕一つにゐる心で番ひ放れぬ比翼の肌着、女子の身にて男のものを着てをりますが不義の證據、なんと相違はござりますまいがな。

早瀬　何さま、それは一つの證據。

與之　あいや申しお役人樣、あの半纏は此間。（ト言ひかけるを遮りて、）

早瀬　こりや〳〵與之助、そちには尋ねぬ、控へてゐよ。

與之　ではござりますが、後家どのが、今言うたのは僞り故。

早瀬　はて扨しつこい、控へぬか。

與之　それぢやと申して。（ト立ちかゝるを、）

早瀬　えゝ控へいと申せば、控へをらぬか。

與之　はッ。（ト平伏する。）

早瀬　かゝる證據のある上は、いかにも密通に相違ない。

與之　えっ。（ト思入、早瀬二幕目の位牌を手箱の内より出して、）

早瀬　こりや、これを見よ。

お高　え、どうしてそれを。(トびつくりする。)

早瀬　そちが留守を幸ひに、取寄せおきし此の位牌、淨譽法林信士、貞譽法染信女、逆朱を入れしはそちが法名であらうな。

お高　御意にござりまする。

早瀬　夫婦は二世とこの如く、未來までも一つになる心で位牌へ記せし法名、然るにこれなる與之助と密通なせし上からは、そちが夫法林信士が面へ泥を塗りし其方、今我が見る前で今一度、未來の夫法林信士が、面へ泥を塗つて見せよ。

お高　そりや又どうして。

早瀬　位牌に記せし法林信士を、土足にかけて穢し見せい。

お高　さあ、それは。(ト早瀬位牌をお高に渡して、)

早瀬　さなればまことの密通故、そちを刑に行つてこの與之助は助けくれる。さあ、土足にかけるか。

お高　さあ。

早瀬　但しはかけぬか。

お高　さあ。
早瀬　さあ。
兩人　さあ〳〵。
早瀬　返答致せ、どゞどうぢや。（トきつと言ふ、お高術なき思入にて。）
お高　はツ、恐入りましてござりまする。
早瀬　恐れ入つたとは、どうぢや。
お高　唯今まで申上げしは、皆偽りでござりまする。
早瀬　何故あつてその方は、斯まで偽り申せしぞ。
お高　何をお隱し申しませう、それにをります與之助事は、親孝心のものにして私宅へも常から出入り、このほど塀を乘越え忍び入りて捕へられ、その身の言譯詳しく聞けば、稻毛の屋敷の辻足輕親與惣兵衞が盜賊の疑ひあつて獄屋の住ひ、六十越せし老の身に命のほども危ふしとて、金子を盜みてその親の命を助けんばつかりに、盜みに入りしあの與之助、まだ年さへも十五にて生先長い孝行者、盜人なりと言ひ立てなば、もしや命に障らうかと、それ故此身の浮名も厭はず密夫と言うて助けうとお上までも偽りしが、夫の位牌を土足にかけよと彌十郎樣の一言に、口には密通なせ

しと言へど、心で詫びる法林信士、どうまあ土足にかけられませう、是非なくまことを申上げます。たゞ此上のお願ひは忍び入りしと申せども、いまだ金子も取り得ませねば、何卒與之助が命をば、お助けなされて下さりますやう、お慈悲をお願ひ申し上げまする。

早瀬　ほゝお、あつぱれなる後家が實心、斯くあらんと察せし故、その方が僞りを白狀させしは我情、假令前髮の者にもせよ、密夫とあれば科は同罪、一人助くることはかなはぬ。まつた盗人なりと言へど、未だ金子を盗まぬ上親を助けん彼が孝心、殊には緣なきその方が浮名を厭はず庇ふ實心、かれに愛でこれに愛で、盗賊なれど與之助が一命は助けくれるぞ。

お高　すりや、お助け下さりますとか。

お高 與之　有難うございりまする。

早瀬　それ、與之助が繩目をゆるせ。

番卒　はツ。(ト與之助が繩を解く。)

佐次　やれ〳〵これで私も安堵、どうなる事と思つたに、彌十郎樣のお裁きにて、双方ともに事なく濟み、こんな目出度いことはない。言はずと歸りはどこかで一ぱい、辨當代も四五度ぶり、こゝらが宿老のかすりだて。

番卒　えゝ、かしましい默りをらう。
佐次　へゝい。
與之　(お高に向ひ、)もし後家御樣、お情厚きお志し、何とお禮を申さうやら、有難うございます。
お高　私もそなたの命が助かり、このやうな嬉しいことはない。
與之　その悦びに引替へて、親父さまには獄屋の住ひ。
お高　こちらも同じ甥御の新助、緣につながるお元が牢舍。
與之　彌十郎樣のお情にあまへましてのお願ひは、私が親與惣兵衛、
お高　又私が甥の新助、一目なりともお慈悲にて、
與之　お逢はせなされて下さりませ。
早瀬　苦しうない、許し遣はす。とつくりと對面しやれ。
二人　有難うございまする。
番卒　それ、双方ともに立ちませい。
二人　はあゝ。(下足輕、家主附添ひ上下へ別れてはひる。奥より石垣伴作出來りて、)
石垣　彌十郎殿、今朝よりお一人にて御詮議、御苦勞に存じまする。

早瀨　これは〳〵作作殿、さゝこれへ〳〵。
石垣　御免下され。御主君のお問合せで大きに遲刻仕ッた。して貴殿のおかゝり雪の下若菜屋一件、如何相成りましたな。
早瀨　唯今篤と詮議いたせしところ、後家が實心與之助が孝心、あつぱれなること故、双方とも許し遣はしてござる。
石垣　左樣でござつたか、貴殿拙者兩人の掛りたる稻毛家盜賊の一件、一詮議仕らうではござらぬか。
早瀨　如何にも、再應吟味を遂げねばならぬ。
石垣　こりや〳〵、一件の者共をこれへ呼出せ。
番卒　はッ。（ト上下へ別れて、）
丹平　稻毛家辻番與惣兵衛、
雲平　雪の下刀屋新助藝者元、双方ともに、
兩人　これへ出ませい。
ト上下にて「ハア」と返事ありて、上手より與惣兵衛繩にかゝりて足輕附き、下手より新助、お元同じく繩にかゝり足輕附きて出來る。

足輕　下にをらう。（トこれにて双方よろしく住ふ。早瀬與惣兵衛に向ひて、）

早瀬　こりや、辻番人與惣兵衛、稻毛の塀を乘越え、御納戸金百兩盜み取りし盜賊は、其方が手引きなせしとのこと、しかと左樣か。

與惣　昨日も申上げます通り、斯く老衰に及びし者を、御扶助下さるお主樣、何しに手引いたしませうぞ、御推量下さりませ。

早瀬　むゝそりや、さうありさうなことぢや。して新助、その方は金子百兩騙り取られ、言譯なさにお元もろ共身を投げ死なんとせし所を、さる者に助けられ、極印金とも知らず百兩貰ひしとのこと、してその者は何處の者ぢや。

新助　はッ、金子を失ひ死なうとまで存ぜしほどの事故に、心も心なりませず、何處の人とも存ぜず、助けられたるその上に、失ふ金子を貰ったるその嬉しさにそのまゝに、別れましてござりまする。

お元　その夜のことは何事も後や前にて後悔のみ、そのお人の名所を承はらぬは不調法、お許しなされて下さりませ。

早瀬　いかさま。これもさうありさうなことぢや。

石垣　あゝいや〳〵彌十郎殿、そりやあまりゆるがせなる御詮議、ちとお控へなされい。こりや新助、

二朱か一分の金ならば住所知れざる者にもせよ、貰ふまいものでもないが、小金ならぬ大枚百兩、住所名前も知らざる者より、貰ひしといふは不審の第一、必定わいら金子に困り、稻毛の屋敷へ忍び入り、盜み取つたに相違あるまい。

新助　いえ〳〵、まつたく貰ひ受けましたに相違ござりませぬ。盜みをいたす心なら何しに死なうといたしませう、この所を思召され、盜賊とのお疑ひお晴らしなされて下さりませ。

石垣　いや〳〵盜みをなしたに相違ない、聞けばこれなる藝者元を、三浦の藩中何某が執心なすを遺恨に思ひ、身請なすとの噂を聞けば、必定刀の代金は身請の方へ振り向けて、盜みをなしてその穴をうめる所存であらうがな。

新助　いえ〳〵何とおつしやりましても、そのやうな覺えはござりませぬ。

お元　身請などゝのお疑ひが、ござりますなら親方へ、お問合せ下さりませ。

石垣　だまらう、此奴が。じたいおのれが何某を忌み嫌うて、そのやうな貧乏野郎に從ふ故、貧の盜みにお上へまで御苦勞をかくるのだ。何故何某に從はぬのだ、心を改めきつと從へ、たはけ者めが。

早瀨　あいや作作殿、貴殿何を御意なされる。

石垣　はて知れたこと、盜賊の詮議仕る。

早瀬　盗賊の御詮議なら、藝者の元が何某の心に從ふの從はぬのとは、入らぬ御穿鑿かと存じます。

石垣　いや〳〵その道の元からして、詮議せねば相成らぬ。

早瀬　その元からの御詮議なら、これなる新助が騙られし金の出所は、三浦の家中平岡權內殿、貴殿の御舍弟より出でたる金子、元をたゞさばそれからそれ、枝葉が擴がり、思はぬ人に難儀がかゝらうも知れぬぞよ。

石垣　やあ。

早瀬　よい加減に御詮議なされい。

石垣　然らば、それはそれにして、新助めを拷問なし、盜賊の白狀させん。それ、新助めを拷問なせ。

兩人　畏まつてござりまする。（ト左右より、割竹を持ちて立ちかゝる。）

丹平　稻毛の屋敷へ忍び入り、

雲平　お納戶金を盜みしと、

兩人　ありていに申上げい。

新助　假令どのやうにおつしやりましても、覺えないことは申上げられませぬ。

丹平　言はぬとて、その分に致しおかうか。

雲平　拷問なして言はせるぞ。
新助　どのやうた責苦に逢ひましても、致しやうがござりませぬ。
石垣　しぶとい奴だ、それ打ちすゑい。
兩人　はツ。さあ申上げい〳〵。（ト割竹にて新助を打つ。）
お元　あもし、どうぞ私をお打ちなされて、新助さんをお助けなさつて下さりませ。
石垣　あゝいゝ覺悟だ。兩人共打ちすゑい。
兩人　はツ。申上げい〳〵。
ト新助、お元の兩人を打つ。兩人とも打たれながら互に庇ふ思入、與物兵衛これを見て、いとしいといふ思入あつて、
與惣　あゝこれ、知らぬと言はつしやるに、そのやうになされずとも。
石垣　えゝ入らぬ口出し控へをらう、今におのれもこのやうに、拷問なすぞ覺悟なせ。
與惣　はツ。（ト控へる。）
石垣　それ、打つて打つて打ちすゑい。
兩人　はツ。申上げい〳〵。（ト手酷く打つ。兩人苦しき思入あつて、）

新助　えゝ、さりとてはお情ない。この身に覺えもないことを、どうありていに申されませう。
お元　打たでかなはぬことならば、私を打つて新助さんを、お助けなされて下さりませ。
新助　いえ／＼私故にこの憂き目、お元を助けて私を、お打ちなされて下さりませ。
お元　いえ／＼私を、
新助　いや、私を、
石垣　えゝ、舌たるい庇ひだて、望みの通り打て／＼。（ト急いて言ふ。）
兩人　はツ。
早瀬　あいや／＼伴作殿、彼等もよほど疲れし樣子、暫時御猶豫いたされい。
石垣　いや／＼、猶豫いたさずもう一詮議、これも上への御奉公。
早瀬　ではござらうが、
石垣　伴作忠義を勵み申す。必ずお構ひ下さるな。
早瀬　はて、是非に及ばぬ。
石垣　いやわいらでは手ぬるい／＼。どれ、身共が直に拷問なさん。（ト下へおり、割竹を取つて）さあ、きり／＼と吐かしてしまへ。（ト新助、お元を打ち、）さあ吐かさぬか、吐かさぬか。吐かさぬとて言

はさずにおかうか。かう〳〵。（ト兩人を續け打ちに打つ、兩人肩息になりて、）

新助　いかなる因果でこのやうな、身に覺えない疑ひ受け、かゝる憂き目に逢ふことぞ。

お元　これを思へばあの折に、いつそ死んだらよかつたに、

新助　なまじ存らへ失うた、金を貰うたばつかりに、

お元　疑ひ受けてこの苦しみ、

新助　とてものことに命をば、

兩人　おとりなされて下さりませ。

石垣　おゝ命を取つてやらうから、盗みをせしと白狀なせ。

兩人　それぢやというて、

石垣　きり〳〵と吐かしをらう。

ト兩人を打ちすゑる。これにて新助、お元顏を見合せ、盗賊となつて死なうといふ思入。

新助　はい、盗賊は、

兩人　私どもでござりまする。

石垣　むゝ、よく白狀なした。

新助　その替りには二人とも、

お元　早う殺して、

兩人　下さりませ。

石垣　彌十郎殿お聞きなされたか、白狀いたしました。

早瀬　それはお手柄なことでござつた。

　　トこの内與惣兵衛始終氣を揉む思入。トヾ怺へ兼れし思入にて、

與惣　あもし〳〵、その盗賊はそのお方ではござりませぬ。

石垣　なんと。

與惣　その二人の衆は、その夜金を貰うたお人、盗んだ人はほかにござりまする。

早瀬　なに、外にあると申すか。

與惣　あまり今の拷問が強さに、大方盗人と白狀なされたでござりませうが、この親仁が證人、その盗人ではござりませぬ。

早瀬　いかさま、さうありさうな事ぢや。すりや伴作殿、再吟味をなされずばなりますまい。

石垣　むゝ、再吟味より、こりや老耄、外に盗賊あることを、どうしてそれを存じをる。

與惣　へい、見てをりましてござりまする。

石垣　見てをつたとあるからは、おのれ盗賊の同類だな。

與惣　いえ、まつ〳〵以て。

石垣　何故また同類でないならば、見のがして取り逃した。

與惣　さあ、それは、

石垣　同類なるか。

與惣　さあ、

石垣　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

石垣　それ、拷問なせ。

番卒　はツ。さあ、申上げい〳〵。（ト丹平雲平の二人與惣兵衞を打つ。）

與惣　どうぞお許しなされて下さりませ。

番卒　許してやるから白狀なせ。（ト散々に打ちすゑる、與惣兵衞怺へ難き思入にて、）

與惣　あ申上げます〳〵、所詮拷問では助からぬ我命。（ト覺悟せし思入にて、）何をお隱し申しませう、そ

の盗賊は私めでござりまする。

石垣　すりや、おのれが盗みしとか。

新助　あもし、その夜の盗人はそのお人ではござりませぬ。

石垣　まだそんな事を言ふか。

お元　お金をお貰ひ申せしは、外のお人でござりまする。

石垣　えゝおのれらは不分明なことばかり。それ、双方とも、今一應扶ち上げて拷問なせ。

皆々　畏まつてござりまする。

　　ト花道揚幕の内にて、稲葉幸藏の聲にて、

幸藏　あいや、その御詮議、暫くお待ち下さりませう。

石垣　なんと、

　　ト花道より幸藏出來り、花道よき所へ控へる。與惣兵衛、新助、お元等見て、

新助　や、思ひがけない、

お元　お前はその夜の、

與惣　盗人どの。

石垣　扨は彼めが盗賊とな。それ、取逃すな。
皆々　心得ました。
幸藏　いやお騷ぎあるなお役人、我と名乘つて出でたる盗人、逃げも隱れも仕らぬ、お下にござつて下さりませ。
石垣　む丶。（ト控へる。）
早瀬　して、その方は何と申す者ぢや。
幸藏　ハツ、私こそは稻葉幸藏と申す、盗賊にござりまする。
石垣　扨はおのれが稻葉よな。それ、繩打て。
早瀬　あいや作作殿、お控へなされい。唯今彼が申す如く、自身に名乘り出でたる上は、篤と仔細を訊せし上、繩打つともおそかるまじ。
石垣　でも、燒鳥にへを、とりにがしては。
早瀬　はて、氣をいらだてずと、お控へなされい。
石垣　む丶。（ト控へる。）
早瀬　いざ、幸藏にはこれへ。

幸藏　眞中御免下さりませう。（卜本舞臺へ來り、眞中へ住ふ）

早瀨　して、その方が名乘り出では。

幸藏　我故これなる人々が、無實の疑ひ受けしと聞き、助けん爲めに此の身の罪科、申上げたるその上にて、御成敗を受けんと存じ、名乘り出ましてござりまする。

早瀨　む、すりやその方が稻毛の屋敷へ、忍び入りし盜賊とな。

幸藏　御納戸金を盜みし次第、恐れながら一通りお聞き取り下さりませう。先づ事の起りと申しまするは、これなる刀屋新助殿が、鶴ケ岡にて三浦家より預りし、金子百兩騙り取られし故の事、この金子を騙り取りしは、卽ち私が養母お熊婆あと申す者、その金故に言譯なく新助殿にはお元どのと、身を投げ死なんとせしところへ、參り合せて樣子を聞けば、金故命を捨てるとある故、見るに忍びず後なる稻毛の屋敷へ忍び入り、百兩盜んで二人が命助けしが仇となつて、極印金に疑ひかゝり二人ともに此の繩目、その折これなる與惣兵衞殿、辻固めの身をもつて取逃しては役目の越度なれども、此のほど瘋癲にて歩行自由にならざれば、取押へること思ひもよらず、とあつて逃がさば役目の越度、一棒われに當てる間我を殺して立退けと、義を立通す老の賴み、この老人の繩にかゝり、手柄にさせんと存ぜしかど、前申す養母ある故その場を逃げしばつかりに、與

惣兵衛殿も牢舎の憂き目、まだそれのみか若菜屋の後家、老人の悴、新助殿の親父、お元どの、母弟、多くの人へ難儀をかけしも、その原は皆我がなす業。二十五歳の曉も昨日と過ぎて夢も覺め、最早命の盡きる期と覺悟を死出の旅支度、身にお仕着を纏ふとも、せめてお上の成敗受け、この身の罪を滅ぼす所存、かゝる樣子を老母が聞き、先非を悔いてこれも又、命を捨てゝの身の言譯、即ち證據はこの書置、騙りし金の百兩もろとも、お上へこれを差上げますれば、その元々へお返し下され、この幸藏に繩をかけ、無實の罪の人々を、お助けなされて下さるやう、偏にお願ひ申上げまする。

ト幸藏思入にて言ひ、書置と金を出す、足輕早瀨の前へ持行く、早瀨感心の思入にて、

早瀨　ほゝお、惡に強きは善にも強しと、改心なして人々の難儀を助けんその爲めに、我と我身の罪を訴へ自身の白狀、神妙々々、彌十郎感心のいたす。

幸藏　はゝはッ。（ト辭儀をなす。）

早瀨　これにて始中終明白に分かりたり、それ三人の者の繩目を許せ。

番卒　はッ。（ト與惣兵衛、新助、お元等の繩を解く。）

石垣　此上は、幸藏がこれまで積る惡事の段々、拷問なして白狀さゝう。

早瀬　あいや、幸藏詮議は拙者が致す、貴殿は此場のあらましを、御前へ御披露下されい。

石垣　委細承知仕ッた。

早瀬　こりや、その方ども、休息いたせ。

番卒　はッ。

石垣　然らば拙者は奥殿へ。

早瀬　御苦勞ながら、

石垣　彌十郎殿。

早瀬　伴作殿。

石垣　後刻、

ト時の太鼓になり、石垣伴作は奧へ、番卒は上下へ別れてはひる、早瀬上下へ向つて、

早瀬　それ、身寄の者は、これへ出ませい。

ト上下にて「はあ、」と三人の返事して、上手より與之助、下手より若菜屋のお高、蜆賣りの三吉出來り控へる。

それにて樣子は聞いたであらうが、金を盜みし幸藏が我と我身の白狀に、事明白に分りし故、新

助が騙られし金子は新助へ相渡す、極印金の百兩は、此方より稻毛家へ使者を以て相渡さん、與惣兵衞は悴與之助、新助は伯母高、お元は弟三吉、三人の者へ引渡す間、勝手次第に連歸れ。

三人　はゝ、有難うござりまする。

トお高等三人辭儀をする。早瀨金を新助に渡し、お熊婆あが書置を開き讀みゐる、與之助は與惣兵衞に、お高は新助に、三吉はお元にすがりて、

與之　もし、父さま。

與惣　おゝ、悴よ。

お高　新助。

新助　伯母者人。

三吉　姉さん。

お元　弟。

お高　所詮この世で逢はれまいと。

與之　思ひのほかにこの御赦免。

三吉　こんな嬉しいことはない。

與惣　こりやまあ、夢では、

皆々　ないかいの。(ト手を取交し思入、此内幸藏ぢつと俯向き思入あつて、)

幸藏　よしなきことにて此方衆へ、難儀をかけし稻葉幸藏、その罪故にこの身をば刀の錆となすが言譯、
　これにてどうぞ許して下され。(ト双方へ思入)

新助　假令憂き目に逢へばとて、あの折命を助けられずば、

お元　浮世を短う暮す二人、

與惣　我も無慈悲に殺されなば、再び悴に逢はれぬ身體。

お高　今このやうに血筋の者が、

與之　名乘り合ふのもお前のお蔭、

三吉　何で恨みに思ひませう。

新助　言ひ置くことでもござりますなら、

與惣　せめてもの恩返し、

お高　何なりとも遠慮なく、

與之　どうぞ言うて下さりませ。

幸藏（思入あつて、）此期に及び何一つ、言ひ置くことはなけれども、此の世の別れ與惣兵衞殿へ、進せたいのは我が守袋。（ト懷中より取出して與惣兵衞に渡す、與惣兵衞見てびつくりなし、）

與惣　やゝ、こりやこれ覺えの劍先切、この守り袋を所持なすからは。

與之　そんなら常々噂に聞いた、別れ程經し私が兄さん。（ト言ひかけるを押へて、）

幸藏　あゝこれ。（ト言つては惡いといふこなし、）又若菜屋の後家御へは、祕府の守をお讓り申す。

お高（取つて見て、）やゝ、こりや娘が自筆の起請、そんならそなたが、

新助　お松どのと言交せし、

幸藏　あ、これ、（ト押へ、上を見る。此時早瀨扇を頰杖に居睡りをしてゐる。）

與惣　扨こそその時年恰好、似寄りに若しやと思ひしが、これを所持なす上からは、二十何年その以前、水子で別れし我子の次郞吉。

與之　常に話にこの年月、明暮逢ひたう思うたる、兄さんでござりましたか。

ト與惣兵衞、與之助幸藏の側へ寄る、幸藏思入あつて、

幸藏　いゝやそれは盜んだ品、私は何でもなけれども、その持主は誰にもせよ、定めて生の御恩も送らず、親に先立つ不幸者、逢はぬ往昔は知らぬこと、見れば名殘りがをしまれて、不幸な兒になり

替り、親へ孝行頼むは弟、とさあ、この持主が言ふであらう。
與之　そのお頼みがないとても、たつた一人の親ぢやもの、大事にせいで何としませう。
幸藏　必ずともに頼むぞよ。
お高　噂は聞けどついぞこれまで、逢はねば顔は知らねども、此品持つてゐるからは、五年以前鎌倉を連れ退きなせし娘が聟。
新助　次郎吉殿と言はれしは、世にも稲葉と名の高き、幸藏殿であつたるか。
幸藏　いゝや、それも守り袋と一つに盗みし女の起請、その娘御も男故苦勞苦患の悪足も、名乘つて出れば命の年明け、勘當許して下されと起請の男が親への頼み、
新助　おゝ、そりや伯母御とて血を分けし、現在娘のことぢやもの、何の憎いことがあらう、勘當なすは世間の手前。
お元　ぬしはもとより私もとも〳〵、お詫申して御勘當、お許しあるやう、お願ひ申しませうわいな。
幸藏　それにて私も一つの安堵。
三吉　さあ姉さん、母さんが待つてゞあらう、少しも早く歸りませう。
お元　あゝ、これ、忙しない。

幸藏　いや、その身の疑ひ晴れたる上は、善は急げ少しも早く。
與惣　あ、思ひまはせば不思議にも、血筋の緣にしがらみて、
お高　こゝにつらなる人々は。
與惣　私とは親子。
與之　この身は兄弟。
お高　名乘れば姑。
新助　從兄弟同志。
三吉　おいら二人も。
お元　つながる御緣。
幸藏　それもこの身の臍緒と起請を返す上からは、緣はこれまで、あかの他人、私に構はず少しも早う。
六人　とは言へ、見捨てゝ、
幸藏　はて、歎きをかけぬが、この身の言譯。
六人　それぢやと言うて、
幸藏　上への恐れ、言葉は御無用。

六人　はあゝ。（ト泣き伏す。此時早瀬目の覺めし思入にて、）

早瀬　あゝ春眠曉を覺えずと、詩に聯ねし如く、春の睡氣にとろ〳〵と一睡催し、その方どもが何を言うたか、とんと身共は覺えぬわい。

六人　ても、お慈悲深い、

早瀬　あこれ、譬にも言ふ慈悲は上、落着なせば長居は無用、双方ともに立ちませい。

六人　はッ。（ト時番卒二人出て、）

二人　きり〳〵と立ちませい。

六人　はあゝ。

ト三重になり、花道へお高、新助、お元、三吉行き、東の假花道へ與惣兵衛、與之助行きかけ振返り、幸藏と顏見合せ、双方愁ひの思入。

六人　これがこの世の、

幸藏　顏の見納め。（ト双方ぢつと顏見合せ、）

六人　はあゝ。（ト泣き落す。）

番卒　えゝ、きり〳〵と立ちませい。（トこれにて双方泣き〳〵はひる。）

早瀨　あゝ盜賊なせど仁義を守り、一命捨てゝのそちが訴へ、かほどの器量ある者を成敗なすは殘念ながら、助けおかれぬそちが兇狀、何とて盜賊なしたるぞ。思へばをしき事ぢやなあ。

幸藏　はッ、有難きそのお言葉、斯くお情厚き其許樣の、お手にかゝるは此の身の仕合せ、元より覺悟のことなれば、御法通りに御成敗、仰せつけられ下さりませう。

早瀨　いかにも助けおかれねば、この世にあるも最早僅、情を以て繩目に及ばず、いたはつて遣はすほどに、心靜かに覺悟しやれ。

幸藏　はゝ、有難うござりまする。（ト奧より石垣伴作つか〳〵と出來りて、）

石垣　あいや、その儀は罷りならぬ。

早瀨　伴作殿、ならぬとはいかゞでござる。

石垣　されば、かゝる大罪人に繩かけぬは、下世話に申す油斷大敵、逐電なせしその後で後悔なしても後の祭り、手枷足枷菱繩に、きつと糺明せねばならぬ。

早瀨　御尤もなる仰せながら、そりや非義非道を働く盜人、仁義を守る盜人が何とて逐電いたさうや。既に唐土周の文王罪ある者に繩をもかけず、獄屋にあらぬ廣庭へ繩圖を畫いて放ちおきしに、罪人文王の情に感じ、誰一人その繩圖を破つて逃げしものなきとや。唐土人すら斯の通り、心なき

者なら知らず、仁義を守る稲葉幸藏、それ故縄にかけ申さぬ。

石垣　いゝやそれは大きな油断、知つた自慢の唐土穿鑿、そりや氣の長い唐人だから逃げもせず、まじまじと龜圖の内にゐたらうが、日本人はさうは行かぬ、是非とも縄をかけにやおかぬ。

早瀬　すりや、どうあつても其許には。

石垣　貴殿ばかりか拙者も相役、取逃がさぬやう幸藏に、是非とも縄をかけねばならぬ。

早瀬　然らば稲葉幸藏は、貴殿へ確とお渡し申すぞ。

石垣　おゝ、受取るからは逃がさぬやう。それ、幸藏に縄打て。

番卒　はツ、腕廻せ。

幸藏　いざ、御存分に。（ト番卒二人縄をかける。石垣見て、）

石垣　いや、斯うしておけば大丈夫、身共が確と預るほどに、早瀬氏には奥へござつて、御休息致されい。

早瀬　然らば暫時休息いたさん。

石垣　お役目御苦勞。

早瀬　あゝ、あたら若者、

石垣　えゝ、

早瀬　後刻御意得ませう。

ト唄になり、早瀬幸藏へ思入あつて奥へはひる。石垣思入あつて平舞臺へ下り、

石垣　やい、稻葉幸藏とやら、面を上げい。（ト足を幸藏の頤へかけて上げさせる、幸藏石垣をきつと見る。石垣せゝら笑つて、）わりやこれまで鎌倉の大小名の屋敷へ忍び、金銀を盜むのに塀を乘越し屋根を傳ひ、恰も鼠の如くにして捕ゆることのならざる奴も、鎌倉殿の御威光にて斯く繩目に逢ひし上、石垣といふ逸物の猫が傍に附添ふからは、逃げることはできぬぞよ。これからうぬが惡事の段々、切身に膾の拷問にて生殺しにして伴作が、じやらしながらに詮議をなす、尻尾をちやめて覺悟なせ。

ト言ふ顔を幸藏きつと見て、

幸藏　お侍、こなたは私を縛つたと思はつしやるか。

石垣　やあ。（トびつくりする。）

幸藏　この取繩は幸藏が、ほんの身體にかゝつたばかり、こりや役には立ちませぬぞ。

石垣　むゝはゝゝゝゝ、引かれ者の小唄とやら、天下の威光のかゝりし取繩、逃げられるなら逃げて見

よ。

幸藏　後悔するな、む、、（トすつぽりと繩をぬけ、すつくと立つ。皆々見てびつくりなして、）

皆々　こりやどうだ。

幸藏　むゝは、、、、。盜賊ながら非道をなさず、仁義を守る稻葉幸藏、假令繩目に逢はずとも、慈悲と情の撚繩を身にかけられるその時は、逃げられるとて逃げようか、邪非道の撚繩にて高手小手に縛るとも、慈悲と情のしまりがなければ、いゝ、まつこの如く繩拔なし、逃げろといふ故逃げ去る幸藏、越度は知れた石垣伴作、土足にかけた今の返禮、有難いと三拜なせ。

石垣　やあ、逃げ去るとは大膽不敵、取逃がさぬやう搦めとれ。

六人　心得ました。

トドン〳〵になり、上下より捕手大勢十手にて打つてかゝる。幸藏皆々を相手に立廻り、石垣は刀を拔いて切つてかゝるを、幸藏その刀を取り刀を擔ぎてきつと見得、これにて道具廻る。

（水門の場）――本舞臺上手寄りに大いなる水門、その前一面に氷の張りし體、下手は水門の高さの草土手、松の立木。總て雪の積りし、問注所裏手水門の體。道具留まると、捕手八人何れも六尺棒を

持ち出來りて、

捕一　なんと何れも、盗賊稻葉幸藏が、名乘り出でしを伴作殿が、惡口なしたばつかりに、繩拔なして行方知れず、

捕二　今奥庭の泉水へ飛込んだとも、また生垣を破つて、裏手へ逃げたるとも、

捕三　どちらに致せ逃出るは、この裏手なる水門口。

捕四　これに待受け搦め取り、我々どもが手柄になさん。

捕五　何にいたせ先刻より、降り積む雪にて甚だ難儀。

捕六　春とはいへど烈しき寒さ、手足に覺えがないやうだ。

捕七　その寒さ故水門口、八重に張つたる厚氷、

捕八　自由に上が歩けるとは、諏訪の氷に異ならず、

捕一　辷らぬやうに氣を附けて、何れも油斷さつしやるな。

七人　心得ました。

ト八人は上下へ別れて忍ぶ。と、ばつたりと音して水門を切破り、幸藏半身を出してきつと見得、時の鐘。幸藏前へ出て刀を下へ置き、雪を取つて口へ入れようとする。この途端に後方より二人の捕手

出で、突然に棒で打つを身を躱し、刀を取つてひらりとさし附け、雪を口に入れ咽喉を濕す思入。ここへばら〳〵と捕手出て一時にかゝる、幸藏これを左右へ拂ひ退ける。雪おろしになり八人を相手に立廻る、とこの中始終雪降りて凍へる思入の立廻りにて、とゞ棒にて刀を拂ふと、刀は仕掛にて松の木へ立つ、幸藏これを取らうとするを、棒にて支へる立廻り、土手を小楯によろしくあつて、刀を取らうとして手の屆かぬ思入。こゝへ一人かゝるを投退け、これを足代に刀を取らうとするを、左右より雪を打ちつける。これにて刀を取り兼ねしが、トヾ刀を取り、土手より後ろへ飛下り、皆々は續いて上手へはひる。幸藏水門の穴より半身出し上を見る。皆々それと下へ飛下りる。これにて幸藏後へ身を引き、一人つか〳〵と右の穴へはひり、後の人數七人は左右より棒を持ち窺ひよる。幸藏件の捕手を突出すと、皆々過つてこれを棒にて喰はし、氷にて辷るをかしみの立廻り、トヾ氷碎け一人河中へ落込む。此時幸藏手の凍えるを暖めゐる。皆々それを見て、つか〳〵と行く、幸藏土手よりひらりと飛下り、烈しく皆々と立廻り、トヾ皆々花道へ逃げてはひる。後を見送りほつと思入あつて、

幸藏　この身の罪を名乘りでゝ、逃げるは卑怯に似たれども、土足にかけし石垣作、恥辱を與へて遺恨の腹癒せ、降り積む雪に暫時の內、この身の影を隱すとも、天の咎め日の蔭に、泡と消え行く惡事の終り、流に張りし氷より厚き情の彌十郎樣、こなたのお手にかゝつて死ぬ氣。まづ、それ

までは、この場を立退き。

ト此内一人の捕手窺ひゐて、「幸藏覺悟」とかゝるを立廻つて投げる。とその捕手見事に氷の穴へ落入る。幸藏これを見てにつたりと笑ふ。此の時土手の松へ、早瀬彌十郎手雪洞を持ち、庭下駄を穿きて出來り、幸藏を透し見て、

早瀬　落ち行く影は。（ト雪洞を上げる。）

幸藏　えゝ。

早瀬　取逃せしか。

ト雪洞を吹き消し、幸藏手を合せるを一時に木の頭。

幸藏　ちえゝ、忝ない。

ト本釣鐘、雪おろしにて、よろしく

ひやうし　幕

鼠小僧（終り）

## 世界結由縁頭巻

第一番目は　新清水の額面に願主は誰や櫻姫が思ひを掛し直宿之助縁を求女が取
御差圖の　持に濡て嬉しき戀中の不義を見出せし大江鳥羽平何と言譯しがらみ
御家　が文の名當の訓音に人目を隱す古葛籠明て言れぬ淀平が淺茅原に兄
狂言　弟の名乘是は趣向も古かしき　墨染衣に　破斗笠

## 仰高御攝御餘光普請成就新舞臺の榮

第二番目は　新吉原の細見に御職は誰と揚巻を名ざして呼びし新左衞門異名を意
御所望の　久と夕暮に掟嚴しき大門を忍び果せし白玉傳次極印金と白酒の桶へ
世話　入れたる五十兩拔差ならぬ門は明けて言はねど助六が駒形堂に夫婦
狂言　の名殘り是は仕組も新らしく　黑小袖に　蛇目傘

## 黑手組曲輪達引

「黑手組助六」は安政五年三月「江戸櫻清水清玄」なる名題の下に、清玄の二番目狂言として作られ、作者四十三歳の時市村座に於て稿下された。この作が歌舞伎十八番の「助六」に對する、世話物の助六であることは言ふまでもなく、小團次の希望に副ふ「助六」として提供されたことも傳へられてある。而して吉原三浦屋の場で、助六に余の意見をする紀文は、其の當時の大通であり、又小團次、權十郎等の熱心なる後援者であつた、津藤香以山人をモデルにしたものであること、それから津藤の取卷連を作中に屢ゝ點出してあることも、人氣を呼び非常の當り狂言であつたことが記錄されてゐる。

書卸しの時の役割は、市川小團次（花川戶の助六）尾上菊五郎（三浦屋の揚卷後に助六女房お卷）、河原崎權十郎（紀伊國屋文左衞門、牛若小僧傳次）、中村歌女之丞（佐五兵衞娵おたま、後に三浦屋の新造白玉）、關三十郎（鳥井新左衞門、白酒賣り新兵衞）坂東又太郎（花形主膳）、松本國五郎（朝川千平）、市川米十郎（田崎造酒之進）、市川米五郎（刈人旅雀の忠藏、門弟山脇傳藏）、嵐吉六（俳諧師東榮）、淺尾與六（門門兵衞）等。

挿繪にしたのは、大正二年十一月本鄕座所演の際の舞臺寫眞で、助六（羽左衞門）、新左衞門（左團次）、揚卷（歌右衞門）等である。

大正十三年八月　　　編者誌す

# 黑手組曲輪達引（黑手組助六）四幕

## 發端

淺草寺境内の場
向川岸枕橋の場

〔役名――押上村の白酒賣新兵衞、巾着切牛若傳次、侍戸澤助之進、女衒忠藏、判人門兵衞、庄屋作兵衞、藪醫者松野泰木、下部關助、浪人鳥井新左衞門。茶屋女お瀧、其他。〕

（淺草寺境内の場）――本舞臺後淺黄幕、所々に櫻の立木、下手葭簀張りの出茶屋、爰に△○□◎の四人百姓の打扮にて、白木の臺へ觀音の札を持ち床几に腰を掛けゐ、お瀧茶屋女にて茶を出し居る、總て淺草寺境内の模樣、双盤にて幕明く。

お瀧　何方もお茶一つお上りなされませ。（ト茶を出す、各々それを呑みながら、）

△　ときに皆の衆や、此の樣に觀音樣へお百度をあげるも、此方の村の新兵衞親父が女房おきよの大煩らひ、

○　去年の秋から二年越し、ぶら〳〵病が物になり、到頭床に就いてもう百日餘り、

□ 中頃は快いやうであつたが、彼の松野泰木樣の御療治になつて、段々惡くなるやうぢやわいの。

◎ そりやお知れたこと、押上切つて名代の藪醫者、彼の醫者にかゝつては全快は覺束ないものぢや。

△ それゆゑ私等が此の樣に、觀音樣のお力を借りようと言合せての此のお百度。

○ 新兵衞も年貢の未進、何やかや引き續いての不仕合せ、

□ たゞ娘のお卷が縹緻が好いゆゑ、今にお釜を起すであらう。

○ 何にせい氣の毒な事ぢやなう。

ト花道より松野泰木、慈姑天窓一本差し、ぱつち尻端折り醫者の打扮にて出來り、直に舞臺へ來て、皆々を見て、

泰木 是れは押上村の衆、お揃ひで奧山をおひやかしかな。(ト床几へ掛ける。)

△ いえ〳〵、其の樣な悠長な事ではござりませぬ、御存じの新兵衞が女房、段々病が重りますゆゑ、早く全快いたすやうに村の者が寄合まして、

皆々 お百度を致すのでござります。

泰木 それはお奇特と申し度いが、冗な事だよしにさつしやれ。あの新兵衞が女房は癆瘵といふ病、所詮全快はむづかしい、耆婆扁鵲の再來ともいはるゝ此の泰木が匙先きでさへ全快をせぬ難病、な

かなか觀音の力などで癒る事はござらぬ、愚老も疾くより斷らうと存じをつたが、生死を見分る泰木が見放したら、親父も娘も嘸や力落しと存じ據ころなく藥を遣はしますが、然し藥禮を寄越さぬには甚だ困るて、はゝゝゝ。

○ 皆の衆、泰木樣があの樣に言はつしやるからは、おいら達が此の樣にお百度をあげても、全快はむづかしからうかなう。

三人 さうさ、何でも餅屋は餅屋だから、

泰木 何でも餅屋は餅屋とは、失禮千萬な。

三人 これは大きに失禮を申しました。

泰木 いや、詫びさつしやるにも及ばぬ。然しながら仁術を施す醫者なれば、藥禮をよこさぬもよいが見舞ひたいにも彼の家の穢いには弱る、あれでは貧乏神は離れまいて、

□ いや家は穢ないが、彼の娘のお卷の縹緻・美しい所は福の神でござりますね。

泰木 娘といへば、此の二三日お娘が見えぬが、何う致したか此方衆知らつしやらぬか。

○ 彼の娘は新兵衛が年貢の未進、借財の濟方に、吉原へ賣つたとやらいふことでござります。

泰木 それは氣の毒千萬な。然しながら愚老の方へ藥禮も去年の盆から今日迄、ざつと積つて四五兩餘

り、少しくらゐの足し前なら愚老か話をすればよかつた。
四人　泰木樣、お力落しでござりましたね。
泰木　力落しといへば、今にも知れぬ大病人を見廻らねばならぬ、此方衆はもうお歸りかな。
四人　左樣でござります。
泰木　そんならこれでお別れと致さう。
四人　左樣なれば泰木樣、
泰木　茶代は此方衆へ突込でござるぞ。
四人　いや、惡い顔だ。
泰木　どれ、病家を見廻つて參らうか。
　　ト泰木は下手、四人は上手へ入る。花道より新兵衞世話親父の打扮にて出で來る、後より作兵衞羽織着流し庄屋の打扮にて出來り、花道にて、
作兵　これ〳〵、其處へ行くのは此方の村の新兵衞どのではござらぬか。
新兵　あなたは庄屋の作兵衞樣、何方へお出でゝござりまする。
作兵　何處へも行くのでござらぬ、此方の後を追つかけて來たのだ。

新兵　それは何ぞ急な御用でもござりますか。

作兵　いや、何も別して急といふ譯でもござらぬが、爰は往來ぢや、向うの茶見世へ行つて話しませう。

新兵　左樣ならば庄屋樣、

作兵　さゝ、ござれ〳〵。

ト兩人本舞臺へ來り床几へ掛ける、輕業の合方、揚弓の音になり、

扨新兵衞どのや、其の用といふは外でもない。これまで溜つた年貢の未進、その外近所の買掛り濟されぬも尤もぢや、親代々の貧乏人、錢のない事にかけては村一番の上席、搗て加へて其方の女房、去年からの長煩ひ、團子に芋の田樂ぐらゐ賣つた所が僅かの錢、所詮あれでは行き立つまい、駈落でもせねばよいと思つてゐる其の所へ、二三日後から娘のお巻が何處へ行つたか影が見えず、ひよつと此方に遁げられると、後に殘つたものといへば借金と病人ばかり、私が厄介になる事ゆゑ、此方の跡を附けて來たのぢや。出來ぬは知れた事なれど、どうか仕樣はない事かいの。

新兵　いやもう、庄屋樣のお心遣ひ御尤もでござりまするが、遁げも隱れもいたしませぬ、就ては金が手に入ります、好い口に取附きましてござりますから、必ずお案じ下されますな、と申す其の譯は、世界には鬼はないものでござります、柳島の妙見樣へ月參をなされまする、吉原の判人で門

門兵衞樣といふお人が、何時も私が見世へ寄附け、お心安う致すゆゑ、內證の事をよう御存じ、去年からの病人で難困るであらうというて、二朱くれたり一分くれたり、度々惠んで下された情深い其のお人のお世話で、娘のお卷をば吉原へ勤めに遣り、年貢の未進、借錢を濟します心得で二三日後より娘をば目見得に遣はして置きましたが、漸う相談が極りまして今その金を受取りに參じます所でござります。

作兵　それは〳〵耳寄りな、先づ庄屋も安堵しました、持つべきものは娘の子ぢや。然し、新兵衞どのや、お卷どのが家に居ねば、病人の世話何やかや、此方の手一つで困るでござらうの。

新兵　そりやもう、おつしやる迄もなく、嚊が煩ひついてから見世の事から家の事まで、みんな娘がして居ましたが、これからはわし一人、そりやもう、喰ふものは喰はいでもそれは厭ひはせぬけれど、死にかゝつてゐる嚊のかゝかゝ、かんがくは兎角女の事、男の手では行き屆かぬゆゑ、難病人が困りませう、そればかりが不便でござります。（トほろりと思入れ。）

作兵　いや〳〵決して案じさつしやるな、日頃から律義な此方、神や佛のお惠みで病人も癒らうし、又身を捨てゝこそ浮む瀨と、娘が今に好い衆に請出されて、此方衆も樂隱居にならうも知れぬ、それ樂しみに病人の介抱して遣らつしやれ。

新兵　御親切有難うございます。
作兵　そんなら新兵衞殿、金受取つたら早速に未進を納めにござらつしやい。
新兵　いやも、手取りさへ致しますれば、直に持つて上ります。
作兵　それではこれから取つて返し、此方の歸りを待ちませう。
新兵　左樣なれば庄屋樣、
作兵　新兵衞どの、
新兵　お早くお歸りなされませ。
ト作兵衞は下手へ入る。新兵衞殘り思入れあつて、
あゝ庄屋殿のお庇で思はぬ暇をば費やした、まだこれから吉原まで金受取りに行かねばならぬ。大病人を抱へゐるゆゑ心が急いてならぬわい。まあ何にせい、觀音樣へ女房の病氣の癒るやう、附いては勤めに遣つた娘の身に凶事のないやうに、どりやお願ひ申して來ませう。
ト上手へ入る。花道より門門兵衞判人の打扮にて出來り、直ぐに舞臺へ來る。お瀧見て、
お瀧　もし吉原の門兵衞さん、素通りはなりませんよ。
門兵　おゝ、お瀧ぼう、精が出るの。

お瀧　今日は何方へおいでなされます。
門兵　奉公人の事に附いて、押上の土手まで行かにやならねえ。
お瀧　まあ、ちよつとお掛けなさいましな。
門兵　ゆつくりしちやあ居られねえが、一服呑んで行かうか。
お瀧　そんなにお急ぎなさらずとも、日は永くなりましたわいな。（ト茶を汲み持ち來り、）お茶一つおあがりなされませ。

ト門兵衞床几に腰を掛け、捨ゼリフにて茶を呑み居る。よきほどに上手より新兵衞出來るを、門兵衞見て、

門兵　おい〳〵、そこへ行くのは押上の新兵衞さんぢやあねえかえ。
新兵　これは吉原の門兵衞樣、只今お家へあがりませうと存じました。
門兵　私も今お前の所へ行かうと思つた所だ。
新兵　それは好い所でお目にかゝりました。
門兵　まあ爰へ掛けさつしやい。（ト新兵衞床几へ腰を掛ける。）豫て頼みの娘の身の代、今日お前に渡さうと、これから押上へ行く所よ、爰で逢はねえと無駄足になる所だつた。

新兵　わしも吉原へずつと參ると間違ひます所、煩うてをりまする女房の事や、娘の身の上凶事のないやう觀音樣へお願ひ申したばつかりで、お目にかゝりましてござりまする。

門兵　どうだえ病人は、ちつとは快いかえ。

新兵　何うも捗々しく參りませぬ、始終は彼方のものでござりませう。

門兵　そりやあ困つたものだの。

新兵　いやもう、死にますものは何うしても死ぬと定つて居りますゆゑ、さのみ案じも致しませぬが、案じられるは娘が身の上。

門兵　娘の事なら案じなさんな、これが外のものゝ世話なら知らず、柳島の妙見樣へ月參りをする、其の度々お前の見世へ寄附けに心安くなつての世話、勿體ねえ事ながら妙見樣かけて惡くはしねえ決して案じねえがいゝ。

新兵　いやもう、これまで二朱一分づゝ度々お惠み下されて、御恩のあるお前樣、其の御親切なお心をよく存じて居りますれば、少しも案じは致しませぬ、娘が事は何分にも貴所へお賴み申しまする。

門兵　さう又お前が此のおれを賴みにしてくんなさりやあ、おれも男だ惡くはしねえ、明日が日お前が病み煩ひ、足腰の利かねえ其の時は、年寄の一人や二人私が引き取つて進ぜます。また當座の事

で困るなら遠慮なしに來るがいゝ、ヽヽヽたんとの事も出來めえが十や二十は用達てませう、決して娘を案じずに、お母ァの看病をよくしてやつてくんなせえよ。（ト思入にて言ふ。）

新兵　重ね〴〵の御親切、忘れはいたしませぬ。有難うござります〳〵。

ト新兵衞門兵衞を拜む。花道より判人旅雀の忠藏女衒の打扮にて出來り、門兵衞を見て、

忠藏　親分爰に居なすつたか。

門兵　おゝ、忠藏何ぞ用か。

忠藏　あい、外の事ぢやあござりませんがね、今越後屋で好い玉を上州の權太が所から三浦屋へ連れて來て、旦那が相談がしてえから、今お前さんに來てくれと人が參りました。

門兵　そいつは困つたな。ヽヽこう爺さん、今聞く通りの譯だから爰でお前に金を渡さう、然しお前印形は持つて來たらうな。

新兵　はい、持つて居ります。

ト新兵衞懷より財布を出し紐を解き、中より印形を出す。門兵衞紙入れより證文を出し、

門兵　新兵衞さん、念の爲め證文を見て印形しなさい。

ト證文を出す、新兵衞こなしあつて、

新兵　へい、御念の入つた事でござりますが、私は無筆でござります、宜しうお願ひ申します。
ト印形を出す。
門兵　はあゝ、お前無筆かえ。
新兵　はい、七の字は何方へ曲げるか知らぬはうでござります。
門兵　そりやあ嘸不自由だらう、證文の文言はお定りの遊女證文、讀み上ぐるにも及ぶめえ。印形を出しなせえ、おれが捺してあげよう。
ト印形をする。此の以前より深編笠の浪人者（鳥井新左衞門）出來り床几に腰を掛ける、お瀧茶を出す、浪人茶を呑みながら始終を窺ひゐる、門兵衞證文を仕舞ひ金を出し、
それ爺さん、金を受取んな、それ、印形もよ。
新兵（金と印形を受取り、仕舞ながら、）有難うござります、お金が手に入りましたら、重荷を下したやうな心持になりました。
門兵　おゝ、さうだらうよ、世の中に何が辛いといつて、借金ほど辛いものはねえ。
新兵　さう申す中にも、有る無いの苦勞は病人には大毒でござります、お金を見せましたら、嘸の病氣も全快いたしませう、はゝゝゝゝ。（トいそ〳〵と思入れ。）

門兵　ほんにさうだ、それぢやあ早く持つて行て、悦ばせてやんなさるがいゝ。
新兵　左樣なれば門兵衞樣、暮れぬうちにお暇いたします。
門兵　それぢやあ氣を附けて行きなせえよ。
新兵　有難うござります、どりや、婆に悦ばせて遣りませうか。
　ト新兵衞はいそ〳〵と足早に花道へ入る。浪人者も茶代を置き、頷いて同じく花道へ入る。門兵衞思入れ。時の鐘。
忠藏　親方うまく行きやしたね。
門兵　妙見樣へ參る度、新兵衞親仁の見世へ休み、ふつと目に附く娘のお卷、ぶつ附け仲の町といふ代物ゆゑ、貧乏暮しを幸ひに茶代と云つて時折に、二朱一分づゝ遣つたのを下心とは氣も附かず、鬼のやうな門兵衞を佛と思つて喰ひ込み、到頭娘を賣らしたが、七十兩では安いものだ。
忠藏　どんな盲にふましても、五年の年で百兩の上が二つも出る代物。
門兵　祝ひに何處かで一杯やらうか。
忠藏　そりやあ有難いね。
門兵　安上りにふぢ屋としよう。（ト門兵衞ずつと立つ、忠藏床几の側出しに乘つてゐたのでどつさり倒れる。）

えゝ、そゝッかしい奴だ。

ト忠藏身體の痛む思入れ、門兵衞これを見て笑ひ居る。此の見得双盤にて道具廻る。

(向川岸枕橋の場)――本舞臺後黒幕、此の前土手の浪板、其内に柳の立木、上手橋の高欄、下手植込みの張物、よき所に捨石、月を引き出しあり、總て枕橋夜の體。浪の音合方にて道具留る、上手より刀箱を抱へて、老けたる打扮の戸澤助之進出來り、紺看板の中間關助、箱提灯を持ち出來り。

助之 あゝ今宵は雨氣づいたせゐか、月夜なれど道の暗さ、關助先きへ立つてくりやれ。

關助 畏まりました。

助之 だいぶ提灯の明りがくらいが、蠟燭はたちはせぬか。

關助 (提灯を見て、)左樣でござります、もう僅かになりました。

助之 繼ぎ替を所持いたし居るか。

關助 いえ、忘れましてござります。

助之 それは粗相千萬な、こりや身共はこれに待ちをるゆゑ、小梅まで取つて返し蠟燭を求めて參れ。

關助 畏りました。(ト提灯を置き上手へ入る。)

助之　扨々下部と申すものは心ない者でござる、今日は取り分けて大切なる此のお使ひ、これに所持なす北辰丸の一腰は結城家代々の重寶、天晴稀代の名刀なれど、劍相あしく祟りあるゆゑ、柳島の妙見にて三七日祈念なし、只今受取り歸る途中燈火がなうては無用心、そこへ心が附かぬとは、さりとは愚なものぢやてな。（ト思入れ、此の時花道の揚幕にて、）

大勢　泥坊々々々々。

助之　なに、盜人とな。、、この關助は如何なせしぞ、はて、心掛りな事ぢやなあ。

ト彼方へ思入れ、ばた〳〵になり、牛若傳次頰冠り尻端折り巾着切の打扮にて、財布を持ち逃げて出で來る、後より以前の新兵衞追駈け出來り。

新兵　泥坊々々、

ト花道にて傳次を捉へ、一寸立廻つて傳次新兵衞を突き倒し、本舞臺へ逃げて來る。

あゝもし、金を取つた泥坊でござります、捉へて下さりませ〳〵。

ト呼ばる、戸澤助之進思入れあつて、つか〳〵と出て來かゝる傳次に目潰しをなす、是にて傳次どうとなるを、戸澤襟上を取り、

助之　うぬ、憎くい奴め、動き居るな。

新兵 （舞臺へ來て、）これ〳〵お侍樣、よう捉へて下さりました。わしが金を盜みました其奴は泥坊でござりまする。

助之 なに、其方の金子を盜みしとか、案じやるな、某が取り返してやるぞ。

新兵 有難うござります。

助之 さあ、盜みし金子を出しをらう。

傳次 （ひれふして、）もしお侍樣、お聞きなされて下さりませ。何を隱しませうわたくしのお袋が長の大病、人蔘代に差支へ據ろなく盜みました、親の命が助け度いばかり、ほんの出來心でござります、どうぞ許して下さりませ。

助之 僞りにも親の爲とあれば命は助け遣はすほどに、疾く〳〵金子を出しをらう。

傳次 へい〳〵、只今金子を返します。

ト傳次もぢ〳〵しながら逃げにかゝる、戸澤手早く傳次を捉へ、

助之 うぬ、武士たるものを騙りて逃げ出さんとは奇怪至極、

ト時の鐘にて傳次振拂ひ逃げ出すを、刀箱を肩へかけて引き戻す。新兵衞此の中へ入りちよつと立ち廻り、此の中後より以前の深編笠の浪人（鳥井新左衞門）窺ひ出で戸澤を一刀切ろ、はつと驚き刀

箱を取り落す。これにて月隱れ闇となる。

こりや、盗人の荷擔人よな。

ト竹笛入りの鳴物になり、戸澤右の刀箱を取らうと探り寄り傳次を捉へる、傳次は振拂つて逃げる、戸澤たぢ／＼として苦しき思入れ、新兵衞顛へながら彼方此方と邪魔になる立廻り宜しく、ト、浪人者、戸澤を切り倒す、新兵衞これに驚き、

新兵　人殺し／＼。

ト逸散に花道へ逃げて入る。浪人者四邊を窺ひ戸澤に止めを刺し、北辰丸の一腰を取り上げる、傳次は懷より金財布を出し、兩人顏見合せ、

まんまと首尾よく、

浪人　これ、

ト押へる。傳次は口に手を當て四邊を窺ふ。これを木の頭、兩人刀と金を月影に透し見る。此の見得、波の音早めたる合方にて、よろしくきざみ、

ひやうし幕

ト此の幕、櫻の道具幕にて、幕外へ此の間五ヶ年相立ち候狂言と記せし牓示杭を出し、大拍子にて

つなぎ、引返す。

# 序幕

## 忍ヶ岡道行の場
## 山下袴腰の場

(淨瑠璃) 浮氣な風に白玉が 廓を拔けて落椿 忍ヶ岡戀曲者 (吾妻路連中)

(役名――白酒賣新兵衞、牛若傳次、白玉の親佐五兵衞、倅佐吉、番頭權九郎、判人旅雀の忠藏、若者喜八、同藤助、捕人三人。三浦屋白玉其他。)

(忍ヶ岡道行の場)――本舞臺三間の間正面櫻の林、後忍ヶ岡の山の遠見、左右藪疊み、舞臺前は柵附きの浪板にて不忍の池の心、總て不忍の池の邊の體。爰に旅雀の忠藏半合羽尻端折り麻裏草履、若い者喜八、藤助尻端折り同じく草履、三浦屋といふ弓張提灯を持ち立つて居る。時の鐘かすめたる騷ぎ唄の合方にて幕明く。

忠藏 こう、どうでも春は春だけだ、何處の茶屋だかごうぎに騷ぐぜ。

喜八 ありやあ慥かに廣小路、花見歸りの生醉だらう。

藤助　あの騒ぎを聞いたらば、おらあ一杯やりたくなつた。
忠藏　お前方やりたけりやあ、仲町の居酒屋で一合づゝ氣を附けて、湯島から本郷の方を御苦勞だが尋ねてくんねえ。
喜八　さうしてお前は何處ぞへ行くのか。
忠藏　おらあ、白玉の親元が谷中に居るをさつぱり忘れて浮々と爰まで來たから、これから後へ取つて返し、以前新清水の侍をして居た佐五兵衞といふ浪人の家へ仕掛けて脅しを掛け、共謀ぢやあねえかそびいて見る氣だ。
喜八　なるほど、親父が谷中に居るを、わつちらもさつぱり忘れた。
藤助　然し彼奴は正直者、よもや馴合ひの仕事ぢやアあるめえ。
忠藏　ぜんてえ夜更けといふぢやあなし、かう宵の口に逃げられるとは、どうしたといふ事だな。
喜八　どつから逃げたか知らねえが、大音寺前で素見が見掛けたと聞いたゆゑ、其處から騒ぎ出したのだ。
喜八　何でも先刻大門口に、喧嘩のあつたどさくさ紛れに、誘ひ出されたに違ひねえ。
忠藏　聞きやあ、彼の子の格子色に牛若傳次といふ巾着切があるさうだが、もしや其奴がひつぱらやあ

しねえか。

喜八　さうさ、今夜のお客は瓦町の質兩替屋の番頭で、權九郎さんといふ太ッちよう、どんな茶人な新造でも、一緒に逃げる氣遣ひはねえ。

藤助　大方傳次の野郎だらうが、彼奴が連れて逃げた日にやあ、高飛びをするに違えねえ。

忠藏　然し旅へ行くにしても直ぐ草鞋は穿きはしめえ、四五日は江戸の中に玉を伏せて隱れて居よう、其處を突き留めてやりてえものだ。

喜八　これが息子株かなんぞなら、旨え酒の飮める仕事だが、何をいふにも相手が惡い。

藤助　酒どころか、首尾よく玉を取り返すのがむづかしい。

忠藏　なに、むづかしい事があるものか、假令どんな惡漢だらうが、其處は御免の場所の有難さ、年季を踏まれるやうな事はねえ、己れも門門兵衞が乾兒、奉公人で遊女屋へ損を掛けるやうなどぢはしねえ。（ト言ひながら提灯の中を見て、）詰らねえ話しをして蠟燭が一挺たつてしまつた。

喜八　繼ぎけえが爰にあるから、消えねえ中に繼いで置かう。

藤助　もう蠟燭もこれ切りだから、一服やつたら出掛けようぜ。

忠藏　それがいゝ〳〵。

ト蠟燭を繼ぎ直し、此の灯にて煙草を吞み居る。木魚入りの合方へ蛙の聲を冠せ、東の口より佐五兵衞少し老けたる浪人もの、紙子の切繼ぎ、切れたる柄の一本差し、眼病の體。倅佐吉同じく切繼ぎ、兩人とも編笠を被り破れ扇を持ち、佐吉佐五兵衞の手を引きながら出來り、東の假花道にて、

佐吉　もし父さん、石が出て居りますから、躓かぬやうになされませ。

佐五　おゝ合點ぢや〳〵、さうしてこゝは何處ぢやな。

佐吉　こゝは池の端の、辨天樣でござります。

佐五　それでは家へもう僅かぢやな。

佐吉　お前さんお草臥なすつたかえ。

佐五　なに、目こそ惡けれ、足は達者ゆゑ少しも草臥はせぬけれど、おれが目の惡いので何から何まで其方が世話、殊には遊びたい盛りをば、朝から晩まで此のやうに何處といふ當もなく合力受けに手を引かせ、さぞ草臥れるであらうと、おりや其方がいとしいいわい。

佐吉　何で私が草臥れませう、お前さまこそお草臥れでござりませうが、もう少しの中御辛抱なされませ。姉さんがお家ならどうか仕樣もあらうけれど、吉原へ行て居なさんすゆゑ、もう一二年の其の中にはわたしが樂にさせませうから、どうぞそれを樂しみに煩はぬやうにして下さりませ。

佐五　あゝ未だ年も行かぬ身でよう優しう言うてくれる。嬉しいは嬉しいが、いつそ死んだら此のやうな苦勞を其方に掛けまいもの。

佐吉　またそんな事を仰やりまする、親の世話を子が致すは、こりや當りまへでござりまする、其樣餘計な御苦勞なされると、またお目が惡くなりますから、何事も捨てゝお置きなされませ。

佐五　おゝ、さうぢや〳〵、折角其方が孝行にしてくれるのに、よしない事は云ふまいと常々思うて居ながらも、つい身體が不自由なので愚痴ばかり起つてならぬ。

佐吉　さあ、少しも早く家へ歸り、足なと揉んであげませう。

ト兩人本舞臺へ來り下手へ行かうとして、佐五兵衞、忠藏の足を踏む。

忠藏　あいたゝゝゝ、人の足を踏みやあがつて、目を明いて歩きやあがれ。

佐五　いや其の眼が惡うござるので、つい粗相を致しました。

佐吉　眞平御免下さりませ。

忠藏　（佐五兵衞の深編笠をのぞき）や、此方は白玉の親の佐五兵衞殿ぢやあねえか。

佐五　如何にも佐五兵衞でござるが、さう言はるゝは何方でござるな。

忠藏　見忘れなすつたか、わしやあ吉原の判人旅雀の忠藏だ。

佐五　これは〳〵、忠藏どのでござつたか、（ト編笠を取り、）見らるゝ通り眼を煩ひ、ふつと聲を聞きそこなふと何方やら分りませぬ、して、今時分此方には何れへ行かるゝのぢやな。
忠藏　今お前の所へ行くところだ。
佐五　それはよい所でお目にかゝつた、して、何ぞ御用でござるかな。
忠藏　用といふは外でもねえ、お前の娘の白玉が、今夜廓を駈落をした。
佐五　なに、娘が駈落を致したとな。
佐吉　そりやほんの事でござりますか。
喜八　ほんの噓のと此の通り、手分けをして追手に出たのだ。
佐五　それは御苦勞な事でござつた。
忠藏　いや佐五兵衞殿、ちよつと下に居て下さい。
佐五　何でござるな。（ト下に居る。忠藏傍へ寄り、）
忠藏　ときに物は早いがいゝが、白玉は家へ來て居るだらうの、有體に言つてくんなせえ。若兒手合に根岸から谷中の方へ行つたといふ慥かな事を聞いて來たのだ。逃げたといつても今夜の事、內證ご己が濟まさうから、隱し立てをしなさんな。

佐五　あゝこれ〳〵忠藏殿、お話しの中でござるが、見らるゝ通り伜を連れ、お耻かしいが今朝より憐愍受けに、山の手へ參つて只今歸りがけ、留守へ來たかは知らねども、娘が駈落いたせしと承るは今が始めて、何しに家へ匿し置かうぞ。

忠藏　いや、いゝしらを切らしつても、長々此方が目を煩らひ其の日に困つて娘を釣出し、宿場へ賣つて其の金で凌ぎを附ける氣だらうが、外と違つて御免の場所、惡く法をかきなさると首へ繩が掛りやすぜ。（トこれにて佐五兵衞無念の思入れにて、）

佐五　斯る汚名を受けるのも娘が駈落なせしゆゑ、思へば憎くき不孝者、此の身の不運に尾羽打ち枯らし、搗て加へて眼病に、假令その日の糧に盡き餓ゑ死にに死すればとて、娘を釣出し八重賣りに再び苦界へ沈むるやうな邪事を致さうか、如何に身貧に暮せばとて左程までに此方衆に疑はるるが口惜しい。（ト破れ扇を握り詰め、口惜しき思入れ。佐吉背中を撫りながら、）

佐吉　あもし、父さん其の樣に氣をお揉みなされたら餘計にお目が痛みませう。もし皆樣、ほんに父さんは知らぬ事ゆゑ、あれ彼のやうに涙をこぼして口惜しがつてござります、是れを氣病みに眼が重り、もしもの事でもある時は、後に殘りし私の難儀、不便と思うてもし皆樣、疑ひ晴らして下さりませ。

ト佐吉手をついて頼む。

忠藏　錢貰ひの附目にて哀れッぽい其の言譯、これ、素裸で餓鬼を背負ひ、右や左りのお旦那樣と顫へて錢を貰つて歩く盲目坊主も、小家へ歸りやあ褞袍包みに据膳で溫かい飯を喰ふ世の中だ、其の泣き事を喰ふものか、知らざあ知らねえと言ひなせえ、お恐れながらと喰はして闇い所へやつてやらう、さあおれと一緒にうしやあがれ。

ト佐五兵衞の胸倉を取り引立てようとするを振り拂ひきつとなつて、

佐五　娘が越度に了簡なせば、附上つたる雜言過言、武士といふも耻かしけれど、よしや中身は竹光でも腰に帶せし刀の手前、不禮いたさば許さぬぞ。（トきつとなる。佐吉案じる思入にて、）

佐吉　あゝもし父さん、お眼の悪いに其の樣に短氣を出して下さりますな。

ト縋り留める、佐五兵衞探りながら佐吉の背を撫り、

佐五　あゝ佐吉、案じるな〳〵、眼こそ見えね覺えの腕、なに素町人の五人や三人物の數とも思はぬわ、

忠藏　やあ此奴が〳〵、破れ扇で門に立ち一文二文の合力受け其の日を送る物貰ひ、刀の手前も御大相な。

喜八　素町人でも三度々々牙のやうな飯を喰ひ、米の膏の乘つた身體。

藤助　挽割飯や雜炊も喰ふや喰はずの痩浪人。
三人　いゝうぬ等が手に合ふものか。
佐五　合ふか合はぬか手並を見やれ。
三人　何をこしやくな。
　　ト忠藏佐五兵衞の胸倉を取るを、其の手を取つて投げ退ける、佐吉氣味よき思入れ。
忠藏　いゝうぬ投げやあがつたな、それ、撲ツくぢけ。
喜八
藤助　合點だ。
　　ト禪の勤めになり、三人縫包みにて打つて掛る、佐五兵衞眼の見えぬ立廻り、佐吉傍にて指圖をなし、佐五兵衞三人を投げ退ける、佐吉有合ふ竹にて打ち据ゑる。これにてトゞ三人花道へ逃げて入る、佐五兵衞是れを知らず、
佐五　さあ佐五兵衞が手並に懲りたか、如何いたした廓の者ども、（トきつとなる。）
佐吉　あもし父さん、廓の者は方々へみんな逃げて參りました。
佐五　なに、逃げをつたか。
佐吉　はい、何處もお怪我はございませぬか。

佐五　いや怪我はせぬ、あゝ、逃げられて此方の仕合せ、はゝゝゝゝ。（ト思入れ。時の鐘。）それはさうと、娘のお玉如何なる事で駈落なせしか、親の難儀になる事を知らぬ程の者でもないが、苦界の里の水が染み後や先きの考へなく廓を抜けたに違ひない。これに附ても其の以前お仕へ申した清玄様、如何なる天魔の所爲なるか、入間家の息女なる櫻姫どのに戀慕なし、終に墮落のお身となり、淺茅ヶ原の庵室に見る影もない其のお姿、爰ぞ以前の御恩おくりと、思ふに甲斐なき此の身の貧苦お貢ぎ申すも心ばかり、何卒して其の日をば樂に送らせ申さうと、見えぬ眼ながら未明より夜に入るまで歩けども情を知らぬ者多く、心に任せぬ其の所へ、又此のやうな悪い耳、同じ姉弟でありながら孝行盡す弟に引き替へ、難儀を掛ける不孝な姉、思へば／＼憎い奴ぢや。

佐吉　それも定めて様子のあること、行方を尋ねて姉さんに逢うて聞いたら分りませう。

佐五　あゝ如何にも、これより行方を尋ね、篤と様子を聞いた上、善悪ともに三浦屋へ連れて行かねば佐五兵衛が疑ひ受けし汚名が晴れぬ。

佐吉　そんならこれから夜通しに、此の邊を尋ねませう。

佐五　それも此の身は見えぬ眼に、尋ね探すも其方を力、

ト此の時朧月を出す。佐五兵衛思入れあつて、

あゝ明るくなつたが、月が出たかな。

佐吉　朧ながら雲間を漏れ、霞みて見ゆる忍ヶ岡、

佐五　おゝ眼には見えねど覺えある、不忍の池の春景色、

佐吉　そんなら父さん、（ト佐五兵衞の手を取る、）

佐五　さゝ、案内しやれ。

ト時の鐘、唄にて兩人上手へ入る。時の鐘打ち上げ、下手植込みの張物を打返し、爰に吾妻路連中居並びゐて、淨瑠璃になる。

〽繪にかゝば墨繪のさまや朧夜の、空ににじみし月影も闇き其の身に後や先き、忍ヶ岡を二人連れ、

ト本釣鐘合方にて、花道より權九郎手代敵にて頰冠り尻端折り、白玉孔雀染の振袖新造裝、上へ權九郎の羽織を引つ掛け、手拭を吹流しに冠り、手を引き合うて出來り、

〽散り來る花の白玉に、鐘の音霞む權九郎、手に手を取つてそこはかと、籠を離れし鳥ならで、初音の里もいつしかに谷中を越えて車坂、餘所眼に見れば二本の離れぬ杉の道行は、味な緣を出雲にて結へ違ひし神垣や、稻荷の森へ歩み寄り、

ト此の中花道にて、權九郎眞面目に色事師の振あつて、白玉の手を取り本舞臺へ來る。

權九　これ白玉、道々もいふ通り、掟嚴しい廓をば連れて逃げた上からは、所詮江戸には居られぬぞよ。

白玉　江戸の内に居られぬとて、何處へ行くのでござんすえ。

權九　何處というて產れ故鄕、上方へ連れて行て世間晴れて權九が女房、先づ京ならば木屋町か、大阪ならばぽんと町、當分意氣な座敷を借り、

〽下女が一人に小猫か一疋、外には邪魔も新世帶取膳で喰ふ樂しみは、一つ肴をむしり合ひ箸の先きでの綴引、膳にうつりし皆淸や、互ひに顏を三保の谷にひつくり返す皿小鉢、これはしたりと飛び退いて、それ雜巾よ拾へよと、いゝさんと呼びやはいと來る、斑と呼びやにやあと來る、是れも續けて呼ぶなら、おはいはいのはいといや、おにやあにやあのにやあと啼くこんな騷ぎも痴話半分、嬉しからうぢやないかいな。

ト此の中權九郎白玉を引出し、よろしくをかし味の振あつて、

何と白玉、斯うなつたら、嘸や其方は嬉しからう。

白玉　そりやもうわたしが日頃の願ひ、嬉しうなうて何としませう。

權九　あの嬉しさうな、顏わいの、

〽鼻毛延ばして差し覗く、馬鹿げし顔を流し目に、

白玉　さう聞く上は少しも早う廓の追手の掛らぬうち、わたしや上方へ行きたうござんすが、聞けば遠い〱所とやら、お前路用がござんすかえ。

權九　おつと、其處に如在があるものか、今日千葉樣へ納めに行く爲替の金の五十兩、ちやんと着服して置いた、是れを路用に通し駕、伊勢參宮から大和をば廻つた所が五十兩、まさか二分になりもしまい。

白玉　そんならお前が五十兩、ほんに持つて居なさんすか。

權九　此の權九が首ッたけ惚れて居るおぬしのこと、何で嘘を吐くものか、疑はしくば是を見やれ。

ト權九郎懷より財布に入りし五十兩を出し見せる、白玉探り見て、

白玉　いゝ、ほんにこりや、お金でござんすな。

權九　おゝ、しかも小判で五十兩、これさへあれば大丈夫、(ト權九郎財布を頂く。)

〽押し頂けば後より、主は誰れとも白浪の財布目がけて一摑み、あわやと驚く權九郎、池の深みへ突き落され、ぱつと立つたる群鷗。

トこの中後の藪を押分け牛若傳次、頰冠り尻端折りにて窺ひ出で財布を引つたくろ、權九郎ヤアとび

つくりなし、取返さうとするを突き倒す、これにて前の池の中へ落ち、水煙ぱつと立ち、水鳥舞上る、

傳次　白玉、

白玉　傳次さん、

傳次　これ、

〽四邊忍んで山吹の、いはぬ色なる濡れた同志、首尾も夜露に寄添うて、

ト傳次押へる、白玉振袖にて口を押へ、兩人四邊をうかゞひ傳次冠りし手拭を取つたまゝ肩へ掛け、顏見合せてにつたりと思入れあつて、傍へ寄り、

白玉　傳次さん、旨くいつたね。

傳次　さうよ濡手で粟の五十兩、この金の手に入つたはコリヤ白玉、おぬしのお蔭だ、好い肚胸になつたな。

白玉　みんなお前に仕込まれたのだよ。

傳次　おれだといつてぎやつと云ふから鋏を持つて生れやあしねえ。以前は由緒ある武士の胤、藥の上から町家へ遣られ育ちが惡さに巾着切、惡い事は覺え易く、今ぢやあ何處の盛り場でも顏を知られた牛若傳次、然し罪滅しにやあ盗んだ物は百でも身に附けた事はねえ、四百ありやあ呑んでしま

ひ、二朱ありやあ泊りに行く、朝湯の錢に困るとも宵越の錢を持つたことはねえ。

**白玉** その錢遣ひの荒いので私も共にお前ゆゑ、襠裲は元より頭の物銀簪まで曲げてしまひ、見世へも出られぬ身の詰り、お上さんを始めとして揚卷さんにも異見をされ、幾度遣手のお辰どんの折檻にあつたか知れないが、思ひ切られぬ私が因果、なぜこんなになつたらうね。

ト四邊を憚り、よろしく思入れ。

**傳次** そりやあおれも同じことだ、噂が惡さに友達がうつかり廓へ入るなと云つてくれる目を忍び、網を張つてる大門を怖々ながら一晩でも顔を見にやあ寐られねえのは、これが惡縁といふものだらう。

**白玉** 今更いふも愚痴ながら、お前と情人になつたのは、忘れもせぬ去年の秋、

〽まだ新宅の見世先きをそゝるいゝいなせの地廻り衆、多くの中でこなさんがふつと目に附き物言ひ掛け、初手は浮氣の格子色、

クドキ

〽いつか浮名も立番や朋輩衆に弄られて話しもならず裏茶屋で、見合す顔の儘ならで別れ忙しき引の木に涙の雨に放るゝが、こゝが世界ぢやないかいな。

ト白玉傳次に向ひ振あつて、

〽折しも告ぐる後夜の鐘、傳次はすげなく立ち上り、

ト傳次は心附き立上つて、

傳次　いや詰らぬ愚痴を列べ立て、もしも追手に見附けられ引戻されちやあお笑ひ草、ちつとも早く此の金で江戸をふけるが上分別、然しおらあ一人身だがおぬしやあ親や兄弟が、此の谷中に居るぢやあねえか、それを捨てゝ行く心か。

白玉　捨てたいことはなけれど廓に居られぬわたしの借金、どうで勤めの出來ぬからは死ぬより外に思案はなし、さうして歎きを掛けるよりまだしも逃げるが孝行と、それゆゑわたしや捨てゝ行く氣さ。

傳次　なるほどそれも尤もだが、これから旅へ出かけりやあ、又何時逢はれるか知れねえから、餘所ながら父さんや弟に逢つて行かねえか。

白玉　いえ〳〵逢つたら思ひの種、矢つ張り逢はずに少しも早く、

傳次　それぢやあこれから四ッ谷へ出て、青山通りを眞つ直ぐに、世田ヶ谷道から厚木街道。

白玉　もし、その道は淋しくはないかえ。

傳次　どうで駈落をする道だから、賑やかなことがあるものか。

白玉　それだつて氣味が悪いもの、おゝ、氣味が悪いといへば權九郎、どうしたらうねえ。
傳次　どうするものか、土左衛門よ。
白玉　えゝ。（トびつくりして傳次に縋る。）
傳次　えゝ、ぐづ〳〵せずと支度をしねえか。
白玉　あい。
〽あいと白玉帯締直し身拵へして行かんとなす、此方の藪の小蔭より、
ト兩人帶を締直し下手へ行かうとする、此の時上手藪の陰より以前の佐五兵衛佐吉出て、
佐五　娘、待ちやれ。
〽と聲かけられ、はつと二人は打ち驚き、
白玉　や、父さんか、
佐吉　お前は姉さん、
白玉　其方は弟、
傳次　そんなら二人は、
佐五　お玉が親にすなはち弟。

傳次　はて、思ひ掛けない、

白玉　さうしてお前は、何しにこゝへ、

佐五　其方の行方を尋ぬる爲、

傳次
白玉　え、

佐五　あの、こゝな不孝者奴が、

〽言はれて白玉堪り得ず、堪忍してと迯け出す袖に弟が縋り附き、姉さん待つてと留められ、
行くに行かれぬ憂き思ひ、

ト白玉逃げようとするを、佐吉縋り留める。

おれは見えねど此の親に、其方は顔が合されまい、
〽言ひつゝ側へ探り寄り、憎い子ほど不便さに先立つ涙を押し拭ひ、
もしそこにござる傳次どのとやら、初めてお目に掛れどもお顔も知れぬ此の眼病、何のやうなお方か、此方にも縁に繋がる身の不承一通り聞いて下され。何を隱さう某は結城家の陪臣にて主人と賴みし其のお人が不慮の御最期遂げられて、遂にお家は退轉なし、其の奥樣を引取りてお世話いたす甲斐もなく、時疫の病にかんがくせし女房も共に冥土のお供、その取り片附に差支へ、僅

か十歳の娘をば十兩に廓へ賣り、心の儘に葬式なし、それより主人の菩提所なる新清水の寺侍、四五年勤める其の中にふと風眼を煩らうて皆目兩眼見えぬゆゑ、暇を願ひ浪々なし、伜の肩を杖柱、破れ扇で高砂や此の浦舟と、藝が身を助ける程の不仕合せ、かゝる難儀を知りながら、廓を脫けて又候や苦勞を掛ける不孝者、憎い奴ぢや。とはいふものゝ、名僧知識と呼れたる清玄樣さへ、色ゆゑに破戒墮落のお身の上、況して年も行かぬ者、さのみ無理とは思はねど、金で賣つた身體ゆゑ、この儘廓へ歸らねば祟りは親の身に掛り、如何なる憂き目を見ようやら、それも常なら厭はねど、知つての通り四年越し御恩になりし清玄樣、見る影もなきお暮しにお貢ぎ申す者もなく、親子が僅かの貰ひ溜め半を分けて煙の代、此の身に凶事のある時は清玄樣まで見殺しにせねばならぬが口惜しい。切ない譯を聞きわけて否であらうが此の儘に、再び廓へ歸つてくれ。傳次どのも共々に娘に勸めて下さりませ。

〽事を分けたる賴みさへ、迷ふ心に兎やせんと二人は目と目見合せて、何の返答も泣く姉に弟は膝に取附いて、

ト佐五兵衞よろしく思入れにて言ふ。傳次白玉術なきこなし、佐吉思入れあつて、

佐吉　わたしが女子であるならばお前の代りに廓へ行き、父さんにも安堵させ、お前方も望みの通り旅

へやつて上げたいが、それもかなはぬ此の身は男、父さんとてもお年の上、殊には長い御眼病、

〽餘計な苦勞をさせ申し、もしもの事のある時は、お前も濟まず取り分けて後に殘りしわたしが身は、誰を便りにしませうぞ、弟不便と思ふなら親の詞を背かずに廓へ歸つて下さんせと、涙ながらに手を合され、哀れ身に染む夜嵐に今は二人もこれまでと、忍びかねたる不忍の池も親子が涙にて、水嵩まさる如くなり。

トこの中佐吉白玉へ縋り、佐五兵衞へ思入れあつて宜しくこなし。佐五兵衞手拭にて涙を押へ、傳次顏をそむけ皆々愁ひの思入れ。

〽傳次は泣き伏す白玉を、抱き起して吐息をつき、

傳次　これ白玉。段々との入譯を聞けば聞くほど皆義理づく、假令死ぬ死なうといふ仲でも、もう連れちやあ逃げられねえ、否でもあらうが辛抱して顏を拭つて歸つてくれ。其の代りにやあおれも亦命限り働いて年季だけの金を積み、親に難儀のかゝらぬやうしがくをしてから連れて逃げよう、辛い勤めも僅か二三日遲くも五日か六日にやあ金を拵へ迎へに行くから、そりよを樂しみに歸つてくれよ。

白玉　それぢやといふて、（トこの中白玉締泣に泣きながら、）そんなら、歸らねばならぬかいな。

傳次　親の難儀にや替られめえ。
白玉　はあゝゝゝゝ。（ト泣き伏す。佐五兵衛思入れあつて、）
佐五　おゝ傳次どの、よう言うて下された。私ぢやとて可愛い娘、よしや見ても見ぬ振りして此方と一緒にやりたいが、それのならぬは云はゞ侍、道は道にて立てねばならぬ。偏屈者と思はうが刀の手前許して下され。
傳次　あゝ勿體ない事言はつしやります、此の白玉の駈落も元はと言やあ私が指金、不孝の名をば取らしたは腹も立たうがこれも惡緣、滿更世間にないといふ事でもなけりやあ、若し親御、どうぞ堪忍しておくんなせえ。
佐五　あゝ何の〳〵、恨む所か有りやうは娘が惚れたいはゞ戀聟、どんな男かたゞ一目顏が見たうござるわい。これ佐吉よ、定めて好い男であらうな。
佐吉　あい、目鼻だちなら口元なら、役者に譬へていはうなら、權十郎に生寫し。
佐五　おゝ權十郎に似て居るとか、面目ないが二十年歌舞伎をとんと覗かぬゆゑ、今の役者は存ぜぬて、はゝゝゝ、はて扨、野暮なことでござる。いや何は兎もあれ、いよ〳〵娘は得心なして歸つてくれるか。

白玉　あい。
佐五　おゝよく得心してくれた、忝けないく。
佐吉　姉さん嬉しうござりまする。
佐五　斯う打ち解ける上からは、今の辛さを昔語りに、
傳次　やがて目出度く名乘り合ふ、時節來らば其の折は、
白玉　世間晴れてわたしは女房、
佐吉　緣に繋がる兄弟に、
佐五　老は先立つ世の習ひ、
傳次　兄といふのも烏呼がましいが、
白玉　親なき後は兄は親、
佐吉　互ひに力になり合うて、
佐五　行末賴む傳次殿、
傳次　御念に及ばぬ。（ト時の鐘。）さ、更けぬうちに、
佐五　少しも早く、

佐吉　廓へ、ともく、
白玉　あ、行かねばならぬ浮世の義理。
〽春の名殘にしほくと花を見捨てゝ雁金の、別れともなき別れ霜。
ト白玉立上り傳次の側へ來る、傳次佐五兵衞へ惡いといふ思入れにて、佐吉と顏見合せはつと思入れ、佐吉は顏を背ける。佐五兵衞はまじくと四邊を窺ふ思入れにて、
佐五　さ、名殘りが濟んだら、娘は此方へ、
白玉　え、父さんお前はお目が、
佐五　いや、見えはせねども、大概そこらと、
傳次　ても勘のよい、
佐五　俄か盲目さ、はゝゝゝゝ。
傳次　そんなら白玉、
白玉　傳次さん、
傳次　短氣を出すなよ。
白玉　あい。（ト傳次の側へ行かうとするを）

佐吉　姉さん一緒に、（ト手を取る。）
佐五　傳次殿。
傳次　その中お目に、
兩人　かゝりませう。
白玉　もし、（ト傳次の方へ寄らうとするを、）
佐五　これ、（ト隔てゝ、探りながら白玉の手を取り、）さあ娘、來やれ。
〽せり立てられて是非なく〳〵、二世を掛けたる中島も後に三橋や淸水門、流れの里へと別れ行く。
トこの中佐五兵衞は白玉の手を引き、佐吉は佐五兵衞の手を引いて上手へ行き掛る。傳次花道へ行き掛け、兩人振返り〳〵よろしく、トゞばた〳〵になり、傳次思ひ切つて逸散に花道へ入る。これにて白玉引返さうとするを佐五兵衞引つ張つて、足早に上手へ入る。これにて太夫座を消し、時の鐘。下の方より以前の權九郞ずつぷり濡れて出來り、
權九　やれ〳〵酷い目に逢つたが、天道樣のこれも御罰惡い事は出來ぬものだ、思案の外とはいひながら、主人の金を五十兩、ちよろまかして白玉と手に手を取つて二人連れ、道行せうと思ひの外、

金は取られて池へどんぶり、既のこと土左衛門と改名する所、不思議に命の助かつたは、物した
金を又物され、おれが罪が消えたせゐか、然すれば金は仕方もないが、あの白玉は何うしたか、
(ト四邊を見廻し、)そりやこそ白玉も見えないは、扨は一杯やられたか、然しこれでこそおれが本役、
こぼす所は少しもないが、(ト思入れあつて、)さるにても五十兩盜んだ奴は何者だか、おゝ、思ひ出
した事がある、彼の白玉の格子色に牛若小僧傳次といふ巾着切があるとのこと、もしや二人言合
せておれを一杯やつたのか、何にしろ傳次めが金を取つたと訴へて戀の敵を取つてやらう。とは
云ふものゝ白玉がやつぱりおれに惚れてゐて、こゝらをまご〱しては居ぬか、大きな聲で呼ん
で見よう。白玉や〱、落ちたては冷つこい〱。

ト權九郎これを繰返し〱顫へながら上手へ入る。時の鐘にて此の道具廻る。

(山下袴腰の場)――本舞臺正面上手へ寄せて袴腰の石垣、この上草土手、松の立木、下手廣小路
の茶屋、夜の遠見よろしく、時の鐘にて道具留まる。と端唄の合方になり、花道より新兵衛白酒屋に
て、桶の上へ山川白酒といふ行燈を附け、緣日歸りの心にて出來り、直に本舞臺へ來り、

新兵 今日は甲子祭ゆゑ、傳通院の大黑樣で夜業を張つて、思ひの外家へ歸るのが遲くなつた、もうか

れこれ四ツ半過ぎ、今から押上へ歸つたら丁度九つを打つだらう。何の事はない甲子待を歩きながらするやうなものだ。然し何時に歸つても獨身者の氣散じは、鼠より外待手はなし、まあゆつくりと休んで行かう。

ト荷をおろし天秤棒へ腰を掛け、行燈の灯で煙草を呑みながら、

此のやうに朝から晩まで足手ばかりに稼いでも、小商といふものは扨利の細いものにて、一日歩いてほんの喰ふだけ、それも娘が心を附け苦界の勤めの其の中で貢いでくれゝば、其の日にはどうやらかうやら困らねど、滿更出れば損も行かず、假令百でも五十でも溜めて置いたら娘の爲、こんな事をいつてゐても明日が日知れぬ年の上、いや知れぬで持つたものぢやなあ。

ト煙草を呑み居る。と花道より以前の傳次頰冠りにて出來り、後より離れて頰冠りにて菰を着たる非人窺ひながら出來る、傳次これを知らず、

傳次　まだ今夜は九ツ前だが、夜見世の引けの早いのか夜明しも出ちやあ居ねえ。何ぞ一杯やりてえものだ。薄のろい事をいふやうだが白玉に別れたので、三百落した心持だ、然し其の替りにやあ手も濡らさず、而も小判で五十兩、

ト振返る。件の非人逸散に花道へ入る。傳次これを透し見て、

何だ乞食か、(ト四邊へ思入れあつて、)滅多なことは言えねえな。(ト本舞臺へ來り、白酒の荷を見て頷き)

おい爺さん、辛いのはねえか。

新兵　はい〳〵。(ト茶碗へつぎ盆へ載せて出し、)もし、上つて御覽じませ、わしが白酒は、世間のよりぴんとしてをります。

傳次　そいつあ有難い、(ト捨石へ腰を掛け、白酒を呑みながら、)成程こりやあ辛口だ、何處からお前受けて來るのだ。

新兵　いえ、手造りでござりまする。

傳次　道理で羊羹と一座にしちやあ好い白酒だと思つた、おい、もう一杯くんねえ。

新兵　はい〳〵、有難うござります。

ト又茶碗へつぎ出す、傳次呑みながら、

傳次　そりやあさうと爺さん、今夜は夜見世の引けの早いのに、お前ばかり何で出て居なさるのだ。

新兵　なに、今夜は甲子で傳通院の大黑樣へ夜見世を張りに參りまして、それで遲くなりました。

傳次　はあ、今夜は甲子かえ、むゝ甲子に五十兩とは、此奴は延喜がいゝ。

新兵　なに、五十兩え、(ト聞き咎める。)

傳次　いやさ、白酒は一合五十だの。

新兵　いいえ、三十六文でござります。

傳次　そいつあ篦棒に安いな、（ト言ひながら行燈へ目を附け）こう、山川白酒と書いたは看板書ぢやねえの。

新兵　はい、此の間破れた時、隣の手習ひ師匠で書いて貰ひました。

傳次　道理でいゝ手だと思つた。

新兵　お恥かしいが無筆ゆゑ、わしにはさつぱり知れないが、皆さんが褒めさつしやります。

傳次　さうだらうよ。

トこの中花道より捕人役人牛綱ぶつさき大小、黑四天の捕人二人と共に密々と出來り、上下より窺ふ。傳次これを見て、南無三といふ思入れにて、身拵へをなし、

爺さん、いくらだえ。

新兵　はい、廿四文でござります。

傳次　さあ、こゝへ置くよ。

ト百錢を一枚桶の上へ置き、此の時見物へ見えるやうに五十兩包を桶の中へ入れる。新兵衞錢を取

つて。

新兵　これではお釣錢が、

傳次　なに、それにやあ及ばねえ。

ト隙を見て逃げようといふ思入れ、捕人目配せなし、つか〳〵と來り、

捕人　捕つた。

ト傳次を左右より押へる。傳次振拂ひ逃げ出すを十手にて打ち据ゑる、ちよつと立廻つて三人傳次を押へ附け繩を掛ける。此の內新兵衞びつくりして下手に蹲踞まり慄へて居る。

役人　それ、懷中を改めろ。

捕人　はツ、（ト懷を改める。）

傳次　いいえ、何も怪しい者ぢやござりませぬ。

役人　だまれ、汝が惡事は調べ置いたのだ。どうだ、懷中にあつたか。

捕人　所持いたしをりませぬ。

役人　むゝ所持でなくとも脫れぬ舊惡、代官所へ引立てい。

傳次　えゝ、忌へましい。

ト、新兵衞の桶へ思入れ。時の太鼓になり、傳次を引立て花道へ皆々入る。新兵衞下手より顫へながら花道の方を見て、

新兵　扨は今のは掏兒であつたか。道理こそ三杯廿四文の其の所へ釣錢も取らずに天保一枚、夜目ゆゑ確り顏は見えぬが未だ年若な二歳の樣子、何でも大した事と見ゆる、あゝ何處の誰が子か知らねども、親の身にて斯くと聞いたら、嘸や悲しい事であらう、子を持つた身につまされて人事のやうには思はれない。あゝ、こんな所に長居して掛り合ひになつてはならぬ。どれ早く歸りませう。

ト時の鐘、新兵衞荷を擔ぎ、立上り行かうとして躓き桶を轉覆す。此の時五十兩包み出る。

あゝこれはしたり、心が急いたばかりで片荷すつかり覆してしまつた。七十二文よけい取つたら五百ばかりの損になつた。や、此の紙包みは、(ト件の金包みを取り上げ、探り見て、)桶の中から出た此の包み、手當りは正しく金、

ト大きく言つてびつくりなす。此のなり下手より以前の權九郎出で、

權九　なに、金とは、(ト側へ寄る。新兵衞びつくりして懷へ入れ、)

新兵　さあ、かねと云つたは、上野の九ツ。

權九　あ、時の鐘か。

新兵　正しくこれは。
權九　や、（ト新兵衞懷よりばつたり金包みを落す、權九郎これを聞き、）今の音は、（ト側へ寄るを隔てゝ、）
新兵　え、
　　ト金の上へべつたり坐るを、木の頭。
　夜は詰りましたなあ。
　　ト時の鐘、跳への合方、これへ迷兒の鉦太鼓を冠せ、迷兒やいといふ聲を刻み、よろしく、
　　　　　　　　　ひやうし幕

## 二幕目

　　　　　新吉原三浦屋の場

〔役名――鳥井新左衞門、花川戸助六、白酒賣新兵衞、紀伊國屋文左衞門、番頭權九郎、門門兵衞、鳥井門弟朝川千平、同針崎峰藏、同藪坂泥太、同窪田專八、同黑澤傳藏、俳諧師東榮、茶屋の若い者善八、同藤助。三浦屋揚卷、同白玉、三浦屋倅四郎次郎、番頭新造花川、新造花人、同花里、遣手お熊、禿二人、其他。〕
（仲の町の場）――本舞臺三間常足の二重、帶入の襖中央うづ屋と云ふ柿の暖簾、下の方三尺千本

格子うづ屋と云ふ掛行燈、上下とも青竹の手摺、櫻、山吹、總て仲の町の體。俳諧師東榮坊主[illegible]羽織着流しにて居るを、番頭新造花川胸倉を執り、喜八、藤助茶屋の若い者の裝にて立掛り、二挺鼓の唄にて幕明く。

喜八　さあ〳〵東榮さん、お前さんの身から出た銹でございます。

三人　尋常に覺悟なさいまし〳〵。

東榮　あゝこれ、待つて下さい〳〵。强ち舞鶴屋へ馴染んで行つたといふ譯ではない、旦那のお供で據ろなく行つた所、ごほん〳〵、戀は一句では捨てぬものゆゑ、二三句戀をつゞけたがおれの過り、これ花川、どうぞ穩便に賴む〳〵、ごほん〳〵。（トむしやうに咳をせく。）

花川　何の馴染んで行かぬことがござんせう。何もかも知れてあります、何でも性惡の客人の法にしなくつてはなりませんよ。

若者　左樣さ、二階の法で野郎なら坊主にする所でござりますが、坊樣だから何がようござりませう。

藤助　もし、附髮をしてちやん〳〵坊主にしてはどうでござります。

喜七　それよりか、東榮さんの太い眉毛を落すがようございませう。

花里　ほんにそれがようござんす、誰ぞ剃刀を持つて來て下さんせ。

東榮　あゝこれ、待つてくれ〳〵、此の眉毛を落されては貴人高位の前へ出られぬ、ごほん〳〵、それだけの言譯に何なりときぼを致さうから、ちやん〳〵坊主元服の類はどうぞ許してくれ〳〵、ごほん〳〵。

若者　もし花川さん、東榮さんがあんなに詫つてきぼをするとおつしやるから、

藤助　顔や天窓へ疵を附けるのは、堪忍してお上げなされませ。

花川　なんのまあ、好い口なことばかり、暮から春になつても度々文を届けても、なしも礫もせず、正月の仕舞も沙汰なしで餘所へ揚んなんした性惡さん、紀文さんにもお聞かせ申して仕置の仕様もござんせうわいな。

東榮　何分お慈悲の御沙汰を、ごほん〳〵。

喜八　東榮さん、むしやうに咳ばかりおせきなさるが、どうなされました。

東榮　問はれて語るも恥かしながら、皆の者も聞いてくりやれ。ごほん〳〵、肥り和尚といはれたる太つちようが此の樣に痩せ衰へたも誰れゆゑぞ、ごほん〳〵、此の花川に吸ひとられ到頭今では顋で蠅、ごほん〳〵、夕霧ではなけれども去年の暮から二年越し、お心安い石川さんの煎藥と煉藥と針と按摩でやう〳〵と冥土行きの連を脫れ、生き延はつた此の東榮、古い洒落だがこれ花川、

いゝゝばうず許してくれ〳〵、ごほん〳〵。

花川　いえ〳〵、そんな嘘いうて、さあこれから二階へ連れ申して、存分にせねばならぬわいな。

ト東榮の手を取つて引立てる。

東榮　あこれ、さりとは坊主ざはりが荒い〳〵、ごほん〳〵、と言つて逃げるのだ。

ト逃げようとするを三人捉へて、

三人　まあ、旦那のお側へおいでなさい〳〵。

東榮　これは又情ない。

花川　さあ、ござんせいなあ。

ト花川東榮を引張り、二人附いて暖簾口へ入る。と花道より鳥井の門弟朝川千平、くりさげ鬘大小袴を高くはき、扇を遣ひながら出る、後より同じく針崎峰蔵、藪坂泥太、窪田傳八、黑澤傳藏、大小馬乘袴、竹刀の先へ面小手を結び付け擔ぎ出て、花道へ留り、

千平　何と各ゝ御覽じたか、古人の發句にある通り、闇の夜も吉原ばかり月夜かな、と殊更夜櫻、盛りまばゆき仲の町の風景、賑はしいことではござらぬか。

峰蔵　千平殿の言はるゝ通り、世間は闇でも吉原は、晦日の夜でも竹村の最中の月は隠れなし、

泥太　地廻り客のぬらくらと、梶田の鰻で穴ばいり、
專八　野暮は禁物水道尻、いつでもにこ〳〵岡目鮨、
傳藏　料理は金子の口當り、うまく呑ませる色と酒、
千平　いや各方が喰物の渡りぜりふで、腹の時計が狂つて來た。是れから先生のござる三浦屋へ參り、例の大酒といたさう。
四人　いかさま、それがようござらう。
千平　さゝ、お出でなされい。
　　ト皆々舞臺へ來る。奥より喜八、藤助出で、
喜八　これは朝川千平樣、皆樣もよう入らつしやいました。
藤助　まあ〳〵、これで一服召し上りませ。（トこれにて皆々床几へ掛ける、）
千平　ときに若い者、鳥井氏には定めてお出でゞあらうな。
喜八　鳥居樣は先刻三浦屋へ入らつしやいました。
藤助　皆樣が御出でなされましたら、お連れ申せとのことでござります。
峰藏　然らば、直樣三浦屋へ、

四人　參らうではござらぬか。
千平　然し仲の町の夜櫻、ちとこれにて一見致して參らうではござらぬか。
峰藏　如何樣貴殿の申さるゝ通り、向島などゝ違ひ、吉原の櫻は又格別でござる。
泥太　我れ〳〵は年中道場で打ちたゝかれてばかり居れば、
專八　折節は斯樣な保養をいたさねば、身體が續きませぬ。
傳藏　これが所謂命の洗濯と申すものでござる。
千平　さりながら花ばかり眺めても興がござらぬ、鳥居氏の御帳面で一杯喰べようではござらぬか。
四人　それが宜しうござらう。
喜八　左樣ならば此方へお上りなされませ。
藤助　どれ、御酒の支度を致しませう。（ト喜八藤助奧へ入る。）此の時花道揚幕の内にて新兵衞の聲にて。）
新兵　山川白酒、山川白酒。（ト呼ぶ。皆々見て、）
千平　いづれも御覽なされ、あれへ白酒賣が參つた、なにも慰みお呼びなされ〳〵。
四人　おゝい〳〵。
　　ト彼方へ向ひ呼ぶ。と花道より新兵衞親仁の打扮にて、白酒の荷を擔ぎ、呼びながら出で來り、直に

舞臺へ來てよき所へ荷をおろし、

新兵　お客樣、お呼びなされましたかな。

千平　幸ひの白酒屋、お定まりの白酒の言ひたてが、

四人　聞きたいな〳〵。

新兵　あなた方何をおつしやります、この親仁が白酒の言ひたてを言つたとて、なんのお慰みにもなりますまい、御免なされませ〳〵。

峰藏　いや〳〵、是非とも其方が白酒の言ひたてが聞きたいわ〳〵。

新兵　左樣におつしやることなれば、聞覺えました白酒の言ひたて、

皆々　さあ〳〵、所望だ〳〵。

ト新兵衞團扇を持ち前へ出て、

新兵　えへん〳〵。そも〳〵富士の白酒と申すは、むかし〳〵駿州三保ノ浦に伯龍といふ男の漁夫があつたところ、粂の仙人ではあるまいし男に浮かれて落こちたその天人と夫婦になつて、乳より出る色を見て造りそめし酒なれば、第一は壽命の藥、東方朔は三千年浦島太郎は八百歲、三浦ノ大助下戸なればてふ附ばかりで百六つ、此の親仁は每日商ひするので、六十の坂を越えました、又

若いお方は情人ができる、情人ができれば苦勞をする故、白酒でなうていゝ酒〳〵。
皆々　やれ〳〵面白かつた〳〵。
千平　白酒屋、その情人のできるといふ白酒をこれへ持て、
新兵　畏りました。
ト新兵衛茶碗へ白酒を汲みて出す、皆々捨ゼリフにてむしやうに呑むことあつて、
千平　白酒屋、もうよい〳〵。持つて參れ〳〵。今日は持合せがない、勘定は追て遣はすぞ。
新兵　御常談をおつしやらずと、どうぞ御勘定をお願ひ申します。
皆々　いゝいゝ、ひつこい、持合せがないと申すに。
新兵　貴所方は御人體にも御似合ひなさらぬ、僅かの元手で仕込みます其の日稼ぎの商人のもの、たゞ呑むとは御無體でござります。
千平　やあ、武士に向つて無體とは推參千萬、左樣な儀ならば呑まぬ先き何故掛賣は致さぬと申さぬのぢや。
新兵　それぢやと申して通り一遍、お家も知れぬお方へ、お貸し申す譯には參りませぬ。
千平　やあ、又しても武士たるものへ詞を返す慮外者、何れも打ちのめさつしやい。

四人　心得申した。

ト四人竹刀にて新兵衞を打つ、新兵衞捨ゼリフにて詫びるを構はず打つ、奥より喜八藤助出てこれを留め、

喜八　もし〳〵、皆樣どういふ譯か存じませぬが、

藤助　年寄り一人を可哀さうに。

兩人　御了簡なされませ〳〵。

千平　いや、汝達の知つたことでない。

四人　退いて居ろ〳〵。（ト兩人を突き退け、打たうとする。新兵衞縋つて、）

新兵　あゝもし、皆樣どうぞ御了簡なされて下さりませ、拜みます〳〵。

千平　いや了簡ならぬ、我れ〳〵を誰とか思ふ、今江戸中に隱れ無き浪人組、鳥居新左衞門殿の門弟なるぞ。

峰藏　慮外ひろいだ老耄め、此の儘生けては歸さぬぞ。

泥太　土手へ連れ行き眞ツ二つに、打つぱなすから覺悟ひろげ。

新兵　えゝゝゝゝ。（トびつくり思入れ。）

千平　さあ、いづれも老耄めを引つ立てめされい。

四人　心得申した、さあうせろ〳〵。

ト早めたる鳴物、新兵衞捨白にて詫びるを構はず、千平先きに四人新兵衞を引つ立て花道へ入る。と直ぐ揚幕の内にて、

千平　あゝ、痛え〳〵許してくれ〳〵。

助六　いゝいゝがらくた奴等、おれと一緒にうしやあがれ。

ト摺鉦入りの唄になり、花道より新兵衞ふろへ〳〵出る、助六男達好みの打扮一本差し、千平の手を捻ぢ上げ、後より門弟四人附き出で、花道へ留る。

千平　やい〳〵、うぬは何處から飛んで出て、身共をこりや、どうするのだ〳〵。

助六　喧しい三一侍、どういふ譯か知らねえが、仲の町の中央で盛りの花を吹き散らす横に曲つた旋風、手にも足りねえ年寄りを大勢寄つて打ち打擲、見て見ぬ振が出來ないが江戸で生れた癇癪の蟲にさはつた風吹烏め、羽ばたきもさしやあしないぞ。

新兵　何方樣か存じませぬが、よい所へ來て下さりまして有難うございます。

助六　なに其の禮にやあ及ばねえ、然し相手が侍だけに骨が折れる。さあ爺さん、おれに附いて行きな

せえ〳〵。

ト助六千平を引立て、新兵衞はふろへ〳〵、門弟附いて舞臺へ來る。

千平　これさ各〻、頼しくない、見てゐることがあるものか、加勢してくれ〳〵。

四人　それだといつて、氣味が惡い。

喜八　もし〳〵、花川戸の親方、定めしお腹も立ちませうが、

藤助　御客樣方にお怪我があつては、わたくし共が難儀になります、

兩人　どうぞ御了簡なすつて下さいまし。

助六　了簡し難い奴等だが、貴樣達の挨拶、今日の所は許してやる、以後をきつと嗜みやあがれ。

ト千平を下の方へ投り出し、助六床几へ掛ける、三味線入り祇園囃子になり、喜八藤助氣の毒なる思入れにて、捨白にて助六に挨拶して奥へ入る。四人介抱して千平やうやく起き上り、

千平　あゝ痛いぞ〳〵、やい、此奴推參なる慮外者。

峰藏　無禮ひろいだ老耄奴を、

泥太　折檻なすを横合から、

專八　邪魔だてひろぐのみならず、

傳藏　武士たる者に手向ひなす、
千平　そも、先づうぬは、
皆々　何奴だ。
助六　おれが名が聞き度くば言つて聞かせよう、遠くは八王子の炭燒の齒ッかけ爺い、近くは山谷の古遣手梅干婆あに至るまで、茶呑み話の喧嘩沙汰、殘る噂の助六は江戸市川のおれが親方、一つ印籠一つ前、看板打つた鉢卷に由縁はあれど附燒刄、例へて見りやあ雪と炭、黑手組の頭分花川戸の助六とはおれがことだ。
皆々　いやア。
助六　見掛けはけちな小野郎に男達の達師のと、言つたら蛇の目の傘より文福茶釜がお臍で茶を沸しやあがらうが江戸ッ子だけ、後楯にやあ八百八丁御贔屓といふ力ッ瘤に後へ引いたことはねえ。高の知れたる道場返り、相手にするも大人氣ねえが、此の爺さんの仕返しに一本めえるぞ、がらくた奴等、片ッ端から覺悟しろ。
千平　むゝ、音に聞えた助六なら骨があつて面白い、いづれも打ちのめさつせえ。
四人　心得申した。

ト三味線入り早めたる鳴物になり、四人竹刀にて助六に打って掛る。助六四人を相手に宜しく立廻る
この中新兵衞、加勢の心にて天秤棒を振りあげ、身體の痛む思入れ、とゞ助六四人を打ちすゑる、千
平うぬと打って掛るをちよつと立廻って打ち倒し、五人を散々に打つ。

千平　暫く〳〵、暫く御待ち下さりませう。（ト助六を宥め手をつかへ、）貴所の御高名を承はりながら斯樣
な無禮を致しまする筈はござりませねど、實の助六親分やらお名前を騙るものやら、眞偽を見分
けん心の疑ひより、斯樣な無禮を仕つり、お叱りを蒙り恐れ入つてはござれども、御手の內拜見
の上は、何お疑ひ申しませう、最前よりの無禮の段々、

皆々　へい〳〵、偏に御了簡下されませう。（ト助六へ辭儀をする。助六せゝら笑ひ、）

助六　そんなら手前達は、詫るから了簡しろといふのだな。

皆々　左樣でござります。

助六　さういふことなら了簡しないものでもねえが、元の起りは白酒屋、彼の爺さんに今のやうに詫れ。

皆々　なに、この白酒屋に、

助六　詫るのは不承知か。

皆々　どう仕りまして、（ト皆々新兵衞の前へ手をつかへ、）

千平　へい〳〵、白洒屋様へ申し上げます。最前よりの失禮何卒御了簡下さりませうならば、

皆々　へい〳〵、有難うござります。

ト皆々新兵衞へ辭儀をする、新兵衞知らぬ顔をして居る、これを助六見て、

助六　それでよし〳〵、然しながらたゞ歸すのも曲がねえ、うぬ等のやうな犬侍は、似合うたやうに四這ひして、おれが股を潜つて歸れ。

皆々　そりや又あんまり、

助六　否だといふと敲き挫くぞ、（ト竹刀を振りあげる。）

皆々　あゝ、否だとは申しませぬ。

助六　そんなら早く股を潜れ。

ト助六股をひろげる、皆々顔見合せ迷惑のこなし、千平思入あつて、

千平　あゝどうでも韓信をせねばならぬか、（ト皆々四這になり、）そんならいづれも、身共に附いて斯うござれ。（ト千平先きに、四人助六の股を潜り、）

皆々　これで、御勘辨下さりますかな。

助六　許してやらう、早く歸れ。（ト皆々こそ〳〵と上の方へ行き、）

千平　悪い事はせぬものだ、僅かな白酒をたゞ呑んだばかりに、散々打たれたその上に、とゞの仕舞が股くゞり、

四人　我れ〳〵までもお相伴、

千平　思へば〳〵、

助六　どうしたと、

千平　あゝ、つがもねえ。（ト不器用に見得をする。）

皆々　何を言はしやる。

ト騒ぎの鳴物にて、千平先きに皆々上手へ走り入る。新兵衛助六の前へ手を突き、

新兵　いづれの御方様か存じませぬが、危ふい所をお助け下されましたゆゑ、お蔭様で命拾ひを致しました、何とお禮を申しませうやら、命の親の旦那様、有難うござります。

助六　なに、その禮に及ぶものか、然し爺さん何處も怪我はなかつたかえ。（ト助六新兵衛を介抱する。）

新兵　仕合せと何處も怪我は致しませぬ。

助六　憎い奴等だ、年寄り一人を大勢で寄つて掛つて打ち打擲、見るに忍びず彌次馬に喧嘩の仕返しはしてやつた。お前も腹は立たうが、時の災難だとあきらめて了簡さつしやるがいゝ。

新兵　どう致しまして、お前樣があのやうに仕返し仕て下されたゆゑ、詫りまはつてこそ〳〵と歸りましたゆゑ、さつぱりと致しまして好い心持でござります。

ト此中助六紙入れより金を二分出し、

助六　爺さんや、こりやあ少しだが、見た所が大分商ひ物も損した樣子、明日の仕込の足しにさつしやるがいゝ。

新兵　（金を取り見て）どう致しまして勿體ない、命を助けてお貰ひ申した其の上に、此の樣にお金をお貰ひ申しては濟みませぬ。全然損を致した所が、僅か白酒が三貫の仕込み、えゝ、茶碗を三ッ毀されました、是れが百文、ほこ（か）ん〳〵が九ッで三十六文、こうつ、〆て一貫百三十六文で宜しうござります、下さります御親切なら、どうぞそれだけ頂かせて下さりませ。

助六　そりやあ、さうでもあらうが、餘計といつても僅かな金、はいと言つて取つて置きなよ。

新兵　ぢやと申して此のやうに、

助六　情のこはい事を云はずと、取つて置きなといふに。

新兵　左樣ならお詞に甘へまして、頂戴いたします。有難うござります。

ト新兵衛金を頂いて仕舞ふ、助六思入あつて、

助六　爺さんや、お前いゝ年をして擔ぎ商ひをしなさるが、お前、子供衆はなしかえ。
新兵　へい、阿魔ッちよが一人ござります。
助六　なに、娘御があるえ、そんなら聟でも取つて、お前なんぞ骨の折れねえ氣樂な生業でもしなさりやあ好いのに。
ト是れを聞き新兵衞落涙の思入にて、
新兵　はい、娘がござりましても、親の自由にならぬ、身の上でござります。
助六　親の自由にならぬとは、嫁にでも遣つたといふのかえ。
新兵　お話し申せば長いこと、袖振り合ふも他生の御縁、わしが身の上の因果の一通り、お聞きなされて下さりませ。元わたくしは押上村の百姓新兵衞と申す者でござります、來る年々の不作に追はれ、年貢の未進世帶の借財あるが中に女房が長の煩ひ、娘は土手へ茶見世を出して居りました所、吉原の判人門　門兵衞といふ人が、妙見樣へ參詣の折は何時も私の見世が寄附けゆゑ、内の樣子を御存じで、困るであらうと二朱一分づゝ惠んでくれ、有難いお人ぢや親切なお方ぢやと心安う致すうち、右の借財濟方に據ろなく娘をば、その門兵衞が口入で七十兩に苦界へ賣り、金受け取つて歸る途中、枕橋の此方にて盜人に金を奪られ、やれ泥坊よ盜人よと追駈けました其の

時に、五十有餘のれつきとしたお侍樣がお出でなされ、其の盗人を捉へて下され、盗んだ金を返せばよし、返さぬ上は許さぬと刀を拔いて切らんとなされし後より、同類なるか深編笠で顏を隱せし浪人者、手利と見えて一刀にお侍樣を切つたのを見ると其の儘雲霞逃げたるゆゑに、七十兩の金も取られて仕舞ました。またお氣の毒なは私ゆゑに其の旦那が果敢ない最期、是非なく又々門兵衞に右の話しを致しましたら、何の足しにもなるまいがと五兩貸してくれましたが、悔しい事には無筆ゆゑ、其の時取られた證文は後にて聞けば養女證文、殊には五兩の五の字の間へ十の字を書き入れて、五十兩返すなら緣を切つて遣らうと云ひ、現在おのが娘ながら、おのが自由にならぬ仕儀、何をいうても證文へ判をしたのが此方の過り、今更いうても仕方なく、娘一人を捨てましてござります。

ト是れを聞き助六思入あつて、

助六　ふう、すりや、其の夜枕橋にて五十有餘の侍を討つたるものは浪人とか、して／＼、其奴の年の頃は幾歳くらゐで面體は、

新兵　さあ、其の夜はしかも朧夜に、深編笠を着て居たゆゑ、面體知れぬ浪人者。

助六　すりや、其の侍の面體は編笠越しで知れぬとか、（ト無念の思入れ、）え丶忌々しい、其の浪人の

面體が知れたことなら、直にも敵。

新兵　え、

助六　いやさ、此方の肩をおれが持つて、門兵衛の手は切つてやらう、太えと名うての判人だが、そんな無慈悲な事をして人の娘を巻きあげるたア、體のいゝ勾引し、聞けば聞くほど可哀さうな事だ。して、此方の娘は何處に居るのだ。

新兵　はい、江戸町の三浦屋に居ります。

助六　三浦屋の内で、何といふ女郎だ。

新兵　はい、揚巻と申しまする。

助六　え、（トびつくりし、）其の揚巻はおれが馴染、そんなら此方は揚巻の、

ト親かといふ思入、新兵衛も思入あつて、

新兵　はい、親でござりまする。

助六　さうとは知らずこなさんの、こゝで難儀を救ふとは、

新兵　ほんに神とも佛とも、思ひがけない娘のお客、

助六　その揚巻の親とも知らず、

新兵　御世話下さる御親切、
助六　名乘つて見りやあ滿更に、
新兵　盡きぬ御恩の旦那樣、
助六　不思議な緣で、
兩人　ありましたなあ。
助六　爰で逢ふのも深い因緣、さう聞いちやあ猶のこと、これからおれがこゝいなさんの何處が何處まで肩を持ち、きつと娘は取り返してやるから、必ず案じさつしやるな。
新兵　何分お賴み申します。
助六　娘の事は案じずに、早くお前歸りなさるがいゝ。
新兵　へい〳〵、種々とお世話になりまして有難うござります、左樣ならば未だ廓の内に些と用事もござりますれば、これでお分れ申しませう。
助六　氣を附けて行きなさるがいゝ、
新兵　左樣なら貴方、又お目に掛りませう。（ト新兵衞荷を擔ぎとぼ〳〵と上手へ入る。助六後を見送り、）
助六　知らぬ事とて揚卷が親の難儀を救ふも緣、殊更この助六は戸澤助之進の伜　五年以前枕橋にて何

者とも知れず親人助之進を闇討になし、御家の重寶北辰丸の刀を奪ひ取れし其の科にて、戸澤の家は退轉なし、何卒親の敵をば尋ね本望遂げて、北辰丸を取返さうと花川戸にて男達となり、黒手組の頭と呼れ、廓は多くの人の出入り、紛失の劒を詮議の爲め、夜毎に入込む此の吉原、今新兵衛が話しに聞けば、枕橋にて親人を討ちたるものは浪人とばかり、名所も知れず面體とても分らねば雲を闇なる尋ね物、さりながら世にも稀なる北辰丸、其の刀を所持する者が親の敵に極まれば、それを證據に敵の行衛、どうぞ早く尋ねたいものだなあ。

トきつと思入れ。河東節の合方になり、暖簾口より紀伊國屋文左衛門、中月代、羽織着流し、脇差、駒下駄好みの裝、東榮蛇の目の傘を持ち出で來り、助六を見て、

紀文　そこに居なさるは、助六どのではないか。

助六　（紀文を見て、）貴方は川岸の紀文樣、久々でお目にかゝります、御機嫌宜しうお目出度うございます。

紀文　いや、お前も替りもなく、何時もながら全盛の噂でございます。

東榮　これは花川戸の親方、御盛んでございますね、ごほん〳〵。

助六　東榮樣お鹽梅が悪いと聞きましたが、何うでございます。

東榮　いやも、知つての通り花川の所へ通ひ詰めたので、今は愚老の配劑にも及ばぬ程の此の大病、是れが所謂陰陽師身の上知らずとやら、面目次第もござらぬて、ごほん／＼。

助六　それはお大事になさいまし、いや戀と申せば、旦那、この頃は三浦屋にお馴染が出來ましたぢやあござりませんか。

紀文　なにさ、わたしの事だから馴染といふぢやあないけれど、內證の主が友達に話し半分行く二階、今爰の內で聞いて居れば、大勢の侍を打ち打擲、揚卷といふ戀のある身で何故そんな色氣のない事を好んでしなさるのだ。入らざる事を云ふやうだが此方は親の敵なれば、いやさ、堅い屋敷の產れゆゑ、腕に覺えもあらうけれど、大事の身分でありながら、土手の喧嘩も助六、田町の喧嘩も助六と、兎角好くない世間の噂、今ぶちのめした大勢の侍、あれは慥か浪人組の鳥居新左衞門の門弟なれば、新左衞門が聞かば仕返しをするに相違ない、十のものなら九分九厘勝に違ひはあるめえが、勝つた所が遺恨を受け、假令廓は月夜でも大門出れば外は闇、負けるは恥のやうなれど、其處を忍んで其の身を全う敵を討つか親への孝行、（ト東榮の持つて居る傘を見て、思入れあつて取りて、）むゝ、こゝに好い物がある、先刻來る時ばら／＼と花の雫か春雨に、今はお供の傘も丁度此方へ好い異見、此の傘にたとへて言はゞ、どんな強い雨風でも、すほめて通る其時は、骨

も折れず紙も破れず、所を何のこれしきと押して通る其の時は、骨も折れ紙も破れ、終には、浮世の廢物、彈きを張つて力まずとも口をすぼめて耻を忍び、小さくなつて敵を討ち天が下へ名を擧げるが江戸で育つた眞實の男、とさあ、此の傘を景物にとんだ口上茶番だが、お喋べりなのはおれが性質、必ず惡く聞いてくんなさるな。

助六　なんの惡く聞きませう、此の身に藥の今の御異見、これからは喧嘩や出入を愼みます、有難うござります。

紀文　それぢやあ、今の口上茶番を、お前は受けてくんなすつたか、そりやあ何より忝けない。

東榮　折角旦那の御異見も、何と脇を附けなさるかと、實は和尚も案じて居たがこれで溜飲が下つた、けエい、ごほん／＼、けエい、ごほん／＼。

紀文　これといふも知つての通り、此方の親御助之進殿俳名は千海といはれ、此の紀文が俳諧の師匠、今發句の一つも出來るのは千海殿のお蔭、幸ひ爰に持つて居る助之進殿の書捨ての發句、（ト鼻紙袋の中入れより發句の端紙に書きたるを出し、）これを見さつしやい「堪忍を一つの蚤に守りけり、」人間の身體の中を僅かの蚤に喰はれても、ぢつと辛抱するが堪忍の二字、假令どのやうな事があらうとも、蚤が喰ふと思つて堪忍を守れといふ教訓の戯れ書、守りと思ひ肌身放さず持つて居たが

今此方の短氣を留めるには、幸ひの此の發句で、其の脇差へ此の通り、（ト助六の脇差を取り、發句の書いた紙を細く疊み、封印をよろしく附けて、）斯う封印を附けて置けば、拔き放されぬ錠前同然、こりや私がするのぢやない、亡父助之進殿が此方の短氣を異見の封印、助六どの必ず短氣を出しなさるなよ。

助六　重々厚きお志し、貴方の御異見、親父の封印、きつと守りますでござりませう。

ト脇差をいたゞき腰へ差す。

紀文　さう聞いて下されば、わたしも花を持つて引込まれる、いや、花といへば花を見ながら二階で一ぺい、と言つたところがわたしは呑まず、これから梶田屋へ行つて、野暮だからなで飯としませう。

助六　有難うござります、左樣ならば東榮さんも御一緒に、

東榮　いやも、わたしの病氣に鰻とは大妙藥、（ト暖簾口へ向ひ、）おい、若い衆や旦那が梶田屋へいらつしやるよ。

喜八　はい〳〵畏りました。

ト流行唄の合方にて、奧より花川先きに喜八、藤助出で、

花川　旦那もうお出でなさいますのかえ、おや、助さんよくお出でなさんしたね。
助六　花川か、東榮さんとお樂しみだの。（ト花川の背を叩く、）
花川　おや、いやでありますよ。
紀文　えゝ人が聞くと思つて、
花川　あれ、お前さんまで憎らしいよ。
東榮　こう、櫻川に早く來なせえと、さう言つて下せえ。
藤助　畏りました。
紀文　そんなら助六どの。
助六　紀文樣、
皆々　さあ、お出でなされませ。
ト土手の提灯の唄、喜八箱ぶらを持ち、紀文、助六皆々附いて上手へ入る、と花道より門兵衞大形の浴衣、帶を巻き着物を抱へ、置き手拭にて出る、後より番頭權九郎羽織着流しにて出來り、
權九　おい〳〵其處へ行きなさるは、門兵衞さんぢやあござりませんか。
門兵　（振返り見て、）誰かと思つたら近吉の權九郎どのか、此方に逢ひたかつた。

權九　お前湯あがりかえ、當もあるまいに、大そう騒ぎなさるね。

門兵　馬鹿を言はつしやい、なんぼ判人でも年中入りこんで居る吉原、色の一人や二人出來ないでなるものか。

權九　水を向けてとんだ惚氣を聞く、受賃に梶田でも奢んなさい。

門兵　何にしろ向うへ來さつし、（ト兩人舞臺へ來り、）まあこゝへ掛けさつしやい。

權九　御免なせえ、（ト兩人床几へ腰を掛けて、）時に門兵衞さん、いつぞやお前から五十兩の質にとつた定家の色紙、聞きやァあれは紛失物ださうだね。

門兵　これ、靜かに言はつしやい。

權九　知らぬ先きは兎も角も、知つては片時預かれない、どうぞあれを出して下さい。

門兵　そりやあ、出所は不正でもおれが置いた定家の色紙、何も案じる事はねえ、落附いて居るがいゝ。

權九　いや落附いて居られぬは、先達ても五十兩不忍で盗まれ主人へ損を掛けたから、又色紙で五十兩損を掛けてはどうも濟まぬ、其處でお前の方で出しなさらずば、千葉の屋敷へ持つて出て五十兩取る積りだ。

門兵　あれを持つて行かれて堪るものか、何を隱さうあの色紙は、櫻姫の遺恨により額五郎樣が盗ませ

て、おれに預けて置かしつたを、盗みものと附込んで、ちよつと五十兩早乘つたのだ、是れが露顯た其の時は此の門兵衞の首仕事、是非おれの方で受けるから、もう二三日待つて下せえ。

權九　いや〳〵、二三日所か一日でも、不正な品と聞いては待たれぬ、氣の毒だが斷りだ。

門兵　これさ、さう氣短かに言はないものだ、おれの方にもきつとした金の出來る當がある。

權九　さうして其の金の出來る、當といふのは、

門兵　その當といふのは外ぢやあない、三浦屋の揚卷が事、ありや元白酒賣の新兵衞の娘だが、おれが判で三浦屋へ賣つた揚卷、實親の新兵衞に五十兩の貸がある、其の金の出來ない時はお前の娘に遣らうといふ養女證文が取つてあれば、今ぢやあ門兵衞が娘の揚卷、近々の中に鳥井新左衞門樣が身請の相談、さうなれば新左衞門樣からおれが方へ其の五十兩が返る約束、其の五十兩で色紙を受け戻すから、どうぞ二三日待つて下さい。

權九　さう云ふ慥な事があるなら待つまいものでもないが、きつと間違ひはあるまいね。

門兵　おれも門門兵衞だ、何間違ひがあるものか、其の事でこれから三浦屋へ行くから一緒に來て、白玉さんの所で挨拶を待つて居なせえ。

權九　さういふ事なら、三浦屋へ行つて待つて居よう。

門兵　白玉さんと聞いて、直待つ氣になるやつさ、えゝ色男め、（ト脊を叩く、）

權九　いやもう、色男には懲り〳〵した。

門兵　そんなら權九郎どん、

權九　門兵衛さん、

門兵　はツくしよ、（ト嚔をする。）

權九　門兵衛先生、情人めが噂を、（ト門兵衛の顔へ指をさして笑ふ。）

門兵　あゝ、湯ざめでだいぶ寒くなつた。

ト門兵衛着物を引つ掛ける、此の見得所作の切にて道具廻る。

（三浦屋格子先の場）＝本舞臺三間の間大格子、上の方入口三浦屋といふ柿の暖簾、下の方番手桶を積みし用水桶、總て三浦屋格子先きの體。爰に白玉振袖新造にて下に居る、お辰遣手にて煙管を振りあげ立掛り居る、是れを新造花川、花人、花里留めて居る。所作の切にて道具留る。

皆々　お辰どん、まあ〳〵待たしやんせいな。

お辰　えゝ、此の妓達は、折檻をするのを何で留めるのだ。

花川　それぢやというて見世先きで、世間へ聞えて外聞も惡し、
花人　なんぼ折檻しなさんすとて、
花里　怪我でもさしては濟みますまい。
皆々　もう、好い加減にしなさんせいな。
お辰　いえ〳〵、よい加減にしては置かれない、此の間も廓を逃げ、未だ歸つて間もないに勤めでも精出すか、好かない客は振りつけて、三日にあげず頭痛がするの癪が痛いのといふて寐をされては、外の女郎衆の示しが出來ない、それだによつて折檻せねばならぬ。
花川　そりやさうでもござんせうが、見世先きで折檻されては、
花人　白玉さんも外聞が惡い、
花里　今日の所はお辰どん、
三人　どうぞ了簡して下さんせいな。
お辰　いえ〳〵家で幾千折檻しても、此の妓ばかりはきかぬゆゑ、見世先で折檻して思ひいれ耻をかゝすのでござんす。
白玉　わたしに耻をかゝせなんして、それでお前の役が濟むなら心の儘に打たしやんせ、わたしはいゝが

ない新造でも白玉といふ通り名は、誰知らぬものもござんせぬ、それを此の樣に見世先きで折檻したら此の身より、お家の恥でござんせうぞえ。

お辰　え、、口巧者のことを言はしやんせ、假令家の恥にならうともお客を粗末にするを見て、遣手が默つて居られうか。

白玉　二言目には勤めをせぬの、粗末にするのと言はしやんすが、わたしや言はれるやうな覺えはござんぬぞえ。

ト此の時下手より以前の權九郎出で、

權九　いや、覺えないとは言はれまい。

白玉　誰かと思へば、

三人　權九郎さん。

權九　白玉が客を粗末にするは、此の權九郎が證人だ。

花川　そりや權九郎さん何を言はしやんす、白玉さんはお前さんに惚れ切つて居なさんすゆゑ、それで粗末にしなさんすのぢやわいな。

花人　白玉さんばかりぢやござんせぬ、花川さんも東榮さんを、どんなに粗末にしなさんせう。

花里　惚れたお客は心易く、誰でも粗末にしますわいな。
お辰　えゝつべこべと、入らぬ口を利かずとも、お客を近く呼ぶやうに氣休めでも言はしやんせ。
白玉（思入あつて、）さあ、此のやうに門中でお前に耻をかゝされては、向う前へ對しても外聞惡く、此の儘にわたしは廓に居られぬゆゑ、打ちなりと擲きなりとお前の心の濟むやうに、耻をかゝせて下さんせいな。
お辰　むゝ、お前の勤めが惡いから、遣手の役で折檻するを、さういふて勝手を言ひなさりやあ、打つて打つて打たにやあならねえ。
白玉　どうとも勝手にしなさんせいな。
お辰　しなくつてどうするものだ。
ト所作の切にてお辰打つてかゝる、新造三人捨ゼリフにて留める。權九郎側にまごく／＼して居る、よき程に暖簾口より揚卷、傾城裲襠好みの打扮にて出で來り、白玉を圍ひお辰を留めて、
揚卷　お辰どん、待たしやんせいな。（トすがゝきになり、）
お辰　いえ／＼、花魁捨てゝ置いて下さいまし。
揚卷　捨てゝおけといふたとて、わたしの目に掛つたからは、見て見ぬ振りは出來ぬわいな。

お辰　ではござんせうが、此の妓をば此の儘おいては三浦屋の、二階の示しが出來ぬわいな。
揚卷　其處をわたしが挨拶ゆゑ、了簡してやつて下さんせいな。
お辰　花魁にはお氣の毒だが、これぱかりは、
揚卷　了簡しては下さんせぬか。
お辰　これが遣手の役目でござんす。
揚卷　これ程わたしが留めるのに了簡ならずば、白玉さんより、わたしを折檻しなさんせ。
お辰　そりや、何ゆゑ、
揚卷　何ゆゑとは知れたこと、白玉さんの惡いのは何に寄らず姉女郎の私の仕付か惡いゆゑ、折檻するなら此の妓よりわたしを先きへ打たしやんせ、痩せても枯れても揚卷の名を繼ぐからは、折檻の煙管の先きが一分一厘わたしに當つて疵が附いたら五丁町は暗闇、トサアいふは昔の名高い揚卷、それほどには及ばねど、疵が附いたら三浦屋の二階は闇でござんすぞえ。
ト揚卷思入にて言ふ。お辰困る思入。
お辰　もし花魁、揚卷さん、そのお腹立ちは御尤もでござりますが、實は斯ういふ譯でござります。ここに居なさる權九郎さんを白玉さんが惡くするとて、どうかよくしてくれるやう折檻をしてくれ

とお頼みゆゑに此の折檻、わたしが科ではござりませぬ、堪忍して下さりませ。

揚巻　それでは爰に居なさんす權九郎さんのお頼みで、此の妓を折檻したとかえ。もし權九郎さん、お前もまアあのやうに白玉さんが惚れて居るのに、何故そんな事を言ひなさんすぞいな。

權九　それぢやというて白玉には、紋日物日の仕舞は元より、小遣ひがないそれ小遣ひ、鰻が喰ひたいそれ鰻、鮨が喰ひたいそれ鮨と言ふなり次第にしてやるに、肝腎の商賣が如何にも不勤め、それで折檻をさせるのだ。

揚巻　そりや通り者のやうにもない、我儘いふのは惚れて居るゆゑ、お前は御存じなけれど、白玉さんは朋輩衆と寄ると觸ると噂ばかり、なあ皆さん。

花川　ほんに花魁のおつしやる通り、

花人　白玉さんは權九郎さんの、

花里　噂がきつい好きでござんす。

權九　そりやよく言つて居るのか、惡く言つて居るのか。

揚巻　はて知れたこと、惡くいうて居るのぢやわいな。

權九　なに、惡く言つて居ると、（トむつとする、）

揚卷　それが惚れた證據でござんす、好いた人程上邊では惡くいふのが廓の習ひ、斯ういふわたしも助六さんに惚れて居るゆゑ惡く言へば、白玉さんもお前をば惡くいふのは惚れて居るゆゑ、こゝにゐる花川さんも、東榮さんの襟附は潰れたお供のやうぢやというて口では惡く言つて居れど、襟の下へ手をやる時、觸り心が好いというて蔭では惚けて居なさんすわいな。
花川　花魁いやでござりますよ、わたしやしみ〴〵東榮さんの襟附は、いやで〳〵なりませんよ。
揚卷　あれ、あのやうに惡く言ふのが、矢つ張り惚れて居るのでござんす。
權九　はあゝ、それでは廓の習ひにて、惡く言ふのが惚れて居るのか。
揚卷　さうでござんすわいな。（ト權九郎の背中を叩く、權九郎思入れあつて、）
權九　あゝ、さう聞く上は嬉しい〳〵。思入れ惡く言つてくりやれ。
揚卷　白玉さん、惚れた證據に權九郎さんを、惡く言つてあげなさんな。
白玉　花魁、有難うござんす。（ト揚卷をちよつと拜み、權九郎を見て、）あれ皆さん見なさんせ、權九郎さんの間拔な顏附、金壺眼に下り眉、大きな口に小さい鼻、しみ〴〵私や厭でござんす。
權九　あゝ、それ程惚れて居るか。
揚卷　なんと嬉しうござんせうな。

權九　嬉しいとも〳〵、もつと惡く言つてくりやれ。
白玉　わたしやもういやで〳〵ならぬけれど、これでも誰ぞ權九郎さんを好いと言ふものがござんせうか。
花川　人は知らず、わたしらも矢つ張りいやで、
皆々　ござんすわいな。
權九　あゝ嬉しい〳〵、そんなら白玉ばかりでなく花川初め三人とも、此の權九郎に氣があるか、あゝ色男には何がある。
揚卷　ほんに馬鹿げた權九郎さんぢやわいな。
權九　あれ花魁まで、わしに惚れて、
お辰　權九郎さん、好い加減にしなさんせ。（トお辰權九郎の背中を叩く）
權九　おぬしは御免だ。
お辰　誰がお前に惚れるものだ。
權九　まあおぬしは色氣より喰氣とせうから、海老長へ大臺でもさういつてくりやれ。
お辰　だいぶ手をお廣げだね。

權九　こりやあ、受負に買はにやあならねえ。
揚卷　そんなら權九郎さん、
權九　花魁、お氣があるなら後にこつそり。
揚卷　おや、あつかましいことを、
權九　あれ、やつぱりわしを惡く言つて、
お辰　さあござんせいな。（ト權九郎お辰暖簾口へ入る。跡浮いた合方。）
白玉　もし花魁、痛いめをする所をお前さんゆゑ脫れました。有難うござんすわいな。
揚卷　その禮には及ばねど、明けても暮れてもお前の折檻、そりやもう間夫は勤めの憂さ晴し、斯うい
　ふわたしも助六さんと深い仲ゆゑ察して居れど、お前の情人は廓でも噂の惡い人とやら、ちと愼
　んで逢はしやんせいな。
白玉　いえ其の人も此の間、ふとした事で暗い所へ、
揚卷　え、
白玉　いえさ、苦勞ばかりわたしにさせ、久しう江戶に居ぬゆゑに、逢うたことはござんせぬわいな。
揚卷　なんにしろ、いつぞやから噂の惡いお前の身の上、どうぞわたしの名の出ぬやう、氣を附けて下

さんせ。

白玉　いえもう、これから心を改めて、花魁に御苦勞を掛けぬやうにしますわいな。

花川　ほんに花魁のお蔭にて、お辰どんも何にも言はず、

花人　惡く云ふのは惚れて居る、證據と云うたを實と思ひ、

花里　權九郎さんが嬉しがつたは、實にをかしうござんすわいなあ。

新造　あれがほんの正直といふのでござんせう、ほんにをかしい權九郎さん。

揚卷　權九郎さんは、あのやうな事を云うても濟むけれど、

ト此の時後の暖簾を揚げ、鳥井新左衞門羽織着流し大小駒下駄、以前の朝川千平外門弟四人附添出る。

新左　此の新左衞門は、それでは行かぬぞ。（ト此の聲にてびつくりし、）

揚卷　や、お前は鳥井さん。

白玉　もうお歸りで、

皆々　ござんすかいな。

新左　いゝや歸らぬ。揚卷が跡を慕つて見世先きへ惡く言はれに參つたのぢや。

千平　どうで好くは言はれぬ我々、

四人　おもいれ惡く言つてくりやれ。

ト新左衞門始め皆々床几へ腰を掛ける、揚卷思入あつて、

揚卷　どれわたしは仲の町へ、助六さんを迎ひにちよつと、

白玉　花魁がござんすなら、

皆々　わたし等も共々に、（ト揚卷、白玉、皆々立ち上る。新左衞門思入れあつて、）

新左　揚卷、待ちやれ。

揚卷　何でござんすえ。

新左　何でとは、情ないぞよ。

揚卷　え、

新左　まあ、下に居てくりやれ。

トこれにて揚卷是非なく床几へ背を向けて掛ける。白玉、新造後の床几へ掛る、新左衞門思入あつて、

如何に遊里の習ひとて客を振るが見得でもあるまい、假初ならぬ二年越し、雨の夜雪の厭ひなく通ひ詰めたる新左衞門、假令心に染まずとも苦界の勤めといふ所へ心が附かば、これ揚卷、一夜

り情は兎も角も、優しい詞の一ッ位は、掛けても其方が恥にもなるまい、さりとは情を知らぬものぢや。

千平　それと云ふのも揚巻には、助六といふせんびり蟲がへばり附いて居るゆゑだ。唯あらうおれが師匠は浪人組の隨一にて神影流の達人ゆゑ、諸侯を始め門弟は數限りのねえ大先生、それを嫌つて助六に惚れるといふは了簡違ひ、

峰藏　今から心改めて、大先生に隨はゞ、

泥太　何百兩でも金を積み、後とも云はず身請けなし、

專八　一足飛びの御新造樣、

傳藏　榮耀榮華は心のまゝ、

千平　牛を馬に乘替へるが、こりや當世といふものだ。

新左　今門弟中が言ふ如く、諸侯を始め歷々にも藝の一得是れ迄に、手を下げた事のない新左衞門が此の如く、其方にばかりは手を下げて賴むは外の事でもない、後指をさゝれたる我が恥辱を雪いでくりやれ。

揚卷　そりやもう、私も勤めの身ゆゑ隨はぬといふ譯はなけれど、何をいふにも揚卷といふ名は繼げど

影法師、世辭もなければ色氣もない、ほんの無口な野暮者ゆゑ、浪人組の隨一にて神影流の達人たる、世にも名高い鳥井さんのお心に隨ふのは不釣合ゆゑ、わたしには似合相應助六さんに命を賭けて居ますのは、了簡違ひぢやござんせぬぞえ、お前の心に隨はぬはお身分が高いゆゑ、さう思うて下さんせ。

新左　いやさうは拔けさせぬ、今廓にて一といつて二のなき三浦屋の揚卷ゆゑ、浪人組の頭たる新左衞門が相方には、丁度似合と見立てたおぬし、不釣合とは言はさぬぞ。

揚卷　不釣合というたのは、お前を立てゝ脫れる心、それを似合ふと言はれては、憎まれ口なが不足でござんす。浪人組の頭だの神影流の達人のと、人も聞かぬ自慢話し、さりとは野暮な鳥井さん、苦界の譯を知らしやんせぬお前に何で隨はれやう、わたしばかりが女郎でもござんせぬ、三千人の其の中には出來ぬ茶の湯や香花の自慢をする女郎衆が、ぬしには丁度似合ひゆゑ尋ねて自由にしなさんせ、憚りながら揚卷は不釣合でござんすぞえ。

新左　いかに全盛な女郎だとて、並べ立てたる愛想づかし、これでも來るか通ふかと、猫に逢つたる鼠同然咬へて振らるゝ新左衞門、刀の手前この儘に捨て置かれぬ所なれど、右から左聞き捨てに心に留めぬは武士の意地、一旦思ひ込んだる揚卷、是非とも思ひを晴らさにやおかぬ。

揚卷　すりや、これ程にわたしが言うても、

新左　いつかな見替へぬ新左衞門、煩からうが百夜はおろか、一年三百六十五日晝夜分たず通つても、我が手に入れねば武士が立たぬ。

揚卷　（思入あつて、）數ならぬ身をそれ程に思うて下さる鳥井さん、義理にも否と云はれねど、どうした事か心底から、わたしやお前がいやぢやわいな。

新左　すりや左程まで新左衞門を、（ト刀へ手を掛けきつとなつたが、揚卷を見て氣を替へ、）あ、情を知らぬものぢやなあ。

千平　やあ最前からおし默つて蟲を怺へて聞いて居れば、餘りといへば言ひたいがい、もう此の上は師匠に替り、返事によつて我れ〳〵が、

四人　生けては置かぬ、覺悟しやれ。

　　ト此の時以前の門兵衞出來り。

門兵　あいや何れも樣、暫くお待ち下さりませ。

新左　おゝ、誰かと思へば其方は門兵衞、

五人　して、我れ〳〵を留めたるは、

門兵　斯ほどまで揚卷を御執心の旦那樣、相手替つて門兵衞が色好い返事を致させませう。

新左　すりや門兵衞、其方が、

門兵　へい、お氣遣ひなされますな。

千平　手柄の程が、

皆々　見度いな〳〵。

門兵　さう煽てゝ下さりますな。これ揚卷、いかに氣儘な生れだとて、これ程までにおつしやるを厭と言つちやァ冥利が盡きるぞ。

揚卷　誰かと思へば門兵衞さん、お前まで同じやうに、厭なお客を振り通すが廓の習ひといふ事を、お前は知つて居やしやんせぬか。素人らしい事を言はしやんすな。

門兵　いゝや、言はにやあならねえ。人は兎もあれ門兵衞は其の我儘を聞いちやあ居ねえ、おぬしが親の新兵衞から養女に貰つたおれが娘、親の威光で新左衞門樣のお心に、隨はせにやあならねえぞ。

揚卷　親ぢや〳〵と澤山さうにあんまり言うて下さんすな、父さんの讀めぬを附込み、騙して取つた巧みの證文、お前の自由にやならぬわいな。

門兵　そりや其方の言ひ拔けだ、假令無筆であらうとも、新兵衞が首と釣替の判をべつたり押したる證

文、その證文が物を言ふぞ。

揚卷　そりやもう、膝で笛を吹く見世物のある世の中ゆゑ、證文も物を言ふまいものでもない。

門兵　いゝ、うぬ其のいけツ口を、（ト門兵衛立掛るを白玉留めて、）

白玉　もし門兵衛さん、花魁をどうなさるのぢや。

門兵　どうせうとおれが娘、われが知ることぢやあねえ。（トかき退け行かうとする、）

新左　門兵衛待ちやれ。

門兵　何故お留めなされまする。

新左　この新左衞門が所存がある。

門兵　それだといつて、

新左　はて、待てといはゞ、まあ〳〵待ちやれ。

千平　して、先生の御所存は、

新左　身請いたす。

揚卷　え、

新左　金で買はれた勤めの身體、身の代金を渡しなば、新左衞門が心のまゝ。

揚卷　假令お前が身請して、身體は儘にならうとも、心が儘にはならぬぞえ。
門兵　うぬは〳〵、飽まで辛きその雜言。
新左　はて、木折に行かぬは戀の道。
門兵　えゝ、小じれつてえ。
新左　野暮を言はずと、二階へ行つて酒にせう。
千平　流石は先生、
門兵　そんなら二階で、
新左　皆も一緒に、
四人　さあ、お越しなされませ。
　　ト大盡舞になり、新左衞門先に門兵衞、千平、門弟四人附いて奧へ入る。
白玉　もし花魁、ようあのやうに思ひ切つて愛想づかしを言はしやんしたな。
揚卷　言うた後では氣の毒だが、どういふものか鳥井さんの顏を見るとむか〳〵と、疳が起つてならぬわいな、それゆゑか何やら頭痛がしてならぬ。
白玉　それは蟲が好かぬゆゑ、丁度紀文さんの雷樣と同じ事でござんすぞえ。

花川　ほんにさうでござんすなあ。

花人　それはさうと助六さんは、

花里　何故おいでなさんせぬか。

花川　今梶田屋に紀文さんと一緒にお出でなさんすゆゑ、子供を迎ひにやりましたわいな。

白玉　噂をすれば影とやら、あれ〳〵向うへ助六さんが、

皆々　ござんすわいなあ。

新造　ほんに、助六さんぢやわいなあ。

ト座附の唄へ獅子の囃子を冠せ、花道より以前の助六に禿二人袖に縋り出來り、

禿一　もうし助六さん、花魁がお待ち兼ね、

兩人　早うござんせいなあ。

助六　これ、今日はこれから兩國へ行かにやあならねえ用があるから、揚巻にさう言つてくれ。

禿一　いえ〳〵お連れ申さねば、

禿二　花魁に叱られます。

助六　まあ、此の袖を放せといふに、

禿　いえ、お放し申す事はならぬわいな。

助六　こいつァ助六も困つたわえ。（ト本舞臺へ來る。）

白玉　助六さん、

皆々　ようござんしたなあ。

助六　二人の子供に捉まつて、到頭引きずられて來たやつさ。

白玉　なんぼ強い助六さんでも、これにはかなひなさんすまい。

助六　力づくにも行かねえやつさ。

花人　助六さん、まあこゝへ、

三人　お掛けなさんせいなあ。

ト　これにて助六床几へ腰を掛ける、助六揚卷の顏を見て、

助六　これ揚卷、何だか浮かぬ顏附だが、又癪でも起つたのか。

揚卷　其の癪よりも欝陶しいは明けても暮れても新左衛門さん、いくら愛想づかしを言つても性懲もなく來なさんすを、少しは察して下さんせ。

助六　おつう氣休めを言つてるが、何だか知れたものぢやあねえ。

白玉　もし助六さん、そりやお前が惡うござんす、斯ういふわたしも覺えがあるが、勤めする身は素人より却つて堅いものでござんす。
助六　えゝ、おつう理窟をつけて手前の田へ水を引くやつさ。そりやあさうと昔の助六は、大門へ入ると仲の町の兩側から、馴染の花魁の吸附け煙草で目をつくやうであつたさうだが、お前方も並んで居ながら、何ぼしがねえおれだつて、一服ぐらゐは吸附けてくれてもいゝぢやあねえか。
白玉　ほんにこれは氣が附かなんだ、堪忍して下さんせ。
三人　どれわたしが、（ト皆々煙管を取ろ、此の時暖簾口にて、）
新左　いや、助六どのへ吸附け煙草は、鳥井新左衞門が遣らう。
ト摺鉦入りの合方になり、以前の新左衞門、千平、門弟四人附き出來り、床几へ掛ける。助六思入あつて、
助六　これは〳〵、何方かと存じましたら鳥井新左衞門樣、
新左　豫てその名は聞き及べど、對面なすは今日が始めて、
助六　いえもう、ほんの助六といふ名ばかりに見る影もない小野郎め、
新左　以後は入魂に、

助六　どうぞお願ひ申します。（ト助六下手に住ふ。）
新左　扨助六どの、改めて新左衞門頼みがござるが、聞き屆け下さるか。
助六　何事かは存じませぬが、身にかなひました事ならば、
新左　聞いてくれるか、
助六　承りまするでござります。
新左　頼みといふは外でもない、最前これなる千平始め門弟共が仲の町で、此方に手酷く打たれたは、言はうやうなき彼等が未熟、神影流の達人と人に言はれし新左衞門に、耻辱を取らせし憎き奴等、大小取上げ破門なし、此方に進上申さうから、とてもの事の世話ついで、息の根留めてやつて下せえ。
助六　そのお腹立は御尤もでござりまするが、詳しき樣子は知らねども、六十餘りの年寄を御門弟が打ち寄つて打擲なさるをつい見兼ね、よしない喧嘩を買つて入り、申し譯なき不調法、幾重にもお詫び致しませうから、どうぞ御了簡下さりませ。
新左　いゝや了簡罷りならぬ、根が門弟が未熟ゆゑ、打ち打擲に遭つたれど、黒手組の達師のと名立てがましく申せども高が町人、いゝうじ蟲同然、

トこれを聞き助六きつとなり、脇差を見て思入。

浪人なせど兩腰をたばさむ武士が打擲されては、詞の詫びでは了簡ならぬ。身共を始め門弟の顏の立つやう致しなば、了簡せまいものでもない。

助六　して、貴方を始め御門弟衆の、お顏の立つお詫びの仕様は、

千平　その顏の立つ詫びの仕樣は、先刻われが仲の町で我れ〳〵共を打つたやうに、手出しを致さず小さくなり、打たれるならば許して呉れう。

助六　(思入あつて)すりや最前の意趣返しに、此の場でわしが手籠にあはゞ、それで了簡さつしやるか。

千平　如何にも武士が立つ上は、此の儘了簡、

四人　致してくれう。

助六　して又それを不承知なら、此の助六を何とさつしやる。

新左　不承知ならば門弟の首を並べて切つてしまやれ、武士と違つて町人は人を殺せば命がねえぞ。

千平　我れ〳〵共が手籠に遭ひ、危ふい命を助かるか、

峰藏　但しは五人を手に掛けて、

泥太　成敗受けて命を捨つるか、
千平　助六返事は、どゞ何うだ。
助六（じつと思入あつて、）むゝ、無禮の詫びに何れもの、如何にも手籠になりませう。
　　ト助六口惜しき思入れ。
新左　すりや此の場に於て、我れ〳〵が手籠に遭つて詫びるとか、
助六　さあ、お手向ひは致しませぬ。
新左　はてさて、命は惜しいものだ。
　　ト揚巻これを聞き口惜しき思入にて、
揚巻　そんならお前は鳥井さんの望みの通り、此の場で手籠に遭はしやんすか。
助六　はて、女の知つた事ぢやあねえ。
新左（思入あつて、）然らば助六、此の場にて門弟共が意趣返し存分に致すぞよ。
助六　御存分になされませ。
新左　はて、好い覺悟だ。むゝ、はたと忘れて仕舞うたゞ。其方に煙草を呑ませるのだ。どれ、一服振舞つて遣らうか。（ト新左衞門紫の長筒に入りし煙管を出し、筒を結び附けた儘煙草をつけ足にて挾み、

助六の前へ突き出し、）さあ、吸附煙草だ、一服喫みやれ。

ト助六これを見てむつとせしが、封印へこなしあつて煙管を取つていたゞき喫む、揚巻これを見て、

揚巻　あれまた、あんな憎らしい、（と寄るを押へて、）

助六　又さしでるか、ひつこんでゐろえ、（ト煙管を持ち思入あつて、）噂に殘る花川戸のおらが親分の助六までは、仲の町の兩側から馴染の女郎が吸附け煙草で、煙管の雨が降つたさうだが、時世とはいひながら地から湧いたか足の先、安くされるも雁首が、銀の代りの七度燒き、助六ぢやあねえ駄六ゆゑ、詰つた羅字の通らねえお仕着せ白も、吸口が江戸張りだけに、聲色の少しは似たる燒附けに眞鍮臺の喰せもの、然し地張りのお蔭にやあこれまで凹んだ事がねえ、誰れだと思ふ、えゝ、（ト紫の筒を鉢巻にしてきつと見得あつて、煙管を取り、）つぎ替えておくんなせえ。

千平　どれ、先刻の返報に、千平がつぎ替えてやらう、（ト煙管を取つてきつとなり、助六の額へ煙管を掛けて仰向かせ、）なんと何れも見さつしやい、先刻は大層力んだが、當時世界に誰れあつて肩を並ぶるものもねえ、大先生がござるので、手出しもせずにぶる〱と、（助六何をといふ思入にて、額を曲げ千平をきつと見る。これに恐れてぶる〱と顫へ出し、顫へ聲にて、）あれ〱〱、怖がつて顫へるわ〱。

白玉　何で助六さんが顫へやう、さういふお前がぶる〳〵と、瘧病のやうぢやわいな。
皆々　ほんにをかしい顫へざまく〳〵。
千平　何のおれが顫へるものだ、助六の顫へるのがおれの身體に響くのだ。
助六　さあ、先刻の返報、何處なりと手出しはしねえ、存分にさつしやい。
千平　きつと手出しはしねえな、（ト助六領く、）それ聞いて安堵した、さらば先刻の意趣返し、こう〳〵こう。

ト千平煙管にて助六を打つ、揚卷思入。

揚卷　これはしたり助六さん、人もあらうに鳥井さんの意地くね悪い弟子衆の、何で手籠に、
助六　これ〳〵、又さし出るか。
揚卷　いえ〳〵なんぼ女子のわたし等でも、どうまあ默つて見て居られう、日頃の心に引替えてお前は無念に、
皆々　ござんせぬか。
助六　常に替つて助六が短氣を出さぬが親の形見、いや、たゞ堪忍が人の第一。
揚卷　それぢやといつて、

助六　はて、命あつての物種だわ。（ト揚卷をじつと押へる。）

千平　おゝ、いゝ覺悟だ、どうで可愛がられる事はない、憎まれ序にもう一服、こう〳〵〳〵、（又ぶつて、）先づこれで身共は濟んだ、次なる藝當を御覽に入れまする。

ト千平後へ下る、藪坂泥太前へ出て、

泥太　やい助六、先刻はよく酷い目に遭はせたな、煙管の雨の降るやうに淚の雨をこぼさせてやるぞ、（ト言ひながら、ぽんと轉つて、）あ、いたゝゝゝゝ。

千平　えゝ危ねえどうしたのだ。

泥太　それでは未だ投げなんだのか、大方投げられるだらうと思つて轉り損をした、此の返報は、こう〳〵、（ト泥太助六を打ち据ゑ、）先樣は先づお替りだ。（ト後へ下る、峰藏前へ出て、）

峰藏　やれ、情ないもう身共へお鉢が廻つて來た、（ト峰藏遠くより煙管にて打つ眞似をし、）うぬ先刻の返報、こう〳〵こう、なんと骨身にこたへたか。

千平　これ運八、そりや何の眞似だ。

泥太　君子危ふきに近寄らずと申すゆゑ、それで遠くから打つたのでござる。

千平　何をたはけた。

專八　後は手ッ取り早く、二人で參らう。

傳藏　如何さま、それがようござらう。（ト兩人助六の左右へ分れ、）

專八　やい助六、先刻の返報、

傳藏　二人掛りで、

兩人　こう〳〵、（と助六を打つ、助六身を躱して兩人をぐつと締上げ、脇差を見て心附き手を放し、）あゝあぶねえ、靜にさつせえ、（と起してやる。）

兩人　あゝこれはいゝいたいお世話になりまする。

ト鳥井の中間運平鉢卷にて肌を脫ぎ木刀を持ち、

運平　下郎も今日のお供を幸ひ、少しばかり打たして下さりませ、ヨイ〳〵〳〵、ヨイ〳〵〳〵、ヨヨイヨイ、（ト助六の脊をそつと打ち、）お目出度うござりまする。

新左（始終助六を見詰め居て、）もうよい〳〵、いや男達の達師のと口ではいへど高が町人、實の武士の前へ出ては塗盆に載せた蛙も同然、其の腰拔けの助六に手を下すまでもない、おゝ幸ひ、（ト今方替り新左衞門履いたる木履を取り、刀を拔きつき通して、）命惜しがる素町人、命代りの賠償は身共が穿いた木履が相應。

ト刀へつらぬきし木履を助六の頭へ載せる、女形見て、

女形皆々 あれ、おのやうな。（トこれにて助六、木履を探り見て、）

助六 こりやこれ木履を、

新左 載せたがどうした。

助六 むゝ、

五人 何とした。（ト助六木履へ手を掛け、思はず白刃を見て、）

助六 や、焼刃は正しく、

新左 や、

トびつくりする、助六木履を取る。新左衞門は手早く刀をしやんと納める。助六むゝと立掛る。

千平 手向ひひろがば、

五人 手は見せぬぞ。

ト立ち掛る、揚巻思入あつて中へ入り、助六を襠裲の裾へ入れて思入れ、

揚巻 まあ〳〵皆さん、待たしやんせ。

五人 やあ退け〳〵〳〵。

揚卷　いゝえ退かぬ、退きやんせぬ。最前から助六さんが手向ひせぬを附込んで、寄つて掛つて打ち打擲、元はと云へば揚卷か鳥井さんに隨はぬゆゑ、腹が立つなら此の揚卷を打たしやんせ、可愛い男の代りならいくらなりとも打たしやんせ、さあ存分にならうわいな。

ト思入にて云ふ、新左衞門思入あつて、

新左　おゝ望みの通り存分にする、其方の身體を身請して存分にしてやらう。

揚卷　え、

新左　後とも言はず、たつた今。千平、亭主を呼びやれ。

千平　畏りました。こりや〳〵亭主、

四人　用がある、參れ〳〵。

トこの中上手より、四郎次郎羽織着流し女郎屋の息子にて出掛りゐて、

四郎　へい、何御用か存じませぬが親父は留守でござりますゆゑ、則ち倅四郎次郎へ何御用か御用の筋を、仰せ聞けられ下さりませ。

新左　用といふは外でもない、身が相方の揚卷を今宵身請け致すほどに、左樣心得たがよいぞ。

千平　なんと助六、何百兩でも右から左り、直に身請けをなされるのだ。

峰藏　いくらわい等がじたばたと逆さになつて騷いでも、
泥太　金といつちやあ一文半錢、鼻血より外出やあしめえ。
專八　なんぼ情人でも先生に身請けをされたら今日限りだ。
傳藏　悔しくば張合つて、手前も身請けをするがいゝ。
新左　こりや三浦屋の伜、身請金は何程なるぞ。
四郎　いえ、其の身請けはお待ち下さりませ。
新左　なに、身請けを待てとは、
四郎　甚だお氣の毒でござりますが、揚卷が身請けは先刻相濟みましてござりまする。
新左　して、揚卷の身請けをなせしは、
千平　そりや何處の、
四人　何者なるぞ。
四郎　へい、則ち身請けをなされましたは、紀の國屋の旦那樣でござります。
新左　すりや豫て聞き及ぶ俳諧を好む紀文とやら、はて、心憎き奴だなあ。
千平　して、其の紀文は揚卷が馴染の客であつたのか。

四郎　いえ、お客様ではござりませぬが、助六様へ短氣を出すなと先刻御異見なされたをお守りなされた御褒美に、揚卷さんと睦まじう添はしてくれと仰しやつて、只今身請けをなされました。
助六　そんなら彼の紀文樣が、
揚卷　わたしの身請けをして下さんしたかいな。
白玉　花魁、さぞお嬉しう、
皆々　ござんせうなあ。
揚卷　これが嬉しうなうて何とせうぞいな。
とこの中新左衞門口惜しき思入。
千平　なんと先生、忌々しいでは、
皆々　ござらぬか。
新左　はて、捨て置け、戀の遺恨の助六を討ち果すは易けれども、廓で殺せば身共が越度、今宵は此のまゝ花を見捨てゝ歸る雁。
皆々　そんならどうでも、
新左　はて何事も身共が胸に、（ト新左衞門、千平、門弟四人下手へ來る、）こりや助六、そちが命はそちに

預ける、後日の出合を待つて居ろ。

助六　念には及ばぬ何時なりとも。とはいへ尋ぬる、（ト新左衞門の刀へ思入。）

新左　や、

助六　いや、尋ねて行つて、今宵の仕返し、

新左　きつと約束違はぬやう、新左衞門が極印打つて、

ト新左衞門は鍔にて助六の額を打つ、これにて助六の額へ疵付く、助六探り見てびつくりし、

助六　こりや男のしやッ額へ、

新左　口惜しいか、

揚卷　そりや又あんまり、

ト寄るを押へて助六新左衞門兩人拔きかけ、互ひに刀へ思入あつて、揚卷よろしく留め、三人きつと思入。

新左　むゝ、はゝゝゝゝ。（と笑ふ。）

ト摺鉦入りの唄になり、新左衞門先きに千平門弟四人附いて花道へ入ろ。揚卷後を見送り、

揚卷　もし助六さん、嘸悔しうござんしたらう、聞けば紀文樣の御異見で日頃の短氣を出しなさんせず

よう辛抱しなさんした。

助六　紀文樣の御異見で堪忍袋の口をしめ、手出しをせぬを幸ひに、新左衞門が無禮の打擲じつと怺へたお蔭にやあ、實否は知れねど敵の手掛り、

揚卷　えもし、めつたな事を、（ト四邊へ思入）

助六　いやさ、梶田屋に紀文樣か、

四郎　いえ、紀文樣はお氣に入りの五丁の所で、

白玉　大方いつもの葬ひ盡しで、厭がらしてゞござんせう。

助六　（是れを聞き、）死にもの狂ひをしてなりと、敵の實否を、

四郎　え、

助六　さうして鳥井が住所といふは、

四郎　慥かお宅は於玉ヶ池。

助六　それぢやあ、急くにも及ばないわえ。

四郎　紀文樣ならどうで後には、家の二階へ。

白玉　紀文さんのござんすまで、

揚巻　わたしが部屋で、
四郎　延喜直しにわつさりと御酒を、
助六　それでも何だか、
揚巻　はてまあ、ござんせいなあ。
トゝ「あれまた憎や」の唄になり、此の人數皆々暖簾口へ入る。と花道より以前の新兵衞白酒屋にて出來り、
新兵　あ、世の中の縁といふものは何處にどうあるものか、今日思はずも仲の町で難儀を救つて下さんした助六樣といふお人は、娘おまきが馴染のお客と初めて逢うたが好い男、定めて娘も惚れて居よう、どうぞ聟にしたいものぢや。（ト本舞臺へ來り、）それはさうと此の間山下の袴腰で、桶の中へ入れてあつた五十兩の此の金、（ト首に掛けたる財布を出し、）どうぞしてあの盜人どのに戻してやらうと思うても、何處に居るか居所は知れず、獨者の事なれば家へ仕舞つて置かれはせず、外へ出るにも首へかけて歩かねばならず、あゝ、世の中に貧乏人は、金程世話な、
トこの時、禿暖簾口より、
禿　向うの人。（ト大きく呼ぶ。新兵衞びつくりし金を懷へ押込み、）

新兵　えゝびつくりさせをつた。（と懐を押へて思入れ、所作の切にて道具廻る）

（揚巻部屋の場）――本舞臺三間の間上手床の間、違ひ棚、黒塗りの簞笥、夜具棚、上下折廻して塗骨障子、總て揚巻部屋の體。爰に丸行燈を灯し、助六、揚巻よき所へ住ひ、下手に花川彈初めの蒸籠の蕎麥を持ち立ち掛り居る、此の見得座附の唄にて道具留る。

花川　花魁、巻絹さんの彈初めの蕎麥が參りましたが、一つおあがんなさんせぬか。

揚巻　わたしや喰べたくないから、お前持つて行きなさんせ。

花川　わたしや御飯を喰べましたから、子供にのけて置いて遣りませう。（トよき所へ蕎麥を置く）

揚巻　あゝさうして置いて遣つて下さんせ。

花川　助六さん、何で鬱いておいでなんす。

助六　持病の溜飲で、胸が惡くつてならねえ。

花川　そりや惡うござんす、わたしが内證へいつて藥を貰うて來ませうわいな。

花里　わたしは紀文さんの所へ。（ト兩人入る。）

助六　これ揚巻、今日仲の町でおぬしの親の、新兵衛どのに近附になつた。

揚巻　え、そりやまあどういふ譯で、

助六　先刻仲の町で新左衛門の弟子め等が、父さんの白酒をたゞ飲んで、其の上打つたり敲いたり、それとも知らず年寄を可哀さうにと喧嘩を買ひ、門弟め等を追ひ散し後で聞きやあおぬしの父さん、緣といふものはおつなものだ。

揚巻　そりやまあ思ひ掛けない、お前のお庇で難儀を助かり、嘸悅ばしやんせうな。

助六　なにが年寄りの事だ涙をこぼして嬉しがり、段々と長物語り、門兵衛が惡巧みまで父さんの話で詳しく聞いた。

揚巻　そんなら先刻の仕返しは、父さんから起つた事でござんしたか、そりやまあ濟まぬことでござんしたなあ。

助六　なんの濟まねえ事があるものか、あの仕返しをされたばかり、敵の手蔓に取附いた。

揚巻　え、敵の手蔓とはえ、

助六　新左衛門が所持の刀、（ト揚巻へ囁く。）

揚巻　そんなら彼れが、

助六　これ、野暮な聲だ。（ト思入れ。下手より門兵衛出で、）

門兵　助六さん、お目出度うございます。

助六　誰かと思へば門兵衛どの、目出度いとは、

門兵　今内證で聞きましたが、揚巻の身請けが濟んで、お目出度うございます。

助六　餘り急な事で、實はわたしも當惑して居ます。

門兵　なに當惑する事がありませう、人が金を出してくれて、濡手で粟の揚巻が身請け、こんな目出度いことはない。今日からお前の女房になりやあ、緣に繫がる私は舅これから世話にならにやあならぬ。

助六　その舅呼はりは置いて貰はう、そりやあ人によつたら世話をする人もあらうが、此の助六にやあ世話は出來ねえ、といふ其の譯は、此の揚巻にやあ新兵衛といふ血を分けた親がある、此の世話をしにやあならねえ。

門兵　そりやあ以前は新兵衛が娘であらうが今の身は、五十兩といふ金出して養女に貰つた此の門兵衛、何處が何處までわしが娘だ。

助六　その養女も出る所で洗つたことなら分からうが、紀文様が俠氣に身請けして下すつた其の志しに、助六が言ひてえ事も言はねえから、其方も綺麗に揚巻が養女の緣を切つてしまやれ。

門兵（思入れあつて、）むゝ、相手に寄れば何處が何處まで親子の緣は切らねえが、名に負ふ廓で隱れのねえ助六さんのことだから、いかにも切つて遣りませう。

助六　すりや、此の助六の詞を立て、

門兵　養女の緣は此の座限り、

揚卷　門兵衞さんの手の切れたも、助六さんのお蔭ゆゑ、

門兵　緣が切れりやあ、あゝかの他人、その時渡した養育金の五十兩のあの金は、私に返して下さるだらうね。

助六　え、（ト思入れ。）

門兵　お前も名におふ達師ゆゑ、まさか緣は切れ、其の金は返すめえとは言ひなさるめえ、他人となつた上からは、たつた今貰ひたい。

助六　さあ、それは、

門兵　よもや出來ねえとは言ひなさるめえの。

揚卷　もし門兵衞さん、そりや何を言はしやんす、父さんに貸した五十兩を主の手から取らうとは、そりや無理でござんすぞえ。

門兵　何で無理な事があるものだ、養女に貰つた親子の縁を切れといふから詞を立てゝ、綺麗に切れた上からは、其方も綺麗に五十兩、顏を賣るなら出さにやあならねえ。なう助六さん、そんなものぢやあねえかえ。

助六　なるほどそりやあ尤もだ、假令親父の借りにしろ、口を利いたら助六から返さにやあならねえが、何をいふにも五十兩、耻かしいが爰にねえ、家へ返つて持たしてよこさう。

門兵　いゝやそりやあ厭だ、親子の縁を見る前で切つたからにやあ又金も、見る前で取らにやあならねえ。

助六　それだといつて今爰にねえものを、取らうといふはそりやあ無理といふものだ。

門兵　貸したものを取らうといふが、何が無體だ、此の金を返さにやあ親子の縁は切れねえぞ。

助六　え、

門兵　縁が切れにやあ、親の威光で此の身請けを破談にさせるが、それでも金は出來ねえか。

助六　それだといつて、今といつちやあ、

門兵　出來ざあ身請けを斷らうか、

助六　さあ、それは、

門兵　金を返すか、
助六　さあ、それは、
兩人　さあ〳〵〳〵、
門兵　きり〳〵返事をしやあがれ。
　　　トきつと言ふ、助六當惑の思入れ。此の以前より下手へ新兵衛出掛り居て、
新兵　もし助六樣、其の金はわたしがお返し申しませう。（ト前へ出る。皆々見て、）
助六　さういふ此方は、新兵衛どの、
揚巻　ほんに、何時の間にござんしたえ。
新兵　其方に逢はうと最前から內證へ來て、今次の間で樣子は殘らず聞きました。門兵衛どのにも久しう無沙汰好い所で逢ひました。もし助六樣、門兵衛どのより返せと云ふ五十兩のその金、此の間お前から預つた此の金、（ト首に掛けたる以前の金を出して、）爰へ持つて參りました。さあ、是れをお返しなされませ。（ト前へ出す。助六合點の行かぬ思入れ。）
助六　新兵衛どの、何時此方に、わしが金を、
新兵　はて、物覺えの惡いお人、此の間お前さんから預つた、な、それ、いやさ預りました〳〵、此の

親父に五十兩預けさつしやつたに、違ひはござりますまいがや。

ト種々呑込ませる、助六思入れあつて、

助六　なるほどさうだ、さつぱりと忘れてゐた、此の間此方に預けた五十兩の此の金、詞にまかせて暫く、いやさ、暫く此方に預けた此の金、いゝゝ、しつかりわしが受け取つた。

新兵　いゝゝ、しつかりと戻しましたぞや。（ト兩人思入れにて、助六金を受取り、）

助六　さあ門兵衛どの、五十兩の金を返す代り、新兵衛どのから受取つた證文があらう、證文と引替へにしませう。

門兵　その證文は爰にある、（ト紙入れより證文を出し、）五十兩の金と引替へに、

助六　（證文を開き見て、）五十兩の證文、これ新兵衛どの、是に違ひはござるまいの、（ト新兵衛に見せる。）

新兵　さあ違ひないやらあるやら、皆目讀めぬ無筆の悲しさ、それ故みす〳〵騙られる、（ト思入れ。）

門兵　どうしたと、

助六　いやさ、新兵衛どのが借りた五十兩、さあ改めて受取らつしやれ、（ト金を出す。門兵衛取り改めて、）

門兵　こりや正眞の小判で五十兩、よもやと思つた金、いゝゝ、しつかりと受取つた。

ト金を財布へ入れ懐へ入れる。

助六　これ門兵衞、金を受取つたら言分はあるまいの。

門兵　知れた事、何言分があるものか。

助六　其方に無ければ此方にある。

門兵　なに、あるとは、（ト助六以前の證文を取って、）

助六　五十兩の此の證文、よく〳〵見りやあ、十の字の墨色がどうか違つて見えるのは、こりや入筆、出る所へ出て洗つたら言はずと知れた首仕事、そこを一番大負けに言はぬが花の吉原の、今日彈初めの配り蕎麥一杯振舞ふ、覺悟しろ。

ト助六蕎麥の蒸籠を取つて、門兵衞の頭へ浴びせる、門兵衞びつくりして、

門兵　切つた〳〵。（ト騒ぐ、下手より以前の權九郎出來り、）

權九　いや門兵衞どの、どうした〳〵。

門兵　助六が切りやあがつた〳〵。

權九　門兵衞どん何を言ふ、切られたのぢやねえ、そりや蕎麥だ。（ト門兵衞取って見て、）

門兵　ほんにこりやあ蕎麥だ、おらあ又切られたと思つてびつくりした。

權九　蕎麥を掛けられたを切られたと思つたとは、身に金が入つて延びるのだ、こいつあ此方延喜が好

い。

門兵　（思入れあつて、）成程こりや違ひねえ、五十兩といふ金が思ひがけなく手に入つた。
權九　それは幸ひ、それで色紙を、
門兵　あゝこれ、言ふだけ野暮だ。何にしろ忌えましい、身體中が蕎麥だらけだ。
助六　好きならもう一杯、替りを遣らうか。
門兵　いやそれにやあ及ばねえ。（トこの中權九郎猪口と箸を持つて、）
權九　門兵衛さん、ちよつと待ちな。（ト門兵衛の身體に附いて居る蕎麥を拾つて喰ふ。）
門兵　えゝ何をするのだ、（ト權九郎を突き退け立ち上る。）そんなら助六さん、
助六　蕎麥が好きなら、何時でも來ねえよ。
門兵　其のうちきつと、（トきつと思入れ。）
助六　どうした、
門兵　お禮に參りませう。（ト門兵衛と權九郎は下手へ入る。）
揚卷　手詰めになつた今宵の難儀、お前が救うて下さんして、これで主の顏も立ち此樣に嬉しい事はござりませぬ。

助六　新兵衛どの、定めて様子があるであらう、どういふ譯でござるぞいの。

新兵　(言難き思入れにて、)さあ、彼の金は言ふに言はれぬ、いやさ、様子言はねば合點の行かぬは尤もさ、此の親父が甲斐性がなさに可愛い娘を勤め奉公、どうぞして金を拵へちつとも早く娘の年季が拔いて遣りたさ、喰ひ度い物もろく〳〵喰はず、微塵積れば山とやら、稼ぎ溜めた五十兩でござります。

助六　聞けば聞くほど氣の毒千萬、年寄の瘦腕で稼ぎ溜めた五十兩の金。

新兵　それもやつぱり元はといへば、わしが借りた五十兩、何は兎もあれ、思ひ掛けない其方の身請が濟んで、このやうな悦びはないわいの。

助六　紀文様のお情で揚卷の身請けは濟み、五十兩の金は新兵衛どのに濟して貰ひ、男は立つたといふもの丶、さりとては面目次第もない仕合せ。

新兵　何の面目ない事がござりませう、たゞ此の上のお願ひは年季の拔けた娘が身體、どうぞ今から女房に持つてやつて下さりませ。

助六　不思議な緣で世話になつたり、なられたりする此方衆親子、どんな頼みでも否とは言はぬが、其の事ばかりは、どうぞ堪忍して下され。

揚卷　勤めの中はほんの浮氣、足を近う親切にして下さんしても、眞實心にそまぬゆゑ女房に持つては下さんせぬか。

助六　いや氣に入らぬと云ふ譯ではまつたくないが、黑手組の掟にて一切女房を持つまいと仲間の儀定、その頭分の助六が掟を崩して、どうも女房は持たれぬ義理。

新兵　そんならどうでも女房に、持つて遣つては下さらぬか。

助六　此の事ばかりは、どうぞ許して下さい。

新兵　娘、

揚卷　とゝさん、

新兵　ひよんな事になつたなあ。（ト兩人顏見合せ投げ首する。揚卷思入れあつて、）

揚卷　さうぢや。（ト鏡臺より剃刀を出す。助六、新兵衞びつくりして留め、）

新兵　これ待て、娘、

助六　揚卷、おぬしは女房に持たぬ面當に死ぬ心か、おれにはそれでもよからうが、紀文樣に濟むまいぞよ。

揚卷　そりやお前が言はしやんせいでも、お姫樣か何ぞなら、お前に嫌はれ死なうといふ心も出ようけ

れど、わたしも三浦屋の揚卷、年寄らしやんした父さんもあり、そんな無分別はござんせぬ、勤めの中は兎も角も身儘で一人居る時は、人に兎やかう言はれるが切なさ、此の髮切つて尼となり、一錢二錢の合力受け、身には襤褸を纏うてもわたしや心に錦着て、たつた一人の父さんを樂に過さにやならぬわいなあ。

新兵　おゝ娘、よう言うてくれた、出來した／＼。

助六　(思入れあつて、)流石は揚卷驚き入つた、其の色氣のない心に惚れた。

揚卷　え、

助六　男も及ばぬおぬしが心底、假令仲間の儀定を破り、人で無しと言はれても、天晴立派な貞心孝女を無足にされぬ浮世の義理、いかにも女房に持つてやらう。

揚卷　そんならお前は得心して、女房に持つて下さんすか。

助六　男達冥利尺八持たぬ法もあれ、盡未來まで替らぬ夫婦。

新兵　アレ娘、助六どのが女房に持つて遣るといやい。

揚卷　何にも言はぬ、嬉しうござんす。

新兵　えゝ、忝けない。(ト兩人手を合せる。此の時上手障子の内にて、)

紀文　千秋萬歳の千箱の玉を奉つる。

ト新造障子を明け紀伊國屋文左衛門盃臺を持ち、四郎次郎袴裝にて銚子を持ち、番頭新造花川、巻絹、巻篠遣手お熊等附き出る。皆々見て、

助六　や、貴方は紀文さん。
揚巻　お歸りなさんしたと思ひの外、
新兵　最前からの此の場の樣子を、
紀文　歸つた振りで殘らず聞いた、天晴健氣な揚巻が心底、わしが見立てゝ持せた女房、助六どの[illegible]てゝやつて下さるな。
助六　重々厚きお志し、お禮は詞に盡されませぬ。
新兵　娘が爲には結ぶの神の旦那樣、
揚巻　何とお禮を申しませうか、
三人　えゝ、有難う存じまする。
四郎　紀文樣の御媒介で、揚巻太夫の身の納まり、
花川　又改めて今夜こそ、引附けならぬ三々九度、

お熊　遣手のわたしや新造衆は、
巻絹　名さへやつぱり待女郎。
巻篠　まだ其の上に旦那から、お二人の身祝ひとて。
四郎　家内のものへ殘らず御祝儀、
助六　何から何まで、
三人　有難うござりまする。
紀文　媒人は宵の内、どれ、お目出度く、（ト立ち上るを木の頭）開きませうか。
ト宜しく思入れ、皆々お目出度うござりまするといふ。「あれ又悋や」の唄にてよろしく、

ひやうし幕

# 三幕目

花川戸助六内の場
駒形觀音堂前の場

（役名――黑手組の助六、舅新兵衞、牛若傳次、番頭權九郎、判人忠藏、家主杢兵衞、乾兒竹門の虎、同砂利場の石、同並木の松、同馬道の倉、同心宮戸良助、捕手四人。助六女房お卷、新造白玉、

其他。」

（花川戸助六宅の場）――本舞臺三間の間平舞臺正面暖簾口、錠のおりる押入戸棚、下手茶簞笥進物のびら、上の方折廻し障子家體、例の所門口、下の方路次口黑塀、總て花川戸助六宅の體。こゝに竹門の虎、砂利場の石、並木の松、馬道の倉、皆々乾兒の打扮にて、門口に若い衆織色筒袖の單衣尻端折りにて盤臺へ鰹を入れ、これを持ち立ち掛り居る、聖天の囃子にて幕明く。

若衆　御免なさいまし、新場の本牧屋から來ました、之れを親分にあげておくんなせえ。

ト盤臺を出す。

虎　こりやあお珍らしい物を有難うござります。

石　今親分はちよつと出ましたから、歸りましたら見せませう。

松　憚りながらお家へ宜しく申しておくんなさりませ。

倉　お前、三社の祭にやあ呑みに來ねえよ。

若衆　是非子供を連れて遊びに來ます、もし、あの囃子は何でございます。

虎　ありやあ今度獅子臺が出來て、今日棟上げの祝ひに囃子をするのさ。

若衆　それぢやあ今年は賑かだね。

石　まあ本祭同様さ。

若衆　そいつあ樂しみだね、どれお暇としよう。

松　まあいゝぢやあねえか。

若衆　早く歸らねえぢやあ、夕川岸の間に合はねえ。

倉　大きに御苦勞でございました。

ト若い衆は花道へ入る。皆々鰹を見て、

虎　こう〳〵、皆見や三月から初鰹だ、何でも氣が早いぢやあねえか。

石　大根おろしも好いが辛子味噌も好いな、喰ねえうちから唾が溜るやうだ。

松　早くこれで一杯やりてえものだ。

倉　もう呑みたがりやあがる。

松　それだつて初鰹を飯で喰ふのは勿體ねえ。

石　ヽヽヽおつう道理を附けやあがるな。

虎　そりやあさうと親分は、宿老の玄關へ呼ばれて行つたが、何も案じる事ぢやァあるめえか。

石　大方無宿者か何かの引取りでも、言ひつかるのだらう。

松　何しろ早く歸つてくんなさりやあいゝに。
倉　此の初鰹で呑みてえのか。
松　當てられた。
虎　意地の穢ねえ野郎だなあ。

ト花道より判人旅雀の忠藏先きに、後より番頭權九郎出來り、花道にて、

權九　おい其處へ行くのは、判人の忠藏どのぢやあないか。
忠藏　おゝ、近江屋の番頭權九郎さんか、又お前の戀人三浦屋の白玉が昨夜逃げやしたぜ。
權九　なに、白玉がまた逃げた、何處へ逃げたな。
忠藏　何處へ逃げたか行先きが知れねえから捜して歩くのさ、さうしてお前さんは廓へでもおいでなさるのか。
權九　なに、それ所ぢやあない聞いてくれ、いつぞやおれの取られた金の泥坊が漸う知れた。
忠藏　はあ、そりやあ何處の者でござりますえ。
權九　其の盜んだ奴は花川戶の助六よ、いや惡い事はしねえもので、此方の親方門兵衞へ揚卷の尻金で助六から渡した所、門兵衞が其の金でおらが所へ質に入つてゐる定家の色紙を出しに來て、ふつ

と見ると一兩々々家の極印のある紛失金、出所を聞けば助六ゆゑ直に代官所へ訴へ、今日そのお調べがあるので、引合ひに呼れて來たのさ。

忠藏 それぢやあ助六が泥坊かえ、いや油斷のならねえことだ。

權九 して、此方は何處へ行くのだ。

忠藏 わしやあ今お話しの助六の所へ行くのさ、女房の揚卷を以前の誼で白玉が賴つて行つたと聞いたゆゑ、今當りをとりに行くのさ。

權九 白玉を尋ねに行くのなら、おれも彌次馬に一緒に行かう。

忠藏 そいつは有難い、相手が男達だから一人ぢやあ氣味が惡い。

權九 弱い事をいふ奴だ。

ト本舞臺へ來り、門口より内を窺ひ、

忠藏 はい御免なさりませ。(ト兩人内へ入る。)

虎 あい、どつから來なすつた。

忠藏 吉原の門兵衞の所かり參りました。

石 おい、そつちの小父さん、お前は何だ。

權九　私は連れの者でござります。
忠藏　どうぞお上さんにお逢はせなすつて下さりませ。
松　今呼んで上げるから、待つて居さつし。
倉　もし姉さん、吉原から人が來ましたぜ。
お卷　あいあい。
ト浮いた合方、幽めて聖天にて、奥より揚卷のお卷、女郎擧句の派手なる世話女房にて出來り、
吉原は何處から來なすつたのだえ。
忠藏　花魁、忠藏でござります。
お卷　おゝ忠藏さん、何か用かえ。
忠藏　ちつとお尋ね申したい事があつて參りました。
ト四邊へ思入れ、お卷ぎつくりこなしあつて、わざと煙草を呑みながら、
お卷　尋ねたいとは、何だえ。
忠藏　外の事でもござりませんが、白玉さんが又昨夜逃げました。
お卷　おや、彼の妓が又逃げたえ、困つた妓だの。

忠藏　聞きやあ以前の誼で、お前さんの所へ留めて置いておくんなすつたさうだから、お禮ながら連れに參りました。

お卷　忠藏さんそりやあお前何をお言ひだ、此方の家に白玉さんを留めて置いた覺えはないよ。

忠藏　もし、花魁ぢやねあえ、お上さん、お前さんとわつちの仲だ、匿つて置きなすつたとて、兎やかうは言ひません、玉せえ返しておくんなさりやあようござります。

お卷　そりやお前の方はよからうが、匿ひもしないものを返しやうがあるまいぢやないか、物を積つてお見、外の家の女郎衆なら匿ふまいものでもないが、御恩になつた三浦屋のお家の難儀になるものを、何で私が匿はれよう、殊に又こちの人は男を立つる氣性ゆゑ、そんな後暗い事をする人ぢやござんせぬぞえ。

權九　いや、あんまり口綺麗な事は言はれまい、隨分後暗い事がある。

虎　何だ〳〵此のどぶつ奴、口綺麗な事が言はれねえとは、誰がことをいふのだ。

石　花川戸の助六といつちやあ淺草ばかりの男ぢやあねえ、江戸四里四方で、誰知らねえ者はねえ、

松　喧嘩を買ふのが生業だが、後暗い事はしねえ、しら几帳面の男達だ、

倉　何が後暗いか吐かしやあがれ。惡く四文と出やあがると、

四人　敲ッ挫くぞ。（ト四人立ち掛る。）
權九　あ、これ〳〵早まるまい〳〵、後暗い事はない人だと言つたのだ。
虎　べらぼう奴、此方にも耳があらあ。
四人　敲きしめろ〳〵。
お卷　（留めて、）これさお前方、よい加減におしよ、見掛けからよい〳〵〳〵染みた人を相手にするは、大人氣ないわね。
權九　これは御挨拶だ。
石　姉さんが留めるから堪忍してやるぞ。
松　家鴨の玉子でも喰やあがれ。
權九　御親切に有難うござります。
忠藏　（思入れあつて、）もし揚卷さん、それぢやあどうでも知らねえと言ひなさるのかえ。
お卷　お前も分らない人だの、匿つて置いたとて穴の中へ入れて置かれもせず、高の知れた爰の家、どう隱して置かれるものかね、疑はしくば家根の上から緣の下まで搜してお見よ。
忠藏　それぢやあ家搜しをしても、いゝといひなさるのかえ。

お卷　よいとも〳〵、三社様のお祭前だから、序に掃除をして下さんせ。
忠藏　むゝ、白玉といふ塵埃の出るやう、掃除をして上げやせう。
權九　一人ぢやあ手が足りめえ、おれも一緒に手傳つてやらう。
四人　また四文と出やあがるか。
お卷　もし忠藏さん、家捜しをして、居ればよし、居ない時は氣の毒ながら、助六の家を判人に家捜しをされたといつては、此方の人の名が廢るゆゑ、お前方二人はたゞは歸さぬぞえ。
忠藏 權九　やあ、（トびつくりする、）
虎　さうだ〳〵、其の時にやあ二人とも、
石　筋骨を拔いてやるぞ。
お卷　さうされるのを承知なら、家捜しをしなさんせ。（ト是れにて兩人顔見合せ、）
忠藏　權九郎さん、どうせうね。
權九　さうさ、もし居ない時には筋骨を拔かれねばならぬ、こりや居るか居ないかを千枝で見て貰つたらよからう。
忠藏　なるほどそれが上分別だ。

お卷　さあ、家搜しをなさんせぬか。
忠藏　ちよつと中田の千枝へ行つて、
權九　居るか居ないを、
兩人　見て貰つて來よう。（ト兩人門口へ出に掛る。）
虎　やい、唐變木め待ちやあがれ、家搜しをしねえからにやあ、言掛をしやあがつたのだ。
石　たゞ歸すことはならねえ。
四人　待ちやあがれ。（ト四人立ちかゝる、兩人履物を持つて花道へ逃げ出し）
忠藏　家搜しもしねえのに、打ちのめされてたまるものか。
權九　君子危ふきに近寄らずだ。
四人　まだぐづく吐かしやがるか。
忠藏
權九　それ逃げるが勝ちだ。
ト屋臺囃しにて、兩人逸散に花道へ逃げて入る。
虎　弱い奴等だ、雲を霞みと、
四人　逃げて行つた。

お卷　逃げて行つたら此方の幸ひ、打捨つてお置きよ。
虎　それだといつて、匿ひもしねえものを、鎌を掛けて來やあがつたから、
松　敲きしめにやあ腹が癒ねえ。
お卷　なに、實は匿つてあるのだよ。
四人　え、匿つてあるえ。
お卷　あゝこれ、靜かにおしよ。
ト お卷下の戸棚の錠を明けて戸を明ける、内から白玉新造裝にて顏を出し、
白玉　姉さん、わたし何うせうかと思つたわいな。
お卷　もういゝから、ちつと此方へお出でよ。
白玉　出てもよいかねえ、（ト白玉戸棚より出る。）
虎　ほんに、こりやあ匿つてあつたのだ。
石　それを家捜しをしろの何のと、險難な事を言ひなさるね。
お卷　あゝ言はないと向うから家捜しをしようといふゆゑ、言はないやうに此方から言つたのさ。
松　なるほど、目の寄る所へは玉が寄ると、

倉　親分が親分なら、姉さんも姉さんだ。

虎　實にわつちらあ、

四人　びつくりしやした。

お卷　わたしが人が好いと思つて、油を乘せておくれでないよ。

虎　これから見るとおらが嗅あなざあどぢだよ、此間も負けこくつて誰が來ても留守だと言へと言つて、戸棚の内に隱れて居たら、損料屋の婆あが催促に來やあがつて、貸した蒲團が戸棚にあるだらうから出せといふと、嗅あのどぢが戸棚の内にやあ蒲團はねえが、内の人が隱れて居ると言やあがつて到頭引きずり出された。

石　又思ひ附きを言やあがるか。

お卷
白玉　ほゝゝゝ。

お卷　それはさうと白玉さん、お前わたしに何か話しがあるのぢやあござんせぬか。

白玉　昨夜からお世話になり御苦勞掛けるお禮も言ひたし、就ては彼の人の事について、お前の智慧が借りたいゆゑ、ちよいと胸を貸しておくんなさいよ。

お卷　あい、今に家の人が歸つて來たら寛りと話さうから、もうちつと待つておくれ、何にしろ忠誠か

お前を嗅ぎ附けて來たからは、爰に置くのは險難だから、奥の小座敷へ行つておいでよ。

白玉　あい有難うござんす、ほんに廓に居さんした時から何のかのとお前のお世話、考へて見るとお氣の毒でなりませんよ。

お卷　何のお前、人のことは人が世話をしなくつてはいけないわね、まあ何にしろ、人の目褄に掛らぬうち奥へ行つて居なさんせ。

白玉　それぢやあ姉さん、皆さんこれに、

四人　お附き申しませうか。

白玉　罰が當りますよ。（ト端唄にて白玉奥へ入る。）

虎　姉さん彼の妓の情人は何だえ。

お卷　何だか身性の惡い人だよ。

石　そんな者に惚れねえでも、いくらも好い男があるに、

松　違えねえ。

お卷　それはさうと、家の人はだいぶ遲いが、案じる事ぢやあるまいかね。

倉　ちよつと行つて見て來ませうか。

お卷　誰も寄越すなと言ひなすつたから、行つては惡からうよ。
倉　それぢやあ止しにしやせう。
お卷　まあ其處等でも片附けて置いておくれ。
四人　あい〳〵。

ト四人四邊の道具を片附け、箒にて掃きなどして居る、と花道より助六羽織着流し、杢兵衞羽織袴家主にて附添ひ出來り、花道にて、

助六　これは大家樣、大きに御苦勞でござりました。
杢兵　いや此方の不正でない事は此の家主が知つて居れど、何をいふにも近吉の極印のある小判をば遣つたのが其の身の災難、定めて出所があらうから後方までにとつくり調べ御返答に出るがよい。
助六　畏りました、何れ後方までに御返答を致します、それに付き家内の者に尋ねます儀がござりますれば、御内々になすつて下さりませ。
杢兵　承知しました、家の衆には沙汰なしにして置かう。
助六　どうぞ左樣なすつて下さりませ。いやもう一つお願ひがござりますが、お前樣へお預けの身體でござりますが、逃げも隱れも致しませぬから、後方までわたくしの身體をわたくしにお預け下さ

りませ。

杢兵　それも承知しました、逃げ隠れして家主へ難儀を掛るやうな不人情な心でない事は、おれがよく知つて居るゆゑ、寛りとさつしやい。

助六　左様なら、これでお別れ申します。

杢兵　これ、正直の頭には神宿るといふから、必ず案じぬがいゝぞや。

助六　有難うございます。

杢兵　そんなら助六どの、

助六　大家様、

杢兵　後に逢ひませう。

ト右の鳴物にて杢兵衛花道へ引返して入る、助六思入れあつて門口へ來り、

助六　お巻や、今歸つた、（ト内へ入る。）

お巻　おゝ助六どの、歸りなさんしたか、今も噂をして居た所でござんした。

虎　もし、親分案じ切つて居りましたが、

四人　何でございますえ。

助六　なに、詰らねえ喧嘩の事よ、決して案じるにやあ及ばねえ。
石　そりやあようござりました、案じるより産むが易いとは、
四人　此の事だ。

ト奥より三吉同じく若い者の打扮にて出來り、

三吉　親分何でもなくつて、ようござりましたね。
助六　おゝ三吉、手前も家に居たか。
三吉　祭の積金を持つて來やしたから、歸りなさるを待つて居やした、（ト腹掛けの隱しより二十兩包を出し、）親分二十兩預つておくんなせえ。
助六　（思入れあつて、）その金を預つちやあ、何しろ預りものは面倒だ、手前の方へ置けばいゝに。
三吉　なに、わつちらの方へ預つて置くとめりが立つてなりやせぬ、どうぞ預つておくんなせえ。
助六　それぢやあおれが預つて置かう、（ト助六取つて懷へ入れる。）
虎　おゝ、さつぱり忘れて居た、親分新場の伯父さんの所から鰹が來やした。（ト盤臺の鰹を見せる。）
助六　むゝ、こりやあいゝ鰹だ、刺身にして一杯やるがいゝ。
石　そりやあ有難うござります。

松　實は先刻から喉がぐびぐびして居ます。
倉　意地の穢ねえ野郎だな。
虎　先づ一本刺身に作つて、一本は漬けこんで置かうか。
石　漬け込むなら首を落して置きなよ。
三吉　此の野郎も物言を知らねえ奴だ、首といはずと頭と言へ。
石　首も頭も同じ事だ、どうで落さにやあならねえ首だ。
三吉　えゝ、まだ首だといやあがるか。
石　首だから首だと云ふのだ。
トこれを聞き助六、心に掛る思入れ。
助六　えゝ喧しい、奥へ行け。
石　それ見ろ、叱られた。
三吉　手前が悪いからだ。
トわやわやと三吉先きに、四人鰹を持つて奥へ入る。お卷助六の顔を見て、
お卷　もし此方の人、お前どうぞしなさんしたかえ。

助六　いや、何うもしやあしねえ。
お卷　それでも、何だか濟まぬ顏ゆゑ、
助六　おれの顏のむづかしいのは、産れ附きだ。
お卷　それでは何ともないかえ。
助六　何ともねえ。
お卷　何ともなくばお飯を上んなさんせぬか。
助六　いや、まだ飯は喰ひたくねえ。
お卷　それでは今の初鰹で一口呑みなさんせぬか。
助六　いや、酒も呑みたくねえ。
お卷　それでは肩でも揉んであげようか。
助六　いや、肩も張らねえ。
お卷　それではちつと橫になんなさんせぬか。
助六　いや、まだ睡くねえ。
お卷　それでは、あの、（ト言ひかけるを、）

助六　えゝ、鬱陶しい默つて居てくれ。（ト疳に障りし思入れ。）
お卷　はい、
　　トお卷心得ぬ思入れ、合方きつぱりとなり、奥より新兵衞着流しにて、煙草盆を提げ出來り、
新兵　助六どの、歸られたか。
助六　今しがた歸りました。
新兵　聞けば案じる事でもなかつたさうな、樣子を聞いて安堵しました。（トよき所へ住ひ。）いやも、今更言はいでもの事ぢやが、娘の緣で此の間より此方の所へ引取られ、擔ぎ商賣もぱつたり止め、神佛のお詣りや講釋でも聞くより外何の用もない樂隱居、これといふも此方のお蔭、禮は詞に盡されぬわいの。
助六　何のお前、女房の親なら私が爲にも親、子が親を過すのは當りまへ、禮を言ひなさるには及ばねえ。
新兵　それぢやというて、あんまり結構過ぎるゆゑ、
お卷　ほんにお前にこそ言はね、朝晩箸の上げ下しに禮をいうて居なさんすわいな。
助六　そのやうに悅ばつしやる父さんに、苦勞をば、

新兵お卷　え、（ト三人思入れ。）

助六　なんの、其の禮にやあ及ばねえ、したが、いつぞや父さんから借りた五十兩、返さう〳〵と心には決して忘れやあしねえけれど、扨人交際をするものは、入舟あれば出舟ありで、手に金のあつたことがねえ、もうちつと待つておくんなせえ。

新兵　何の〳〵、あの金は此方にわしがやつた心、返されると却つて困る。あれは娘が持參と思つて必ず苦勞にさつしやるな。

助六　いや、そりやあさうでもござりませうが、何の仲でも金銀は堅くしにやあなりませぬ。

新兵　えゝ他人がましい事を言はつしやるな。

助六　それに附けて父さん、今更聞かねえでもの事だが、あの五十兩の金は、お前どうして持つて居なすつた。

新兵　え、（トぎつくり思入れ。）さあ、あの五十兩の金は、おれが在所に殘して置いた、田地を賣つた金でござるわいの。

助六　へゝえ、田地を賣んなすつた金かえ。

新兵　おいのう。

助六　あの、いよ〳〵、
新兵　むゝ、何の嘘を吐かうぞいの。
助六　それでわしも落附きました。
新兵　落附かれぬは、何でその樣に、
助六　これにはちつと、
新兵
お卷　え、
助六　（氣を替へて、）あゝ金は大事だ、お卷やこれを預つて置いてくれ。
　　ト以前の二十兩の金をお卷に渡す。
お卷　あい、しつかりと仕舞つて置かうわいな。
助六　どれ、奥へ行つて足でも伸ばさうか。
　　ト唄になり、助六思入れあつて奥へ入る。新兵衞お卷顔見合せて、
新兵　娘、助六どのは何ぢややら濟まぬ顔附ぢやないか。
お卷　さあ常に替つていら〳〵と、何か樣子のある事でござんせう。
新兵　案じられるは、もしや金の、

お卷　え、
新兵　いやさ、其の金をよう仕舞うて置くがよいぞや。
お卷　あい〳〵。
　　トお卷戸棚の內の用簞笥へ入れる。奥より以前の三吉出來り、
三吉　姉さん用がなけりやあ白玉さんが、ちよつと逢ひ度いと言つてたぜ。
お卷　おゝ、あの妓にもまだお飯を喰べさせなんだ。
三吉　何ぞわつちが拵らへようか。
お卷　なに、それには及ばないから、父さんもお前もひよつと吉原から人が來ると惡いから、入口を氣を附けて下さんせ。
新兵　おゝ、それは隱居仕事に丁度よい。
三吉　誰もやらねえから、お案じなさんな。
お卷　きつと賴んだぞえ。
三吉　合點でござります。
お卷　どれ、奥へ行つて來ようか。

トお卷奥へ入る。花道より傳次剃立て頬冠り尻端折り草履にて出て來り、花道にて向うだなといふ思入れあつて、直に門口へ來り、

傳次　はい、御免なさりませ。

三吉　あい、何だえ。

傳次　助六さんのお家は此方でござりますか。

三吉　(門口へ來り、)あい、此方でござりますが、何處から來なすつた。

傳次　わつちは本所の者でござりますが、此方のお家に、押上の新兵衛さんといふ、白酒を賣つて歩きなすつた六十ばかりの方が、おいでなされますかえ。

三吉　おゝ、そりや家の姉さんのお父さんだ。

新兵　わしを尋ねて來なすつたは、何方だね。

傳次　(見て、)おゝ、其處においでなすつたか。

新兵　何だか知らぬが、まあこつちへ入んなせえ。

傳次　左様なら、御免なせえまし、(ト傳次内へ入りよき所に住ひ、)お爺さん、いつも達者でようござりますね。

新兵　あい、仕合せと達者でござります、して此方さんは、ついぞ見た事もないお人だが、何處からござつたのぢやな。

傳次　それぢやあ忘れなすつたかね、わつちあ先月甲子の晩に而も九ツ前であつたが、山下の袴腰でお前の白酒を呑んだものでござります。

新兵　おゝ、夜目で顔は知らなんだが、そんならお前があの晩に、白酒を呑んだお人であつたか。

傳次　あい、二十四文の其のとこへ、百錢を一枚置いて行つたはわつちさ。

新兵　さう云ひなされば覺えがある、よう尋ねて來て下すつた。

三吉　（煙草盆を出し、）まあ一服おあがんなせえ。

傳次　いえ、お構ひなさいますな、（ト傳次叺煙草入を出し煙草を喫みながら、）いやお前の家が知れねえで
　わつちやあどんなに捜しやしたらう、知つての通りあの晩にお手に遭つて直ぐ送られ、既に切られて仕舞ふ所をお上といふものはお慈悲深いものさ、金を持つて居ないばかりでまた首を繋いで下すつて、一昨日娑婆へ出て來やしたが、お前に逢はにやあ都合が惡く、先づ山下へ行つて聞いた所が定見世でねえからどうも分らず、それから緣日商人や香具師の仲間を聞いた所が、誰れ一人知つて居るものなく、こいつあ所詮知れねえ事と思ひの外、三間町の道具屋の見世に出て居た

お前の行燈、手習師匠で細く書た御家流の山川白酒、漸く手掛りに取附いて其の道具屋で買先は何處と聞いたら押上の、土手の茶見世で新兵衞といふ人から買つたと詳しく知れ、直ぐに其の足で押上へ行き、茶見世仲間で聞いて見りやあ、花川戸の助六さんといふ若い者頭の所に居なさると教へて貰つて尋ねて來ました、あの行燈が提灯屋や看板書でねえばかり、お前の居所が知れたのさ、おつな所から足が附くものさね、もし、御無心ながらお茶を一つ下さいましな。

三吉 ちつとぬるかあねえか知らぬ。(ト三吉茶を汲んで持つて來る。)

傳次 いいえ、ぬるい方はようござります。

ト傳次ぐつと呑み好い心持ちだといふ思入れ、新兵衞惡い奴が來たといふこなしにて、

新兵 それは方々と尋ねさつしやつて、氣の毒なことであつたが、そのやうにわしを尋ねるのは、何の用があつてぢやの。

傳次 用といふは外でもねえ、あの晩わつちが捕られる時、五十兩持つて居やしたが、金があつちやあ拔けられねえゆゑ、お前の桶の中へ打ちこんで置いた、五十兩のあの金を、どうぞ返してお貰ひ申したい。

新兵 これ〳〵若いの、そりや何を言はつしやる、わしが桶の中へ五十兩入れて置いたの何のと、此方

に覺えがござらぬぞ。

傳次　いやあ、あの晩お前が居なさらにやあ、

(思入れあつて、)何もそんなにしらを切つて隱しなさる譯はねえ、まるで返してくんなせえと無面目な事

溝の中へでも捨てにやあならねえ持つて行けねえ五十兩、

をいふのぢやねえ。斯ういふ譯だ聞いてくんねえ、わつちも今度斬られる所を不思議に脫れて出

て來たは神佛のお助けゆゑ、惡い心を思ひ切り今度といふ今度は堅氣になる氣で、甲州に身寄り

があるからそれを賴つて行く積りだが、何にしろ路用はなし、行き〳〵早々厄介にもなられねえ

ゆゑ、十と二十の金は持つて行かにやあならねえ、五十兩が三十兩二十兩でも不承せうから、常

談を言はねえで返しておくんなせえ。

新兵　そりやもう持つてさへ居ることなら、直ぐにお前に返しますが、何をいふにも其の金は、さあ無

いによつて、預つた覺えはござらぬわいの。

ト新兵衞口籠り言譯なす、三吉之れを聞き前へ出て、

三吉　もし、どういふ間違か知らねえが、此のお人が人の物を一文半錢掠めるやうな、そんな曲つた人

ぢやあねえ、何處からお前來たか知らねえが、爰は花川戶の助六の家だよ、下手な事を言ひ出し

て、後で後悔しなさんなよ。

傳次　なんの後悔するものか、助六さんの家と知つて來たのだ、假令どんないゝ男でも強請騙りに來やあしめえし、筋道を持つて來るに怖えことがあるものかね。

三吉　強請騙りに來ねえから親分が怖くねえ、あんまり強請騙りでねえこともあるめえ、覺えもねえ事を言やあ強請だ。

傳次　わつちが強請だとえ。

三吉　知れたことだ。

傳次　おゝ、好い肩書を附けてくんなすつた、強請なら強請のやうに突き出してくんねえ。

三吉　突き出さねえでどうするものだ。（ト三吉立ち掛るを、新兵衞留めて、）

新兵　これはしたり三吉どの、腹も立たうが待たつしやい。何を隱さうわしが惡い、いやさ相手が惡い、疵でも附けては濟まぬわいの。

三吉　何のわつちが一緒に入りやあようござります、打捨つておきなせえ、癖になりやす。

新兵　はて扨短氣な、待てというたら待たつしやいな。

三吉　えゝ、忌へましい、此の手がむづ〳〵すらあ。（ト三吉下に居る。新兵衞思入あつて、）

新兵　これ若いの、今もわしがいふ通り、何を言うても轉んだ時、桶を轉覆したゆゑ何處ぞへ金が、

さ、飛んだものでござらうわいの。

傳次　むゝ、それぢやあどうあつても知らねえと、言ひなさるのだね。

新兵　(術なき思入れにて、)さ、氣の毒ながら知らぬわいの。

傳次　(思入れあつて、)見掛けに寄らねえ太え親仁だな、覺えがねえと言張つてもでんどへ出されぬ九十兩、高をくゝつて踏みなさるのか。

新兵　何しにそんな事を、

傳次　(尻をまくりきつとなり、)いや、さうだ〳〵、踏まれるなら踏んで見ろ、この金がねえばつかりで首を繋いで出て來たが、覺えがねえとしらばつくれ物相飯の味を知らねえ素人に白痴にされちやあ、そんならさうかと引込めねえ、滿更行きやあ羽目通りで窮屈な目もしねえけれど、譬へにも云ふ浮世の地獄、見る目嗅ぐ鼻の目を忍び逃げつ隱れつするものゝ、斯うなる日にやあ熱湯の釜の中でも飛び込んで、業の秤や淨玻璃の鏡にかけて洗はにやあ、惡事に太つた蟲がきかねえ、見かけは苧殼を杖にする餓鬼を見たやうな小野郎だが、言ひ出すからは閻魔でも後へは引かねえ牛若傳次、片ツ端から抱き込むぞ、晒布を切つて覺悟しろ。

トきつと見得、奥より以前の乾見四人出來り、

四人　何だ〳〵、いけ騒々しい、どうしたのだ〳〵。

三吉　此の野郎は強請に來たのだ、敲きしめろ〳〵。

四人　合點だ〳〵。（ト皆々立掛る。）

新兵　あゝ、これはしたりどうしたものだ、誰ぞ留めて下され〳〵。

傳次　さあ、締るなら締めて見ろ。

ト屋臺雛しになり、尻を捲り中央に胡座をかく、皆々捨てゼリフにて立掛る、此の時奥より助六出で、

助六　やい〳〵此奴等あ何を騒ぐのだ、一人ばかりを大勢でみつともねえ、靜にしろ。

三吉　それだつて此の野郎は、言掛けをしやあがる、

皆々　强請でござります。

助六　何でもいゝから、靜にしろといつたら、靜にしろえ。

皆々　でも打捨つて置くと癖になりやす。

助六　えゝ、おれが言ふことをきかねえか。

皆々　へい。

ト皆々を下にゐる。此の内傳次素知らぬ振にて、足を搖つて居る、助六傳次を見て、

助六　傳次さんとやら、ちよつとお目にかゝりたい。
傳次　わつちにかえ。（ト兩人思入れ。傳次膝を直す。）
助六　初めてお目に掛るが、わしやあ花川戸の助六といふ者でござります。心安くしておくんなせえ。
傳次　いえ、お近附きにやあなりませんが、お顏はよく知つてをります、わつちやあ牛若傳次といふ稼人でござります。
助六　かねて名前は聞いて居ます、扨詳しい譯は知らねえが乾兒の奴等が今の粗相、わしに免じて了簡してくんなせえ。
傳次　親分の云ふ事を否と云つちやあ濟まねえが、どうも了簡し難うござります。
助六　そりや又何故に、
傳次　譯を話しやあ長いこつたが、其處に居なさるおとつさんに、わつちやあ用があつて來やしたのを乾兒の衆が強請だと惡名を附けなすつたから、突き出して貰はにやあ了簡がなりませぬ。
助六　そこが物の間違ひゆゑ、乾兒に代つてわしが詫らう、不承だらうが傳次さん、野暮を言はずにくんなせえな。
傳次　お前さんにさう言はれると實にわつちは苦しいが、堅氣なものなら好いけれど知つての通りの稼

人、巾着切りでござりますから、直にこれがぱつとして強請に行つたの騙りに行つたのと悪名の附くのは知れたこと、喰へこんだ其の日にやあ今度は首のねえ身體、とても死ぬなら一人と二人連れを抱き込み花やかに、男と云はるゝ爰の家から送られてえがわつちの願ひ、野暮な事を言ふやうだが、どうも不承がなり難い。

助六（これにて思入れあつて、）それぢやあ、これ程助六が手を下げて頼んでも、肯かねえといふのだの。

傳次　知れたことさ。

助六　いゝいけふざけた事を吐かしあがるな。（ト助六きつと思入れ。）

傳次　どうしたと、

助六　かう見た所が牛若かまだ年若な青二才、どこやら師匠の面影に似た顔附のなつかしく、大目に見るも御贔屓のいづれも樣が傳次をば、相手とするは助六もおとなげねえとのお叱りを、かへり三升に我慢をしたが、上方からの頼み故、人に兎やかう言はれぬ中、一番言はやあならねえぞ。

ト助六立上り片腕を捲りきつと見得、この時奥より白玉走り出來り、助六に縋りて、

白玉　あゝもし助六さん、まあ〳〵待つて下さんせいな。これ傳次さん、お前まあこゝの家で大きな聲をしては濟まぬぞえ。

傳次　なんで濟まねえといふのだ、（ト白玉と顏見合せびつくりなし、）や、手前は白玉、どうして爰に、

白玉　わたしやお前が出たと聞き、逢ひたさゆゑに廓を脱け、昨夜から姉さんのお世話になつて爰の家に、

傳次　むう、その姉さんとは誰がことだ。

白玉　あの花魁の、揚卷さんさ。

傳次　一昨日娑婆へ出たばかり、まだ何にも聞かねえが、それぢやあ三浦屋の揚卷さんが、

白玉　助六さんのお上さん、（ト此の時奥よりお卷出來り、）

お卷　そんならお前の間夫といふ、傳次さんとは、このお方かえ。

傳次　（お卷を見て、）元服をしなすつたので、さつぱりと見違へました。

白玉　わたしのお世話になつて居る所で、大きな聲をしては濟まぬぞえ。

傳次　それだつておらあ、知らねえものを。

白玉　えゝ知らないで濟むかいなあ。さあ、尻もおろして下に居やしやんせ、もし、ちやんと坐つて、えゝ詫りなさんせえなあ。（ト傳次を無理に押へ附る。是れにて傳次思入れあつて、）

傳次　こいつあ、詫らにやあならねえ。もし親分、斯ういふ譯とは露知らずお前さんに突つ掛り、わつ

ちやアまことに面目ねえ、もし、此の通り手を下げて詫ります、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

ト傳次手を突いて詫る、助六思入れあつて、

助六　男は當つて碎けろと、さう其方から折れて出りやあ、なにしに瘤を出すものだ。

傳次　それぢやあ了簡しておくんなさるか。

助六　しなくつてどうするものか。

傳次　そりやあ有難うござります、濟まねえことだと思つたら、びつしよりになりました。もしおとつさん、お聞きなさる通りの譯だから、思ひ過しは堪忍して下さいまし。

新兵　いやも元の起りは私からして、ひよんな事になつたゆゑ、どうせうかと思うたが白玉どのゝ居たばかり、此の場は濟めど濟まぬは此の身、いやさ、此の身も安堵しましたわいな。

傳次　皆さん方にも濟まないが、了簡しておくんなせえ。

三吉　何の了簡するのしねえのと、斯うなる上はどうでもいゝ。

虎　ほんに初手から、白玉さんの情人と知つたら、なあ石や、

石　さうよ、こんな間違ひにもなるめえものを、

傳次　みんな間違ひはこんな事さ。そりやあさうと花魁は、願ひ通りになんなすつてお目出度うござり

ます。

お卷　傳次さん悅んで下さんせ、漸うわたしは心の儘、どうぞ早く白玉さんもお前と一つになるやうに、

白玉　肯りたうござんす。（ト此の內助六思入れあつて、）

助六　お卷や、先刻三吉から預つた積金を、ちよつと出してくれ。

お卷　あい、（ト簞笥より出す。）

助六　いやなに、傳次さん、樣子は奥で聞いて居たが、五十兩の經緯はどういふ譯か白酒の、一荷に擔ふ親父とお前、何方をどうとも云はぬが山川、水に流してくんなせえ。其の替りにやあわしが又甲州へ行く路用の金は餞別に進ぜませう。少しばかりだが受けて下せえ。

ト金包みを出す、傳次思入れあつて、

傳次　思召しは有難いが、お前さんに此の金をお貰ひ申しちやあ濟みませぬ。

助六　はて、そんな野暮を言はねえで、器用に受けてくんなせえ。

傳次　それだといつて、どうもこりやあ、

お卷　さうお前が言ひなさると、主の心が濟まぬほどに、

三吉　入らざるお世話に出るやうだが、こりやあ受けて、

皆々　置きなせえ。
傳次　でも、此の金は、
助六　受けぬは但し不足かえ。
傳次　なんのつけに、
助六　不足でなくば受けて下せえ。
傳次　むゝ、それぢやあお貰ひ申します、(ト金を取つて明けて見て、)こりやあ小判で二十兩、こんなにやあ入りませぬ。
助六　はて餘計あつても邪魔にもなるめえ。江戸と違つて旅先きぢやあ、一兩も多いがいゝ。
傳次　親分何も申しませぬ、有難うござります。(ト傳次金を頂く、此の内新兵衞術なき思入れにて、)
新兵　あゝ私ゆゑ大枚二十兩、金を此方に出さしては、
助六　あこれ、父さん何も言ひなさんな。
傳次　お志しの此の金で、これで甲州へ巣立が出來る。
白玉　行くならお前、わたしも一緒に、
お卷　(これを聞き思入れあつて、)いや、一緒に行くのは惡うござんす、今鵜の目鷹の目に廓の者が端々に

網を張つて待つ最中、連れ立つて行く時は直ぐに捉へられるは知れた事、まあ半月と一月はやつぱり江戸に隱れて居て、よい時分に迎ひをば寄越して貰ひなさんせいな。
傳次　なるほどこりや姉さんのいふ通り、今行くのは險難だ、とてもの事の厄介ついでに、もうちつとお世話になりやれ、その中おれが迎ひに來よう。
白玉　それならきつと來て下さんせ。
傳次　手前は兎もあれ、親分や姉さんの前へ對して、此の儘捨てゝ置かれるものか、親分善は急げといひますから、わつちはもうお暇いたします。
助六　それぢやあ、お前直ぐに立つのか。
傳次　これから友達の所を二三軒廻つて、明日の朝暗い中に立ちます。
助六　まあ、何はなくとも身祝ひだ、
お卷　一口呑んで行きなさんせいな。
傳次　白玉を迎ひに來た時、寛りと御馳走になりませう。
新兵　そんならもう行かつしやるか。
三吉　飯でも喰つて、

四人 行きなさりやあいゝに。
傳次 有難うござりますが、喰べ立ちぢやあねえ、貰ひ立ちと致しませうて
白玉 傳さん、居所が極つたら、早く迎ひに來ておくれよ。
傳次 來るといふ事よ、手前小遣はあるか。
白玉 姉さんにお貰ひ申したよ。
傳次 それぢやあ親分、お暇いたします。
助六 江戶へ出て來たら、直來ねえよ。
傳次 有難うござります。姉さん、何分白玉を、
お卷 わたしがしつかり預かりましたよ。
傳次 左樣ならおとつさん。皆さん、御免なせえ。
新兵 おゝ、機嫌よく立たつしやりませ。
皆々 早く出て來なせえよ。
傳次 えゝ、來月は出て來ます。(ト門口へ出る。白玉送つて行き)
白玉 あこれ、傳さん、(ト囁き)いゝかえ。

傳次　いゝよ。(ト行きかけるを、)
白玉　あこれ、傳さん、
傳次　何だ、
白玉　いゝかえ、
傳次　いゝよ。(ト又行きかけるを、)
白玉　あこれ、傳さん、
傳次　えゝ、好い加減にしねえかえ。
　　ト唄になり、傳次思入れあつて花道へ入る。
白玉　あれさ、お待ちといふに、
お卷　これはしたり、門へ出て、人に見られたらお前の身の上、ちと嗜んで下さんせいな。
白玉　ほんに、さうでござんしたな。
助六　これ手前達は、獅子臺へ提灯でも點けねえのか。
三吉　あい、今點けに行く所さ。
助六　口の減らねえ、早く行かねえか。

三吉　あい〳〵、さあみんな來て下つし。
四人　合點だ〳〵。
　　ト三吉先きに四人下の方へ入る。此の中新兵衞俯向きじつと思入れ、助六見て、
助六　父さん、お前何うぞしなすつたか。
新兵　さあ、どうも此方に面目なさに、
助六　そりや、何ゆゑあつて、
新兵　此方に貸した五十兩、何を隱さう彼の金は、
助六　傳次の金かえ、
新兵　え、
お卷　そんならもしや、
白玉　傳次さんの、
助六　いやさ、でんじの金といつたのは、在所に殘つた父さんの田地を賣つた五十兩、出所慥な上からは何面目ないことがあらう。
新兵　あ、何にも言はぬ、

助六　あゝこれ、壁に耳ある世の中ゆゑ、言はず語らず此方は奧へ、
新兵　そんなら聟どの、
助六　お卷や、足でも叩いて上げろ。
お卷　あい合點ぢやわいな。
　　ト唄になり、新兵衞お卷思入れあつて奧へ入る。白玉間の惡きこなしにて、
白玉　どれ、わたしも奧へ、（ト立上がるを、）
助六　白玉待ちやれ。
白玉　何ぞ用がござんすかえ。
助六　むゝ、用があるから爰へ來やれ。
　　ト媚いたる合方になり、白玉助六の側へ來り。
白玉　助六さん、用とは何でござんすえ。
助六　さう眞面目に言はれては、おれが用が言難い。
白玉　何だか早く言つておくれな。
助六　それぢやあ思ひ切つて早く言はうが、これ白玉、今日よりおれの女房に、なつてくれる氣はねえ

かつ

ト思ひ切つて言ふ、白玉びつくりして、

白玉　ほゝゝゝ、助六さんお前醉つて居なさんすか、お卷さんといふれつきとしたお上さんがありながら、好い加減に常談をお言ひなさいよ。

助六　なぜ、女房があつちやあいけねえのか。

白玉　それだといつて馬鹿らしい、吉原で一と云つて二のない花魁を女房にしながら、私のやうな數にもならない、誰が新造に惚れるものかね。

助六　そりやあ人の好き〳〵だ、おらあぜんてえ花魁より新造の方が好きだから、お卷を出して、牛を馬に乘り替る氣だ。

ト白玉へよろしく思入れ、白玉は常談だといふ思入れにて、助六の顏を見てせゝら笑ひ、

白玉　死ぬ死なうといふ花魁を、お前出し得るものかね。

助六　出したらおぬしやあ女房になるか。

白玉　あゝなりませうとも〳〵、男なら出してお見。(ト助六の顏を指で突く。)

助六　出さねえでどうするものだ。

ト此の以前より上手の障子を明け、お卷窺ひ居て腹の立つ思入れにて、この時つか〳〵と前へ出て白玉を引き退け、まん中へ割つて入り、

お卷　何科もない女房を、出されるものなら出して見なさんせ。

白玉　あゝこれ、姉さん、こりや常談でござんすぞえ。

お卷　いゝえ、常談とは言はさない、私を出したら女房にならうと、よう大それた事を言ひなさんしたの。

白玉　えゝ、まだ疑うて居なさんすか、わたしには傳次といふ男のある身でござんすぞえ、殊にはこれまで大恩受けしお前の男の助六さん、何でわたしが惚れませう、つい常談に言つたのをお前が實と思うては、わたしや濟まない濟みませぬ。これ助六さん、お前言譯をして下さんせいな。

助六　なんで言譯をするに及ぶものか、もう斯うなつたら仕方がねえ、お卷を出すから女房になれ。

白玉　あれまあ、そんな事を言つて、わたし一人を困らせて遊びなさんすのか、憎らしい。

ト白玉腹を立て助六を抓る。

助六　あいたゝゝゝ、お主に抓られるのは、お卷に擦られるよりか嬉しい。（ト手を取る。）

白玉　えゝも、常談も好い加減にしなさんせいな。

お卷　白玉さん好い加減にちやらをお言ひよ、是れが生娘か何ぞなら常談とも思はうが、巾着切を情人に持つ盗み心のあるお前、随分人の男をば盗み兼ねまい日頃の氣性、斯ういふ事とは露知らず、足らぬわたしを姉さんと慕ふ心が可愛さに、ほんに眞身の妹とも思つて先刻引き留めたが、今となつては腹が立つ、飼ひかふ犬に手を喰るゝ譬への通りのお前は犬、恩を知らぬは畜生にも遙かに劣りし人でなし、見下げ果てたる心ぢやなあ。

白玉　姉さんお前も分らない、常談ぢやとこれほど言ふに、聞分けては下さんせぬか。

助六　これ〳〵白玉、二言目には常談々々とそんなに弱い氣を出しちやあ、女房を去らして跡へは入れねえ、これが世間にねえ事ぢやあなし、往々ある事だ、氣を揉まずと落附いて居るがいゝ。

トこれにて白玉心得の思入れにて、

白玉　え、わたしや今まで常談と思つて居たが、そんならほんまに、

助六　手前がお卷を出したらば、女房にならうと言つたからだ。

白玉　えゝゝゝゝ、そんならそれを實と思うて、こりや何うしたらよからうぞいなあ。

ト白玉はハアヽと泣き伏す。

お卷　今日の今までそのやうな邪慳な人でなかつたが、如何に思案の外ぢやとて、何科あつてわたしを

ばお前は出す氣でござんすぞ。

助六　（不便なといふ思入れあつて）さあ、亭主を大事になに一つ、言分のねえお主の身の上。（ト氣を替へ）それが第一おれが厭だ、如何に今時の女郎だとて、女郎臭い事はちつともなく、きりゝしやんと後帶、朝は人より早く起き素人に勝つて仕事もし、就中人に世辭の好いのが、それがおれの氣にくはねえ、女郎なら女郎臭く亭主の帶を卷帶に、意氣地もなく着物を引き摺り、朝は人より遲く起き、仕事と云つたら竪針にずぶ〳〵縫ふより出來ねえやうな、世辭の惡い女が好きだ、去られる科は女一通り出來ねえ事のねえのが科だ、去狀書いて遣らうから、親父を連れて出て行きやれ。

お卷　そりやお前あんまりぢや〳〵、如何に男の言ひたいがいとて、そんな無理な事があるものかいな、假令出て行けと言はしやんしても、わたしや出て行く事は厭ぢや〳〵。

助六　厭だといやあ叩き出しても、出さにやあ置かねえぞ。

ト有合ふ硯箱を取つて去狀を書きにかゝる、白玉其の手を留めて、

白玉　もし助六さんお前は氣でも違はしやんしたか、何科もない姉さんに去狀つけて去らうとは、そりや胴慾でござんすぞえ。

助六　さ、氣も違はねば、此のやうな、いやさ、これもみんなおぬしの爲め、邪魔をせずと退いて居ろ。

白玉　いえ〳〵、それを書かしてはわたしがどうも濟まぬわいな。

ト白玉留めるを助六振拂ひ書きかける、ちよつと立廻りあつて白玉を膝に敷き、トゞ去狀を書きしまふ。

助六　さあこれを持つて出て行け、（ト去狀を打ちつける。）

お卷　このやうなものは入らぬわいな。（ト投げ返す。）

助六　假令入らうが入るまいが、去狀渡しやあ構はねえ。さあ白玉此方へ寄れ。

白玉　いえ〳〵、わたしや。（ト逃げに掛るを捉へて、）

助六　えゝ、來いといふに、

ト助六厭がる白玉の袖を捉へる、お卷これにてくわつと急き立ち、

お卷　現在女房の見る前で、餘りといへば腹の立つ、（ト助六にむしや振り附くを、）

助六　えゝ、薄汚ねえ、寄りやあがるな。

ト突き倒す、此の以前より門口へ三吉出て窺ひ居て、つか〳〵と內へ入り、お卷を抱き起し、

三吉　樣子は表で聞きました、嚥腹が立ちませう、尤もだ〳〵。（ト助六の前へ行き、）これ親分、何科もねえ姉御を去り、牛若小僧傳次といふ惡足のある白玉、言はずと知れた此方は間男、耻をかきた

くつてかく氣だか、見下げ果てたる此方はなあ。

助六　えゝ、しやらくせえ事を吐かすな、そりやあ牛若傳次が惡足でも、まだ年季のある勤めの身、ふッつりとも言はしやあしねえ、殊にやあ先刻二十兩遣つて置いたも下心、七兩二分と相場を立てりやあ、二度間男をしてもいゝのだ、出過ぎた事を吐かしやあがるな。

三吉　えゝ、呆れ果てたことだなあ。

助六　さあ、目障りだ早く出て行け。

お卷　そんなら、どうでも、

助六　厭になつたら仕方がねえ。（ト助六顏をそむけ、愁ひを隱す。お卷きつとなつて、）

お卷　えゝお前はなあ、（ト胡弓入りの合方になり、）今更いふも愚痴ながら昨日や今日の仲ではなし、まだ三浦屋に居た折より人に增して親切な心に惚れて末々は、どうぞ女房になりたいと、神や佛へ願掛けし念が届いて夫婦となり、父さんまでも引取られ、親身も及ばぬお前の世話、その優しさに引替へて愛想づかしの邪慳の詞、獨身ならば男に嫌はれ生きて居る氣はなけれども、今淵川へ身を投げて私が死んだことならば、何樂しみに父さんが生きながらへてござんせう、其の上ならずお前の父御非業の死を遂げ、明暮に悔しいと云ふ其の舌も乾かぬ中に色狂ひ、男を磨く心なら

人の歎きを思ひ遣り、得心づくで白玉さんと睦じう、女房はほんの表向き内證は下女とも端女とも思うてどうぞ家に置き、生先きのない父さんを、どうぞ見捨てずに下さんせ。悋氣嫉妬を打ち捨てゝ父さん大事に此のお頼み、愛想のつきた女房でも少しは不便と思ふなら、頼みをかなへて下さんせいなあ。

トお卷手を合せて頼む。助六術なき思入れ、白玉泣き伏し居る。上手の屋體より新兵衞窺ひ涙を拭ひ不便だといふ思入れ。下手に三吉手を握り詰め、悔しき思入れ。助六お卷を見てほろりとなし、

助六　えゝ、すりやそれ程までに、(ト新兵衞三吉と顔見合せ、氣を替へて、)其の親孝行がおらあ嫌えだ。厭だと思つたればすることなすこと言ふことが、一々おれが蟲にさはらあ。お卷も去りやあ夫婦でなし、縁が切れりやあ舅も他人、又三吉もしやらくせいおれに詞を返す上は、親分乾兒は今日限りだぞ。(ト助六思入れあつて言ふ。)

三吉　何科もねえ姉御を去り、道に缺けた助六どん、其方で乾兒にしようと云つても、此方で親分にしやあしねえ。

助六　そいつは丁度幸ひだ、うぬも一緒に出て行きやれ。

三吉　行かねえでどうするものだ。

お卷　すりやこれ程に譯言うても、家に置いては下さんせぬか。
助六　面を見るのも胸が惡い、片時、家に置きやあしねえぞ。
白玉　えゝ、其のやうな邪慳なことを、
助六　言ふのも手前が可愛いゆゑ、（トいやがる白玉の袖を捉へる。）
お卷　餘りといへば、（トお卷立ちかゝるを上手より新兵衞出で、お卷を留め、）
新兵　おゝ娘腹の立つのは尤もだ、樣子は殘らず奧で聞いた、日頃の氣性に打つて替り、さりとは無慈悲な助六どの、斯ういふ人とは露知らず緣を組んだが此方の過り、厭とあるならこれまでの緣とあきらめ出てしまやれ。
お卷　それぢやというて、わたしには、
新兵　さゝ、其方に去られる科はないが、俄に心の替りしは、正しく金の、
助六　や、
新兵　いやさ、豫てあれなる白玉どのと、譯があつての此の離緣。
白玉　いえ〳〵、さうでは、
新兵　はて、假令あらうがあるまいが、その言譯は後でのこと、片時家へ置きともない、助六どのゝ心

の中推量なして出て行きます。さあ、おれも行くから其方も來やれ。
お卷　そんならどうでも、
新兵　否でもあらうが、嫌はれたら長居するだけ其の身の恥、呉れるといふなら去狀も、貰つて行くが後日の爲め、
お卷　いえ〳〵わたしや去狀を、貰ふ覺えは、
新兵　さゝ、其方がなくば、去狀はおれが預つて置かうわい。（ト落ち散りある去狀を取り、懷へ入れ、）扨助六どの、これまではいかい世話になりました、恨みは恨み禮は禮、向後他人となる上は明日が日金の、さあ、どんな事が起らうとも、此方に難儀はもう掛らぬ、安堵してござるがよい。あゝさりとは侠客を立つる程の、心に似合はぬ助六どの、
ト新兵衞は助六が金の事ゆゑ、離縁すると云ふ思入れ。
助六　その心とは裏表、
新兵　や、
助六　いやさ、表向にて、女房白玉、
白玉　なんでわたしが、（と行かうとするを、）

助六　えゝ、默つて居やれ。（ト白玉を押入へ入れ、錠をおろす、お卷思入れあつて涙を拭ひ）

お卷　助六どの、わたしやもう出て行くが、これまで家の事というては何にも知らぬお前ゆゑ、さぞや後で困らしやんせう、餘所行きの着物や羽織は奥の簞笥にござんすぞえ。親の譲りの印籠にお前の好きな尺八は、用簞笥の深い抽斗、又脇差はその戸棚、就中言はねばならぬのは、明日は大事の親御の命日精進を忘れなさんすな。（ト思入れあつて、）えゝ、出される家へこんな事、どうなと勝手にしなさんせいな。

助六　勝手にしねえで、どうするものだ。

新兵　そんなら助六どの、これが顔の、

助六　や、

三吉　二度と再び見やあしねえぞ。（ト皆々立ち上る。助六見て、）

助六　是れからしつぽり白玉と、あゝ、明日聞いたら、

三人　え、

助六　腹が立たうよ。

お卷　これが立たいで、

新兵　何にもいふな、(ト新兵衞お卷の手を引き、三吉附いて門口へ出る。)

助六　一昨日來やれ。(ト門口を締め、顏をそむけて泣く。)

三吉　餘りといへば、(ト三吉立ちかゝるを、新兵衞留めて、)

新兵　はてまあ、ござれといふに、

ト本釣鐘、誂への獨吟になり、新兵衞三吉を留めながら、お卷の手を引き花道へ入る。よき程に門口を明け、助六伸びあがり、後を見送り愁ひの思入れにて、思はず花道まで行く。獨吟切れて合方になり、

助六　これ揚卷堪忍してくれ〳〵。嘸舅どのも三吉もそでねえものと思ふであらうが、此の愛想づかしも二人が爲め、先刻宿老の玄關へ呼ばれ、いつぞや閂門兵衞へ渡せし金の詮議に遭ひ、知らぬ事とて一兩々々近吉といふ極印ある、瓦町の近江屋の權九郎といふ番頭が、池の端にて取られた金、出所は舅の新兵衞殿、明白にいふ時は目ぐしの拔けねえ舅の身の上、假令出所は何處にしろ使つた主は助六ゆゑ、此の身に罪を引受けて、生先き知れた年寄を助けようと心を定め、家へ歸つて餘所ながら舅に聞けば在所にて、田地を賣つた金とのこと、まさか盜みもさつしやるまい、拾つた金か如何ぞと思ふ矢先へ牛若傳次が、強請に來たのでさらりと分り、その盜人は知れたれど、これを訴人なす時は舅も脫れぬ罪は同類、殊に傳次も揚卷が妹女郎の白玉と繫がる緣の上

からは、俠客を磨く助六が我が身の命が惜しいとて傳次や舅に繩を掛け、それをのめ〳〵見て居られうか、二人の命を一人で代り、後の難儀を掛けまい爲め、愛想づかしの緣切りも心の中は情ゆゑ、神ならぬ身の誰れ知らねば、親子を始め三吉も嘸や我れを恨んで居よう、これから今夜名乘つて出で、牢舍をすりやあ此の世へは所詮出られぬおれが身の上、首になつたら遺骸は菩提所山谷の龍行院へ、墓標を建てゝ香華や手向をなしてくれるのを、草葉の陰から待つて居るぞよ。

トこの中よろしく思入、獨吟になり助六舞臺へ來り、

かういふことゝは白玉も、戸棚の内で恨んでゐよう、これも何處ぞへ今夜の中に、

ト戸棚の戸を明ける、内に白玉居ず、彼方の壁に切拔きし穴あるに助六びつくりして、

やゝ、戸棚の内に脇差のあつたを幸ひ壁を切拔き、疾にも此の家を逃げうせしか、あゝまご〳〵とさまよひ歩き、追手の者の目にかゝり廓へ連れて行かれにやあいゝが。斯くなる上は少しも早く、此の身に罪を引受けて、

ト又獨吟になり、助六身支度をする、下の方より以前の家主杢兵衞提灯を持ちて出來り、

杢兵　助六どの、もう時刻ゆゑ行かずばなるまい。

助六　これは大家樣、御苦勞にござりまする。

李兵　して、金の出所は知れましたかな。

助六　さあ言ふに言はれぬ出所ゆゑ、此の身に罪を引受けて、牢舍致す覺悟でござります。

李兵　すりや其方が罪を、して、まあ家にはお卷どのも、

助六　居れば何かと面倒ゆゑ、舅を附けて女房は、離縁いたしてござりまする。

李兵　それは思ひ切つた事を、然し此方が出て行けば後には誰れも、

助六　留守を致す者もなければ、錠をおろして參りませう。

ト助六火鉢の抽斗より錠を持つて門口へ出る。

李兵　どれ、おれがおろしてやりませう。

助六　あ、大家樣、ちよつと待つて下さりませ。

李兵　なんぞ忘れ物かな。

助六　まだ火がござりました。(ト家へ入り火鉢へ土瓶を打ちあけると、ぱつと煙立つ、助六つか〳〵と門口へ出て。)あ、おそろしい灰神樂だ。

李兵　ても、落附いたものだなあ。(ト感心の思入れ。)

助七　いゝえ、火の元は大事にござりまする。

ト本釣鐘獨吟にて、杢兵衞先に助六思入れあつて花道へ入る。やはり獨吟にて道具廻る。

（駒形觀音堂の場）――本舞臺中央に駒形堂、よき所に大八車、下手に松の立木、後大川彼方河岸の夜の遠見、やはり獨吟にて道具留まる。トばたばたになり、上手より以前のお卷手拭をかぶり脇差をさし、裾を端折りて出來り思入れあつて、

お卷　思へば浮世に私ほど果敢ない者がまたとあらうか、科もない身で夫に去られ、人もあらうに妹女郎の、あの白玉に男を取られ、明日から人の口の端に掛りや繫がる父さんまで、路頭に迷はす此の身の不孝、それも元は足らはぬゆゑと辛抱なせど女子の悲しさ、嘸今頃は二人して睦じうしてゞあらうと、思へば悋氣に寐ても寐られず、無分別とは知りながら疵でも附けねば腹が癒ぬ、事と品に寄る時は今宵限りにならうも知れぬ、先立つ不孝は、もし父さん、どうぞ許して下さんせいなあ。

ト又獨吟になり、愁ひの思入れ、ばたばたにて花道より白玉手拭を冠り、同じく裾を端折り出來り、花道にて、

白玉　どういふ譯か知らねども、何科もない姉さんに助六さんの愛想づかし、中に立つたる私が切なさ

嘸や恨んで居なさんせうと、身の言譯をしたさゆゑ、戸棚の内に脇差のあつたを幸ひ一生懸命、壁を破つて爰まで來たが、何處へ行つて居やしやんすか、どうぞ早う逢ひ度いものぢやなあ。

ト獨吟になり、白玉舞臺へ來る。お卷は花道へ行かうとして行合ひ、兩人びつくりして左右へ別れ、

お卷　何方かは存じませぬが、つい心が急きますゆゑ。

白玉　私も道を急ぎますれば、

お卷　思はず知らず、

白玉　御免なされて、

兩人　下さりませ。

ト此の時月をおろす。兩人顔見合せ、

お卷　や、白玉か、

白玉　お前は、姉さん、

お卷　てもよい所で、

兩人　逢ひましたなあ。

ト獨吟の切にて、お卷脇差を拔き。

お卷　戀の敵、覺悟しや。（ト切つてかゝるを身を躱し、）

白玉　その恨みは尤もながら、これには何でも樣子のあること、まあ〳〵待つて下さんせいな。

お卷　樣子があらうがあるまいが、男を寐取りし上からは、疵を附けねば腹が癒ぬ。

白玉　お前の腹が癒ぬならば、何うなとならうがもし姉さん、私や眞實知らぬこと、

お卷　その言譯を、聞かうかいな、

　ト切つてかゝる、舟の騷ぎを借り唄入りの鳴物になり、兩人車を小楯に立廻る、よき程に三吉出來り、

三吉　あゝこれ姉御、待つて下せえ。これには樣子のある事だ。（ト此の中へ入り留めながら、）えゝ、情ない、間違ひだといふに、

　トお卷白玉を切らうとするを、三吉留める立廻り、ばた〳〵になり、花道より新兵衞走り出來り、花道にてこれを見てびつくりなし、周章て此の中へ入り、お卷の手に縋り、

新兵　これ〳〵娘、樣子が知れた。

お卷　なに、樣子が知れたとは、

新兵　これ、濟まぬわい〳〵。（ト新兵衞お卷を留めた儘、下に居る。）

お卷　してまあ、濟まぬといふ譯は、

新兵　まあ、一通り聞いてくりやれ。助六どの〻愛想づかしは何でも樣子のある事と、花川戸へ取つて返し、樣子を聞けば情なや、五十兩の金ゆゑに繩にかゝつて行たわいの。

お卷
白玉　え〻〻〻、（トびつくりなし、）そりやあまあ何故、何ういふ譯で、

新兵　さあ、今まで包み隱して居たが、日外其方が身請の時助六どのに渡したる、五十兩の彼の金は、傳次どのが山下で白酒桶のその中へ隱して入れし五十兩、掠める心はさら〳〵なく廻り逢うたら返さうと思ふ其のうち三浦屋で、助六どの〻切羽を見兼ね、我が在所にて田地をば賣つたる金と僞つて、渡せし小判は近吉の極印のある紛失の金ゆゑおれが怖くなり、娘を去るかさりとては賴み少ない男ぢやと、恨んだ心が面目なく、せめて命を助けんと宿老殿の玄關へ行き、その五十兩はわたくしがと言はうとしても助六どのが、我盗みしと言はせぬゆゑ、仕方なく〳〵此の事を少しも早く知らさうと、爰までは歸つて來たが、元の起りは此の新兵衛、思へば濟まぬ事ぢやわいの。

ト新兵衛どうとなる、お卷白玉もびつくりして、

お卷　すりや、最前の愛想づかしは、難儀を掛けまい爲めであつたか、

白玉　これで此の身の疑ひも、姉さん晴れたでござんせう。

お卷　白玉さん、堪忍して下さんせ。
三吉　何は兎もあれ二人とも、怪我がなくつて此の場の仕合せ、
新兵　思へば濟まぬ我が身の罪科、幸ひこれなる大川へ、
お卷　私も共々、（ト兩人死なうとするを白玉三吉留めて、）
白玉　あ、これ、姉さん待たしやんせ、今お前方が死なしやんすと。
三吉　繩目にあつた親分の、志しもほんの無駄。
白玉　死ぬる命をながらへて、
三吉　助六さんの命乞ひ、
新兵　すりや死ぬるにも、
お卷　死なれぬか。
兩人　はあ――、（ト泣く。白玉思入れあつて、）
白玉　この騷動もその元は傳次さんから起つた事、どうぞ樣子を知らしたい。
三吉　然し女のたゞ一人、江戸でもあるか甲州道。
新兵　太儀ながら三吉どの、

お巻　白玉さんと共々に、

三吉　私でよくば、これから直に。

白玉　そんなら姉さん、

お巻　少しも早く、

白玉　合點でござんす。

ト白玉裾を端折り、三吉附いて時の鐘の送りにて上手へ入る。

お巻　此の上は助六どのに、夫婦の別れたゞ一目、

新兵　おゝ、未だ引かれては行かぬ筈、これから直に、（ト向うを見て、）や、向うへ來るのは慥に助六。

お巻　えゝ、もう引かれて行かしやんすか、はあ――。

ト下手へ泣き伏す。時の太鼓合方になり、番人二人弓張提灯を持ちて先きに立ち、助六好みの打扮にて、縄にかゝり、捕手に縄を取られ、以前の杢兵衛附添ひ、宮戸良助半纏ぶつさき羽織大小、捕手十手を持ち、此の後より乾兒大勢長提灯を持ち送つて出で來り、直ぐに本舞臺へ來る。助六お巻と顔を見合せ、思入れあつて顔をそむける。

新兵　へい／＼、お願ひでござります／＼。

捕手　片寄れ〱。

新兵　どうぞお慈悲にたゞ一目、

お卷　お逢はせなされて下さりませ。

良助　（立留りて、）して、其方どもは何者だ。

新兵　卽ち助六が女房、舅にござります。

良助　科極まる上からは、對面はかなはぬぞ。

兩人　すりや、かなひませぬとな、

良助　こりや者共、助六は當所の產れゆゑ、これなる駒形觀音へ參詣致したいとの願ひ、聞き屆け遣はす間、暫時これへ立ちませい。

捕手　はつ。（ト中央へ助六を引き据ゑる。）

良助　こりや、それなる兩人、助六儀は囚人ゆゑ最早對面はかなはぬぞ。したが、又其方達も觀世音信仰ならば、參詣は許し遣はすぞ。

新兵
お卷　え、、有難うござります。

ト合方きつぱりとなる、良助上手へ後向に床几に掛ける、乾兒皆々下手へ控へる。

杢兵　さあ〳〵、お許しの出た上からは、側へ寄つて參詣さつしやれ。

兩人　はい〳〵。(ト兩人助六の側へ寄り、思入れあつて、)

お卷　もし、聞えぬわいな〳〵。何故に斯ういふ事ならば譯をいうては下さんせぬ。

新兵　わしが拾つた金ゆゑに、此方に繩が掛つては、どうもわしの心が濟まぬ。

お卷　あとの難儀を掛けまいと、愛想づかしの離緣狀、

新兵　情が結句、

兩人　恨めしい。(ト兩人縋り泣く。助六思入れあつて、)

助六　あこれ〳〵、そこな二人の衆、お前方は大きな聲して何を觀音樣へ願ふのだ、四邊に人も聞いて居るにうかうか〳〵物を言はつしやるな、生ひ先短かい年寄りに長生きさせてえばかりで男を捨て、繩目を受け死ぬる覺悟に離緣狀渡して置いた上からは、四十九日か百ケ日一周忌まで待たずとも相應な所へ嫁付いて、たつた一人の父さんだから苦勞を掛けぬが何より孝行、詰らぬ事に義理立てして路頭に迷はしてくれるなよ、さうさせめえばつかりに心にもねえ愛想づかし、離緣狀を遣るまでの其の苦しさといふものは、貰ふ其方より百層倍、それも後日を思ふゆゑ、必ずともに二人とも無分別な事をして犬死をさせてくんなさるなよ。さあもういゝ加減に歸んねえ、いつまで

居ても同じことだ。
新兵　それだといつて、これを見捨てゝ、
お卷　どうまあ、爰が歸られよう、
新兵　どうぞ二人も、
兩人　共々に、
助六　えゝ、無理な願ひを掛けさつしやると、却つて罰が當りますぞ。
兩人　はあ――。（ト泣く。）
杢兵　さあ〳〵長居は恐れ、立ちさつしやい〳〵。
良助　（正面を向き、）助六には觀世音へ、とくと參詣いたしたか。
助六　はつ、お慈悲を以つて心置きなく。
良助　參詣濟めば引立てい。
捕手　はつ、立たう。（ト此の時花道の揚幕にて、牛若傳次の聲にて、
傳次　あいやお役人樣、暫くお待ち下さりませ。
　　　トばた〳〵にて、花道より傳次走り出で、花道に蹲ふ。

助六　や、其方は傳次か、
良助　して、某を留めしは、
傳次　御訴訟申す事があつて、お止め申してござりまする。
良助　訴訟とは何事なるか、
捕手　これへ參つて申し上げい。
傳次　まつぴら御免下さりませ、（ト本舞臺へ來る。）
良助　して、訴訟の趣きは、
傳次　恐れながら申し上げます。今助六が科となりし五十兩の其の金を、盜みましたは此の傳次、助六が科ではござりませぬ。
助六　これ〱傳次何を言ふのだ。五十兩の其の金を盜んだ科でこの繩目、罪の極つた上からは、餘計な事を言はぬがいゝ。
傳次　いゝや言はずに居られませぬ、現在おれが盜んだ金で、此方に科を着せられようか。
助六　假令何と言はうとも、盜みましたは此の助六。
傳次　いゝや、傳次でござりまする。

良助　兩人共暫く待て。

助六
傳次　はつ。（ト兩人控へる。）

良助　して、傳次とやら、其方が盗みしといふ證據があるか。

傳次　へい、此の傳次が盗みましたに違ひございませぬといふ、たしかな證人がございまする。

良助　して、其の證人は、（トばた／＼にて、下手より以前の白玉出で、）

白玉　この白玉にございまする。

新兵　思ひがけない白玉どのが、

お卷　盗みし金の證人とは、

傳次　元この金は瓦町の近吉の番頭權九郎が、屋敷の掛金を盗みし金、これを路用に廓から白玉を連れ出して上方筋へ行く所存、これ幸ひと云ひ合せ、而も不忍の辨天前で、

白玉　わたしへ金を渡せし所、傳次さんが後から池の中へ突き落し、首尾よく手に入る其の金を、路用に二人駈落と思ふ所へ父さんが、通りかゝつて二人へ意見、遂には私は廓へ歸り、

傳次　わしは手に入る五十兩持つて分れた歸りがけ、捕手の衆に出逢つたゆゑ、南無三寶と、新兵衛殿の白酒の荷へ打込んだが、助六殿の難儀を見兼ね極印金とも知らずして遣つたばかり身の疑ひ、

白玉　その證人は白玉ゆゑ、傳次さんと諸共に、
　　　　咎に科を着せまいと名乘つて出たる助六どのは、元より知らぬ五十兩、盜んだ科は此の傳次。
傳次　二人に繩掛け助六どのを、
兩人　どうぞ助けて下さりませ、
良助　ほゝお、惡に强きは善にもと事明白な汝が訴へ。それ、助六が繩目を許せ。
捕手　はつ。（ト捕手助六の繩を解く。）
助六　すりやわしを、此の儘に、
新兵　お許しなされて下さりまするか、
良助　いかにも。
三吉　これといふのも傳次どの、此方が身體を惜しまぬゆゑ、
傳次　何しに私が惜しみませう。人のなした事ではなし、元の起りは傳次ゆゑ、
白玉　私も共々身の覺悟、
傳次　いざ繩掛けて下さりませ。（ト覺悟の思入れ。）
良助　いゝや、汝等兩人は盜みはすれど、その元は近吉の番頭權九郞、彼こそ實の盜賊ゆゑ搦め捕つて

刑罪なさん。悪事はなせど助六が身を助けんと自身の訴へ、信義を捨てざる心に愛で、兩人共に
繩目に及ばず、助六、汝に預くるぞ。

助六　すりや傳次白玉兩人を、私へお預け下さりますとか、

新兵　重々厚きお慈悲の計らひ、

皆々　有難うござりまする。

助六　不思議に命助かる上は、親の敵の新左衛門討つて此の身の本望遂げん。

良助　ほゝお、敵討は天下一統御法度ながら、汝が狙ふ其の新左衛門に、舊惡あれば許し遣はす、本意
を遂げよ。

傳次　お許しの出た上からは、

助六　敵を討つて日頃の本望、

皆々　目出度い〳〵。

ト乾兒提灯を指上げ、皆々引つ張りよろしく、『先づ今日は是れ限り』と、

目出度打出し

# 黑手組助六（終り）

## 〔附　記〕

『黑手組助六』の初演當時に使用された正本（臺帳）は右の如く三幕を以て終つてゐるが、作者は四幕目に『問注所の場』を置き、五幕目の大切として『小塚原敵討の場』といふものを書いて、首尾完結せしめる積りであつたらしい。けれども、時間其の他の關係から、この二幕は上場の運びに至らなかつた。駒形觀音堂前に於て、結末を急がした氣味のあるのはその故であらう。『小塚原の場』は、後に、作者の腹案に據つて綴られた草双紙をそのまゝに寫し取つたものが出來て、現今は本集に收めた中の序幕、二幕目と演じ、三幕目を省略して小塚原の仇討を添へるといふ演出が、殆ど慣例となつてゐる。

その三幕目の『問注所の場』といふのは、初演當時にすら上場されなかつた幕であるが、『横書き』としては保存されてゐるから、試みに簡單にその梗概を抄出して見よう。

（白洲の場）――に於ては、助六が近江屋吉兵衛所有の近吉と極印のある金を五十兩盗んだ科によつて、死罪を宣告される。（即ち、これによつて見れば駒形觀音堂前の場では、單に助六が問注所へ召捕はれて行くといふだけが、作者の腹稿であつたことが推測される。）と、そこへ牛若

傳次が自首して出て、その金は權九郎が盜み出したものであることを明白にし、同時に門門兵衞の惡策。並びに新左衞門が助六の親戸澤助之進を五ヶ年以前向島小梅に於て殺害し、北辰丸の寶劍を奪つたことが明白にされ、新左衞門は繩にかゝり、權九郎、門兵衞も罪せられ、助六は放免されることになる。次の二場目の『問注所門外の場』では、放免された助六が問注所の潛門から出て來たのを、お卷や家主達が悦びゐ言つて迎へ、新左衞門が親の敵であることは始めて知つたが、囚人になつた以上容易に手出しもならなくて殘念だと話し合ひ、繩にかゝつて出て來た傳次とは別れを惜しみ、新左衞門をば恨みを呑んで見送るといふのである。何れにしても、さして重要視すべき幕でなく、先づ發端に對する結尾たるに過ぎぬものと言つてよい。

『小塚原敵討の場』は、草双紙によつて見ると、小塚原の石地藏前へ引出された新左衞門の首を刎ねるかと思ひのほか、太刀取りの役人は捨札を切つて放免せんとする。とそこへ助六夫婦が現はれ出で、加勢に來た子分の者と共に取圍み、たうとう助六夫婦の爲めに新左衞門は討たれるといふことになつてゐる。然し、現今使用さるゝ敵討は、二幕目の直後に添加されるのであるから、新左衞門が廓から歸るのを小塚原で待受けた助六が、北辰丸の短刀を奪ひ返し、敵討をするといふだけの、極めて簡短なものに過ぎない。

# （附錄） 主なる興行年表

## 忍ぶの惣太

| 年時 | 座名 | 名題 | 惣太 | 峰藏 | 松若 | 十右衛門 | 丑市 | お梶 | 梅若丸 | 淀平 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安政元年二月 | 河原崎座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 市川小團次 | 市川小團次 | 坂東しうか | 嵐璃寛 | 大谷友右衛門 | 市川團之助 | 澤村由次郎 | 河原崎權十郎 |
| 文久三年三月 | 守田座 | けいせい面影櫻（おもかげざくら） | 市川市藏 | 中村鶴助 | 岩井粂三郎 | 中村芝翫 | 坂東龜藏 | 岩井しげ松 | 坂東松太郎 | 中村鶴助 |
| 明治元年二月 | 市村座 | 隅田川鸎音曾我（すみだがはるつげそが） | 大谷友右衛門 | 中村仲藏 | 市村家橘 | 市川左團次 | 中村仲藏 | 尾上菊次郎 | 坂東吉彌 | 市川子團次 |
| 明治六年二月 | 守田座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 坂東彦三郎 | 市川左團次 | 澤村訥升 | 中村翫雀 | 市川左團次 | 澤村文鳥 | 澤村百之助 | 市川子團次 |
| 明治十一年四月 | 大阪中座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 嵐橘三郎 | 嵐橘三郎 | 澤村納升 | 嵐璃寛 | 中村嘉七 | 中村紫琴 | ― | 嵐橘久三郎 |
| 明治十四年六月 | 久松座 | 櫻忍牛志摩記談（はなにしのぶうしじまきだん） | 市川九藏 | 中村仲藏 | 尾上多賀之丞 | 松本錦升 | 中村仲藏 | 坂東三津太郎 | 中村鶴吉 | 市川丹次郎 |
| 明治二十一年七月 | 大阪角座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 片岡我童 | 片岡我童 | 澤村源之助 | 嵐璃寛 | 片岡我童 | 市川市藏 | 片岡東吉 | 片岡仁三郎 |
| 明治二十三年七月 | 歌舞伎座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 尾上菊五郎 | 尾上菊之助 | 中村福助 | 片岡市藏 | 尾上松助 | 市川女寅 | 尾上丑之助 | 市川染五郎 |
| 明治三十四年一月 | 演伎座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 市川猿之助 | 市川猿之助 | 澤村源之助 | 尾上菊三郎 | 嵐雛助 | 市川秀世 | ― | 市川左伊助 |
| 明治三十六年一月 | 宮戸座 | 都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ） | 澤村訥子 | 澤村訥子 | 澤村源之助 | 澤村春五郎 | 中村勘五郎 | 市川三壽之丞 | ― | ― |

## 正直清兵衛

| 年時 | 座名 | 名題 | 清兵衛 | おたき | 粂之助 | お梅 | 幸八 | おしげ | 孫三郎 | 久七 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安政四年五月 | 市村座 | 敵討噂古市（かたきうちうはさのふるいち） | 市川小團次 | 市川小團次 | 坂東彦三郎 | 尾上菊五郎 | 坂東亀蔵 | 尾上菊五郎 | 河原崎権十郎 | 淺尾與六 |
| 明治二十一年十二月 | 新富座 | 敵討噂古市（かたきうちうはさのふるいち） | 市川左團次 | 市川左團次 | 市川小團次 | 澤村源之助 | 市川小團次 | 澤村源之助 | 市川左伊三 | 大谷門蔵 |
| 明治卅三年十一月 | 明治座 | 敵討噂古市（かたきうちうはさのふるいち） | 市川左團次 | 市川左團次 | 澤村訥升 | 市川米蔵 | 市川小團次 | 澤村源之助 | なし | 市川壽美蔵 |

## 鼠小僧

| 年時 | 座名 | 名題 | 幸蔵 | 松山 | おくま | 與之助 | 文三 | 新助 | おもと | 與惣兵衛 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安政四年一月 | 市村座 | 鼠小紋東君新形（ねずみこもんはるのしんがた） | 市川小團次 | 尾上菊五郎 | 坂東亀蔵 | 河原崎権十郎 | 河原崎権十郎 | 坂東彦三郎 | 中村歌女之丞 | 淺尾與六 |
| 明治二年二月 | 中村座 | 鼠小紋菊重扇染 | 尾上菊五郎 | 坂東三津五郎 | 坂東亀蔵 | 坂東三津五郎 | 市川團蔵 | 嵐璃鶴 | 嵐栄三郎 | 坂東亀蔵 |
| 明治九年六月 | 喜昇座 | 御誂鼠小紋（おんあつらへねずみこもん） | 市川團升 | 中村十蔵 | 尾上尾上右衛門 | 坂東家太郎 | 坂東家太郎 | 松尾猿之助 | 中村十蔵 | 尾上尾上右衛門 |
| 明治二十四年一月 | 歌舞伎座 | 鼠小紋春着雛形（ねずみこもんはるぎのひながた） | 尾上菊五郎 | 岩井松之助 | 尾上松助 | 岩井松之助 | 中村芝翫 | 坂東鶴之助 | 尾上栄之助 | 坂東彦十郎 |
| 明治三十四年一月 | 歌舞伎座 | 鼠小紋春着雛形（ねずみこもんはるぎのひながた） | 尾上菊五郎 | 中村福助 | 尾上松助 | 尾上菊三郎 | ― | 市村家橘 | 尾上栄三郎 | 片岡市蔵 |

| 年時 | 座名 | 名題 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十四年九月 | 市村座 | 鼠小紋吾妻新形 | 澤村訥子 | 岩井松之助 | 中村勘五郎 | ― | ― | 中村成若 | 中村銀之助 | 澤村村右衛門 |
| 明治四十二年十一月 | 新富座 | 鼠小紋東君新形 | 中村又五郎 | 市川壽美藏 | 坂東鶴之助 | 市川九藏 | ― | 實川八百藏 | 片岡松江 | 中村芝鶴 |
| 大正二年五月 | 市村座 | 鼠小紋春着新形 | 尾上菊五郎 | 尾上菊次郎 | 尾上松助 | 市川新之助 | ― | 守田勘彌 | 河原崎國太郎 | 中村東藏 |

# 黑手組助六

| 年時 | 座名 | 名題／役割 | 助六 | 新左衛門 | 新兵衛 | 揚巻 | 傳次 | 紀文 | 白玉 | 權九郎 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安政三年五月 | 市村座 | 江戸櫻清水清玄 | 市川小團次 | 關三十郎 | 關三十郎 | 尾上菊五郎 | 河原崎權十郎 | 河原崎權十郎 | 中村歌女之丞 | 坂東村右衛門 |
| 慶應三年三月 | 守田座 | 當九字藻成曾我 | 坂東彦三郎 | 大谷友右衛門 | 中村仲藏 | 岩井紫若 | 澤村訥升 | 大谷友右衛門 | 坂東三津五郎 | 坂東鶴藏 |
| 明治二年六月 | 中村座 | 白柄黑手廓達引 | 尾上菊五郎 | 中村芝翫 | 中村仲太郎 | 坂東三津五郎 | 中村芝翫 | 中村芝翫 | 岩井紫若 | 中村相藏 |
| 明治五年九月 | 中村座 | 白柄黑手廊達引 | 市川團十郎 | 片岡我童 | 中村仲藏 | 岩井半四郎 | 中村時藏 | 中村時藏 | 坂東しうか | 中村鶴藏 |
| 明治十二年三月 | 市村座 | 花川戸侠客支店 | 市川八百藏 | 市川壽美藏 | 中村傳五郎 | 岩井松之助 | 尾上幸藏 | 市川壽美藏 | 市川女寅 | 中村傳五郎 |
| 明治二十六年三月 | 歌舞伎座 | 黑手組一對白柄 | 尾上菊五郎 | 市川團十郎 | 尾上松助 | 中村福助 | 尾上菊之助 | 市川權十郎 | 尾上榮三郎 | 市川猿之助 |
| 明治三十二年三月 | 明治座 | 黑手組曲輪達引 | 市川左團次 | 市川權十郎 | 市川壽美藏 | 澤村源之助 | 市川小團次 | 市川小團次 | 澤村訥升 | 市川左團次 |
| 明治卅三年十一月 | 新富座 | 黑手組[illegible]街達引 | 澤村訥子 | 市川團藏 | 澤村村右衛門 | 中村芝鶴 | 市川鬼丸 | 市川鬼丸 | 關花助 | 市川團次 |
| 明治三十五年六月 | 東京座 | 黑手組曲輪達引 | 市村家橘 | 市川八百藏 | 尾上松助 | 尾上榮三郎 | 實川延二郎 | 市川猿之助 | 尾上菊三郎 | 中村勘五郎 |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治四十一年一月 | 明治座 | 黒手組曲輪達引（くろでぐみくるわのたてひき） | 市川小團次 | 澤村訥子 | — | 市川女寅 | — | — | — | 澤村訥子 |
| 明治四十二年三月 | 市村座 | 家櫻廓達引（いへざくらくるわのたてひき） | 尾上菊五郎 | 中村吉右衛門 | 市川新十郎 | 尾上芙雀 | 中村駒助 | 坂東三津五郎 | 尾上榮三郎 | 尾上菊五郎 |
| 大正二年十一月 | 本郷座 | 黒手組曲輪達引（くろでぐみくるわのたてひき） | 市村羽左衛門 | 市川左團次 | 中村歌六 | 中村歌右衛門 | 市川壽美藏 | 市川小團次 | 市川松蔦 | 市村羽左衛門 |
| 大正五年一月 | 帝國劇場 | 黒手組曲輪達引（くろでぐみくるわのたてひき） | 澤村宗十郎 | 松本幸四郎 | 尾上松助 | 尾上梅幸 | 澤村長十郎 | — | 澤村宗之助 | 澤村宗十郎 |
| 大正六年九月 | 歌舞伎座 | 黒手組曲輪達引（くろでぐみくるわのたてひき） | 市村羽左衛門 | 市川八百藏 | 中村歌六 | 中村歌右衛門 | 片岡市藏 | 片岡仁左衛門 | 坂東秀調 | 市村羽左衛門 |
| 大正十一年十一月 | 明治座 | 黒手組曲輪達引（くろでぐみくるわのたてひき） | 市村羽左衛門 | 市川左團次 | 中村傳九郎 | 中村歌右衛門 | 片岡市藏 | 坂東彦三郎 | 中村福助 | 市村羽左衛門 |

大正十三年八月廿一日印刷
大正十三年九月四日發行



『默阿彌全集第二卷』

非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彥

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　竹內喜太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂